THE CENTRAL REVIEW

中央公論

三月號

第四十五年 第三號 第五百六十號

昭和五年三月一日發行（毎月一回一日發行）

杉森孝次郎編輯　各專攻學者署名執筆

社會科學辭典

第三十版
新語追加
四六新型
六號三段組
九百七十頁
超時代的價値
三圓五十錢
郵税十八錢
内地以外廿六錢

◆米林富男氏批評（東京朝日）

我が國に於けるこの種の辭典の中で、極めて公平なる立場から書かれた唯一の總合的批判的のものとして、又平易簡明な旨としながら毫も學的價値を傷つけることなき最も便利なものとして、現代社會に關する自らの知識を整理する上に、又實生活上の好き相談相手に、如何なる種類如何なる階級に屬する人士たるを問はず、凡そ現代に呼吸して時代の尖端を進まんさする者はすべからく一本を座右に具ふべきであらう。

◆經濟學博士阿部賢一氏批評（東京日々）

最近眼に觸れた書籍の中で、これはよく吾々の日頃の欲求を充たしてくれるものだと思はれたものは「社會科學辭典」である。……次から次へさ新語が製造せられて、少しうつかりしてゐるさ世の動きから全く取殘されてしまひさうである。さいつて學術語を各々の專門書の源にさかのぼつて一々その語意を確めることは出來るものではない。そしてその必要を最も手輕に然も最も有効に滿足さしてくれたのは社會科學辭典一卷であつた。

◆政治學博士五來欣造氏批評（時事新報）

要するに此辭書は其熟字の選擇の新しいこさ、其說明の極めて哲學的從つて徹底的なこさ、其知識の凡てが專門的なこさ、文章が明快なこと等を其特質さするから、苟も現代に後れまいさ思ふ人、後れて之を取り返さんとする人は、一般大衆は無論だが、學者に取つても極めて有益な著書である。殊に此書の編輯は我國に於ける「社會の發見者」杉森氏が最も適任者であつたさ思ふ點に於て、此書の出版を喜ぶものである。

◆經濟學博士林癸未夫氏批評。（中央公論）

本書に擧げられた語彙の頗る多方面で且豐富であることも見遁してはならないが、殊に日本に關する特殊の語彙を多數挿入してあることは、本書の用意のおろそかならぬことを證するものだ。本書の附錄として添へてある社會科學關係の人名辭典も甚だ重寶なものだ。これだけでも約二百頁に亘つて獨立の存在價値を有するほどだが人名の選擇も歷史的重要性に基いて純客觀的な公平を維持してゐる。

◆日本大衆黨首麻生久氏批評（經濟知識）

我國の社會運動の歷史さ大勢は、此辭典に取扱はれる所の勞働團體、農民團體、無產政黨其他の社會運動團體を各項目毎に讀み步うちに自ら讀者の腦裡に浮び出づるであらう。それ程にもよく各項目の選擇と取扱ひ方が融合されて居るものは珍らしいさ思はれる。それらの內容に觸れて見た丈けでも、この辭典か時代の進步的な知的要求に對してエキスを把み、之に專門的にして明快な說明と批判を與へることに成功してゐる事は爭はれない。

内容見本進呈

東京巣鴨町二三九三・振替東京六八七
社會思想研究所

婦人

三月特輯號

定價金七十錢

中央公論社發行

小說だけでも聲を大にして宣傳する價値がある。
だが、本誌には更に貴重な明日への女性の爲の心の糧が山ほどある。
眞實は深く藏すの譬の如く、その眞價は知る人ぞ知る

◆母に叛かれた子を抱いて（この母は花柳まるみ、また人の子を抱いて殘された良人倉若氏の述懐をきけ）……倉若梅二郎

◆獄中より母に寄す（幸樹で果てた共產黨の首腦渡邊政之輔の妻であり、且つ黨員であつたセツ氏の切々たる愛慕の手紙）……丹野セツ

◆大犯罪迷宮入り物語……生江澤速雄

◆動く京阪新風景……渡邊均

◆結婚破產者の手記……掛井冴子

◆近代生活とアパート……丸山和雄

新立候補者の妻は語る

▽妻の心づかひ……河上肇博士夫人・秀子
▽出馬するまで……金子洋文氏夫人・せい子
▽文士と代議士……犬養健氏夫人・仲子
▽理想選擧戰……賀川豐彥氏夫人・はる子

明日の女性に約束する

普選第二回戰の劈頭に、各政黨幹部は日本の婦人の爲に何を與へんとするか？
（民政）富田幸次郎（政友）森格（社民）安部磯雄（勞農）山花秀雄

內外時評

▽政治圈外に立つ婦人
▽軍縮の行方
▽妻からの離婚
▽實業敎育の勸獎

山川菊榮

◆思春期の婦人衞生……福井博士

◆雛の春・人形と料理……專門家十氏

◆消費組合の話……前田繁一

◆婦人職業と就職難……本田徹

男女兒通學服の問題

……成田順子・與謝野晶子・らいてふ・小林珠子・杉野芳子・小幡敏子・齋藤文藏・倉橋惣三・坂本眞琴・原田皐月・山脇敏子・筒井光臨

公論

モガは既に昨日の女性だ。それは若き女性の一の流轉の姿に過ぎない。彼女等は今日から明日へと動いて止る所を知らない。今日の彼女等は如何に動いてゐるか？　諸家の觀た昭和娘の姿に省みよ！

好評長篇小說

◆誰が惡い？……正木不如丘（畫・山名文夫）
◆遍路行……下村千秋（畫・中澤弘光）
◆銀座……高田保（畫・永田一脩）
◆同志愛……貴司山治（畫・竹中英太郎）
◆江戶巷塵譜……林不忘（畫・木村莊八）

●しよんぼり……ささきふさ
●母を語る……伊井蓉峰
●おいらん船……大泉黑石
●私の角願……久米正雄
●圖案の話……山形駒太郎

母への抗議　娘より

ガンドレット江島歌子
生方紅葉
御子柴初子

◆昭和女氣質三態……山本和子
◆丸ビル・ガール……春泉光五郎
◆昭和名流結婚挿話……室町英二
◆前文相令孃の家出（問題は事件よりも、此等上流社會の家庭それ自體である。詳細をつくした本誌によつて反省せよ。）……赤井美子
◆女優戀愛懺悔（帝劇の舞臺を踏むこと廿年。雄々しい彼女の女優生活を彩る幾多のロマンス、その一々の表裏に亙つての告白艷麗なる女優情史）……村田嘉久子

昭和娘氣質

……片岡鐵兵
……厨川蝶子
……高群逸枝
……今井邦子
……市川源三
……菊池寛

昭和文壇革命兒の處女論集 愈々出づ

文學的戰術論

定價壹圓五拾錢

送料 内地十二錢 其他十八錢

内容

文學論—文學的自己清算。智的勞働の集團化。文學改造論。左翼的虛榮心。其他。

文壇論—文壇縱横論。文壇ギルドの解體。文學史的空白時代。文壇ヘゲモニーの檢討。其他。

作家論—有島武郎論。片上伸論。三上氏の因數分解。戲畫的英雄鶴見祐輔。その他。

彼はゴルフ・パンツを穿いた蜂須賀小六である。彼の槍先は、朝に一城を拔き夕に一壘を屠つて、今日の文藝批評壇に大宅壯一の旗がなびいてゐないところはないではないか。

—尾崎士郎—

大宅壯一氏は一昨年、突如として出現して、昨年一年で文壇を席捲してしまつた批評家である。私は氏の功績は、日本の評論の領域に、もつとも徹底した現實主義を確立した點にあると思ふ。それは創作の領域において菊池寛氏がなしとげたものと全く好く似てゐる。しかも菊池氏が明快な短篇小説や鋭い戲曲でそれをなし遂げたやうに、氏もまた明快な短い評論でそれを成し遂げた。

—勝本清一郎—

大宅壯一著

中央公論社版

Agfa

モウベツクス、カメラ

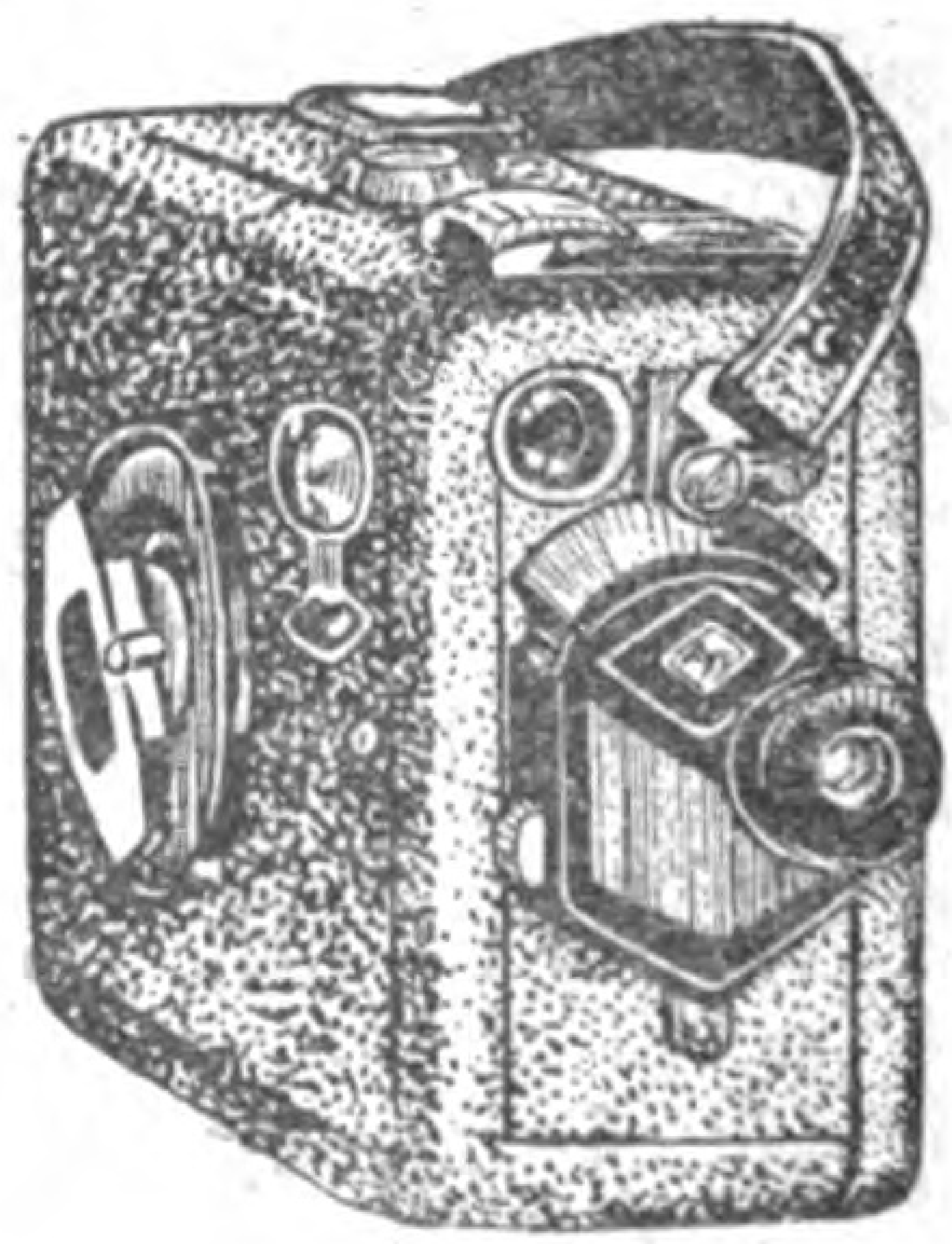
十六ミリ活動寫眞機（四十呎）

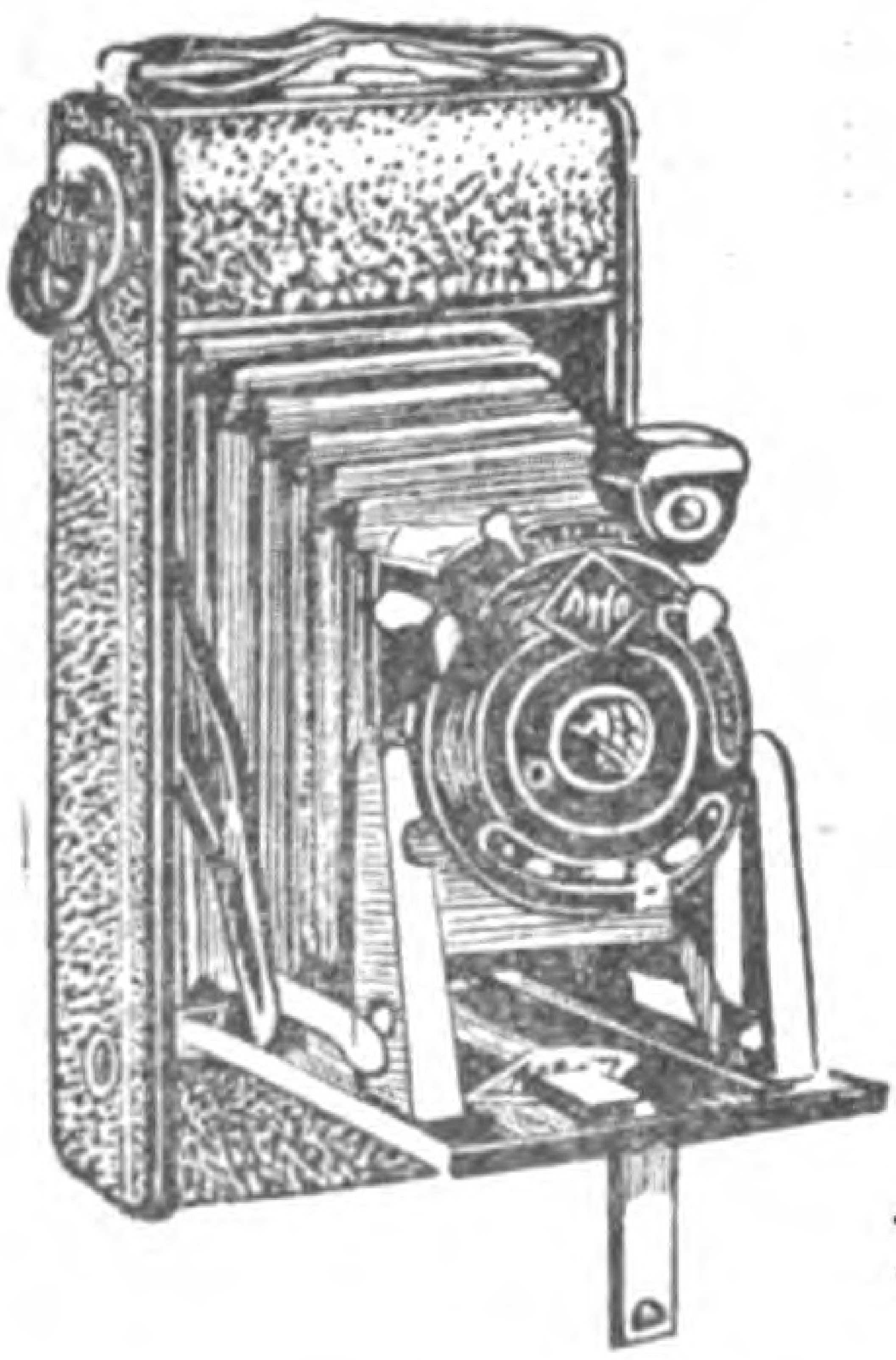
最も新しくて、最も廉價です

ビリー、カメラ（ブロニー形）

全く初めての方でも

文句なしに好く寫せます





アグファ合名會社

東京　大阪

無產黨內閣の出現？

◆社會民主主義者の夢を一笑に附して……大山郁夫……一〇七
◆勞働內閣の可能性……葉山嘉樹……一〇九
◆何時如何にして？……山川均……一一一
◆闘爭を通じてのみ考へらる……加藤勘十……一一三
◆獨立無產黨內閣の豫想……佐々弘雄……一一五
◆ある時機に地辷り的に……緒方竹虎……一一八

淺草・餘りに淺草的な……武田麟太郎……一二五

駝鳥漫談……上山草人……一三四

大[illegible]リ[illegible]といふ男……[illegible]竹博吉……一四[illegible]
娼妓自廢九百八十七人……沖野岩三郎……一五[illegible]
廣告社會相……加賀甫……一六七
時事漫畫……柳瀨正夢……一七六
第二回文藝講演、會……一八〇
繪畫の貧困……板垣鷹穗……一八[illegible]
大政友會論……馬場恒吾……一八[illegible]
新著月評……二〇二
早慶明の新陣容……河合君次……[illegible]

淺原健三著（最新刊）

鎔鑛爐の火は消えたり

四六判四百四十頁 一圓五十錢 郵稅十二錢

勞働運動空前の大記錄！

本書を讀まずして日本の勞働運動を語る勿れ！

◇三十三年、勞働運動の眞つ只中に活躍した血の滴る體驗錄
◇著者は我國無産運動の尖端を切つて突貫する不敵の闘士
◇見よ、果敢に荆棘を衝いて驀進する開拓者の全姿を！
◇彼の自叙傳たると同時に幾多の闘士記傳、悲劇、闘爭の秘錄
◇素朴、勁烈、火を吐く彼の文章は躍然人の心臟を抉る

闘爭十三年の記

【內容】

二十二年（出生から勞働運動へ出發迄）鎔鑛爐の火は消えたり（八幡製鐵所の大罷工記）仁丹先生（小倉監獄の七ケ月）地底（坑山生活の素描）炭田を衝く（苦難なる炭田開拓運動の悲喜劇）香月村血記（大辻炭坑襲撃事件）反動狂舞（國粹會と闘ひつゝ猛進する北九州の勞働運動）屍を野に燒く（白色テロの狂刄に襲れたる同志の屍を燒く）西部戰線亂る（「西部戰線」發賣禁止前後の勞働運動）驟雨一過（九州農民運動概史）出發（無産黨運動の三年）戰火燃ゆ（總選擧戰記）

東京西巢鴨町宮仲もちの木通 **新建社** 振替東京一九八六



草鬪　　小川芋錢筆

總選擧の結果に何を檢討すべきか

——(卷頭言)——

今度の總選擧の結果につき我々の差當り關心するのは言ふまでもなく朝野兩黨の孰れが勝つかと云ふ事である。併し民政黨が依然臺閣に居据らうが又は政友會が天下を取つて代らうが一般大衆の利福には殆んど何の係はりもない。直に民衆の福利を念とし更に思を我國政界の向上に寄する者に取つては、寧ろ最近數ヶ月各方面に聲高く叫ばれた「選擧廓淸」の聲がどれだけ揚つたかに多大の關心を持つだらう。

蓋し「總選擧」は民衆の政治的良心を訓練する機會であると同時に一般政界の道義的水準の其儘の反映を結果として有つものである。其の行はるるの不純なれば其「結果」に對して信賴を寄するの根據なく、選擧を幾度繰返しても政界弊根の凝滯は依然として取り去られない。而して昨今所謂「選擧廓淸」の力強く叫ばれたのは實に此の弊に堪へずとする所から起つたのではないか。斯う云ふ喜ふべき氣運の作られしに付いては、新聞社會の努力司法部内の當局等に感謝すべき理由もあるが、國民全體として漸く醒覺し始めたのだと觀るに非ずんば斯の滔々たる大勢を理解することは出來ない。我々は斯くして「選擧廓淸」の聲が漸く社會の動かすべからざる輿論となれるを欣快とするものであるが、唯懸念する所は、それは果してどれだけ今次の總選擧に具現するかの點である。徒らに聲のみが高くて巧みに矢は的を外らされ而も大衆は一向之に心付かずに居ると云ふは、由來我國の社會に珍らしい事ではない。

どんな有理な議論でも、之を其「當事者」が眞面目に問題にするまでは實現の機會は與へられない。樞密院改革にしろ貴族院改革にしろ、當事者以外が口八釜しく論じ立てる丈けでは畢竟机上の空論に外ならぬ。この事は「選擧」に於て最も適切に當てはまる。選擧民が依然として運動員の誘惑に應じ政界の先輩がまた裏面に於て從來の戰術と武器との利用に未練を殘すのなら、所謂議論は議論實地は實地で、昨今の廓淸論も空說法に終らざるを得ないのだ。今度の選擧で亦同じ事を繰返すなら、夫れこそ政界の前途は暗澹たりと謂はざるを得ぬ。

そこで私は今度の選擧に於て篤と「當事者」の行動を檢討して見たいと思ふ。「當事者」としては第一に「選擧民」がある。選擧民がどれだけ在來の運動員の誘惑から離れて自由の投票をしたか。既成政黨の得票と比較して無産黨のそれが著しく多くなつたと云ふが如きは必ずしも右の點を判ずる確實たる標識ではないが、亦注目を要する一個條たるを失はぬだらう。第二には「選ばるる者」がある。選擧民さへ確ッかりして居れば候補者の惡辣に立廻る餘地がないと云ふは實際を離れた空論に過ぎず、事實に於て選擧に關する犯行は上に誘ふ者あるに由て下に識らず〳〵之を過まるものある例たるが故に、政界の先輩が率先して廓淸の實を擧ぐるに眞劍ならざる限り、十分に目的の達せらるるものでない。輿論の刺戟に依り政界の有力者も少しは從來の戰術を換へるの必要に目覺めたらう。此點も私共は篤と檢討して見たい。

選擧界は一朝にして純淸なるものとなる事は期待せられない。大體の觀察としては今次も舊態依然たるものがあらう。唯選擧の「當事者」の行動に於て若干でも新しみを發見するを得ば、我々は之を少くとも廓淸の端緒の開けたるものとして幾分の滿足を寄せ得るかと思ふのである。

中央公論



第四十五年第三號
三月號
五百〇六號

現代インテリゲンチヤ論

向坂逸郎

インテリゲンチヤは、恐らく彼等自ら信ずるであらうが如くインテリゲンチヤそのものとしては、社會的進步の擔ひ手(トゥレーガー)であることを得ないであらう。それはインテリゲンチヤなる社會層の特質の然らしむる所である。彼等は嘗て彼等全體として社會的進步に協力し、從つて又科學、藝術等々の進步の擔當者として花々しき役割を演じた事があつた。だが今や彼等のなす可きこの社會的進步に對する協力すらもが、彼等が單にインテリゲンチヤとして留る限り、不可能ならんとしつ

つある。インテリゲンチャは智識を所有する一種の特權的社會層である。彼等はかゝるものとして、資本主義的社會に於ける一切の科學、藝術、宗教等々を擔當して、資本主義的發展の上に大なる貢獻を果した。彼等の存在なくして、又彼等の協力なくして今日のこの巨大なる資本主義の文化は齎らされなかつたであらう。資本主義的經濟の發展に對してなした科學の力が如何に大であつたかに就いては、疑の餘地は存しない。

資本主義的發展そのものがインテリゲンチャを作り、インテリゲンチャは又資本主義的發展に協力した。併しながら今や資本主義的發展それ自身が智識の特權の所有者である所のインテリゲンチャから、進歩的役割を奪はんとしつゝある。資本主義的社會の發展は、今、資本家階級自身をも、即ち嘗て社會的進歩を擔ひ得たる資本家階級自身をも無能力にせんとしつゝある。資本主義的社會は、社會の進歩を阻碍する一の限點に到達する。それと同時に資本家的社會は、その社會の内部に於てかゝる一切の障碍を破壞して、社會的進歩を負擔し得る、然り、負擔せざるを得ない階級を作り上げる。プロレタリアートである。

プロレタリアートは資本家階級を資本家階級たらしめる爲めに、無產者として作り上げられてゐる。彼等が彼等自身の勞働力の外に何ものをも所有しないといふ事こそ、資本家階級に搾取を可能ならしめ、それを資本家階級として存立せしめるものである。プロレタリアートは、無產者としてこの社會に於ける一切の特權を知らない。彼等は被搾取者であり、被抑壓者である。併しながら彼等が資本主義的社會に於てかゝるものとして存在せしめられることによりて、彼等に社會的進歩の究極的決定者であるところの物質的生產力の無限の負擔者たる使命が與へられる。彼等の社會的存在條件は彼等をして現存社會の中に安住することを得ざらしめる。彼等は一切の特權を蹂躪し、一切の階級組織を破壞することによりて物質的生產力を無限に發展せしめることが出來る、否なかくせざるを得ない。彼等は、特權と階級の存在によりて拘束されたる物質的生產力をその桎梏から解放する。この事のみが社會の進歩を意味する

プロレタリアートは何等の特權を知らない。彼等の歷史的使命は一切の特權の××である。若し強いて彼等に特權を認めるならば、それは彼等が一切の特權を××するといふ特權であらう。彼等はこの唯一の特權を行使することによりて——その行使を歷史は彼等に强制する——一切の特權を廢棄する。

今や全世界のプロレタリアートはかゝる彼等の歷史的使命を自覺して蹶起した。彼等は前進しつゝある。彼等の巨歩の下では一切の特權が蹂躙される。この巨人の巨歩の前に總ての特權者が恐怖しつゝある。

インテリゲンチャは智識の特權者である。かゝるものとして彼等は資本主義的社會の中に役割を與へられた。彼等は特權者の誇りを有つてこの役割に忠實であつた。だが今資本主義的社會そのものが進步の桎梏となつた時、彼等にしてなほかゝるものとしてのインテリゲンチャであるならば、彼等に殘されるものは、社會的進步に對する反動の役割であらう。社會的進步の擔ひ手は今や立上つたプロレタリアートである。インテリゲンチャは反動的役割を以つて、ブルジョアジーの奉仕者として、特權者の誇りと共に沒落するであらうか？ 彼等は救はれないであらうか？ インテリゲンチャは、それが依然として智識的特權の社會層たらんとするならば、それは社會的進步のために何等の協力をなすことなくして沒落するであらう。併しながら、若し彼等にしてその特權者たる地位を自ら棄てるならば、彼等は救はれる。

だが彼等は自らその特權者たる地位を棄て得るであらうか？ そして社會的進步に協力するであらうか？ 吾々の小論はこの問題に對する解答の試みである。吾々の解答の方向は、インテリゲンチャが今社會的進步の擔ひ手として出現したるプロレタリアートに對して如何なる態度をとるかを明にすることにある。即ち、インテリゲンチャが現代に於ける基本的階級なるブルジョアジーとプロレタリアートの階級鬪爭に於て、その何れの側に立つかを知ることにある。そしてこれらの問題は既に多くの論者によりて解答されたといつてもよい。私の小論がこれらの解答の整理としてでも役に立つところがあるならば幸ひである。

資本主義的社會に於ける本質的なる階級はブルジョアジーとプロレタリアートである。前者は生産手段の所有者であり、同時に又生産過程の支配者である。後者は生産手段から自由であり、それ故にその唯一の所有、勞働力を前者に賣渡すことによりて生存する。この事は又後者が常に生産過程に於て前者の支配の下にある事を意味する。前者は搾取者であり、後者は被搾取者である。前者存立の基礎は生産手段の所有によりてプロレタリアートを搾取することにある。だから、この兩者は明瞭に利害の相對立せるものである。プロレタリアートは全體に於て被搾取者としてブルジョアジーに對して利害相反する。又彼等の生産物總量に對する分前の增大はたゞブルジョアジーの犧牲に於てのみ可能であり、決してその階級構成員相互の負擔となる可きものでないのみならず、その一部に對する分前の增大は、他の部分に對する分前の增大をも齎らし得るといふ意味に於て、最も原始的、根本的にプロレタリアート自身の間に共通なる階級的利害の存するものである。ブルジョアジーも亦全體としてかゝる共通なる利害關係を以つて結ばれてゐるといふ事が出來る。

かくの如き意味に於て吾々はこの二者を嚴密に階級と名づけることが出來る。併しながら、所謂インテリゲンチヤはかかる嚴密なる意味に於ける階級を構成しない。彼等は智識の所有といふ特權の上に存立するものであるが、彼等自身の間に共通なる階級利益を有しない。彼等の中、高級なるものは他のインテリゲンチヤに對するより、寧ろブルジョアジーに對して利害の共通を感ずる。大會社の高級使用人、例へば支配人と下級使用人との間に利害の共通性があるか？支配人は資本家を代理して直接に下級使用人及び勞働者の搾取に當る。彼の社會的地位の維持は資本家階級とのソリダリティーの上にかゝる。下級使用人の利害は、被搾取者として支配人に對してよりむしろ勞働者に對して共通である。辯護士と小學校教師との間に何等の經濟的階級的利害の共通性が存するか？學生と教師の間亦然り。

インテリゲンチヤは生産手段を所有するものでないといふ點に於て、生粹の資本家階級ではあり得ない。又智識による特權の所有者であるところから來る社會的地位に於て、必ずしもプロレタリアートではない。かくてそれは、いはゞ一種の中間的階級（ブハリン）であるが、嚴密なる意味に於ける階級を構成しない。そして又インテリゲンチヤが資本主義的社會に於ける本質的二大階級の間に介在する浮動的社會層である所に、その特殊性が存在する。それがかゝる性質のものであるが故にこそ、現代に於ける興味あるインテリゲンチヤの問題は問題となるのである。

中世の社會の靜的なイラシヨナルな世界に比較して、近代資本主義は動的な、ラシヨナルな社會であつた。獨立せる個々の資本の相互の自由なる競爭の下に、獨立せる勞働者から商品勞働力を買取ることによつて、剩餘價値の生産が行はれる組織である。從つてこゝに行はれる搾取は、中世の專制的、暴力的であるのに比較して、理詰めであり、同じく暴力的苛酷さを以つてなされるにしても、理詰めの苛酷さであつた。搾取は、兎に角にも獨立人との間に於ける賣買の形で行はれなければならなかつた。搾取は技術の理詰めの適用によつて増大さる可きであつた。何故ならば、そこでは勞働者の形式的獨立性が保持されなければならなかつたからである。それ故に又はかゝる生産方法自身が、一定の技術的進歩を前提とすることなくしては不可能であつた。

資本家の間には搾取の爲めの自由なる競爭が行はれることが出來た。各資本家は自らの利潤追求に對して何人によつても拘束されないものであつたが故に、彼等は出來るだけ多くの利潤を獲得し得る樣に、出來るだけ優秀なる技術を適用することに努力する。從つてこゝには技術の不斷の進歩がある。かくて生産の規模も不斷に増大され、市場の擴張も次から次へと行はれて行く。資本主義は地方的でなくして、本來コスモポリタンである。かくの如くして資本主義は教養ある技術家、使用人を次第に必要とするに至る。資本主義の發展は、その種々なる技術的、經濟的技能の間に多岐にわたる分業を齎らし、種々なる種類の技術家と使用人とを必要とする。更にその存在の上に必要缺く可からざる國家組織に於ては、

極めて多くの行政技術家を有しなければならぬ。

かくの如くして資本主義それ自身の必要は一切の科學的研究の新なる基礎を形成する。資本主義の一切の必要がこの社會に於ける科學、宗教、藝術を新なる形態に於て作り上げ始める動力となる。かゝる教養を修得したる人々が、近代的にインテリゲンチヤとして社會に特殊の地位を獲得する。彼等はブルジョアジーの中から、小ブルジョアの子弟から、稀れには勞働者の中からすら出身する。ブルジョアジーは彼等の必要から大に教育を奬勵する。普通、中等、專門の諸教育のために小學校から大學に至る諸施設の外に、凡ゆる種類の研究所を創設する事に力める。殊に遅れて歩み始めたる我國の資本主義が、如何に急速に教育施設の完備に力めたかは、我々のよく知るところであらう。我國に於ける幾多の奬學資金制度の如きは、稀に勞働者の子弟をすらインテリゲンチヤの一員として特權を與へて行つた。

小ブルジョア、中小地主はその子弟を、頽勢にある彼等の社會的地位を保持するため、「成功」するために、資力を盡しても大學、專門學校を卒業させた。土地を賣つても學資に代へた。インテリゲンチヤ自身の子弟は、無論、その社會的地位から云つて教養を得て父祖と共にインテリゲンチヤとなつた。

かくの如くしてインテリゲンチヤは增大して行つた。加之、機械の應用の擴大、分業による技術の單純化、教育施設の增加等は、インテリゲンチヤの教養の修得を容易、廉價にして以つて、インテリゲンチヤの供給を增大した。インテリゲンチヤのかゝる增大は、彼等に與へられたる特權的地位を奪つて行つた。いはゞインテリゲンチヤのプロレタリア化が始まる。「精神的貴族」の地位が搖ぎ始めたのである。インテリゲンチヤの不平と不滿が目醒める。

併しながら、吾々はこれらの不平、不滿を見て、直にインテリゲンチヤがプロレタリアートの側に立ち得る事を結論することは出來ない。プロレタリアートは凡ゆる特權の敵である。從つて智識の特權に對しても反對する。彼は智識が總ての人に解放さる可き事を要求する。この要求はインテリゲンチヤから見れば彼の特權破壞である。インテリゲンチヤの中、

誰がこの智識の特權破壞に贊成し得るか。それが問題にとりて重要である。

吾々は先にインテリゲンチャなるものは、何等統一的なる階級利害によりて結合されてゐないところの社會層に過ぎない事を述べた。從つて若しこの事が正しいとすれば、インテリゲンチャに於けるその供給の増大、智識貴族の特權の動搖、從つて不平不滿の發生、増大も、この社會層の部分の異るに從つて相異つてゐなければならない。吾々はこの事を見やう、そうしてこの事は、同時に又現代に於ける二大階級の決定的闘爭に於て、インテリゲンチャが如何なる態度に出づるであらうかを點檢することにもなる。

吾々は近代的インテリゲンチャを三つの部分に分つて考察する。その上層と中層と下層とである。

二

先づ下層のインテリゲンチャから始める。下級の使用人（俸給生活者）、官公吏、下級學校教師等々を包含する。彼等は若干の例外を除けば、全體として、智識貴族によりも寧ろプロレタリアートに近い社會的地位におかれてある。この部分のインテリゲンチャに於ては、資本主義的社會の進展と共に、技術、その他教養の修得が極めて容易となる。商、工業學校その他の徒弟學校の増加は極めて廉價に智識を得せしめ、技術の進歩は極めて容易にこれらのインテリゲンチャをその地位から追ふ。かくて教養の一般化の最も直接的に深酷なる影響は、實にこの部分のインテリゲンチャの上にのしかゝるのである。彼等は次第に生活條件及び勞働條件に於てプロレタリアートに近づく、更にプロレタリアートの中に落ち込む。インテリゲンチャのこの階層にとりては、その數の制限によりて彼等の特權的地位を維持することは不可能である。彼等は時と共にこの事を意識し始めるであらう。そして彼等自身を救ひ得る道はたゞプロレタリアートの×に立つて一切の特權を××する爲めに戰ふ事以外に存し得ない事を知る。かくて彼等はプロレタリアートと共に資本家階級に對して闘爭す

るに至る。

無論特權的空氣に慣れた彼等が、極めて容易に彼等の特權的感情を棄てゝプロレタリアートに歸すると考へることは出來ない。彼等は營養より見榮が大切であり、食物を節約することによりて、最新流行の洋服とネクタイとを買ふといふ心理を有する。それは憐む可き特權の誇りであらう。だが資本主義的生產方法の發展と共に、彼等が次第にその特權的地位を失ふと共に、彼等はインテリゲンチヤの他のグループから離れ、プロレタリアートに接觸し、かゝるものとして意識し、その陣營に投じて來る。彼の最新流行のネクタイと洋服とを棄てゝ。

第二に吾々はインテリゲンチヤの上層を見やう。高級の官吏、使用人(高給俸給生活者、例へば支配人)等々を包含する。上級の軍人等々も亦こゝに屬する。彼等の多くは既にその出身そのものがブルジョアに屬するであらう。假令そうでない場合にも彼等の得たる社會的地位は、ブルジョア的意識を呼吸し了つて居る。ブルジョア意識を有しない支配人は支配人ではあり得ない。彼等はブルジョアを代理して勞働者の搾取の任に當る。

かくてこの階層に對してはプロレタリアートは望む可き何ものをも有しない。この階層自身も亦、他のインテリゲンチヤに對して共通の利害を有すると思はないし、又事實かゝるソリダリティは存しない。況やプロレタリアートとのソリダリティに於ておや。上層インテリゲンチヤはかくてブルジョアとして意識し、その社會的地位に於て、その生活條件に於てブルジョアである。彼等はブルジョアジーの特權を彼等自身のそれとして感じ、又それをかゝるものとして行使する。プロレタリアートと下級インテリゲンチヤとはインテリゲンチヤのこの部分に對して敵對的關係を有するのみ。

第三階層を見やう。インテリゲンチヤのこの部分は前述二階層の中間に存するものである。學者、高等學校、大學の教授、中等學校教師、辯護士、技師、醫師、中級の使用人や官公吏、藝術家、ジャーナリスト等々、最もインテリゲンチヤらしきインテリゲンチヤを包含する。狹義に於ては吾々は社會層のこの部分のみをインテリゲンチヤとすら呼ぶ。

この階層に於てインテリゲンチャの智識貴族としての誇りが最も強く保持されてゐる。彼等こそ品質の智識貴族であると自らも他も許してゐる。この彼等の特權意識は彼等をしてプロレタリアートよりもブルジョアジーに近づかしめる。何者、プロレタリアートは何等の特權を知らない階級であるから。更に又彼等の多くは血を以つてでなくとも、社交的、その他何等かの仕方で（例へば女婿）ブルジョアジーと結びついてゐる。如何に多くの大學教授がブルジョアの女婿である事よ！それ故に、これらのインテリゲンチャは多くはブルジョア的イデオロギーの所有者である。大學教授を見よ、又たジャーナリスト等々を見よ。その如何に多くがブルジョア・イデオローグである事か。その中に如何に多くの「マルクス主義排撃」者を數へ得る事か！

併しながら、この種のインテリゲンチャ層の他の一つの特質は、彼等が直接に勞働者の搾取に携はらない事である。この點に於て彼等は直接に搾取に當るブルジョアジーと異る。更に又彼等の或者（學者、ジャーナリストその他）は、その職業として直接にはブルジョアジーの搾取利害に關心することなくして、專心自然又は社會の理論的探究に當り得る。その他のものに於ても、少くともかゝる期間を比較的永く有する。かくの如くして修得する豐富なる智識と抽象的思考力とは、彼等に對して社會の總體を見渡すことの可能を與へる。無論最初彼等の視野はブルジョア的限界を出でない。即ち彼等はブルジョア階級をその全體に於て考察するに在るのみである。彼等はブルジョアジーの全體としての永續的、全般的利害と一時的、部分的利害とを識別し得るに在る。

かくて彼等は、プロレタリアートの極度の搾取はその不平を惹起して、その反抗運動を強めること、勞働時間を適度にする事は却つてブルジョアジー全體の利益となること等々を看取する。ブルジョア的社會の安泰は却つて或る程度に於けるブルジョアジーの讓歩から生ずる等々と考へ始める。彼等の中より人道主義的熱意に燃ゆるものは、社會政策的諸施設に率先して盡力する。

この階層のかゝる地位は、その中に多くの人道主義的社會改良家を生れしめる。彼等の內或者は理論的にプロレタリアートが如何に搾取され、抑壓されるかを知る事が出來る。更に進んでは社會改良主義の不可能をすら認識することが出來るかも知れない。だが安慰の生活に慣れ、勇敢なる鬪爭的精神を缺ける彼等は、決然として××的プロレタリアートと共に搾取者に對して鬪ふの行動に出で得ない。かくの如くして彼等の中多くの善良なる意志の所有者と雖も人道主義的社會改良主義者として留る。生眞面目にして社會改良家なる安部磯雄氏の支持者は極めて多く彼等の中に見出され得る。

彼等の中僅少なる、だが、眞面目にして思考に怠惰ならざる、而も鬪爭的精神を失はざるもののみが、ブルジョア的視野から眞實に社會の全體的理解に到達し、從つて又理論的にプロレタリアートの立場に到達し、而も行動に於て××的プロレタリアートと共に階級の××に、特權の廢止の爲めに戰ふに至る。インテリゲンチャのこの部分にプロレタリアートはその戰友を有する。かくの如き決定的の一步を踏み出し得るのは、かゝるインテリゲンチャの全部ではない。たゞ彼等の極めて僅なる部分のみがこの事を可能にされるにすぎない。比較的安慰なる、孤立的なる生活條件の下に、直接の搾取者でない彼等の多くは、社會改良主義者又は人道主義的ハムレットとして殘るか、社會的無關心のエゴイスト又は享樂主義者となる。そして彼等の多くが決定的瞬間に於て反動化し得る事も想像するに難くない。

三

吾々はインテリゲンチャを三の階層に分つて、その各々について、彼等がブルジョアジーとプロレタリアートとの階級鬪爭に對して如何なる態度に出づるであらうかを見た。吾々の考察の結果得たる所は、インテリゲンチャは、この基本的階級間の鬪爭に對してその社會層全體として統一ある態度に出で得るものでないといふ事であつた。そしてそれは彼等自身統一ある階級的利害を有する嚴密なる意味に於ける階級でないところから來る當然の結論でなければならない。

吾々は以上の考察に於て大學、高等學校、その他専門諸學校の學生に論及する事を故意に避けて來た。それは彼等がインテリゲンチャの一の層として多少特殊的なものに屬すが故であつた。今、吾々は學生に移らう。だがこゝでは主として大學生を問題とすることを以つて充分であると思ふ。

遅れて登場したる吾國のブルジョアジーは、歐米先進諸國のブルジョアジーに比肩し得るために、大に教育の勝闘に力をつくした。先覺ブルジョア福澤諭吉が如何に學術の移入に努力したかは周知の事に屬する。又吾々が如何に整然たる學校施設を有するかを見よ。海外留學の制度、研究所等々の設立、それらは如何なる理由と名義とを以つてせらるゝにせよ、吾國ブルジョアジーの必要がこれを生みたるものである事には疑ひない。その意味に於て大學その他一般に教育施設なるものは、ブルジョアジーの爲めのものである可き運命を負はされてゐる。それは抽象的、一般的に眞理を研究するところの機關たり得るものでなくして、直接、間接に搾取の技術を供給し、又かゝる現存社會秩序を直接に、又は間接に正當化し、その持續の爲めに協力する限りに於て、「眞理」の探求を任務とせざるを得ない。

それ故に、大學令第一條は、「大學ハ國家ニ須要ナル學術ノ理論及應用ヲ教授シ並ニ其ノ蘊奧ヲ攻究スルヲ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及國家思想ノ涵養ニ留意スベキモノトス」る事を定めてゐる。それは決して單純に眞理の探求を目的とするものではない。眞理の探求に對して加へらる可きかゝる階級的制限は、或る程度の屈伸性を有する。或る程度に於てこの制限を超へたる研究に對しても自由が許される。例へば、ブルジョアジーがなほ急速に進展しつゝある場合に於ては、大學内に於ける科學の研究には多少の自由があり得る。だが一般にはその限度は極めて狭いものであるといつてよい。それにも拘らずこゝで科學の研究に從事するものゝ内、思考に怠惰でない極めて僅少なる者は、こゝに設けられたる限度を超へて、プロレタリアートの立場に立つて研究を進める。だが今やこれらの者に對して極度に自由が拘束されつゝある。それは今や完全に文字通りに大學令の命ずる所に從へる意味に於てのみ研究されんとしつゝある。そうして彼等の學生に及ぼす影響を

出來る限り少くせんとする幾多の方策が講ぜられつゝある。今や大學が如何にブルジョアジーの爲めのものであるかを如實に示さんとしつゝある。

さて、大學はこうだ。吾々は大學生に移ろう。

大學生には、極めて一般的に云ふならば、吾々が先にインテリゲンチャの中間層に就いて述べたところを適用することが出來、又大學生について述べられる多くの事が、かゝるインテリゲンチャにも應用され得る。大學生は最もインテリゲンチャ的なインテリゲンチャであるとすることが出來やう。彼等の大部分は、大學を出ると共にこの中間層を占める。たゞ彼等は現在に於て何等の職業についてゐない、從つて何等の物質的、職業的利益に拘束されないといふ點に於て、インテリゲンチャ中間層よりもつと自由である。彼等の生活は、彼等が學生である限りその父兄によりて保證されてある。彼の若き頭腦は柔軟であり、敏感である。而も青春の情熱は彼等を驅つて容易に行動に赴かしめ得る。かくて大學生は彼等の教師よりも、より自由に考へ、より敏感に感じ、より勇敢に行動し得る。

加之、明治政府以來常に教育の普及と完備に力めたるブルジョアジーの努力は、今や彼等の手に負へない程のインテリゲンチャを作り出して了つた。殊に最近に於ける産業の合理化過程は激増する失職を以つてインテリゲンチャを脅しつゝある。大學卒業生の就職率は極度に低下した。今、「經濟聯盟が社會局や、各學校、有力銀行會社等について調査したありのまゝの就職難の姿」を左に示そう（東京日々新聞、昭和五年二月七日に據る）。

第一表　卒業生の増加

	【專門學校	實業專門校官	官公私立大學	帝國大學
大正八年	四、六一二	二、三六六	—	一、九〇八

第二表　就職狀態概況

	調査校數	卒業生數	就職者數	就職率
大正十三年	五一	五、二〇五	三、九四二	七五・二%

十五年	七、四二五	四、八八二	六、〇五〇	二、九八六
昭和二年	一二、五六三	五、三二二	四、一五八	五、七九五
三年	一三、一三九	—	四、七〇六	四、〇〇七

十四年	八六	九、二〇八	六、一三三	六六・六%
十五年	一一一	一五、一五一	八、九五九	五九・〇%
昭和二年	一一六	一二、七九四	八、三〇一	六四・七%
三年	一三七	一七、〇一八	九、一七一	五三・九%

即ち、右の第二表によると大正十三年に於て卒業生の七割以上が就職し得たのに對して昭和三年に於ては五割強、即ち約半數の就職者があるのみである。而も第一表が示す樣に大學卒業生の數は激増してゐるのであるから、就職し得ない人々の絶對數は實に莫大なものである。大正十年に於ては、私の知れる限り、同期卒業生中直に就職し得ない者は一人もなかつた。

かゝる狀態は容易に學生層に反影する。學生の思想の「險惡さ」に於いて、ブルジョアジーが對策を攻究し始めたのも無理ではない。ブルジョアジー自身の作り出したものが、彼等自身の面にはね返つて來た。ブルジョアジーのすることは何時もこうなのだ。彼等は常にたゞ矛盾を擴大再生産してゐるのみである。彼等は彼等がブルジョアジーとして存在する限りこの矛盾を決し得ない。それは丁度、師匠の留守にお怪化を呼び出して、自分の力でこれを引つ込める事が出來なかつた魔術師の弟子の樣なものである。

大學生の出身社會層は極めて雜多である。ブルジョアの子弟、小ブルジョア、大中小地主、インテリゲンチヤの子弟であらう。極く稀に勞働者、農民の子弟があり得る。奬學資金の制度が可なり廣く行はれ、貧困なる人々の子弟も僅ではあるが大學に進んでゐると思はれる。

現代の大學生は大體に於てこういつた樣な社會的、生活的條件の下にある。

吾々が、先づ考へ得るのは、大學生の急進化であらう。然り、大學生の思想は「險惡」となりつゝあるであらう。だが大

學生一般がプロレタリアートと共に鬪ひ、マルクシストとなり得ると考へるなら、それは誤りである。學生の純眞さ、敏感さと情熱とは、眞直に社會的影響を受入れて、敎授達の反動化とは正反對に、彼等をマルクシストとして立たしめる可能を呈するものである事は否む事を得ない。だが彼等の全體が然るのではない。彼等は、極めて雜多な出身社會層を有し、その學生としての社會的、生活的條件は少しもプロレタリアートと共通しない。從つて、彼等の生活條件の必然が彼等の全體を驅つて、プロレタリアートの側に立たしめるものでない事は、インテリゲンチャ中間層に於て述べたところと同一である。たゞ大學生の中、勇敢にして、思考に怠惰ならざるもののみが、マルクシストとしてプロレタリアートの中に鬪爭し得る。

だが彼等は學生である。何等の生活體驗なくして、又鬪爭體驗なくして、プロレタリアートと共に戰ふのである。彼等が直に、プロレタリアートの指導者であらうとするならば、これより甚だしき誤りはあるまい。智識に於て優れたる彼等にこの種の危險は作ひ勝ちであらう。この事は無論インテリゲンチャ中間層についても云ふ事が出來る。かくて彼等の中、鬪爭的にして、而も謙遜、已れを知るもののみが、永き鬪爭の經驗と共に、プロレタリア運動のよき指導者の一人たるであらう。吾々はプロレタリアの運動史上、先進諸國に於て、又吾國に於てかゝる多くの人々を有する。學生は常にプロレタリアートの敎師でなくして、學びつゝ鬪へる者であるであらう。

大學生はその父兄によりて生活を保證され、生活條件の必然を缺くも、なほ頭腦に於ける轉換によりてプロレタリアートに投ずる。加ふるに靑春の情熱を有する。彼等の活動は時として、餘りに花々しく、餘りに自由である。已れの主觀的な、頭腦内の轉換を直に客觀的條件の變化と見誤る事なしとしない。踊れるものは自分自身であるに拘らず、客觀的條件が踊れるものと思込む事なしとしない。吾々は事實吾國及び諸外國の學生的鬪士の中にかゝる現象を見なかつたと斷言することは出來ない。それは彼等が餘りに情熱的であり、餘りに純眞であり、勇敢であるところから來るものではあらう。

大學生は生活の必然なくしても、身體に轉換し得る。こゝにも又他の危險性も包含される。青春の情熱は一度何等かの蹉跌（それは失戀でゝもよい）に會つてさめることをなしとしない。そうして彼のマルクシストとしての活躍を『若き日の過ち』として思ひ出す時を有たないとは限らない。

これら一切の危險性を包藏しつゝもただ、彼等の中から、如何にその數に於て僅少であつても、プロレタリアートの解放運動に大きな役割を演ずる人の出現し得ることの可能を疑ふ事は出來ない。況や資本主義の合理化過程は大學生の就職難として、彼等に暗影を投じ、その不平と不滿とを高めつゝあるに於てをや。

だが、かゝる不平と不滿とは一般學生にとりては、必ずしも彼等を驅つてプロレタリアートの陣營に至らしめるものではない。彼等に固有なる智識貴族としての誇りと比較的安逸なる生活に慣れつゝ作り上げられた彼等の性格とは、却つて彼等をプロレタリアートに敵對的とならしめすらするであらう。ドイツ革命後の困難なる時期に、如何に多くのインテリゲンチャと大學生とが反動的思想の持主と變つたか。ファッシズムの運動に參加した事か。又ロシアに於て革命の困難なる時期に學生の多くが如何なる態度をとつたか？　ジノヴィエフは彼のロシア共產黨史の中にこう書いてゐる、『次いで一九一七年――一九二〇年に吾々はそのアンティテーゼを有した。當時學生團は全體として勞働者階級と革命とに反對の態度に出た』と。又吾國に於ても既に吾々は多くの反動的學生團を現に見てゐる。

併しながら、又困難によりて訓練されることの少い大學生の多くは、就職不安の暗影によりて、益々卑屈なる個人主義的就職運動者として現れる事も可能である。吾々は又現にそれを見てゐる。私は雜誌實業の日本を愛讀せる大學生を知つてゐる。その中には、『私は如何にして就職戰線を突破したか』といふ様な話、又は或る大會社重役の『私は如何なる人を採用したか』といつた様な記事を以つて滿されてゐる。曾ての大學生が知らなかつた、そして恐らく彼の親父の壯年時代の愛讀雜誌であつたものが、今や又大學生の愛讀雜誌となつた。

だが而し、彼等と雖も内に不平、不滿がないのではない。だから、或る調査によれば、現代大學生の最も多く讀む雜誌は、『中央公論』若しくは『改造』であるといふ。だが此場合吾々は學生の不平不滿と共による社會的關心が必ずしも其等の雜誌を讀ましめるものであると考へることは出來ない。それは、困難と暗影の下に現實を忘れんとして、雜誌の中に多分に含まれてゐるナンセンス的讀物の魅力による事を忘れ得ない。又大學生の中に多くのエゴイスト的享樂主義者が生れる事を否み得ない。吾々は極めて多くの大學生がヂャズとカッフェーの愛好者である事を忘れない。

彼等の中絕望的にして、而も行動の衝動に驅られるものはルンペン・プロレタリアと共にニヒリストとして一切の破壞者ともなり得るであらう。

彼等の中、生眞面目にして、プロレタリアートの現代社會に於ておかれたる悲慘なる狀態を理解し得るも、行動に出づる勇氣を缺くものは、不斷に動搖するハムレットである。

四

吾々はインテリゲンチヤを考へて見た。そして彼等の全體が統一ある階級をなさない事を知つた。

今、歷史的使命を負ふて立上つたプロレタリアートに對して、彼等は色々の態度にある。

現代のインテリゲンチヤは何處に行く？　現代の大學生は何處に行く？　彼等の步み方と方向とは區々まちまちである。

或る者は右に行く。或る者は勇敢なるプロレタリアート的戰士として現はれる。或る者はその中間に浮動する。或る者はカッフェーとヂャズとに行くであらう。

ブルジョアジーは彼等の必要からインテリゲンチヤを作り出した。彼等に科學と宗教と藝術等々とを以つて奉仕する事を命じた。だから彼等の科學と宗教と藝術とは、ブルジョアジーの階級的利害の限度内に留る事を要求されてゐる。一切の

科學、藝術は階級性を有する。一切の宗教は支配階級の存する所にのみ必要である。インテリゲンチャは一切の文化の擔當者として、社會的の進歩の協力者である事を自負する。だが今やブルジョアジーは社會的進歩の擔ひ手である事を止めんとしつゝある。この時インテリゲンチャが依然としてブルジョアジーの側に留るならば、彼等の科學、藝術も亦そのブルジョア的階級の限度内に押し止められ、進歩に協力することを止めざるを得ないであらう。即ち、彼等がブルジョアジーの側にある限り、彼等の科學はより以上に「眞理に近づく」事を止めるであらう。彼等の科學の階級的限度がこの事を妨げるであらうから。

インテリゲンチャの或者がプロレタリアートの側に立つ限り、即ちこの無限なる進歩の擔ひ手であるものゝ側に立つ限り、彼等は社會的進歩に對して、その科學と藝術とを以つて協力するであらう。吾々はこゝで困難な問題、即ち科學の階級性の問題に觸れてゐる。簡單に云ふならば、吾々の云ふ科學の階級性の問題とは、科學の有す可き階級的限度の事である。即ち吾々の認識が眞理に近づき得る歴史的限度、の事である。プロレタリアートがブルジョアジーの科學に存する階級的限度を撤廢し得るといふ事である。だから新に有するプロレタリアートの科學が、ブルジョアジーの有した科學に對して、木に竹を接いだ様に無關係なものとして生れることを意味するものではない。ブルジョアジーの科學が有した歴史的限度、を撤去して、これを受繼ぎながら、發展せしむる事である。その發展そのものは、ブルジョアジーがその階級的限度の故に果し得なかつたところのものである。この意味に於てプロレタリアートは新しき科學を有するであらう。だがブルジョアジーの有した科學の成果がそつくりそのまゝ無駄になる譯ではない。それらはより高きものゝ内に、正當なる地位を與へられることにより新なる意味を獲得する。この意味に於てプロレタリアートのなす所は新しい。マルクスは哲學に於て、經濟學に於てこの事を成し遂げた。自然科學に於ても亦同樣にブルジョアジーの得たる成果が、プロレタリアートの成果の中に新なる意義を有して、正しき地位が與へられる。レーニンは云ふ、「近代的唯物論、即ち、マルクス主義の見地からすれば、

たゞ吾々の認識が客觀的、絶對的眞理に近づき得る限界、（傍點、レーニン、以下同じ）は、歴史的に條件づけられてゐる。けれども、かゝる眞理そのものゝ存在は無條件的であり、吾々がそれに近づきつゝあることは、無條件的である。……いかなる時に、またいかなる事情の下において、吾々が、物の本質の認識において、コールタールの中のアリザリンの發見、或は原子に於ける電子の發見に到達するかは、歴史的に條件づけられてゐる。そしてかような發見が、すべて「絶對的、客觀的な知識」への一つの前進であることは、無條件的である。要するに各々のイデオロギーは、すべて歴史的に條件づけられてはゐるが、しかし各々の科學的イデオロギーには客觀的眞理が、即ち絶對の自然が、これに照應してゐる事は無條件的である」（レーニン、山川・大森譯、唯物論と經驗批判論、二二六——二二七頁）。

かくてプロレタリアートはブルジョアジーを××することにより、ブルジョア的の一切の階級的制限を撤去して、又撤去し得る力として、社會的進歩の負擔者となり、一切の科學と藝術の爲めに新しき立場を作る。かくて現代のインテリゲンチャは、かゝるものとして、智識的貴族として留る限り、そのブルジョア的限度の爲に社會的進歩への協力者とはなり得ない。彼の中のインテリゲンチャとしての特權意識をすてゝ、プロレタリアートの意識の中に生き得る者のみが社會的進歩に對して、その科學、藝術等々を以つて協力する。智識貴族として特權を棄て得ない者は、ブルジョアジーと共に奢き誇りを保持しつゝ、滅び行くであらう。

金解禁後の對策としての産業合理化

俵　孫一

一、總　説

現内閣に依て遂行せられたる金輸出解禁に善處する對策は、固より一にして足らないので財政經濟乃至産業界の全般に渉り、其の現狀を正視し之を檢討するを要するのであつて、或は公私經濟の緊縮節約を圖り勤儉力行の美風を涵養する等凡ての方面に更始刷新の要を認むるものであるが、産業行政上の對策としては、近時世界の産業界に於ける標語である所謂産業の合理化を圖るを以て最も剴切なるものと信ずるのである。換言せば、物資の生産費を低下し、配給組織を改善し物價を低廉ならしめ、一面には是等物資の販路を開拓し、以て國際貸借の改善を圖ることである。蓋し將來金の流出を防止し、金解禁をして有終の美を濟さしむるが爲には國際貸借の改善が絶對に必要であり、而して國際貸借の改善には物價の低下と市場の開拓とが必須の手段であるからである。

惟ふに、我國産業界は過般歐洲戰亂を劃期として躍進的の發展を遂げたのであるが、之は各國共干戈に急なるの餘り平時産業を顧慮するの餘裕が無かつた爲に、偶然に謂はゞ我國は其の間隙に乘じ漁夫の利を占めたのであつて、當時に於ては品物が出來さへすれば右から左へと羽が生えて飛んで行つたもので、販路の如きは無論顧慮するの必要もなく、品質の如きも八釜しい文句は無く、價格は一般に暴騰して居り、從つて如何にして良品を作るかとか、生産原價を安くするかとか、販路は如何にして確保すべきか、とか云ふ樣な生産技術其の他經濟事情に就いての愼重なる遠き慮りの無かつたものが尠くないのである。戰後歐米と共に是等戰時中勃興したる商工業は、外國との競爭

に遭遇し品質の點に於て將た價格の點に於て外國品に對抗することと能はず、爲に破産倒壞するもの相踵ぎ外國品の輸入は年と共に增大し粗製濫造の譏は世界の各隅よりして國産品に投げ附けられ、折角開拓したる市場も再び奪取せられて戰時中獲得したる二拾數億圓の輸出超過に依る受取勘定も戰後數年ならずして放出し悉し、漸く昨年度に於て大正九年後初めて貿易外の收支をも通算して辛うじて國際貸借の均衡を支持することを得たのである。

斯る實狀を呈して居るのは、畢竟するに我國産業界が其基礎未だ強固ならざることを立證するものであつて、須らく其の根本に溯り所謂理性の原則に從ひ偶然とか仕來りとか直感乃至は傳說に捉はるることなく、現狀に對する嚴正なる批判吟味を遂げ組織的に産業界の建直しをしなければならぬ點が尠からず存することと考へらるる。今や金解禁に依り我國産業界は世界經濟の常道に復し、各國と同一の水準の下に輸贏を決せなければならない狀況に至りたるを以て一層其の感を痛切ならしむるのである。

然らば如何なる點に付て改善を必要とし之が爲に如何なる具體的手段を構ずべきやに關しては、先づ重要なるものとして之を

一　産業組織の統制
二　製品の標準化
三　作業方法の改善
四　商品配給制度の改善
五　國産品の販路の擴張

の五項目に分ちて、我國産業界の現狀に即し聊か所見を披瀝して見たいと思ふ。

二、産業組織の統制

産業を合理化する爲には、個々企業の内部的事項に付て考究すると共に、外部的に企業相互の間に於ける關係を改善しなければならない。何となれば、現代産業の病疾は無益なる企業相互間に於ける競爭と云ふことであるからである。由來自由競爭は産業進歩の要諦なりと認められて居つたことがあるので、無論其處には相當の眞理の存在することは否定することは出來ないので、現代の世界の産業界寧ろ文明を生み出したのは各人の何等拘束なき自由競爭の賜であると云ふことが出來やうが、同時に現代産業は各國共に自由競爭の弊に堪へなくなつたのであつて、其爲に産業界の無政府狀態を現出し動もすれば恐慌を惹起し獨り産業界のみならず國家社會の全體に恐るべき害毒を與へ

同業者は共倒れの悲運を嘗めなければならないことを體驗したるが故に、共存共榮を計るの自衞手段として企業相互間に合同とか連合とか乃至は協定が行はるるに至り、自由競爭に對する夫々程度の强弱こそはあるが制限を加ふるの傾向が漸次顯著になつて來た。殊に競爭激甚なる國際場裡に跳躍せんとする場合には、國内企業間に於ける統制は最も痛切に感ぜらるるのであつて、單に個人經濟の見地よりしてのみならず、國民經濟的見地よりしても極めて重要なる役割を演ずるやうになつて來、今日では更に進んで國際間に於ける企業の統制すら盛に行はるるやうになり、遂には一九二七年ジュネーブに於て國際經濟會議まで本問題を主題として開催せらるるの機運を釀成するに至つたのである。

倘ほ企業組織の統制は、以上述べた自由競爭の弊を除去すると共に、一面には近代工業經營の大原則たる所謂大量生産の實益を收めしむるもので、同種企業の合同に於ける場合は勿論、所謂工場の專門化協定に依り生産分野の設定をなし、從來製造したる多種類の生産品中各工場共夫々少數の一定種類のもののみに全生産能力を傾注するが如き場合には、後に述べんとする製品標準化と共に生産費の低減品質の改善に重要なる役目をなすものである。

斯る企業組織の統制は戰前より既に行はれて居つたのであるが、特に戰後獨逸に於て混亂せる經濟界の困厄に處する對策として盛に行はれたのであつて、初めは縱の關係即ち聯絡を有する異種企業間に於て行はれ、後に至つて橫の關係即ち同種企業の間に於て行はるるに至つたのである。斯くて製品の需要供給を安定ならしめ、價格を一定し生産の分野を定め製品の販賣若は原料の購入を共同にし、能率低き工場を閉鎖し利益の分配を共通となし生産技術を交換する等企業組織を統制して獨逸産業界に於ける生産並に配給を合理化せしめた功績は實に顯著なるものがある。其他英國、佛國等の戰後の事情に就て見るも企業組織統制の必要なる事が高調せられ、效果の見るべきものも亦尠くないのである。

翻つて我國に於ける情狀如何と云ふに、紡績業であるとか製鐵業であるとかセメント業、人造肥料工業、曹達晒粉製造業、製紙業、製糖業、麥酒釀造業、絹紡業、羊毛工業、スレート工業、製粉工業等の間に生産制限、生産分野の設定、價格の維持、製品の共同販賣、原料の共同購入等に關する多少の協定の存するものもあるが、其の個々に就いて見ると協定の範圍は未だ概して狹く、其の拘束も必ずしも强いものではなく、未だ企業統制に依り效果を顯著に收めて居るものは尠いのである。獨逸、

米國等に行はるる様な徹底的な協定をなすものは寥々たるもので、能率低き工場の閉鎖とか利益共同契約とか完全なる工場の專門化の如きは未だ殆んど耳にせないのである。

一例として我國に於ける機械工業の現況を見ると、大規模なる現代式機械を備へ付けたものも相當存在するのであるが、何れの機械工場を見ても殆んど凡ての機械器具を製造し、注文さへあればどんな少量でも亦嘗て製作した經驗の無いものでも作つて居ると云ふやうな實情であつて、從つて凡ての機械工場が割高の生産費をかけて販賣價格を互に競り下げ計算に合はぬとこぼして居るのである。若し是等機械工場の間に工場專門化に關する協定が成立するならば、各自が大量生産の實益を收め相當の利潤を見て販賣することが出來るのではなからうかと思はれるのである。

尙ほ我國に於ては右に述べたやうな大規模工業の外に所謂中小工業が多數存在してをり、重要輸出品の多くは是等中小工業の所産に屬するものであつて、其の企業組織の統制宜しきを得ると否とは直ちに我國輸出入貿易の上に重大なる影響を有するのであるが、其現狀には甚だ遺憾な點が多々存するのである。其根本に於て規模小なるが爲に大量生産の實益を收むるの條件を缺如せることは申す迄もない事であるが、又生産技術の如きも幼稚なる手工業の域を脱せざるものが極めて多いのである。

就中最も重大なる病弊は同業者間に於ける競爭の極めて激甚なることである。問屋よりの注文により算盤にも何にも合はぬ處迄値を切下げて製造すると云ふ樣な事情であつて、之には一面資金關係等よりして問屋側の制肘を受けなければならぬ已むを得ざるの事情にも基因して居るのであつて、是等の事情にも溯つて改善するの必要はあるが、斯る不合理な價格切下げの爲に製造者の方では自然粗製濫造の弊に陷らざらんとしても得ないのである。而して一面又問屋側は問屋側同志の間で火花を散らして販賣價格の競り下げをしてゐるのであつて、動もすれば我國輸出貨物が新荷毎に價格が下つて外國に於ける貿易商が甚だ困惑すると云ふ事を耳にするのである。最近の事であるが倫敦に於て日本よりの絹織物價格が低落に低落を重ね、彼國の貿易商に相當甚大なる損害を與へたので漸次有力商社が日本絹の取扱に嫌恐の念を生じて來たと云ふ事情がある。

是等中小商工業者に對する對策としては種々あらうが、先づ一策としては現行重要輸出品工業組合法及輸出組合法に依る組合の構成を勸奬し、或は重要物産同業組合法を改正し、組織の力によりて亂雜なる各企業者間の自殺的競爭を排除し、生産、販賣、原料の供給等を共同にし、價格の維持、生産並に販路の

分野の設定等をなさしむることが最も必要である。

三、製品の標準化

嘗て商工省に於て食料品罐詰用圓筒罐の罐型の種類に付全國に亘り調査したことがある。其の結果に依れば、其の型式四四八種の多きに達し、而かも是等の中大多數の罐種は其の生產數極めて少量宛であつて、圓筒罐生產總數の內五割強は僅かに拾種の型式を以て充たさるることを發見した。是等の罐の內容物は魚鳥類、野菜、果物、獸肉等であつて、其の用途から考へて決して斯く四百種以上の多くの型式を必要とするものではないことは勿論であつて、之が爲に生ずる經濟上の不利益は蓋し甚大なるものがあるのは疑を容れない處である。

斯く用途を同じくするものに就き、品質なり型狀なり寸法なり試驗方法なりを出來る丈け少數のものに標準化することは、製造業者に取りては大量生產を可能ならしめ、商人に對しては在庫品の數量を減少し又消費者には安價に物資を購入することを得又部分品の補給をも容易ならしむる等、產業上極めて重要なる役目を爲すものである。

由來本制度は米國に於て最も盛に實行せられて居り、一名アメリカン・システムとも稱せられて居る位であつて、一九二一年頃戰後の反動として流石繁榮の國米國にも不景氣が襲來し、企業家は事業整理の必要を痛感すると共に所謂勞働の精算を要求し、賃銀が戰前標準迄逆戻りしなければ事業は遣り切れないと云ふ議論が盛に行はれ、一面勞働者は以前よりも高き生活標準を有して居たからして無論賃銀の切下げは反對した。兩者の間の確執今や白熱化せんとするに際し、當時商務卿であつた現大統領フーバー氏が、前年自分が米國技術聯合協會々長として建築、請負業、既製男子服裁縫業、印刷業、金屬工業及纖維工業の六大產業に就き、詳細に現狀調査を爲したる所謂無駄排除の調査の結果を參照し、米國產業界不景氣打開策として、製品標準化の時宜に適切なることを痛感し、自ら陣頭に立つて之が運動を起し、商務省內には別に單純化實施課を特設して既存の米國規格統一協會及政府の規格局と連繫を保ち、更に民間有力者をも加へ、全國商工會議所と協働して着々として其の實績を收めて行つた事は、我國に於ても人口に膾炙せる處である。

其の他英國に於ては、最も古くよりして標準化運動は存在し一八四一年頃より既に手を着けて居つたが、戰後は一層該事業に進捗を來し、又獨逸に於ても歐洲大戰後經濟復舊の緊急施設として該事業に着手し、一九二五年には獨逸產業改良協會の一部局として受渡條件改善委員會が、工業家、手工業者、商人、

消費者、學者及關係官廳の自發的協調に基て設置せられ、既存の獨逸工業規格統一委員會と協調し、各種の原料、半製品、完成品及合格品に對する統一的受渡條件及檢查方法を制定しつつあるのである。尙ほ該運動は一昨年末以來萬國規格統一協會設置後國際的となつたのである。

日本に於ても戰後世界の情勢に鑑み、大正十年商工大臣監督の下に工業品規格統一調查會を設置し、爾來各種の工業材料及製品に就いて鋭意調查を行ひ、今日迄に決定せられたる標準規格は百五件に及んで居り、而して是等決定規格に就ては、政府は固より民間に於ても出來る丈け之に基いて生產購入して居るので、八幡製鐵所等の實績に付て見るも相當效果を擧げて居る樣である。然しながら、今日迄決定せられたるものは文字通り九牛の一毛にも足りない位で、少しく周圍の物資に就て觀察すれば、悉くこれ標準化の對象物たらざるはないのである。四、五の日用品に付實例を以て示せば、釦、鋏、ノート、疊、硝子、書籍の大さ、反物の長さ、和式封筒の大さ等其の種類の極めて多種多樣なることは何人も認め得る處であらう。論者動もすれば工業品の標準化は米國の如き市場廣大なる處に於てこそ效果あるも、我國の如き市場狹少なる處に於ては大なる效果を期待すること不可能なりと唱ふる者もないではないが、これは丁度反對にも云へるので、我國の如き比較的市場の小さい處でこそ却つてより以上の必要があるのではないのであらうか。蓋し既に屢々述べた通り、現代の產業主義は大量生產、大量取引の時代であり、標準化は正に製造業者に對しては大量生產を可能ならしむるの手段であり、商人に對しては大量取引をなさしむる絕對的方法であるからである。而して大量生產又は大量取引とは、單に總量の大なる生產又は賣買を意味するのではなく、同一種類のもののみに付て云ふのであつて、總量に於て如何に大量なりとも其種類雜多なる時は、其種類每には寧ろ小量なりと謂はねばならないのである。

尙附加へて置き度きことは、前に組織を論ずる時に日本の中小工業に依り製作せらるる輸出品が動もすれば粗製濫造の弊に陷るの事情を述べたが、更に此の外に品質の不整齊なるの批難を耳にするのである。之が匡濟策としても標準化は甚だ有效適切なるものであると思はれる。製造並に販賣を一定標準に從つてやつて行けば、粗製濫造とか不齊一とかの事實は有り得ない筈である。又標準化主義は今や商業書類の樣式等にも適用せられ、效果の顯著なる事を認められて居るのである。

四、作業方法の改善

現代産業の作業方法の變化の最も顯著なるものの一つは出來る丈け機械力を利用すると云ふことである。就中米國に於ける機械力の利用は目醒しきものがあり、機械力を以て作業し得る處は凡て人力を排して之に依らんとするかの様に見受けられる。單に工場に於てのみならず商店銀行等の事務所に付て見ても「タイプライター」、計算機、簿記機、統計器、速記器、複寫器、封緘器、金錢登錄器等が使用せられ急進的なる機械化を示して居る。更に又最近に至りては自働式機械が考案せられ、曰はく自働販賣器、曰はく自働「カフェテリヤ」、曰はく自働旋盤、自働電話交換器、自働織機等と從來機械はやはり人力に依りて運轉せらるべきものと考へられて居たものが、次から次へと人力を要しないものに變りつゝあるのである。

尚ほ工作機械の如きも「ユニバーサル」のものの代りに各作業行程毎に之に適應したる特殊機械が使用せらるゝに至り、之に依つて置き替へに因る無駄や機械の空廻りを節約する事に努めて居るのである。殊に機械化の最も顯著なるものは「フリース・アルバイト」、英語で云ふ「コンベーヤー・システム」の發達である。一番最初に之を實際に利用し初めたものは「フォード」の自動車工場であるといはれて居るが、該設備發達の爲に原料、材料等の運搬夫は全然無用の者となりたるのみならず、之が爲に作業全體の組織が一新せられて各作業は彌が上にも分化せられ各勞働者は自己の面前に規則的に流れ來る原料材料を規定の時間に必ず仕上げて行かなければならぬ様な組織になつた。「コンベーヤー」の運轉に連れて仕事は正しく豫定通り何等の支障りなく次から次へと完了されて行くのである。現代產業の特質たる大量生產を技術的に可能ならしめたるに付き、此の「システム」は、最も效果の大なるものであつたと云はれて居る。

作業方法の合理化的手段として機械化の最も效果の著しきものであることは既に述べたが、併し機械化には自然の制限があり勞力は何處迄も極めて重要なる生產要素であることは無論の事であつて、之も合理化するに非ずんば到底眞に作業方法の改善を期することは出來ない。而してこの點に就ては所謂「テーラー」主義即ちテーラー、カント、ギルブレス等に依り唱導せられたる科學的管理法なるものが重要なる貢獻をして居るのであつて、是等の人々は勞力を最も能率高く使用する事を目標として、單純なる從來の因襲や、或は單なる親指の法則に捉はることなく、純科學的見地よりして研究に從事したのである。初めテーラーの如きは最も合理的なる賃銀法則の發見を期圖した事に動因を持つて居る様であるが、其後研究の進むに連れ又

はテーラー氏の衣鉢を繼ぐ者に依つて、作業の全般に渉り或は作業器具の標準化、作業順序の設定、作業指導票の作成、賦制の改正、採光換氣等作業環境の改善、時間研究、動作研究、生理學竝に心理學的見地よりする疲勞若くは適性の研究より遂には原價計算、原料製品の保管、仕入、販賣に關する方法等迄具さに研究せられたので、是等の研究は各國企業家を刺戟して戰後に於ける經濟復興に貢献せしめた點は顯著なるものがある。英國、獨逸、伊太利等の諸國に於ても是等作業方法の改善に關する各種の研究機關が政府及び民間共に設立せられ各般の事項に付き調査研究を進めて居る。我國に於ては未だ斯る專門的の調査機關を持つて居ないが、作業方法の現狀を見ると機械力の利用の餘地の如きも殘されて居らうし、勞力、原料、材料の利用乃至は副產物の處理等の方面に付ても相當に無駄の存することを認めらるゝのであつて、是等の事項に付ても根本的なる合理化を圖るの必要がある。嘗つて米國のフーバーが爲した六大產業の無駄調査に於て節約可能と認めらるゝものが、全生產額の二割五分乃至六割四分であつて年百億弗と算定した事があるが日本に於ける作業方法の缺陷による無駄は米國より割合としては決して多くとも少いことは無からうと思はれるのである。

五、配給制度の改善

產業合理化は生產過程を整備改善して生產費を出來る丈け下げる事を目的とすると共に、生產と消費との間に於ける中間費用を最少限化し、最低價格を以て消費者に物資を供給することを意味するものであるが故に、物資の配給制度の改善は生產過程の改善と共に產業合理化問題の中に於ては重要なる役目を持つて居るものである。換言すれば幾ら安價に物資が生產せられても、配給制度宜しきを得ない爲に物資が工場を出てから後に消費者の手に渡る迄に高いものになつてしまへば、產業合理化に依る一般消費者の蒙る利益は何等無いことになつてしまふのである。

嘗て米國に於ては配給に關する根本觀念の理解が割合に少き爲に、商業に依りて商品が高價になると云ふ苦情が一般國民の間に廣く稱へられたことがある。此問題を解決する爲に合衆國商業會議所の主催の下に、一九二五年二回に渉りて全國配給會議が開催せられ、工業、農業、卸賣業、小賣業の代表者二百餘名が參集して協議したが會議の劈頭フーバーは配給制度の缺陷に依り現在米國の商品代價は二割五分乃至三割方無益に昂められて居ることを指摘し、缺陷の主なるものとして投機に依る無駄、國內の貯藏、生產及消費を充分知らざる事及之に附隨する危險、停車場の設備の不完全、荷積及運送の不備竝に過度の商品の輸

迄に基く無駄、配給の連鎖に徒に多数の者が參加する事に據る無駄等を掲げて居る。

我國に於ても、物資が生産者の手を離れる時と消費者の手に渡る時との値段には相當大なる開きを示して居り、嘗て商工省にて果實、梨、醤油、分蜜糖、各種反物、木炭等各般の日用品に付き調査したる處によれば、中には三、四倍にもなつて居るものもある。之即ち配給制度の缺陷を最も雄辯に物語るものであつて、例へば取引階梯に付て見るも中には生産者と消費者との間に五つ位の仲介者の介在して居るものもある。是等の事項に付ても合理化的見地よりして相當考究の餘地あるものと認めらるのである。

六、販路の擴張

製品の標準化作業方法の改善は當然の歸結として物資の生産量を増大せしむるものである。強て生産量の増大を抑壓せんとせば必らずや徒らに努力及資本の過剩を來し、困難なる社會問題を惹起するの慮あるのみならず、物價引下げ其の他合理化運動の眞に目標とする處を實現することが困難である。即ち高められたる丈けの生産能力に應じて生産額を増大する場合に於て、合理化の效果は完全となるものである。從つて是等増大せられたる生産物の市場を必然的に考究しなければならない。外國に於ても戰後國內産業の合理化を圖ると共に或は關稅障壁を高くし乃至は國産愛用の宣傳を旺にして國內市場の確保に努め、更に外國市場の獲得に汲々たることは極めて顯著なる事實であつて、國際市場に於ける世界の產業戰は日に熾烈の度を加へて居るのである。

我國に於ても、大正十五年以來政府に於ては國產振興委員會を設置し國産品の使用獎勵に關する方策を講究せしめ或は會計法の特例に關する法律を新に制定して官廳に內地品優先購入の自由を賦與し、最近に於ては公私經濟緊縮委員會の設置と共に更に國產品愛用に關する宣傳に努め相當其效果も見るべきものある樣に認めらるゝが、まだ〳〵日用品の如きもので現に國產品で立派に役立つ妥當なものが出來て居るに拘はらず年々相當額の輸入を見つゝあるのであつて、此の方面にも將來一層の努力を要すること、思はる。

更に海外に於ける市場の開拓についても固より色々の手段があらうと思はれる。海外に於ける貿易並に經濟事情の調査通報に關する制度の改善、海外に於ける日本商品陳列館の增設、旅商の派遣、萬國博覽會への參加等何れも相當の效果を齎らすべきものであらうが、先般國際貸借審議會にて決定せられたる輸出補償制度の創設の如きは就中最も效果大なるもの、一つでなからうかと考へられるのである。

プロレタリア犯罪觀念の提唱

大村哲三

一、刑法に於ける帝國主義の現段階＝改良主義者の反動化とマルクス主義的法學理論の擡頭
二、犯罪觀念の階級性の理論的究明
三、プロレタリアの犯罪倫理

一

社會科學の中、その死滅の瞬間まで支配階級の堅壘を保守する如くに思はれた我國法學の領域に於ても、近年漸くプロレタリア階級的、否、マルクス主義的法學理論が擡頭し始めた。

從來、進歩的であると自負妄想してゐた自由法學者、殊に刑法理論に於ける主觀主義者は、今日に於て決定的にその僞瞞的反動性を白日の下に曝すことになつた。今や、かゝる僞瞞的御用學者を包含する全ブルジョア法學に對するプロレタリア法學の鬪爭は特別なる社會的意義を有つ。

それは何故に然るか、又、何故に然らざるを得ないか。此處に、我々は世界資本主義發展過程に於ける日本の現段階を一應規定する（それは絶對必要だ）に先だつて、刑罰の領域に於ける世界史的意義ある二、三の（相互に關聯ある）出來事を列擧する事を便宜と考へる。

一九二六年十一月二十五日　ファシスト獨裁のイタリアに於ては政治犯に對する彈壓法が出た。同法は二個の重要な法律的效果――政治犯に對する刑罰の加重と死刑制度の復活――を含むものである。

ベッカリアの祖國イタリアは元來、諸國に先んじて死刑を廢止した國であつた。一八九九年に制定された現行イタリア刑法典には死刑は存在してゐなかつた。然るに本法は特殊の政治犯

に對して死刑を復活してゐる。即ち

『國王又は攝政の生命身體又は自由に對する侵害』(皇后、皇太后、皇太子又は首相(註)に對する直接的侵害行爲』(第一條)、

内亂罪及び外患罪(第二條)、

『前二條に規定する罪を犯す目的を以て二人以上の者が結合したときは、結合したゞけで、五年以上十五年以下の懲役に處す。首領率先者、組織者は十五年以上三十年以下の懲役に處す』(第三條第一項)

『公然の方法、若くは印刷物に依り、第一條、第二條に規定せられた罪の一を行ふことを挑發し又は辯護した者は五年以上十五年以下の懲役に處す』第三條第二項)。

『官憲の命令により解散を命ぜられた團體、結社、又は黨派の再組織者』は主刑として三年以上十年以下の懲役、附加刑として剝奪公權(第四條第一項)。

『右の團體、結社、又は黨派への加入者』『右の團體結社又は黨派の理論、綱領又は行動方法の宣傳者』は二年以上五年以下の懲役(第四條第二、三項)。

『國の内情に關し、虛僞的、誇張的若くは暗示的風評又は情報を國外に流布し若くは通報し、又國外に對する國の信用若くは權威を害する方法を採つた』イタリア人は五年以上十五年以下の懲役(主刑)及び公權剝奪(附加刑)。

(註) 首相即ちムッソリーニだ。ムッソリーニに對する狙擊事件の頻發が××的な本法發布の直接の動機となつたことは確かである。

注意しなければならぬのは、右の犯罪の認定が、特別な構成をもつた裁判所によつて爲されることだ。即ち、それは將官を裁判長とし、五名の實質的ファッシスト士官を陪席判事とする。加之、その判決に對しては、控訴は許されず上告の途があるのみだ(第七條)。

一九二八年 日本に於て田中反動内閣の下に治安維持法改正の緊急勅令が出た。それは『國體の變革』行爲を罰する所(ところ)でなく、それを目的とする結社行爲を、結社行爲のみの故を以て、死刑に處する法律であつた。個々の私有財產の盜竊を罰する所でなく『私有財產制度』の制度的否認を目的とする結社行爲そのものを十年以下の懲役又は禁錮に處するものであつた。個々の條文は、餘りにもなまなましくその適用として眼前に見せつけられてゐるから、此處に擧げる必要もあるまい。既に此の法律にひつかけられた××黨の前衛は一千名に及んでゐることを銘記せよ。

一九二九年十二月 と云へば今だ。ドイツに於て、內務大臣ゼフェリングの共產黨撲滅法令の確定草案が發表されて、帝國參事院に附議せられつゝある。これは由ゝしき世界的事實であるが未だ日本に知られてゐないと思はれるから一應說明をする。

ドイツ共產黨機關紙『赤旗(ローテファーネ)』(一九二九年十一月二十九日)は一の驚くべき報導を爲してゐる。それによれば、共和國內閣の閣

議決定を經た共和國國防法（Republikschutzgesetz）の假面の下に獨逸共産黨鎭壓法の確定草案が公表されるに到つたのだ。

その第三條は『立憲共和國（若くは州）國家の形態を顚覆することを目的とする秘密的若くは反國家的同盟への加入者、支持者、等々』に對して禁錮刑を科す。此の規定は、ドイツ共産黨、及び××的勞働者の組織の禁壓を合法化せんとするものである。

第五條は立憲共和國の國家形態に對する侮辱、共和國大統領、共和國及び州の國旗の侮辱、共和國の共和制的國家形態若くはその存續に對して謀反罪の行はれた際これを賞讃し若くは明白に肯定する者を三月以上の禁錮及び額の無制限なる罰金に處する。

これらの規定は一切の××的アジを不法ならしめんとするものである。

第八條は、集會に於て右記の中の特定の行爲が發生し又は看過される場合、警察は當該集會を解散せしむる機能を有することを規定する。

第十一條は、解散された結社を支持し、若くはその徽章を公然帶用した者を三月以上の禁錮に處する規定であつて、既に禁止された赤色戰士同盟（R.F.B）を當面の目的物としてゐるものである。

更に驚くべきことがある。

出版物若くは新聞紙が發賣禁止になつた場合、その代りのものとして讀者に出版物若くは定期刊行物を提供することは、それらの出版物が夫自體として禁止されてゐるものでなくても許されない。

其後、去る十一月二十九日及び十二月四日の『赤旗（ローテ・ファーネ）』によれば社會民主主義者卽ち社會ファッシスト・ゼフェリングの此の鎭壓法案は、帝國參事院に付議されるに到つて、更に禁壓の度合が加重される事になつたので、ドイツ共産黨は大々的に反對運動を開始してゐることが報導されてゐる。

（註）此の草案に就ては別の機會にまとめて紹介せねばならぬ。

以上の如き二、三の立法事實は何を意味するか。それは、イタリア、日本、獨逸、などの夫々に特有なる〃相互に關聯なき〃現象ではない。それは實に、世界戰爭後發展せる世界資本主義の高度の一發展段階の夫々の國に於ける政治的現象形態として、從つて、相互に密接な牽連あるものとして、把握せらるべきものである。

元より、私は、イタリアの死刑復活法（一九二六年）日本の治安維持法改惡、（一九二八年）、ドイツの共産黨撲滅案（一九二九年）が、全く同一なる社會的關係の反映であると主張するものではない。

夫々の國に於ける資本主義には特異性もあり、又、その發展の速度にも多少の遲速がある。加之、經濟關係と上層建築たる法律の唯物史觀的關係は、年次的正確さを以て行はれるものとは限らない。

それにも拘らず私は始めに擧げた三個の法律的出來事が、同

一の世界史的根據に立つ所の共通性あるものであることを敢て强調する。その共通性とは何か？　一切のブルジョア國家による××主義者の徹底的鎭壓の傾向である。我々は、世界資本主義發展の現段階の中に、かゝる傾向の奥深き根據を見出すことが出來る。

帝國主義的世界大戰の後の世界經濟の發展は、生産、貿易、爲替等々の方面より見た場合、相つぐ三段階に區分され得ることは既にブハリン、ヴァルガを始めラピンスキー、ウルム、其他の國際經濟學者の明かにし、又多少の批判の下に諸次のコミンタン世界大會の確認する所であつた。

第一期（――一九二三年）。世界資本主義の直接的××的危機の段階。

第二期（一九二三――一九二七年）。世界經濟の一時的回復（又は安定化）の段階。

第三期　取引所投機の時代。

而して、日本も亦、後れ馳せながらも、此の段階に上りつゝあることは、既に經濟學者によつて明にされた所である。

ゾンバルト張りの小島精一氏さへ我國産業組織の近景的展望を産業全統制の中樞機構たる大金融業を始め、鐵鋼、炭鑛、石油、セメント等の大重工業、大電力業機械及び造船業諸化學工業製紙業に就てその組織の内的矛盾の指摘に於て、次の如くに規定してゐられる（註）。

(1) 各部門的獨占體は尖鋭化され、その闘爭手段は暴力化される。

(2) 價格は法外に釣上げられ、消費大衆の憤懣が强化される。

それにつれて、今、展望の視野の背面に潜んでゐる次の如き現象が漸次鮮明な相貌を表はしてくるであらう。

(1) 無産階級の巨大なる陣營と反資本家的旗幟。

(2) これと對應して全資本家的總本部への結成。之による各産業部門の内的對立の調停。融和。積極的には全産業的統制運動の一層高級化への援助。

(3) 更に國際資本主義化の强き促進。政權の直接把握、政治機關との緊密な連係、政策の決定への强度的指導等……。

（註）小島精一氏著『日本金融資本論』同氏『工業の政策』。

戰後世界資本主義の第三期たる現段階は、資本主義の相對的均衡の裡に胚胎せる一切の矛盾の急速に成熟し、帝國主義の國際的並に國内的諸對立の決定的に×××する時期である。而して、日本帝國も亦此の如き資本主義的世界體制の最も弱き一環を成してゐる（註）。

（註）野呂榮太郎氏『日本資本主義現段階の諸矛盾』（思想九二號）。猶ほ、橘和雄氏『帝國主義の現段階』（新興科學一卷十一號）

獨占が國際的組織を持つに到つたことによつてプロレタリアートに對する政治的經濟的鬪爭に於けるブルジョアジーの國際的共同戰線はその實現の蓋然性を倍加した。先に述べた犯罪鎭

歴の國際化的傾向は全く此處に根據する。全人類に對するブルジョアジーの國際的統制案としてのヤング案は、ブルジョア國際聯盟の刑法統一法典案、國際法協會の犯罪人引渡法統一案、通貨僞造防止國際條約、而して最後に、共產主義排擊のブルジョア國際的共同戰線（國際司法警察網、國際憲兵制度）を要求する。殊に、一九二六年のイギリスのジェネ・スト及び炭坑勞働者ストライキの敗北を一大契機として世界資本主義は安定の絕頂に到達せるが如く見えた。

此の時に當つて、既成法學者が否應なしに大金融ブルジョアジーの御用を直接間接につとめるに到るのは理の見易きところであるが、解し難いのは（否、それは最も解し易い）改良主義者の行衞である。ブルジョアジーの治安の維持のみを唯一の目的とする治安維持法が、而も實質的には最も非合法的な手續きによつて緊急的に改惡され、既に、その××として擧げられたプロレタリア階級の前衞が一千名を突破せんとしてゐる際、日本一の刑法學者（と自稱せる）牧野英一博士は何と云つたか。

『わたくしは、この緊急勅令が來るべき議會に於て承諾を拒絕せらるべきものとは信じない（司法部內でさへ大臣原嘉道を除く全員が改正法通過に反對の氣勢を示したと云ふのに拒絕せられるべく努力する事は全く博士の關心の外にあつた!）……治安維持令に對して承諾の與へられたとき、議會は、適當なる法律の制定せらるべきことを條件としたのであつた。その約の下に制定せられたのが維持法である。來議會に於ては、樞密院の警告以上の徹底した條件を付してこの緊急勅令は承諾を與へらるべきである。さうして、その條件は、また、實に徹底的に實現せらるべきである』（註）。

（註）牧野英一博士『思想國難令評釋』法學志林第三〇卷第八號、第九八頁。

今泉氏が既に痛烈に指摘したように、此處に刑法に於ける改良主義者一派の行衞がある。而して、刑法理論に於ける主觀主義者の此の如き反動化は、帝國主義の現段階にブルジョア的適合を爲すものに外ならぬ。

帝國主義の現段階に到らなければ、改良主義者の反動化は顯在的なものとならなかつたかも知れず、これに對立すべきプロレタリア法學も必要ならしめられなかつたかも知れぬ。だが、彼らがかく反動化した今日に於て、プロレタリアート階級はその獨自の法理論を以てこれに對抗すべき必要に迫られてゐる。

我々は既にプロレタリアート××の國に於て、ストゥーチュカ、クルィレンコ、グルーヴィッチ、ポドヴォロツキーその他錚けるマルキスト的法律理論家を有つてゐる。

而して我國に於ても、既に平野氏『法律に於ける階級鬪爭』に火蓋を切られたプロレタリア法學理論は、奈良氏の諸著、今泉氏の諸論文などによつて見事に展開せしめられ布施氏らによつ

て、實踐的闘爭に近寄らされつゝある。又、近くは、風早氏がベッカリアの『犯罪と刑罰』を評譯の形に於て公けにすることによつて、實は、法の唯物辯證法的把握への礎石をおかんとする意圖を示せるが如きは注目すべき文獻であらう。勿論これらの文獻の中には、未だマルキスト的立場から見て清算さるべき少なからぬ要素を含むものがある。從つて、同一地盤に立つた理論鬪爭がやがては始めらるべきであらう。だが我々は法學界の論戰の現段階がまだその程度にまで達してゐないことを考へねばならぬ。當面の絶對必要前提條件として要請さるべきは、所謂改良主義的新派理論の徹底的克服でなければならぬ。此の意味に於て以上の新興法學者及び正に生れ出でんとする多くの法學の徒が密接なる共同戰線の下に、改良主義者の極めて卑劣なる國家主義的、社會ファシズム化的陣營に對する全面的征服を爲すことは、とくに意義ある出發點であると信ずる。本稿は此の轉形期的出發點に立つて、特に刑法理論の根柢を爲すべき犯罪觀念に就て、その階級性に理論的根據を與へ、進んで、我々の實踐的行動に於て如何に犯罪を取扱ふべきかの問題に觸れんとするものである。

犯罪とは何か。小ブルジョア的觀念論者はこれに對して答へにならぬ答へをなしてゐる。——犯罪の本質は反社會的行爲である、と(註)。

(註) 牧野博士を一例にとらう。『惟うに法律現象として犯罪を觀察するときは、犯罪は刑罰法規の違反なりといふことを以て足るべし。』『然れども、犯罪の內容を……論ずるときは、犯罪は反社會的行爲なりと謂ふことを以て足るべし』。(日本刑法第六五頁)

だが問題は反社會的行爲とは何ぞやにある。社會心理學者は犯罪を社會を心理學的に深化せしめて社會意識として把握し、以て社會意識の固型的になつたものとしての社會規範によつて排斥せらるゝ行爲であるとする。

だが問題はその社會規範とは何ぞやにある。嘗てヘーゲルは絶對的觀念を以て夫自體獨立の根元であるとし、一切の現象は、此の絶對觀念の發展であると見たのであるが、事實は之と正反對に、マルクスの云ふ如く『觀念世界なるものは要するに人間の頭腦の內で變更され飜譯された物質世界に外ならぬのだ。』(資本論第二版への序言)。即ち、我々は、今、社會規範が如何なる物質的條件に倚つてゐるかをとくに究明する必要があるのである。』(マルクス『賃勞働と資本』河上氏譯改版四六—七頁參照)。

一の社會の法律的、道德的意識若くはその固型化せるものと

しての觀念態は他の諸觀念一般と共に、如何に、常に、その社會の經濟的構造に對應し、經濟的構造と云ふ現實的土臺の上に成長しこの土臺が變化すると共に變化し且つ消滅するか、例へば、『資本制社會に於ては、資本家が、事物（生產用具）を統制してゐる。此の條件は、資本主義國家の法律の中に、又、所謂、私有財產權の中にその反映を見る。而して此の權利は、國家權力の全裝置によつて保護されてゐるのである。資本主義社會のこの生產條件は、法律上の用語で云へば、財產關係（Eigentumsverhältnisse）である。』（註）。

（註） Bucharin, Theorie des Historischen Materialismus. S. 177.

かかる諸々の關係は、民法、商法、其他の法律により、規定せられ、刑法により確保されてゐるのである。

かくの如く、法律は、社會の經濟的構造、社會の此の現實的土臺を保證してこそすれ、これと背馳することはあり得ない。觀念に就ても同樣である。資本主義社會に於ては、その資本主義的生產關係を反映する觀念が生れる。その經濟的構造が私有財產制であれば、觀念も、之を確保し、擁護するものであらざるを得ない。之を犯すと云ふ思想はその社會の現實の土臺と相容れない。現在の刑法が如何なる行爲を以て犯罪としてゐるか、如何なる道德的觀念が之を支持してゐるかを見れば、それらが現實の土臺に如何に照應してゐるかは極めて明瞭であらう。

刑法典の第二編、「罪」と云ふ所を見ると、其處には、犯罪を四十ケ章に分類してゐる。而して、刑法上は、更に各々の章に就て數多の犯罪をこしらへてゐるから、犯罪の名目は百數十あると云つて好い。然しそれは凡て現在の日本の土臺、その經濟的構造の反映なのである。勿論、我々は現代の日本が、それ以外の要素の少しもない、完全純粹なる資本主義の土臺に立つてゐると考へるようなナイーヴな誤謬に陷る事は無用である。即ち、我々は常に具體的歷史的な社會に就て語つてゐるのである。この具體的歷史的な社會は、一朝にして發生したものでなくして、絕えざる變動と消滅と再生の過程を經て今日に至つてゐるものである以上、現今の日本の資本主義社會の根抵にも、猶ほ、多くの資本主義前の殼がくつゝいてゐることは何ら不思議ではない。而して『經濟的構造の中に「純粹性」が見出され得ないとすれば、イデオロギーの領域に於ても同樣に或る種の『觀念の混淆』があり得る事は明かである。例へば、父權中心の家族制度のイデオロギーの如き（例へば刑法第一八三條）。同樣な封建的規定は、之一つに止まらぬ。だが私が此處に問題としようとするのはその事ではない。如何に多くの前資本主義的要素が

殘存してゐても、その事は、今日の日本が資本主義制を以てその特徴としてゐる段階にあると云ふ事に變りないと云ふ事である。『資本主義的生産が主位を占めてゐる社會的形態』(Marx. Theorien über den Mehrwert, Stuttgart, 1910, 424)であれば、それは資本主義的社會形態であると、正當に云ひ得る。かくて資本主義的生産關係が主位を占めてゐる現代日本の社會に於ては、それを表象するイデオロギーに於ても、資本主義的要素が主位を占めてゐるのである。

封建制に對する新興資本主義制(自由競爭時代)は私有財産と交換と分業とを以てその根本的特徴として居り、從つて、新興資本主義的法律の特徴も、所有權の不可侵と契約の自由と(身分の不平等を含む)であることは明らかである。然し、身分の不平等は、『封建制的身分』の不平等の廢棄を意味するに外ならず、後に明らかにする如く、資本主義制の發展に伴ひ私有財産を有たない者は、新らしい(資本主義的)身分——無産階級と云ふ身分——を獲得するに到る故に、不平等と云ふ事は、私有財産を有するもの即ち所有權を有するものの間に於ける身分の不平等以外には意味を爲さない。又、契約の自由に就ても全く同樣に論ずる事が出來る。然らばその歸結する所は凡てこれ私有財産の有無(所有權の有無)の一點に過ぎない。私所有權は、斯くの如く資本主義制の唯一の法的特徴と云つて好い。

斯くの如く現代の刑法は如何なる行爲を以て犯罪としてゐるか、如何なる道徳的イデオロギーが之を支持してゐるかを見れば、それらが社會の物質的生産力より社會關係に至る所の社會の現實の土臺に基礎をおき、如何に此の土臺に忠實なるものであるかゞ判るのである。從つて、イデオロギーは、此の如き土臺に依據して居る限り、萬能的主權を以て、自からに反する如き行爲や異質的イデオロギーを排擊するであらうことも理解されるであらう。

かくて、我々は知ることが出來た。反社會性とは社會の物質的生産力に適應すべき生産關係乃至社會關係と云ふ下部構造に違反すると(支配階級によつて)評價されること、而して生産關係とは生産手段の配置の關係であつて、これが社會關係即ち社會階級を決定すること(註一)を。

法とは要するにかゝる階級對立の所與の段階が立ちどまる所の力の均衡の反映に他ならぬ(註二)。從つて、反社會性とは支配階級によりかゝる力の均衡狀態を破壞するものと看做されることを謂ふ。

(註一) 此の點に就て既にマルクスは、明らかにしてゐる。『直接生産者から、支拂はれざる剩餘勞働を搾取する如き特殊的經濟形態は

支配者被支配者と云ふ關係を決定して、生産そのものより直接に成長せしめ、從つて又、逆に決定的に生産に反動せしめるものである。生産自體の條件から、生長する所の經濟團體の全形成は正しく此處に見出されるのである。加之此の事は其の經濟團體の特殊なる政治的形態、簡單に云へば現在の國家の特殊形態の内奥の祕密、隱されたる基礎を暴露するのは、常に正しく、生産條件の所有者と直接生産者との直接關係に外ならない。——而して此の關係たるや、その今日の形態は云ふまでもなく、勞働の態樣の、從つて又、その社會的生産力の特定の發展段階に適應してゐるのである。』と。(Marx, Das Kapital. Buch III Abteilung II Hamburg 1922, S. 324—325.)

(註二) クルィレンコ『ソヴィエット法並びに國家の哲學的基礎』(大竹氏譯第一七頁)。

『法とは階級對立の所與の段階が立ちとまる所の力の均衡の反映に他ならぬ』と云ふクルィレンコの根本命題は、更に、レーニンの所論によつて補はれなければならぬ。

レーニンは、小ブルジョア的觀念論者の陷る惡意的若くは善意的誤謬を最も痛烈に指摘してゐる。卽ちブルジョア的、特にプチブルジョア的觀念論者は、××が階級對立と階級鬪爭の存する所にのみ存することを、歷史的事實の立證により止むなく承認せざるを得なくなつたのであるが、此處に巧みにマルクスを修正して國家を階級融和の機關と看做さうとした。だが、レーニンは主張する。『マルクスに從へば階級の融和などが出來る位なら、國家は形成されも存續されもしないのだ』『マルクスによれば××は階級支配の一機關であり、一階級の他階級に依る抑壓の機關であり、而も抑壓を確保し、之を法律に迄高め、以て階級衝突を鎭壓する所の秩序の所在なのである。プチ・ブルジョア的政治家の見解によれば、此の所謂秩序こそ正に階級の融和であつて、一階級の他の階級に依る抑壓ではない』(Staat u. Revolution)。

資本主義社會に於ては、先に述べた如く私有財產制度の確保が支配階級をして支配階級たらしむる所以である。そこに、私有財產に對する一切の具體的侵害はあらゆる汚名を冠せる犯罪を構成し、又、私有財產制度自體に對する批判の爲の結社は治安維持法違反として犯罪視される根據がある。

だが此處に最も注意を要することがある。それは、支配階級は自己の保守を侵害する行動を犯罪視するにあたつて決して支配階級的評價たることを表明せず、必らず國家機關を通ずることによつて之に普遍妥當性を與へんとすることである(註)。

(註)『相抗爭するもろもろの經濟的利害を有する諸階級が、自らと社會とを無益な鬪爭の中に滅亡させない爲に、軋轢を防止し「秩序」の埒内に抑制すべき、一個の見かけ上社會に超越して立つところの權力が必要となるに到つた。そして此の社會から生れ出て、しかも自らを社會に超越せしめておき、自らを社會に對していよいよ

益々疎外せしめてゆくところの權力が、國家である。』(エンゲルス著『家族、私有財産及び國家の起源』参照・西譯・三〇九頁)

これは、多くの法曹派法學者をして犯罪觀念を以て反社會性と云ふ一般化的評價であると看做すに到らしめた例ではある。だが今日凡ての新興法學の徒は斷じてかゝる低腦に打負かされはしない、我々は、如何なる場合に於ても一切の階級社會に通じ一切の犯罪觀念が階級性を本とすることを、判然と知つたのである。而して、此の事は次に述ぶべき社會の變革期(金融資本時代)に到つては、如何なる通俗者の眼にもあらはなる程に激化せしめられることを明らかにせねばならぬ。

戰後世界資本主義の第三期たる現段階は、資本主義の相對的安定の裡に胚胎せる一切の矛盾の急激なる成熟、國際的ブルジョアジイと國際的プロレタリアートとの對立の未曾有の激化を示してゐる。

此の矛盾の打破の役目を擔當するものは即ち、無產階級であり、而して、此の矛盾打破の表象は、無產階級の政治的進出である。而して無產階級をして有產支配階級に對する單なる經濟的對立關係より、政治的對立關係に轉ぜしめる、その同じ原因が――生産力と生産關係との矛盾が――無產階級に獨自なるイデオロギーを確立せしめるのである。此の――力の均衡の破れる――段階になるともはや支配階級のイデオロギーのみかけ上の一般的妥當性さへ破壊される。

だが此處に最も警戒すべきは、戰鬪的プロレタリアの觀念と改良主義者のそれとの混同である。改良主義者は、契約自由の制限、無過失責任、所有權の社會的機能などの新觀念を提出することによつて、まことしやかに、現代を以て法の社會化時代なりと規定する。何たる白々しい低腦! レーニンは、自由競爭時代と金融資本の時代との相對的差別を認めつゝも、兩者の本質的同一性を強調し、私有財產制度の××なき獨占は、矛盾の激化に過ぎぬことを教へた(帝國主義論)が、法律に於ても正しく同樣だ。現存秩序に於て、契約自由、私所有權絶對性は停止されねばかりでなく、部分的社會化との並存により、却つて救ふべからざる混亂を導いてゐる。加之、改良主義者の意圖が法の社會化のスローガンによつて現存秩序の自然發生的進化に期待をつながせようとするに於ては、斷じて許されない。これを要するに、支配階級のイデオロギーの見かけ上の一般性を破壞し、眞に新たなるイデオロギーを打建てるものは改良主義的社會化の觀念ではなくして、唯一に、プロレタリアートの實踐鬪爭に外ならぬ。實に、此の新興プロレタリアートのイデオロギーは無產階級社會が從來「社會性」の名を冠し來たれる資本家

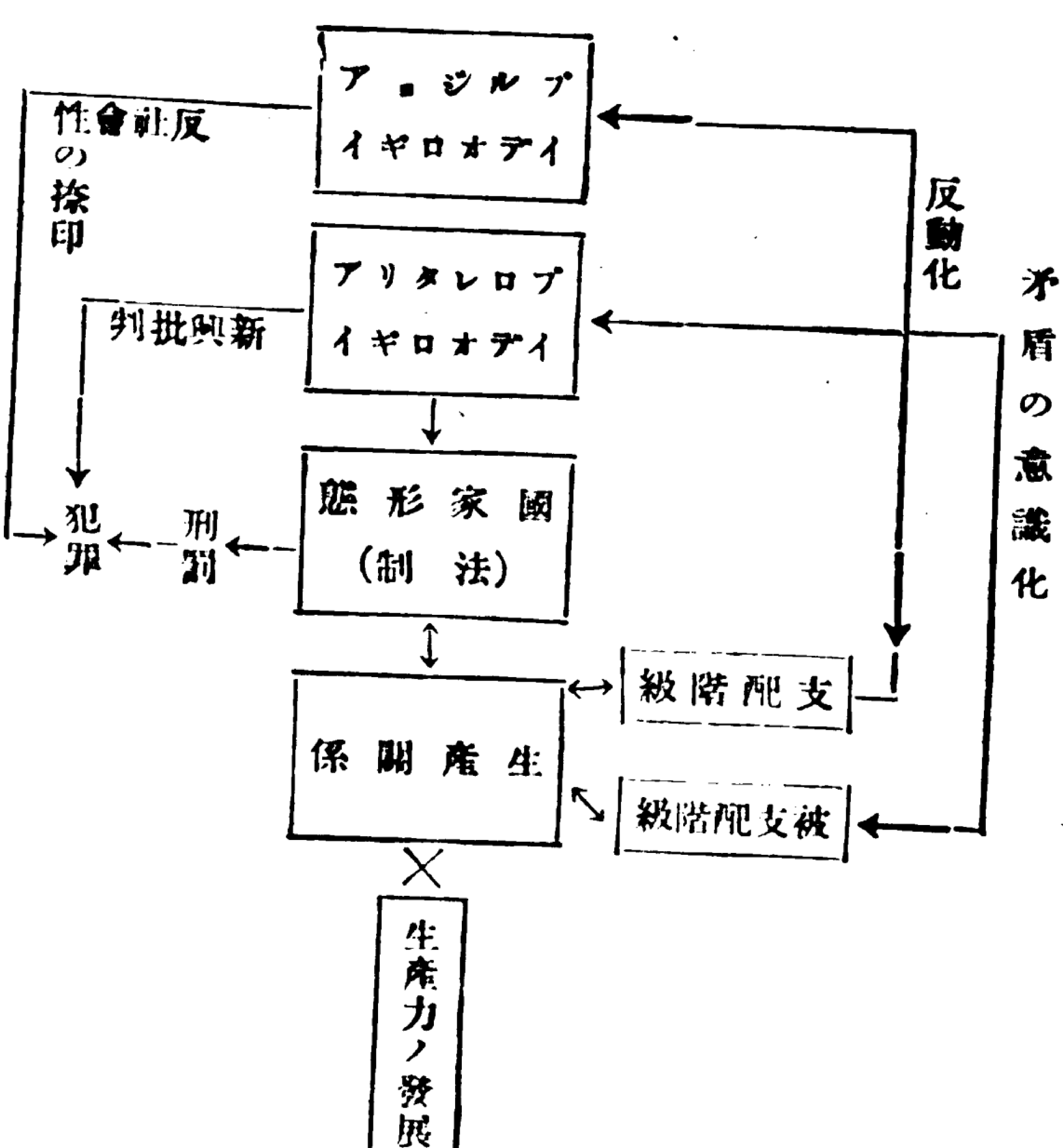
階級的イデオロギーに對して敢然抗議を申込むその積極的作爲の存在を意味するに外ならない。然るに、資本家的支配階級は、これ亦、自己階級に對する對抗的行動を、對抗的イデオロギーを、傍觀してゐるものではない。何故なれば、現代に於て、資本家的支配階級は、生産手段の獨占を以て成立してゐるのであり、その結果として勞働者階級の剩餘勞働を搾取する條件も備はるのであるから、此の獨占階級がその優越的現狀を維持し固守しやうとする事は、事の當然である。

資本家階級的イデオロギーを批判する一切の新興イデオロギーの發生が、夫自體資本家階級に、犯罪視されるのはその理由に基く。

否、此の變革期に於てはプロレタリア階級の存在自體が、ブルジョアジーにとつては一の恐るべき犯罪態なのである。其のする事、なす事、思ふ事、凡てこれ、解し難く、不都合極まるものである。支配階級社會の、心理的及び觀念的不安は、彼らを驅つて、これらの新イデオロギーに對する斷乎たる抑壓に出でしめるのが當然の成行である。

無産階級社會の行動に對するかくの如き反動的イデオロギーに係はらしめられることによつて一の事實が犯罪と評價される時、此のイデオロギーを支持するものが依然支配階級である限り(國家權力を把握する限り)此の事實は、犯罪事實となる。支配階級はかくの如き判斷に一般性を無理じいする。而してそれは支配階級が支配階級である間は有效である。かくの如き犯罪的評價が被支配階級の——漸次増大し來る——イデオロギーにとつては、既に毫も妥當性を持たなくなつてゐるに拘らず。

(資本家的生産社會に於ける犯罪と刑罰)



（官憲は、官憲である限りは不法檢束、不法拘留、××、××の合法性を獲得するのだ!）

社會の××過程に於ては犯罪認定の標準たる價値は顚倒する。今まで××であつたこと、否、××であるとして通つてきたことが、今や××性なしと考へられるに至る。此の評價の顚倒を效力あらしめるのは唯、××による××あるのみ。此處にレーニンの「××と××」が百パーセントの×××を以てあらはれる根據がある。

三

犯罪觀念は徹底的に階級的なものでしかあり得ないこと、否、社會の××期に於ては犯罪的評價は顚倒を表し、從來××とされた事がもはや××とされなくなり、これに反して、從來××とされなかつた事が××となるものであることをはつきりと認識した我々は、今や現段階に於ける「犯罪倫理」と云ふ最もデリケートな問題に當面せざるを得ない。

私は先づ最初に、犯罪の社會的意義に關する改良主義的見解を徹底的に批判し、次でプロレタリアの犯罪倫理の史的發展を敍し、最後に×××者の當面の犯罪倫理に到達するであらう。

犯罪社會學の創始者であり、世界最大の社會民主主義的刑法學者である伊太利のエンリコ・フェリ教授は犯罪を隔世遺傳的犯罪と進化的犯罪とに分けてゐる。彼は、隔世遺傳的犯罪を以て「個有の所謂筋肉的、隔世遺傳的形態の下に、又は、詐術的形態、進化によつて近代的となり緩和された形態の下に、表示された普通犯罪」であるとし、進化的犯罪を以て「その形態は、前二者のいづれにしろ、その動機、結果は、政治＝社會的生活の將來の段階を急がせる傾向あるもの」としてゐる。即ち、兩者を本質的に分つものは、暴力又は詐術と云ふような犯罪の態樣の差異でなくして、行爲の主體が、依つて以て行爲を決定する動機の如何、即ち、利己的、反社會的動機に基くか又は、他愛的社會的動機に基くかに依る。その結果として、隔世遺傳的犯罪に對する防衛は普遍的利益であり、これに反して進化的犯罪に對する防衛は少數支配階級の利益に制限される」と（註）。

（註）Ferri, La sociologie criminelle, Paris 1914, pp. 370—2.

社會黨フェリ氏の犯罪の階級性の抹殺を見よ！彼は「社會的」と云ふ漠然たる概念の下に、階級社會を糊塗してゐる。加之、彼の所謂普遍的利益とは、如何なるものか、彼は『隔世遺傳的犯罪』を以て『人類生存の永久的條件を侵害するもの』としてゐるが、かくの如き普遍的又は永久的生存條件とは何を意味するか、フェリの所謂隔世遺傳的犯罪は、道義的意味に於ける利己

的感情を動機とするものであつて、それは直ちに、普遍的に反人類的反社會的行爲になるとは云へない。フェリの考へ方には、觀念的要素が多分に殘つてゐる。第三に、フェリは『兩者を本質的に分つもの』は犯人の主觀的動機そのものであるとするが、これは科學的標準にならない。

元より、進化的犯罪と、非進化的犯罪とはこれを罪名によつて區別する事は出來ない、例へば、窃盗や殺人や、横領などは、非進化的犯罪で、朝憲紊亂罪や、新聞紙法違反が進化的犯罪だと云ふ樣な議論は、科學的議論としてはなり立たぬ。窃盗も進化的犯罪たり得る。朝憲紊亂も或場合には單なる時代錯誤的退化的犯罪たり得る。又、同一犯罪にあつても、兩者を認むる場合があり得る。

だがその事はフェリの如く犯人の主觀的動機を標準とすることを正當化するものではない。例へば、此處に一の米騷動があるとする。その動機は利己的であるかも知れぬ。然し米騷動と云ふ一の騷擾罪を機緣として政府の米穀强制管理の施設が促進せしめられたとする。又、放火の如きは、普遍的に退化的犯罪と單純に考へられそうであるが、これ亦、其の事情によつては決して然らず、學校の試驗の苦しさを逃れんが爲の放火の如く、それにより若し、生徒を苦しめ國民の頭を愚にしてしまひつゝある試驗制度と云ふものに大改革を加へる事になつたとしたならば、この放火罪も、客觀的には進化的意義があつたと云はれ得るかも知れぬではないか(――元より、私はかような事を問題にしてゐるのではないが)。

かく考へると、フェリの如く單純に犯人の動機の利己的云々では到底區別の標準が立たない事明らかである。

私は、フェリの社會民主主義的犯罪觀念を批判することによつて、結局、始めからの私の研究方法に徹底する外はない。即ち、犯罪とは、支配階級により社會關係の均衡狀態を破壞するものと看做され、國家機關を通じて刑罰を科せらるゝ行爲である。從つて、その根柢には、經濟的關係に於ける矛盾の發展があるのであり、犯罪はそれが如何なる態樣動機を各個的に有しようとも、この經濟組織的矛盾を表象し、この經濟組織的矛盾の解決への契機をなすと云ふ意味に於て、凡てこれ、進化的意義を有すると云ふ事も出來ぬことはない。然しかくては進化的と云ふ事は、犯罪に對する無用なる形容詞に過ぎなくなる。私は、かくの如き役に立たない使用法に於ては、進化的犯罪と云ふ觀念を使用するものでない。

一體、一の犯罪又は全體としての犯罪態と云ふものを進化的とか退化的とか云ふ場合に、我々は何らかの意味に於て、價値

判斷をしてゐるのである。これが、進んでゐるとか、後れてゐるとか、云ふ事は、斯く云ふ人に、一定の價値的標準が、有意識的になり、無意識的になり存在してゐるのであつて、此の標準に當てはまるものは、社會の進化の爲になる。これに當てはまらないものは社會の進化の助けにならないと云ふ事を意味するものである。然らば、此の標準は何に求むべきか？　階級對立の社會、從つて階級的イデオロギー對立の社會、卽ち國家にあつては、その價値判斷は、階級的でしかあり得ない。從つて、犯罪を進化的とか退化的とか云ふ價値判斷的要素を含んだ標準によつてなされた分類は、階級的でしかあり得ない。而も現代に於ては終局に於てあらゆる價値判斷は資本家階級的價値判斷と無產者階級的價値判斷の二つに還元することが出來る。何れの價値判斷が正しいか？　これは犯罪倫理の決定上絕對必要な事柄である。唯物辯證法的考察は、プロレタリア階級的評價の×なることを百パーセントの確信を以て斷定せしむる。これ以上問題を追求すれば、問題は全く純理論の領域から、實踐的領域に移つて行くのであつて、如何なる行爲を排斥して犯罪となし、如何なる行爲を進化的として採用すべきかと云ふ事は、その夫々の階級社會の一定の目的に照し戰略に從つて決定さるべき事柄に屬する。一例を擧げるならば、諸君は、無產者階級が、私有財產を有たず、これに對して未練も持たない結果、私有財產否定のイデオロギーが發生したと云ふ事からして、單純にプロレタリアートは他人の財物を强窃取して差支なしと考へられてゐるものと看るならば、それほど早計なことはない。

勞働者の資本に對する反抗形態に就て、リヤザノフは次の如く書いてゐる。それは勞働者の犯罪倫理の發展史の見地より極めて興味ある內容であるから、私は、此處に、其の全文を採錄しよう。

『資本主義社會は勞働者を投げ落して商品にしてしまつた。此の狀態に對する反抗のみがすなはち資本主義及びその體現者たる資本家に對する鬪爭、ブルジョアジーに對する反抗と憎惡のみが勞働者をして己れの人間的價値を保存せしめて來たのである。エンゲルスは次の樣に云つてゐる』此の反抗の最初の、最も粗野にして最も效果少なき形態は犯罪である。勞働者は缺乏と貧窮のうちに生活し、他の人間が彼よりもよく生活し得られるのを見る。勞働者は知る。何故社會のため、富裕の怠け者よりもより多くあらゆる事をやつてゐる此の勞働者がこんな嫌ふべき狀態に生活せねばならぬのか、を。貧窮が之に加はると勞働者は財產に對する生れつきの尊敬の念を失つて、盜竊する事を始める。かくて、工業の發達と共に、犯罪の數も增加するに至る。年々、つくりあげられる檢擧者の數は加工されるべき綿の梱數とある種の關係を有する。併し勞働者はやがて、すぐと、盜竊が無駄なことを知る。犯罪者は唯單に個々人として現在社會制度に對して盜竊によつて反抗し得るにすぎない。社會の全權力

は各人をば各個に攻めたてる。そしてその極度に優越せる者によつてその個人をおしつぶして了ふ。加ふるに盗略といふ事は、最も非文明的な、最も無自覺的な反抗形態であり、且、それ自身が、たとえそれが勞働者達によつて是認せらるゝにもせよ、勞働者達の社會的意志の一般的表現とはなり得ないのである。殆ど同樣な事を次の如き同じ種類の他の反抗形態についても云ひ得られるのである。それは資本主義發達の初期に見られるところの工場主や監督などの××である』（大田黒・早川兩氏譯リヤザノフ編××××に於けるリヤザノフ評註二三）。

『私有財産を擁護する諸法律はブルジョア秩序より成長して來る。資本主義の發達と共に次の事がより益々明らかになつて來る。卽ちこれらの諸法律は己れの勞働によつてかせぎ出された財産をさへ擁護する事は出來ないといふ事。勞働者にとつては之等の法律は唯私有財産に對するあれこれの犯罪を懲罰する法律として存在してゐるにすぎない。唯、執拗な、莫大な犧牲を要する鬪爭によつてのみプロレタリアートは彼の「財産」を、彼の勞働力を資本家側の略奪的な搾取から保護する諸法律を獲得し得るにすぎない。如何にしてブルジョア法律が勞働者にとつてブルジョア的偶執物たるに至るか、如何に勞働者がブルジョア法律に對し、尊敬の念を失つて行くか、についてはエンゲルスが英國の勞働者を例に引いて最も美事に示し出してゐる。

然り、ブルジョア自身にとつてこそ法は神聖である。何故ならばそれは手盛りの自製品であり、自己の贊意を以て自身の保護、利益のために制定されたものであるから。彼ブルジョアは、從令個々の法律が自分に特定の不利益を釀しても尙且つ立法の全體制は自己の利益を擁護し、而して就中、法の神聖、換言すれば社會の一部分の能動的意志表示及び社會の他の部分の受動的意志表示に依つて一旦確立された社會秩序の不可侵性は、彼の社會上の地位の最强なる支柱である事を熟知してゐる。英國ブルジョアの面目は、彼の法の中に恰も彼の神の中に於けるが如くに復寫されて居るが故にそうだ、その故に彼は法律を神聖視するのだ。其の故に彼にとつては巡査の有つ棒は眞實の所彼自身の棒（トランチャン）であるが――不可思議な鎭靜力を有してゐるのだ。然るに勞働者にとつては全く反對である。勞働者は法は自分にとつてはブルジョアが勞働者用に調製した處の笞である事を良く知り拔いてもゐるし、又繰返し、反復して經驗もしてゐる。それで勞働者は萬止むを得ざる場合の外は決して法に訴へない。

プロレタリアにとつて泥棒をしないために如何な理由があるだらうか。『財産は神聖なり。』の語は洵に、如何にも美しい。又ブルジョア階級の耳には如何にも快適に響くのである。乍然、何等の財産をも所有せざるものにとつては財産の神聖も亦、それ自身存在せざるものである。金錢は現世に於ける萬能の神である。ブルジョア階級はプロレタリアより彼の金錢を奪掠して了ふ。そして、是に依つてプロレタリアを實際の無神論者に造りあげる。それ故にプロレタリアが自己の無神論を確認し、地上の神の神聖と權力とを最早尊敬しないのは何等異とするに足らぬ事なのである。若しもプロレタリアの貧困が不可缺の生活必需品の眞實の缺乏にまで昂進し、窮迫、飢饉に迄强められて來るならば、社會秩序への尊敬は更に益々地を拂つて來る。』（同上評註の二九）。

私有財産に對する反抗形態は、個人的より集合的へと進む。

『聚合的な反抗の最初の形態は、工場の一揆であつた。それは財產、特に機械の破毀をともなつた。機械に對する勞働者のかゝる鬪爭は機械の發明と共に始まる。併しそれが大衆的な鬪爭となつたのは、十九世紀の始めからに過ぎない。ラツダイト運動なる名稱の下に機械の組織的な破壞が一八一一年に、ノーチンガム、ヨークシエーアー及びランカツシヤーに起つた。ノーチンガムではそれは新しい靴下織機に對して向けられた。神話的な人物である『ラツドの首領』なる名前で工場主に對する暴力行爲がおこなはれ、工場財產が破壞され、高價な機械がこなごなに粉砕された『ラツダイト』に對しては警察も無力であつた。政府は軍隊を動かした。而して勞働者を徹底的に機械に向つて馴化するためには、機械の破壞に對しては死刑を以て脅威する法律が制定された。此の法律に對し、有名な英國の詩人バイロンは、貴族院にて反對した。その演說はノーチンガムの勞働者の窮乏のはつきりとした光景を描き出す。運動は併し、一八一二年にも盛んであつた。一八一三年の一月には三人のラクダイトが絞罪に處せられた。併し一週間の後には織物機械の發明者たるカートライトの工場に向つて攻擊が行なはれ、そのために十四人の人人が絞罪に處せられた。煽動者を使つて政府は組織の糸を見付け出す事に、成功した。產業の復活、勞働者に機械の破壞の無意味なる事を說明せるコベクトの煽動、勞働者の間に於ける意識の成長がやがてまもなくラクダイトの運動を終熄に至らしめた。事實併し、此の反抗方法はより自然發生的な形態で其の後も尙用ひられた。特に新に機械が持ち込まれた新しい產業部門に於てはそうであつた。例へば、三十年代の始めに於て農業勞働者はヂヨーク・スピンガー——これはラクドの首領と同じ樣な神話的な人物である。——の名前で組織的に『赤い雄鷄』を放ち、そして自分達の主人の倉庫や乾草を燒いて廻つた。ドイツでは、一八四四年のシレジヤの織物工の此の種の爭亂が殊に強い印象を殘した。これはマルクスの友人なるウキルヘルム・ウオルフによつて書かれ、後にハープトマンの有名な戯曲——『織物工』の主題となつた。我がロシアに於ては、工場財產の破壞をともなつた工場一揆は十九世紀の八十——九十年代に起つた。

「勞働者が機械と機械の資本主義的な適用とを區別し、そしてそれと共に己れの攻擊をば、生產の物的手段よりして彼等を搾取する社會的形態に向ける事を知る樣になるためには一定の時と經驗とを要するのである。」(マルクス資本論)(同上評註二三)

『ブルジョアジーにとつては近代社會の法律を永久の法律的規準として了ふ事は最も重要な事である。之を破れば犯罪となる。これからして法律の立場を固執せんとする傾向が生れ、これからしてブルジョアジーは革命的に物事をやられねばならぬ樣な場合でさへも、法律的繼承物を保存せんとすると云ふ傾向が出て來るのである。

マルクスは、一八四九年二月に、稅金の徵收者に對する武裝反亂を召集したかどで、裁判に附された時、その辯明演說中で、合法制に對する自分の見解を次の樣に述べた。

「然らば諸君、諸君は何を以て法律的立場を守る事となされるか? 法律を守る事であるか? 併し、その法律たるや、過ぎ去れる社會の時代に屬し、旣に沒落せるもしくは今や沒落しつゝある社會の利益の代表者に依つて作られたものであり、從つてそれは現在の一般的要求とは矛盾せる利益を保證するものに過ぎない。社會は併し法律の上に出來上つたものではない。…………

「故に、この法律的立場を守れといふ事は最早、かゝる支配的なも

のでなくなつた私的利益を、依然、支配的なものなりと主張せんとするものであり、新社會の生活關係によつて、物質的諸條件によつて、その交易及び生産によつて否定せられてしまつた法律を、此の社會に押しつけようとするものである。それは立法者をして飽までも私的利益を追ひ得る位置に置かんとし、國權を濫用して無理にも少數者の利益に多數者の利益を従屬せしめんとするものであり、従つてそれは絶えず現在の要求と矛盾し、交易、産業を妨害し、遂に政治××たるに至る社會的危機を造り出すものである。』(同上、評註の四〇)。

合法・非合法の問題はマルクスの言葉によつて既に、その中心點が把握されたであらう(註)。我々が合法の範圍にとゞまる瞬間があるとしても、その意味は飽くまでプロレタリア階級的見地に於てゞなければならぬ。

(註)　猶ほ參照、小泉保太郎氏『合法と×合法の問題』(マルクス主義一九二九年二月)。今泉榮太郎氏『合法非合法の理論的探究』(新興科學卷三號)。

眞に階級的な立場を自覺し、支配階級に對して敢然戰はんが爲には、支配階級の畏に陷つてはならない。各々の勞働者が、各ゝ勝手に資本家のものを××と云ふ事は、階級闘爭と云ふ共同的な闘爭の目的とする所でない。のみならず、階級としてゞなく個人的に物を××で利得すると云ふ事は、勞働者をして、プチ・ブルジョア根性を持たせる結果になる。若し、プロレタリアの連中が片端からてんでに××となつたら階級の團結は失はれ無力となるであらう。だから勞働運動者の指導精神は、私有財産を保護する爲でなくして、階級の内面的統一と團結と犠牲獻身的、建設的精神を支持せんが爲にのみ、××を禁止するのである(註)。故に、又、時と場合によつて、若し階級的命令を帶びて、私有財産××を行ふ場合に於ては、彼らはその同じ行爲でも之を以て正しいと稱するであらう。即ち、凡て、これらの評價の標準は階級的標準であり、政策論としての標準であると考へられねばならぬ。

(註)　Bucharin, Theorie des historischen Materialismus. S. 178.

プロレタリアートが無組織的な個々の××を×すことを愼しむべき理由は他にもある。それは、かゝる××遂行が無效果であるからだ。小泉氏がストライキの戰術の問題に關し、間に合せ的な原始的×合法活動を爲すことは「組織された正規軍に對し有り合せの棍棒を以て立向ふ」(レーニン)に等しく、かゝる半×合性的形態は、プロレタリアの黨の嚴格なる統制の下に服する活動形態にまで揚棄されねばならぬ、と主張してゐるのは正しい(前掲論文)。

プロレタリアの犯罪倫理に就ても同様であつて、現存秩序に對する本質的に效果的なる唯一の××方法は、階級的闘爭の形

態を措いて外にない。故に×××の統制下の階級的闘爭のみはいかなる彈壓を加へられても、（こればかりは）止すわけにはゆかない、目前の利益を犠牲にしても、迫害をうけても止すわけにはゆかない所の理想である。然しながら、現代有產支配階級は、斯くの如き行爲や、タクチィークを是認する筈がなく、機會ある毎に何らかの理由を見出してはこれを犯罪視する事は、既に述べた所によつて明かであらう。かくの如く資本家的支配階級の彈壓政策は、愈ゝ甚しくなつて來てゐるが、凡そ、支配階級が、支配階級である限り、その犯罪とする所は、全體社會の犯罪とされて了ふのである。唯、くり返し述べる如く、階級對立が發展し來つた今日に於て、もはや、かくの如き犯罪的價値判斷はそのまゝでは被支配階級に對して妥當しない。否、被支配階級にとつてはかくの如き犯罪こそ、正しく、社會的發展に於ける××的犯罪であると確信し、これを××ことを或る場合には光榮であるとさへ考へる段階にまで既に到達してゐるからである。

戰旗（十二月號）は『俺達の字引』に於て政治犯人を次の如く定義する。

『壓迫されてゐる階級の者が壓迫してゐる階級の手から政治××を得やうとして運動し、それが××階級のつくつた××にふれると、彼等はこれらの人々をさして政治犯人と呼ぶのである。今度記事解禁になつた共產黨事件の被告は皆政治犯人である。

現在では、政治犯人も、ストライキの犠牲者も、その家族も、皆一樣に解放運動の犠牲者と呼ばれてゐるが、各々はハツキリと區別されて、それ〱の名稱で呼ばれた方がより適當である。

政治犯人と呼んだり、呼ばれたりすることを知らず〱の間に嫌やがる風がないでもないが、我々は××ところか、むしろそれを××××に思ふべきである。我々の政治犯といふものは、普通のスリ、詐僞、盜賊などのやうな破廉恥罪（人間としての道義を破つた罪）と異つて、我々の階級を解放するために自分の一身を犠牲にした人々である。そればかりでなく、我々の階級から見れば、そういふ仕方に獻身することは決して×××××、むしろ×××××である。合法、×合法の問題と同じやうに、××階級が適當な××の網をつくつて、これにかゝつた者を罪人として取扱ふのである。

昔に於ても、こういふやうな犠牲者は數限りない程澤山ある。明治維新の當時、幕府を倒さうとして、幕吏の手にかゝつた者がいかに澤山あるかは、諸君が活動寫眞や、學校の教科書に於てさえ、親しく見聞してゐる所である。自由黨の時代に於てもやはり同樣である。當時これらの人々は國士と稱せられ、又國事犯と呼ばれてゐた。これは政治犯と同じ意味である。要するに、「×××官軍、××××賊」である。我々は早く力を養ひ、×××『××』となる日を期さうではないか。』

（一九二九年十二月號）

日本の所謂無脅威軍縮の實體

野呂榮太郎

一　戰後資本主義の三つの時期と三つの軍縮會議

戰後における第三次の海軍々縮會議が、來る一月二十一日からロンドンに開かれやうとしてゐる。第一次は一九二一年十二月からワシントンに開かれたる、日、英、米、佛、伊、五海軍國間の主力艦協定、第二次は、一九二七年六月よりゼネヴアにおいて行はれたる、日、英、米三國間の補助艦會議にして、前者が曲りなりにも成立したに反して後者は全く失敗に終つた。今度のロンドン會議は、ゼネヴア會議失敗の後を受けて、補助艦の協定を主要議題としてゐるやうであるが、それが、第二次軍縮會議失敗の後始末以上に重要な意義を有してゐることは言ふまでもない。蓋し、ゼネヴア會議の失敗後僅か二ケ年半を經過する間に、世界資本主義の客觀的諸情勢は著しく變化してゐるからである。

世界大戰後の三回に亘る重要帝國主義國間の海軍協定は、夫々戰後資本主義の經過せる三つの發展時期に對應して、特殊の意義を有してゐる。第一次ワシントン軍縮會議は、戰後の世界を、就中ヨーロッパ諸國を強襲した革命的危機が最高潮に達した時期によつて決定されてゐた。一九一七年のロシア革命を發端として相次いで繼起せる直接的な革命的諸事件は、一九二〇年から二一年にかけて全資本主義を席捲せる世界的恐慌においてその頂點に達し、資本主義的社會體制、就中ヨーロッパ資本主義の強烈なる沒落過程を示してゐた。この危機を脱するためには、先づ、絶望的窮乏のドン底にある大衆に、その窮乏緩和の何等かの希望を與へると共に、その注意を外部に轉向せしめねばならなかつた。さし迫る民衆の窮乏を緩和し、破壞されたる資本主義經濟を再建するためには、就中、過ぐる大戰を通して著しく膨脹し、更に戰後引續いて新なる國際的對立の下に大戰の經驗に基いて彌々益々增大しつゝあつた軍事費、殊に海軍々備費の輕減が必要であつた。が併し、沒落に瀕せる資本主義經濟を救濟し、革命化せるプロレタリアートの陣營内に、社會民主々義の失はれたる物質的基礎を恢復するための積極的努力は、不可避的に新なる植民地搾取の強化に、とりわけ

大戰の直接の破壞から免れた太平洋岸の植民地、半植民地及び後進資本主義國の搾取に向けられねばならなかつた。この事は、大戰參加國として、その戰勝の政府的利益が最も有利に獲得したと共に、經濟的には全く中立國としての利益を壟斷し、從つてヨーロッパ資本主義が沒落の淵に沈淪してゐた時に却つて急速なる上向的發展過程を辿りつゝあつた二帝國主義國——日本及びアメリカ合衆國の支那を中心とする異常に激化せる對立を、更に複雜にし、且つ尖鋭にした。今や帝國主義者間の國際的諸對立は、太平洋岸に、就中支那に集中せられた。ワシントン會議が、大洋作戰の主力たる戰鬪艦の協定を主とし、同時に支那問題就中山東問題に關する九國條約及び四國協商の成立に努力せられたのはこの故である。從つて同會議における中心的對立は、日米のそれであつた。而も、當時、英佛を始めとしてヨーロッパの諸國はその資本主義を革命の危機から救つて再建するために、一方、アメリカ資本の積極的援助を必要としたと共に、他方、戰爭の混亂中に日本の掠奪せる東洋市場を奪還しなければならなかつたといふ二つの理由によつて、あらゆる問題は、米國の得意と、日本の失意と、そして英佛の不本意なる米國追隨とによつて解決せられた。

これに反して、一九二七年ゼネヴァにおける第二次軍縮會議は資本主義の一時的、相對的安定の裡に開かれた。一九二三年秋のドイツ・プロレタリアートの敗北を轉機として攻勢に轉じた資本主義は、ヨーロッパ諸國においても、その戰前の生産力水準を恢復した。このヨーロッパ資本主義の「復興」は、就中謂はゆる生産の合理化と共に、植民地、半植民地及び後進資本主義諸國の強烈なる搾取によつて可能にせられた。從つてそれは、一方、これ等被搾取國における反帝國主義的國民革命運動を刺戟し、促進せしめたと共に、他方國際的諸對立を漸く尖鋭化せしめるに至つた。そしてこの對立においては、就中英米のそれが、世界的覇權を爭ふ最大にして、帝國主義者間の最も基本的な對立として漸く前景に押出されて來た。植民地における反帝國主義運動の進展は、帝國主義列強を等しく脅威したとはいへ、それは就中日本帝國主義にとつて最も致命的であつた。一九二五年以降における支那革命の進展は、一九二〇年の恐慌に次いで、二三年の震災、二七年の金融恐慌に見舞はれた日本資本主義の基礎を益々不安定ならしめた。併し乍ら、かゝる間にも、日本帝國主義者が、英米のそれ等と同樣に、ワシントン協定外の補助艦建造に熱中したことは言ふまでもない。ワシントン會議よりゼネヴァ會議に至る間における米國の巡洋艦八萬トン建造計畫(內、六萬トン未起工)に對して、日本は九萬四千トンの巡洋艦(內、一萬トン未起工)と四萬三千トンの驅逐艦と二萬トンの潛水艦との建造計畫を以つて對抗し、主力艦の劣勢を補助艦によつて補はんとした。ワシントン會議において主力艦の對米劣勢を餘儀なくされた英國は、その補助艦における絕對優勢を維持し、擴大せんが爲めに、その資本主義の一時的安定の過程を通して、二十萬トンの巡洋艦、三萬五千トンの驅逐艦、三萬三千トンの潛水艦の建造を計畫した。かゝる國際的情勢の下に、一九二七年六月の第二次海軍々縮會議は、日英米三國間に開かれたのであつた。ワシントン會議においては日米が最

も鋭く對立してゐたが、ゼネヴァ會議においては英米の對立がより前面に現はれて來た。が併し、叙上の情勢の下における諸對立は、未だ會議の決裂が帝國主義戰爭の現實の發端となる程には尖銳化してゐなかつた。英國は尙漸く戰前の生產水準を恢復したに過ぎなかつた。日本は金融恐慌直後の不安定裡にあつた。そして米國は翌二八年の大統領選擧戰を控へて謂はゆる對內政策に忙殺されてゐた。而も、一九二五年以來、世界帝國主義の諸植民地に昂まりつゝあつた反帝國主義的革命事件は、日本の支那における、英國の南支及びエジプトにおける、米國のニカラガにおける、佛國のモロッコにおけるが如く、各帝國主義國を夫々の程度において制肘してゐた。殊に、これ等の反帝國主義運動の中心地支那において、各帝國主義は漸く益々互に鋭く對立しつつあつたにも拘はらず、革命的プロレタリアートの指導下にある支那國民革命の破壞のために暫らく協同しなければならなかつた。すべてかうした事情の下に、第二次軍縮會議は米國によつて召集され、そして協定不成立に終つた。

併し乍ら、第二海軍々縮會議が不成功に終つた一九二七年を轉機として、戰後資本主義は新しき第三の時期を開始するに至つた。大戰によつて破壞されたヨーロッパの資本主義經濟と、そしてまたそれと同時に社會主義的建設の途上にあるサヴエート同盟の經濟とは、單に戰前の水準を恢復したのみならず、これを突破するに至つた。が併し、この生產の戰前の水準突破は、資本主義世界においては、單に技術の急激なる進步によつてのみならず、就中、この技術の進步と並行し、これを追越し、また屢々これから獨立し、却つてこれを阻止してさへ強行されてゐる所の、謂はゆる資本家的合理化によつて可能にせられたのである。そして、既に尖銳化せる生產力の增大と市場の狹隘との間の矛盾の裡に強行せられる資本家的合理化は、一方益々プロレタリアの勞働力搾取を強化し、その多數を失業せしめるのみならず、他方少數の大資本家による多數の中小資本家と小生產者の巨大なる層との收奪を伴ふ所の、トラスト化、カルテル化によつて先行され、且つそれ等を促進せしめることによつて、資本主義の國家資本主義的傾向と國際的性質とを發達せしめつゝある。かくして、帝國主義の國內的及び對外的諸對立は急速に激化つゝしあるのみならず、それ等の全矛盾は急速に國際的規模において擴大再生產せられつゝある。帝國主義國內における被抑壓階級の解放鬪爭は、その植民地における解放運動と密接に結びついて發達しつゝあるのみならず、サヴエート同盟の社會主義的建設と共に、益々強大なる全世界的革命運動として統一され、發展せしめられつゝある。我々は既に、一九二五年以降において、帝國主義に對し又その干涉に對する國民的解放運動が、支那において、モロッコにおいて、エジプトにおいて、ニカラガにおいて、インドネシアにおいて、そしてまた近くは印度において開始されたことを知る。そして、それ等は、假令それ等の個々の一時的退潮にも拘はらず、今や資本主義國內部に昂まりつゝある階級鬪爭の進展と共に、新しき世界的革命の段階に向つて發展してゐる。この新しき段階の進行は、また帝國主義者のサヴエート同盟に對する戰爭準備を急がしてゐる。支那軍

國政府のソヴェート大使館及び領事館等の不法捜査、東支鐵道問題の挑發の如きは、明かに、帝國主義者の對ソヴェート作戰のマヌーヴァーによるものである。そしてまた、旣に世界的規模において尖銳化しつゝある生産力の增大と市場の狹隘及び原料の不足との矛盾は、帝國主義諸國家間の不可兩立的戰爭にまで導かずには措かない。ロンドン軍縮會議は實に叙上の諸情勢の下に召集せられたのである。

二　日本の謂はゆる『無脅威軍縮』と對米七割要求

叙上の情勢の下に將に開始せられんとするロンドン會議において、日本帝國主義は、謂はゆる「積極的縮小と無脅威」を宣傳スローガンとし、大型巡洋艦最大所有國の七割保有をその主要なる鬪爭目標としてゐる。「大型巡洋艦を最も多數有する國の七割、卽ち對米七割保有は「國民の安全感を强固ならしめる上にあくまで必要である。」(英國新聞記者團に對する若槻全權の言明) となす日本帝國主義者は、その主張の貫徹のために、日本の關する限り、軍縮會議は却つて軍擴會議となるとの非難を恐れるが故に、少くとも日本の現有勢力が大巡洋艦の最大多數保有國の七割となるまでその國の軍備の「積極的縮小」を主張する。「積極的縮小と無脅威」なる日本の宣傳スローガンは、七割要求とのかゝる關連において始めて理解し得る所のものである。

七割要求との關連における海軍々備の「積極的縮小と無脅威」は日本のブルジョア政治家によつて次のやうに表明されてゐる。濱口首相は中外商業新報の年頭言において、

「この海軍縮小の問題に關しては我が國としては確固不動の方針を持つてゐる、卽ち第一に日本の海軍は世界の何れの國に對しても決して脅威を加へないと共に世界の何れの國からも決して脅威を受けないといふことが根本方針である、第二に國際平和の精神を貫徹すると共に國民負擔の輕減を圖らんがため、單に軍備を制限するに止まらず、進んで相對的に軍備縮小の實を擧ぐるに在る。この方針は世界列國の齊しく諒とする所であると信ずる」

と述べ、幣原外相もまた全く同樣の趣旨において、

「各國の海軍々備を制限するに止めずしてこれを現實に縮小し、かつ各國相互の關係において防禦には十分であるが侵逼には不十分となるやう海軍力を按配し、以て不戰條約に基く各國の安全感を一層高め、各國民相互間に疑惑を生ずるの余地なからしめて、世界の平和を確保すると同時に各國民の軍事費負擔を出來得る限り輕減せむことを期待して止まない」

と言つてゐる。兩相の言ふ所が符節を合してゐる所を見ると、一應、これを以つて來るべき軍縮會議に臨む日本帝國主義者の「根本方針」と見ることが出來る。そして、この「根本方針」は不用意に聞く者の耳には、殆んど異議を挿む餘地のない程、卽ち「この方針は世界列國の齊しく諒とする所であると信ずる」程正しき響きを與へるであらう。蓋し、それは、それが日本の帝國主義ブルジョアジーの叫びたる限りにおいて、ある種の眞實さを藏してゐるからである。この日本帝國主義者のある意味における眞實の、否、寧ろ切實の叫びを日本國民の名に

おいて、また各國民の名において表明しつゝある謂はゆる「根本方針」が、日本の、從つてまた全世界の勞働者、農民にとつて何を意味するかを見究はめねばならぬ。

彼等は、先づ、「各國相互の關係において防禦には十分であるが侵寇には不十分となるやう海軍力を按配」することが、軍縮會議における日本の「根本方針」であるといふ。たしかに、これは、日本帝國主義ブルジョアジーの眞實の叫びである。といつて、日本帝國主義者の「平和好愛」を讃美するには、まだ早い。何故なら、彼等が、こゝに、「各國相互の關係において」といふ時の「各國」とは、高々五指に滿たざる帝國主義諸國を、就中、米、英二國を、否恐らくアメリカ一國を指してゐるに過ぎぬからである。從つて、彼等の言ふ「防禦には十分であるが侵寇には不十分となるやう海軍力を按配」するといふことは、日本が支那を、フィリッピンを、濠洲を、印度を「××」することを「××」にするものではなくして、却つてこれを可能にし、容易にし、自由にするものである。蓋し、日本の謂はゆる「根本方針」にして××せられるならば、××は全東洋諸國を××の植民地と化することにおいて「世界の何れの國からも決して脅威を受けない」であらうからである。日本帝國主義者の謂はゆる「無脅威軍縮」とは、實は滿蒙は勿論、支那及び南洋諸島を××の完全なる植民地にすることの、即ち極東及び南洋における日本「モンロー主義」の××を×するための、「×××」以外の何物でもない。彼等の各國相互間における「無脅威」が、帝國主義國相互間のそれを意味するならば、それはノンセンスである。日、英、米の何れもが、相互にその本國を「侵寇」しやうとも、また し得るとも思つてゐないからである。

併し乍ら、かやうに、それ自體においては全くノンセンスな事を、軍縮の「根本方針」とし、そのこと自體に何等か重大なる意義があるかの如く論議する所に、日本帝國主義者の老猾なる意圖が藏されてゐる。このノンセンスな「根本方針」自體の裏に蟲のよい希望の藏されてること上述の如くであるが、前節に展開したやうな今日の國際情勢、帝國主義者間の力關係の下において、日本の東洋モンロー主義の宿夢が××され得るやうな「無脅威」軍縮の成立し得る筈はない。這般の消息は賢明なる日本帝國主義者の先刻了知する所であらう。軍縮會議の結果が所謂「國際平和の精神」と「互讓の美德」とによつて、最善の協定に到達し得るとしても、帝國主義者間に近づきつゝある戰爭の危機を除去することは出來ない。この危機を除去し得る唯一の場合は、帝國主義戰爭の危機を××に轉化することである。そしてこのための可能なるあらゆる客觀的、並に主觀的條件は急速に成熟してゐる。帝國主義者共をして、ロンドン軍縮會議を提唱せしめ、またこれに「欣然」參加せしめた所のものは、近づきつゝある帝國主義戰爭のための陰險なるマヌーヴアーたるのみならず、就中また、帝國主義戰爭の危機を生ぜしめつゝある同一の物質的根據の上に尖銳化しつゝある內×の危機を緩和し、これを對外的對立に轉化せんとするにある。今日の日米間の力關係の下においては最初から貫徹の望のあり得ない所の、補助艦の對米七割保有を、謂はゆる「無脅威」軍縮の根本方針の下に要求

することは、それによつて、無智なる民衆に架空の恐怖を抱かせ、排外的愛國心を挑發することによつて、民衆の不平不滿を國外に轉向し、內×の危機を帝國主義的侵略戰爭における「擧國一致」的蹶起に轉化せんとするにある。

第三に、彼等の謂はゆる「積極的縮小」の主張を吟味して見る必要がある。彼等は、更に、ロンドン會議によつて、「國民負擔の輕減を圖らんがため、單に軍備を制限するに止まらず、進んで相對的に軍備縮小の實を擧ぐるに在る」と主張する。そして「この方針は世界列國の齊しく是とする所であると信ずる」といつてゐるが、これまた、多少とも各帝國主義者の希望する所とは言へ、その必要は、就中日本ブルジョアジーにとつて最も痛切である。それは二重の理由によつて條件づけられてゐる。一は日本の國家財政が窮乏のドン底において全く彈力性を失つて居り、そして、これは、就中、歳出中軍事費の占むる割合が殆んど英、米のそれに倍加してゐることによつて致命的にされてゐるといふことである。從つて、軍事費の削減以外には、金解禁後の歳入激減に對應して收支の均衡を保つ途はない。のみならず、金解禁の結果益々困難にされつゝある國際商業戰の不利を、諸種の國家補償法によつて保護せんとしつゝある日本ブルジョア政府は、激減する歳入の中から少からぬ保護費の捻出を必要とするであらう。かゝる事情の下においては、假令軍縮會議の結果、日本の希望通り、多少の「積極的縮小」が實現せられるとしても、それによつて、勞、農、小市民大衆の負擔が殆んど輕減せられ得べくもないことは明かである。況んや、日本の謂はゆる「積極的縮小」の他の、而もむしろ根本的な理由が、補助艦の對米比率六割強に過ぎぬ現有勢力を以つて、その對米七割を實現せんがための苦肉策であり、日本のではなくして、米英の海軍力の「積極的縮小」要求に過ぎざるにおいておやである。

三　ロンドン會議に關する若干の展望

私は、敍上の論究を基礎として、ロンドン會議に關する若干の展望を與へ得ると思ふ。既に見たやうに、ロンドン軍縮會議は、戰後資本主義發展の第三期としての現發展時期における諸條件によつて決定的意義を與へられてゐる。一方、全世界の資本主義經濟が、就中戰爭によつて一度破壞されたヨーロッパのそれが、量的にも質的にも大戰前の水準を突破したことによつて、そして他方またそれと同時にサヴェート同盟の社會主義的經濟建設が進行したことによつて、資本主義世界における生産力の增大と市場の狹隘との矛盾は、既に國際的規模において激化されてゐる。この過程において帝國主義者間の對立は不可避的に尖銳化してゐる。軍備競爭は激化するばかりである。たゞ、この帝國主義者間の對立を帝國主義戰爭にまで發展することを困難ならしめてゐる所のものは、一方帝國主義者間の勢力關係が何れをも決定的に優勢にせぬ程、複雜であり、相互錯綜して居り、從つて離合集散が反覆常ないことにあること勿論であるが、就中、この帝國主義的對立を激成せしめつゝある同一の物質的、社會的條件が、同時にまた反帝國主義的、××的戰線を國際的に結集し强化しつゝあり、從つて帝

國主義戰爭の危機を容易に××に轉化せしめんとする、またせしめ得る諸條件が急速に成長しつゝあることである。

この帝國主義戰爭の内×への轉化の脅威は、帝國主義者間の對立の激化にも拘はらず、否その故に却つて、彼等の間の一時的、表面的休戰を餘儀なからしめるであらう。この脅威は、兎も角も、ロンドン會議をして何等かの協定成立に導くべく作用するであらう。

これに反して、會議を決裂に導くべき要因は、英米の間に、日米の間に、英佛の間に、日英の間に、佛伊の間に、米佛の間にとあらゆる勢力關係において見出すことが出來る。併し乍ら、就中決定的意義を有するのは、最初の二對立である。そして、これ等の對立において決定の鍵を握るものは、言ふまでもなく米國である。米國は恐らく、英國に對する世界的爭覇においては、英米海軍力の均衡を以つて滿足し、東洋における日本に對する對立においては、主力艦の比率を多少緩和した程度における決定的優勢の保持を以て臨み、日本の七割要求に對しては逆襲するであらう。蓋し、英米海軍力の均衡は、既に資本力において優越し、而も中米、南米並に英植民地たるカナダ、濠洲と地理的に、また經濟的に近接してゐることによつて、世界における米國の英國に對する優越を決定的なものにするからである。これに反して、日本に對しては、遠洋作戰において日本に對する決定的優勢を保持することによつてのみ、日本の東洋における獨占的地位に對抗することが出來る。從つて、ロンドン會議は、その最も基本的にして、最大の對立たる英米のこれを、むしろ一時舞臺外に置くことによつて、日米のそれが、時にまた佛國に對するそれが、却つて、論議の中心となるであらう。そして、英米の對立においても、日米のそれにおいても、それ自體としては米國の優勢によつて解決せられるとしても、それは、英米の對立においては日本の、日米のそれにおいては英國の、夫々、對米牽制によつて、帝國主義者間の一時的勢力均衡は保たれるであらう。そしてこの均衡を破壞するものは、帝國主義者間の關係に止まる限り、それは、英佛の對立と佛伊の對立とが如何なる力關係において解決せられるかに依るであらう。この意味において、ロンドン會議の進行過程における佛國の立場は、日本のそれと共に重要性を示すことになるであらう。（一九三〇・一・九）

追記

本稿が、本誌二月號の編輯締切りに後れた爲め、その發表の一ヶ月間遲滯してゐる中に、軍縮會議は開會半月を經過した。とはいへ、この間における會議の進行は、未だ、本稿の一般的論究の際に豫想し得なかつた何等の具體的問題をも發展せしめてゐない。會議の劈頭から論議の中心となつたのは、國際聯盟軍縮準備委員會常設以來の懸案となつてゐる所謂制限方式の問題であるが、過ぐる半月間の正式全體會議は、本問題の談議に終始して、まだ何等の具體的問題の討議をも開始してゐない。而も大部分の日時は、正式會議を餘所に、樂屋裡の所謂多邊的協議に費されてゐる。

丁度こゝまで書いて來た時配達された夕刊は、昨六日午後の第一委

員會において「フランスの總トン數主義の觀念を取入れたイギリスの艦種別主義に從ふこと」（東朝）で所謂方式案の審議を一まづ終つたことを報じ、同時に、米主席全權が同夜突如として「重大聲明」を發表したことを傳へてゐる。これによつて會議は漸く本舞臺に入るべき口火が切られたものといふことが出來る。スチムソンの聲明は、「吾々は我が代表間における討議並に日英兩國との交渉の結果、成立可能なる協定の限界を明かにすることが出來た」（中外）との前書きの下に、先づ「英國に對し各艦種の即時均勢の提議」をなし、「更に戰鬪艦に關しては一九四二年まで待たず一九三一年に於て英米兩艦隊を均等ならしむるため双方においてその隻數を減縮せんことを提議」し、「また潛水艦においては出來得る限りの最低トン數を主張」してゐる。そして續けて、「日本に對する我々の提案は米國に對し滿足であり、且日本にも滿足であらうと我々の期待する全般關係を持來すものである、この提案は日米兩國の過去の關係に準據し凡ゆる艦種の同一比率に基いたものではない」といつてゐるが、其内容は對英提議のやうに具體的でない。是は、日本の大巡洋艦及び補助艦總括トン數における對米七割の要求が、未だ充分具體的な妥協點を見出してゐない結果であると言はねばならぬ。併し乍ら、米國が叙上の聲明を發するまでには、少くとも「成立可能なる協定の限界を明かにすることが出來た」からであらう。

スチムソンの聲明は、たしかに、會議を本舞臺に導くべき口火を切つたものではあるが、これによつて、正式會議が急速に進展するものと期待することは出來ぬ。何故なら、日米兩國とも、最後の妥協點を何處に求むべきかについては、既に相互の意中を推知し合つてゐるとしても、少くとも一應、米國は全艦種につき六割を强制せんとし、日本は七割を固執せんとするであらうからである。併し乍ら、全く不可兩立的關係にある兩帝國主義者の何れもが滿足するやうな解決點の見出される害もなければ、といつて一方のみの主張が百パーセントまで貫徹せられる害もない。最後の解決點は、相互の滿足でもなければ、希望でもなく、今日の國際的諸對立關係の下における兩者の力關係である。從つて、この力關係が既に客觀的に決定されてゐる所においては、海軍力比率の問題も亦この力關係の制約の下に決定されてゐると言はねばならぬ。そして、この相互の力關係は直接的關係においては、短期間に變動するものではないが、それでも、各々がその被搾取階級に對し、その植民地に對し、また爾餘の帝國主義國に對し、その比重を變動することによつて間接にその力關係の變化を惹き起すことが出來る。銀價暴落、日本の金解禁實施——正價流出——通貨縮小——金利上向、英米佛獨の金利引下げ等の經濟的要因も亦、日米間の力關係に微妙な作用を及ぼしてゐることを見逃してはならぬ。これ等は目下寧ろ日本帝國主義者に多く不利に作用してゐる要因である。從つて、日本帝國主義者は、自己を有利に導くべき唯一の期待を總選擧による所謂「政局の安定」に懸けてゐるといふことが出來るであらう。この意味において、日本は、軍縮會議の具體的進行を總選擧終了後まで延引せんとすべく、從つてその間においては、依然對米七割要求を固執することによつて排外的愛國主義の挑發を怠らぬであらう。（二・七）

人絹資本の世界的爭覇

小島精一

〔1〕

人造絹絲工業は世界大戰後の花形産業である。

それが初めて技術的に發見されたのは一八八四年のことだといふが、大戰前の實生産高は今から見れば極く微量であつた。

それは一九一三年でさへ最近の十分の一より少かつた。

大戰後の十年間でさへ、それは九・四倍した。即ち一九一八年の世界的生産三千六百萬封度弱から二八年度には三億四千八百萬封度へと上つた程だ。

しかも、現に非常な勢ひで激增してゐる。

此部門は化學的技術の高度の發展と纖維工業的技術との進步した高度工業國に必然に集中してゐる。

大戰前は獨逸が最も盛んで全世界の四割近くを生產し、英國は二割七分、佛、白は何れも一割一分前後、米國は下つて五分強に過ぎなかつた。伊、和、日等はまだ物の數に入らなかつた。が、最近には事情が一變し、一方に獨逸が優位をすべり落ち、他方米、伊、和、日等が急進してきた。

最近三ケ年間の狀勢を示すと

	一九二六年（百萬封度）	二七年	二八年
米國	六三	七五	九八
英國	二六	三九	五二
伊國	三五	三六	四五
獨逸	二六	三一	四三
佛國	一八	二一	三〇
和蘭	一四	一七	一八
白國	一三	一四	一五
日本	六	八	一四

全世界	二一九	二六七	三四八

即ち獨逸は最近には第四位で、全體の一割二分に下り、英國は、相變らず第二位を支持してはゐるが、全體の割合は一割五分に下り、之に反して米國は首位で二割六分の高率を占め、伊國も第三位だが、しば〳〵英國を脅威してゐる。

海外貿易の側からみると、狀勢は、稍や異つてゐる。即ち、こゝではイタリー、オランダ、佛、白等が最も大きな輸出超過國として活躍して居り、米、獨等は大入超を示してゐる。

人絹の生産技術は勿論日進月歩の大改善をなしてゐるが、現に世界的に人絹界を風靡してゐる製法はヴィスコーズ法で、全世界の八割以上の生産を占めてゐる。

之に對して、最近アセテート法が猛烈な進撃を試みてきたが、まだ、全體の八パーセント位しか占めてゐない。それは品質こそ優つてゐるが、値段が割高だからだ。

それにヴィスコーズの方でも此の新法に刺戟されてその技術に改良を加へ、リヽエン・フエルト法等が現はれてきた。

かく、技術上の改善が盛んに行はれ、生産費が低下し、生産量が激增してゐるから、必然に價格は、ぐん〳〵低下してゐる。

試に人絹と生糸との相場の動きを比較すると、

	人絹一斤ノ本邦輸入價格	生絲一斤ノ輸出價格	生絲對人絹價格ノ割合
大正六年	七・〇五円	一三・七三円	五一・三%
十年	四・四四	一五・九二	二七・九
十三年	四・〇七	一八・四〇	二二・一
昭和二年	二・五九	一四・二三	一八・二

即ち大正六年には人絹は生絲の半値だつたのが、今では品質が著しく向上しながら、價格は一割八分に下つてしまつたのだ。

しかも、此低下は昭和三年に入つて愈々著しく、三年度には約二圓といふ安値を示し、昨四年度には實に一圓六十五錢！にさへ落ち込んだ程だ。

かゝる價格崩落は新興工業の常であるとはいへ、そこに激烈な市場闘爭の惱みが反映されてゐるのは疑ひない。

それに、新興産業といふためだけではなく、恐らく、戰時化學工業として甚だ重要だといふ理由から、各國共高率な關税壁を以て自國の人絹工業を擁護してゐる。

それが必然に自由市場を一層狹めてゐる。

そこで、有力な大生産者の戰略も必然に單純な商品輸出から資本進出へと乘り出してきた。

國際資本の複雜な連鎖網がかうして築き上げられたのだ。

最後に、技術的特許の獨占もこゝでは重要な役割りを持つてゐる。

後進國の資本は此の獨占化された技術を利用するためにも、甘んじて先進國の大生產者に隷屬しようとするから。

〔2〕

主要國における人絹生產は夫々少數の大資本に集中的に支配されて居り、且つ、これらの大資本相互に緊密な連鎖網が築かれてゐる。從て、全世界の大部分が少數の國際的コンツエルンによつて把握されてゐる。

これらの國際的大コンツエルン中の最大のものは恐らく英國のコートールヅ(Courtaulds)であらう。(資本金三億二千萬圓・社債を含まず)

此コートールヅは英國での最大の生產者である外に、米國の最大の生產者ヴィスコース・會社(Viscose Corporation)を娘會社として持ち、又獨逸の最大の生產者フェライニグテ・グランツシユトフ(Vereinigte Glanzstoff Fabriken)及びそれと共同して伊太利の覇者スニア・ヴィスコーザ(Snia Viscosa)と緊密に結合してゐる。

更に獨逸のフェライニグテ・グランツシユトフと共同して和蘭の覇者エンカ(Nederland. Kunstzijdefabrick, Arnhem—"Enka")—此エンカは後述するやうに最近大擴張して「アク」(Algeneene Kunstzijde Unie N. V. Arnhem—"Aku")となつた—を支配してゐる。

かくて、コートールヅ(英)—グランツシユトフ(獨)—スニア・ヴィスコーザ(伊)—アク(和)、の巨頭結合によつて全世界の八割前後が支配されてゐるのだ。

尚ほコートールヅは獨逸ではグランツシユトフとの共同でグランツシユトフ・コートールヅ(Glanzstoff-Courtaulds)をつくり、佛蘭西ではソア・ド・カレー(Soie Artificielle de Calais)を建て、之を通じてソアリー・ド・ストラスブール(Soieries de Strasbourg)にも參與してゐる。

又スイスでは最大の生產者、スイス・ヴィスコース(Société de la Viscose Suisse)と親交を持つてゐる。

その他カナダ、インド、スペイン等々….多くの娘會社を持つてゐる。

英國ではコートールヅの次にはブリチツシユ・セラニーズ(British Celanese—資本金一億圓強)が大きい。之は政府の援助の下に軍隊用材料の生產のために建設されたものだが、今ではスイスのドライファス家(Dreyfus)に支配されて居り、ア

セテート法を專門として盛んに進出してゐる。

此セラニーズは米國にアメリカ・セラニーズ(Celanese Corp. of America)といふ、かなり大きな娘會社を持ち、又カナダ、佛蘭等にも娘會社を持つてゐる。いづれもアセテート法で、一貫してゐ、現に全世界のヴィスコーズに向つて猛烈な侵略戰を試みてゐるので注目される。

〔3〕

獨逸ではフエライニグテ・グランツシュトフ社とかの大化學――染料トラストたるイー・ゲー・ファルベン(I. G. Farbenindustrie A. G.)とが支配してゐる。

フエライングテ・グランツシュトフは戰前の獨逸人絹界――從て世界人絹の支配者だつたが、大戰後はその覇權を失つてしまつた。が、最近には一時の不振をとり返へして、世界的優者の一つとはなつてゐる。

始めは銅安法でやり出したのだが、今では殆ど全くヴィスコース法によつてゐる。

大戰前の資本金は七百五十萬馬克、職工は三千人だつたのが一九二八年には資本金は六千百萬馬克、職工は八千三百人に上り、しかも、その能率はすばらしく向上した。

二七年度の全生産は獨逸全體で一萬六千噸その中グランツシュトフだけで約一萬噸、即ち約六割二分を占めてゐる。

グ社は此外に多數の娘會社を持つてゐるが、就中ベンベルグ(I.P. Bemberg)が大きい。

此のベンベルグは專ら銅安法で作業してゐる。始めは染料會社だつたのが漸次人絹中心となつたもの。機械や織物工場も持つてゐる。

此のベ社自身が又イタリー及びフランスに娘會社がある外に、米國にはグランツシュトフとの共同娘會社アメリカ・ベンベルグ(American Bemberg Corp.)を持ち、又その姉妹會社アメリカ・グランツシュトフにも關係してゐる。最近英國にもブリチッシュ・ベンベルグを建てた。日本にも日本ベンベルグを建てた。(三菱との共同投資)

かうしてグ社――ベ社系の資本は娘→孫→會孫へと連鎖してゐる。

此系統と英國の大コートールヅとを結ぶ獨逸會社は兩者の共同支配に屬するグランツシュトフ・コートールヅである。

又グ社とオランダ・エンカ(今のアク)とを結ぶものにはノイエ・グランツシュトフの巨軀がある。

此グランツシュトフ團に對立する獨逸の大生産者はイー・ゲ

ー・ファルベンである。

之は周知の通り元來染料トラストなのであるが、今やその規模を著しく擴大し、殆どあらゆる化學工業部面に迄支配網を擴げたのである。

人絹界でも、數年前まではグランツシュトフよりは、づつと劣勢の位置にゐたが、最近に、急速に擴張して、今ではグランツシュトフの覇權に、かなり肉迫してきた程だ。

その工場は主として銅安法であることも興味がある。

此對立する兩覇王の間にも、多少の連鎖關係はある。

(1)殊に兩者の共同投資で獨逸唯一のアセタ法工場「アセタ」を建設して居り、

(2)又イー・ゲーの娘會社ホエルケンザイデ(Hoelkenside)にはグランツシュトフ系のベンベルグが參與してゐる。

〔4〕

米國――世界最大の人絹生產國の主なる生產者は次の如し。

		生產高(百萬封度) 一九二八年	二九年(見積)
(1) Viscose Co.	(ヴィスコース法)	五三・〇	六五・〇
(2) Du Pont Rayon Co.	(ヴィスコース法)	一九・〇	二四・〇
(3) Industrial Rayon Corp.	(ヴィスコース法)	四・五	六・五
(4) Am. Glanzstoff		〇・三	四・五
(5) Tubize Artificial Silk	(硝化法)	九・〇	一一・〇
(6) Celanese Corp. of Am.	(アセテート法)	五・〇	六・〇
(7) Am. Bemberg Corp.	(銅安法)	二・七	五・〇
全國		九八・七	一二九・二

即ち、こゝでは英國コートールヅの娘會社たるヴィスコーズ會社と大化學――自動車工業王デュ・ポントの所屬會社とが他群をはるかに拔いて聳立してゐる。

前者だけで、此の尨大な全國生產の約半分を占め、後者だけで又二割を占め、此兩者で七割を占めてゐる。

第三位以下はずつと落ちて、小さくなる。

ベルギイの大生產者チュビーズの娘會社たるチュビーズ・人絹會社、オランダのエンカに支配されるインダストリアル・レーヨン會社、英國のセラニーズ會社の娘會社たるアメリカ・セラニーズ、獨逸グランツシュトフ――ベンベルグの共同娘會社たるアメリカ・ベンベルグ等何れも海外大生產者の娘會社である。

純然たる米國資本に屬するものとしてもデュ・ポント會社は特記されねばならぬ。

のみならずデュ・ポント團の人絹界への進出は極く最近のことであるにも拘らず、その發展のテムポは實にすばらしい。恐

らく數年後にはヴィスコーツをも凌いで第一位に上るだらうといはれる程だ。

そは、ともかくとして、その親會社たるデユ・ポント團の化學業及び自動車王としての世界的覇權の偉大さを考へれば、此の一團が世界人絹界の最大の指導者となることも困難ではないだらう。

前述した獨逸のイー・ゲー・ファルベン（即ち大染料化學トラスト）の人絹界への大進出と相併んで、明日の最大の覇者の一人として特に注目されねばならぬ。

既に此デユ・ポント團は佛蘭西の最大の覇者コントア・デ・テクスチイユ・アルチフィシユル（Comptoir des Textiles Artificiels）と結合してゐると傳へられ、又（稍や疑はしいが）獨逸のイー・ゲー・ファルベン・トラストとも何等かの連鎖を持つやうにも傳へられてゐる。

のみならずチユビーズ人絹への支配的參與を通して、ベルギーの大チユビーズ團（ロエベンスタイン家）とも接觸してゐる。

〔5〕

伊太利の人絹工業では三大群がその九割を支配してゐる。そして、その中の二群は海外生産者に所屬してゐる。

最大の覇者スニア・ヴィスコザ（Soc. Ind. Nat. Applic. Viscosa）は全生產の八割を支配する處の超大トラストである。

此トラストは、初め伊太利の產業資本家リッカード・グワリノ（Riccardo Gualino）の支配に屬してゐたが、安定恐慌の際財政的に行き詰り、その再組織後はコートールヅ及びグランツシユトフ兩者の共同支配に服さねばならなくなつた。コートールヅは專ら財政的に、グランツシユトフは技術的に支配してゐる。

現に伊太利にある二十有餘の人絹會社の中、過半は此スニア・ヴィスコーザに歸服してゐるが、就中全國第四位を占めるセタ・ヴァレド（Seta Artificiale Varedo）が大きな系統會社である。

スニア・ヴィスコーザに次ぐ第二位の大會社はソア・ド・シヤチヨン（La Soie de Chatillon）團であるが、之は資本的には全然國際的連鎖から孤立してゐる、專ら伊太利商業銀行團の支配に屬する。

第三位はソシエタ・ゼネラル・デラ・ヴィスコザ（Societa Generale Italiana della Viscosa）團で、之は佛國のコントア・アーチフイシエルに支配されてゐる。

〔6〕

フランスではベルンハイム・カルノー團（Bornheim-Carnot

Gruppe) の支配するコントア・アーチフイシエル系の會社が全生產の過半——否、恐らく三分の二近くを占めてゐる。

此全系統の親會社はソア・アーチフイシエルで、合計十四個の人絹會社が所屬してゐる。それは一、二の例外を除けばすべてヴイスコース法をとつてゐる。

此コンツエルンは米國のデユ・ポント團と結合して居り、又伊太利のソシエタ・ゼネラル・ヴイスコーザを支配してゐる。等々……。

此純佛國資本の大コンツエルンを除けば、他の人絹會社は外國生產者の娘會社たるものが有力だ。ことに、英國コートールヅに屬するソア・カレー及びストラスブール、オランダ・エンカの娘會社、ベルギー・チユビーズの所屬工場等々……。

これらの會社は聯合體を組織してコントアに對峙してゐる。

〔7〕

ベルギーの人絹資本も亦佛國のそれと似て國際的連鎖からは稍や遠ざかつて居り、又、事實、佛國資本と接近する傾向をとつてゐる。

こゝでは同國の國際的大金融家ロエヴエンシユタイン家の支配するチユビーズ(Fabrique de Soie Artificielle de Tubize)が聳立してゐる。

之は本來硝化法をとる斯界での先驅者だが、最近の活躍は餘り振はない。近頃はヴイスコース及びアセテート法への大進出を熱心に實行してゐる。此の大擴張のために資本金は二千五百萬フランから一擧に一億二千五百萬フランに增加された程だ。

同社は早くから海外進出をなしてゐたが、今ではその娘會社は大抵他の大生產者から奪取されてしまつた。例へば、ポーランドの娘會社は伊國のスニアから、米國のチユビーズは、デユ・ポントから。

たゞ、フランス・チユビーズがや、注目すべきである。

ベルギー第二の大會社はフランス・コントアの支配してゐるソシエテ・ゼネラル・ヴイスコースである。

〔8〕

最近飛躍したオランダの人絹資本は、いはゆるエンカ(Enka)とブレダ(Breda)との二大コンツエルンに集中してゐる。

エンカはその規模においてブレダより、はるかに——數倍もの大きさである。二八年には日產四萬五千封度(ブレダは一萬封度)であつたが、最近更に大擴張をなした。

前にも一言したやうにエンカは英國のコートールヅ及び獨逸

のグランツシュトフが共同的に支配してゐたのだが、近時グランツシュトフの敵手イー・ゲー・ファルベンが、此の支配權を奪取せんとする企圖あるを觀取して、グランツシュトフは斷然徹底的進出をなし、遂にエンカと事實上の合同を行つた。

形式上はエンカを大擴張して、新にアク（Aku—Algemeene Kunstzijde-Unie）をつくり、グランツシュトフとの間に徹底的な株式交換による相互支配の結合を樹立したのだ。

此アクにもコートールヅが有力な指導的參與をなしてゐることはエンカの場合と異らない。

エンカ團は海外にも多數の娘會社を持つてゐる。就中、英、米、伊國のエンカは大きい。獨逸にはグランツシュトフと共同でノイエ・グランツシュトフを建てた。これらの海外會社はすべてメクビー（Maekubee）なる持株會社に統括されてゐる。

〔9〕

日本の人絹界では周知の如く帝國人絹が覇權を握つて居り、旭絹織、日本レーヨン、東洋レーヨン、昭和レーヨン、倉敷絹織その他若干の會社が旺盛な成長をなしてゐる。

これらの主要會社の規模の發展振りをみるに

	資本金（二九年初）百萬圓	一月生産高 一九二九年初	一月生産高 三〇年末推定
帝人	二一	三萬一千封度	五萬二千封度
旭	八	一萬四千・	二萬八千・
東洋	一〇	六千六百・	一萬八千・
日本	一五	六千・	一萬三千・
倉敷	一〇	三千三百・	一萬・
昭和	一二	二千二百・	九千・
全國合計		六萬八千封度	十三萬八千封度

かく旺盛な生産擴張があり、その少からぬ部分が人絹織物又は交織物として海外市場へ進出して行くので、既に東洋市場では有力な國際的闘士となつてゐる。

しかし、國際資本の連鎖には、餘り注目すべき關係がない。僅に旭絹織がグランツシュトフと提携し、又近く三菱がベンベルグと結合して日本ベンベルグを建設した位のものであつて、その他には、多少の技術的連絡を持つものはあつても資本的連鎖にまで深入りしてゐるものはない。

〔10〕

私は既に人絹資本の世界的連鎖網の鳥瞰をすませた。

そこでは、國家的集中は勿論のこと、又それを土臺とした廣

汎な國際的結合運動が旺盛に行はれて居り、その結果、若干の大資本團を中心にして、複雜な國際的交錯——相互支配關係が成立しつゝあることが分る。

だが、これら國際結合關係はたえず、新興産業に特有な發剌たる新展開をつゞけて居り、まだ國際的支配の分野は決して固着的に決定されてはゐない。

とりわけ、旺盛な生産設備の擴張と新技術の出現とが均衡の固着化をみだしてゐる。

それに重工業的部門と異つて、資源の獨占が問題にならぬといふ事情が、新競爭の出現を割合ひに容易にしてゐる。といつても、化學工業特有の精鋭な技術的裝置——高價な研究費等が中、小資本の登場を強く拒否してはゐるのだが。

かゝる全國際的連鎖網を通じて、今や次の二大國際コンツェルン網が、漸次世界的爭覇の最後の對立者として立ち現はれてきた。

(1)第一の大結合は英國のコートールヅ——米國におけるその娘會社アメリカ・ヴィスコース——獨逸のグランツシユトフ——オランダのアク（舊、エンカ）——伊太利のスニア・ヴィスコーザ等、現在では主要國の最大生産者のみを結合する國際資本の一團。

(2)第二の大結合は米國の大化學自動車工業王デユ・ポント——佛國の覇者コントア・アーチフイシエル——ベルギイの覇者チユビーズ等を連ねる一團。

そして、興味あることには獨逸の大化學・染料トラストたるイー・ゲー・フアルベンも、寧ろ此一團に接近してゐると傳へられる。

此兩者の勢力關係を大觀するに、現在までは、まだ前者は後者より遙に尨大な規模を持つてゐるけれども、後者は、今やヨリ急速なテンポで擴大されて居り、前者の覇權に肉迫してゐる

前者が、純粹な人絹會社であるに反し、後者の指導團は大化學工業トラストであることも、興味ある對立關係の一要素である。

が、かういつても、これらの國際的結合は勿論決して競爭狀態を廢棄してゐるものではない。

(1)先づ、國際結合の内部でさへ、相當の市場鬪爭はたえない。

例へばスニア・ヴィスコーザやエンカはしきりに英、獨へ進出してコートールヅやグランツシユトフの繩張りを侵略してゐるし、又米國ではヴィスコーズはベンベルグやグランツシユトフと市場を爭つてゐる。

(2)二大結合相互及び他の獨立生産者との爭鬪は勿論、はるかに熾烈だ。

なるほど人絹の需要は激増してゐるけれども、生産設備の擴張も實にすばらしい。それで、景氣の波が少しでも下向けば、直に巨大な過剩生産が生じ易い。

それに、特記さるべきは技術的要素——即ちヴィスコース法に對するアセテート法の精銳な進出的突擊の點である。

此アセテート法は生産費こそ割高だが、品質の點では、ヴィスコースより優越した長所を持つてゐる。

それで、此アセテート法の會社では、しきりに生産費の低下を工夫し、技術を改善して、最近には有力な進出をなしてきた。殊に前述したブリチッシュ・セラニーズ會社——それは此アセテート法の世界的代表者だ——の一群は今や、その精銳な新設備を擴大してヴィスコースの世界的覇權を脅かしてきたのだ。

處が、ヴィスコース法の會社も勿論之を袖手して迎へてはゐない。反て、逆にアセテート法の工場をも建設してセラニーズ會社の本據を突かんとするに到つたから、これによつて全人絹界の市場鬪爭は強く激化しつゝあるのだ。

なるほど、一方には國家的個別的カルテルは勿論のこと、國際コンツェルン間の協定も漸次發展してゐないではないが、大體において、特殊大コンツェルン間の巨人鬪爭はまだ激烈に鬪はされてゐる。

そして、此激鬪を通じて、劣弱な獨立企業は絶えず生存圈外に驅逐されてゐる。

——一九三〇・一一・二九——

現代露出主義

片岡鐵兵

クラヽ・ボウのトオキイ映畫の中で次のやうな場面がある。

少女が寢臺車の中を寢衣のまゝで歩いてゐる。眠いのでふら〳〵してゐる。バス・ロオブの絹の間から、時折り素足が見える。彼女は、カアテンをくゞつて一つの寢臺の中へ入つた――が、びつくりして飛び出る。間違へて、知らぬ男の寢臺へ入つたのだ。

あとで、クラヽ・ボウは級友たちに話すのだ。

「男と寢臺を一緒にする位なら、女友だちとスプウニングで寢る方が氣が利いてゐるわ」

そんな意味が、トオキイで發聲されるのだ。スプウニング――スプーンのやうに女同志が寢るとは何を意味するか？　それを公衆の前に發聲する。アメリカの觀客は手を叩くだらう。斯ういふ所に、絕大の興行價値があるに違ひない。

映畫製作者は、クラヽ・ボウをして露出せしめる。クラヽ・ボウに露出性を持たせることによつて、映畫製作者は多大の利潤を攫得するのだ。

今や、露出性は、無羞恥は、利潤の材料にさへなつた。

露出性は、多かれ少かれ、モダアンな物の共通な要素となつてゐる。極言するなら、現代では、無羞恥が必しも道德的に非難されないばかりか、それが近代的な美の發揮だとされる場合さへあるのだ。

ショート・スカアツは、だん〳〵流行らなくなつてゐるかも知れない。然し、お尻を大きく見せるやうな服裝は、だん〳〵助長されてゐる。

日本娘の帶の結び方一つでもさうだ。彼女らは細腰を誇つた

彼女らの祖先とはちがつて、帯のたれでお尻をかくすやうな技巧は用ゐないのである。

斯ういふ時代に、トクをするのは婦人科の醫術だらう。何故なら、婦人は信念を以てあらゆる告白を醫師にするだらうから。これまでは、容態や、病氣の原因について、婦人はつとめて告白することを避けた。或は好い加減な嘘をついた。恰も良人と自分とは童貞なのに、先生、こんな病氣にかゝるとは何といふ不思議でせう、と云はぬばかりに。

けれども、今や、事情は一變した。婦人の患者はスラスラと容態を云つて呉れる。良人との祕密を躊躇なく告白して呉れる。

「先生、良人は中斷の習慣があるのでございますよ。妾はエジヤキユレエシヨンを經驗いたしたことがございませんの。良人はセツゴ腺の充血らしく感じられます。妾はいつも氣分が鬱陶しうございます。妾は……」

先づザツとそんなお饒舌りだ。醫師は病氣の原因を究め、適當に處置することが出來る。同時に、彼女の告白の中から、意外な新事實を發見する。醫師は學術雜誌に發表する。

斯くて、婦人科は現代に至つて急速に進歩した。

祕密のない明るさ。人間はそれを望んでゐる。然し、人間と人間とが、眞實を持ち合ふユトピアでない限り、人はいつまでも暗い荷物を背負つて喘がなくてはならぬ。

現代の露出性は、健全な明るさから來たものでは決してない。それどころか、人は露出することによつて、自己主張の競爭をやつてゐるのだ。隅の方へ縮こまつてゐては、他人に蹴落とされる。まん中へ出て自己を主張しなければ、滅びるのだ。それも普通の主張のしかたでは、何ら人々の注意を惹かない。人々をアツと云はせるためには、何物か、アツと云はせるに足る刺戟的なものを、露出しなければならぬ。

同時に、特に資本家共は、利潤の分け取りに於て、「眼の色を變へて」相爭ふ。その際、勞働者の經濟鬪爭に直面すると、彼らはきつと云ふのだ。

「それは餘りに物質的な——」

そして、主人と下男との、美しい情愛について説教する。

目の色を變へるといふことは、即ち慾望の露出に他ならない。そして、眼の色を變へる機會は、世の中がセチ辛くなつたので益々多くなるわけだ。

實際、斯うセチ辛くなると、一片のパンの取り合ひにも、眼

の色はかはるだらう。權利の主張と擁護のためには、飽くまで圖々しくなる必要がある。もし圖々しくなることを恥とするなら、**その人は落伍するばかりだ。**

「人はパンのみにて生きるものだ」

もはや物事はそこまでハッキリして來てゐる。

ガラス張りの棺の中に、マニキン・ガアルが買はれてゐる。彼女は最大限に、彼女のイットを表現しなければならない。群衆の前に彼女を曝け出す事によつて、彼らの購買心を煽動し、もしくは、商品を、印象ふかく群衆の心に烙き付けなければならない。

商品の廣告にさへ、生きた人間の露出症が利用される時代である。

然し、そのマニキンに吸ひ寄せられて、往來に立止り、ゲラ〱笑ひながら眺めてゐる群衆は、また何と無羞恥な寄合ひだらう。

マニキンは、生活のためである。群衆は、若い女の樣々の姿態が只で見られるからである。マニキンを利用する廣告主は、商品の宣傳をセックス・アッピイルに結び付けてやるのが效果的だからである。この事を、みんなが、お互に相手の立場として諒解し合つてゐる。そして、許し合つてゐる。と云ふより、當然の事だと思つてゐる。

露出時代である。

去年の十月頃、大阪の浪花座か角座かで、林長二郎が舞臺劇に出た。長二郎ファンが殺到した。長二郎はちりめんの着物を端折り、白く肉付きの良い脚を踏みしめて、大刀を構えた。「寄らば斬るぞ！」と、驚く勿れ、ほんとにそんな白のある芝居である。長二郎は無數の取方を斬殺し、自らの肥つた白い肌をも朱に染めた。それから長二郎は色女としんねこの濡れ場で、友禪にもつれながらウットリと微笑した。彼女を抱いた。と、「キャッ！」と、見物席の若い女が叫んだ。「とても耐らぬ」と金切聲を張り上げた。

アメリカの映畫王フォックスが、日本の映畫興行界に君臨しようといふ野心があるのださうだ。

ところで、日本の興行界に大トラストを以つて既に君臨してゐるのは、松竹だ。松竹は資本金二千萬圓の松竹土地建物興行會社を以つて、このトラストを統制してゐる。

フォックスが、この松竹に眼をつけたのに不思議はない。果

給、アメリカから、松竹土地建物興行會社の、全株の五割一分をフォックスが買ひ占めたいといふ交渉が來た――嘘か本當か知らぬが、最近の新聞紙がさう傳へてゐる。

我々の注目するのは、全株の五割一分を、と云ふ、その「一分」だ。その「一分」に、我々は驚きばかり露出されたフォックスの意思を見る。物も云ひやうで角が立ため「一分」といふケンソンな數字一つで獨占欲露出の役割を勤めるのだ。

露出性が、何故、多かれ尠かれ、モダニティの共通要素であるか？

文化は、人間に事物を「科學的に」見る術を與へた。人間は、あらゆる物を神祕の影から引張り出して、科學の明るみに照し出して見なければ承知しないのだ。性慾でさへ、もはや羞しい隱蔽物ではなくなつた。それは科學の對象であり、從つて、白日(ライト)の下に、持ち出さるべきものである。

一方、資本主義文化の高度な段階では、人間は機械に慣れる。機械の威壓力に、その合理性に、そのスピードに人間の美感は激しく惹付けられる。

斯くて、明るき生活へ、一切の生活の合理化へ、のスロオガンが表れ、道徳と美學の基準がそれに倣うて發生した。

ところが、我々の初歩的常識が教へるまでもなく、現存の制度は、人間の自由を制約してゐる。人間の自由の制約された所に、眞の「明るい生活」や、「合理的な生活」が、生れよう筈はない。

制約されたる自由は、闘爭によつてのみ奪還される。もつと前置を云へば、「只闘爭の勝利によつてのみ！」だ。然るに、その勝利がないのに、「明るい生活へ」のスロオガンと一緒に、それに倣うた道徳と美學の基準が、發生したといふことは――明るい生活の實踐なくして、それらの物が發生したといふことは、つまり、それらの物が歪められた基準であることを説明するのである。

換言するなら、現代に在る明るい生活は、歪められた僞物であるに過ぎない。

では、現代の明るい生活の正態は何であるか？　次の説明でそれはハッキリする。

現代の明るい生活とは、感覺的消費生活の解放である。何から解放されたのか？」羞恥心からで、ある。

人々は、その生活を歪めてゐる根本的なものと闘ふ代りに、彼らの彼ら自身の内側にある羞恥心を放逐したのである。それは自由の奪還ではなく、壓迫された生活の單なるハケ口にすぎない。然し、それは闘爭よりも、遙かに雜作なく「樂しく」たやすく出來る仕事だつた。そして又、あらゆる物を科學的に見ようとする「科學的精神」は、羞恥心の放逐を合理化して與れた。何故なら、羞恥心は、たしかに對象を直視することに對して、有害な障壁となるだけの物だから。

然し、この露出性を美化すると現代のエロチツクな藝術が出來上る。そして又、思想的立場も主張もないブルジョア藝術家は、自然この境地に追ひ落とされるのだ。

其所では、讀者の要求と作者の露出慾が一致する。理想も何も要らない、作者は只、露出しさへすれば好いのである。その事が、社會をより良くするために如何に貢獻するかゞ問題ではない。さうなると、藝術、特に文學は、益々性的な刺戟を追及するやうになる。作者が熱情を以つて從事する發見は、新しき性慾、怪奇な性慾である。それらのより一層刺戟の強いものを！ 斯うして作者は、出鱈目な、勝手氣儘な空想を、紙の上に踊らせる。ブウルジョア文壇は百鬼夜行の美を生産することによつて何らか「新しき生活」を創造したと自惚れる。一切は、彼らの現代の露出症への迎合にある。それは又、彼らが、主張すべき正義を持たず、彼らの背負ふ「自由」が欺瞞の自由であることに就いての絶望から來るのだ。

露出で思ひ出すが、現代の政治家ほどボロを露出して平氣なものはあるまい。政界の腐敗は様々の疑獄で民衆の前に、不十分ながら曝露された。勿論、民衆は、今度の疑獄によつて初めて、政黨屋なんてものがどんな物かを知つたのではない。が、今度の疑獄は、もつと大きな事を民衆に敎へた。それは、どんなに政治屋の罪惡が曝露されても、前大官といふものは少しもそれを破廉恥だと感じない、といふ事實である。

彼らは大手を振つて泥棒し、顔赧らめもせぬ。民衆の前に謝罪もせぬ。

およそ、これほどまで圖々しい露出症はあるまい。然し、それに不思議はない、彼らは思想善導の大將なんだもの！

醜惡を摘發されゝば、一層圖々しく醜惡面を露出することによつて、押し切る。この事によつてのみ、無理窟が理窟を征服し得る。

押しの強さ、だ。

支配階級の物のやり方がこれだ。一押し、二押し、三押しで行く。

彼らは一切無理窟だ。「力で來い」だ。被抑壓階級の抗爭に對して、彼らは遮二無二、この押しで攻め返へす。勿論、相手も「力と力と」の鬪爭であることは覺悟してゐる。然しながら、その「力」は、背後に最も完全な理論を掲げてゐる。科學的に正しく、道徳的に正しい――それに對して支配階級の方に、もし理窟があれば、たとへば「この世の中にはお化けもゐるし、一つ目小僧も居るぞ」といふやうな種類のものである。

無理窟に只ひたすらに壓迫する、力で、暴力でのみ。これこそ、今や最後の段階にある資本主義の、プロレタリア組織に對する態度である。

この態度は、階級對立を益々露骨に表示することに役立つ。支配階級は、あらゆる努力を傾けて、この社會の超階級性を宣傳するにも拘らず、露骨な彈壓振りによつて自らの階級性を自ら曝露するのである。プロレタリアートの鬪爭が、相手の假面をひん剝くのだ。

資本主義最後の段階、即ち帝國主義の段階にあつては、支配階級はその全假面をかなぐり捨てゝ、自らの階級性を露出する。今や我々はこゝに立つてゐるのだ。

こゝで初めて、我々は現代の露出症のその本質を知ることが出來た。それは何であるか？ 人々が性的に無羞恥となり、慾望を露出し、自己主張のために眼の象を變へる、その本質は何であるか？

それは實に、明らかな未來性を失つた階級の、絶望の反映である！

羞恥心を放逐した人々よ。明るき生活のために、恐怖心をも放逐せよ！ それこそ我々を鬪爭に驅り立てる秘訣である。

本庄博士の見解を克服す

——日本社會經濟史の諸問題——

土屋喬雄

一　序

批判は眞理の鍵、科學進步の推進力である。無批判の支配するところ、眞理はその殿堂の扉を閉ぢ、科學はその進展の步みを停める。

もとより批判は、必ずしも常に論爭の形式を取るを要しない。私かなる批判あり、又一方的批判もあり得る。だが、それが公の論壇に於ける論爭の形を取るとき、科學進步に貢献する事最も大なることは、言を俟たない。蓋し、公の論爭は、その當事者をしてその思索の尖鋭さを最も鋭く發揮せしめ、問題を最も明確ならしめる機會を與へるのみならず、それに關心を有する多くの第三者に最も多くの刺戟を與へるからである。たとへば、我が經濟學界にあつては、理論的研究の發達最も高度であるが、それはこの分野において、周知の如く、不斷に論爭の行はれたるに因る所多いと思ふ。

飜つて我が日本社會經濟史學界の現狀を見るに、故内田博士、瀧本博士、福田博士等の開拓時代、資料刊行時代を經て、今ややうやく興隆期に入らんとしてゐる。特殊研究の續出する一方において、一般化的論著の公けにせられるものが甚だ多い。しかるに、この分野における批判、論爭——マルクシズム理論家の史家に對する批判は漸次盛んであるが——は、いはゆる專門的研究者の間においては、今なほ著しき不活動の狀態に在つて、論爭の名に値ひすべきものは、僅かに小野博士と黑正博士との間に、百姓一揆の問題に關し爲されたるものあるのみである。多くの研究者は默々としてひたすらに自己關心の史實の探究とその敍述に沒頭するの狀態である。從つて多くの論著は、その史實の說明、史觀、方法論の上に、又事實的諸問題において、多くの不明確、混亂、誤謬を有すべきに拘らず、多くは不問に付せられ、もしくは新刊紹介の形において附隨的に指摘せられ、一方的に批判せられるに止まり、論爭を通じて公然批判、清算せらるゝことは、甚だ稀である。かくて斯學界の現狀は何となく陰鬱の氣分あるを否みがたい。

思ふに、日本社會經濟史研究の興隆期にあつて、一般化の一應成し遂げられた今日、この分野における批判、論爭の活潑に行はるゝことは、

斯學の發達上最も必要であり、又最も望ましきことでなければならぬ。筆者聊かこゝに感ずる所あり、本誌の餘白を與へられたるを機とし、諸學を顧みず、斯學の先學、權威たる本庄博士の諸見解に對して敢へて批判を試みようと欲する。筆者の本意もとより、多年抱ける疑問を忌憚なく提出し、博士の示教による自己啓蒙を期待するに在るのみ。而して特に批判の對象として博士の「日本社會經濟史」を選べるは、他にあらず。周知の如く、博士は多年特殊研究に從事せられ、大正十三年「日本社會史」を著はされて以來、續々一般化的著述を公けにされ、斯學の普及に寄與せられること最も大である。就中「日本社會經濟史」(昭和三年十二月)は、博士從來の多くの研究を取り入れられたのみならず、同時に諸學者の多くの研究をもこの一書の中に綜合されてゐる。言はゞ、博士の此書は現下日本社會經濟史學の最高峰である。從つてこの書より問題を取り出すことによつて、斯學の中心的諸問題に觸れることを得るのである。之れ特に主として博士のこの書を批判の對象とする所以である。

二　史學方法論

本庄博士は嘗て「日本財政史」の序に、史家の史實に對する態度を闡明し、『虛心坦懷の態度を以て事實に臨む』べきを強調された。私は當時、かゝる立場の無內容なるを指摘し、斯學研究の積極的なる方法論を示されんことを希望しておいた。(「社會經濟史體系」第五卷所收、「日本財政史を讀む」) 私のこの期待に應ぜられたるか、博士は本書においてはやゝ詳細に「史的研究の意義」(一九──二四頁)を論ぜられる。だが、博士はこゝにも、私の期待を充たすべき積極的なる何ものをも展開せられない。

『歴史は事實の反映である。故に我々は事實を無視するを得ず、事實を充分に蒐集し、これより歸納して結論を引出すべきである。しかし、史料はあらゆる事實につき充分ではない。この史料の不完全よりして、史家の主觀は働き得る。又個々の事實を意義あるものとして採用するや否やを決する場合にも、主觀が存在し、史實を系統的に論述する爲めにも、主觀が割合に多く働く。故に歴史研究に絕對的客觀性は求められない。しかし事實を無視せず、偏見に捉はれず、事實に即し、事實の示す所に基いて研究する意味に於ては、歴史的研究は客觀的研究である。然るに自己の主觀的臆斷を以て事實に臨み、或は理論に拘泥して事實を曲げ、色眼鏡を以て事實を判斷する如きは、何れも歴史研究の意義を沒却せるものである。』(本書一九──二〇頁)

以上が博士の史學方法論の基本的部分の要約である。こゝで博士は「主觀の働き」を取り入れることによつて、嘗ての「虛心坦懷論」を修正されるかの如く見えるが、それは本質的修正ではない。博士の立場の本質は飽くまでも『事實を無視せず、偏見に捉はれず、事實に即し、事實の示す所に基く』にあつて、依然として「虛心坦懷論」である。博士の言を俟つまでもなく、『事實を無視すべからざる』は自明である。たゞ問題は如何に事實を把握すべきかに在る。博士にあつては、「事實」は到る所に與へられ自己の眞相を語るものゝ如くである。だが、事

實は、我々が我々の一定の認識方法を以て之を把握するに非ずんば、その眞の姿容を示さない。その眞の認識方法こそが、我々の問題である。博士は「偏見」又「色眼鏡」を排斥される。だが、これらの排斥は當然に、これらの反對物「正見」又「無色眼鏡」の是認を前提する。この「正見」とは何か、又「正見」と「偏見」とを判別する標準は何か。これこそが我々の問題でなければならぬ。凡そこれらの根本的なる問題に對して、博士は何等積極的なる見解を示されない。即ち博士においては問題は解決にまで一歩をも進められないのである。

博士は又、『私はこの外、尙一層進んで、種々なる史的事實を適當に彙類し、其一々の種類につき比較對照して研究し、かくて史的事實に通有なる普遍的性質を究め、一般的理法を闡明することも必要であると思ふ。』（二〇頁）と云はれる。即ちこゝで博士は史的發展法則樹立の必要を主張されるものゝ如くである。だが、本書においては、博士はこの史的法則の何たるか——この問題は何が史的發展の窮極原因かの問題に歸着する——を問題にされぬ。苟も史的發展法則樹立の必要を主張しつゝ、史的發展の窮極原因如何を問題にせざる如き、本書の讀者の最も不滿とする處であらう。故に私は博士の他の著書「日本經濟史」——それは黑正博士との共著であるが、兩著者は完全に連帶責任を有する——における、博士のこの問題に關する所論を批判の對象としよう。博士は該書において、荷き史觀を紹介せる後、唯物史觀を批判して次の如く言はれる。

『この主張（唯物史觀）は今日の社會に於ては確かに多分の眞理を有するものであるが、併し歷史の根柢となるものが、社會の經濟關係であるとしても、歷史自身が時と所とによつて變化する所の社會的歷史的產物なる以上、將來の歷史を全く誤れるものとして一概に排斥することは出來ない。歷史は寫眞の如く凡ての社會現象を寫實するのでない。一定の人格がその歷史的關心によつて過去の文化現象を再現したものである。それが客觀性と普遍妥當性とを有すとせられるのは、只その人格の有する歷史的關心が、當該社會の歷史的關心を表現するや否やによつて決定される。故に宗教生活が人類社會の最大關心たる時代に於ては、之が歷史的關心事となつて歷史に現はれ、藝術が社會の最大關心事であれば、それが歷史の舞臺に現はれ、更に軍事、政治が社會生活を最も力强く支配する場合には之が歷史的關心事となる。而して今日の歷史學に於て社會の下部構造たる經濟關係が最大關心事となり、之によつてのみ眞の歷史を把むことが出來ると迄に考へらるゝに至つたのは、經濟生活が全く吾人の關心を支配するの結果に外ならぬと思ふ。若しかくの如く、社會生活に於ける最大關心事が歷史の指導概念として變化して行くことが眞理であるとすれば、今日一派の人々が、社會の生產關係、經濟生活のみから歷史をながめんとする研究方法も亦いつかは沒落する運命にあるものではなからうか。』（該書、二頁）

この主張は、嘗て猪田基氏が正當に批判せられたやうに、（「新興科學の旗の下に」昭和四年十一月號）相對論を基礎とする折衷的觀念論的史觀であつて、著者自身が「今日の社會に於ける多分の眞理」を認め

られた唯物史觀と相容れざるのみならず、前に見たる博士の主張とも矛盾するのである。蓋しこの主張においては、從來の一切の歴史從つて史觀は、一定時代にのみ眞理であり、從つて古今に通ずる史的發展法則は否定されざるを得ないのである。一方においてかゝる史觀を主張しつゝ、他方に史的發展法則を主張せられる博士は、この矛盾を如何に解決せられるのであらうか。

又この主張においては、各時代の社會における「歴史的關心」が變遷するといふ事實が、從來の一切の史觀の一時的眞理性を肯定する基礎であるが、それは史觀によつて說明せらるべき事實を以て史觀の正否を決定せんとするもので、明かに顚倒せる方法論ではないか。

更に博士は他の著書においてこの點に關して云ふ。

『思ふに歴史上の事件に關し經濟的原因を重視することは決して不可なりといふに非ざるも、而も之を過重視し餘りに誇張したる說明を加ふることは決して正當ではない。蓋し實際に於て歴史上の事件が經濟上の原因に基くこと少からずと雖、又ある場合には政治上の理由、宗教上の理由等が經濟上の理由よりも寧ろ重要であつたことが少くない。……我々は不偏不黨の立場に於て歴史上の事實を吟味すべきであつて、或る觀察點へ事實を比附援引することは、これを避けなければならぬ。』

(「日本經濟史概說」第一分冊、一〇——一一頁)

こゝで博士は再び博士の金科玉條「不偏不黨の立場」——「虛心坦懐の態度」を出される。だが、既に見たやうに、この金科玉條は我々にとつては毫釐の價値なきものである。反對に我々にとつて價値あるものは、たゞ正しき「觀察點」のみである。「重視」といひ「過重視」といふも、前に見たる「偏見」、「正見」と同じく、それを決定する基準即ち「觀察點」なくしては、何等問題となり得ないではないか。この點をば博士は依然として理解されやうと欲しない。かくて、博士においては史的發展の究極的原因は理解されないのであつて、博士の關心をもたれるものは單に『歴史上の事件に關する』あれやこれやの原因——或る場合には經濟的、又或る場合には政治的、宗教的等々——のみである。博士の見られるものは、社會諸過程の相互作用に止まり、社會構成の基礎、從つて又史的發展の最終的決定原因の如きつひに見やうと欲せられないのである。

以上の如く、博士の方法論は不明確にして混亂に充ちてゐる。云ふまでもなく、歴史其他社會諸科學の研究は、研究者が明白に意識すると否とに拘はらず、必ず一定の社會觀——それは又、究極において唯物論か觀念論、決定論か非決定論、辯證法か非辯證法、もしくはその折衷かの立場によつて決定される——を前提する。博士の方法論の不明確は、その究極的な立場の不明確に基くのではなからうか。苟も史學方法論——所謂「史的研究の意義」——を論ぜられる限り、博士はかゝる立場を明確にせらるべきではなからうか。

三　社會史の意義

本庄博士の「社會史」の概念は、大正十三年の「日本社會史」以來一定してゐるが、卑見によれば、それは頗る不明確なものである。こ

の不明確なる概念規定も、從來充分批判されなかつたために、多くの追隨者を生じたやうである。たとへば、瀧川政次郎氏は昨年十月「日本社會史」を公けにされたが、その內容は『專ら我が國における社會階級の發達變遷を‥‥法律的なる身分の觀念に中心を置いて』觀察し、說述されたものに過ぎない。卽ちそれは單に「社會階級史」に過ぎないものである。それを「日本社會史」と銘打つて公けにされた瀧川氏は、本庄博士の社會史概念の追隨者であることを、その書の「序說」に明かにされてゐる。では本庄博士の社會史概念は如何なるものか。

博士に從へば、社會史とは社會に起りし重大事件の歷史に解される場合もあるが、今日普通に所謂社會史なるものは、歷史の一分科としての社會史である。かゝる社會史と稱して適當なものは二つある。一は人類の結合團體たる社會そのものが如何にして發達するかを述べるもの、他は社會問題の歷史である。この社會問題の歷史としての社會史にも更に三種ある。第一義（最廣義）に於ては、社會を構成せる各階級間又は階級內に於ける不調和より生ずる諸般の問題を指すものであつて、この場合の階級なるものは、經濟上の階級のみに限らず、社會上其他の階級をも包含し、其不調和の原因も必ずしも經濟上のみに限らず、政治上其他の原因によるものをも包含する。第二義（廣義）に於ては、階級に就てはやはり社會階級を指すものであるが、たゞそれ等の階級間又は階級內に於ける經濟上の不調和の問題、卽ち富の分配の不公平に起因する問題だけを研究せんとする。第三義（狹義）に於ては、之を全然經濟學上の範圍に限定し、分配上同一種類の所得の分配に與かる者、卽ち經濟上の各階級間（地主階級、企業家階級、資本家階級、勞働者階級）の利害の衝突を如何に緩和すべきかの問題を指すものであつて、勞働問題はその中心をなす所のものである。（二四―二五頁）

以上の如く博士の社會史概念は、一見綿密である。だが、綿密は必ずしも明確と同義語ではない。博士のこの概念規定の特徵は、數個の特殊概念の名稱を直ちに普通概念の名稱を以て置き換へることに在る。卽ちたとへば、社會問題の歷史は直ちに社會史なる最も普遍的なる名稱を以て置き換へられるのである。だが社會問題の歷史は「社會問題史」もしくは三浦周行博士の著書の如く「國史上の社會問題」で差支ないのみならず、却つて明確ではあるまいか。何故に社會問題の歷史を特に社會史と名付けなければならないのであるか。その理由の如きは、博士の全く問題とせられざる所であつて、直ちに『今日普通に所謂社會史なるものは』云々と說明される。卽ち博士にとつては、『今日普通に所謂』が理由なしに正當である。だが、『今日普通に所謂』は必ずしも常に學問上の見解と一致するものではない。

假に今、社會問題の歷史を以て社會史とする主張を認むとするも、なほ博士の概念規定には混亂あるを免れぬ。何故か。前に見たやうにこの場合には、第一、第二、第三義の三種の區別がある。而して『第二義に於ては、社會階級の經濟問題に限り、第三義に於ては、すべての點についてこれを經濟上の關係にのみ限定せんとする。』（二五頁）かくの如き純粹經濟上の問題たる社會問題の歷史は、當然に經濟史の對

象たるべき筈である。しかも事實博士は黒正氏との共著「日本經濟史」においては、この「日本社會經濟史」において特に社會問題の節において論ぜられる所の或るものをも、特に社會問題とせずして論述してをられるではないか。然るにもかゝはらずなほ博士は、純粹經濟問題たる社會問題の歴史も、經濟史と全く別個の科學、社會史でなければならぬと言はれるのであらうか。

又博士は、社會問題の歴史と並んで『人類の結合關係たる社會そのものの發達』を對象とする歴史をも亦社會史と認められるのであるが、かくの如き内容の異なる二、三のものを等しく社會史と名付くべき理由は何處にあるのか。かく博士が何等特殊の理由なくして内容の異なる二、三のものを等しく社會史となす限り、もし人、政治史も經濟史もひとしく社會史なりと主張するとき、博士は如何なる理由に基いて、この主張を斥けんとするか。

右の如く博士の社會史の概念規定の不明確なるは、一の科學としての社會史の指導概念の不明確に基くと私は信ずる。學としての社會史を論ぜらるゝ限り、博士は徒らに『今日普通に所謂』に拘泥せずして獨自の指導概念を決定せらるべきではなからうか。

四　時代區分の問題

博士の日本社會發展の時代區分は、大正十三年の「日本社會史」以來ほゞ一定してゐる。即ち一、氏族制度の時代、二、郡縣制度の時代、三、莊園制度の時代、四、分裂的封建制度の時代、五、集中的封建制度の時代の時代區分がそれである。博士が從來の種々の時代區分を論て、獨自のそれを採られたのは、これを以て各時代の特徴を最もよく表はすものと確信せられるに基くものであらうが、私はこれに對しても種々の疑問を有する。

先づ「郡縣制度の時代」たる特徴付けの適否を問題としたい。博士は國史家の所謂る上古の時代を氏族制度の時代と名づけるに當つては、當時の『社會組織の根柢をなし、政治、經濟關係においても度外視し得ざる』もの（五二頁）としての氏族制度に着目せられたのである。かゝる態度は私の全く賛同する所である。然るに今國史家の所謂る中古前半の時代の特徴付けを試みるに當つては、專ら行政的形式にのみ着目せられる。蓋し、博士に從へば、『郡縣は上に名實共に政府を總括する主権者があつて、全國を郡縣等の行政區劃に分ち、各行政區に對してその任命せる官吏を派遣し、政務を執らしむるものであつて、』（二九五頁）全く行政上の概念である。かゝる行政的形式に從へば、博士も他の論文において言へるが如く、明治以後も亦郡縣制度の時代と云ふことを得る。（『經濟史研究』第一號、一九頁）苟も社會經濟史の時代區分を爲す場合において、かゝる、中古前半についても亦明治以後についても妥當する如き單なる行政形式を以て特徴付けを爲すことの不適當なることは、殆ど言を用ゐないと思ふ。

次に封建社會を、『諸侯相互の關係が分立的なると統一的なるとによつて』分裂的と集中的とに分つ區分法は、博士がその著書にこれを用ゐられて一般に大いに普及するに至つたもので、黒正博士を始めとし、

これを無條件に受け容れらるゝ學者が甚だ多いのであるが、私は夙にこれに對しても疑問を抱いてゐた。博士が德川時代の社會體制を以て中央集權的と見られるのは、一應首肯すべきものの如く思はれる。それは、諸侯が幕府の統制に服する意味においては、その末期を除けば完全に「統屬的」であり、統一的である。德川幕府の統制力は確かに強い。武家諸法度其他の法令は諸侯を制規する。參覲交代制度によつて諸侯は隔年江戶へ上る。等々の統制形式は、中央集權なる語の表面的な理解においては、集權的なる形容を許すかの如く思はれる。しかしその語の嚴密なる理解においては、中央集權とは國家機關の一切の本質的組織、卽ち行政（官吏）組織、財政組織、軍隊組織等々が完全に統一されてあることを意味する。德川時代の社會體制がかゝる嚴密な意味において中央集權的でなかつたことは、こゝに纏述する迄もなく明白にして一點の疑を容れない。かくて私は、德川時代を以て集權的封建制度の時代となす博士の見解をば、所謂木に竹を接げるが如き概念と見做すものであつて、到底、これを採用することを得ないのである。

因みに、この點に關して博士の師故內田銀藏博士は、正當にも、德川時代を以て『其の當時の勢よりして、未だ封建を廢して郡縣となし、眞に中央集權的の政治組織を構成するに至らざりき。』（內田博士著「國史總論及日本近世史」二一八頁）と言はれ、又『蓋し封建と云ふ事は、或る程度までの地方分權を意味する』（內田博士著「近世の日本」五八頁）と言はれてゐる。私は內田博士のこの見解を以て正しとする。失禮乍ら、博士は師のこの見解を更に一考せらるべきではなからうか。

更に博士の「分權的封建制度」なる表現につき一言を費したい。

前揭內田博士の言を俟つまでもなく、『封建制は「地方から起つた」が故に、その生產方法の特性に制約されて本質上常に地方分權的である。』（服部之總氏著「明治維新史」二〇〇頁）從つて、本庄博士の「分權的封建制度」なる表現は、譬へば「木の木造家屋」といふが如く、一の重複形容語に過ぎない。その嚴密なる學問的表現として受取り得ざること明かであるが、假に一步を讓り、意義ある表現なりとするも、支持し難きものであると、私は思ふ。何故か。

博士の所謂る分權的封建制度の時代は、『鎌倉以後、德川以前』である。それを分權的と名づける所以は、その時代にあつては諸侯が分立割據して統屬を缺いたといふに在る。しかし、嘗て細川嘉六氏が正當に指摘されたやうに、（「新興科學の旗の下に」第二卷、第十號）この見解は事實に反する。事實は、その時代において全く「統屬」が失はれて、分立割據の狀を呈した期間は、北條氏の末葉より「建武中興」の終末に至るまで、及び足利時代中葉以降戰國時代までであつて、統屬を缺いて分立割據せることは、鎌倉室町時代の全體を貫く特徵でなかつた。この事は、博士自身も亦他の著書において『この時代（分權的封建時代）は主として鎌倉時代、室町時代、更には戰國時代をも包含し、約四百年の長き時期に亙るものであつて、……社會の支配權は武家に移り、形式上には朝廷が主權者ではあるが、實際上の總括的支配權は幕府が之を有し、幕府の任命する守護地頭が一種の封建諸侯とし

て一造の地域を統治した。』（「日本經濟史」二〇一頁）と言はれること によつて、明かに認められた所である。

こゝに於てか、博士の「分立的」――鎌倉、室町時代を通じて――なる見解は、史實に反すると同時に博士自身の認識とも矛盾するものであつて、頗る念の入つた誤謬と斷ぜざるを得ないのである。

五　奴隷制度に關する問題

（一）　奈良朝時代は奴隷經濟時代か。

今日奈良朝時代を以て奴隷經濟時代となす史家は多い。本庄博士も亦その一人である。だが、その根據は未だ充分とは考へられぬ。博士はいふ。『奴隷は勿論種々なる方面に使役された。陵戸が山陵の掃除に當つたり、其他の官の奴隷が、官廳の雜用に使はれたことはいふ迄もないが、最も重要な方面は、工業的勞働や墾田の開發に盡したことであらう。特に後者の方面に勞力を要することの極めて多かりしため、奴隷なるものが當時多く存在したものであるとも考へられる。又、佛教興隆の結果として寺院殿堂の建築などにも、多くその勞力が利用せられたことであらう。……墾田の開發は、額に汗して庶民階級のものが行ひしと共に、また奴隷の勞力を搾り取つた結果である。大佛の鑄造は決して高市麿國……等の鑄物師のみが成したものではなく、計り知ることの出來ぬ奴隷の汗と血との結晶で出來た部分が少からず存する。この意味に於て我々は、この文化燦然たる奈良朝時代を奴隷經濟の時代と稱へ得る。』（八四―八五頁）と。卽ち博士の根據は、『當時多く存在した奴隷』。『計り知れぬ奴隷の汗と血との結晶』が、當時の文化の下積に在るといふに在つて、言葉の上では立派な根據である。だが、博士が多いといふ所に付した註は、瀧川政次郎氏の『當時奴隷は全國民の一、二割を占む』といふ說である。

今本庄博士の援用された瀧川氏の論文「本邦古代奴隷の人口と其の分布」（「我等」第五卷第八號）によれば、『明かに奴隷の名稱を以て呼ばるべき』『家人奴婢の全人口に對する割合は……一割乃至二割と云ふが如き數であつた。』『されば奈良時代の勞働は家人奴婢の奴隷勞働より小作人の自由勞働の方が多かつた。』――卽ち氏は奴隷人口は全勞働人口においても支配的でなかつたと主張される。――かくして氏は、その著「日本社會史」においてこの推測を根據として、『この時代を奴隷經濟時代と呼ぶことは不當なり』とし、又『本庄博士はこの時代に於ける奴隷階級の勞働を過重視』したと非難される。氏の本庄博士に對する非難は確かに正當である。何となれば、前にも見たやうに、本庄博士は、『言葉の上では奴隷勞働が立派に支配的であつたかの如く表現されるからである。しかも一方において博士は、單なる言葉のみでは心元なしと感ぜられてか、瀧川氏に數的根據を求められ、それを小文字を以て註に揭げられる。云ふまでもなく、學問上の主張の根據としては、文字の大小に拘はらず、單なる言葉よりも數字がより有力である。從つてこの場合博士の眞實の根據は、むしろ『一割乃至二割』なる數字にあると解するも、決して博士の眞意を無視するものではあるまい。だが、それは果して充分の根據であらうか。周知の如く、典型的奴

隷經濟の社會たる古代ローマにおいては、自由人に數倍する奴隷が存在したと傳へられる。古代ローマ程ではなくとも、當時の如く專ら農業及び小手工業の行はれたる社會においては、少くとも奴隷人口が勞働人口の過半を占める場合、卽ち奴隷勞働人口が支配的な場合でなければ、その社會を奴隷經濟の社會と呼び得ないではあるまいか。尤も瀧川氏の說と雖も推測に基づくもので、未だ確說とは言ひがたいであらうが、氏の說を採用しつゝかの時代を奴隷經濟時代と稱するは、明かに不穩當ではあるまいか。こゝに於てか、私は博士におすゝめしたい。博士が瀧川氏の說を根據とされる限り、博士の當時を以て奴隷經濟時代とする主張を撤回せらるべきであり、然らざれば單なる言葉以外積極的なる數學的根據を探究せらるべきである、と。

（二）　奴隷發生原因

本庄博士は『奴隷發生の原因』として、征服、掠奪、出生、人身賣買、犯罪等を列擧される。（七九頁）そしてそれ以上に究明を試みられない。だが、それは明かに皮相なる見解である。私は奴隷發生の究極原因を、原始社會內部における生產力の發達に求むべきであると思ふ。生產力の發達せざるときには、氏族團體相互間の鬪爭の結果勝者の手に歸した捕虜は之を食ひ、もしくは之を殺した。何となれば、たとへ捕虜を自己の社會に拉し來るも、之に課する勞働もなく、却つて之を養はねばならなかつたから。然るに生產力の發達は餘剩の生產物を生ずるに至つたのみならず、更により多くの勞働力を必要とさへするに至つた。こゝにおいて捕虜を殺さずして自己の社會に止め置き、勞働力を提供させたのである。これ卽ち奴隷制度發生の根本原因であつて、博士の列擧されたものは、その直接原因もしくはそれの再生產の條件たるに過ぎない。

因みに、博士の社會制度の發生原因の考察は、こゝに一々檢討する遑はないが、概ねこの類であつて、その究極までの究明を缺いてゐる。此點を私は、他の機會において詳細に批判したいと思ふ。

六　封建社會の意義

內田博士は嘗て封建の意義を論ぜられ、封土關係と主從關係とをその二要素となし、其の他のものを從屬的なるものと見、更に都市における商家の主人と使用人との關係等も、封建的關係の影響を受けてゐたと述べられた。（「近世の日本」五五——五七頁）內田博士のこの見解は、卑見によれば、なほ不完全なるを免れぬが、本庄博士の說は、大體において內田博士のこの見解を——從つて缺陷をも——踏襲し、之を布衍——改惡された點もある——されたものに過ぎない。

次に本庄博士の封建制度の本質につき述ぶる所を見よう。

『封建制度は、上に形式上の主權者あり（朝廷）、全國各地に諸侯があつて之に臣從するも、諸侯は各自一定の土地を占有し、例外の場合を除く外、その封土人民を世々統治し、その領域內に於ける人民は臣下として諸侯に服從して、その生業を營んで居る。而して諸侯の下には更に其家臣が一定の土地を受けて、其封土人民を治むること、諸侯の場合と同樣である。かくの如く封建制度は上下相貫の主從關係と封土關係と

に依つて組織する所のものであつて、この人的關係と土地關係とは、封建制度に離る可らざる要素をなすものである。』(一九五頁)

この見解において先づ注意すべきは、「封土關係」と「主從關係」とを二個の要素として立て、これを内的連絡において統一的に把握せられざることである。その事は博士がこの兩關係を、「人的關係」と「土地關係」にまで抽象せるにより明かである。蓋し「封土關係」を「土地關係」となし、「人的關係」に對立せしめるとき、それは明かに「非人的關係」でなければならぬ。だが「封土關係」は決して「非人的關係」ではない。それは土地の分封によつて結ばれたる「人的關係」である。封建的大土地所有關係である。この關係の政治的表現が「主從關係」、臣從關係、封建的專制政治であり、その觀念形態的表現が、封建的「忠義」である。

博士は又この「封土關係」の基礎を明確に把握せられない。卑見によれば、この「封土關係」――封建的大土地所有關係は、小農經營を特徴とする農奴制度をその基礎とし、農奴制度は、農業が全生產中、主要生產であり、自然經濟が支配的なることを前提する。從て封建社會における工業的生產は農家經濟と結合せらるゝか、然らざるも小規模なる手工業たるに過ぎない。かゝる封建的生產關係の上に封建的社會體制が打ち立てられ、封建的イデオロギーが形成されるのである。

かくの如く、封建社會をば、その土臺より上層建築に至るまでを、内的連絡において統一的に把握することは、博士の殆ど關心を有せられざる所であつて、博士の封建社會の本質――博士の所謂る「封建制度に離るべからざる要素」――の把握は、主として政治的形態の方面に着目して爲される。とは云へ、博士は私の以て封建社會の土臺となす封建的生產關係を全く度外視されるわけではない。博士は本書において多くの頁を割いて農民の生活關係を述べられる。のみならず、『抑も當時の封建制度なるものは、經濟上より見れば、土地を主要なる生產手段とし、農民を唯一の生產階級とし、その上に武士と稱する特權階級が支へられて居つた組織である』(六二〇頁)とまでも極論――『農民を唯一の生產階級』とまで見るは極論ではないか――される。だが、博士においてはこの封建的社會體制の支柱たる「經濟上の」事實――農奴關係――は、『封建制度に離るべからざる要素』ではないのである。

次に博士は、封建社會の成立に關し不可解なる主張を有せられる。博士に從へば、『凡そ封建制度なるものは、不安定不確實なる社會狀態より脫して安定を得んとする要求より生れ出でたものである』(一九六頁)他の社會形態の成立については、これと異なれる說明を加へらるるを以て見れば、これは封建社會の生成に特殊なる條件と見られるやうであるが、かゝる『不安定不確實なる社會狀態』より生るゝものは、封建社會のみに限らない。如何なる社會もその崩壞期、沒落期に至り、社會的均衡破るゝに至つては、不安定不確實なる社會狀態を現出する。封建社會そのものもその崩壞期に至つて、不安定不確實なる社會狀態を現出せることは、博士自ら本書に詳述せらるゝ所である。從つてこれを以て封建社會に特殊なる生成の條件となすは、明白に誤謬である。

もし之を以て特殊條件とせられたるに非ずとすれば、それは何ものをも說明するものではない。

七　結

以上の諸問題のほか、私はなほ多くの疑問を有するが、それへの論及は遺憾ながら他の機會にゆづらねばならぬ。また以上の諸問題の論述も紙數の制限のために、充分に意を盡すことが出來なかつた。しかし、何れも要點には觸れたつもりである。

もとより、後學の疑問、誤解に基づくなきを保しがたく、また見當違ひの批判もあるであらう。しかし、私の提出せる諸疑問は、何れも多少の根據あるを自信する。もし博士にして以上の諸疑問を取り上げられて示教を賜はらば、筆者自身の啓蒙に資する多大であつて、幸福之に過ぐるはない。而して私は、全く率直に語ることを努めた。從つて言辭或は不遜に亙るものなきを保しがたい——之なきを信ずるものであるが——が、その點は偏へに博士の御寬恕を乞ふ次第である。

——一九三〇、一、三〇——

在外正貨のカラクリ

山崎靖純

去る一月二十三日、東京銀行クラブ晩餐會の席上に於て、山本達雄男爵の試みた演説の中に、『現在日本銀行の兌換準備は非常に多いから、一億圓や二億圓の正貨が流出しても、少しも兌換制度運用に支障を來たすことにはならぬ、從つて我々は正貨の流出を怖れる必要はない』と云ふ意味の言葉があつた。この說は別に耳新しいものでもないが、金解禁を樂觀する人々のいつも數へる材料の一つとして眺め得るのである。然し乍ら、私たちの考へでは、一億や二億の正貨の流出そのものを怖れる譯ではないが、それが流出する原理を怖れない譯にはゆかないのである。蓋しこの原理が變らない限り、正貨の流出にも止め度が無からうからである。そして又實際に於て一億や二億の正貨が流出する間に、積極的な意味に於て、それの流出する原因、卽ち我が國際貸借の逆轉原因を匡正することは困難であると云はなければならぬ。すると現内閣のやうに、既に舊平價による金解禁を行つた場合には、正貨の流出原因を、差當つては消極的方法によつて、卽ち緊縮、消費節約によつて、そしてそれでもいけない場合には通貨の縮小によつて匡正しなければならぬことになる。この場合には非常な不景氣と從つて失業と生活難とが襲つて來る。山本男のやうな人には、こういふ現象すら別に怖れる必要はないであらうが、大多數國民にとつてはこれが一番怖ろしいのである。そして、事實、そういふ狀態が一歩は一歩と到來しつゝあるではないか。

そこで、金解禁を行つても殆ど金は流出しない、そう云ふ狀態の見据えがつかない限りは金解禁を行はないと云つて國民を安心させることは、民政黨内閣の人々にも矢張り必要であつたのである。然るにこれは井上藏相は、そう云ふ狀態を組閣後わづか半歳にして招來し、去る一月十一日に金解禁を行つた。卽ち昨年の貿易を見れば、上半期に二億八千二百萬圓の大入超を示したものを、下半期に於て二億一千二百萬圓の輸出超過を招來せしめて差引入超を七千萬圓に縮小し、朝鮮臺灣の入超一億圓を併せても、猶中面約一億七千萬圓の貿易外受取勘定で相殺されるので、昨年の我が國際貸借には略ぼ出合がついたと云はれて居る。而して一方對米爲替は昨十一月二十一日に金解禁期日が決定した時には、既に四十九弗に恢復して居た。そして更に在外正貨に至つては、井上藏相の手許に讓れた、昨年六月末に八千三百餘萬圓に過ぎなかつたものが、現内閣成立以來正金銀行から漸次在外資金を買上げた結果、昨十一月二十一日までに二億三千七百餘萬圓を増加し、自由に處分し得べき在外正貨の總額は十二月末までに三億四百萬圓に達したのである。これと正金銀行が英米に於て契約した合計一億圓を限度とするクレヂイツトを併せると、要するに四億圓の在外資金の準備が出來たことになるので、旁々貿易狀態も改善して居るから、入超期に當面して金解禁を行つても、在外正貨の拂下げで

充分有り餘るから、國内から正貨の流出することは萬あるまい、あつても極めて輕微なものであらうとは當時井上藏相が新聞記者を通じて天下に誇つた所であつた。そこで大向ふの民衆の中には、此事實を見て大いに安心もし、井上藏相はまことに偉い人だ、わずか半歳足らずの間に、かくの如く財界の基礎條件を好化して、今や金解禁も何等憂ふるに足らざる狀態を築き上げたと感心した人も少くなかつた。私とてもこの表面的な事情をたゞ表面的にのみ眺めるならば、井上藏相は日本一、否世界一の財政經濟の手腕家であると云ひたくなる。だが一寸待つて貰ひたい、盾の他の半面の事情は何うなつて居るか、また其の後の事實の經過は何うなつて居るかを一應眺めて見る必要がある。

金解禁を近くやると聲明すれば、爲替相場が忽ち暴騰することは當然過ぎる程當然であるが、そうすれば爲替銀行と國内商工業者の打擊が餘りに急激にして且つ深刻になることを免れない。そこで若し爲替相場が自然の力でヂリヂリ恢復して平價附近に來つた時に金解禁を行ふのであつて決して無理には急がないと聲明すれば何うなるかと云ふに、今度は爲替相場の著しい恢復は決して望み難いばかりでなく、逆に少しづゝ下落するを免れなかつたのである。何故かと云ふに、爲替銀行が或る爲替相場に於て外貨資金を圓貨を以て買ふ必要が生じた場合があるとして、將來その外貨資金を先の爲替相場よりも高い點で賣り圓資金を受取ることになるとすれば、必ず買つた時よりも少い圓資金が還つて來る、卽ち爲替銀行の損になる。そこで若し近く金解禁を行ふことが確實であるとすれば、爲替銀行は出來るだけ外貨を高い爲替で買ひ、或は寧ろ成るべく買ふまいとし、そして外貨を賣る方だけは、成る可く爲替相場の低い間に賣り逃げやうとする爲に、爲替相場は急速度に奔騰する可能性を持つのであるが、反對に金解禁を爲替の自然恢復の後に任せることになれば日本のやうに大勢輸入超過で、從つて大勢外貨資金の缺乏する國に於ては、何も爲替銀行が損をしてまで逸早く外貨資金を賣らなくとも、必ず將來買つたよりも低い爲替相場で卽ち有利にそれを賣り得る爲に、結局爲替相場は大勢軟弱になるを免れないのである。それ故にこの場合には實際問題として舊平價金解禁の機會は永久にやつて來ない。そこで、矢つ張り近い將來に金解禁を斷行すると稱して、爲替相場を昂騰せしめると共に、それを餘りに極端な一氣の暴騰にも導かず、四五個月もかゝつて漸騰せしめ、且つそれを可能ならしめる爲に爲替銀行の損害を無からしめると云つたやうな三つの要求が必要になつて來る。而してこの要求に答へたものが在外正貨の買上なのであつた。卽ち各爲替銀行は昨年の下半期に於て、輸出超過によつて生ずる外貨資金を、その爲替レートを取り極めると同時に、若くはその前に、逸早くそれよりも低い爲替レートで市場に賣りに出た。この場合にこの不利な爲替レートで外貨を買ひ向つたものは、唯政府の命を受けて居る正金銀行のみであつたが、正金も亦その買つた外貨を右から左にその時の爲替相場若くはそれ以下で政府に賣り渡したので何の損害もなかつた。かくして昨下半期の輸出超過時代に各爲替銀行が獲た外貨資金は、外の年ならば上半期の入超時代に於て生じた海外借入金の返濟に充てられるのが普通であるが、昨年ばかりはその海外借入金をそのまゝにして置いて、たゞ只管に正金銀行を通じて政府に買ひ上げられて終つたのである。卽ち一方に海外借金が殘り乃至は新しくそれが増加して、他方に在外正貨が激増し、一種の兩建勘定となつたのであ

る。而して政府が低い爲替相場でこの巨額の外貨を買つた爲に生じた損害は一千萬圓以上と見積られ、それが預金部勘定であるにせよ、何の勘定であるにせよ、その損害だけは悉く一般會計によつて補塡し、爲替差損金として來る議會の承認を求むべきものであるが、一説には政府はこれを預金部の利益金で胡麻化す腹であるとの噂もある。

それはさて置き、右の如き事情の下に前述的増加した在外正貨は、今何うなふ状態になつて居るかと云ふに、ほゞその金額に近いものが含まれて居る日本銀行の代理店勘定に於ては、現在約二億數千萬圓の殘額を示して居るやうに見えるが、實質はもう一億二三千萬圓とはあるまいと推定される程の状態に陷つて居るのである。それは昨十一月二十一日、愈々金解禁期が決定し、爲替相場が四十九弗を唱へるや、今まで日本國内に安い爲替相場で外貨を賣り圓資金を作つて持つて居た外國爲替銀行が、今度は一齊に圓を以て外貨を買ひ始め、それに續いて日本側の爲替銀行も出超期に生じた外貨を悉く政府に賣上げた爲に入超期を目前に控えて輸入資金が極度に涸渇し、是も亦前後して外貨買入に殺到した。

是に對して極力外貨を賣向つたのは、今までそれを買ふ方にのみ廻つて居つた正金銀行である。然し乍ら正金銀行とても、同じく過去數個月に買つた外貨を悉く政府に賣上げた後であるから、固よりそのまゝでは賣るべき外貨は少しもない筈である。そこでこの正金の賣向つた不思議な外貨の正體は何かと疑惑を起したが、物く何も難かしく考へる必要はないので、要するに政府所有の在外正貨を正金が代つて賣つたに過ぎない。それにしては日本銀行の代理店勘定が僅微中少しも減らなかつたではないかと、いぶかる人も多くあるやうであるが、それは政府が自己所有の在外正貨を正金に拂下形式をとらないで、その紐育支店に預金する形式をとり、正金はその預金された在外正貨を他銀行と自分の取引先たる輸入業者に賣向つた爲に、在外正貨の表面金額は殆ど減らなかつたのである。然し今日ではこの關係で正金に預金され、實質的に無くなつて居る在外正貨が一億圓以上、政府の外貨債利拂の爲に消費されたものが二千數百萬圓、海軍の軍器の購入の爲に昨年末買はれたものが一千萬圓以上、金解禁後今日までに正金、臺銀、三菱その他各爲替銀行に賣られた金額が五千萬圓以上、そこで結論として在正外貨の表面金額は何と出て居やうとも、實質は一億二三千萬圓もない筈であると推せられる次第である。それなら井上藏相は何故に拂下形式を採らないで、こんな兒戯に等しい小細工をするかと云ふに、それには二つの意味がありさうに思はれる。一つは在外正貨を豐富らしく見せて置きたいこと、そして今一つは拂下にすれば井上藏相の嫌ひな通貨の收縮が起るから、當分正金と特別の諒解(預金利子などを拂はぬ)の下に、預金形式にしておくことであらうと私は推察する。在外正貨の實質が右のやうに不足して來たので、萬止むを得ず解禁後早々に正貨の流出が始まり、日本銀行の兌換額は今日早くも六千三百五十萬圓と云ふ巨額に達したのだから、昨秋井上藏相の樂觀論を信じた人には實に意外の感なきを得ないやうである。こんなことは、私などには『よせ算』『引き算』を知つて居る程の人には誰にでもわかる筈だと思つて居たが、矢張りそうは行かぬと見える。此處で正貨の點で、早くも違算を來した現内閣側の人々は、今度は戰線を一つ後退して『金の一億や二億の流出怖るゝに足らず』と云つて居るが、それては金が流出すると云ふ原理が近い將來に匡正されると云ふ確信があるのであるか。疑問、疑問大に疑問であるがそれは又他日の機會に讓らう。

資本王國の財産調べ

——川崎財閥と大川事業國——

高橋龜吉

川崎財閥論

一、川崎財閥の産業支配網

最近まで、財閥「川崎」と云ふときには、關西の川崎と關東の川崎とが、竝び稱せられ、而して關西の川崎が、關東の川崎より資力も大であり、遣方も派手であり、ために、動もすると關東の川崎は、關西の川崎の蔭に隱れて仕舞ひ勝であつた。所が、金融恐慌後この兩者の關係は一變した。關西の川崎が脆くも沒落したに反し、關東の川崎は、長年の消極的經營の下に充實せる資力を提げて、財界の檜舞臺に登場し來り、今や單なる關東の一資本家「川崎」ではなく、天下の川崎財閥として、その役割を演ずるに至つたのである。

川崎が、斯の如き飛躍的發展を爲し得た所以如何。顧るに川崎家はもと水戸藩の爲替御用達より、明治維新後間もなく銀行を經營するに至つた。しかし先代八右衞門は、當時の大藏次官郷純造の娘を納れて實子金三郎(當主八右衞門)に配した一事を以ても明かなる如く、何れかと云ふと政商としての色彩が濃厚であつた。然るに當主八右衞門は、當に政商たるを避けたるのみならず、財界の表面に顏出しすることすらも好まず、退いて只管にその家業たる川崎銀行と川崎貯蓄銀行との育成に努力した。かくて、兩銀行の内容は充實し、それと共に、川崎の富力も增加した。斯樣にして、その發展の基礎が成つた所へ、あの金融恐慌が勃發したのである。

金融恐慌の發端に由つて、川崎の實力はテストされた。之れを見た財界世話業の井上準之助氏は、當時、獨立營業困難の銀

局に在つた第百銀行を之に屈すことを策し、遂に、川崎銀行は第百銀行と合併（實質は併合）して今日の川崎第百銀行の成立となつた。此の結果、川崎は、少からぬ荷物の資産を背負込まされたが、しかし、第百銀行の持つてゐた良い得意先の多くを持つこととなつた。一體、川崎銀行は内容は宜しかつたが、得意先が狭かつた。然るにいま第百を合併することに由つて、多少の荷を背負込んで、必要な得意を買込んだ結果になつた。のみならず、之れを機會に、從來、川崎一家の手に堅く鎖されてゐた川崎家の事業は解放せられ、八右衛門は表面から綺麗に手を引いて、仕事は若手に一任せられるに至つた。

ここに、川崎財閥の陣營は一新した。斯くて、川崎財閥はその豐富なる金融資本を背景として、生命保險に、損害保險に、最近では電車事業に迄、目覺しい進出をなすに至つたのである。

いまや、川崎財閥の支配及び關係會社は、その主なるものだけでも、五十二社を算する。うち、川崎の支配下に立つものは、直系會社十四、傍系會社四、直系會社の支配的子會社十一、同上準支配的六、合計三十六社である。この外若干の關係ある會社が全部で十六社ある。その内譯は、川崎の直接關係會社が六社、直系會社のそれが十社である。而して、以上總計五十二社の公稱資本金は四億五千萬圓に垂んとし、その拂込資本金は二億二千萬圓を超えて居る。

而してこれら諸會社の中樞たり統制機關たるものは川崎定徳合資會社であつて、外に、その外廓として合資會社共濟會、及び株式會社千茂商會の二つがある。此の二社は、ある時期に、ある必要の下に夫々生れたものであるが、今日では最早その必要なく、早晩統一されるものである。兎に角これらのものが、安田王國に於ける安田保善社の如く、三井王國に於ける三井合名の如く、川崎系事業の統制に任じて居る。而して、これら三つの中樞機關に對する資本は、表面上の名儀は色々であるが、實際には、全部川崎一家の把握せるものなることは勿論である。最後に、以上川崎系諸會社資本系統を明確にする爲、例に依つて圖解すること別表の如くである。

二、川崎王國の人的支配網

川崎王國に於ても亦、その支配下に立つ銀行會社の表面上の要位には、夫々川崎一門の人々が據つて居る。日本火災保險や日華萬歳生命保險の社長をして居る川崎聚は、當主八右衛門の實姉の倅であり、國華徴兵の社長や、千葉合同銀行の頭取をして居る川崎甲子男は、聚の實弟である。又川崎貯蓄銀行の取締役會長や、鎌倉銀行の取締役をして居る伊東秀之介は、當主八

川崎財閥事業系統圖

（備考）子會社中＊印は支配的、無印は準支配的。△印は單なる關係會社。傍系會社中＊印は準支配的のもの

川崎定德合資（會）
共濟會
千歳商會

- 直系會社
  - 川崎第百銀行
    - ＊常磐銀行。＊千葉合同銀行。＊博多銀行。＊所澤銀行。＊明和銀行。足利銀行。
    - 鎌倉銀行。町田銀行。△遠州電鐵。△東信電氣。△矢作水力。
  - 山八銀行。
  - 川崎貯蓄
    - 京王電軌。橫濱火災。△日清生命。△日本海上保險。△帝國生命。△東武鐵道。
    - △日清紡績。
  - 川崎信託。
  - 日本火災保險 — ＊帝國火災。＊常磐火災。大北火災。△阪和電鐵。
  - 日華萬歲保險 — ＊池上電鐵。＊日本ビルディング。＊八千代生命。△中央毛絲紡績。
  - 國華徴兵保險。
  - 京成電軌 — ＊成田鐵道。
  - 相生無盡。常盤無盡。川崎倉庫。東京搾油。東京倉庫。日本商事。
- 傍系會社 — 南洋貿易。日本電線。東京製線。紅葉館。＊野田商誘銀行。
- 關係會社 — 七尾セメント。天龍川電力。東京橫濱電鐵。北海道鐵道。西武鐵道。常總鐵道。

右衛門の實弟で、伊東家を襲いだ男だ。川崎一門の連中が、その關係銀行會社に於て如何なる位置を占めて居るか、更に詳しくは次の表示の如くである。

川崎八右衛門（川崎定德合資會社代表社員）

川崎肇（日本火災保險取締役社長）、日華萬歲生命保險取締役社長、藏王鑛業取締役、東京報知機取締役、川崎第百銀行取締役、程ケ谷ゴルフ取締役、常盤火災海上保險取締役社長、國華徴兵保險監査役、博多銀行取締役頭取、日本ビルディング取締役（代表）、阪和電氣鐵道取締役、東武鐵道取締役、日本商事取締役社長、川崎信託取締役社長、南朝鮮鐵道取締役。

川崎友之介（常盤銀行監査役）東京搾油監査役、四國水力電氣監査役、東信電氣取締役、輸出國產取締役、矢作水力取締役、日清紡績監査役、南洋貿易監査役、木曾川電力監査役、日華興業監査役、天龍川電力監査役、東京倉庫取締役。

川崎芳男（川崎貯蓄銀行監査役）

川崎甲子男（合資會社共濟會代表社員）國華徴兵保險取締役社長、日本商事自動車取締役（代表）藏王鑛業取締役（代表）千葉合同銀行取締役頭取、明和銀行取締役頭取。

川崎秀雄（川崎貯蓄銀行專務取締役）

伊東秀之介（川崎貯蓄銀行取締役會長）　町田銀行取締役、所澤銀行監査役、鎌倉銀行取締役。

當主八右衛門は、流石に川崎をして今日あらしめた男だけに、努力家でもあり、又一家の見識を備へて居る。しかしその他の者は要するに御坊ちやんだ。從つて、川崎系の銀行會社の實際的統轄をしてゆく者は、他の諸王國と同じく、その番頭連である。番頭の重なる者は、杉浦甲子郎、高梨博司、河合鐵二、山崎清、河合良成、後藤國彦、及び大塚良治等である。

川崎財閥は、その支配下の銀行會社に對し別に整つた統制法を未だ有せず、單にその信認する番頭連を差遣して、これに一切の權限を委ねて居る。而して番頭連に對する監視役としては、八右衛門自身これに當り、足らざる所は高梨博司をして補はさせて居る。從つて高梨は川崎財閥の參謀長格である。尤も、高梨の先輩には杉浦甲子郎が居るが、これは單に川崎子飼の長老で、今日その實際の仕事は若手に委かしてゐる。而して商際の番頭連には夫々、その受持部分がある。例へば河合鐵二は銀行を、山崎清は損害保險を、河合良成は生命保險を、後藤國彦は電車をと云ふ工合だ。川崎にはこれらの番頭の外に顧問格として郷誠之助が居る。郷は當主八右衛門の妻幸子の兄に當る。從つて郷は八右衛門の義兄に當る譯だ。殊に郷は財界の長老でもあり、旁々川崎王國の大事に就ては何時も相談に與かつてるやうだ。次にこれら川崎王國の番頭連が、その金融資本を背景として、如何に多くの銀行會社に君臨して居るか、その一斑を示すと左の如くである。

杉浦甲子郎（千歳商會取締役代表）　常盤銀行取締役、藏王鑛業取締役、足利銀行監査役、所澤銀行取締役、野田商誘銀行監査役、川崎倉庫監査役、東部電力取締役、茨城瓦斯取締役、川崎貯蓄銀行監査役、東京倉庫監査役。

高梨博司（川崎第百銀行常任監査役）　足利銀行取締役、南洋貿易取締役、川崎倉庫取締役、常盤銀行取締役、池上電氣鐵道常任監査役、東京搾油監査役、遠州電氣鐵道監査役、有隣生命保險監査役、川越紡績取締役、明和銀行取締役、川崎信託監査役、京王電氣軌道監査役。

河合鐵二（川崎第百銀行常務取締役）　日本火災保險取締役、所澤銀行取締役、常磐火災海上保險取締役、野田商誘銀行取締役、博多銀行取締役、川崎倉庫取締役。

山崎清（日本火災保險常務取締役）　關東農具製作所專務取締役、湘南興業取締役、日本ビルデイング取締役、常盤火災海上保險取締役、大北火災海上運送保險取締役。

河合良成（日華商談生命保險專務取締役）　日本ビルデイング取締役、中央毛絲紡績取締役、東京灣汽船取締役。

後藤國彦（京成電氣軌道專務取締役）　池上電氣鐵道專務取締役、成田鐵道取締役副社長、京王電氣軌道取締役、王子電氣軌道取締役、常總鐵道取締役、北海道鐵道監査役、西武鐵道監査役。

大塚夏治（川崎信託常務取締役）

三、川崎財閥の資本網とその支配力

川崎財閥の表面的資産は、川崎定德會社の三百萬圓、共濟會の百萬圓、及び千歳商會の二十五萬圓、合計四百二十五萬圓に盡きる。しかし川崎の資産はこればかりのものでない。現に、筆者の調査し得たるものだけでも、川崎家（定德、共濟、千歳及び川崎一家個人名儀のものを總括して川崎家の投資額とす）の株式投資額は、後に詳記する如く、總計約二千萬圓に達する。

ところで、問題は借入金如何であるが、川崎家の經營法は、その固定投資額を借金で賄ふやうなことはしないやうだ。萬一左樣な必要ある時は、川崎一家で投資せずに、銀行なり、貯蓄銀行なりに、自ら、投資さしてゐる。これ、前揭の如く、川崎系貯蓄に投資會社の多い所以だ。此の點、安田と對蹠的に違つてゐる。卽ち、かゝる場合、安田は、銀行自らに投資さす代りに、保善社が安田銀行より借金して投資する傾向を持つてゐる。顧るに、川崎第百銀行は、川崎系がその五八％の株式を所有し、これを自由に支配してゐるとは雖、根が、川崎と第百の兩銀行が合併したものだから、第百銀行を支配してゐた原家の勢力が今日も尙ほ川崎第百銀行に若干殘存して居る。從つて、保善社の安田銀行に對するが如く、傍若無人に川崎が川崎第百銀行を利用することは出來ない。川崎が、川崎第百銀行で借金すれば、原が同行に借金を申込んだ時、川崎側でこれを拒否し得ざるに至るからだ。而も今日資金を必要とする程度は川崎よりは原の方が遙かに強い。かうした譯から、川崎財閥は川崎第百から借金することを避けてゐる。だが、川崎が絕對的に支配して居る、川崎貯蓄よりの借金はどうかと云ふに、これには大藏省の監督が嚴重で、そんな借金は出來ない。加之、八右衛門の性質から推測しても、借金して迄事業投資をして居るものとは考へられない。されば川崎には大體借金なしと見て差支へないであらう。

次に川崎の投資會社の價値であるが、川崎の投資事業としては銀行、信託、保險の如き金融事業を主とし、此の外に、稍々注目に値ひするものとしては、電車事業位のものであつて、餘り惡いものはない上に、その投資は、日本火災、川崎貯蓄、京成電軌の如く相當良いものに、少からず集中されて居る。從つてその投資の主位にある川崎第百銀行の拂込百圓の株券時價が九十三圓ばかりだと云ふことを考慮するも、その實價は額面價額の二割增位に押へても過高ではないと思はれる。すると川崎の所有有價證券二千萬圓は、實價約二千四百萬圓に相當する。

しかし川崎には、上記有價證券以外、若干の不動產がある。

例へば定德會社は小石川に一萬坪ばかりの土地を持つて居る。坪當りの單價を七十圓とすれば、これだけでも七十萬圓となる。その他、筆者の調査に漏れた投資會社も多少あるであらう。いまこれ等をも考慮せば、川崎の資産は最低二千五百萬圓から最高三千萬圓位の間だと云ふことになる。

川崎の資産は、かく、高々三千萬圓に過ぎない。この程度の資産では川崎財閥など〻云へたものでない。にも拘らず、川崎財閥と稱するわけは、それが莫大な金融資本を持つて居るからである。川崎は安田と同じく、その支配下に數多の銀行、保險、信託會社を持つて居る。即ち、その支配下に立つ銀行は十一行、保險會社は八社、信託會社が一社ある。斯くて、川崎がこれらの銀行、保險、信託を通じて、その支配下に掌握せる預金及び責任準備金は六億九千九百萬圓を超え、それにこれら銀行、保險、信託會社の株主勘定を加算すると、總計七億八千六百萬圓となる。然るに、この内、川崎家自身の出資額は僅々一千五百萬圓に過ぎないから、川崎はその支配下に多くの銀行、保險、信託會社を所有せることに依つて、投下資本の實に五十二倍近くの巨資を左右し得る立場に居る。詳細は次表に由つて了解されたい。

（一）川崎支配の金融資本表

	川崎系諸銀行十一行計	川崎信託	川崎系諸保險八社計	合計
株主勘定	八〇、〇七[illegible]	一[illegible]、[illegible]五[illegible]	一三[illegible]、[illegible]八	八[illegible]、[illegible]五
預金又は責任準備金	[illegible]	三[illegible]、九九[illegible]	七五[illegible]、[illegible]八	六九九、[illegible]〇七
(A) 合計	[illegible]	四[illegible]、[illegible]九九	九八、九[illegible]	七八六、五[illegible]
(B) 川崎系所有資本	▲[illegible]、九五[illegible]	一、一〇〇	五、七[illegible]	▲八、七〇〇
(A)に對する(B)の率	[illegible]	[illegible]	五〇%九[illegible]	[illegible]
(B)に對する(A)の率	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
川崎家所有資本	▲[illegible]四四	四八	一、[illegible]〇七	▲一五、[illegible]九
(A)に對する(C)の率	一〇%六八	一〇%九九	〇%[illegible]	一〇%九[illegible]
(C)に對する(A)の率	五[illegible]八・〇〇%	[illegible]八・〇〇%	四四[illegible]・〇〇%	五[illegible]九六・〇〇%

（附記）▲印は、[illegible]に對する川崎家及び川崎系の投下資本不明に付き、それの明記されて居ないことを示す。

川崎財閥の資本力は大體この金融資本と川崎家の資産が源泉である。他に若干の川崎系重役の資産、及び支配會社の株主勘定等があるが、最も活動力に富んだ資金は、川崎家の資産とこの金融資本である。而して川崎家の資産を二千萬圓としても、川崎支配下の金融資本にこれを對比するならば、實にその二十六分の一弱に過ぎない。されば川崎の資本力は大摑みに云へば、その支配下に立つ金融資本だと云ふことになる。（豫定頁數を超過したから以下出來るだけ説明を簡略にする）

然らば川崎財閥はこの巨額なる金融資本を抱いて、どれだけ

の銀行會社を支配して居るか。以下例の如くこれを直系會社とその子會社、傍系會社、及び關係會社に分類して、その資本の分布狀態を點檢する。

第一に直系會社だ。これは全部で十四社、總拂込資本四千九百五十萬圓、之に對する川崎系の投資額は二千六百六十萬圓で、全體の五三%八を占め、うち、川崎家の投資額は一千七百萬圓で、全體の三四%四に當る。川崎の資力がこゝに最も強く集中されて居る譯である。詳しくは第二表を見よ。

(二) 直系會社資本支配表(最近)

會社名	拂込資本	川崎系所有株式		川崎家所有株式	
		拂込金	株數割合	拂込金	株數割合
	千圓	千圓	%	千圓	%
川崎第百銀行	二三、〇七二	一三、三八二	五八・〇	八、五三七	三七・〇
山八銀行	八〇〇	四〇〇	五〇・〇	四〇〇	五〇・〇
川崎貯蓄銀行	三、七五〇	三、七五〇	一〇〇・〇	二、九五九	七八・九
川崎信託	二、五〇〇	一、一〇〇	四四・〇	四八八	一九・五
日本火災	四、〇〇〇	二、七二〇	六八・〇	一、五七二	三九・三
日華蠶業	六八八	四八一	七〇・〇	二四八	三六・〇
國華徵兵	五〇〇	三七五	七五・〇	二〇二	四〇・五
相生無盡	一、一〇〇	四九五	四五・〇	四九五	四五・〇
常磐無盡	一二五	六三	五〇・〇	六三	五〇・〇
京成電軌	一一、五〇〇	二、九九〇	二六・〇	一、二〇八	一〇・五
東京灌油	六〇〇	二九四	四九・〇	二九四	四九・〇
東京倉庫	六二五	三五〇	五六・〇	二九八	四七・七
川崎倉庫	一二〇	一二〇	一〇〇・〇	一二〇	一〇〇・〇
日本商事	一二五	一二五	一〇〇・〇	一二五	一〇〇・〇
計	四九、六五五	二六、六五九	五三・八	一七、〇一〇	三四・四

(備考) 川崎系及川崎家所有株式の拂込金はその株數の總株數に對する比率を求め、それを總拂込金に乘じて推算せるものである。以下同じ。尚ほ表中川崎家とあるは川崎定德、共濟會、千歳商行等に川崎一家を總括して呼べるものである。以下同じ。

これらの直系會社は、又少なからぬ子會社を持つて居る。その内、川崎の勢力の決定的なものは、全部で十一社ある。第三表の如くである。

(三) 川崎直系會社の支配的子會社表(最近)

會社名	拂込資本	川崎系所有株式		
		拂込金	株數	同上割合
	千圓	千圓	株	%
常磐銀行	五、三五六	九六四	三二、一八三	一八・〇
千葉合同銀行	二、一一六	八五九	四三、四六三	四〇・六
博多銀行	一、〇三五	七二四	三〇、〇〇〇	七〇・〇
明和銀行	七五〇	六八一	五四、五〇〇	九〇・八
帝國火災	二、五〇〇	六九〇	五九、二〇六	二七・六
常磐火災	一、〇五〇	四六八	二六、七九五	四四・六
八千代生命	一、二五〇	四九一	二九、三〇六	三九・三
池上電鐵	三、〇五二	一、六六三	七六、三三九	五四・五
日本ビルディング	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一〇〇・〇
所澤銀行	一、五七九	—	—	—
成田鐵道	六二九	—	—	—
計	二〇、三二二	*七、八三六	*四六一、八二三	*四〇・三

(備考) ※印は川崎系の所有關係判明の分の平均割合に從つて推算せるものなり。

川崎の直系會社には、支配的な子會社以外、準支配的な子會

社がある。それが全部で六社ある。詳細は第四表を見られたい。

（四）川崎直系會社の準支配的子會社表（最近）

會社名	拂込資本	川崎系所有株式 拂込金	株數	同上割合
	千圓	千圓	株	%
足利銀行	五、三六〇	七七七	一三、七〇〇	一四・五
鎌倉銀行	六三三	八六	三、四〇〇	一三・〇
横濱火災	三、一七五	二七五	二七、六五〇	一一・〇
大北火災	一、〇〇〇	一三九	一〇、六〇〇	一三・〇
京王電軌	九、六五〇	一、四四八	三九、五〇〇	一五・〇
町田銀行	八〇	—	—	—
計	一九、九八八	＊二、八四一	＊一〇七、八五〇	＊一四・一

（備考）※印は川崎系の所有關係判明の分の割合に從つて推算せるものなり。

第二に傍系會社だ。その詳細は第五表に讓るが、傍系會社は全部で五社あり、内四社に對して決定的支配力を持ち、一行に對して準支配的勢力を持つて居る。

（五）傍系會社資本支配表（最近）

會社名	拂込資本	川崎系所有株式 拂込金	株數割合	川崎家所有株式 拂込金	株數割合
	千圓	千圓	%	千圓	%
南洋貿易	二、〇〇〇	七四六	三七・三	五二四	二六・二
日本電線	一、二五〇	二六九	二一・五	一一三	九・〇
東京製線	七五〇	三二〇	四二・六	三二〇	四二・六
紅葉館	八三	三一	三七・五	三一	三七・五
井野田商誘銀行	二、〇〇〇	三三二	一六・六	三二二	一六・一
計	六、〇八三	一、六九八	二七・九	一、三一〇	二一・五

（備考）※印は準支配的なものである。

これで川崎王國の支配的關係にある銀行會社と、それが川崎に對して資本的に如何なる關係を有して居るかを、個別的に一通り點檢したが、更にこれを總括すると、その資本金は公稱一億八千七百萬圓、拂込九千五百九十萬圓、此の内、川崎の支配が決定的なもの、拂込資本は七千三百九十萬圓、準支配的なもの、それは約二千二百萬圓となる。表示すると第六表の如くになる。

（六）川崎支配の諸會社資本表

	川崎の支配下に在るもの 公稱資本	拂込資本	同上準支配下のもの 公稱資本	拂込資本	以上合計 公稱資本	拂込資本
	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
直系十四社	八八、七一四	四九、五〇五	—	—	八八、七一四	四九、五〇五
傍系五社	五、一〇〇	四、〇八三	三、〇〇〇	二、〇〇〇	八、一〇〇	六、〇八三
直系子會社	五一、四六〇	二〇、三一二	三八、八二〇	一九、九八五	九〇、二八〇	四〇、二九七
合計	一四五、二七四	七三、九〇〇	四一、八二〇	二一、九八五	一八七、一〇四	九五、八八五

第六表に示せるもの丶外、川崎の勢力が未だ支配的ではないが、その金融資本が或る程度まで浸透せるものには、川崎家が直接投資して居る關係會社と、直系會社の關係的子會社とがある。前者の公稱資本は九千百五十萬圓、同拂込資本三千六百七十萬圓、後者のそれは、公稱一億七千百萬圓、拂込八千八百圓である。從つて、川崎の金融資本の波及して居る銀行會社の總

計資本金は、公稱が四億四千九百萬圓、拂込が二億二千萬圓となる。この他、一口に川崎財閥關係の銀行會社資本と云ふ場合には、川崎定德、共濟會、及び千歲商會の資本をも加算しなければならぬから、さうなると、川崎財閥の總關係會社資本は、公稱四億五千四百萬圓、拂込二億二千五百萬圓となる。第七表の如くである。

（七）川崎支配及關係諸會社資本高表

	公稱資本（千圓）	拂込資本（千圓）
川崎支配諸會社	一八七、一四四	九五、八八五
川崎家關係會社	九一、五〇〇	三六、六九六
直系會社關係會社	一七一、一五〇	八八、一三三
合計	四四九、七九四	二二〇、七一四
川崎定德合資會社	三、〇〇〇	三、〇〇〇
合資會社共濟會	一、〇〇〇	一、〇〇〇
株式會社千歲商會	一、〇〇〇	二五〇
合計	五、〇〇〇	四、二五〇
總計	四五四、七九四	二二四、九六四

最後に、いま、以上川崎系諸會社に對する川崎財閥の資本的支配關係を總括するに、別揭第八表の如くである。之に由れば川崎一家の投資が、その支配下の金融業の投資と相俟つて、始めてよく、その傘下の諸會社を支配してゐることが一目瞭然だ。

例へば、直系の十四會社すら、川崎一家の投資は三四%四だが、之に川崎系銀行其他の投資が加つて五三%八を占めてゐる。而して、川崎傘下の支配的會社合計について見れば、川崎一家の投資は僅かにその一九%八に過ぎないが、その支配下の銀行其他の投資を加へて四〇%八の資本的支配力を擁し、以て、完全に、それ等「川崎系諸會社」の支配權を握つてゐる。われ等は、こゝに、金融資本を背景とせる財閥の事業支配力が、如何に强大であるかの適例を見出すのである。

（八）川崎系會社資本と川崎の投下資本

諸會社の位置	公稱資本（千圓）	拂込資本（千圓）	川崎系所有（千圓）	同上割合（%）	川崎家所有（千圓）	同上割合（%）
川崎定德會社	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	一〇〇・〇	三、〇〇〇	一〇〇・〇
共濟會	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇〇・〇	一、〇〇〇	一〇〇・〇
千歲商會	一、〇〇〇	二五〇	二五〇	一〇〇・〇	二五〇	一〇〇・〇
直系十四社	八六、七〇四	四九、五〇五	二六、六四五	五三・八	一七、〇一〇	三四・四
傍系五社	八、一〇〇	六、〇八三	一、六九八	二七・九	一、三一〇	二一・五
支配的直系子會社	五三、五四〇	二〇、三一二	七、九三六	四〇・三	六八四	三・四
小計	一四八、三四四	七五、九〇〇	三六、二七九	四七・八	一九、〇〇四	二五・〇
準支配的直系子會社	三八、八〇〇	一九、九八五	二、八三二	一四・二	〇	〇
合計	一八七、一四四	九五、八八五	三九、一一一	四〇・八	一九、〇〇四	一九・八
川崎家關係會社	九一、五〇〇	三六、六九六	*一、三二八	三・七	*九七七	二・七

（備考）※印は川崎の所有額不明のものに付、判明の分の割合に從つて推算せることを示せるなり。

四、川崎系事業の位置

川崎系の事業は、上掲系統圖を一覽すれば判る通り、その大部分は銀行、信託、保險の如き金融業で、金融業專門と云つても宜い位だ。この内、銀行は第百と合併して、一大飛躍をなしたが、その第百に纏まつたので、いまは、合併後の内容充實に全力を舉げて、未だ外的發展の時代に移してゐない。從つて、此の方面には、いまの處、餘り著しい發展も見られない。たゞ、川崎貯蓄が堅實に一歩一歩前進して居る位のものだ。しかし川崎系銀行界には、その關東地方に散在して居る多數の子銀行を、その獨立のまゝで經營を續けさせるか、或はこれを打つて一丸とするかと云ふ問題が殘されて居る。

信託會社は唯一つ川崎信託があるだけであるが、多數の有力信託が創立された後に出來たものだから、東京ではその創立が認可されず、止むを得ず京都に本店を置いて認可を受けたやうな有樣で、其後の模樣も餘り香しくない。その支配下に多數の保險會社乃至事業會社を有する川崎としては、もつとこれを庇護し育成する必要があらう。

川崎系事業會社中、今日著しい發展を示して居るものは、保險會社だ。損害保險では、わが國最大の火災保險會社日本火災があり、再保險には當然火災あり、準支配的なものとして橫濱、大北の兩火災がある。加ふるに、昨年春更に帝國火災を買收して、その勢威は一層擴大された。生命保險は、從來どちらかと云ふと、損害保險程の勢威を有しなかつたが、昨夏日華と萬歲兩社の合併に成功し、昨秋更に八千代生命を新に手に入れた。斯くて川崎系生保會社には、今や日華萬歲、國華徵兵、八千代生命（契約を日華萬歲に包括移轉後解散の筈）の三社があるばかりか、有隣生命を始め一二の生保會社も、現に、金融的には川崎の支配下にあつて、その川崎の手に落ちるは最早時期の問題に過ぎなくなつて居る。加之、日清生命及び帝國生命にも川崎の資本が若干侵入して居る。かうしたわけ故、その保險界に對する進出は驚くべきものがあり、從つて川崎系保險會社が、三菱、安田の如き斯界に於ける先輩を向ふに廻して、覇を競ふ日も案外近いかも判らない。

所で、繰返し云ふ如く、川崎系事業の中軸はこれら金融業だ。而して川崎系事業の大部分が又金融業だ。而もそれらの金融業は、或物は目覺しい發展を示し、或物は發展後の内容充實期に在りとは云ふものゝ、全體として之を通觀すれば、毎年幾らか宛の進歩は遂げて居る。そこで川崎財閥には、その金融業を通じて吸收した資金を如何に運用するかと云ふ問題が、當然起き

て來る。安田は金融業一本槍で進んで來たと云ふもの丶、尙ほ川崎よりは多くの事業會社を經營して居るばかりか、淺野と云ふ事業家がその親類筋に居る。所が、川崎には提携して立つ程の事業家もなければ、その巨額な金融資本を活用し得る程の事業を、川崎自らも經營して居らぬ。そこで從來は、その事業の安固にして收益の確實な點から、專ら電力事業にその資本を投じて來た(たゞ單なる收益目的の投資だつた)。然るに電力界に漸く電力過剩時代が出現し、競爭が激化し、前途不安の念が增大して來たので、その資本を電力界から電車界に移動させた。而して電車事業に投資を始めると共に、後藤國彥をその方面の總司令官にして、川崎の對投資態度が頗る積極的になつて來た。從前の單なる投資家的態度から、その事業に對する支配權を得て、これを左右し統制することに由り、その投下資本の安全と收益の確實性を增大せんとする金融資本家的態度に變るに至つた。斯くて現在その支配權を獲得したものに京成電軌と池上電鐵があり、準支配權を獲得したものに京王電軌がある(尙ほ前揭の後藤國彥の重役名を參照せよ)。殊に最近では川崎が中心となつて、東京近郊電車會社中の有力なものを合併させることに依つて、無益な競爭を避けて、投下資本の收益率を高めんとする運動が、着々進捗しつゝある。他の金融資本家が、わが金融界の實狀に迎合して、十年一日の如く英國流の預金銀行主義に表面上膠着して、その資金の運用上、色々の制約に拘泥して居る時、川崎のこの大膽にして且つ時流を拔いた正統金融資本家的資金運用法は、色々な意味に於て、注目に値する。

大川事業王國論

一、大川事業の產業網

大川事業國をこゝに解剖する興味の中心は、他の場合の如くその財閥の資本的支配網にあるわけではなくて、僅少の資力を以て數多の事業に重役として關係してゐる、その事業狂的タイプに在る。われ等は、已に、このタイプのものを、大倉と淺野とについて見たのであるが、就中、大川は、その典型的なものである。

扨て、大川事業中第一の特色は、比較的僅少の資本を以て、極めて多數の事業に重役其他として關係してゐることである。實に、大川平三郎位ひ、多數の重役を一身に荷へるものは稀で、大橋新太郎と共に、天下の双璧だと稱せられてゐる。しかも、大橋の重役は並大名だが、大川の重役は名實ともに事業の第一線に立てるものが少くない。此の點に於て、大川と好一對をな

すものは寧ろ淺野總一郎である。

兩者は、ともに金融資本を自ら有せず（尤も大川は武州銀行を持つてゐるが、それは、大川位ひの小財閥には利用よりも、寧ろ荷厄介になる方が多い位ひのものだ）且つ、その所有の資本源も比較的僅少で、數多の事業に關係し、多く益々、新事業に進出せんとする熱を持つてゐる點に於て著しい共通點を持つてゐる。又、淺野がこれ迄主として安田銀行をバックとしたに對し、大川が澁澤の血族關係其他から主として第一銀行をバックとして活動した點も良く似てゐる。

だが、淺野が所謂淺野系事業なるものに資力を集中し、從つて、誰が目にも淺野自らの事業と目される少からぬ事業を有するに反し、大川は、その投資が極めて散漫で、その關與せる會社數七十のうち、大川系事業と目され得るものは、僅かに樺太工業と、その專屬子會社四事業外二社に過ぎぬ（樺工と富士との共同子會社は、富士が王子系となれる以後、その支配權は王子に移はれた）。蓋し、その資本力に比し、餘りに多くの事業に關與せし結果である。

大川事業團の產業網は又、色々の事業團と提携せるものが多いが、しかし、その何れも、その指導權は、大川には無くて相手方にあるやうな提携である。例へば、その重なるものには左の三つがあり、この外、大倉組との共同事業に鴨綠江製紙があるが、これは、大川の方がより支配的である。

穴水要七一派（後ち王子製紙に代る）との提携事業＝富士製紙及びその子會社及び關係會社。

淺野總一郎との提携事業＝淺野セメント、東京灣埋立、その他、及びそれ等の子會社、關係會社。

熊澤系（伊勢の富豪）との提携事業＝靜岡電氣鐵道、伊勢電氣軌道。

加ふるに、大川事業團それ自身が、大川平三郎一個に由つて築かれた存在ではなくて、平三郎を中心に、田中平八郎（大川の弟にして田中家に養子となれるもの）、藤田好三郎（田中の女婿）、長谷川太郎吉（大川の共同者であり同時に部下）の四人が、資本的にも人的にも結合して成れる存在であり、中にも大川と田中との結合がその根幹である。試にいま、本論に謂ふ所の大川事業團の投下拂込資本額の內譯を見るに、後述の如く、大川平三郎六七％三、その他三人で三二％七である。

尤も、大川事業團は、大川と田中との結合が根幹的だとは云つても、中には、大川のみ關係して田中の關係せぬ事業も幾つかあると共に、田中のみ關係して大川の關係せぬ事業も多少ある。その具體的記述は後にゆづるであらう。扨て、こゝに云ふ大川事業團と云ふ場合には、右の中、大川平三郎關係の事業のみを取扱ひ、田中其他が大川とは無關係に關與せる事業は、本

文の簡潔のため、之を姑く除外してある。

斯くの如きが大川事業國の大輪郭であるが、さて、大川事業國が關與せる事業如何と云ふに、その會社數は、その重なるもののみで、實に、七十二社に達する。うち、資本金の分明のものの六十社について見るに、その公稱資本六億七千八百萬圓、拂込資本金三億九千四百萬圓である。而して、その關與せる會社の重なる事業別を見るに、その詳細は別掲第一表の如くにて、會社拂込資本金額の割合から云へば、製紙業が三〇%二、電燈電力が二二%三、交通運輸が一五%〇、窯業が一四%等々の順である。

（一）大川事業國千與會社の事業別表

	社數	公稱資本（千圓）	拂込資本（千圓）	同上百分比
製紙業	九	一六五、八〇〇	一一九、一九四	三〇・二
交通運輸	一二	一五〇、三七五	五八、九九五	一五・〇
開拓運河	三	二二、五〇〇	一四、二五〇	三・六
窯業	五	一〇九、三一〇	五五、三三一	一四・〇
製鋼業	五	三二、〇〇〇	二四、一六五	六・一
電燈電力	九	一五一、〇五五	八八、一三〇	二二・三
銀行業	二	八、八五〇	八、四九八	二・二
紡織業	二	一二、五〇〇	六、五〇〇	一・六
保險業	二	三、〇〇〇	二、二五〇	〇・六
炭礦業	二	五、〇五〇	五、〇五〇	一・三
其他	九	一八、二三八	一二、二〇五	三・一
計	六〇	六七八、六七八	三九四、五六七	一〇〇・〇

（備考）本表の内容は、後掲第二表乃至第七表に詳記せる通りである。

斯く、大川事業國の關與會社は、各種廣汎の事業に亙つてゐるが、しかし、已の如述き事情のため、その多くは、資本系統から見ては、その關係が極めて稀薄であつて、此の側面から、例の如く、大川事業國の系統圖を作表することは、大川事業國そのもの、眞相を鳥瞰し得る所以でない。そこで、大川事業國の特色に鑑み、こゝには、專ら、大川平三郎の重役關係を中心にし、之に、資本關係を配合して、例の如く大川事業國關與會社の系統圖を示せば別掲の如くである。圖表中、*印は大川平三郎が社長又は頭取の位地にあるものであるが、その數實に二十一社を算する。而して＃印は專務取締役で二社、×印は平取締役で三十社、△印は顧問又は相談役で十四社、□印は監査役で一社、以上合計七十二社である。

斯く、その關與事業に對する大川の重役網は廣汎である上に、社長又は頭取乃至は專務取締役の重要位地に在るもの二十三社を數ふるの重武裝である。だが、大川事業國の重役網は、單に、これだけではない。右の外に、田中、藤田、長谷川の共同者を、それぞれの事業に配備して、更にその武備を常固にしてゐる。

大川平三郎の關係事業表

（備考）
●印社長又は頭取
×印專務取締役
△印常務又は相談役
□印監査役

大川平三郎

- 製紙業
  - ●樺太工業—●大川田中ビル。●八代製紙。●大同洋紙店。△大豫林業。
  - ×日本加工紙。×共同パルプ。×共同洋紙。×日本フエルト。×東京金網。
  - ●富士製紙—×樺太鐵道。富士洋紙店。
  - ●鴨緑江製紙。
- 電力電燈
  - ×熊本電氣—×鹿兒島電氣—●北海道電燈—●北電興業。
  - ●上毛電力。×函館水電。△粕川水電。□朝鮮電氣興業。△武州瓦斯。關東鋼索。
- 交通
  - ●城東電氣軌道—南葛飾乘合自動車。
  - ●靜岡電氣鐵道。×伊勢電氣鐵道。（以上二社は熊澤系事業）
  - ●朝鮮鐵道。●熊本電氣軌道。●上毛電氣鐵道。●鹿本鐵道。×西武鐵道。×東京地下鐵道。×樺太鐵道。
  - ×金福鐵路公司。●樺太汽船。×東洋汽船。×日本航空輸送。
- 製鐵
  - ●日本鋼管。●東海鋼業。●大島製鋼所。△服部製作所。△東京金網。
- 窯業
  - ×淺野セメント—△淺野スレート。
  - ×日本ヒユーム コンクリート。△大阪石綿工業。△日本スレート販賣。△伏木板紙。淺野ブロック
  - （以上）淺野系事業。
- 土地開拓
  - ●東京灣埋立—×鶴見臨港鐵道。
  - ×京濱運河。×尼崎埋立。×朝鮮土地改良。
- 銀行—●武州銀行—●武州貯蓄銀行。●三芳野信用組合。
- 保險—×仁壽生命。△大榮商會（火災）
- 炭礦—×鳳城炭礦—×日支炭礦汽船。
- 化學工業—×帝國人造肥料。×日本醋酸。
- 其他—△日出紡織。×大日本自轉車。△石川島飛行機。△京都殖產。×大阪ホテル。△龍泉村木。×日本映畫劇場。

試に、大川關與事業の中、大川の外、田中その他が重役として支配網を張つてゐる有様を、各會社別に重なる事業について表示せば左の如くである。

會社名＼人名	大川平三郎	田中榮八郎	藤田好三郎	長谷川太郎吉	備考
富士製紙	社長	取締役	—	—	—
樺太工業	社長	副社長	事務	事務	—
八代製紙	社長	取締役	—	事務	—
日本加工製紙	社長	取締役	—	取締役	—
鴨緑江製紙	會長	監査役	監査役	常務取締	—
共同パルプ	取締役	社長	取締役	取締役	—
共同洋紙	取締役	取締役	—	取締役	社長 藤原銀次郎
大同洋紙店	相談役	相談役	監査役	監査役	社長 谷野彌吉
淺野セメント	取締役	取締役	—	—	社長 淺野總一郎
日本鋼管	社長	取締役	—	—	副社長 白石元次郎
東海鋼業	社長	取締役	監査役	監査役	—
大島製鋼所	社長	取締役	—	事務	—
服部製作所	相談役	社長	常務	取締役	—
東京金鋼	取締役	取締役	—	—	社長 田中武兵衛
大榮商會	相談役	相談役	社長	—	常務 石川國吉
仁壽生命	取締役	評議員	—	—	社長 下郷寅太郎
鳳城炭礦	取締役	社長	監査役	取締役	事務 加藤爲二郎
熊本電氣軌道	社長	取締役	—	事務	—
靜岡電氣鐵道	社長	取締役	取締役	—	—
上毛電氣鐵道	社長	副社長	—	—	事務 五十嵐小太郎
東洋汽船	取締役	監査役	—	—	—
樺太汽船	社長	副社長	常務	取締役	—
上毛電力	社長	副社長	事務	監査役	—
北海道電燈	社長	取締役	—	—	常務 穴水熊雄
熊本電氣	取締役	取締役	—	取締役	社長 上田萬平
北電興業	取締役	取締役	—	—	—
日出紡績	相談役	取締役	取締役	—	社長 大川榮太郎
日本フエルト	取締役	社長	—	—	常務 宮川敬三
石川島飛行機製作所	相談役	監査役	—	—	社長 澁澤武之助
大日本自轉車	取締役	取締役	—	—	社長 岡崎久次郎
帝國人造肥料	取締役	取締役	—	—	社長 白石元次郎
大川田中事務所	社長	副社長	常務	取締役	—

右に由つて、大川事業國が、如何にその重役網を張つてゐるかの大様を窺ひ得るであらう。即ち、之に由ると、已述大川平三郎が社長として君臨する會社四社を數えてゐる。加ふるに、前掲の外、田中が大川とは無關係に干與せる事業の重なるものが、更に、次の如く十八社を算し、うち、田中氏が社長の重職にあるものに、大日本人肥と合同グリセリンの二社があり、前者は拂込資本二千六百八十萬圓の人肥界の大會社の一つである。之れ、大日本人肥が、大川系と目せらるる所以であり、事實、廣義に解すれば、田中氏關係の事業も之を大川事業國産業網中に包含せしむべきであるが、本文は已述の如く大川平三郎を中心に觀察せんとするもの故、大川の關係なき田中系事業は姑く之を除外する。

尙ほ、之に關連して、大川のみ關係して、田中の關係せざる事業があり、その詳しくは次に表示の如くであるが、その重役關係から見て重なるものは、朝鮮鐵道、城東電氣軌道、武州銀行、武州貯蓄銀行の四つであつて、前二者は大川氏社長、後二者は頭取である。

大川平三郎、(社長)朝鮮鐵道、城東電氣軌道。(頭取)武州銀行、武州貯蓄銀行。(取締役)西武鐵道、東京地下鐵道、會寧鐵路公司、東京灣埋立。(監査役)朝鮮電氣興業。(相談役)武州瓦斯、[illegible]川水電。

田中榮八郎、(社長)大日本人造肥料、合同グリセリン。(取締役)加藤事務所、日本硫黄、南武鐵道、南大洋鐵道、富士川電力、神島人造肥料、帝國肥料、日本硫肥、大阪アルカリ土地、理化學興業、淡路電氣鐵道。(監査役)深田電氣池、日本電力、日本セメント、函館水電、東京汽船。

二、大川の投資事業

大川事業團の産業網は、上述の如く、その重役の配置に於ては、著しく優勢に見へるが、しかし、その投下資本關係から見ると、少からず、その支配權は薄弱である。こゝに、大川事業團の惱みがあること後に詳叙するが如くである。それは兎に角、いま、その投資會社の重なるものを見るに、その第一は、製紙事業關係のものであつて、その會社數九社、會社拂込資本合計約一億二千萬圓である。而して、この中、大川事業團の投資が、專ら集中してゐる會社は、樺太工業と富士製紙であり、その他は、以上兩會社の子會社關係のものである。詳はしくは別掲第二表の如くである。

（二）製紙事業關係の大川投資會社表

社名	大川資格	資本金 (千圓)	拂込資本金	總株數 (千株)	大川系所有 大川一家	大川系所有 大川系個人	大川系所有 合計
*富士製紙株式會社	社長	七七、七〇〇	五八、九二五	一、五五四	九九、三六六	三三、二〇〇	一三二、五六六
*樺太工業株式會社	〃	七〇、〇〇〇	四八、一七二	一、四〇〇	一〇六、四一三	一三二、九三五	二三九、三四八
*八代製紙	〃	一〇〇	四八	一	七〇〇	六〇〇	一、三〇〇
*鴨綠江製紙	會長	五、〇〇〇	三、八〇〇	一〇〇	四、八〇〇	五、七〇〇	一〇、五〇〇
*日本加工製紙	取締役	七五〇	一、五〇〇	一	三五〇	五五四	九〇六
*共同パルプ	〃	三、〇〇〇	七五〇	六〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]
*共同洋紙	〃	五、〇〇〇	五、〇〇〇	一〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]
伏木板紙	顧問	五〇〇	一五〇	一	〇	二〇〇	二〇〇
*大同洋紙店	相談役	三、〇〇〇	一、五〇〇	六〇	四〇〇	六〇〇	一、〇〇〇
合計		一六一、〇五〇	一一九、九四四	三、一七八	[illegible]	[illegible]	[illegible]

(備考) 大川一家とは大川平三郎及その子息夫妻。大川系個人とは田中榮八郎、藤田好三郎、長谷川太郎の三氏。*印あるは、第八表以下の集計に包含されあるもの。無印は拂込金不詳その他の理由で右第八表以下の集計に漏れたるもの。以下諸表皆同じ。

次に、大川事業團の投資が集中してゐる事業は窯業であるが、これは、淺野セメント會社を中心とするもので、その子會社關係のものを入れて五社、その拂込資本合計五千五百餘萬圓を算する。第三表に詳示の如くである。

（三）窯業關係の大川投資會社表

社名	大川資格	資本金	拂込資本金	總株數	大川系所有 大川合名及大川一家	大川系所有 大川系個人	大川系所有 合計
		千円	千円	千株	株	株	株
*淺野セメント	取締役	一〇六,三二〇	五三,九五八	二,一三六	九七,八三一	一一,一二〇	一〇八,九五一
*淺野スレート	相談役	五〇〇	一二五	一〇	〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
*日本ヒュームコンクリート	取締役	一,〇〇〇	五〇〇	二〇	—	一〇〇	一〇〇
*日本スレート販賣	相談役	一,〇〇〇	四〇〇	二〇	—	—	—
*大阪石綿工業	〃	五〇〇	三五〇	一〇	〇	九八六	九八六
計		一〇九,三二〇	五五,三三二	二,一八六	九七,八三一	一三,二〇六	一一一,〇三八

大川事業國は又、鐵道、汽船等の交通運輸事業並に土地會社にも、その資本を少からず投資してゐる。その詳細は別掲第四表の如く、合計十六社、その拂込資本合計七千一百萬餘圓である。しかし、右の中、大川が主として投資せる重要會社は朝鮮鐵道、上毛電氣鐵道、樺太汽船、並に東京灣埋立（淺野系）の三會社であつて、その他は或は小會社であるか、或はその關係は稀薄である。

（四）交通運輸並に土地事業關係大川投資會社表

社名	大川資格	資本金	拂込資本金	總株數	大川系所有 大川合名及大川一家	大川系所有 大川系個人	大川系所有 合計
		千円	千円	千株	株	株	株
*朝鮮鐵道	社長	五四,五〇〇	三七,六六〇	一,〇九〇	四九,一九〇	一八,〇八二	六七,二七二
*城東電氣軌道	〃	三,〇〇〇	一,八〇〇	六〇	二,一三六	三五〇	二,四八六
*熊本電氣軌道	〃	一,五〇〇	八〇〇	三〇	三,〇〇〇	一,九〇〇	四,九〇〇
*郡山電氣鐵道	〃	六,〇〇〇	四,〇〇〇	一二〇	一,五〇〇	二,二〇〇	三,七〇〇
*上毛電氣鐵道	〃	四,〇〇〇	八〇〇	八〇	一二,三一九	四,〇〇〇	一六,三一九
鹿本鐵道	〃	一,二五〇	八〇七	五〇	?	?	?
*樺太汽船	〃	八,〇〇〇	三,八八〇	一六〇	一〇,六〇〇	一〇,二〇〇	二〇,八〇〇
東洋汽船	取締役	八,一二五	五,六八八	一六二	?	?	?
*西武鐵道	〃	三〇,〇〇〇	六,九〇〇	一六〇	六,五〇〇	〇	六,五〇〇
樺太鐵道	〃	一,〇〇〇	一,〇〇〇	二〇	?	?	?
*東京地下鐵道	〃	一〇,〇〇〇	六,〇〇〇	四〇〇	七,一八〇	五〇〇	七,六八〇
*金福鐵路公司	〃	四,〇〇〇	二,〇〇〇	八〇	一,二〇〇	五〇〇	一,七〇〇
鶴見臨港鐵道	〃	一二,〇〇〇	一,八〇〇	六〇	〇	一〇〇	一〇〇
伊勢電氣鐵道	〃	一二,〇〇〇	四,二七〇	一六〇	〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇
日本航空輸送	〃	一〇,〇〇〇	二,五〇〇	二〇〇	〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
計		一五〇,三七五	五八,九九五	三,〇三三	九三,八八五	四二,七三三	一三六,五九六
*東京灣埋立	專務取締	一二,五〇〇	一二,五〇〇	二五〇	六七八,七〇〇	〇	六七八,七〇〇
合計		一六三,八七五	七一,四九五	三,二八三	七七二,五八五	四二,七三三	八一五,二九六

大川投資會社の次の一團は電燈電力關係のもので、その數九社、拂込資本合計八千八百萬圓を算する。だが、この中、上毛電力、北海道電燈、熊本電氣を除けば、その資本關係は極めて稀薄である。且つ、此の種事業の資本關係は、大川そのものゝ投資よりも田中その他二人の投資の方がヨリ大きいと云ふことがその特色をなしてゐる。別掲第五表に詳示の如くである。

大川は又、製鋼事業の一團にその資力を可なりの程度に集中さしてゐる。詳はしくは第六表の如く、その數五社、拂込資本

（五）電燈電力關係の大川投資會社表

社名	大川資格	資本金	拂込資本金	總株數	大川系所有 大川合名及大川一家	大川系所有 大川系個人	合計
＊上毛電力	社長	千圓 五、〇〇〇	千圓 五、三五〇	千株 三〇	一八、三二〇株	四五、[illegible]株	六三、[illegible]株
＊北海道電燈	〃	四四、四五〇	三五、四五〇	一、〇九八	三三、七七六	五五、六六六	七七、四四四
北電興業	〃	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	四〇	―	一〇〇	一〇〇
＊熊本電氣	取締役	八、〇〇〇	三二、一〇〇	五三	一〇、六六四	一一、五〇〇	二二、一六四
鹿兒島電氣	〃	三〇、〇〇〇	五、〇〇〇	一〇	―	[illegible]	[illegible]
函館水電	〃	三、五〇〇	八、三三〇	七〇	―	[illegible]	[illegible]
＊菊川水電	相談役	一、一〇〇	四六五	一〇	一、五〇〇	五〇〇	[illegible]
朝鮮電氣興業	監査役	[illegible]	三三〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
＊武州瓦斯	相談役	一、二〇〇	一五〇	[illegible]	一、二〇〇	六〇〇	一、七〇〇
合計		五七、九〇〇	六八、三三三	[illegible]	[illegible]	二三、八六六	九九、一一八

合計二千四百萬圓である。日本鋼管の外、何れも比較的に小會社の部に屬するものである。

（六）鋼鐵業關係大川投資會社表

社名	大川資格	資本金	拂込資本金	總株數	大川系所有 大川合名及大川一家	大川系所有 大川系個人	合計
＊日本鋼管株式會社	社長	千圓 二二、〇〇〇	千圓 一五、三五五	千株 四〇〇	七、四七七株	五、〇〇〇株	一二、四七七株
＊東海鋼業	〃	三、〇〇〇	二、二五〇	六〇	二、八〇〇	四、九八〇	七、七八〇
＊大島製鋼所	〃	六、五〇〇	五、五六〇	一三〇	五、三〇〇	六、五〇〇	一一、八〇〇
＊服部製作所	相談役	一、五〇〇	一、〇三〇	三〇	二、五〇〇	七、四〇〇	九、九〇〇
＊東京金屬	取締役	五〇〇	五〇〇	一〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇
合計		三三、五〇〇	二四、六六五	六三〇	一八、一七七	二三、九八〇	四二、一五七

以上が、大川投資會社の重なる事業別であるが、その他、銀行、保險、紡織、炭礦、土地開拓、その他色々の事業に關係してゐる。しかし、大川がその首腦となつてゐるものは銀行業（武州銀行及同貯蓄）に限られ、その他は單なる平取締役か又は相談役に過ぎず、從つて又、その投資額は何れも少からず稀薄である。が兎に角、それ等の會社數は、第七表の如く十九社、その拂込資本三千六百萬圓を算する。尚ほ一言附記するに値することは、大川事業閥は、以上の如く、銀行、保險の金融事業に關係してゐるが、しかし、その資本關係は表示の如く極めて稀薄であつて、他の財閥のそれの如き密接なる關係にあるものではないと云ふことである。

（七）其他の事業に對する大川投資會社表

社名	大川資格	資本金	拂込資本金	總株數	大川系所有 大川合名及大川一家	大川系所有 大川系個人	合計
＊武州銀行	頭取	千圓 八、三五〇	千圓 八、二九〇	千株 一六六	四、八八八株	〇株	四、八八八株
＊武州貯蓄銀行	〃	五〇〇	二〇八	一一	一、一〇〇	〇	一、一〇〇
計		八、八五〇	八、四九八	一七七	五、九八八	〇	五、九八八
＊大榮商會	相談役	一、〇〇〇	二五〇	二〇	一、五〇〇	四、〇〇〇	五、五〇〇
仁壽生命保險	取締役	二、〇〇〇	一、〇〇〇	四〇	〇	二〇〇	二〇〇
計		三、〇〇〇	一、二五〇	六〇	一、五〇〇	四、二〇〇	五、七〇〇
＊日出紡織	相談役	一〇、五〇〇	五、一二五	二〇〇	六、八〇〇	一四、六五〇	二一、四五〇
＊日本フエルト	取締役	二、〇〇〇	一、一二五	四〇	四〇〇	二〇〇	六〇〇

計		二三、五〇〇	六、五〇〇	二五〇	七、二〇〇	一四、八五〇	一二、〇五〇
*鳳城炭礦	取締役	二、〇五〇	二、〇五〇	四一	四、二〇八	二、〇七〇	六、一三五
日支炭礦汽船	〃	三、〇〇〇	三、〇〇〇	六〇	一、〇一〇	五〇〇	一、五一〇
計		五、〇五〇	五、〇五〇	一〇一	五、二一八	二、五七〇	七、七四五
京濱運河	取締役	五、〇〇〇	五〇〇	一〇〇	八〇〇	二〇〇	一、〇〇〇
朝鮮土地改良	〃	五、〇〇〇	一、二五〇	一〇〇	一、二〇〇	三〇〇	一、五〇〇
計		一〇、〇〇〇	一、七五〇	二〇〇	二、〇〇〇	五〇〇	二、五〇〇
大川田中事務所		五〇〇	五〇〇	一〇	―	―	―
*石川島飛行機製作所	相談役	二、〇〇〇	一、五〇〇	四〇	二、五〇〇	一、〇〇〇	三、五〇〇
*大日本自轉車	取締役	二、〇〇〇	一、三三九	四〇	二、六六七	一、六二九	四、二九六
大阪ホテル	〃	三、〇〇〇	一、六〇〇	六〇〇	一、五〇〇	三〇〇	一、八〇〇
日本醋酸株式會社	〃	一、五三八	一、四一四	三一	九七八	一〇〇	一、〇七八
*帝國人造肥料	〃	二、五〇〇	一、五〇〇	五〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇
京都硝產	相談役	三、〇〇〇	三、〇〇〇	六〇〇	八六六	一八〇	九九六
龍東材木	〃	一〇〇	二〇〇	四	一三三	一三	二四五
日本映畫劇場	取締役	三、五〇〇	一、一五六	七〇	〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
計		一八、一三八	一二、二〇五	一、四四五	八、七九三	四、三二二	一三、一一五
合計		五七、六三八	三六、一五三	[illegible]	三〇、六九九	二六、三九九	五七、〇八八

二　大川の資本綱

大川事業團に於ける資力の本流は、大川合名であつて、外に合名以外の大川個人の資力、並に、田中、藤田、長谷川の大川系個人の資力が之に合流してゐる。而して、その本流たる大川合名の資本金は一千三百萬圓にて、うち、七百八十萬圓を平三郎氏が出資し、殘り、五百二十萬圓は、迫木てい、大川鐵雄、大川義雄、田中タカ子、中山たま、清水すゞ六人の一族が出資してゐる。而して、大川合名は、右の額面資本を以て、拂込資本金一千七百二十四萬圓の株式投資をやつてゐる。外に、大川一家の投資が、同じく拂込資本金で二百四十六萬圓を數へ、以上合計約二千萬圓である。これが、大川一家の投資資産の額面額の總計である。問題は、その投資株の實際價値であるが、いま、その株價が、兎に角、拂込額以上を保てる重なるものは富士製紙と淺野セメントのみであつて、他は大部分が拂込額割れである。從つて、その現在の實價は右の二三割乃至それ以上の割引を要する。(他日株價が騰貴せる場合は兎に角として)。次の問題は、大川の借入金が幾何あるかであるが、これは絶對祕密で外部から窺ひ得ない。しかし所有株券にして、擔保力あるものは、すべて借入金の擔保になつてゐることだけは、現に、大川事業團が著しく、金融難に惱みつゝある一事に由つて容易に推想せられる。果して然らば、現在の大川一家の純資產額實額は、案外に少ないわけである。尠くとも、現在の株價の位置から云へばさうだ。事實、昭和三年の最高と昭和四年末の相場とを比較して概略的に推算して見ると、樺太、富士、淺野セメントの三社持株だけで、大川の蒙つた値下り損は約九百萬圓に上るから、現在の株價から見た大川の純資產が、以上の如く案外

に少ないであらうことは少しも怪しむに足らない事情に在る。

それは兎に角、大川事業團の投下拂込資本は、右の大川一家のもの、外、例の大川系三個人のものが之に加はり、合計約三千萬圓に達する。而して、以上總計中大川合名及一家の分が六七%三に上り、他の三個人の分が、三二%七である。第八表の如くである。

（八）大川事業投資拂込額表

	(A)投資會社拂込資本計	(B)大川系所有拂込資本	(A)に對する(B)の%	大川系投資の百分比
大川合名	千圓 三三六、九九九	千圓 一七、二六四	五・一%	五八・九%
大川一家	三三六、九九九	二、四四四	〇・七	八・四
小計	三三六、九九九	一九、七〇八	五・八	六七・三
大川系個人	三三六、九九九	九、五六一	二・九	三二・七
總計	三三六、九九九	二九、二六九	八・七	一〇〇・〇

（備考）本表の内容は、前掲第二―七表中※印のある會社の拂込額のみを集計したものである。

尚ほ、右投下資本が、干與會社拂込金に對する割合を見るに、その內容の明かなるもの四十一社（重なるものを網羅す）の集計に由れば、第八表の如く、總計三億三千七百萬圓中、大川合名及一家の拂込額五%八、之に大川系三個人の分を加へた合計で八%七である。即ち、大川事業團の資本支配力は、僅かに、平均八%七と云ふ薄弱なものであることが分る。

大川の投下資本を、更に、その重なる事業別から見ると、製紙業は實にその過半を占めて五七%九を算し、次ぎは窯業の一四%二、交通及埋立業の一一%三、電燈電力の八%一等々と云ふ順序である。詳はしくは第九表について參照されたい。

（九）大川の投資事業別表

	社數	會社拂込資本	大川系所有 大川合資及同大川一家計	同上百分比	大川關係個人所有	以上合計
製紙業	八	千圓 一二八、九四三	千圓 一一、四一五	五七・九%	千圓 五、五五五	千圓 一六、九七〇
窯業	四	五四、九六五	二、七九一	一四・二	二四一	三、〇三二
交通及埋立業	一〇	五四、七五〇	二、二三〇	一一・三	六〇四	二、八三四
電燈電力	五	六一、六三〇	一、五九六	八・一	一、七六七	三、三六三
製鋼業	五	一五、〇七五	八〇三	四・一	八九二	一、六九五
銀行業	二	八、四九八	二五八	一・三	—	二五八
紡織業	二	六、五〇〇	一七六	〇・九	三〇九	四八五
其他	五	六、六三五	四一九	二・一	二八三	七〇二
合計	四一	三三六、九九六	一九、七〇七	一〇〇・〇	九、五八二	二九、二八九

（備考）本表の內容は前掲第二表以下第七表中、※印ある分の會社拂込額を集計したものである。

最後に、いま、大川の干與せる已述の七十二會社中、大川事業團と最も密接なる關係にある主なる事業會社を一表に纏めれば、別掲第十表の如く、その數僅かに十四社にして、うち大川

事業團が資本的に、直接、間接にその支配權を握れるものは、樺工、鴨綠江製紙、大同洋紙店、樺太汽船、上毛電力、東海鋼業の六社に過ぎない、

(十) 大川關係事業の重要會社表

會社名	公稱資本 (千円)	拂込資本 (千円)	大川系所有 大川合名及大川一家個人 (千円)	大川系所有 大川系 (千円)	大川系所有 以上計 (千円)	總株數 (千株)	大川系所有 大川合名及大川一家個人 (株)	大川系所有 大川系 (株)	大川系所有 以上計 (株)	同上の總數に對する%	樺太工業會社所有 (株)	大川系所有株式合計の對總數%
△富士製紙	七〇、〇〇〇	五八、九九五	三、七〇三	八〇三	四、六〇六	一、五五四	九九、三〇六	二二、二〇〇	一二一、五〇六	七・八	—	七・八
△樺太工業	七〇、〇〇〇	四八、一七一	七、四一八	四、四〇六	一一、八二四	一、四〇〇	一〇六、四一三	二一二、九三五	三一九、三四八	二二・八	—	二二・八
△鴨綠江製紙	五、〇〇〇	三、八〇〇	一九〇	二四七	四三七	一〇〇	四、八〇〇	五、七〇〇	一〇、五〇〇	一〇・五	二四、〇〇〇	三四・五
×大同洋紙店	三、〇〇〇	一、五〇〇	一〇	一五	二五	六〇	四〇〇	六〇〇	一、〇〇〇	一・七	一六、〇〇〇	五〇・〇
△朝鮮鐵道	五四、五〇〇	一七、六五〇	六七四	一八〇	八五六	一、〇九〇	四九、一九〇	一八、〇八〇	六七、二七〇	六・二	—	六・二
△樺太汽船	八、〇〇〇	二、八八〇	一九〇	一八四	三七五	一六〇	一〇、六〇〇	一〇、二〇〇	二〇、八〇〇	一三・〇	四三、五〇〇	三九・〇
△上毛電力	一五、〇〇〇	五、一五〇	四九五	七九二	一、二八七	三〇〇	二八、三〇〇	四五、一五〇	七三、五五〇	二四・三	—	二四・七
△北海道電燈	五四、四五五	三三、五七五	六五一	四六一	一、一一二	一、〇八九	二一、七三八	一五、六六六	三七、四〇四	三・四	—	三・四
×熊本電氣	一六、〇〇〇	一一、〇〇〇	四〇〇	四九四	八九四	五一一	一〇、六六四	一二、五〇〇	二三、一六四	四・五	—	四・五
※瀧野セメント	一〇六、三〇〇	五三、九九〇	一、七三九	一、二四二	二、九八一	二、一一六	九七、八三二	一一、一二〇	一〇八、九五二	五・一	—	五・一
△東京灣埋立	一二、五〇〇	一二、五〇〇	六七九	〇	六七九	二五〇	二三、五七四	〇	二三、五七四	五・四	—	五・四
△日本鋼管	二一、〇〇〇	一五、一一五	四〇〇	一一三	五一四	四二〇	一七、四七七	五、〇〇〇	二二、四七七	五・三	—	五・三
△東海鋼業	三、〇〇〇	一、一一五	一〇五	一八七	二九二	六〇	一、八〇〇	四、九八〇	七、七八〇	一三・〇	—	一三・〇
△大島製鋼所	六、〇〇〇	五、四〇〇	二三九	二九三	五三二	一二〇	五、三〇〇	六、五〇〇	一一、八〇〇	九・八	—	九・八
合計	四六三、五八五	二八三、一八六	一七、九七五	八、四四九	二六、四二四	九、一五一	五六八、四九四	二六九、七三二	八三八、二二六	九・一	八〇、五〇〇	一〇・〇

(備考) △印は大川平三郎氏が社長、會長、又は專務取締役の分。※印は取締役、×印は相談役

而して、第十表に由れば、大川と特に密接の關係ある會社と雖、已述六社を除けば、その資本的支配力は何れも五%乃至七%内外に過ぎず、その平均が漸く一〇%を算するに過ぎないことを伺ひ得る。何等金融資本のバックを有せざる大川事業團が、かゝる、稀薄なる資本關係に於て、如何に濃厚の人的支配網を張ると雖も、その株式の或る割合が一朝、他の大財閥の所有に

歸すれば、その資本關係と金融關係から、會社の支配力は直ちに他に移らざるを得ないことは誰にも看取されるところだ。現に、富士製紙は初め、穴水と共同で大川が手籠にかけたもので行く〳〵は樺工と合併せしめるつもりであつたものであつたが、穴水死んで、その一派の持株一度び王子製紙にさらはれるや、こゝに、資本關係、金融關係から、富士製紙は三井系の支配下に立つに至つたものである。

しかも、事業のいよ〳〵多くは、今後、大財閥の手に集中せられんとしてゐる。かゝる時代に於ては、大川事業國これ迄の投資產業網では第一には、大川系事業の命脈は到底保てない。第二には、その株價下落の危險が、その純資產に比し餘りに過大で大川事業國の基礎が不安定だ。思ふに、大川事業國の產業網は、資本主義戰國時代に於ける風雲兒の陣形だ。今日の資本主義獨占時代の陣形では斷じてない。かゝる陣容では早晚大川事業なるものは消滅する外にない。今後に於て、大川事業國が更生するためには、已述の如き大川系產業網を根本的に變革して、資本と精力とを小數の主なる事業に集中させ、之を基礎にして更に有力なる金融資本と、より密接に提携して、漸次にその戰陣を展開する方針に改めることが肝要であらう。

無產黨內閣の出現？

社會民主主義者の夢を一笑に附して

大山郁夫

今日の狀勢の下に於て、『無產黨が內閣を組織したら――』などといふ問題を向きになつて考へるのは、社會民主主義者の夢です。夢にしても、はかない夢です。夢の中の夢です。

さうです！　一體『無產黨』といふ名を帶びてゐても、右翼や中間派の『無產黨』は、果して無產階級を代表してゐる政黨といへるでせうか？　無論それらの『無產黨』は、無產大衆を地盤として立つてはゐます。卽ち、それらの無產黨を構成してゐるものは、勞働者、農民、無產市民です。この點、左翼政黨たるわが勞農黨等とは少しも變はりはありません。從つて、右翼および中間派の無產黨大衆諸君も、わが勞農黨の黨員大衆と同樣に、現在の金解禁後の財界に直面して、支配階級の產業合理化政策の下に、共通の惱みを惱み、共通の要求を持つてゐます。頻々たる解雇、堪へがたき賃銀値下げ、無法な小作料、高い家賃、安い俸給、惡稅重稅、等々に對して飽くまで果敢に鬪爭しようと欲してゐる點については、各黨の黨員大衆の間に甲乙はありません。そこに各黨員大衆間に共同鬪爭が益々盛に行はれ得る素地があります。それが所謂『下からの共同鬪爭』です。我々はそこに、無產階級の戰線統一の希望をかけてゐます。

だが、右翼および中間派の無產黨――いはゆる社會民主主義政黨――の幹部諸君は、その指導下の黨員大衆の、さうした要求、さうした鬪爭意志を裏切つて、帝國主義ブルジョアジーに迎合してゐます。資本家から選擧費用を貢がせた事が問題となつて分裂した無產黨すらありました。さうした無產黨――さうした社會民主主義政黨の幹部諸君

は濱口內閣が『緊縮豫算』の名で出した十六億二百萬圓の膨大な豫算——實質上帝國主義戰爭準備の爲に對しての軍事豫算——をさへ支持しようとしてゐます、又戰鬪的勞働者の要求を徹底的に窒息せしめようとする骨拔きの勞働組合法案に對しても、『大體贊成だ』と言つてゐます。これは明かに、骨の髓まで金融資本家の代辯者である民政黨への合流です。かういふ點から見ても、社會民主主義政黨が單に改良主義一點張りの政黨だと言へたのは、最早一ト昔前のことで、今は完全に帝國主義ブルジョアジーの協調者になり切つてゐるのです。短い言葉でいへば、社會民主主義政黨は、現段階では、『帝國主義的』になつてゐるのです。

最近合法無產黨の上に分裂騷ぎが續々と擴大して行く傾向が見えて來てゐるのは、その黨員大衆間の意識の向上の過程を指標してゐるものでなければなりません。そして我々は確信してゐます。かゝる分裂騷ぎも、かくて自覺無產階級戰線統一への、徐々とした、だが確實な歩み寄りに外ならないのだ、と。大衆こそ絶對に信頼すべきです。大衆の眼ざめは必至的です。歷史を創造するものは、大衆の力以外にはありません。それが信じられなくては、無產階級解放運動も何もあつたものではありません。

それを信じることが出來ない無產黨の指導者たちが、今日の狀勢の下に於ても、『無產黨が內閣を組織したら——』などゝ空想するのです。イギリスのマクドナルドの政府が、彼等の究極の理想です。そして、そこへ行きつくまでの道程として、彼等は彼等を交へた聯立內閣をさへ夢みてゐます。資本家地主の政黨と仲よく手を列ねて內閣を作らうといふのです。彼等はその可能性が近づきつゝあると考へてゐるのです。それは或る意味に於て、だん〲近づきつゝあります。そしてそれは同時に、彼等がいよ〲大衆から離れて行く關門となるでせう。

彼等は尙ほ當分の間は、さうした希望を高く揭げることによつて、意識の低い大衆を欺瞞しつゞけるでせう。だが、大衆は何時までも欺瞞し了はせるものではありません。重ねていふ、大衆のめざめは必至的です。大衆こそ最も信頼すべき最後の審判者です。

かゝる社會民主主義者の夢がいつか爆然として破れるときこそ、歷史の創造者としての大衆が正しき進路を明かに見得る時です。我々はさうした社會民主主義の夢を一笑に附して、あくまで資本家地主に對して非妥協的態度を以て猛進し、議會鬪爭を我々の大衆的日常鬪爭の一尖端として、そこに火の出るやうな築路戰術を布き、そこに大衆の要求を××せしめるでせう。『無產黨が內閣を組織したら——』といふやうな考へは、我々の腦裡には、毛頭上ぼつて來る筈はありません。

プラウニングの『失はれたリーダー』に描かれある社會運動家が見たければどうぞ、よそを探がして下さい。

勞働內閣の可能性

葉山嘉樹

社會現象は複雜だ。將來の展開に就ては、階級鬪爭理論も、大體の方向を決定し、基礎的な戰略を指示して呉れるに過ぎない。

これが若し、天文學で、彗星の出現を、數學的に、かつきり、豫測できると同じやうだつたら、どうだらう。——

一九四五年に、第二世界大戰の戰敗疲弊の結果として、資本家內閣が總辭職して勞働內閣が成立する。

太つちよの勞働首相が、ラウド・スピカーの前に起つて、就任のメッセージを全國に送る。——

『國家の疲弊、產業の萎微、實に前古未曾有の國難に際しまして、吾人は、國家產業の恢復のため、國民生活安定のため、勞働階級諸君の隱忍自重を切望して止まない次第であります。抑も、我國產業の唯一つの武器は、わが勞働階級諸君の質實剛健、國家のために犧牲的賃銀に甘んずる愛國的精神なのであります……』云々。

また、暴力否定の內務大臣のクリスチヤンが、メーデーの大暴動を鎭壓するために、日比谷交叉點に、機關銃を布列させる。……

と、こんなことは空想するだけで、胸がむかつく。

勞働內閣などゝいふ曖昧模糊としたものよりも、今少し、元氣のいい共產黨內閣、これはどうだ？——辯士中止！……。

と、かう、猿ぐつわを、嵌められるまでもなく、共產黨內閣といふことそれ自體が、マルキシズム理論から云へば、一つのパラドックスであらう。

勞働階級が目ざすところの政權獲得は、單なる自黨內閣の出現ぢやない。××政治ではない。三權分立の假面非××政治ぢやない。……あとは、われ〳〵のやうなものが、鹿爪らしく說き立てなくても分るだらう。

しかしながら、現在、そして、恐らく將來も、當分は議會を一つの重要なる鬪爭舞臺として、われ〳〵は進むだらう。そして、その努力の結果として無產政黨——恐らく、それは統一された單一無產政黨ではなくて、やはり今日と同じやうな社民黨や大衆黨、それから今少しく纏つた大左翼勢力のブロック——かうした無產政黨が、議會の多數黨となるに相違ない。

だが、かうした形勢が、單に無產階級側の努力の結果であるばかりでなく、同時に、資本階級が、無產階級の不滿、生活の困窮を抑へき

れないまでに、窮するに至る情勢の所産であらうことも考へなければならない。

議會の多數を基礎とした勞働内閣の成立、何はさておき、先づ勞働者萬歲だ！と、人は叫ぶかも知れないが、同時に、資本家階級も、先づ資本家萬歲！だと安堵の胸を撫でるに相違ない。何故だ？

勞働内閣、少くとも第一次の勞働内閣は、勞働内閣であつて、勞働者の階級的内閣ではない。資本家に手綱つけられた、羊のやうな内閣であつて、左翼勢力のブロックが牛耳を取る内閣ではない。尠くとも、歷史は、さう敎へてゐる。

世界大戰後の各國資本家の行詰りは、第一次勞働内閣を生んだ。そして米國資本の膨脹、各國の勢力範圍内の各國各植民地の資本主義化に原因する各國資本家の現在の行詰りは、第二次勞働内閣を生み、保守黨が固執した保護政策を、勞働黨内閣に繼續させて對露外交の復活、對露通商、對露投資の復活を講じてゐる。しかも、勞働内閣は、第二次勞働黨内閣を結成するまでに共産黨勢力を完全に排除し、産業平和の結機に努力して、立派に、資本家の御用政黨の資格を與へられたのだ。

英國のほか、ロシアの一九一七年三月以降の社會革命黨内閣も、現在のドイツに於ける社會民主黨の内閣參加も、皆、同樣のことを敎へてゐる。

古い童話にこんな話がある。

寒い道をひとりの男が外套を被て歩いてゐた。まあ、春なほ淺きと云つた頃である。

この男の外套を脫がせて見たいと思つて、太陽と風が競爭する。先づ、風が、矢鱈と外套を吹きまくる。

すると、その男は、外套を取られまいとして一生懸命に外套を抑へる。風は降參する。

そこで、今度は、太陽の番だ。太陽は、ぽかぽかと暖かい光りと熱を、雲の間から、照りつける。すると、直ぐさま、男は、汗だくだくになつて外套を脫いだ。太陽は勝つた。

風で、彈壓で行かなければ、太陽で、懷柔で、行かうとするのが、資本家の常套手段である。

つまり、勞働内閣は、資本家にとつて、セイフテイ・ヴルブである。――と、云つて、決して勞働内閣の出現は、プロレタリアートに取つて無用の產物ではない。相當に階級鬪爭の捨石となることは、明瞭である。資本家累進課稅、土地國有、等々を實現し得ないとしても、大衆運動に必要な言論法上の自由は、勞働内閣の名に於ても、與へてくれざるを得ないであらう。そのくらゐのことが、できないやうな内閣は、議會に於て無産黨として多數を占めることはできない。從て、この無產黨勢力を基盤とした内閣の出現は不可能であらう。

更に一步進んで、若し、この内閣が、實によく、プロレタリアートの階級利害に忠實である場合、乃至は、プロレタリアートの突進、尻押しによつて忠實ならざるを得なくなる場合には、どうなる？

その時は、立憲的な、何十年か立憲政府の守護神とたつて來た資本

家は、ブルジョア政黨と參謀本部に命じて、頗る非××的なクーデターをやるにきまつてゐる。

その時に於ては、最早、内閣の問題ではなくて、武器の問題であり、機關×のトラフ、トラフ、タアタアターだ。

何時、如何にして?

山川均

無産黨の内閣は何時頃出來るか? そしてどのやうな經路によつて現はれるか? ‐といふ課題に對する私の答案には、大きな○を書いて差出すよりほかに仕方がない。

第一に、その無産黨の内閣といふものは、一體安部さんが組織する内閣なのか、麻生氏が組織する内閣なのか、それとも『吾等の委員長』大山さんの組織する内閣のことなのか? からしてが分らない。今のところ、組閣の大命が無産黨に降下するとしたら、第何號の無産黨の上に降下してよいものか。着陸場を搜がす飛行機のやうに、この棚の上の幸運は、落つべき個所に戸惑ひして、空しく低空旋回をつゞけるほかないだらう。

要するに、無産政黨そのものが、尙ほ形成の途上にあることは云ふまでもないが、實際のところは、まだ基礎工事さへも終つてゐない。云はゞ無産政黨建築場の立札があちこちにたち、假小舍の普請場がそこに設けられたといふ狀態であつて、勿論、有爲有能の幾多の技師や大工が、一生懸命に鑿や鉋を動かせてはゐるものゝ、尙ほ部分的な準備作業をしてゐるに過ぎないもので、一般的な設計に基づく地形さへも出來上つてゐない。そこで現在の無産政黨に取つては、何時無産黨内閣が出現するか、如何にして無産黨内閣が出來上がるかといふ問題よりも、無産政黨そのものが、どのやうな方向と形態とを取つて發達するか、明瞭に見極はめられ、如何にしてその基礎が確立せられるかといふ豫想の方が遙かに有益な問題である。

しかしこの手近かな問題でさへも、それに適確な答を與へることは、決して容易なことではない。現在の無産諸黨の分野が確定的なものでないことは無論であるが、さりとてこれらの諸勢力が、必ず一つの中心に集まるといふ――よし可能はあるにもせよ――宿命的な約束があるわけではない。假りにこれらの諸勢力の少なくとも大部分が、究極は一つの中心に集まるにしても、その進行には、いろ〳〵の場合を想像することができる。そしていづれの場合が主たる方向となるかといふことは、今日はなほ推測することが至難である。總選擧後には、無産諸黨の分野に多少の動きがあるかも知れないが、恐らくはまだ、大

勢な決定するに足る變化はないものと思はれる。

無産政黨の闘爭の對象となる既成のブルジョア政黨の方でも、今後どのやうな形を取つて發展するかは、にはかに豫斷することができぬ。一般的な傾向は、全ブルジョア政治勢力が二大政黨に集中され、そして中間的な勢力が急速に消滅してゐることである。かうしてブルジョア政治勢力の分野が清よめられてその跡に殘つた二大政黨はどうかといふと、その性質は漸次に接近しつゝある。けれども二大政黨が、ます／＼財閥大資本の黨派となればなるほど、そして二つの政黨の對立は、財閥大資本の内部に於ける分派の對立を代表するに過ぎないものとなればなるほど、それは一方に於ては、ブルジョア政治勢力の寡頭的な統一を意味するものではあるが、同時に他方においては、財閥大資本の利害と一般商工階級と地主階級の利害とを如何に妥協せしめるかゞ、二つの政黨の共通の惱みになることを意味してゐる。この苦惱は、民政黨の八大政策のうちにも、政友會の七大政綱のうちにも、同じように、歴然として現はれてゐる。

一般商工階級と地主の利害は、現在の形においての二大政黨の對立によつても、相當には代表することができる。現に民政黨も政友會も、一般商工階級と地主の支持を得るためには、彼等に對する讓歩と妥協の競爭をやつてゐる。けれども此利害の對立が或る程度に達すると、この對立した利害に沿うて二大政黨の分野が整理せられることが、一そう合理になつて來る。しかしこれと同時に、金融資本の制覇が確立されゝばされるほど、一般商工階級がこれと政治的に對立する可能性は少なくなる。

假りに二大政黨の對立が、現在の性質のまゝで存續するとしたならば、ブルジョア第三黨の出現する機會は、一そう大きいと見做される。大ブルジョア黨と小ブルジョア黨とに對立して、無産黨が議會における第三の黨（ブルジョア第三黨といふ意味ではない）となるか、それとも別個にブルジョア第三黨が現はれて、無産黨が議會における第四の黨となるか、これは今後の發展を俟つて知る外かないが、いづれの場合にも、無産大衆と農民の一部分はブルジョア第二黨、ないしはブルジョア第三黨にさらはれる危險がある。それどころか、現在の無産黨の分野からブルジョア第三黨の發達する危險さへもある。この危險と損失とを最小限度にするためにも、無産政黨の戰線統一に大きな意義がある。

無産黨内閣は何時、如何にして出現するかといふことは、無産政黨そのものゝ發達の形態、ブルジョア政治勢力の今後の發展といふ極めて複雜な條件にかゝつてゐるばかりでなく、謂ゆる『無産黨内閣』なるものゝ性質もまた、同じ條件にかゝつてゐる。イエスの名によつて來る者が悉く眞實のイエスでないやうに、愼重に無産黨内閣は、その僭稱者と闘ふことによつて、初めて現實せられるといふやうな場合をも、固より想像することができる。いづれにせよ、現在の政治上の形勢のうちに、ブルジョア政黨と無産黨との對立がまだ前景を占め、もしくは中心を占めるに至つてゐないことは、爭ふことができぬ。總選擧戰の中心は、依然として民政黨か政友會かであつて、無産黨は固よ

彼其に動いてゐるに過ぎぬ。無産政黨は組閣の用意よりも、陣營の確立を急がねばならぬ。

尤も資本主義の急速な沒落は、無産階級の勝利の牡丹餅を、精密に、寢て待つ果報者の脣の上に落してくれるといふ革命的樂觀主義の見地からは、政變は意外に迫つてゐるかも知れぬ。現に先き頃の新聞には、無産黨の或る代議士を案内した首相官邸の小使さんが、官邸の一室を指して、『こゝが閣議室です、貴方がたも二三年するとこの閣議室にお入りになる』と說明してくれたと書いてあつた。僅かに、耳寄りの話である。

闘爭を通じてのみ考へらる

加藤勘十

無産政黨が何時如何なる方法と形態をもつて政治權力を掌握するかと云ふ問題は、少くとも我が國の現在の無産政黨の實勢力を中心としてこれを論ずるならば、單なる夢想的興味をしかもち得ない問題であらう。我々の闘爭理論は、既に久しい以前より、ブルジョア社會の否定的對立階級としてのプロレタリアートがブルジョア社會秩序それ自體を止揚して自己を解放しもつて又新しい無産階級の社會を造り出すと云ふこと、而してこの社會進化の過程はブルジョア階級とプロレタリア階級の間の政治權力爭奪の政治闘爭を通じて實現されるものであると云ふことを明示してゐる。それは單に理論として立證されてゐるばかりではない、世界大戰後に於ける國際無産階級の實踐的闘爭は無産階級の政權獲得と云ふ問題が既に現實的な問題として取扱はれなくてはならない狀態とまで進展し來つてゐることを物語つてゐる。然し乍ら何時如何にして無産階級が政權を握るかと云ふ問題は、一度び一般的理論的問題の範圍を超えて現實の問題となるや、そこに種々雜多の對立的見解を生み出したのである。この問題に對して豫測を與へんとして多くの人々が如何に屢々誤算におち入つたか、そして又各國無産政黨の發達史中に於てはこの問題を中心とする對立的な見解が如何に屢々その指導者達を混亂せしめ分裂せしめ來つたか、嘗つてのドイツ社會民主黨内に於ける修正派ベルンシユタイン主義と正統派マルクス主義との闘爭、ロシヤに於けるボルシエウイキとメンシエウイキとの抗爭、更に最近では第三インタナショナルと第二インタナショナルの間に於ける全世界的抗爭、それ等全ての無産階級陣營内部の對立の原因として我々はこの政治權力獲得の方法に對する見解の相違が横はつてゐることを見る。それはとにかくこの問題の重要性は決して各

國一律の現實性をもつて現はれるものではない、資本主義の客觀的發展段階と階級鬪爭の發達の度合ひに應じて相異る重要性の形をとつて現はれるのである。

然らば我が國の現狀に於いてこの問題は果して如何なる程度の現實性をもつか。少くとも表面に現はれた無產政黨の實勢力と既成政黨の勢力關係をもつてこれを見るならば未だ極めて低度の現實性たるに過ぎないことは論をまたない。だが現實の歷史的發展は屢々人間の意識それ自體をとび越えて發展する。既に高度の帝國主義的發展をとげた我が國の資本主義は幾多の特殊的な矛盾(例へば封建的勢力の殘存、金融資本に直接統率される大企業と幼稚極まる中小商工企業との對立、農民階級の特殊な貧窮化等々)を含みつゝ更に尖銳な國際的諸關係の中に置かれてゐる。かゝる諸條件を考察するならば、我が國に於ける政治勢力の變動過程が何時如何なる突發的事態に逢着するか全く豫斷を許るさざるものがある。勿論我々は何時我が無產政黨が政治權力を掌握するかを今日明示することは出來ないが、恐らくそれは國民の大多數を占める農民と勞働者及びその他の勤勞大衆の生活問題が極端に緊張せる時であらう。我が國の資本主義は戰後の破壞的恐慌より資本安定への世界的波にのつて等しく安定傾向を辿つてゐることは事實である。だがこの資本の安定傾向は大衆の生活をより搾取し蹂躙することなしには絕對に不可能であると云ふことは、去る昭和二年の金融恐慌及びその後に於ける所謂財界整理が如何に勞働者農民及び小市民の生活に脅威を與へたかの一事實をもつても明瞭である。今又政民その他一切のブルジョア政治勢力は產業の合理化を主張してこの過程を押し進めんとしてゐる。我々は云ふ、我々無產政黨が政治權力を握る時、それはこの大衆の搾取が更に極端に押し進められ如何なる欺瞞と彈壓をもつても最早や大衆の××を抑へ得なくなつた時である。資本家や地主諸君は如何にして大衆の搾取を合理化しその不平不滿を壓縮せんとするのか、我が國ブルジョア政黨は如何にして大衆の憤激を彈壓し轉換せんとするのか、我々の政權獲得の方法と形態は一つにかゝつて彼等の態度と方策に對應するであらう。換言すれば、我々無產政黨は資本家地主の欺瞞を徹底的に暴露し、彼等の振ふ一切の政治的彈壓に對して抗爭することゝなつてのみ政治權力を握り得るのである。

現在の我が無產政黨の各々は、多かれ少なかれ現在の議會を政治的鬪爭場として利用しつゝある。我々の現在の實勢力をもつてしてはなか〳〵政民兩政黨の鬪爭を百パーセンまで利用して無產政黨としての目的を實現するより外はないのであるが、恐らくこゝ數年の間には議會內に於ても相當の勢力たり得ることは疑ひのないところである。その時に於て起り得る問題は我々無產政黨が既成ブルジョア政黨のいづれかと聯立內閣を組織し、或ひは又議會內に於ける聯合提携によつて我々の政策の一部分を實現すべきか、それとも又徹底的に反對黨としてブルジョア政黨との取引を絕對に排すべきかの問題であらう。今日既に社民黨の幹部諸君は既成政黨との取引を期待してゐる樣である。だが我々の考へをもつてすれば如何なる場合に於ても絕對に彼等との取引は排されなくてはならない。既成政黨と我々との對立は今後

益々尖銳化するであらう。少くとも我々が眞に階級的な立場を厳守して戰ふ以上恐らく彼等との妥協取引の道はないであらう。我々は只闘爭を通じてのみ政治權力を獲得せねばならない。更に又現在の我が國の行政制度の下ではよし我々が選擧戰を通じて絕對多數を制し政權を獲得し得るやうなことがあつたとしても、我々の政策を實行することは極めて多くの困難が伴ふであらう。その時恐らく我々は現在の政治制度一般に對する徹底的改革の問題に當面するであらう。少くともさうした一大改革は我々無產政黨の政權把握の前提條件であらう。

要するに、我々無產政黨が何時如何なる方法と形態によつて政權をとるかは未ださし迫つた現實性をもつ問題ではないが、我々としては只既成ブルジョア政黨との徹底的闘爭を通じてのみの問題を解決してゐるのである。

獨立無產黨內閣の豫想

佐々弘雄

◇

無產政黨內閣の成立がいつ頃になるか？……この問題に對する解答は云ふ迄もなく想像推察の範圍以上に出で得るものではない。社會科學上の豫科として結論も容易でない。しかし百年河淸を待つが如きものでないことは明瞭である。

◇

イギリスの例に見ても一九〇〇年に一五名立候補し二名當選し、總得票數六二、六八九票で獨立（自由黨から）勞働政黨の誕生を見たばかりなのに、六年の後一九〇六年立候補五〇名當選者二九名總得票數三二三、一九五を得その後累進し一九二三年立候補四二七名當選一九一名得票四、三四八、三七九票で第一次勞働黨內閣の成立を見てゐる。スタートから二十三年で組閣に至つてゐる。尤も一八七〇年代から勞働代表がリベラル・キャムプの內になつたから一九〇〇年迄約三〇年の潛伏期があつたわけである。

◇

ドイツでも一八七一年に當選者二名一〇二、〇〇〇票を得たのが、ビスマルクの社會主義鎭壓令で思ふやうに進展せず、一八八一年三一

〇、〇〇〇總得票、一八八四年には五四〇、〇〇〇總得票、一八九〇年には一、四二七、〇〇〇總得票を得――この時代議士三五名――大戰前には(一九一二年)四、二五〇、三二九總得票代議士一一〇名で戰後革命後多數派と獨立派が聯立內閣を組織してゐる。スタートから組閣まで約四十年餘年である。

◇

イタリー、フランス等の社會黨の說明はこれを割愛するが、我國の無產政黨が之等諸國に對し例外であつてなか〳〵ものになるものではないと見ることは出來ない。

この前の總選擧で四八〇、一二四票を得代議士八名を送つてゐる。市町村、郡府縣に於ける代表者も相當の進出ぶりである。昭和五年二月二十日の選擧でも總得票七、八十萬見當までゆくであらうと思はれる。あと三回乃至四回の總選擧を經、その間無產諸分派間の合同、整理が行はれて行つたならば、得票に於ける增大と共に代議士數も飛躍的增加を示すであらう。故に大體あと三四回の總選擧で一〇〇名を超ゆる大政黨――無產各派をあはせて、――となることはあり得べきことだ。だからこゝ十數年で大政黨の域に進み、更に一二回の總選擧を經て第一黨に達する時期に到達するであらう。だから約二十年以內には獨立無產黨內閣成立を見るのではないかと想像される。

◇

然し乍ら、この觀察は無產、既成兩者政黨を中心とした國內政治過程の研究を度外視し、國際政治の起り得可き變局をも問題外とした極素朴な觀察である。內外の政情を現在のまゝとし無產各派の發展速度を考へたものである。故に相當正しい社會科學的の豫料としては內外政治過程の見通しがなされなければならないが、これは別の機會にゆずりその判斷のごく基礎的な諸條件を列擧するにとゞめよう。

◇

(一)國內政情――(イ)既成政黨、民政黨がその自由主義的立場から社會政策を實行し、社民あたりと聯立してドイツ、フランスに近い政情を呈し政友會が極右の中政黨となる可能性と、かゝる改良主義の餘地がなく次回の政變から政局がぐん〳〵ファッシスト化し大政黨となり民政黨はイギリスの自由黨の如くなり、無產、諸派と共に中政黨となり、反動政府が行はれる可能性がある。前者の場合には、聯立及漸進的な無產黨の進出が考へられ、後者の場合には相當長期の彈壓時代と急激な變動が豫想される。

(二)國際政情――(ロ)イギリスの世界的覇權の失墜と世界帝國の組織が破れインド等が名實ともに獨立する可能性があり、……英米の海上爭

覇とロシアの英帝國主義を目標とする條件等々のため……(b)ロシア、アメリカは大體變化なく、(c)支那は資本主義新國家として成長する趨向にあるが國際政局の變動に應じて不斷に動搖する。――そしてこの支那、印度に於ける變革が世界戰爭の可能性を藏してゐる。そして、又、近き將來世界戰爭の有無が國內政情に決定的に作用するであらう。だから國內、國際政局ともに資本主義帝國主義の現階段を適確につきとめなければ系統的な議論にはならない。

◇

國內國際兩方面を大體現狀のまゝの進展と見た場合二十年說となるわけで、國際政局に世界戰爭の如きが行はるれば全然豫測が不可能となる。しかし、國內政情の改良主義的傾向とファッシスト的化傾向は最も著しい現政局に於ける宿題であらう。無產政黨がその間に處して獨立無產政黨の旗幟を押し立てゝすゝむことは、ラッサーレやケーア・ハーデイが實踐に於て示したやうに、或ひはドイツに於けるマルクス、イギリスに於てピース、またはエンゲルスが理論上指摘したやうに必要且不可避の狀勢にある。

◇

獨立した無產黨內閣に於ては、社民黨は不遇の地位に立つか逸脫する危險性があり、寧ろシヤイデマン、マクドナルドの徒が中間及中間左翼の陣營から出現して指導的地位に立つではないであらうか。現に大衆と全民が合同を前提した選擧協定をなしてをり、勞農大衆（水谷一派）と東京無產（舊無產大衆系）に接近の可能性があり、これ等一群の諸勢力が大衆黨を中心に再度一大結成にすゝむことが考へられる。此際新勞農黨はどうなるか。共產黨が戰術上再び同派に潛入すれば、いざしらず、合法政黨化した現在の狀態では別個に獨立す可き素地があるであらうか。共產黨の潛入をも拒み、現狀の合法政黨のまゝではおそかれ早かれ淸算せられ中間政黨結成と共產系へ分裂して行かないとも云へないであらう。そこで全民から勞農の一部までの大結成――そこに獨立無產黨の基礎が認められる。

◇

だから將來獨立無產黨內閣組閣の際は此あたりの顏觸れと見て差しつかへないと想像する。如何におもねる嫌ひをさけて、名はあげないことにするが、この邊の陣營に於ける有名無名の指導者がのしてくるものと見て大過ないかと思ふ。(1930. 2. 2)

ある時機に地辷り的に

緒方竹虎

政界のいはゆる消息通の說によると、總選擧の結果、無產黨は多くて十五名、惡くすると今度も、十名以下の當選しか難しいかも知れぬさうである。その際に當り、『我國に何時、如何にして無產黨內閣が出來るか、又如何なる無產黨內閣を望むか』との質問は、甚だ突飛といはざるを得ない。少くも年を數へて『何年後に』と明答を與へ得るものはあるまい。私は、希望としては、その少しでも速く來ることを望むのである。といふと無產黨に甚だ同情がないやうであるが、實は、その時機が餘りに早く來て、折角無疵の無產黨を誤らせたくないからである。同時に、單なる偶然の機會で、三五年あるひは十年早く政權を執つても、それが偶然の機會になるものなる以上、何も仕事の出來さうなことを期待できないからである。

この希望は、『如何にして』といふ質問に對して、當然に、成るべく政權爭奪を提ることを求めるのである。『政權爭奪の方法』といふのは、今日まで既成政黨のやり古るした、無理に多數を作り、陰謀奇襲で政府を取ることである。『何時無產黨內閣が出來るか』といふ問題が大衆の興味をそゝるのは、無產黨が政權を取つたら、そこで始めて政府が一新される、少くもだらけ切つた日本の議會政治がその登場と共に面目を改めるだらうとの期待からである。しかるにその無產黨が、頭數を揃へるために既成政黨と同じやうな投票の買收や、僞造の多數を作つては、そこに金權との繫りが出來て、結局既成政黨と同じことしか出來なくなり、無產黨內閣の値打ちは全く無くなるのである。政權を取らなければ、政黨は何も行へない。その政黨に、成るべく政權を遲く取る方法を註文するのは、それ自體一の矛盾かも知れぬが、そこが肝腎要めの要點なのだ。流石に犬養氏はうまいことを言つた。政友會は今度は金が無いのだ、だからうちの候補者は民政黨の候補者より一尺短い刀で渡り合ふつもりでやつて貰はねばならぬ、と。この流儀でいへば、無產黨は體當り專門で敵を薙ぎ倒す覺悟と實行がなくてはならぬ。

しかしながら、實際の事情はどうかといへば、不幸にして無產黨の時代は案外早く來るのではないかと、私は思ふ。イギリスでは勞働黨が組織されてから一九二四年に最初の勞働內閣が出來るまで二十五年を要したが、日本では、一昨年の總選擧を起點として、恐らくそんな

にはかゝるまい。イヤその半分位の年數のうちに來はしないか。

斯くいふ所以は外でもない。最近日本の政界にもいはゆる憲政の常道が確立して、政友、民政交立の時代が開かれた。そこで、今度の選擧でも、政友會は、第二黨でさへあれば不可なしと、平然としてピッチも上げずに民政黨の後を追つてゐる。ところが、憲政の常道が確立し、二三回政民双方の手並を拜見した結果は、『ドッチの政府になつても一向變り榮へがない。』といふことが、可なり深く國民大衆の頭に刻印されて居る。問題はこの『ドッチになつても』である。政民兩黨の二大政黨時代はなほ暫く續き、双方ともアト幾回かは內閣を組織する機會を持つであらう。しかし、その間『ドッチになつても』の印象がだん〳〵深刻になれば、今度は地辷り的に無產黨に投票が集まる時代が來るに違ひない。無產黨が如何にそれを摑むかは別として、機會はそこに、しかしてその方向から來ると思ふ。

かといつて、今のところ、大衆が無產黨の實行力に信任を拂つてゐる譯ではない。それ故に、無產黨の政府が出來るといふことは、勿論今のどの政黨が他を克服して多數を獲るといふことの豫言ではない。兎に角に既成政黨にあらざる無產黨が、——その陣營內の派別は、黨員ならざる大衆には大した問題でない——內閣を組織することを意味するのである。

この無產黨內閣の機會が、無產黨側の用意の整はざる間に、餘りに早く來れば、それはひとり無產黨の不幸のみでなく、日本の議會政治にとつての不幸である。しかしながら私は、無產黨間の鬪爭、分裂については、實は餘り氣にしてゐない。實際政局に當る機會が容易に想像されぬからこそ、理論鬪爭に火花を散らし、觀念の上で爭つてゐればこそ際限がないが、議會の中に入つて目の當り既成政黨の跳梁を見れば、無產黨は無產黨同士に相提携せざるを得なくなる。それは少數の間ではあつたが、前議會、無產派議員八名の間にも見得たところである。それ故に、無產黨の力を併せる實際の方法としては、一人でも多く議員を出すと共に、院內の行動を出來るだけ一致させるために、極めて拘束の緩い議會無產黨團を作ることを考ふべきであらう。これは私の新案でも何でもないが、實際の方法としてはこれ以外には想像されない。さうすれば、或ろ時代に既成政黨內における無產黨同情者の中繼驛ともならう。無產黨それ自體としては、そこで、理論鬪爭以外、實際の仕事にも當れさうだといふ信賴を、大衆の間に博して置かねばならぬ。何が無產階級運動であるかといふ議論は姑く措くとして、政權を目指す政黨運動としては、是非共それは必要である。それ以外、無產陣營內の意見の相違などは、イザとなれば、クック、マクストンとスノーデンでも一緒に辛抱出來るのだ。あまり心配を要しまい。

最新刊好評沸くが如し

堺利彦著

貧富戰と男女戰

―現代社會生活の不安と疑問―

不景氣・生活難の解剖!!

最古の先覺社會主義者として、多年我民衆運動の第一歩に立つて馳驅して來た彼は、老いて益々旺んなる意氣と情熱を此の一書に托して力鬪中である。

此書の主眼とするところは、現時の社會組織の缺陷と生活不安の原因を摑み出して親切にこれが禍根を糺明し批判したところにある。ともすれば頑くな理論鬪爭に終始しやうとする社會問題も、此の人の卓拔な識見と老練な筆致によつて痒いところに手の屆く名醫の診斷書となつた。誰が讀んでもよくわかり、誰が讀んでもなるほどと肯づかしめられる。

老來益々冴え來つた名文は多少のユーモアをも含んで、一行一句、流石に若徒の追隨を許さざる獨歩の境地を適くものがある。

堺としひこ！何とその名の親しみ易くなつたことよ。多年解放運動に一身を挺して老ひるを知らぬこの鬪士のために、君の淨財を喜捨されよ。

四六判並製
定價一圓二十錢
送料内地十二錢 鮮滿十八錢

東京驛前丸ビル五階
中央公論社發行
振替口座東京三四番

淺草・餘りに淺草的な

武田麟太郎

1

ぼくの淺草には十二階はない。人が淺草についておしやべりをする時、彼は必ず十二階を云ふ。描き出す。追憶する。ぼくたちにその幻影を强ひる。だが、淺草へ來て見給へ。そんなもののあとかたも(と云つては云ひすぎかも知れぬ。その塔のあつたあたりに建つてゐる昭和座のうしろだつたかに、十二階興行株式會社の事務所があるはずだから、十二階の名はまだ殘つてゐるのだらう)——とにかく、そんなものは見當らないのだ。ぼくは十二階のない淺草を語りたい。淺草は寂しいね、とよく人は云ふ。ぼくは寂しいとは思はぬ。かなしい淺草よ、とうたふ人もゐる。何がかなしいものか、淺草は明るくて樂しくて、人を滿足させる。人をはまりこませる。銀座と云ふ街はどうも人ととけあはない。が、こゝはぼくたちが二度も遊びに來ると、ぼく(自身)の淺草と云ふ氣が起るのだ。だが、もちろん淺草ととけあはぬ人種もゐる。誰だらう。ぼくの知つてゐる慶應大學の學生だが、彼は淺草はおつかないと云つた。何とはなしにこわい上に、ユスラレルと云ふ。こゝは下層民の歡樂場だ。實を云ふとこの慶應大學生はラグビイの選手で壯大な身體をしてゐるのだが、彼も彼の出身の故に、淺草にゴツタガヘシになつてゐる彼とちがつた階級の人々に何とはなしに壓迫されるのだらう。さまア見やがれだ。ユスリはなる程實に多い。氣をつけて下さい。しかし、モサ(スリ)と同じやうに、人の懷中をねらつてゐる不良は、人の顏色で仕事をするのだ。彼らの一人が語つたのだが、コイツと思ふユスル相手はきつと、どつかユルミがあるのださうだ。シャンとした眼をし、淺草との間に紙一重の

ヘダテもないのにどうもユスれぬ、と云ふ。ユスリの手にも、色々あるらしい。あんちやん、ちよいと顔を貸してくんないで當通りの薄暗いところへひつぱりこむのがある。どこそこで存んだのだが勘定が足りないから貸してくれとうるさくついて來るのがある。えい、賑かな通りだからといゝ加減に聞き流しながら、氣を落ちつけるために煙草でも口にくわへると、横からヒョイと、火を貸してくんな、と人相の悪いのが現はれる。マッチを貸したりして氣がつくと、先程の勘定の足らんと云ふ男とこの人相の悪いのとの間に挾まれて了つてゐるのだ。かうなると二三圓は財布からはたき出さねばならない。電車賃をかせ、と云ふ一見ヤサシイ、生白い男が田原町停留場附近に毎日のやうに出てゐますから御注意。ヤサシク見えるのは一見だけだから、決して莫迦にしないやうに。彼は外面如菩薩内面如夜叉と云つた風の男ですから。喫茶店なんかに、顴骨の秀でたジャケツを着た大きな男がはいつてくる。九州辯で、鉛筆を買つてくれ、と云ふ。おとなしく買つてやつた方がいゝ。十錢出せば二本もくれるから。――とにかく、ユスラレタ人はまだ充分淺草を享樂してゐない人だ。そこから多かれ少かれ緣の遠い人なのだ。こゝに來れば、みんな兄弟のやうな氣持にならねばウソだ。お互ひに面白いことは一緒に笑ひ、腹の立つことは一しよに憤慨しよう。山の手の映畫常設館にばかり通つてゐる人はこゝの常設館はヤカマしいと云ふ。何故と云ふに、こゝでは一心に映畫を面白く樂まうとして、勇しいところでは誰も彼れもが一しよに氣張り、滑稽なところへ來るとお互に顔を見合せて、知らぬ同志がツツキアツテ大笑ひする。六區で珍らしい事件が起ると次から次へと報導してくれる。新聞でも號外でも恍んで用のすんだのは貸して讀ませてくれる。街上で喧嘩でもあると黑山のやうに集つて兩方の云ひ分を充分きいて、理屈のとほつてゐる方へみんなで應援する。みんなが無意識のうちにつながりあつてゐる。三田村四郎のピストル事件のあつた夜。あの物凄い非常警戒にどれだけ淺草人種は反感を持つたか。鍋山や國領や三田村がまだ捕まらぬとか捕つたとかの噂が、その後も食べ物屋や、ちよつとした呑み屋で、お客同志、お客とそこのお神さんとの間の話題によくなつてゐたのをぼくは知つてゐる。もちろん、こゝに群ることによつて、彼らが組織されたわけではない。こゝには實に複雜に色んな階級層がゴッタガヘシになつてゐる。近代的工場勞働者もゐるだらう。下級社員もゐる。封建的な職人も自由勞働者もゐる。小商人も歩いてゐる。手工業の徒弟。學生。失業者。朝鮮人――だが、それらは一言で云へば被壓迫階級だ。彼らは無意識のうちにつながり、時代の主動力にあつ

い信頼と同情とをもつ。だから、ちよつと立ち留つて、野師の口上をきいて見給へ。彼はきまつて、聞く彼を取り卷いてゐる人々を納得させ、それらを散らせまいとするために、謂ふ所の左翼的言辭を使用する。彼は巧みに時事問題をとらへて資本家地主を罵倒する。プロレタリヤと云ふ言葉が亂發される。さうでなくては、彼の賣らうとするマヤカシモノの本や藥をとり出すまで聽衆は耳を貸してくれないのだ。――淺草はそんな人間の集るところだ。

2

時間と云ふものは實に恐ろしい。淺草のはじまりはどんなのか、ぼくなんか調べたこともないが、恐らくは、最初觀音樣があつたのだらう。その觀音詣りの客をめあてに、奧山の見世物が出來、その後に、六區の歡樂場が作りあげられたのにちがひない。だが、ぼくは淺草へ來て、仲見世をつき拔けて本堂の前へいやが應でも出て、はじめて、さう〳〵、こゝには觀音があつたのだな、と思ひ出す。震災の當時、この佛さまのために無數の人々が救はれたと云ふが、ぼくは知らぬ故、果して觀音樣のためだか如何か。あのおみくじなんかもでたらめだね。ぼくに金錢西北より入り來るとか何とか出たが、ちつとも金はやつて來なかつた。だが、仁王門に一つの奇蹟がある。眞夏のムシあつくて、風のソヨともない日中でも、あの門の下に立つてごらん、どこからともなく、柔らかい涼しい風が吹いてくるよ。けれども、これも奇蹟でもなんでもないだらう。仁王門だから涼しい風が吹く理由はないから、地勢とか、建築の上に、何かその原因があるにちがひない。――ぼくは今、時間と云ふものは實に恐ろしい、と云つたが、實は次のことを語らうとして思はず、横へそれたのだ。遊樂館に人氣のある深川繁子孃。(ラヂオのおかげで、彼女の聲も山の手にまでとゞいてゐるらしい)彼女は安來節のうたひ手だ。安來節と云ふのは緋の毛氈の上に座つて、兩脇に三味線、太鼓、尺八なぞを伴奏させながら、うたひ出すものである。ところが最近の彼女は舞臺(ステイヂです)に立つてバックには兩側に黑い布を立て、フットライトに彼女の立ち姿の影法師を紫と桃色に作り出させ、さて、ピアノの伴奏で、「ヤスキブシ」を獨唱する。そんな新時代的な趣向になつてゐる。うれしい。安來節の寄席と一口に云はれるが、これも大へん變つたのだ。江川でも帝京座でも玉木座でもレビューと云ふものをつけ加へてゐる。帝京座なんかは舞臺横にジャズバンドが陣取つて、絶えず演奏する。もちろん、このレビューなんかも、昔の大切にきつとやつた「二三段返し」「五段返し」の云

ひ換へにすぎない。レビユーと云ふものの流行する以前に淺草にはすでにこれがあつたのだ。レビユー的演出とか云つて早稻で芝居を演出するが、あれもこちらの寄席ぢやとつくに實行してゐた。「三段返へし」と云ふのは最後の幕に全員總出で、何かの歌を主題にして踊り拔いて三度ダアクチエンヂするのだ。これには時代錯誤的なのがあつた。いつだつたか、夏なのでみんな水泳着で（それもワンピイスのやつ）踊つたのだが、姉さんたちの頭は相もかはらず、銀杏がへしや桃割れなんかの日本髷なのだ。それに脚は悪い日本人の特徴として、れいの大根ではないか。だが、近頃は段々とよくなつて來た。これはカジノ・フオリイズのいい影響だ。カジノ・フオリイズもすつかり有名になつた。ここへは近頃銀座人種もえらさうにいい洋服にステツキなんかを持つて、ちよつと顏をしかめながら、何だい、と云つた風の顏で見物してゐるのが實に多い。その癖、歸ると友人たちには、實に面白いのだ、なぞと宣傳するらしい。段々こんな客がふえて來る。ざまァ見ろだ。ギンザには威張つたつて、こんな愉快な頭のいい見世物はないだらう。劇作家で有名なのがカンゲキして、ここのために脚本を書いて、呉れてやると許りに持ちこんだが、いえ、カジノ・フオリイズではこちらで充分面白い脚本をまにあはせてゐますから、とつきかへされたと云ふのは、ちよつと胸のすく話だ。そのカジノも淺草水族館の餘興にすぎないのも愉快だ。最初、ここもしかし、入りが悪かつた。昔なんか、見物席には數人のお客が前の方にチヨコンと腰かけてゐた。しかし、舞臺ではみんな明るい顏をして、思ふ存分うたつて踊つた。舞臺と作者席の方が見物の頭數よりも多いのである。だが、彼らは悲觀した風もなく、その少ないお客を悦ばすために、しまひには自分自身も悦びつつ、舞臺をつとめた。ここがはやり出した一つの原因としては川端康成氏の淺草紅團と云ふ小説があるのは見逃せない事實だ。――ここに集めてゐる少女は大體美しい脚をしてゐる。ストツキングなしなのも新しい。だが、こないだの「美脚展覽會」の時に幕の下からズラリと脚を並べて見せた時、蟲に咬まれたあとがついてゐるのもありました。寒いので腿のあたりに血の波紋の浮き出してゐるのもありました。幕で顏が隠れてゐるので、中で少女たちはおしやべりしてゐた。その中でカン高い梅園龍子が「××の支那ソバはうまいよ、けふ食ひに行かうか」と男の子のやうな口をきいてゐた。まだこの娘は十六になつた許りだ。男の子のやうな云ひ方をするのもムリがない。お乳もまだ小さい。他の少女たちより活潑に脚をあげたり、腕をふつて踊るのも、まだ子供なのだからだらう。他の少女は腕を高くあげる時に少

しく遠慮氣味なところがあるが、彼女にはない。彼女だけが腕毛がないからかも知れぬ。ぼくは彼女を舞臺で見てゐると不思議に五九郎一座にゐた歌藥を思ひ出すのだ。彼女が舞臺をやめた時は十五だつた。だが、その時、もう鉛毒で齒ぐきは黑くなり、齒は落ちるし、腿の附け根なんか紫色に腫れてゐた。彼女を可愛がつてゐたために、不良少年から保護するために、二時頃までも舞臺稽古のすむ歌藥を待つてゐたお祖母さん。孫にへそくりから七圓五十錢の化粧鞄やビロードのマントを買つてやり、大部屋の連中に可愛がれるやうにと中の島の「おまさ」から、うなどんや、すしの通し物をしてゐたあのお祖母さん。彼女が樂屋の梯子から落ちたために死ぬと、歌藥は鉛毒で舞臺に立てなくなつた。——今、彼女は淫賣をしてゐるとか妾になつたとか云ふ話だが、都新聞の噂がきに女學校を二年でよしたさうだと書かれて「あたし、女學生あがりだなんて思はれるとシヤクだわ」と云つた歌藥のおもかげを——ぼくは時々、カジノ・フオリイズの舞臺の上に見る。これはほがらかにゐる梅園龍子には氣の毒な聯想だ。——ここに大阪ナマリの藝のうまい人がゐた。川村豐子である。見えなくなつたかと思ふと、帝京座で武智豐子と改名していい役をしてゐる。帝京座の女力士のブーシ孃。毛唐の女同志の格闘は實にエロチツクだ。ここにリヂヤ孃、タマーラ孃がゐる。仲よく公園を散歩してゐる。淺草田島町の人で二村定一。この人もよく、あの脊の低い鼻の大きな特徴ある身體を歩かせてゐる。人氣ある聲樂家、强さうなヨタモノを二人もひきつれ、えらさうに腕まくりしてゐる彼が、人々にふりかへられ、いよう色男。二村だ。二村だ。などと聲をかけられると急に悄氣るのもいい。彼は舊來の民謠家のやうにボカシテうたふことを藝術だと考へない、極めて精確である。大衆は精確を愛す。近頃、二村定一は十五六の美少年を可愛がつてゐるらしい。公園劇場出演の河部五郎一座の五味國枝がボンヤリと射的屋でうち落されるバツトを見てゐる。小原節の肥大な佐々木靜奴が眼がねをかけてゆつくり步いてくる。東京館の杉浦市郞が勢よく白十字堂へ飛びこんで來てコーヒーをのむ。ブロマイド屋の表には本日午後六時、結城一郎氏來店と廣告してゐる。サインの求めに應ず。萬歲師の千代八、八千代が舞臺とはまるつきり反對のおつかない表情で仲見世をヒヤカシてゐる。千代八、八千代ほどヤジリ屋を利用してゐる萬歲師は少ない。ヤジリ屋がなかつたら、彼らの藝はあれ程、うまく進行しないだらう。ヤジリ屋と云ふ商賣があるのだ。いい日には一圓五十錢位の金になる。彼らは大向ふから、かけ聲をかけたり、藝人に注文を出したり、滑稽なことを云つて見物をどつと笑はせ

たり——とにかく、見物と舞臺とを一つにまとめ、藝の進行をたすけようと云ふのだ。吉本興行部なら、そこの直營してゐる寄席ならどこへでもはいれるマアクを持つてゐる。面白い媒介物だ。見物の中には、毎日やつてゐるヤジリ屋の文句をおぼえて、無償で大向ふから聲をかけたりするのがゐる。すると、ヤジリ屋は大へん憤慨するのだ。商賣を妨害されるからだ。百姓、ダマレ！」とどなる。百姓と云ふのは、このヤジリ屋によると、この上もない侮蔑の言葉らしい。然り、今まで百姓はトテツもなく搾りあげられ、抑へつけられ、卑しめられて來た。

3

先日、淺草の萬歳師が帝國ホテルの演藝場に出演した、ときいた。ぼくは、サゾカシ、彼らはやりにくかつたらうと同情してゐる。ヤジリ屋もゐないし、第一、見物が見物だ。お互ひに言葉がちがふのだ。興味の置きどころがちがふのだ。描寫法がちがふのだ。だから、あんなにも淺草の大衆を悦ばせる彼らの萬歳の妙技も、ホテルの見物の方々にはちつとも面白くなかつたかも知れぬ。だが、それはどちらの罪でもない。こちらとあちらとが、生活がちがふと云ふことが一番いけないのだ。プロレタリア文學をブルジョア文學者が理解し得ないのと同じ理由である——文學と云へば、今、淺草で一番讀まれてゐる小説は何であらうか。これは淺草に限つてのはなしだが、小説と云ふのは、こないだ淺草の騎西屋で出版記念會をやつた徳永直の「太陽のない街」ではなくて、朝日の夕刊に連載されてゐる川端康成の「淺草紅團」である。車夫なんか、あつしたちが第一回目に登場してまさ、と威張つてゐる。すべて淺草で生活してゐる人々は、それからそれへと傳へて（これは春秋座のテケツの言葉）愛讀してゐる。何故だらう。理由は簡單である。そこには彼らのよく知つてゐる場所のことが、よく知つてゐる生活のことが、よく知つてゐる人物のことが書かれてあるからだ。このことは充分注意されねばならぬ。大衆は具體的な熟知してゐることが藝術化されてゐる時、最もよく、それを受け入れるのである。

プロレタリア・リアリズムもここに一つの基礎を持つてゐる。もちろん現實も文學的に變形される。しかし、それはめつたやたらに遠い遙かな、離れされる意味ではない。このことは單に場所や事件や人物だけの問題にとどまらぬ。描き方もさうだ。ぢかに見て、ぢかに描く。プロレタリア文學でどこのことか、いつのことか分らぬのは一つの缺陷であると同時に、モウロウとした云ひ廻しや、くどい形容詞なんかも排しのける必要がある。横光利一氏が「飛行機に乘つた記事には形容詞が多い」とのべ

てゐたのを思ひ出しても分るのだ。實體から眼を離し、遠ざける程、形容詞が多くなる。直接に見てゐる、生產階級の文學に、形容詞が多かつたり、モコとして捕へ難い文章のあるのは恥だ。——さて、「淺草紅團」に第一回に出たと云ふ公園の車夫について述べよう。

4

自動車と人力車とはどちらが速いか。人力車が負けた。今、六區から人力車に乘つて歸る人なんて殆んどゐないだらう。そこで車夫の生活は益々苦しくなる。數人で金を出しあつて、それを積んで自動車の車輛主にならうと考へるのもゐる。けれど、それは、容易なことではない。で、今まで副業にしてゐた、高等淫賣の客引きを殆んど本業のやうにしだす。彼らは盛に男のあとからついて來て「旦那、遊びに行きませんか。キレイなタイピストがゐますぜ」と誘惑する。「素人です。」「十兩でいいんです」——彼らは客を乘せて走る。以前は新小梅町の方へひつぱつた。今は分散してゐるらしい。兎に角、キサガタ署管內から一歩でも出ようとするのだ。きつとその條件で×から默認されてゐるのだらう。連れられて行つたさきで、數人も女が出て來、そのうちから選擇するには、ワザとひつくりかへしたお銚子の酒を拭ふために、みんなが手巾をさし出す、そのうち客が受けとつた手巾の持ち主の女が彼の相手と定る、と云ふ話が傳へられてゐる。しかし、それは嘘だ、と觀音劇場橫の長谷川と云ふ車夫が云つた。公園の池の端によく五十位の老婦が若い着物を着、三十五六に顏を作つて立つてゐるのを見るだらう。彼女は米久橫の旅館を根城としてゐる。若く美しく見えるからとてダマされてはならぬ。表面と云ふやつが曲者なのだ。味方面した敵の廻し者が生活のための血みどろな戰ひの中にもはいつてくる世の中だ。莫迦な男を釣るために、彼女がカツラをかぶつてゐるのなんか、まあ恕すべき點もありませう。乞食相手の十錢淫賣のお玉。飛行機のお光。今はすつかり姿を隱したが公園きつてのアバズレ、チャブヤのお六。彼女の言葉によると、彼女は淫賣をしながら、世界中を廻つた。テーブルの上へ、スカアトをはねあげて、脚をどつかとのせて、へつ、かう見えても、このストッキングはシルクよ、と威張つた彼女。まア、煙草に火をつけるのにはかうするものよ、と叱られ數へられたヨタモノも數多い。子指と子指とをすり合して、燐寸の消えぬやうに風おほひをしながら、火を口にくわへた煙草に持つて行くのだ。あちらの風習ださうである。賣春婦は實際公園に多い。××館橫町の小料理屋はみんなそんな女のゐるところだ。深夜、料理屋の二

階から呼ばれても別に人は驚かないだらう。だが、思ひもかけぬところから――例へば、自轉車あづかります。五錢（この自轉車あづかり屋の多いことは旅館の多いのと同じく淺草の特徴だ。數へ切れぬ。しかも、そこには數へ切れぬ程、自轉車が列べられてゐる。夜は、露店の荷車をあづかる。）その自轉車あづかり屋の二階から白い手がさしまねいたりすることがある。千束町の公認銘酒屋が廢止された後も、（あれは地震後、再処を許されなかつたのは、吉原遊廓樓主出身の府、市會議員の運動があつたからだ、と云ふ。商賣敵だから。吉原のお客が、そこで吸ひとられるからだ。）密淫賣は決して淺草から影を消さぬ。賣淫が公然であれ秘密にでもあれ、すべてのものと同じく商品である間は、それは絶滅しない。賣らねばならぬ間は、しかたがない。これらの女のうちには附近の旅館に連れ込むのがゐる。大體あの數多い旅館はつれこみ專門だ。カマピンとか、おそなへとか、番頭は稱してゐる。宿帳。東京市――と書き記すのはめつたにない。官憲の宿帳の檢査は却々嚴重である。帳場に荷物なぞあづけるときつと中味も調べられる。しかし最近は不景氣だ。宿泊人が一人もない夜がある。そのためと、もひとつ、口あけの場合には緣起を重んじて、宿泊料なぞも、かなり客の云ひなり次第になる傾向があるので、宵の口から來て、次の朝まで二人で一圓九十錢でとまつて行つた淺い女がゐた。――淺草へ女の人と來て、宿屋の前を通つてごらんなさい。番頭は既に食慾的な眼をして、こちらを貪り見るでせう。一寸でもその方へ眼をやつたら、彼は「お泊んなさいまし、お泊んなさいまし」と聲をかける。しかし、惡い旅館では部屋の中をコッソリと覗けるやうになつてゐるのがあるし、又、氣の弱さうな、公然とされるのをビクビクとしてゐるやうな二人づれにはユスリがましいことを云ふ番頭もある。ぼくはこんな番頭を一人知つてゐる。彼はぼくに、女が出來たら、それを遊ばして置いてはもつたいないから、玉の井か、龜戸へ出しなさい、と云ふ。世話をするから、と云ふ。周旋料として彼は三十圓受取るのださうだ。九百圓あれば銘酒屋を始められるので、彼はその資金を貯めてゐる。――お酒が十錢の酒場。どこもここも滿員だ。いろは。ともゑバア。江澤。大黑屋。野口。三岩。最近はどこもいい女を置くやうになつた。安い酒で、これらの女の顏を見ながら、みんな醉つぱらつてゐる。十錢の鍋の中ではさくら肉がグチグチと煮え立ち、佐渡おけさが合唱される。女がいらつしやい、いらつしやい、と通行人に聲をかける。こんな酒場の他に東京倶樂部の橫手にジャポン、帝國館橫にロックなぞと、コンクリイトと化粧レンガの活動寫眞街にふさはしい酒場ができた。だ

が、前からあるオリエント、世界、廣養軒、バットなぞと同じやうな生半可な――常設館のテケツがへんなおしきせの洋服で草履をはいてゐるのと同じやうな感じのものなのだらう。レストラン・洛陽」として窪川いね子に紹介された「聚樂」は松葉屋呉服店になつてゐる。――酒場も一見新しいモダンなのがあるやうに喫茶店にもそんなのが增した。チエリ・ハウスなぞは以前ケチなミルク・ホールみたいなのだつたのが今は二軒をぶつ通して、擦れつからしのレコードをかけてゐる。隣のナポリ。かもめ。エイス。二階に風呂槽のある「しろゆ」の向ひのヴエニス。面白いのは淺草には演劇青年が多いのだが、それらが、夜霧座とか、かもめ座、出陣座、とかをソシキして脚本朗讀會を開いたりする。それの事務所が各喫茶店に置かれてゐる。かもめ座のある「かもめ」の大きなお神さんが云つたものだ。「歌舞伎の好きな人もあれば、新派の上手な人もある。洋劇の得意なのも新劇がやりたい人もある。だから、そのやうに狂言を選ばなくちやァね」そこでかもめ座のプログラムができた。第一、辨慶堀川上使の段。第二、己が罪、由井ヶ濱の場。第三、オニイルの毛猿、第四、吉井勇の句樂の死。かう云つた調子だ。第一回を壽司倶樂部樓上で。招待劵がやたらに配られる。練習に大へんだ。――

5

淺草について語り出すときりがない。淺草は無盡藏だからだ。ぼくはまだまだ談したいことがある。水族館横に立派なコーヒ沸しを持つてゐる乞食について、數學を研究するために、大學帽をかぶつて計算器を賣つてゐる男について、又、同じくテキヤで無產者新聞を仲間に宣傳してゐた男について、一圓五十錢でフヰルム二十五呎つきの活動寫眞映寫器賣りの口上について、八つ目うなぎについて、暦賣りの祕訣について、雷門の四闇で十錢の繪本賣りに柳元小學校の模範生が立つてゐることについて、ローソク片手に相手の胸のあたりを見ながら、三十錢で易斷するアビル論者について――きりがない。だが、紙數の制限はぼくのペンをとめるのだ。又、談す機會がありませう。

（二月四日朝）

駝鳥漫談

上山草人

恐るべき親日外人の甘言

世界の三大醜状と云はれるものは、獨逸人の物の喰ひぶりとアメリカの廣告と日本のヨシハラである。美しく、可愛い、國だと日本を賞め讃へる謂はゆる親日外人は、いろ〳〵な點を擧げて親日の好意を示すのだが、甘言は凡庸人の耳に入り易く、苦言は兎角聞き捨てられるもので、心すべきはこれら親日外人の甘言であるにも拘はらず、我國の具眼者の間にもこれに共鳴する者がかなり多く、外人でさへ斯う云つて居るなど、引用したり、また、國粹保存主義者とか固陋な保守派の人々にも快よく受け入れられてゐる始末で、之れ位不埒なものはない。元來、親日外人が日本を賞めそやすのは實に無責任極まるもので自分の國を顧みると同程度の眞摯な氣持ちでものを云ふのではなく

彼等は、いつまでも、過ぎ去つた姿を有つ日本、錦絵の中の美麗な日本であらしめたいので、またそればかりを見、つまり自分の趣味や氣持から割り出して云はゞ日本を骨董視してゐるのであつて、生きた日本の苦惱を知らないのだ。カラコロ鳴る駒下駄の國、奇麗なゲイシャの吉原、鎌倉の大佛。いつまでも斯うした日本を愛してゐて近代生活に適應して行く新時代の日本を好ましく思はないのだ。

元來、親日外人の多くは、境遇や事情や或は利益になる所あつて親日を唱へるのであつて例へば、勳章を有つてゐる者、つまり日本政府の顧問になつてゐた者や、牧師として赴任してゐた者や、日本人を華客とするホテル業や何かゞ多いので、眞の日本を知り眞に日本を愛するものではないわけだ。外務省あたりの藝術費など多額に計上されてゐるといふからいろ〳〵な

も想像されないこともない。兎に角、これらの親日外人の言には、彼地に居る日本人とても迷はされ易いので、よく〳〵注意せねばならぬと信ずる。

新時代の生命が鼠算に殖え、國力はそれに順應して擧がらないのが現實の日本であり、その混亂を整理したり新しい生活を建設するためには幾多の難路を歩まねばならぬのであるから、我々は、なまやさしい懷古趣味に溺つては居られない。斯かる親日外人の甘言は斥けて、寧ろ却つて、排日外人の骨を刺す針の如き痛烈な苦言皮肉に耳を藉さなければならない。新時代の日本の建設のために我々は島國根性を捨てゝ潤く公平な態度で深く考へねばならぬと、私は信ずる。

あらずもがなの親類

私の永くゐたアメリカは個人主義の國で、子は成長すれば親から完全に獨立し、世間も之を當然とする。獨立した子は自由自在の生活をするのであつて、結婚や職業など總て自分一個の自由意志で處する。兄弟は他人の始まりと云ふが、アメリカにあつては兄弟(姉妹)はもう他人で近所に住まつてゐても互の生活には干渉しないのが常で、況んや伯父と甥の關係になると明らかな他人として交際する、其處にあるのは單なる友人としての親愛の情だけである。

然るに、我國は家族制度の國であつて、法律も亦之を規定してゐて、父兄はもとより親戚も重要な力をもつて個人に働きかける。日本の法律に於て一等親・二等親などがどんな法律上の權利を有つものであるかは法律家でない私は知らないが、個人の自由や意志を他から制肘したり束縛したり干渉したりするといふのは誠に困つたもので、こんな親戚はあらずもがなと私は痛感するのである。

私は世にめづらしい不思議な生れ方をしたもので、生れて直ぐ、父の實家、その養子先、母の實家、戸籍を貸してくれた親戚、それから育ての親戚など、おぎあと産ぶ聲をあげると同時に子のやうな或は居候のやうな誠に妙な子供として扱はれて來たのであつて、それらの複雑な關係は、從つて私には煩に耐えない好ましくない印象を深く刻みこんだ。私ぐらひ親戚を好まぬものがないと思つてゐたが、近頃の新しい時代の青少年は皆齊しく親戚を嫌つてゐる。私は私的感情からのみでなく新時代の輿論としての親戚は邪魔ものなりとする誠に至當な抗議の把持者である。

私は又肉身の數多き親戚の外、結婚解決のために妻方の一倍多勢の親戚を有つことゝなり一層この感を強くした。これらの

親戚の中には相當な地位・名望・財産家もあつて一見非常に幸福であるかに見えるが、事實に於ては實に煩さい。諸君御承知の通り私は並はづれた異端兒で私の行動が常にこれらの親戚の氣に入る筈はない。

兄弟より岐れた親戚は血統を同じうするものだから相互扶助をなすべきであるに拘はらず、僅かな遺産相續などでは相互排除をし、實に愚にもつかぬ燒香の順序を爭ふなど、くだらぬ爭鬪階級に墮ちてゐる。地位や財産など景氣のよい親戚は、兎角高壓的に威張るし、その反對に地位も低く財産も乏しい者は無暗と援助を求める。その癖かうした親戚は開けた時代に至つてもなほ自分の古くさい經驗から割り出して青年子女の結婚や職業の選擇に容喙するのだ。此の上もない不合理で寧ろ蠻戾と叫ばざるを得ないではないか。そしてまたこんな親戚に限つて、內容的な責任を有つかと云ふに僅かな事にも冷淡な態度をとり、時には種々法外な干渉を親戚間に强要して年若き子女から憤慨を買つてゐる。

我々は、元來、親戚は明瞭に他人なることを知る必要がある。人間何れも性格を異にし主義主張が異なるのだから、我々に友人を選ぶ權利があるやうに、親戚を選ぶ權利がある。すべての親戚と圓滿に交際ふといふことは不可能なことゝ云ふべきだから。親戚の中には好個の青年もあり好個の人格者の紳士もある。私は是等の人々とは友人として眞情に滿ちた交際をしたい。名ばかりの親戚には年末年始の禮に止めておいてゐる。但し、先方が我々の職業を嫌つてその謝禮に答へずとも私は私の責任ではないと信ずる。

お菜やと女流脚本家

私が若い頃新派の劇壇に身を投じ、その下廻りとして大阪に居た時の事だが、舞臺裏の樂屋へ小鉢に入れたお菜を賣りに來る者があり、美味さうなそれに大いに食慾を唆られたことを記憶してゐる。

ハリウッドに來てセットで撮影などして居ると、美々しく着飾つた貴婦人が一綴ぢの脚本を賣り込みに來る。仕事中の監督やプロジューサーなどを摑まへ、追ひ廻して、その賣り込みは傍で見聞きしてゐる者が緘くなるほど執拗こい。茲には明記せぬが、名前を聞くと世界に知られた有名な女流脚本家であつたり、時には二人程鉢合せして左右から賣込むことさえある。如何にアメリカがビジネスライクであるかゞ御解りだらう。

その脚本の中には相當な畫家の要領のいゝ繪圖面などが挿入してあつて、忙しい人間には讀ますとも一見して大體の骨子が

わかるやうに仕組んである。商賣上手もこゝに至つて極まれりと云ふべしだ。

之などは、樂屋賣り込みの小鉢もの、お茶屋と變らない、但し、一は三錢五錢、他は一度賣れば三十萬弗五十萬弗なのだから苦笑なしには語られない。

大學教授の映畫俳優

アメリカでは、映畫俳優の位地は高く世間から尊敬されてゐて決して蔑まれない。私のやうなものでも、汽車などに乘ると草人々々と實に大事にしてくれる。これなどはアメリカの民衆の藝術に對する理解が深いためで、誠に氣持ちがよろしい。

また一般にアメリカの映畫俳優には地位も高く教養の高い人が多い。下廻りには殊にそれが多く、大學教授の資格を有つ者も尠からずあつて、かのミルトン・シルスもその一人で、哲學の教授である。彼が私のためにパーティの司會者となつてくれた時、彼の書齋に入つて見ると哲學に關する書籍がギッシリとあつて、私は彼の問ふがまゝに貧しい智識の中から印度哲學の大要を語り彼からもまた聞いた事があつた。

有名なダグラス・フェアバンクスも亦南加大學に映畫講座を有つてゐる。之などは單に一二の例に過ぎないのであつて、あちらの大學には殆どすべて映畫の研究會や特別講座があると云ふことである。そして教授若くは講師として之等に出席する俳優が前にも述べたやうに尠からず居るのである。

婆がリードする米文化

アメリカでは社會の全般に亙つて分業といふものが實によく行はれて居る事は周知の通りであるが、男子と女子との分野もはつきりとして居て、之などは、アメリカ開拓の當初男子は外に出て働き女子は家に在つてそれ〴〵の仕事を分擔したからだらうと思はれる。例へば、大統領選擧の場合でも大勢を決するもの、或は、繪畫の展覽會の觀衆の大部分は、實に婆アさんである。婆アさんこそ眞のアメリカ文化を牽ゐる、支配するものである。婆アさんと云つても必ずしも年齡の者ばかりではなく、一般の女子も含まれるが、兎に角彼女等が、藝術の鑑賞でも書籍の批評でも何でも、つまり廣く社會の輿論といふものを造り出してゐる。

男子が働き女子が文化をリードするといふ此の點は、すべてが分業的でビジネスライクである所以でアメリカの長所だと思はれるが、同時にまた、婦人が形造る文化であるだけに文化の水準はかなりに高いものであるに拘はらず哲學的な深さや廣さ

を行つて居ない理由だと考へられる。

アメリカ映畫は何故世界に君臨するか

アメリカ映畫は、數字に於てアメリカ產業の重要なものであつて、その一二位を占めてゐる石油とか或はその他の大なる產業に次いでの數字を擧げてゐる。その數字は覺えては居らないが、重要な產業であることは皆樣も御存じの事と思ふ。兎に角アメリカ映畫は絕大なる產業の一つとして世界に君臨して居るその理由を私一個の眼から見た所を述べることにしやう。

第一わがハリウッドのある南カリホルニヤは非常に氣候の好い、日光が燦々として輝いてゐる處で、少し曇つた日を雨天と稱する位で、とても雨降りなんか想像もつかない。で初期に於て、活動寫眞が興つた時ハリウッドは何時も日光があるから撮り良いだらうと云ふので、その日光を慕ふてロスアンゼルスに皆集まつて來た。廣やかな處で遠く行けば海もあり、雪の降る處もあれば砂漠もあるといふやうな便利もあるので其處で初められたのがつまり勃興の最初で、砂糖ばかりで出來てゐるやうに思はれる金平糖にも實は葛の粉か何かの芯が入つてゐる、その最初の葛の粉と云ふのが『日光』だと私は思ふのである。兎に角日光に非常に惠まれてゐるロスアンゼルスは映畫といふ近代科學の大藝術の淵源となつたわけである。

それから次には、マーケットが出來たといふ事も重要なことであつて、皆が非常に良いといふので、キャメラマン、チレクター、俳優、作り役なりが方々からロスアンゼルスへ集まつて來て一つのマーケットを作り上げた。監督や俳優ばかりでなく自分の技倆や容貌に自信をもつ若い男や女がやつて來て、人が集まるからよく賣れる。よく賣れるから安くも出來るといふわけで、つまり產業の上から云へば一つのマーケット・ハリウッドが出來て來る、そればかりではなく外國で賣れて居る監督とか作者俳優を金の力で引つこ拔いて來たりして、益々マーケットが大を爲した。

又他の理由としては、アメリカでは敎養が非常に普及して居て、從つて民衆の平均點、知識力の平均點が非常に高く、どんな田舍に行つても相當の知識人が居るといふ有樣である。このやうに敎育が普及してゐると同時に、一方カングッて變に細かに考究し皮肉に批評するといふ謂ゆる高級批評家が少ないと云ふ事である。元來高級な理論や言論をする人は、時に普通の映畫の進路を非常に迷はすことがあるので、所がアメリカには皮肉な高級批評が殆どないと云つていい。日本などで映畫を作るに當つて、何彼と高級な理屈を並べる指導階級と、實際に五錢でも

十錢でも金を投じて來てくれるクラスにある處の民衆階級との相違が、知識の相違が非常に深く隔つてゐるかのやうに私は思ふが、アメリカにはその隔りが非常に短かいといふ事が、映畫發達の理由の一つと考へられる。何となれば、上に居る指導階級にさほどかうやかましい人の群れも少なく、一般民衆も相當に映畫を理解する者が多く、民衆と指導階級とが非常に接近して、指導階級と民衆階級との兩者の爲め同時に映畫を作る事がさほど六ケ敷い事でなく、またさう六ケ敷い事を要求して居ないので、その平均點といふものが非常に映畫を作りよくしてゐる。而してこの二階級の平均點といふものが、總て世界の民衆の平均點になつて居る。之がアメリカ映畫が次第に世界に君臨し得た一つの點だと私は信じて居る。

　見逃す事の出來ないことは、アメリカ映畫は事業として非常に的確な事である。日本では多くても一つの映畫から七本か、十本位しか燒增をとらないが、あちらではどんな小さな映畫でも三十本から二百本位はとるのであるが、之は賣れる見込があればこそで、その算盤が立つ程確かな事業なのである。そして此の事業に金を投ずるのは、金儲けに拔け目のない猶太人で、地を打つ槌は外れる事があつても彼等のやる事に外れつこはない。確實な事業と云へば數字を以て表はさなければならぬのだが、映畫といふ大衆を相手にする藝術も矢張り數字で表はせると思ふ。譬へば、人間の五感七情なるものの五や七も矢張り數字である。此處に相愛する男女があるとする、それが幾多の困難を拔けて遂に結婚するに至るといふ樣な事は、七情の一つの戀愛と云ふのが最も內容の中心を爲すもので之を滿點とする、斯ういふものは外れつこがない。次に母性愛である、例へば親不孝なものが居て種々親に苦勞をかけるが結局母親は子の爲めに危難に陷つて今や命も危ふいといふ瀨戶際に息子が出て來て助け出す、見物はホッとする、前の百點に對して之は六十點、或は七十點といふ譯になる。斯樣に、人間の平常の感情上の出來事を數字を以て表はして統計を取つて居る事が出來るのである。或は、仕事をするに當つて、今まで寫した何とかと云ふ映畫の筋は、どう云ふ筋から來て居るか、戀愛何割、母性愛何割、その上に復讐、等々、映畫藝術を構成する上に於ける一切の便宜が調査されてあり、或はまた何處の町では、一例すればニューヨークではどの位の、テキサス程の田舍ではどの位の成績を舉げ、シカゴではどの位、日本で云へば東京では、大阪では、青森や函館ではどの位の成績をあげたかといふやうな事が一々リストに出來てゐるのである。從つて藝術もすつかり利潤化した計算になつて了つて脚本がどの位かゝる、數萬圓で傭つた前の

女は何々の役が、適當た又誰はどの位の役をするから之れ位の金を出して、どの位の資本を注げばどの位の效果が出て來るといふ猶太人一流の算術が出來てゐるのである。從つて、斯樣な綿密た調査と計算を本とした役等の事業は外れつこがないわけで、之もアメリカ映畫の强みの一つである。

又アメリカの凡ゆる事業がさうであるやうに、水商賣とも云へる映畫事業に於ても同じく產業の合理化なるものが實によく行はれて居る。自分の仕事は自分が全力を盡してやる、然し人の仕事は決してやらない、かういふ點から見て所謂產業の合理化なるものには弊害もあつて、例へば、多額の金をかけながら私の持つてゐる扇子の要が外れたので傍の者に直してくれと云つても、俺の仕事ぢやないと云ふ、小道具方に持つて行つても俺の受持ぢやないと云つたりして、大勢の人があり乍ら終に扇子一本を手にとる事をしない。"not my business" と共に "not your business" と云ふ事があつて、曾て、支那人は耳輪をかけるものではないといふ事を歷史通の或人から注意されたので、それを云つた處が "not your business" と叱りつけられた事があり、實にその弊害も非常にあるが、併し大量生產は日々刻々と最新の知識を進めるには合理化をやらなければならないので之を實行する所がアメリカの映畫である。

科學の實用並びに研究も又ハリウッド映畫をして常に時代の尖端に立たしめる一つの大なる要點でもある。

以上の諸點が、今日アメリカ映畫をして世界に君臨する所以であらうと私は信ずる。

私は現狀に於て何も全部アメリカを謳歌するものではない、然し、アメリカが斷然他の諸國から拔んでて何處までも利益を上げて居ると云ふのは、唯弗の威力ばかりではなくて、なか〳〵確乎たる根本に基いて事業を合理的にやつて居るといふ處等もあるだらうと私は信じてゐる。

(草人は未だ殺人的多忙狀態から脫し得ませんので今回の駝鳥漫談もまた、講演の筆記や樂屋での杜撰な思出話し位でカタばかりの責任をふさぎました。讀者並に編者の御海容を乞ひます——新宿松竹座の樂屋にて上山草人。)

スターリンといふ男

大竹博吉

レニンの棺を舁ぐスターリン

スターリン！　鋼鐵人（スターリン）！

かれの名はいま全世界が知つてゐる。プロレタリアートは親愛のシムボルとして、ブルヂヨアジーは脅威と憎惡のシムボルとして——。

最初、私がスターリンを親しくみた時、かれはレニンの棺を舁いでゐた。レニンの棺の前方を舁いで、「赤い廣場」を、クレムリン城壁のかたはらにある灰色のレニンの墓へしづかに進んで行つた。いまスターリンの片腕だと言はれてゐる、前額部の廣く凸出したモロトフの顔が、スターリンの暗い顔とならんで、やはりレニンの棺を肩にのせてゐた。

千九百二十四年一月二十七日の朝だ。——

零下三十六度！

レニンの棺を墓におさめて、共産黨の幹部たちは十坪ばかりの墓の上に押しあふやうに立ちならんでゐた。カリニンもゐた。ルイコフもゐた。シノヴイエフもカメネフもブハリンもゐた。トロツキーの姿は見えなかつた。（彼はたしかコーカサスに轉地してゐた）

なぜかスターリンの姿だけが際立つて強い印象をあたへた。コーカサス風の灰色の羊毛皮帽を手にもつた彼の髪は漆黑であつた。髭の先端は息が凍つてまつ白であつた。黑い、腰にひだをしたコーカサス風の外套が素敵に似合つて見えた。東洋人——スターリンが特につよい印象を私にあたへたのは、そのためかも知れない……。おそらくそれに違ひない。浅ぐろい、彼れの暗い顔は、黄ろ味を帯びてゐた。

山上の鷲

その翌晩。——大劇場（ボリショイ・テアトル）で催ほされた「レニン追憶の夕べ」でスターリンの演說をはじめて聽いた。彼れのロシア語にはすこし訛りがあつた。錆のある、句ぎりのいゝ、切斷的な彼れの言葉は、明快な味力をもつてゐた。長く切れたまなじりの小鬚、鋭どくそゝり立つて筋の通つた鼻、漆黑の口髭、黑い凄味をおびた強く光る眼！

彼れは意志の人としてのレニンの追憶をのべた。

「レニンは毅然として高く、炯眼をもつて遠くを見とほす山上の鷲であつた」——スターリンはレニンをさう評した。

詩人デミヤン・ベドゥヌイはスターリンの誕生五十年祭にあたつて、このスターリンのレニン追憶の言葉を想ひ起してゐる。——「スターリンの心に映じたレニンは、スターリン的レニンである。スターリンこそいま黨内の山上の鷲だ！」と。

有名な話である……。

スターリンが黨内の反對派を慴伏して、毅然として黨内を睥睨してゐるとき、反對派のあひだに「コーカサスの山上の鷲」——と書いたスターリンの肖像エハガキを封入して黨員の間に郵送することが流行した。この皮肉に共鳴するかどうかによつて、それを送られた者がスターリン派かアンチ・スターリン派かを見わけようとする仕組みであつたらしい。スターリンをして小レニンの名をほしいまゝにさせたのは、むしろスターリンの敵である。

小レニン

スターリンの名が世界的になつたのは、レニンの死後である。レニンの死んだ當時はまだ、トロツキー、ジノヴィエフ、カメネフ、ブハリン、カリニン等の名の方が、世界でも、ロシアでも響きが大きかつた。

レニンが死んだ時、「レニンの後繼者は誰れだらう？」——といふ質問に「スターリンだ！」——と言下に答へた者は、共産黨員の中でも黨の内情に通じた連中であつた。

「レニンの死後、ロシア共産黨を指導して行く第一人者はジョルヂャ人スターリンであらう！」——私がモスクワから打つた通信電報は、日本の多くの新聞では「沒」になつた。

或るインタビューの時に「レニンが死んだためにロシア共産黨幹部の間に分裂が起るやうなことはないか？」——といふ質問にこたへて、スターリンは言つた。

「我々は全共産黨員が一つになつた集合力をもつて初めてレニンの天才的な指導力に代へることが出來るのを知つてゐる。一層つよい團結がうまれるとしても、決して分裂がおこるやうなことはない！」

レニンの死んだ頃の四十萬人の聯邦共産黨員は、いまでは百萬人以上になつた。しかし、名のある指導者のうちでトロツキーは逐はれ、ジノヴィエフ、カメネフ、ブハリン等は、いづれもスターリンと爭つて失脚した。レニンの天才的な指導力に代はるものは、スターリンの指導力である！

スターリンの性格

スターリンの敵は、傲頑不遜な暴君として彼れを描いてゐる。レニンさへもスターリンの「官僚主義」を氣にかけながら死んだと傳へてゐる。スターリンは暴君か？

スターリンの性格——。

不屈、峻嶮、果敢、豪邁、苛烈、剛毅、執拗——さう言つた東洋風な形容詞は、敵と味方が一様に彼れにあたへてゐるところのものである。また彼れの黨人としての閲歴がこれを裏書してゐる。

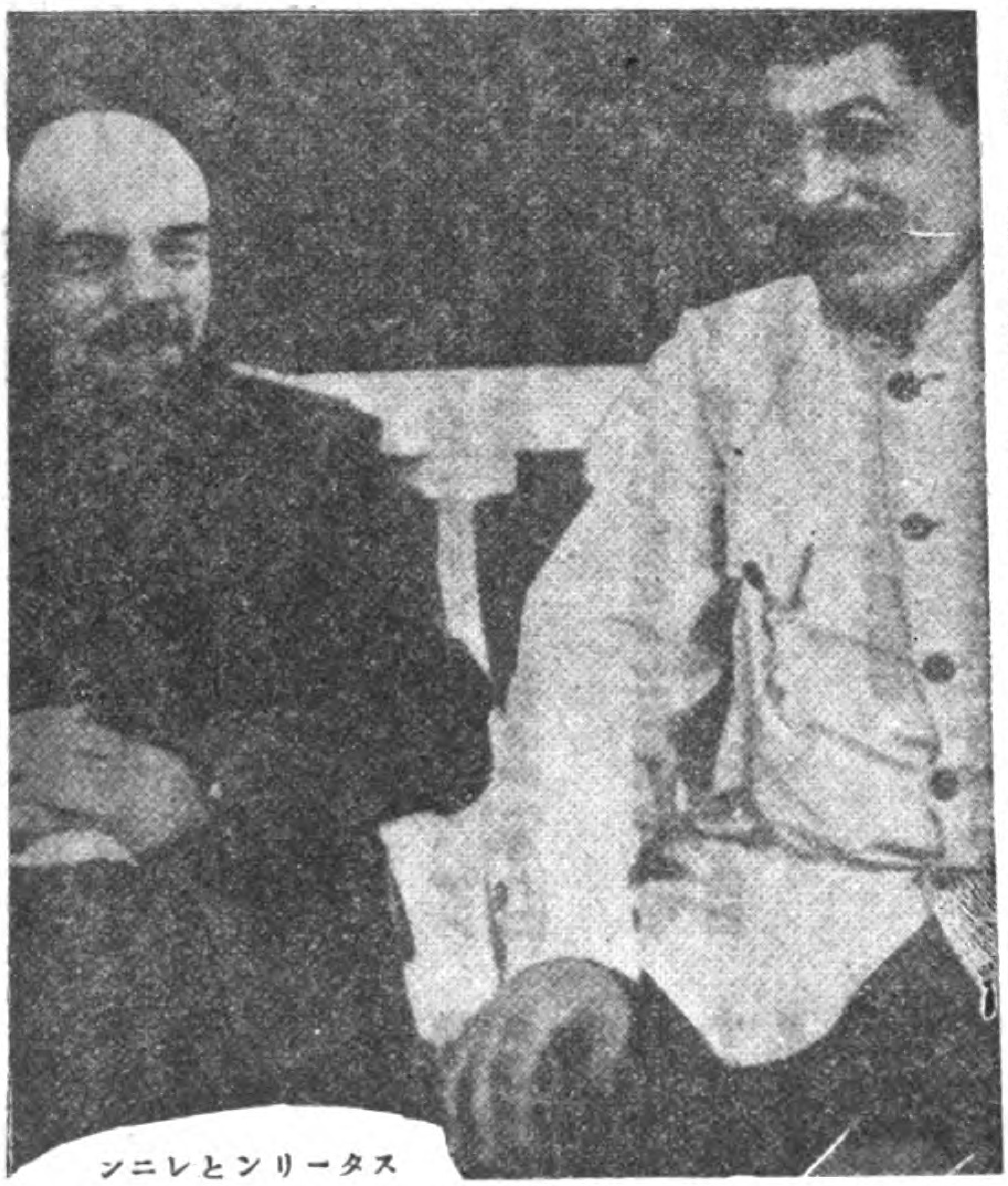
たゞ彼れの敵は、「陰険」の二字をこれにつけ加へてゐる。彼れの味方は、レニン主義擁護のためのすぐれたる「戰術家」だと評してゐる。いづれが眞實か？

スターリンには、その感じから言つても、風貌から見ても、柔らか味はない。重たい、冷たい、黒い、「鋼鐵人（スターリン）」にふさはしい、鋼鐵そのものを體現してゐるのが彼れである。冷重な壓力をもつて人に迫るものがある。レニンの特徴は、彼れの「微笑」であつた。その眼から溢れる柔らかい「微笑」が人を惹きつけたと傳へられてゐる。論敵にたいする毒舌が有名に鋭かつたにせよ、机上に片ひぢを突いて禿げあがつた頭の一方を掌にさゝえながら微笑と共に壇上の論敵に聽きいつてゐるレニンの

姿は、いつも一種の柔らか味をよび起したと語り傳へられてゐる。それは、悠々たるヴォルガの大流にも似てゐたであらう。レニンはシンビルスクに生れてサマラで成長した。純粋のヴォルガ人である。

スターリンは高架索のチフリスに生れて、そこで革命家となつた。チフリスはカスベク山脈にとり圍まれた磽角たる盆地である。――レニンはメンシェヴィキから「硬石漢(テオルド・カメンスイ)」の名をあたへられた。それがボリシェヴィキの代名詞となつた。スターリンこそこの「硬石漢」の名をうけ繼ぐにふさはしい。ヴォルガの大流がレニンに幾分の柔らか味をあたへたとしても、カスベク山脈の峭々たる磽角の間に人と爲つたスターリンにそれが缺けてゐるのは、仕方のないことだ。

トロツキーはスターリンを評して「復讐の權化だ」――といつた。盟友フェリクス・ゼルジンスキーが一九二六年にカメネフと論爭して、興奮のあまり心臓痲痺で仆れたときスターリンは文字どほりに怒髪冠を衝いて起つたさうだ。一方からみれば「復讐の權化」である。他方からみれば、古武士の「友情」だと見える。スターリンが反對者から猛烈な敵意をうけてゐると共に、その味方からは相當に深く信頼されてゐる理由は、恐らくかうした彼の性格によるのであらう。いづれにせよ、スターリンが「闘爭の戰士」であることに間違ひはない。彼れが論敵に立ち向ふ態度は、重い鐵棒をふり廻して戰場を驅けめぐる豪勇をおもはせる。



スターリンとレニン

スターリンの强味

スターリンの强味は、彼れの經歴のうちに現はれてゐる。

いまの聯邦共産黨がボリシェヴィズムの結晶である事、ボリシェヴィズムがレニンの人格の陰影であることは爭ふ餘地がない。

スターリンは、その黨人としての經歴のうちでレニンと論爭したり離れたりしたことがない。レニン主義を眞向に翳して百萬の黨員を統率する上において、この點はスターリンの第一の强味である。

トロツキーが千九百十七年革命の以前においてボリシェヴィキ――レニンの敵であつたのは周知の事である。ブハリンは革命後に「左翼共産黨」の指導者としてレニンと爭ひ、レニンから「左翼小兒病」の標本として扱はれた不利な經歴をもつてゐる。ジノヴィエフとカメネフは十月

革命の直前にレニンが政權奪取を說いたとき、時期尚早論をとなへて反對した。トロッキーが千九百二十四年になつて「十月革命の教訓」を書いてこの「隱れたる歷史」を暴露して以來、ジノとカメは「腰ぬけ革命家」といふ印象を黨員のあひだに深く植えつけた。スターリンは――政權奪取の急先鋒であつた。レニンを說いて武力による政權奪取を納得させたのは、スターリンだと言はれてゐる。（トロッキーは「俺れだ」と書いてゐる）――ミリ・コフの「ロシア第二革命史」にもスターリンがレニンに政權奪取を說いた條が書かれてゐる。とにかく、ジノヴィエフやカメネフには內密で、政權奪取の五人組密謀部が組織されたとき、スターリンが第一線に立つてゐたことは、歷史の上で明らかにされてゐる。――この點は彼れの第二の强味である。

スターリンの第三の强味は、彼れが革命運動中に幾たび投獄されたり流刑されたりしても、一度も外國へ亡命せずに、執拗に國內の組織にかぢりついてゐたこと、そのお蔭で革命後にレニンを援けて共產黨の組織に實際的に手腕を發揮し、その後黨の書記長として全國の黨組織の要所々々に連絡の網を張り、それをしつかりと自分の手につかんでしまつたことである。トロツキーは、レニンの病氣隱退當時に、レニンと並稱された內外の名聲を利用してスターリンの「官僚主義」にたいする攻擊の烽火をあげた。黨內の「民主主義」を名として、スターリンの勢力を解體させようとした。しかし齒が立たなかつた。これは黨組織におけるスターリン鐵筋ブロックの耐久力を試驗したものであつた。その後トロッキーの覆轍をふんだジノヴィエフ、カメネフ、ブハリンも、この鐵筋ブロックに彈きかへされたのである。

スターリンといふ男はどんな經歷をもつてゐるか？　何が彼れをして鋼鐵人たらしめたのであらう？

三十年の革命家生活

スターリンは今年てうど五十歲になつた。彼れは革命運動に投じてから三十年になる。その間にどんな風に鍛へられて來たか？

スターリンは後高架索のチフリス縣・ヂヂリロ村の靴屋ヴィサリヨン・ジュガシヴィリの息子として千八百七十九年にうまれた。彼のほんとうの姓名は――ヨシフ・ヴィサリヨノヴィチ・ジュガシヴィリである。彼が革命家として使つてきた變名はダヴィド、コーバ、ニジェラゼ、チジコフ、イワノヴィチ、スターリン等々――十指を屈するほど澤山ある。レニンの本姓がウリヤノフで、トゥリン、イリインその他の變名をもつてゐたのと同じである。

千八百九十三年にチフリスの初等神學校を卒業して、中等神學校へはいつた。小數異民族として、帝制時代に極度に壓迫されてゐたジョルヂャ人の靴屋の息子が中等學校へ入つて教育をうけるといふ以上、いはゆる「神童」であつたに違ひない。――この神童は千八百九十七年には、そのころ民族解放運動とマルクス主義・インタナショナリズムの思想的溫床となつてゐた中學校のうちで、マルクス主義・サークルの指導者となつた。やがて地下運動へ――鐵道從業員の秘密結社へ、さらにチフリス社會民主勞働黨へ入黨した。鐵道、工場勞働者の間で宣傳者として活動したゝめに、退校處分をうけた。千九百年にはチフリスの黨委員會の指導者になつた。彼れが二十

二歳の時である。

どこの國の革命運動史にも見られるやうに、啓蒙主義と街頭主義の分裂がおこつた。スターリンは年少氣鋭派を率ひて街頭主義の急先鋒となつた。彼れがレニン派の思想的影響をうけたのは、其頃高架索へレン主義を植えつけてゐたクルナトフスキーの指導が、あづかつて力がある。

一九〇一年に大罷業と街頭示威運動を組織して、官憲に追はれて地下へかくれた。それから彼れの職業革命家としての生活がはじまる。

投獄・流刑・脱走

スターリンの革命家生活は投獄と流刑と脱走の連續である。

一九〇二年の三月にバトゥム港の大罷業を指導して檢擧投獄され、翌年の末にシベリアへ流刑されたが、數ケ月にして脱走し、チフリスへ舞ひもどつた。投獄と流刑の洗禮をうけた彼れは、バトゥム、チァトゥル、クタイス、チフリス、バクーと全高架索にわたつて活動した。社會民主黨がボリシェヴィキとメンシェヴィキに分裂したとき、彼れはボリシェヴィキ派の闘士として第一線に立つた。

由來、高架索はメンシェヴィキ派の有力な根據地である。千九百十七年革命の後にレニンが頭角をあらはすまでペトログラド・ソヴェトを支配してゐたツェレテリやチヘゼをはじめ、ジョルダニア、チヘンケリなど錚々たるメンシェヴィキ指導者は、いづれも高架索人である。青年スターリンが陣營内闘爭のチャンピオンとして鍛へあげられたのは、恐らくこれら先蹤革命家を向ふに廻はして闘つた時代であらう。

千九百〇五年に高架索ボリシェヴィキ派を代表してタンメルフォルス(芬蘭)の黨大會へ出席し、そこで初めて、彼れのいはゆる「山上の鷲」――レニンに逢つた。

「レニンに親しく逢つてから、ますます彼の革命家としての人格に傾倒するやうになつた」

スターリンは「人間レーニン」のうちでさう追憶の言葉を書いてゐる。

千九百〇七年にロンドン大會へ出席して歸るや、彼は石油の都バクーを本據として活動した。

千九百〇八年三月に檢擧、八ケ月間投獄された上三年間ヴォログダ縣の寒村へ流刑――數ケ月後に流刑地を脱走してバクーへ歸つた。

千九百十一年ふたゝび檢擧されて元の流刑地ヴォログダへ追ひかへされ――千九百十一年の春にまた脱走。

今度は黨の命令でペトログラドで活動することゝなつた。それ以來、彼れの革命家としての活動範圍は全ロシア的となつた。その年のうちにまた檢擧、流刑、脱走。――千九百十一年秋にプラーグで開かれたボリシェヴィキ派の大會で中央委員に選ばれ、ロシア各地を巡歴し「プラヴダ」紙の創刊に參加した。

千九百十二年四月にまた檢擧――四年間の刑期をもつてナルイムスキー極北地方へ流され、その年の夏に脱走。まづペトログラドへ歸り、クラカウへ潛行してレニンに逢ひ、國會指導の指令をうけて歸り、その頃の變名ボーパの名で小冊子「マルクス主義と民族問題」を書き、レニンから「民族問題のすぐれた理論家」として折紙をつけられた。十月革命後に彼れが民族人民委員長に任命されたのは、

少數異民族出身の彼れが民族問題においてボリシェヴィキ中の代表的理論家として認められてゐた結果であらう。

千九百十三年の春、世界大戰のはじまる前にまた檢擧。トゥルハンスキー極北地方へ流刑。さすがのスターリンも今度は脫走の機會を見いだすことが出來なかつたと見えて、千九百十三・四・五・六年と殆んど四年間を極北の寒村クレイカ村の流刑地で暮してゐた。

千九百十七年革命の勃發と共に、レニン等に先んじてペトログラドへ歸り、シュリャプニコフ、モロトフ等と共にボリシェヴィキ派の指導者として活動した。

內亂時代のスターリン

千九百十七年の四月にレニンがロシアへ歸還すると間もなく、スターリンはボリシェヴィキ中央委員會の最高機關である政治部（ポリト・ビユーロー）の一員にあげられた。彼れがジノヴィエフやカメネフ等の時機尙早論に反對してスヴェルドロフ等と共に敢然と即時政權奪取論を唱へたことは前に記すとほりである。レニンがケレンスキー政府の追跡をのがれて潛伏した時代には、スターリンは事實上の指導者となつて、勞農革命を準備した。

勞農革命後、千九百十七年――千九百二十三年にわたつて、彼れはソヴェト政府の民族人民委員長となつてゐた。千九百十九年――千九百二十二年には勞農監督人民委員長の要職を兼ねてゐた。

それから、千九百二十二年以來、共產黨中央委員會の書記長となり、現在までその職にあつて黨の組織を一手に切り廻してゐる。

彼れが共產インターナショナルに執行委員會のプレシヂウムになつたのは、レニンの死後、千九百二十五年以來である。かくして彼れスターリンは、今では完全に聯邦共產黨と國際共產黨の中心人物となつてゐる。

スターリンがもつとも戰鬪的手腕を發揮したのは赤白兩軍の內亂戰爭時代である。レニンは、赤軍の戰線が危險に瀕した地方へは、何時でもスターリンを派遣して軍司令官とした。南露戰線、ポーランド戰線と彼れはいたるところに轉戰した。彼れの勇敢な戰鬪精神は、行くところ必らず敵を粉碎した。その鐵法をもつて、スターリンはその共產黨內の論敵をも用捨なく粉碎しつゞけた。

黨內の論敵粉碎

ブレストに於る對獨講和問題で黨內に論爭が起つた際、彼れはレニンと共にブハリン一派の左翼共產黨と戰つてこれを粉碎した。レニンが一時病氣靜養のために仕事から離れてゐる時、千九百二十年にトロツキー派が勞働組合問題をひつさげてレニン派に反對した。その時も、彼れは第一線に立つて奮鬪し、これを粉碎した。千九百二十三・四年にトロツキーが黨內民主主義を唱へて起つた時、スターリンはレニン派の總動員を行つて數ヶ月間論爭した。そしてトロツキー派を粉碎した。この時代のトロツキーの聲望は世界に大きかつた。これに敢然として立ち向つたのは、スターリンの勇氣を示すものであつた。さらに千九百二十五年――二十七年にかけてレニングラド派（ジノヴィエフ、カメネフ）とトロツキー派の聯合によるアンチ・スターリン運動がおこつた。彼れはこの時こそ奮迅の勢ひで起ち、一擧にしてこれを粉碎した。この時代は、恐らくスターリンが黨の輕重をさだめる關ヶ

原であつたらう。

千九百二十八年から二十九年へかけて、ブハリン、ルイコフ、トムスキー等のいはゆる「右翼偏向」派との闘爭では、スターリンは初めから優越的な勢力をもつて、易々とこれを屈服させてゐる。左にトロツキー、ジノヴィエフ聯合派――右にブハリン、ルイコフ派と、彼れはレニンが死んでから數年の間に同僚を左右に薙ぎ仆して、毅然として權力の王座をきづきあげた。そして、ひとり聯邦共産黨のみならず、世界共産黨の陣營を睥睨してゐる。

彼れは、政治指導の格言として、好んで人に語つてゐる。

「指導といふのは、高所に座して大きな不幸が鼻の先へぶつかつて來るまでボンヤリ安逸に耽つてゐることではない。遠い未來を見すかすことだ。未來を見すかすのは必らずしも容易な仕事ではない。勞働大衆がまだ缺陥を氣づかないでゐる時、まづ少數の指導者がその缺陥を見つけだして大衆を援ける――勞働大衆が缺陥を指摘した時には、これを除く方法を示して援ける。それが指導である。」

スターリンは黨内の論敵を次々に粉碎した。そして現時のソヴェト聯邦を動かしてゐる。彼れの政治理論はいかなるものか？

單獨社會主義國建設論

スターリンは、レニンの死後に、いはゆる「單獨社會主義國建設論」を立てた。これはトロツキーの「永久革命論」に對立する理論である。スターリンのこの理論は、マルクス主義の傳統にたいする一つの附加だといはれてゐる。スターリンはこの理論をもつて、レニンの遺志だと言つてゐる。つまり、マルクス・レニン主義の完成だと説明してゐる。そしてスターリンが現在ソヴェト聯邦に實施してゐる一切の政策は、この理論に立脚してゐる。この理論に反對する共産黨員は、左翼小兒病患者か右翼日和見主義者として、スターリンから排撃されてゐる。トロツキー、ジノヴィエフ、カメネフ等は前者に屬し、ブハリン、ルイコフ、トムスキー等は後者に屬する。

――「單獨社會主義國建設論」――とはどういふことか？

エンゲルスは曾てマルクスの國際社會革命理論を説明して次のやうなことを言つた。――假りにヨーロッパの或る一國で社會革命が行はれたとしても、これに次いで四圍の資本主義國内でプロレタリアートが蜂起して各國におなじやうな革命が行はれないかぎり、新らしい革命國は間もなく四圍の資本主義諸國の包圍攻撃をうけて叩き潰されてしまふ。從つて新興プロレタリア國の運命は次いで起るべき四圍の資本主義諸國における革命――國際革命と不可分的な連繫をもつてゐる。畢竟いづれかの國で勃發した革命の波が國際革命に進展しないかぎり、孤立的な新興プロレタリア國が單獨に存在をつゞけることは不可能だ、と。これは長いあひだ、マルクス主義者の間における國際社會革命理論の信條であつた。

ところがスターリンは千九百二十六年以來、たとへ四圍の資本主義國で革命の起ることが相當に遲れても、ソヴェト聯邦一國内で、プロレタリア獨裁のもとに、單獨に社會主義國を建設することが出來る――と強調してゐる。それはどういふ譯か？

スターリンは言ふ。――エンゲルスが生き

てゐた時代の世界の情勢からみれば、エンゲルスの言ひ遺したことは全然たゞしい。しかし、その後になつて世界資本主義は、帝國主義といふ特定の段階にすゝんだ。この帝國主義の樣相はレーニンによつて始めて完全に分析されたところのものであつて、エンゲルスの豫見し得なかつたところのものである。そして、ソヴエト聯邦が四圍の資本主義列強の包圍攻撃や反革命運動と闘つて政權を維持した經驗は、帝國主義諸國の間における利害關係の矛盾と、それから諸國内における各階級間の矛盾が尖鋭であるために、統一的な反ソヴエト聯合を組織して、ソヴエト聯邦を一氣に叩きつぶすことは不可能だといふことを實證した。

ソヴエト聯邦は、この帝國主義諸國に於ける國際的對立關係と階級鬪爭の尖鋭化とのお蔭で易々と叩きつぶされることがない。それと反對に、プロレタリア獨裁制度のもとに政權を掌握しながら貧農や中農を味方に引入れ、これを協同組合化し又は集團經營化しながら、漸進的に國内の資本主義的要素を排除驅逐して單獨に完全な社會主義國を建設してゆくことは可能である」と。

これが單獨社會主義國建設論の要點であり根據である、最近喧傳されてゐるソヴエト聯邦の「五ケ年經濟發展計畫」も、このスターリンの理論から出發してゐる。

トロツキーの「永久革命論」はこれと反對である。――農民經濟の漸進的社會主義化を信じない。ロシアで最初に行はれた革命はブルヂョア革命である。從つて、この時代に農民と一時的同盟をしたプロレタリアートは、永久不斷に農民との闘爭を繼續してゆかないかぎり社會革命を完成することは出來ないし、世界革命が進展しないかぎりロシヤ一國内で社會主義制度を建設することは出來ない、といふジノヴエフ等の新反對派もこれに傾いてスターリンと爭つた(現在では屈服した)。

ブハリン等の右翼派はまた、これと全然對蹠的な理論をもつてスターリンに反對した。――ソヴエト政權を維持するには國内の經濟力を、國家の防衛力を強くすることが先決問題である(この點はスターリン等と一致してゐる)。しかし、スターリンの言ふやうに農民經濟の社會主義化と國民經濟の充實とを同時に進行させることはロシアのやうな農民國にとつて空想である。國力充實のためには農民の資本主義的經營に廣汎な自由を與へねばならぬ。かくてブハーリンは農民に向つて「諸君は自由である、富めよ、蓄積せよ」――といふスローガンを與へねばならぬ、と主張した。これは右翼への偏向であり、日和見主義であり、資本主義への意氣地なき降伏であるとして、スターリンの排撃するところとなつた。

スターリンの五年計畫

スターリンは左右兩翼の敵を一擧にして薙ぎ仆した。一昨年の共産インタナショナル第六大會でスターリン派は全勝してゐる。その決議案は殆んどスターリンの意圖どほりに決定されてゐる。ソヴエト聯邦經濟の五ケ年計畫もスターリン的なものである。

こゝに五ケ年計畫の要點を摘記する。それは、この計畫の實績の如何は、スターリンの政治的勢力の將來に大きな連繫をもつものだからである。

一、過去五ケ年間(一九二三・四年度――一九二七・八年度)の國民經濟の各部門にたいする總投資額は二百六十五億留であつ

たが、來る五ケ年間(一九二八・九年度——一九三二・三年度)には六百四十六億留を投資する。

二、かゝる投資の結果、國民經濟各部門の基本資金は一九二七・八年度現在の約七百億留から千二百八十億留に膨脹する。從つてソヴェト聯邦の農工業生産年額は二百四十四億留から四百九十七億留に增大する。

三、國の工業化と防衛力の强化、資本主義國の拘束から解放されるために、工業にたいする投資の重心を生産手段を生産するところの重工業におく。五年間の全工業投資額百六十四億留のうち七八％は生產手段の生産のために投資する。

四、異常なテンポをもつて經濟的發展をとげ、生産におけるソヴェト聯邦の地歩を急速に向上させる。例へば五年後において鐵の生産(一千萬噸)では世界の第六位から第三位——ドイツ、アメリカに次ぐ——に進み、石炭の生産(七千五百萬噸)では世界の第五位から第四位——アメリカ ドイツ、イギリスに次ぐ——に躍進する。

五、國民經濟における資本主義的要素を減殺して社會主義的要素を斷然增大させる方針をとる。その結果五年後には國民經濟における基本資金構成の比率は次のやうに變化する。

		一九二七・八年度	一九三二・三年度
社會主義的	國家事業	五一、〇％	六三、六％
	協同組合事業	一、七％	五、三％
資本主義的・私有事業		四七、三％	三一、一％

これに準じて生産と分配における社會主義的部分の比率も次の如く變化する。

	一九二七・八年度	一九三二・三年度
社會主義的工業の生産	八〇％	九二％
同農業の生産	二％	一五％
同小賣商業	七五％	九一％

六、農業經濟における社會主義的部分(官公營農業(ソフホーズ)、および集團的農業(コルホーズ))の建設に特別の推進をあたへる。一九三三年にはソヴェト聯邦の全耕作面積の一七、五％を社會主義的農業化する。商品として市場へ供給される穀粒の四三％が社會主義的農業の生産物をもつて占められるやうにする。

七、生産と分配における協同組合化を次の程度まで發展させる。

	一九二七・八年度	一九三二・三年度
集團的農業の生産率	一、〇％	一二、四％
全小工業生産に對する協同組合化小工業の生産率	一九、四％	五三、八％
小賣商業の協同組合化	六〇、二％	七八、九％
農業協同組合化農戶の全農戶に對する割合	三七、五％ (九百五十萬戶)	八五、〇％ (二千三百五十萬戶)
都市	八、七	一六、五
消費組合加入者數(單位百萬人)	一三、九	三二、八

八、國民收入總額は一九二七・八年度の二百四十四億留から一九三二・三年度には四百九十七億留に增加する。每年平均一二％の增加であり、いかなる資本主義國の國民收入增加率よりも高からしめる。

九、國家の總豫算額は過去五ケ年間を通算して合計百九十億留であつたのに對し、來る五ケ年間は合計五百十億留(一六六％七の增加)とする。國民收入にたいする總豫算額の割合は一九二八・九年度には二五・九％であるが一九三二・三年度には三〇・九％になる。この國家豫算の增大は國家の防衛力を强化し、國民經濟に

たいする國家の投資を過去五年間に比べて殆んど四倍加し、社會的文化施設にたいする支出を約三倍加する可能性をあたへる。

一〇、五ケ年計畫によつて招來される以上の事實は次のことを保障する。

イ、國家の工業化により生產手段の生產を最大限に發達させる。

ロ、都市及び農村に於ける國民經濟の資本主義的要素を減殺し、農民大衆を協同組合組織及び集團的勞働を基礎とする社會主義的建設に引きいれ、搾取的富農にたいする貧農並に中農の闘爭を援け、もつて社會主義的要素を斷然強化する。

ハ、工業に比べて農業の極端なる時代おくれを揚棄し、もつて食糧問題を解決する。

ニ、勞農階級の物質的並に文化的水準を最大限に向上する。

ホ、農民中の基本的大衆と結合の新形態を發達させ、もつて勞働階級の指導的役割を鞏固にする。

ヘ、內外の階級の敵との闘爭におけるプロレタリア獨裁の經濟的・政治的立場を鞏固にする。

ト、ソヴェト聯邦內の各民族共和國及び未開地方の經濟的・文化的水準を向上させる。

チ、國家の防衛力を非常に鞏固ならしめる。

リ、黨のスローガン——技術的・經濟的關係において先進資本主義諸國に追ひつき且つ追ひ越すの實現に巨大なる一步前進をおこなふ。

× × ×

以上がスターリン的五年計畫の骨子であり、第十六回聯邦共產黨會議(千九百二十九年四月)の決定した根本方針である。スターリンの指導するソヴェト聯邦はいまこの根本方針にもとづいて經濟發展に努力してゐる。

スターリンの敵は、この計畫を嘲笑してゐる。この計畫の成否は、ひとり、ソヴェト聯邦においてばかりでなく、世界共產黨の間におけるスターリンの人氣と勢力を左右する岐分點である。すでに五ケ年計畫の第一年は經過した。「國家計畫委員會」は、豫定以上の好成績をもつて第一年を經過したと公表してゐる。しかし今後四年間の實績は、我々に非常な興味をあたへると共に、全世界の大きな關心事であらねばならぬ。

鋼鐵製のタンク!

スターリン! 鋼鐵人(スターリン)! レーニンの棺を昇いだスターリン!

彼れはレーニン主義の旗をかゝげ、ソヴェート聯邦と世界共產運動の指導權を掌握して、陣營內の敵を次々に粉碎しながら、步いてゐる。その姿は、戰線の塹壕を踏みこえて彈雨の中をすゝんでゆく鋼鐵製のタンクのやうな感じがする。(一九三〇・一・二九)

娼妓自廢九百八十七人

沖野岩三郎

一、六十圓の生命

或時伊藤君は私に一枚の古ぼけた證書を見せて、それを讀んで見よと云つた。手に取つてみると、不思議な、しかも巧妙な證書であつた。それをこゝに書いてみる。

雇人請證

東京市本所區表町〇〇番地
坂本〇〇長女
坂本くに
明治三十一年一月十日生

一金六拾圓也

右ノ者儀今回親戚協議之上本人望ニ任セ貴殿方へ本日ヨリ滿四ケ年間酌婦働キ雇人差遣に相違無之就テハ本人身仕度ニ差支無據唯今前記之金圓正ニ請取借用仕候處確實也返濟ノ義ハ來客ヨリ貰受タル所得金ヲ以テ皆濟可致候萬一期限中本人病氣逃走ハ不及申保證人ニ於テ引受辨償可致候若シ本人逃走致シ參ケ月前ニ御暇申受候節ハ右ノ借用金返濟ハ勿論本人ニ係ル道中諸入費一切ノ義違約者ニ於テ負擔スベキ約定之事借却可仕候前書ノ通リ御約定候上ハ本人ニ何樣ノ儀出來候共本人ノ有無ニ不拘連署之內不在ノ者有之候テモ殘リ壹名デ委皆引請金員返濟可致候貴殿聊御迷惑御損害相掛ケ申間敷爲後日雇人引請證仍テ如件

但爲化粧代連月金壹圓五拾錢宛被下候約定之事

書ニ本人道中入費並ニ手數料ノ儀ハ契約者ニテ負擔スベク約定ノ事

右本人　坂本くに

實父借用人　坂本太作
實母　坂本ぎん

年　月　日

茨木縣新治郡土浦町
梅本柳吉殿

「どうです、何と頭のいゝ男の書いた證文ぢやないですか。犬一疋だつて今日の相場では六十圓ぢやあ碌な獵犬は賣つて呉れませんよ。それに年頃の娘を四ヶ年六十圓で買ふ男でせう。如何に金に困ればとて、實父實母の連帶で娘を一ヶ月當圓二十五錢で四ヶ年の奉公に出すといふ親の氣が知れないぢやないですか。しかも此の六拾圓は借金で返濟の義務があるんだから堪らない。それを、どうして返濟するかといふに「來客より貰ひ受けたる所得金」で返すと證書に歌はせてある。『淫賣の結果得たる所得金』とは書けませんからなあ。人買男が嘘八百を並べて土浦の何々館といふ町一流の料理屋で、春から秋にかけて東京のお客が霞ヶ浦見物に流れ込む。どんなに少く見積つても一ヶ月七八十圓の收入はある。なあに別にむづかしい事はない。仲居の指圖を受けてお客の酌をするだけさ。そのうちには歌も覺え、三味線の稽古もする。そしたら立派な藝者だ。藝者になれば、どうしたつて二千圓以上でなければ何所にも抱えられない……などと云ふので、馬鹿な親たちは、すつかり欺されて借用證文付で娘を出す。行つてみると何々館は何々館だが、それが安料理屋のだるま屋だ。行つた其の晩から早速淫賣を強ひられる。そんな約束で無かつたと云へば、證文の「來客より貰受たる」云々の文字を擦き出す。だるま屋へ來る位の男は、淫賣をしない女には鐚一文だつて呉れる筈はない。淫賣をしないと云ひ張れば、化粧代の一圓五十錢も呉れない。たうとう致方無しに、主人の云ふ通りになる。此の坂本くにといふ女も其の手でだるま屋に伴れて行かれたんだ。ところが一年程經つと、見知らぬ男が尋ねて來て、兩親からの委任狀を見せて、こゝでは到底六十圓の金を返濟する見込が立たぬだらうから小山の方へ世話をしよう、そこでは前借金が三百圓取れる……といふ旨い話をして、兩親が委任狀を渡してあるといふので、すつかり信用して其男の言ひなり放題になつてゐると、小山の料理店へ住み替へて三百圓は受取つたが、土浦の方で契約年期を勤めなかつた違約金として六拾圓に貳割の利子、手數料、道中旅費、其男の世話料など差引いて、本人には金拾圓だけ呉れた。そこで本人も考へたんだね。同じ淫賣なら公然の女郎がよい。」といふので、新吉原の揚屋町の或樓から九重と名のつて出ることにしたんだ。』

伊藤君は一枚の寫眞を出して私に見せた。それが新吉原へ出た後の九重の姿である。細面の背の高い十人並の顏容で、低腦

らしくも見えない女であつた。伊藤君の話によると、此の女は其の後一人の馴染客に勸められて、二人で救世軍本營に駈け込んで來た。伊藤君は早速九重のために名簿削除の手續をして、婦人ホームに收容してやらうとすると、其の馴染客が、「私もどうぞ一緒に婦人ホームに置いてくれ」といふ。「それはいけない婦人ホームは婦人ばかりの居る所だから、君は君で、別に仕事を見付けてあげよう」と云つても、男はなか／＼承知しない。「そんな馬鹿な事があるか」と云つて呶鳴りつけると、男はぽろ／＼涙を流しながら、「私は此の女と一日だつて離れては居られないんです」と云ふ。事情をきくと、男は九重の爲に僅の財産を費つてしまひ、妻も離別し、二人の子供も妻の家に引渡してしまひ、今まで勤めてゐた會社は首になり、「これから救世軍へ行つて、自由廢業をして一緒に暮してくれるか、さうでなければ心中してくれ」と九重に談判の結果伊藤君を訪ねて來たのであつた。女の意見をきくと、女も男と一緒に婦人ホームへ行きたいと云ふので、伊藤君は双方を懇々と說諭して、兎に角堅い決心が出來たなら自由廢業の世話をしてやらうと申し渡した。すると、二人は伊藤君の前で喧嘩を始めた。

『あなたは、金の釜で御飯を炊いてゐるやうな話をしてゐた癖に、何といふ意氣地の無い人です。』と女が罵ると、

『何を云ふんだい、おまへこそ、廢業したなら、本所の實家へ行つて、樂しく暮さうと云つてゐたのに、尋ねて行つてみると四疊半一室ッきりの、あんな汚ならしい家ぢやないか。』と男は罵り返す。

始末に終へないので、男には眞面目になつて働く決心をする事、女には婦人ホームに入つて堅氣になる事を繰返し／＼說いて、其日はそのまゝに歸らせた。

五六日經つと一人の老人が訪ねて來た。それは九重の父親である坂本太作であつた。九重は其晩馴染客と心中したのであつた。客は一命を取り止めたが、九重はたうとう死んでしまつた。葬式の濟んだ三日目に太作の家も、保證人の家も、みんな差押へられたといふので、

『死んだ娘は助かる筈はございませんが、せめて差押へだけは何とかして助けていたゞきたいものです。』

太作はおい／＼聲をあげて泣いたのである。

此の話を聞いた私は、伊藤君に問うてみた。

『あなたの手で救助しようとした自廢娼妓の中で、其の目的を達しないで死んだ女が何人ありましたか。』

『少いものですネ、今お話した九重と共に僅か三名です。』と云つた伊藤君は、其の死んだ三人の娼妓に就いて斯んな事を話

した。

二、痲痺性痴呆症

大正三年九月二十八日の事であつた。新吉原江戸町二丁目の中村樓に居る常盤木といふ娼妓から一通の手紙が伊藤君の所に屆いた。讀んでみると、平假名字と片假名字とを、まぜこぜにした、さつぱり判らないものではあつたが、それでも廢業したいから、是非來てくれといふのであつた。で、早速行つて會つてみたが、形容の出來ない程意志薄弱な女で、どうにも手のつけやうが無かつた。

「兎に角、あなたは今日限り娼妓をやめたいと思ふのですか。」

「はい、もう一日もこんな稼業は出來ませんから、やめたいと思ひます。」

「では、これから僕と一緒に警察へ行きませう。」

「だけど、おかみさんに叱られますから。」

「自分の意思で廢業するんだから、おかみさんだつて誰だつてそれを邪魔する權利は無いんです。」

「警察へ行つたなら、きつと巡査さんに叱られるでせう。」

「そんな事はない、僕が傍についてゐてあげるから。」

「廢業したあとで、私はどうなるんです。」

「呑氣になつて働けばいゝぢやないですか、まだ若いんだから。」

「だつて女郎なんかした者を、傭つて下さる人は無いでせう。」

「そんな事を云つてゐては、果しがない。早く決心なさい。」

「えゝ、決心はしてゐるんだけど、私……」

そんな問答を百萬遍繰返しても、何にもならないと思つたので、伊藤君は最後の駄目を押して置いて、一緒に警察まで行くだけの勇氣が出たなら、いつでも救ひに來てあげると言ひ置いて歸つた。ところが一週間ほど經つて、常盤木は馴染客に頸動脈を切られて死んだ。男も一緒に死んだので、死人に口無し、事情はさつぱり解らないが、伊藤君が面會した時の事情から察すれば、やつぱり愚圖々々云つてゐるうちに、男から無理心中をせられたものであらう。

其の翌年九月四日の事であつた。同じ新吉原の一力樓にゐる春駒といふ娼妓から手紙で自廢の助力を求めに來た。これは常盤木よりも學問があつて、手紙も一通り讀めるやうに書いてあつた。手紙を讀むと直ぐ伊藤君は面會に行つた。ところが一力樓では、醜の御楯のと云つてなかなか面會させない。たうとう交番の巡査に頼んで面會することは出來たが、樓内で面會せられては、他の娼妓たちへ自廢が傳染してはならないといふので

仲の町の寫眞屋の二階で女將立會のもとに面會してみると、春駒は可愛さうに腦黴毒の爲に髮がすつかり脫けてしまつて、鬘を被つて稼業をしてゐるのであつた。

伊藤君と春駒との間に、いろ〳〵の問答があつた末、いよいよ所轄署へ出て名簿削除の申請をしようといふ段になると、傍に居る女將の顏色を伺つて默り込んでしまふ。女將はそこに付け込んで、『唯今主人が不在中ですから、歸り次第直ぐ立派に廢業させてあげます。』と左もまことしやかに言つたのに、すつかり欺されて、春駒は伊藤君に、今日は此のまゝ引取つてほしいと云つた。そこで伊藤君は策の施しやうが無く、日本堤署に出頭して奇拔な陳情をした。當時の警視廳は、東京市中の寄席が段々劇場化するのを心配して、寄席藝人が鬘を被る事を禁止した。そこで伊藤君は警察署に出頭して、『源氏節の手踊りに鬘を被つてはいけないと、市中の寄席へ嚴しいお達しの出て居る今日である。鬘を被つて所作を演ずることが演劇であるとして、これを御禁止になるなら、鬘を被て、無い髮を有るやうに見せかけて娼妓稼業をすることも、演劇類似の行爲としてこれを禁止すべき筈である。』と論じ立てたが、係りの警部は苦笑するばかりで取り合はなかつた。彼此するうちに九月も末となつた。鬘女だと知つてか知らないでか、馴染でもない登樓客と刄物心中を企てゝ二人とも絕命した。

後で同樓から自廢した女に聞いてみると、春駒は一寸顏立のよい女であつたから、鬘女とは知らずに登樓した男が、酒に醉つぱらつて、無理に其の鬘を取つて見たがるのが、つらいと云つて自廢を思ひ立つたのであつて、鬘を取つて見ろといふ男は登樓者だけに限つた事では無いのだから、いろ〳〵考へあぐんだ末が心中といふことに落ちついたらしい。これは多分合意の心中であつたらう。

千人近い自廢娼妓を取扱つた伊藤君が、其の目的を遂し得ないで、心中の悲劇に走らしめたのは以上の三名だけであつた。其後伊藤君は王子精神病院長の小峰茂之氏から、春駒も常盤木も痲痺性痴呆症であると敎へられたさうである。で、伊藤君は云つた。

『遊廓で心中する男も女も、あれは悉く性病から來た痲痺性痴呆症患者ですよ。此の患者だけは、どうとも手にをへない。』

三、私娼屋の氣焰と憐れな少女

大正五年の五月に、時の警視總監西久保弘道氏は訓令を發して淺草千束町の魔窟掃蕩を行つた。無論魔窟掃蕩は善い事ではあつたが、吉原遊廓の附近に、こんな私娼が頑張つてゐて、遊

廓へ来る客を喰ひ止めるといふ遊廓側からの陳情も尠からず總監の考慮に置いてゐたらしい。其の證據には、此の勅令が出ると同時に遊廓に對する規則取締が非常に寛大になつた。日夜數十人の警官が小路々々に見張をして盛んに私娼退治をした。其の結果は、官許の無い娼妓を見捨て丶官許ある娼妓の所へ行くべしといふ公娼宣傳の形になつた。斯うなると私娼側も負けては居ず、○○岡本といふ男の考案で、造花屋を開業して、そこへ遊び客を誘ひ込むことになつた。

或日伊藤君は中根岸の岡本君を訪ねて其の經驗を聞いた。岡本君は快く伊藤君を座敷に通して銘酒屋創業後巨萬の富を得た次第と、惡錢身につかず相場に手を出して失敗した話を詳しくした。其時岡本君は大福帳三册を出して其の内容をすつかり伊藤君に見せて斯んな事を言つた。

『この帳面は、初から終まで妾のつけたもので、私は一度も筆を入れた事がないのです。御らんなさい、私の家には、大抵三人の女を置いてありましたが、女との契約は四分六です。私が六分取つて女に四分やるのですが、一番働の惡い女でも一ケ月七十圓の手取はあります。だから三四百の前借金は、此の通り半年たゝずに皆んな返濟してゐます。お隣の吉原で稼いでゐる女郎衆は、三年四年稼いでも、稼げば稼ぐ程借金が殖えるといふ有様です。それは今日の遊廓の制度が惡いからです。女郎衆は遊廓の主人の爲に稼ぐので、自分の爲には少しも稼がないのです。そこへ行くと、私娼は安心なものです。月に三百圓稼げば、百二十圓は手取りになるんですから。それにやめたければ警察も救世軍もありません、直ぐやめられるんですからね。』

岡本君に氣焔を吐かれて、苦笑しながら根岸から本署に歸つてみると、象潟署から電話が掛つたと云つて、同僚が其の要點を書取つてくれてあつた。それは象潟署員が檢擧した醜業婦を婦人ホームに引取つて感化してくれないかといふのであつた。で、早速象潟署に出頭してみると、醜業婦といふのは、まだ十六歳の少女で、あどけない顔をしてゐる。署員と相談の結果、其の少女の保護を引きうけて警察署を出ると、

『先生、どうぞあたしを淺草へ歸らして頂戴、ね、お願ひですから。』と手を合せて拜まんばかりにして云ふので、宥め賺しながら、山谷の蕎麥屋に伴れて行つて、腹一杯蕎麥を食べさせた上、

『小父さんが、あんたの行末を見てあげるから安心して、みんなお話しなさい。一體どうしてそんな事をし初めたのです。』と問うた。蕎麥屋の二階には二人の他に客はなかつた。

『それはネ、…』と云つて暫く泣いてゐた少女は、とぎれ〲に語つた。

『私の父さんは砂村で日傭稼をしてゐるんです。私が十二の時母あさんが赤痢で死んでしまつて、あとへ來た母あさんが赤ん坊を産んでから、私が家に居ると、みんな餓ゑてしまふしまふつて口癖に言つて、私をひどい目に會はせてゐたんです。そこへあの大海嘯があつて、私の家が潰れてしまつたので、たうとう私は母あさんに伴れて來られて、公園でお竹さんと一緒に流すやうになつてしまつたのです。おまはりさんに三度つかまつて、其のたんびに拘留されたんですが、稼いでゐる時、早く拘留して貰つたなら、こんな苦しい商賣をしないでもいゝと思ふことが何度あつたか知れません。だけど、源さんの張りが上手なので、滅多におまはりさんに捕まらないんですもの……』

伊藤君には、「流し」とか「張り」とか云ふ言葉の意味がわからなかつた。

『すまないがね、今日はまだ早いから大丈夫だらう、一つこれから君の稼いでゐた所を一通り見せてくれないか。』

伊藤君は手取早く實地見學を頼んだ。すると少女は一寸思案してゐたが、

『えヽ、五時頃までだつたらいヽワ。若しもの事があつたら、先生助けて下さいますわね。』と云つた。

『大丈夫だ、小父さんがついてゐるから。』

『それぢやあ、まゐりませう。』

少女は、伊藤君を案内して、まだ行つた事の無い町の四角に出た。

『先生、此所の酒屋さんから、あの向ふの赤い提灯の出てゐる料理屋さんの前までが、梅あにいの張り場よ。こゝには富乃さんと美代子さんが流してゐるの。梅あにいは、少しぼんやりだから、能くおまはりさんの來たのを知らないで、飛んでも無い事を仕出來すのよ。』

少女の言葉で、伊藤君は始めて、「張り場」と「流し」の意味がわかつた。二三町行くと少女は伊藤君を振り向いて、

『先生、此の餅屋から、あの向ふの伊勢屋といふ宿屋の看板の見える所まで、私たちの流し場なんです。源さんは、まだ張りに出やしないから大丈夫ですわ、あすこまで行つてみませう。』と云つた。

二人が伊勢屋の表まで行くと、中から出て來た女中風の女が「おや、落ちやん！」と云つて驚いた顔付で伊藤君を見た。多分救世軍の服裝を警官服と見違へたのであらう。

『お豐さん、私ね、今日までむさいされてゐたのよ。今日ね、叔父さんが水戸の方から來て下すつたの、かみさんに宜しくね：』

少女のお落は、さう云つて、そこから横町へ入つた。むさいされ

る（留置される）といふ言葉をきいた伊藤君は、
「あの伊勢屋が君のどや（宿）だつたんだな。」と鎌をかけてみた。少女は伊藤君の顔を見返りながら、
「さうですの、源さんはろかい（合圖）をしたと云ふんですが、お豊さんが氣か利かなかつたのでやちば（同衾）を押へられてしまつたのよ。」と答へた。伊藤君は何となく不安になつて來たので、默つて歩いてゐると、向ふから、五十五六とも見える老婆が來て、二人をぢろぢろ眺めてゐたが、少女は故ら知らぬ風をして、さつさと四角を左に曲つて公園の方へ出た。
「あの婆あさんは？」と伊藤君は雷門の見える所まで來た時訊いた。
「あれは私たちのお醫者さんですの。」
「醫者？」
「えエ、あの婆おさんが、私たちのお醫者さんで、すつかり手當をしてくれるのよ。」
彼等の仲間には、もう其所まで注意が行屆いて、萬事組織的になつてゐる事を伊藤君は驚嘆した。

四、大正千兩櫃

東京監獄から、年齢二十歳位の婦人を拘留してあるのだが、誰ひとり賴べもない憐れな身だから、婦人ホームに引取つてくれないかと典獄からの手紙があつたので、出監日の時を確めて監獄の裏門へ行つて待受けてゐると、程なく定刻に婦人は看守に見送られて出て來た。伊藤君は典獄の手紙を見せて、兎に角一先づ本營まで行つて相談しようと云つた。女は非常に喜んで、伊藤君に跟いて一二間歩いたと思ふと、
「まあ！」と云つて立停つた。見れば横合から筋骨逞ましい土方風の男が出て來て、
「おい、迎へに來たよ！」と元氣な聲で言つた。伊藤君は不思議に思つた。典獄の話では、此女は誰ひとり世話をする者の無い哀れなひとり者だと言つたのに、一體此の男は何者だらう？と思つて詰問すると、男は唯恐縮して、頭を掻いてゐた。女も當惑したやうに顔を紅らめながら、
「實はお恥かしい話ですが、これは私の夫でございます。此の男は私と五年前に結婚して甲府の水力電氣で勤めて居たのですが、先々月怪我を致しまして、東京へ歸るには歸りましたが、お金が一錢も無くなつて養生する事も出來ないので、私は思ひ餘つた末、吉原の土手に出て……こんな事になつてしまひました。監獄署のお役人様から、引受人は誰かときかれました時、まさか亭主があるとは申されませんので、兎に角救世軍に引取

られて、其の上での事にしようと思つてゐましたのに、此の通りのこ／＼出てまゐりましたので、もうどうする事も出來ません。私はやつぱり亭主の所へ歸ります……』と云つたので、伊藤君は笑ひながら、そこで二人に別れて、本營へ歸つたのであつた。

五、鈴木主水の歌にも

『世はさま／＼さ。』と云つて考へ込むやうにしてゐた伊藤君は、更に一人の女の話をした。

大正二年の一月二日であつた。伊藤君が救世軍本營に行つて同僚たちと「お目出たう」を交換してゐると、入口の所に色の蒼ざめた女が立つて、中に入らうか入るまいかと躊躇してゐるらしいのを見た。伊藤君はそれが自分を訪ねて來た女であると直感したので、直ぐ應接室に案内すると、女は張り詰めてゐた勇氣が、がつくり脱けてしまつたやうに、ぐたりと椅子に腰をおろして、しく／＼泣き出した。

靜に氣を沈着けさせて、段々様子をきいてみると、女の身の上には隨分複雜な事情があつた。

『七年といふ長い煩ひですもの、賣れるだけのものは、みんな賣つてしまひまして、もうどうにもならないので、父は鷲尾といふ高利貸から僅の金を借りたのでございます。それは返せる見込が無かつたのですが、母が手内職をして利子だけは、どうやらかうやら返してゐたものですから、父の亡くなつた時にもまた鷲尾さんから少々借金して、お葬式だけはすましたのでございます。そこへ私が嫁入り先から亭主に死なれて二人の子供を抱へて歸つて來たもんですから、すつかり行き詰つてしまつたのでございます。で、いろ／＼相談した揚句、母の遠縁に當るものが廣島縣の吳市に居ますので、私は二人の子供を母に預けて置いて、そこへ金策に出かけて行つたのでございます。』

女は、そこまで言つて、また一しきり泣いた。そして今日こゝまで逃げて來た筋道を、また、ぼつり／＼と語り出した。

『吳市までわざ／＼出かけて行つて、相談してみましたが、何を云つても遠縁の事ではあり、それに平生は手紙一本出さないでゐたもんだから、一夜の宿は機嫌よく貸して下さいましても親子四人を引受けて、どうしてやらうとは言つて下さいません。段々内情をきいて見ると、先様も他人の世話どころではなく、御自分も可なり困つてゐらつしやる様子でございましたから、私はそのまゝ引返すより外に方法が無かつたのでございます。ところが私は横須賀の宅を出ます時、片道の汽車賃だけ、やつと調達して行つたのですから、どうする事も出來なくなつてし

まひました。私は亡くなつた父の事やら、病身な母の事など考へてゐるうち、何だか此世がいやになつてふら〳〵と其の家を出て行つたのは夜の十時頃でした。私はとぼ〳〵と當どもなく歩きました。賑かな所も淋しい所も、人聲のする所もしない所も、一切夢中で歩いてゐるうちに私の前に何だか、きら〳〵と輝くものがございました。「あツ」と云つて足を停めた私は其の輝くものを見詰めますと、それは引つきりなく私の前を過ぎ去る何者かでした。囁くやうな、叫ぶやうな、「來い來い、早く來い」と云ふやうな聲でした。時には「馬鹿！　早く來ないか！」といふ聲も聞えました。私はそこに行つたなら、すつかり樂しく暮せるやうな氣がしまして、思ひ切つて身を躍らせました。それから間もなく私は、溺死になつて警察署の一室へ擔ぎ込まれたのでございます。」

女の聲は跡切れてしまつた。

「怪我はなかつたのですか。」と伊藤君は訊いた。

「えゝ、肩の所を少し擦つただけで、どつこも怪我はございませんでした。それから、御厄介になつてゐるお宅から母の所へ電報を打つて下さいましたが、母は二人の子供を抱へてゐるので、どうすればよいかと、例の鷲尾さんに相談しますと、鷲尾の奥樣が、大變同情して下すつて、「それはお氣の毒だから私が迎へに行つておける」と仰しやつて、わざ〳〵吳市まで來て下すつたのです。横須賀の宅へ歸つた時、母も私も鷲尾の奥樣を神さまのやうに思つて手を合せて拜みました。こんなにまで親切にして下さるお方に、父の代から借金をしてゐるのは相濟まぬ話だから、紡績の女工にでもなつて其の片をつけたいと思つてゐる所へ、或日鷲尾の奥さんが來られて、品川の歩行新宿に、いゝ奉公口があるから行かないかといふお話に、私共は一も二もなく承知して、早速行つてみますと、それは三〇樓といふ貸座敷でした。出戻りで、しかも二人も子供を産んだ私が、まさか娼妓になれとは云はれる筈が無いと思つて、そこへ住み込むと、三日目の晩から私は座敷へ出なければならなくなりました。私はびつくりして、飛んで歸らうとすると、もう母も承諾の上で前借金三百五十圓を受取つてゐるといふ事だつたので、私も泣々樓主の言ふ通りになりました。しかし子供が不びんなので、其の事を鷲尾さんに聞合せると、「子供は私の方で引取つてお世話するから安心せよ」といふお返事でした。三百五十圓のお金があれば、母も當分氣樂に暮せるだらうし、二人の子供も鷲尾さんの所に引取つて下されば心配は無いと思つて、萬事を諦めてしまひました。ところが間もなく母は胃癌で芝の慈惠病院に入院させていたゞいたといふ知らせを受取つた時、丁度私は品

川病院に入院中でございました。院長さまに其のお話を致しますと、院長さまは早速慈惠病院へお電話をかけて、母の樣子をきいて下さいました。そして院長さまは、私に、「おつ母さんの病氣は、どうもあまり快くないやうだ。胃癌と云へば、どうせ治らない病氣だから、行つて會つてあげたがよからう。慈惠病院と云へば、すぐそこではないか。」と仰しやつて下さいましたので、私は其の事を主人に賴みましたが、どうしても許して下さいません。二度三度賴んでみましたが「おまいさんが行つて會つたところで、病氣が快くなる筈はないから。」と云つて取合つて下さいませんでした。で、私は、「では、せめて母の生前に食べたいものでも食べさせてあげたいから、お金を十圓貸して下さい。それを見舞金として送りたい。」と賴みましたが、「胃癌といふ病氣は、何にも食べられない病氣だ。そんな病人に金を送るのは罪だ。」と云つて、それもきき入れて下さいませんでした。そのうちに、たうとう母は、私に一目でもよいから會つて死にたい死にたいと云ひ通して慈惠病院で死んでしまひました。」

女は、また泣き沈んでしまつた。二人の間には陰慘な空氣が漂うた。

「二三日經つて、病院の方から、母の屍體を解剖したと云つて遺骨と金五圓とを送つて下さいました。私は病院のベットの上で、母の遺骨を二三日抱いて寢た上、小使さんのお世話で南品川のお寺へ葬つていたゞきました。其時病院から頂戴した五圓の中で、三圓を和尙さんのお布施に、殘りの二圓を二人の子供に何か買つて送つて下さるやうに、小使さんにお願ひいたしましたのでした。ところが大變な事がわかつてしまひました。それは品川病院の小使さんと、慈惠病院の看護婦さんと知合の間柄でした所から、段々樣子が知れて來たのでございます。鷲尾といふ高利貸は、樓主から私の身のしろ金として三百五十圓受取つて、其のうちから二百圓は、父の代から借りた借金の元利だと云つて天引してしまひ、五十圓は奧樣が……いゝえ、あの嬶あ奴が私を吳まで迎へに行つた旅費だと云つて差引き、殘り百圓は私を吳市から伴れて歸る爲に着物を買つたり汽車賃を拂つたりしたから、其の方に貰ふと云つて、母には結局一厘も渡してくれなかつたばかりか、二人の子供は、一人を私の薄い親類の者に、一人は漁師の所へ吳れてしまつたといふのです。私は其時、すつかり決心してしまひました。「もうこんな所に一日だつて居てやるものか!」。とは思ひましたが、か弱い女の身です、退院すると、また無理やりに稼がせられました。

女は興奮した眼を擧げて、何事かを訴へるやうに、伊藤君を見た。

「君の藝名は？」
「私は艶衣と申します。」
「もう長く貸座敷に居るんですか。」
「一年と二ヶ月ばかりでございます。」
「其の位で飛び出して來る程なら、君の將來は見込がある。もう三年四年も、あんな所に居ると麻痺性の痴呆症といふ恐ろしい病氣に罹るよ。」
「病氣になつてしまへば、私はあすこを墓場ときめてしまひますが、私はまだ死ぬには達者すぎます。それにもう一度死に損ねたんですから、何とかして逃げ出したいと思つてゐます所へ先月、私の心をぐん！ と打つ事件が起つたのでございます。御覧の通りの私の年輩ですから、私のお客は大抵四十五十といふ年頃の方ばかりでございます。其の中に日蔭町で古物を商つてゐる馴染客がございました。どうしたものか、大抵毎晩のやうに遊びにいらつしやるので、飛んだ事にならねばよいがと思つてゐると、或日其の方のおつ母さんと奥様とが伴れ立つて私を訪ねてまゐりました。そして、「此頃のやうに毎晩家をあけられては家が沒落するより外はないから、どうぞ道樂を思ひ止るやうに、あなたから意見をして下さい」と私に頼むのでございます。そこで私は其のお二人を私の室に通したまゝ待つてゐて貰ひました。するとお客は間もなく、そんな事とは夢にも知らず登樓して、相變らず酒を出させて召上つてゐる所へ、私が其のおつ母さんと奥様とを引合せて、私も共々御意見申上げますと、さあ大變です。お客様は奥様に盃洗を投げつける、おつ母さんに銚子を投げつける、はては奥様を打つ踏む蹴るといふ大騷ぎの果だ、離緣狀を奥さまにたゝきつけるといふ始末でした。私は其時、心から、「こんな罪な稼業は、一日も早くやめなければならない」と決心しまして、暮の三十日に、たうとう三〇樓を逃げ出したのでございます。遠くへ行けば捉まると思ひまして、日本橋の宿屋で年を越して、毎晩宿を替へて三晩は無事に過しましたが、どうせ捉まるにきまつてゐるので、救世軍様へお願ひすれば捉まつても何とかして下さると思ひまして、勇氣を出してお伺ひいたしたのでございます。」

そこまで語つて、艶衣は安心したやうに太息を吐いた。で、伊藤君は早速艶衣を伴れて品川署に出頭すると、係りの警部補は先づ口を開いて、
「お前はどんな動機で廢業を思ひ立つたのか。」と意味ありさうな訊問をした。
「つらい勤であり、罪な稼業だとは存じてゐましたが、斯うまでひどい所だとは思ひませんでした。此上は一日も一時間も居

ることが出來ないと思ひましたので……』と艶衣はきつぱり言ひ切つた。

『罪な稼業かも知れないが、何もお前が大道へ出て客を引つぱるのぢやなし、先方が承知の上で登樓するんだから構はないぢやないか。中には不心得者もあらうが、それは先方の責任で、お前に責任はない筈ぢや。』

警部補は此女を元の貸座敷へ押戻すつもりだなと思つて聞いてゐると、艶衣は勇敢に、

『それは、さうかも知れませんが、私はもう辛抱が出來ないのでございます。だから逃出して來たんですから、どうぞ廢業の手續をお取り下さいますやうお願ひいたします。』と云つた。

『では世話になつた樓主に御恩返しはしないでもよいといふのか。』

警部補は叱るやうに言つた。すると艶衣はぴりゝと眉を動かして、

『御恩も何にもありません。前借金は一圓だつて私の手に入つてはゐないんです。それに目と鼻の近くにゐる母親の死に目にも會はして下さらない程無慈悲な主人ですから、私は御恩返しなどする必要は無いと思つてゐます。』と云ひ切つてしまつた。

すると警部補は、樓主に電話をかけて、

『今に主人が來るから、二人でようく相談するがよい。まあ、それまで考へて置け。』と云つて、伊藤君と艶衣とを、午後一時から六時半まで控室で待たせて置いた。火の氣一つ無い冷い所で五時間半も待たされてゐる間に伊藤君は、「大抵の女は、これだけで、へこたれてしまふんだ。」と思つた。

やつと樓主が來た。そして警部補と樓主の間に一問一答があつた。

『艶衣が自由廢業をするといふんだが、どうする？』

『みんなの示しがつきませんから、今日の所は一先づ歸していたゞきたいもんです。』

『しかし、あの女は一旦出た以上歸らないといふんだが……』

『それでは困ります。』

『本人がどうしてもいやだといふなら致方が無いだらう。保證人は大丈夫か。』

『横須賀の金貸業です。』

『それなら、大丈夫だらう。公正證書になつてゐるんだらう？』

そこで警部補は艶衣に對つて、

『無届外出をしたんだから、今晩はこゝへ拘留する。まだ取調べる必要もあるから。』と宣告した。樓主は其の言葉のあとを引取つて、

「鷲尾さんに電報を打つて置いたから、明日は來るだらう。其上で商事話をきめるから今晩は一晩こゝで御厄介になつてゐておくれ。」

と宥めるやうに云つて、さつさと出て行つた。

鷲尾が來ると聞いた艶衣は、見る〳〵顏色が變つた。鷲尾の幻影を見て、それに跳りかゝり、獅噛みつき、かぶりつきさうであつた。

伊藤君も手の出しやうが無いので、其日はそのまゝに歸つて、翌日早朝、品川署へ行つてみると、艶衣はもう無斷逃亡の廉で二十日間拘留處分の言ひ渡しを受けてゐた。で、早速手續をすまして正式裁判を仰ぐことにした。

保證金も納め、名簿削除も終つたので、伊藤君が艶衣を伴れて歸らうとすると、警部補は艶衣を呼び止めて、

「お前には影がついてゐて、こんな事をさせたんだから、詐僞取財といふ罪だ。無届外泊だけだつたら二十日の拘留ですむものを、今度は二ヶ月やられるか、三ヶ月やられるかわからないぞ。これから救世軍へ行つて何をするつもりだ? 救世軍といふ所は、善人が三分なら惡人が七分だ。おれも若い時は行つてみて善く知つてゐる!」と言つた。

何を言はれても腹を立てた事の無い伊藤君は、にこ〳〵笑ひながら、叮嚀に警部補にお辭儀をして警察を出ると、艶衣は東禪寺坂の下のところまで來て、後を振返り〳〵、こんな事を言つた。

「昨日先生がお歸りになつたあとで、私は留置場へ、はうり込まれました。夕御飯のあとで、見張りのおまはりさんが來て、『おい、しつかりしろよ。おいつらは、いつもあの手でやるんだ。明日は元刑事巡査をしてゐた男が、主人の手先になつて、面會に來るよ。そいつが、どんな甘い事を言つても、どんな嚇し文句を並べても、其の手に乘るな。廢業すると一點張りに言ひ通せ。挫けちやいけないぞ。だが、おれが言つたと云うてはならないぞ!』と云つて下さいました。私は本當にうれしくつて、誰が何と云はうと、二度と二〇樓なんかへ歸るものかと決心の臍を固めました。」

「やつぱり苦勞をして來た女には、えらい所がある。」と伊藤君は思つた。それから伊藤君は法學士の寺田四郎君と西村勘之助君に依賴して、いよ〳〵正式裁判を仰ぐことにした。

其時警察官が東京區裁判所檢事に送つた告發書には、

本人は明治四十五年三月一日名簿登錄申請をなしたるものにて、當時事實調査したるに、家計困難にして、母ハルの扶養並に先夫與藏某との間に生みたる小兒の養育等に差支、前借

金三百五十圓にて貸座敷富田方に住込み、同年三月九日名簿登錄、稼業年限六年にて爾來稼業中のものに有之候處、今般逃走したるに付、稼業中樓主に於て虐待したる事實を認むる能はず、且つ稼業に堪へざる故障を生じたるものと認むべき事實なし。本人申請の當時、娼妓稼業なるものは自由を束縛せられ、苦痛を忍ばざれば到底稼業に堪へざるものなることを說諭したるに、進んで申請をなし、登錄の際も夫々取締規則を指示し置たるものに係るを以て、本人は既に娼妓の何たるやを知悉し居るものなるを以て、逃走の原因と認むべきは前借金の踏み倒しをなす手段に出でたるものと思料せらる。偶々救世軍に投じて前非を悔悟し、自首したるも情狀酌量の餘地なし、寧ろ嚴重なる處分の必要なるものと認め候。

云々とあつた。しかし正式裁判の結果、艷衣は過料二圓で事濟みになつた。

『つらい稼業に堪りかねて、廓を逃げ出しても、救世軍へ驅け込むとか、辯護士に依賴するとかするだけの智慧の無い連中は直ぐ樓主に引渡されるか、さもなくば十日二十日の長い拘留に處せられた上、田舍の遊廓へ住替をさせられるんです。その結果は病氣になつて死ぬか、情死をするか、どうせ悲慘な最期を見るんです。』

伊藤君は憮然として、私の前に擴げた告發狀の寫を讀み初めた。

『鈴木主水の歌にもありさうな話だ。』と私は言つた。

六、小野小町と同鄕

『此女なんか、體格が丈夫だつたから、意地も張り通せたんですが、身體の弱い連中には隨分困らせられましたよ。これは、ずつと後の話ですが……』

伊藤君は、また一つの憐れな話をした。

上野公園で花見客が、盛んにぞめいて居る頃、年の頃二十歲ばかりと見える世にも稀な美人が訪ねて來た。會つてみると秋田縣雄勝郡の者で、洲崎辨天町の或貸座敷で、しん子と名のつてゐる娼妓であつた。

『なる程、小野の小町の產れた所ですね。』

と云つた伊藤君は、しん子の顏を、つくづく見て、重い病氣に取憑かれてゐることを知つた。

しん子は果して病氣であつた。四五日以前から休業して養生してゐると、樓主から仙臺の方へ住替をするやうにとの話が出たので、今住替をさせられては生命に拘るから、何とかしてくれといふのであつた。で、早速救世軍病院の醫員に來て貰つて

診察を受けさせると、肺病も肺病、もう第三期だから、婦人ホームのやうな多人數の居る所へ置くわけにはいかないと云つた。

「さて、困つたことだ。」と思つてゐる所へ樓主が尋ねて來て、

「今朝から本人が見えないので、多分こちらへお邪魔に上つたのだらうと思つて尋ねてまゐりました。健康なものなら兎も角、病人でございますから、いろんな心配を致しまして……」と、温厚な物の言ひぶりであつた。そこで、しん子を引合せると、樓主は頻りに歸るやうにと勸めた。けれども、しん子は中々承知しない。

「あなたは、私が容易ならぬ病氣だといふ事を百も承知の上で、氣管支炎だから、今晩でもすれば直ぐ癒ると氣休めを言つて、うまく私を住替させようとなすつたのです。さうすれば、あなたは御損が行かなくつて、宜しいでせうが、私は呼吸が苦しくつて、もう一日も稼業は出來ません。」

あまり、しん子の態度が明瞭だつたので、樓主も、たうとう廢業に同意して、即日其の手續をすませた。そこで伊藤君は救世軍病院に伴れて行つて入院させたが、非常に賢い性質で、日曜毎に熱心に說教をきゝ、たうとう救世軍の兵士に入隊式まですましたが、其年のクリスマスの朝、病院で感謝のうちに死んでしまつた。

しん子の本名は芳子といふのであつた。兩親に早く死別れ、伯父の所で育てられたのであるが、三人姉妹共、伯父に賣り飛ばされ悲慘な境遇にゐたのであつた。

死ぬ三日前に涙に染んだ手紙が伊藤君の手に屆いたのを、早速駈けつけてみると、骨と皮とに瘦せ衰へながら、精神だけは實に確であつた。自分が亡くなつたら、遺骨は埼玉に居る妹の所へ取りに來るやうに言つてくれと遺言した。

亡くなつた時、直ぐ電報で妹に知らせてやつたが、何の返事もなかつた。で、伊藤君は柳原川岸の助葬會に頼んで火葬に付し、遺骨は院長室に保管を頼んで置いたが、翌年の七月に、其の妹と云ふのが、五圓の金を工面して漸くに姉の遺骨を受取りに來て、持つて歸つた。

「火葬場の煙突を見るたびに、僕は姉の遺骨を抱へて泣く〳〵病院を出て行つた、あの妹の事を思ひ出す。今頃はもう姉と同じ運命に落ちてゐるかも知れない……」

伊藤君は靜に起上つた。私も元氣なく戸口まで伊藤君を見送つた。（未完）

廣告社會相

加賀甫

一

鷄を飼つて、玉子を賣つて、それで一人息子を大學に通はして居る前の家の主人は、今こゝに錢が多くはいらないが、まあ五千圓もあれば鷄舍をもう五棟も建てゝアンダルシヤンかミノルカか、それとも名古屋コーチンでも飼ふと大分暮しの向きも樂になるんだがなあと云へば、隣の主人は私は五千圓とは申しません、先づ先づそこ〳〵三千圓もあればそれで十分、隣りの大根畑の三四反借りつぶして、そこに春咲きの草花の溫室を作つてヒヤシンスや、チユーリツプや、マガレツトやなんかをうんと鉢で出して一儲けが出來るんですがねと云へば、裏の家の主人はどうもあの家じや手狹で困ります、おあしが二千圓もあれば、あの家に手入れをして座敷をもう少し奇麗にして門を東につけて、そこで私も女房ももう少し小薩張りしたなりをしてゐさへすりや、私の碁會所も大分繁昌致しますがねと、錢湯で一所に落合つた三人は輝やく希望に燃えるのであつた。一夜明けての新聞廣告を見ると、そこには金壹萬圓貯金と云ふ見出しで、要するに三年間で一萬圓になる祕訣委細郵券二錢送れと云ふ大々的の廣告がある。こりや實に近頃珍らしいうまい話だ、がこれは夢じやないか、何か氣の迷ひじやないかと腿をつねつてみれば痛いし、頭を毆つてみればこれまた痛い、慥にこれは正氣の沙汰である、これは正眞正銘の話であると、三人は人には內所で祕密にそれ〳〵郵券二錢を送つてその規則を取り寄せて、これをよく〳〵讀んでみると毎月の掛金が極く僅少で慥に一萬圓は三年間にとれる、なあに金を拵へるのはこんな容易い事か、なんだこれじや何でもないことじやないかとばかり、すぐに申込んで三年先きの一萬圓をいろ〳〵と浮び考へゐいてあつた。そうと一萬圓ならアンダルシヤンもミノルカも名古屋コーチンもみんな飼ふ事にしよう、鷄舍五棟じや狹いから十棟にしようと、圖を引くやら、電車に乘り廻はして他人の養鷄場をも親しく見學して歩くやらして樂んでゐる。植木屋の主人は主人で春咲きの草花ばかりでなく、少しは盆栽ものもやらう、お正月用の梅の鉢も大々的にやらうとこれまた大に目論み出した。碁會所の主人は二千圓で十分なのが一萬圓と云ふのだから、それじやこんな郊外に居る事はない、丸ビルあたりで奇麗な大きな部屋を借りて、文化式に椅子にストーブ、客も高等官に會社の重役に限ることと、これまた近い將來の大壯圖を夢みて一生懸命に無理算段をして掛金にいそしんだ。しかしこうしたユトピヤを夢みたのは、たゞこの三人ばかりではなかつた。日本全國中はこうしたトリオの堆積であつた、こんなのが向ふにも此方にもゴミ〳〵してゐた。しかしその人達の毎月の掛金をするのには並大抵の事ではなかつた、食ふものも食はず着るものも着ず兎に角こゝ三年間の消費節約の決心は鐵よりも堅く實に涙ぐましい勤儉貯蓄そ

の文字通りの大努力であつた。やがて三年目になつた。さて三年目に約束通りに一萬圓を右から左へとハイと一言の下にくれゝば何の文句はない、また私の話も此處で打切るべきであるが、さて私の話にまた先きがありそうに見へる處で何だか面白くなつて來たらしい。

さてとう／＼待ちに待ちぬいた三年目がやつて來た。その當日になつた。が百圓は愚か鐚錢一文も呉れやしない、さあ驚いたのは今の三人きりではない日本全國中の幾多のトリオはみんな眞青になつて仕舞つた。氣の小さい人は夫婦別れをするものも出來れば、またもつと氣の小さい人は氣が狂ふて自殺まてしたものさへあつた、然しその一萬圓やると云ふた當人は、こりや氣は慥かだ、人々に一萬圓づゝやると云ふてこれを一文もやらずに、向ふの一萬圓も此方の一萬圓もみんな根こそぎ他人ならぬ自分にやつて仕舞ふた、そうして得意滿面、それこそ奇麗を通り越した納來の自動車で、東京狹しと乘り廻はし、次ぎには多額納税者になつて貴族院議員になつて、貧乏てふ風は何處に吹く風だと云ふてゐる中に一寸市ヶ谷の別荘へ連れて行かれたが、そこに底ありて錢は取り徳、取られた人は取られ損、話は兎角金の世の中で七十五日たつ中に養鷄閣の主人も植木屋の主人も、碁會所の主人も、そうしたトリオの堆積も、誰れも彼れもみんなそんな氣の利かない話は奇麗薩張りと忘れ果てゝ仕舞つた。さすがに日本男兒は揃ひも揃ふて思ひ切りがよくつて君子國の國民だと合點が行くのである。

食ふや食はすの錢を幾百人から絞つて絞つて絞りぬいて、それで人樣に一人／＼に一萬圓づゝやると云ひながら、自分でその錢をみんな取つて、それでいゝものかそれで濟むものかと齒を喰ひしめ泡を飛ばして悲憤慷慨するのが人の常だ。だがこれは一應廣告主に云はせると、そんな事はいゝも惡るいもない、兎に角私のお蔭でたつた一人の人だけが幾百萬圓かの成金樣にたつた三年の中になつて仕舞つたのだ、そうして名譽ある貴族院議員になつたのである。口惜しければ誰でもいゝから一秒間でもいゝからせめて貴族院議員のキの字にでもなつてみるがよい、しかし理が非でも尻を持つて行きたいと云ふ人があるなら、そりや時の政黨内閣なり司法官なり、それともその廣告の出て居た新聞社へなりと談をお願ひ致しましようかと、終に廣告は微笑ところか哄笑を發して、すつかり舐めてかかるのである。

二

廣告勸誘の爲めの自宅訪問は彼れの一切堅く拒絶してゐるところであつた、がそれは絕慨に厳格にそれを固守する事に彼れの力では到底出來ないものゝ一つでもあつた。

彼は最初に大森の不入斗に住んで居た、それから鹿島谷に、それから山王にと、二年そこ／＼の中に三度も引越をした、この三度の引越しも何も方角が惡るいからと云ふのでもなく、日あたりが惡るいのでもなく、と云ふて家主が八釜しいのでもない、また家賃が高いのでもなかつた、要するに自宅訪問の廣告勸誘員を體裁よく斷る爲めにした引越にしか過ぎなかつたのである、何處へ引越して行つても、その先き先きへと、いやな廣告勸誘員は勝手に、その後を追ひ廻はすので、これをどうにも仕樣のない、またどうする事も出來ないので、成るべく安全地帶へより安全地帶へと引越して歩るいて居たのであつた。畢

に廣告勸誘ならば廣告部長の職務上これは是非もない事であるが、中には廣告と稱してゐる種の惡るいいやな分子が襲ひ來るのには、彼れはほと〳〵困りぬいてゐたし、また、それ等を心から困まりぬいたのは、たゞ彼れ自身ばかりでなく彼れの妻も困まり彼れの子供達も困まつたのは勿論、それより一番恐れをなして困つた以上恐怖の域にまで達してゐたのは、それ等の人々を先づ最初に玄關で迎へる女中そのものであつた。

一番最初に居た不入斗の家は、とある橫町のそのまた細い路次を入つて、つき當りの家であつた。人の自宅を早朝訪問する事を彼等の暗語では「寢込みを襲ふ」と云ふてゐる、しかもその寢込みを襲ふたものを最も簡單に仕譯けて善惡二つに區別するときに、その訪問者の玄關に來た最初の言葉で、それを完全に識別する事が出來るのである。その時の言葉が「お主人はお宅ですか」と云ふのは、此れはホントの廣告勸誘員であつて善良の部であるが、そのときもしも「先生はお宅ですか」と云ふものがあれば、それは例のある種の惡るい分子か乃至それ等の一黨であつて、云はゞ失禮ながら先づ不良の部に入るべきものであろう。かゝる類のものが早朝訪問して來ると、最初の中こそ「もう會社へ出掛けました」と云ふと大人(おとな)しく「大分お早いんですね」と云つて歸る。そこでうまく歸つたとばかり訪問された本人の彼れは急いで玄關から出掛けると、先きの訪問者は自分の家へも、自分が電車に乘るべき大森驛へも歸らずに、彼れの家の向ふの橫町の角に立つて見張つてゐるから堪まらない、彼れはすぐ樣に捕まつて仕舞ふ、そうして今留守を使つた直後であるから工合が惡るいにも何にもと云ふ段で、とう〳〵若干錢をせしめられて仕舞ふ。これは上手に容易く追拂ふた積りのしくじりである。がまづく行つてその時に本人の彼が、まだ家に居た時に、豫ての敎育不十分とあつて女中が「まだ在宅です」とでも云はうものなら、すぐに上つて來る、そうして勝手氣儘な要求をする、その時にもし先方の要求通りにしなければ、すぐに化して般若面になり、忽ち大聲を發してわめき出すのである、それを警察用語で云ふならば「强談威迫」するのである、然し男と云へば彼れ一人で、外のものは女と子供だし、してまた警察は遠いもので仕方が無くつてなけなしの錢をやる、しかし家にあげずに玄關でうまく追拂ひ、また橫町で姿を見とがめられずに關所を巧みに逃れて行くと、これはこれは大森驛での待ち伏せである。これは東京への彼れの勤先への玄關口に網を張る手で、とう〳〵こゝで捕まつてせしめられるのである、こうした袋の底みたいな家だから寢込みを襲はれたり、またうまく留守を使つてみても、外へ出るが早いか、この一本路でゐるからいけない、どうしても表と裏と二本路のある家でなくてはいつも財布は空になるのが原則とばかり、裏口もある家にたまの休暇を犧牲にして探がして探がしぬいて探がしあてたのが鹿島谷のこの家であつた。

鹿島谷のこの家は玄關が直接府へ行けば一貫三百の本門寺に通ずるの廣い道路に面してゐて、勝手が裏道に通じて居た、誠にこの家は註文通りに表と裏と二口ある家であつたので、玄關の方へ早朝亂入者ならぬそれ等の訪問者が來て「お主人はお宅ですか」と云はうとも、また「先生はお宅ですか」と云はうとも、玄關に先づ出たものは平氣で安心して「もう出掛けました」と云へるのである、しかしもう出掛けました本人なる彼れは裏一つ越しに、その挨拶をきゝながらひや〳〵して朝め

しを喰ふて居るのである、そうしてそこは工合よく靴をはいて裏口からこつそり裏道をひた走りに大森驛へと急いで居た、がしかしこの芝居もそう永くは興行する譯には行かなかつた。それはこうであつた、彼れが工合よく逃げた積りで停車場へ行つたあと、先き程あんなに大人しく歸つて行つた先生閥の一員が、また、玄關に現はれて、さつきはそうでもなかつたが今度と云ふ今度は何處で一杯引かけて來たのか、少し酒氣を帶び、從つてその言葉も荒つぽくつて聲も大きく、「先生は居るんだ是非逢はせろ」と云ふので、女中は「もうお出掛けです」と云ふと、こんどは「噓言つけこの馬鹿野郞め」と怒鳴りつけての連發で、殴りつけてもする權幕で女中も全く恐怖病に捕はれて、泣き〳〵その日の中に暇を取つてとう〳〵歸つて仕舞ふのであつた。その女中が歸つて次ぎの女中を探がしてゐる中のある日に、またこの先生閥の他の一員がやつて來た。勿論彼れは出社したあとなので、彼れの細君が出て、「もう先き程出掛けました」と云ふと、また「この馬鹿野郞噓言つけ」の連發であつたのを見るに見かねたのが隣りの家主の細君、すぐに電話を掛けたので警官がやつて來て、一寸來いの「面會強要」でその男を連れて行つた。これが二度ならず三四度打ちつゞいたのと、それに加へて面會強要で引張られた男が、警察からの歸り路に「お陰さまで臭い飯も喰べて來ました、往復電車賃でも貸して貰ひましようと」彼れの留守に、恐ろしい顏付きで日くれ方やつて來たこともあつた。それやこれやで家內中全く恐れをなして、またも家を探がして今の山王へ越したのであつた。こゝはすぐ側に交番があるので「お主人」の口はそうでもないが「先生」の口の「強談威迫」も「面會強要」も大分少なくなつて家のものも喜べば、また女中もやつと居つく樣になつて、やつと彼れは安心して膳の晩酌に小供をからかふ笑ひ聲さへ出るのであつた。

俺れの新聞に廣告をしてくれ、俺れの雜誌に廣告をしてくれと云ふて彼れの自宅まで押掛ける人が多く、その爲め二年そこ〳〵に三度までも引越しをしなくつてはならぬのは、この通りだから會社の方へ來る人數の多いのもこれまた思ひ半ばに過ぐるものがあるのであつた。

自宅訪問を逃れ、大森驛で捕まるのを逃れて會社の所在地の丸の內、東京驛で下りると、すばしつこいのになると、この東京驛に網を張つて居るのもある、ござんなれとばかりちやんと番をしてゐるのであるから實に恐れ入らざるを得ないのである。

さて會社へ行けば會社で、廣告部長に面會したいと云ふての訪問客の多い事は、それまた驚くべきものでもあつた　會社が會社丈へに毎日の訪問客の多い事も當然ではあるが、その多い訪問客の大半は實は彼れなる廣告部長への訪問客でもあつて、云はゞ訪問客の多いことにかけては、その會社で一番多い社長さんよりも實に此の廣告部長そのものであつた。彼れは訪問客の連日のレコードホルダーであつた、故に口の惡るいボーイの如きは廣告部長さんぢやなくつて面會部長とさへ陰口をきく程大繁昌するのであつたが、またこの訪問客の多くは日くづきの人が多いので、これまた慇懃をつくしてボーイ達の敬遠これ努むるものでもあつた。實際多い時には一日に百人を超へる事もあるが、時に少ないときでも四五十人は下らない盛況を呈し、彼れの室の廊下は常に目白押しに押して押すな押すなで、次ぎから次ぎへの訪問客である。「相手變れど主變らず」と云ふ事を如實に見せ〳〵

けられて至言なるかなと讃歎の聲が自然に發せられるのであつた。

ある日の訪問客は威風堂々と鐵髭さんの徒弟よろしくの美髯美髭を生やしてやつて來た男があつた、名刺を見ると「日本忠愛新聞社長」とある、その服裝は五ッ紋付羽織に仙臺平の袴といふいでだちである。その主義とする處はその名そのまゝに忠君愛國で、それをくど／＼しくも、もの、一時間も能辯に說き立て、、さてこれに贊成ならば廣告を出せと云ふ結論なのである。彼れも社長も等しく日本人であるから、忠君愛國は當然すぎる程當然の事でこれにはそう說明するまでもなく大贊成のことなのである、で兎に角廣告を依賴する事になると、社長は「この大會社がなんだ廣告料に百圓出せないのか、その位出せない貴樣はもの、數にも入らない蟲けらだ、またこの大會社は貴樣如き蟲けらを廣告部長とするに至つては、實に不忠非愛國の醜族の巢窟である」と威高々になつて、滿面朱をそ、いで椅子から立上つて大言叱咤するのである。これは忠君愛國を賣物にして、廣告を名にして金錢を強要する醜族の代表者なのである。また實際こうした人は名刺面には社長とあるが、その實は社長でも單に社長の榮職にあるばかりでなく、或はまた記者であり小使であり、そうして實に廣告勸誘員でもあるので、此處にそれ等の四人力を一度に狩出して大威張りに威張つたのである。

そうかと思ふと、またある日の訪問客にこんなのがあつた。これは三人連一組になつてやつて來た、赤色青年聯盟と云ふ名刺を持つて、いきなり彼等は彼れの室に入つて來た、汚れた服を來た、汚れた頭髮を長くした青年達であつた、彼等は案内なしにづか／＼と彼の卓の前に突立つたまゝで

「おめいが、この會社の廣告部長か、變な面してやがんな」と云ふのが最初の挨拶だつた、そこで

「お用は何で御座いますか」

と問ひ返すと

「てめい變な奴だな、用があるから來たんじやねいか、用がねいのに來るかい」と兎に角に大會社の廣告部長もおめいにてめいに惡口雜言をふりかけて卽座に煙に卷いちまうと云ふ手らしい、そこで少し驚いた樣な風をして

「中々大した勢ですね」と云ふと

「勢なんかどうでもいゝや、とにかく此の雜誌に廣告料として一本出してくんな」

と棄て臺詞と睨みの見得よろしく、彼の卓の上にぺら／＼な雜誌をやんわり一枚出した、その名が「赤色青年」と題して、一青年が右手に松明を高くもかゝげた繪を表紙にした雜誌を一枚出した、雜誌と云へば大抵一册と云ふのが日本の習慣であるが、これは四頁のぺら／＼なのでお世辭にも一册とは云へない、正直一枚がこの場合一番いゝ形容詞であるとつくづく思へた、するともう一人の青年は少し笑顏を作つてニヤリと笑つて

「おい兄弟、この雜誌はプロを救ふ大使命を帶びてゐるので、實のところ一本は少し高い。半分に負けとくぜ」と云ふてニヤリ／＼と薄笑ひをしてゐる、そこで

「一本の半分て、いくらですか」と問ふと

「兄弟少し血の廻りは惡かねいか、一本て千兩よ、その半分なら五百兩じやねいかよ」と云ふて平チャンをきめ込んで居る。彼は全くあつけに取られてたゞぽーとして仕舞ふたが、漸く口を開いて

「この近所に人足でも居ますか」ときくと

「何んだと大きな口をきくじやねいか」と返事をするので

「あなたは人足に話をしてゐるのですか、それとも私に話をしてゐるのですか」と云ふと
「てめいよ、てめいちに話してんだよ、そのてめいよ資本家の犬によ」と云ふて青年は眉を八の字にして、顔全面の皺を全くそこによせて、それこそ恐ろしい顔をして睨みつけるのであつた。すると例のニヤリの青年は
「おいよせよせ、この代物は出す代物だぜ」
と云ふて、その怒つてゐる青年をすかしなだめるのであつた、するともう一人の青年は
「おいこれだよ、これが解んねいか」
と兩手を懐中に入れて、カチンカチンと音をさせてゐる、何んの事はない、これは懐中で刀を兩手で抜いて柄と鍔とで音をさせてゐるのである、そうして終には「百兩に負けてやるか」と云ひつゝも、まだ音がするカチンカチンすると最初に威張つた青年は
「おいおれもこんなものを持つてるよ」
と彼の卓の上にドタンと置いたものがある、よく／＼彼れがそれをみるとそれは正にピストル一挺。六連發のほやほやのものである。

これは、一人は怒鳴りつける、一人はそれをなだめる、それでも應じなければ一人はカチンカチンの刀の音をさせテロを示唆するトリオの一闘でもある。しかし彼れは應じないので、とう／＼此等トリオは正體を暴露して
「おい覺へてろと」三人が異口同音に叫んだの
「面上げてみろい、覺へてろつて面は、もう少し造作がいゝやい」と此方も正體を出した。
「なあに」と云ふて刀が閃き、ピストルの玉が飛ぶかと思ふたら
「覺えてやがれ」の極常詞よろしく舞臺はチョンも入らずにそのまゝ廻つて仕舞ふた。

彼れはその職名は一廣告部長に過ぎないが實際やつてゐる事はまるで戰爭だ、命がけだ、それ等多數の訪問客の爲めに彼れの午食は大抵早くつて二時、少し遲くなろうものならば三時四時になるのも敢て珍らしくはないのである。會社がひけて家に歸つて靴をぬいて洋服を和服に着換へると、やれ／＼今日も命があつたと、眞から喜んで子供達に無駄口をたゝいて晩酌にふけるのであつたが、そうしたおどかされたことは、會社の重役にも恥しくつて話せもせず、さりとて家へ歸つて勿論女房にも話せない、と云ふて警察へ一々つき出せば後の祟りが尚更恐ろしい、實際廣告部長と云ふ變挺な仕事で彼れは月給を貰ふて彼れ及び彼れの一家は生きてゐるのである。

するとまたある日、これは政黨院外團某と云ふ名刺を持つてやつて來た。少し醉つては居た。
「おい若けの、おめいで解るかい、少し出しなよ、敢て元金を出せとは云はねいが、利子でいゝや、今日は利子で勘忍して置こうぜ」

これではまるで貸した金の催促に來て、元金を一時に返すのは無理だから利子でまけて置くと云ふ云ひ草であるが彼れはこれにはなれてゐる。
「廣告ですか、お出しになつてゐる新聞か雜誌を拜見いたしたいものですが」と誤魔化すと、
「そんな不景氣なものはねいや、廣告出したつて利かねいような新聞も雜誌も出しちやいねえ、これだよ、この顔だよ」
と云ふてこの顔に對し若干錢を出せと云ふのらしい。そうして鐵の様な腕をくるりとまくりあげて卓をトン／＼たゝくのであつた。
「新聞も雜誌もないのじや困りますなあ」
と彼れが云ふが早いか「國士に對してつべこべ云ふか、この不屆ものめが」と云ふも終らす蛭蝶の様な拳骨が電光石火の様にびゆうと

飛ぶかと見たが、それが忽ち彼の右の頬に破けよとばかりに飛んで來た。毆られても彼はしかし悠然と構へて

「右の頬を打つたんなら左の頬をもう一つ」

と云ふが早いか

「何云ふてやがんだい」と言下に、またもびゆうと拳骨が飛んで彼れの左の頬を火が出たかと思ふ樣にがつとばすのであつた。その拍子に彼れは兩眼から涙をぼろりと銀の玉の樣にこぼして

「右の頬も左の頬も大分痛かつたんですからあなたのお手も、さぞかし痛かつたでしようれ」

と云ふたら、さすがの國士を以て任ずる院外團は一言半句も云へなかつた。そこへ室の彼れの部下が驚いて會社詰の不服を電話で非常召集をしたので、その不服の聲で「こゝですか」と云ふが早いか、國士は下駄をぬぎ棄てゝ足袋はだしで雲と霞と逃げ去るのであつた。

　廣告と云へば文化的商業政策で常に時代の尖端を行くその一つだ、その廣告をくれと言ふ美名の下に、その係のものゝ家庭に侵入したり、その妻君を怒鳴りつけたり、女中を叱りつけたり、または路上に要して金錢を捲上げたり、或はまたその會社に押掛けて行つたり叱咤したり強迫したり鐵拳を見舞たりすると云ふ事は、そりや一體どう云ふものですかときいてみると、廣告は「どうも時に私の名を藉りて不心得ものがありまして、誠に恐縮に堪へません、しかし今のあの丸山總監になつてから」と云ひつゝそこを指すと、そこには

> 面會強請　はすぐ
> 強談威迫　申告して
> 金錢強要　下さい
> 警視廳
> 日比谷警察署

とあり「あの紙の通りに、すぐに電話をお掛けなさる事ですね。こんどこそは明るく清らかにそうした人々はすぐに處分して仕舞ふらしいですよ」と、廣告は涼しい顔をして眼を見張つて微笑してゐるのである。

三

日本じやせい〳〵圓タクの時代であるが、海を渡つたアメリカはスピードの時代、それで大抵の人は自動車を持つてゐる、なんでも五人に一臺の割に自動車を持つてゐると云ふ事だから大したものだ。そこに氣のついたのはピツトウエルと云ふ男、自動車で一つ金持ちになつて仕舞へと度胸をきめて、善は急げとばかり早速國際自動車聯盟と云ふ名からして世界を股に掛けた會を作つた。會員は自動車を持つてゐる人で一年の會費を十弗拂へば自動車の部分品を市價以下で提供するとあるので堪まらない、それからその規則書を見て行くと、一流著名なタイヤー及びその他の正價が列記してあるのをよくみると成る程、市價よりすつと廉價であるから、これを見た人は勿論の事、それをまた友人親戚に傳へて舉つて會員になつたのであつた。會員になれば會費の拾弗は拂ふ、そこでその拾弗をすぐに取返す氣でいろ〳〵部分品を註文する、さて荷が來てあけてみて驚いた。註文した時にはグツドイアータイアーとかフツトと云ふたのがあけてみるとナショナルなんて初めてお目にかゝる、見た事も初めて、聽いた事も初めてのタイアーであつた。この時初めて一杯喰はせられたと氣が付いたが後の祭り、すぐに嚴談に及ぶ、やがて返事が來たのでよく讀むと、手

紙の文句は極めて鄭重を極めて居る「拜啓益御清祥」から初まつて、それから「貴殿の御入會申込書中の摘要に、萬が一お指定品賣切の際は當方にて御註文品同等の品及びそれ以上の良品を代用品としてお送り申上べく候と明記有之候、然かも御手許にある部分品價格表をお覽下れば「ナシヨナル」は御註文品よりも價格に於て餘程の差額は有之候もお初の御註文にも御座候へばそれ丈けの勉强相努むべく候」と云ふ、所謂極めて合法的論語での返事なのである。そこでそんな約束をしたのかと思ふて、もう一度國際自動車聯盟なるもの丶規則を熟讀してみるとあるある確にある、じや是非もない規則にあるのじや合法的だ、この上くちや〳〵云ふてみても仕方がない、世の中には中々利巧なものも居るものだとして入會金とダイヤーの代金は溝の中へでも棄てた積りて、そのまゝ泣き寢入りをして諦らめて仕舞ふたのであつた。その中に時は去つて五年なり七年なりたつて仕舞ふて國際自動車聯盟の事なんかはてんで全く忘れ果てゝゐた或る朝、しかも書留郵便で聯盟から手紙が一本舞込んだ、開けて吃驚「……滯納會費何ヶ年分、何十弗御支拂ひ成下度候」とある。そこで古い昔しの一杯喰はされた惡るい記憶をまたも呼び起して、そんな筈はないと詰問狀を出すとまた慇懃を極めた返事がすぐに來た、その中に「入會申込書中に、會員はその年度終の六十日以前に書留郵便にて退會を申出でざる限りはいつまでも會員の規定が有之候」とある、そうして親切にもこの手紙には赤線をつけた新聞の切拔きまで封入してある。それを讀んでみると、この人も會費滯納請求を怒つて支拂を拒絕したのであつたが、とう〳〵それが裁判沙汰になつてその結果が敗訴になつて會費を支拂ふたとある。そこでこの人も裁判沙汰にでもなると時間潰しでもあるし、また外聞もよくないとあつて、もう一度泥溝に投げ棄てた積りで會費と退會屆とを規則通りに書留郵便で差出して怨敵退散〳〵とそつと胸を下すのであつた。

しかしこうした事が非常に多く從つて被害者の數多い事が全米廣告警戒委員（不良廣告を排擊する會の委員）の耳に達したので、早速取調べてみると事實の證據は山に積む程あつたので早速例の聯盟のピッドウエルに注意してやると彼は泰然と控へて、合法的一天張りで棒でも挺子でも持つて來いの氣象で一向話にならぬのである。そこで委員會は辯護士に證據を蒐集させて、それを遞信省に對し郵便法規違反として詐欺の告訴をしたのである――米國では詐欺、猥褻又は下品な文書、墮胎避姙に關する文書並に欺僞又は不德事項の傳達を禁ず、犯すものは嚴罰に處すと云ふのがある――、この告訴が出る以前に遞信省でもうす〳〵それを承知してピッドウエルを召喚して訊問を開いてゐたのであるが、中々に證據は歷然としてゐる。じかし被害の數が非常に多いので本件は實に同省開設以來のレコードとなつて長時間を費したものであつたそうだ。

ピッドウエルも中々負けてはいない、費用などに構ひなく第一流の有名な辯護士や全國より多數の有力者を證人として出廷せしめて最も有利な證言をしたもので、それが滿廷を動かして罪にならずに濟んで居たのであつた全米廣告警戒委員會は以上の事を有力な參考としてそこには底がある事と秘密裡に嚴偵の結果、とう〳〵ピットウエルの秘策を探ぐりあてたのであつた。その秘策と云ふのはこうである。先づある一地方に會員を勸誘しようとすれば、そこの一流の辯護士と土地の有力

者を無理にも、入會させて仕舞ふ、かつ聯盟はこれこれしか〳〵とばかり無理にも部分品を註文して貰ふて、これには一流の素敵もない品ばかりを供給する、しかもその代價の低廉なる事は驚くべきもので、かつ鄭重を極め迅速にも配達もするが、またすぐに自動車にも取付けもする。やがて一ケ月たつか經たぬ内に、また例の勸誘員が來て、あのタイヤーはお氣に入りましたかと聞くには聞くが、第一流の飛切タイアーであるから、まだ何ともあらう筈が無いので、「實にいゝ品ですね」と返事も終らぬ中に、「でも一度拜見させて頂きましよう」と云ふてぐん〳〵車庫に入つて行くが早いか、「こりやいけません」の一言ですぐに持つて來てゐた新らしいタイアーを丁寧に取付けて、「どうも失禮いたしました、どうもこの前は惡い品を取付けましてどうも相濟みません」、第一流のタイアーをつけて置いて、まだもの〻一ケ月もたゝぬ中に、また新らしいタイアーをしかも無代で取替へてくれるのだから、辯護士なり有力者は實に讃歎これを久しうするのである。實に此の聯盟は驚くべきものだと云ふ、すると勸誘員は待つてゐましたとばかり、では一筆それを會長に禮狀を願ひます、と云ふての證明書がものを云ふて遞信省の審問の法廷で法官を動かしたものでもあつたが、またその證明書を出した有力者や辯護士の直接本人の證言もものを云ふたのである。

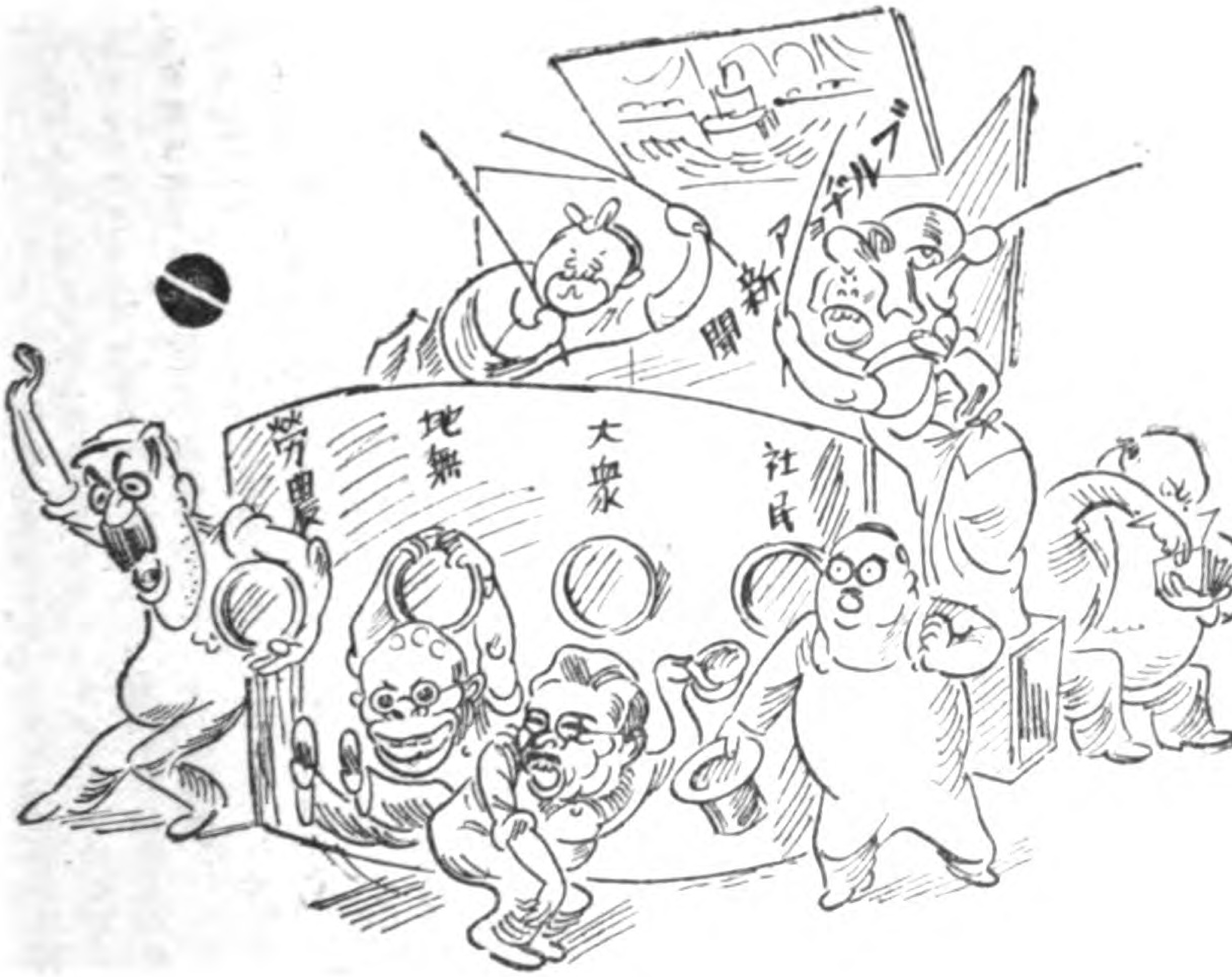
警戒委員會では、こうした秘密のからくりを完全に調べ上げたので、何回にも亘つてひどい目に逢つてゐる人々の證明を山の樣に集、めた。そうして法廷で聯盟側の辯護士が被告に有利な證言を提出したいと申出でるや、警戒委員會側の辯護士は、「私の方にも證言は幾らもあります、あなたの方で一つお出しならば、此方は百でも千でも出しましよう」と云ふて大に快辯を振ひ、これで委員會の勝利になつてピツトカエルは終に囹圄の人となつたが、かくて詐取した金額は何千萬弗であつたかその高が知れなかつたと云ふ話である。

これは兩刀使ひの、しかも兩刀を最も鮮やかに使ふたものだ、さすがにアメリカらしい使ひ方でもある。然しとう〳〵嚴罰に處せられた。惡るい事をすれば廣告でもアメリカでは刑務所へ行くものらしい、しかもこれを廣告に云はせると、お話さてもアメリカのお話は誠に結構でありました、が日本の法律では、

警察犯處罰令の第二條、左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ三十日未滿ノ拘留又ハ二十圓以下ノ科料ニ處ス、

六、新聞紙、雜誌其他ノ方法ヲ以テ誇大又ハ虛僞ノ廣告ヲ爲シ不正ノ利ヲ圖リタル者

と云ふのがありますと、默々として多くを語らうとせず、たゞ微笑を洩らしてゐるのである。



時事漫畫

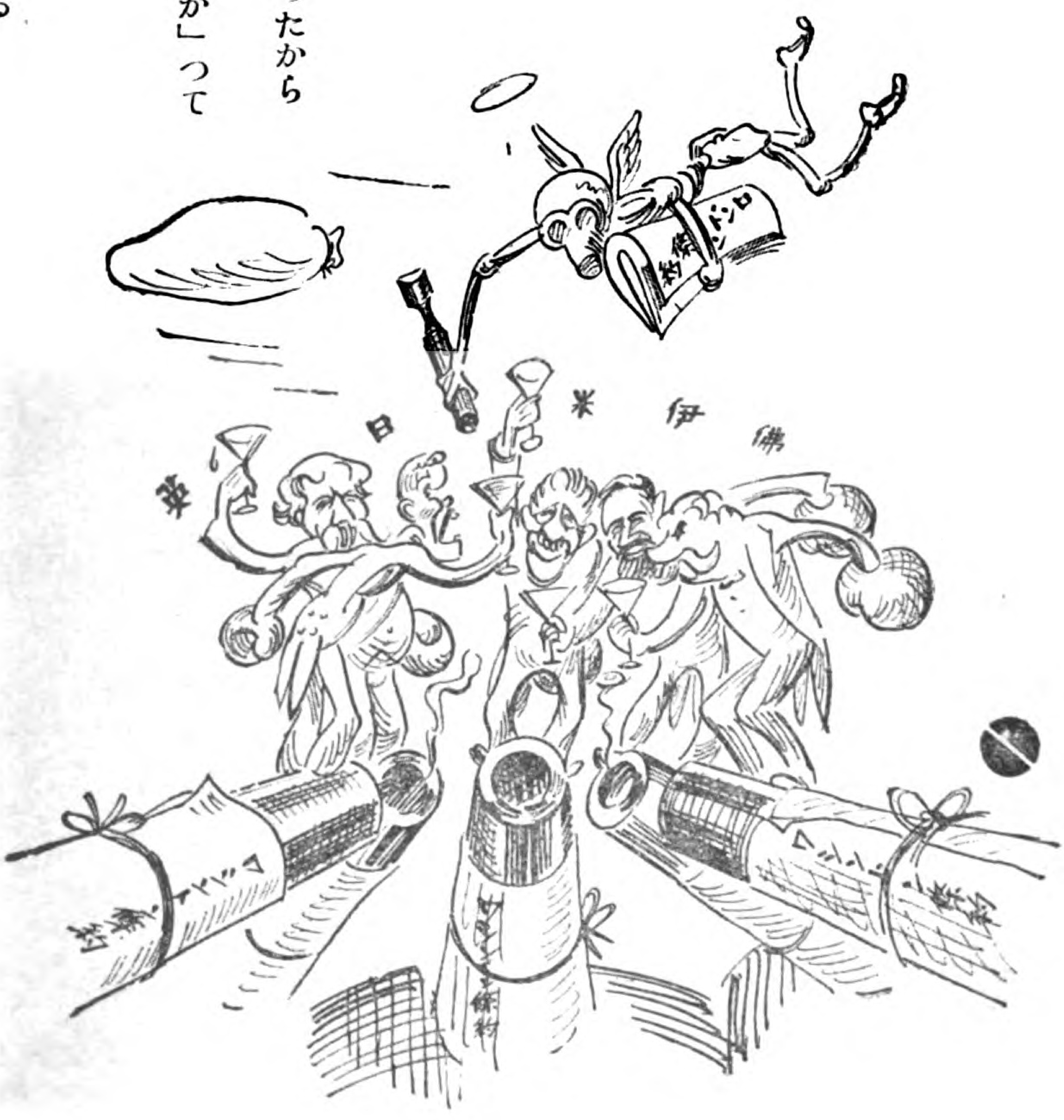
柳瀨正夢

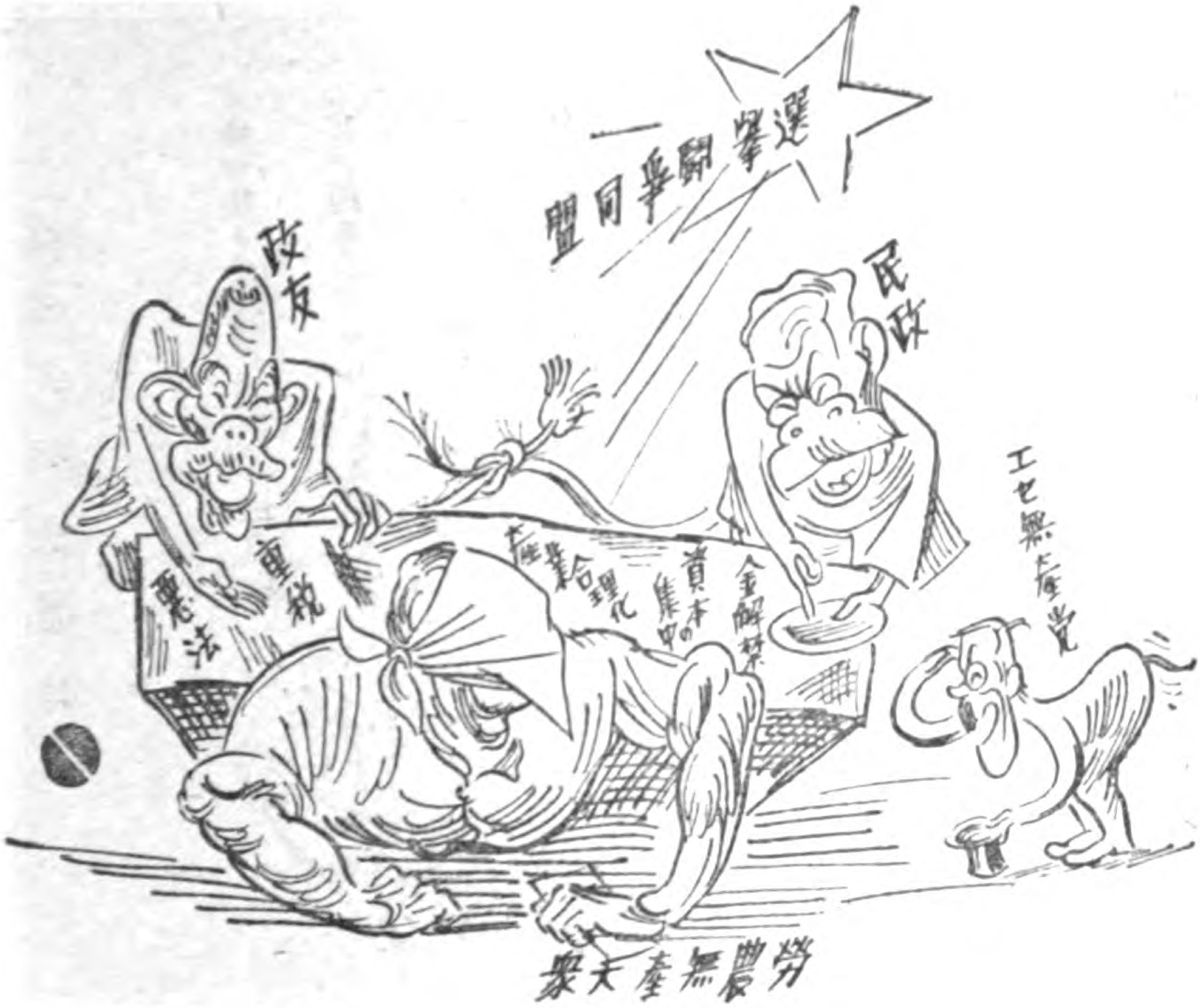
(一)エセ無産政黨の選擧鬪爭

こゝには、いくつかメダマを持つた
ノゾキメガネが仕掛けてある
左がオトナで右が子供
サアいらつしやい、いらつしやあい
なれ合ひ夫婦のブルヂョア新聞が
聲をからしムチをたゝいて客を呼んでる
カラクリ選擧のうしろではブルヂョアが
票數をしらべてホクソ笑む

(二)海軍々縮會議

軍縮會議とは何だ
お互の砲身をキヤウに包みかくす
紙つ切レを作るところだ
軍備は前へのびる、
ぢりぢりぎりぎり
そこでみなが先端へ集つた
「ワシントンの紙でかくしきれなくなつたから
ロンドンの紙でかくし合はうぢやないか」つて
カンパイ、ブラボー
各砲口からはじれつたいユゲが出てゐる



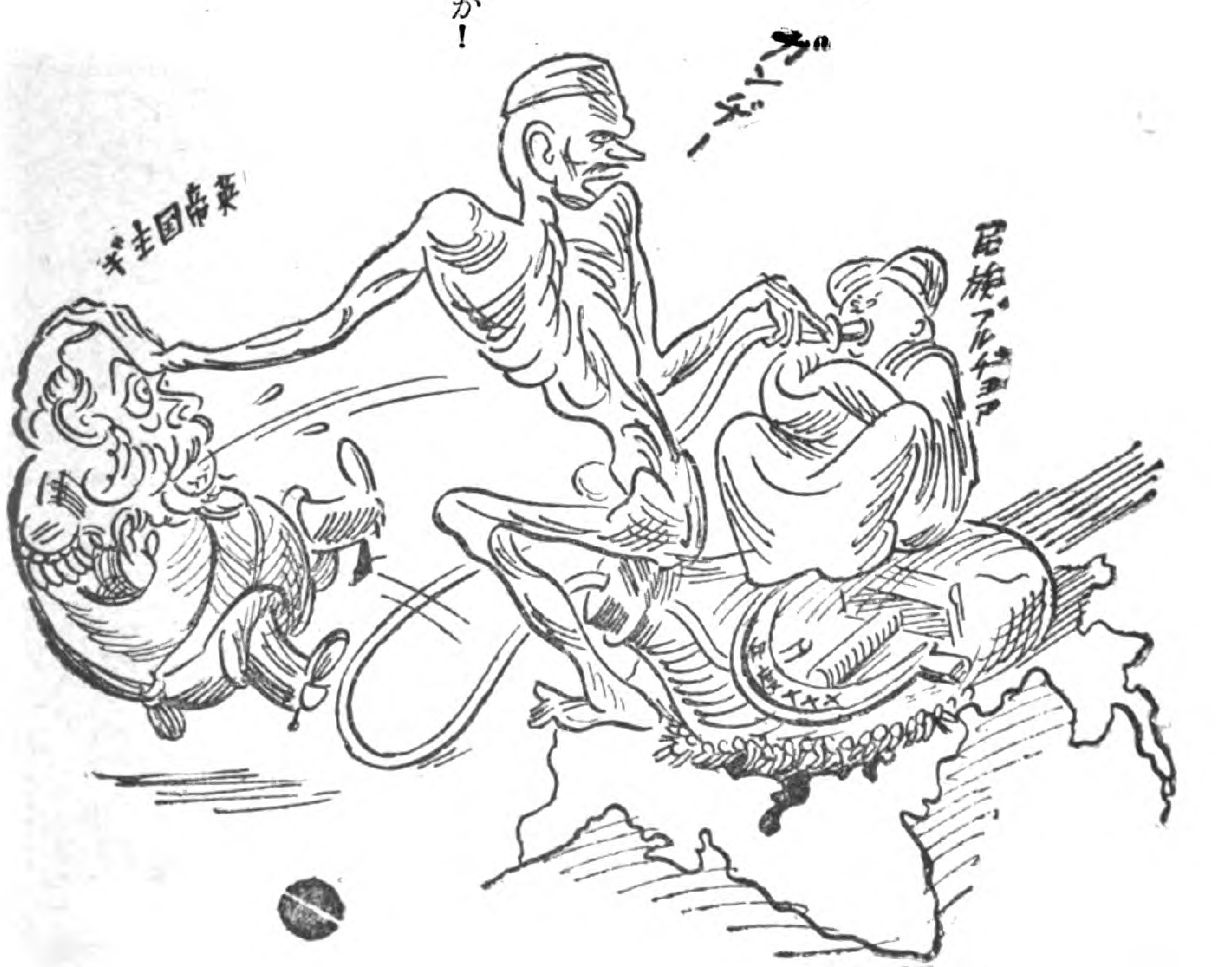


(三) 選擧闘爭同盟の出現

あらゆる自由をもぎとられてゐる
勞働者と農民のうえに
ギマン選擧の手をさしのべて
投票をかき集めてゐるブルヂョアの番頭をみよ!
奴等は日本大資本主義の强化に
骨身をくだいてゐる同じ穴のムヂナだ
「判つたか、ぢや早速やつつけろ!」
×き星のみがわれらの先方に
道をあけてくれる!
邪魔ものをはねつけろ!

(四)印度獨立運動

俺んちはこれこの通りだ骨と皮だ
もう吸ひつくしてしまつたんだから大概に乳口を
放して下され、放しておくれ、放しやあがれ！
國民會議、非協同、獨立運動
だが一體英帝國主義の搾取から奪還した乳口は
誰が吸ふといふのだ？　民族ブルヂヨアではないか！
骨までしやぶられる勞働者に何の變りもない
ガンヂーのギマンをいまこそあばけ！
さあ××の底に
全印度勞働者を救ふ象標が浮出してきた。





聽衆講堂に滿つ

第一回文藝講演會

昭和五年一月廿五日。

本社主催の第一回文藝講演會が、東京朝日新聞講堂で華々しく開催された。中央公論社としては處女的な企てであつたし、それにかゝる會合には全く或は滅多に出席されない顔觸の揃つたがために、聽衆は陸續としてつめかけ、定刻前すでに立錐の餘地なきまでに至つた。

一體、根を培はずして只余りに枝葉を繁らせることは、その木の枯れる恐れがある。が今までの中央公論社は、深厚な信用と長い歷史とをもつて相當根をはつて居たに係はらず、その枝葉を余りにきりつめて、繁るべきそれを矯めて居た嫌ひがあつた。その繁るべき必然さのうちの一葉がこの第一回文藝講演會となつて展開されたのである。力強い健かな反響のなきを得ない所以である。今後は政治經濟思想其他凡ゆる方面にわたる會合を續々開いて伸びゆく文化に貢獻してゆくであらう。

當日の講演內容の大要を左に摘記する。

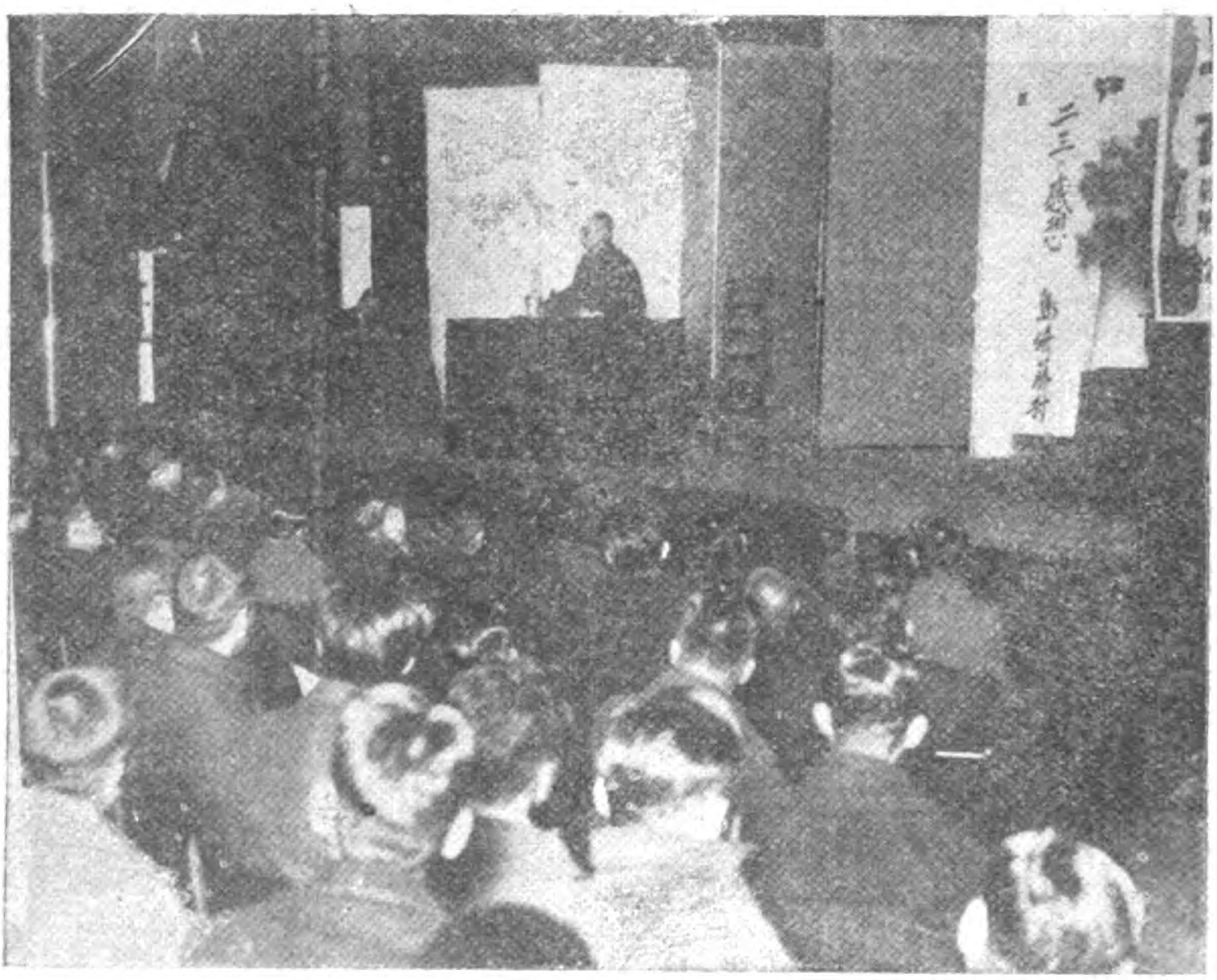
大宅壯一氏

大衆文學のすばらしい勃興それ自體は、それだけ文學の概念の變化を促して居る。歐洲大戰後の好景氣と普通教育の普及と婦人讀者層の急激な增加は文壇の權威として誇られた高級な藝術的作家よりも大衆文藝作家の存在を社會的にはつきりと印象づけた。更に又現代の樣に二大階級にはつきりと分た

れた資本主義社會では從來の個人主義的作品は排撃されて階級意識の作品が歡迎せられる樣になり、從つてより多くの智識と經驗と技術とを綜合した藝術樣式が文學上壓倒的な勢を示してきた。卽ち文學は何時の世にも新しい時代に於ける概念を有しその概念がだん〲成長して行くべきものである。現在のまゝの概念で將來の文學を規定するの誤りなるは事實が雄辯に之を物語つてゐる。

佐藤春夫氏

私はブルジョア作家であると共に爭鬪をも否定しない者である。相互扶助と生存競爭とは對蹠的に論ぜられるけれど前者は後者の變形だと思つてゐる。生存爭鬪の存する限りそこには征服と被征服とがあるが、その內容に於て無理に征服されるのと合理的に征服されのとの區別がたてられる。無理に征服された時そこに反抗の精神が生じ合理的に征服された時そこに征服された喜がある。此の點に於て私は封建時代並に宗教的勢力によつて支配された時代を讃美するものである。即ち當時支配者は權力と智力とを同時にもち合理的な征服被征服の形をとつて居たからである。私は本當の文明を生ずるためにはそこに智力をも立派な一の權力と考へる教養がなければならぬと思ふ、プロレタリア解放運動と云ふのもインテリゲンチアが權力と智力の別々になつた征服被征服の關係に不合理を感じて、この征服被征服の關係を、より合理的にする運動に外ならぬと私は思ふのである。



壇上は島崎藤村氏

十一谷義三郎氏

英國のジョンソンの著したものは形式一點張りの、繁文褥禮のものであつたが、彼は文學上に、ジョンソニアンといふ言葉を、つくつた程の勢力を持つて居た。その當時のツルゲネフの小說ルーヂンさへも、人間の眞情を閉塞した形式に捉はれたものであつたほどだ。英國のリチャーズのパミラも、小說とは思はれないものだが、大きな反響があつた。彼の第二作クラリス・ハローは、悲劇物で非常に社會を動かした。その後十年ル

ツソーは中世紀の戀物語を書いて大きな感動を與へたし、ゲーテがエルテルの悲しみを書いた時には、此作品を讀んで自殺した人がたくさんあつた。是らは其作品そのものに價値があるのではない。當時の社會狀態、時代相と判然考へて見ると朧氣ながら文學といふものゝもつてゐる力が偲ばれるのである。

島崎藤村氏

最近私共の生活には段々機械の力が及んでき、人間の生活も豐になつたが、然しそれが吾々の生活を犯すと却つて機械を忌避するやうになり機械にまけまいといふ風になつて來る。

×

私共が文學生活をする最初の時代に、――二十四位――友人北村透谷が死んだ。彼は貧しい苦しい生活を送つたもので、當時幸田氏が北海新聞に四十圓の俸給をとつてゐたのを彼はうらやんだものだ。當時文學者の生活は實に悲慘なもので、現在と比べると格段の相違がある。彼らは文學のみではとても食へず何にかの職業をもつてやつと生活したものである。

×



大阪驛頭の一行

日本の文學史を見ると三つの忘れられないものがある。第一は言文一致といふことであり、第二は俳界の世界を平淡な俗語で詩歌世界にしたことであり、第三は古典の同復といふことである。

近松秋江氏

近頃は無産派文藝が勃興して大變に勢力を有つて居るやうだ。私は既成文學者或はブルジョア作者と目されてゐるやうだが、私自身の文學上の立場は自由主義である。故に孰れを良いとも惡いともしない、長を採り短を捨てるのである。その標準はと云へば、――一體ある定まつた既成觀念或は主義主張は自由な觀察を妨げる、自由な觀察をするためには、洗練された常識を培ひ、その內容を豐富にしなければならない。つまり自由主義とはいゝ意味のオポチュニズムを含むもので、臨機應變の、自由な態度なのである。

秦豐吉氏

私の題は「馬と鳩」といふので、隨筆演說といつたものである。茲に云ふ「馬」は競馬や何かの馬ではなく荷役の馬のことであり、「鳩」といふのは食用鳩や何かでは

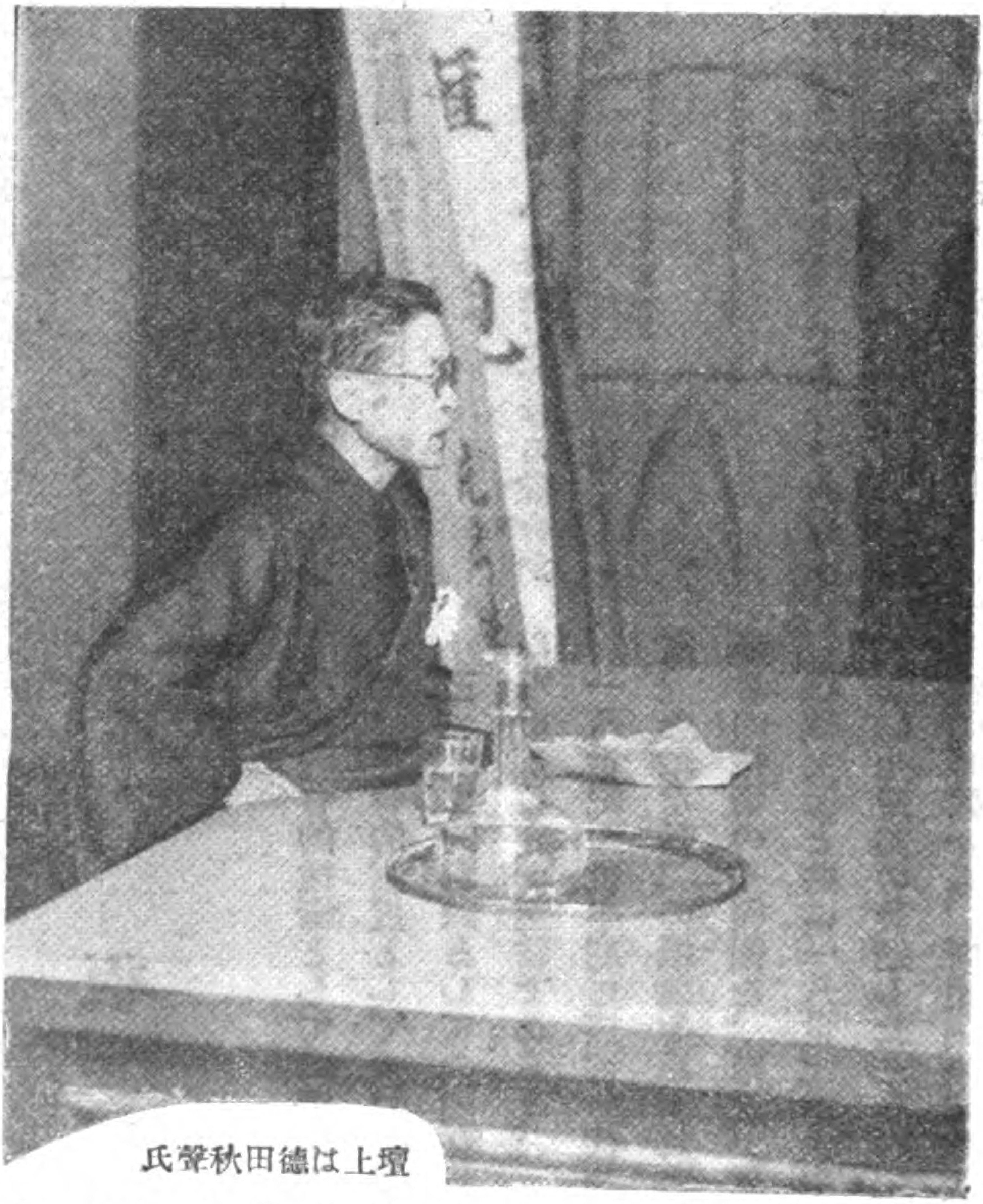
なく、傳書鳩や淺草の鳩のことであつて、謂はゞ都會のプロレタリアの動物としての馬と鳩のことである。

　馬は人間生活に極めて密接なもので殊に私等の少年時代の馬の記憶は可なり強い、鐵道馬車の頃には銀座街頭に編笠を被つた馬がブツ倒れてゐた事も珍らしくなかつた。現在我國の馬匹は三十六萬餘で貨物自動車數の一萬數千に比べてまだ／＼荷馬車時代である。鳩は、ベニスでは豆を與れる人の掌に止まつて喰べるが、淺草でも早くさうなつて欲しいものだ。鳩は戀愛と尠からぬ關係があつて、「可愛い〻鳩」とか「小さい鳩」とかの愛稱になるが、皆樣にも心當りはありませんか。

廣津和郎氏

　亦佐藤春夫氏と同じくインテリゲンツィヤに就てまとまつたことを言はんとされたのであつたが、時間が切迫して居たために甚だ殘念ながら自己の近狀に些さかふれたのみで降壇。

　最後にユウモラスな映畫「美人國二人行脚」で聽衆を喜ばせ、盛會裡に散解した時には夜の帷深く垂れこめて居た。


壇上は德田秋聲氏

　二十八日には更に大阪は朝日會館に於て同會を開催したのであつたが、同日降雨激甚なりしに係はらず、聽衆は講堂を埋むるの盛況を呈し、滿腔の熱意と喝采裡に閉會したのであつた。

　當日演壇に起つた人々は、德田秋聲、大宅壯一、上山草人、十一谷義三郎、廣津和郎、近松秋江の諸氏で、各々その得意とする立場にたつて熱辯を揮はれた。頁の都合により、左に德田氏の講演內容だけをごく簡單に記す。

德田秋聲氏

　科學がどんなに進歩しても、人間の魂は否定出來ない。唯物史觀に於いても藝術の特異性を認めてゐる。藝術は結局個人的なものだ。社會的傾向を現はす藝術は地圖のやうなものである。大衆性をもつことは特異性のなくなることだ。特殊性をもつてゐるのは智識階級の誇りである。智識階級はそれを失つてはならない。智識階級は藝術で民衆を指導する重要な役割をもつてゐるものである。

繪畫の貧困

板垣鷹穂

經濟的に富裕なる繪畫は、今や、文化史的に「貧困」しつつある。然し——經濟的に「貧困」なる繪畫には、建設的な「希望」が惠まれてゐる。

現代に於ける否定の中には、恐らく、將來に於ける綜合が内藏されてゐることであらう。

1

藝術史上の「現代」は、如何なる性格を持つてゐるであらうか？　現代藝術の多面的な相は、如何なる側面より觀察するとき、最も明確に見取ることが出來るであらうか？

現代に生きて現代を理解するためには、現代を過去と區別してゐる歷史的社會的基調の側面から、考察を進める他はない。そして、かゝる目的に役立つ社會的基調としては——

一、社會的技術としての機械文明
二、社會的制度としての資本主義
三、社會的意識としての階級思想

を求めることが至當であらう。

一八世紀の後半期に揺籃時代を追想し、一九世紀の後半期以來、急激な勃興の機運を惠まれた機械文明は、歐洲大戰以來、社會的技術の全範圍を、斷然、獨專してしまつた。

機械文明と共に一八世紀の後半期に目覺めた資本主義は、大工業的生産業の發達した一九世紀後半期以來膨脹し、歐洲大戰前後の時代から、所謂「後期の症狀」を呈しはじめた。

後期資本主義の時代は、ブルジョワジーの權力を極度に擴大したと共に、プロレタリアの擡頭を必然的に誘致した。一九世紀の後半期以來、漸次尖鋭化しつつあつた兩階級の對立は、歐洲

大戰後の現在に於いて、階級思想を極度に發達させた。

機械文明と資本主義と階級思想との聯關の間に、「現代」を特徴づけてゐる構造關係の基調が認められる——この、あまりに自明な解釋を出發點として、「現代から將來へ」、繪畫の進みつつある道の一つを、理解し豫想することが出來はしまいか？

2

造形藝術上の現代は、「建築と工藝と映畫との時代」だ——と、云はれる場合が折々ある。社會的技術としての機械文明、社會的制度としての資本主義が、この批評を裏書きしてゐることは斷るまでもない。何故ならば——

一、機械文明は、急速に發達しつつあるその技術によつて、機械的技術の適應し得る一切の藝術——建築と工藝と映畫——との生産過程を容易にし、且つ、新しい表現形式を可能にする。

二、資本主義は、その執務機官、生産機官、消費機官として、各種の建築——例へば、ビルディング、工場、映畫館——を、その大なる規模に於いて要求する。そして、その有望なる投資事業として、工藝と映畫との大量的生産を企圖する。

かくて、この三種の造形的藝術に於いては、一切の過去から區別された「繁榮期」が始まつた——

建築は、二世紀以來の無氣力な歴史主義を排除して、著しく建設的な合理主義を標榜しはじめた。鐵とグラスと電光との魅力が、大都會の生活をユトーピア化した。モンタージュの技法は——自動車と同じく——規格化された住宅建築の大量生産を約束した。

工藝は、機械そのものを自己の領域に包括しながら、同時に、自己の形態と機能とを、機械化しはじめた。小は煙草のライターから大は自動車の車體にまで、趣味に代表された階級性を測るための、精密な尺度を求めることが出來る。フォードは、職工の購買力を評價して、自動車工業の大量生産を徹底させつつある——が、それと同時に、ブルジョワ婦人の好みが、自動車のサロンを支配してゐる。

映畫は、現代工業の最も有望な投資事業の一つとなつた。ハリウッドにその製作工場を持ちニューヨークにその取引場を有するアメリカの映畫工業は、鐵と油とに次ぐ生産額を示してゐる。そして歐洲諸國は、如何にして、アメリカ映畫の輸入超過をふせぎ、如何にして國産奬勵の實を擧ぐべきかを苦心してゐる。

3

しかし繪畫は？――

社會的技術としての機械文明は、一枚の油繪に手工業的な名人氣質な技法を要求する代りに、大量生産を可能にする機械工業的な製版と印刷との技法を進歩させる。金屬とグラスとの冷めたく滑らかなマテリアルの味ひは、繪具を盛り上げたり複雜な色調を出したりするのに適當な油繪らしい形式よりは、より適確に版畫らしい形式に表現される。

社會的制度としての資本主義は、世間的な所謂「畫界」なるものの實權を、畫商の手中に握らせてしまつた。一七世紀の畫界が宮廷のための畫界であり、一八世紀の畫界が貴族のための畫界であり、一九世紀の畫界が市民のための畫界であつたように、現代の「畫界」なるものは「畫商のための畫界」である。

社會的意識としての階級思想は、繪畫の製作目的に對しても、題材に對しても、表現形式に對しても、新しい要求を呈出しはじめた。明暗の調和の柔かな空間の羽根蒲團に身を倚せる貴婦人の代りに、鐵骨の構成を背景とする菜葉服姿の勞働者が描かれはじめた。

4

パリの畫商達は今や、ブルボン王朝をめぐる貴族に代つた。

畫家と畫商との取引關係は、銀行とその支配下にある株式會社との關係に似てゐる。畫商の契約に反抗する畫家の作品は、市價の暴落を覺悟しなければならない。批評家は――サロンの審査員をも含めて――唯だ畫商の傀儡たるにすぎない。

パリの畫商達は、贅澤な家具屋である。畫商の得意先は、富裕な有產階級である。繪畫は――壁紙と同樣に――ブルジョワの住宅の裝飾的要素としてしか、その商品としての價値を持つてゐない。そして畫家は、かゝる商品の生產機關であるに他ならない。

資本主義の支配下に弄ばれつつある最も性格的な二つの藝術――アメリカ映畫とフランス繪畫――は、何れも、その商品としての弊害を曝露してゐる。自動車や婦人服の「新型」が、合理的な販賣政策の下に案出された非合理的形態を示してゐるように、畫商のために製作された繪畫もまた「繪畫」と云ふものの藝術的特質を無視した非合理的な着想から生れてゐる。

かくて、社會的制度としての資本主義の下に「貧困」しつつある繪畫は、その桎梏を打破して、新たなる建設に向はねばならぬ。社會的意識としての階級思想は、新しい繪畫の誘因となり、社會的技術としての機械文明は、新しい繪畫を可能にするであらう。

しかし、「新しい繪畫」とは？——

5

「新しい繪畫は工場から」——と云ふ標語を掲げて生れたプロレタリアリア・リアリズムの繪畫は、社會的意識としての階級思想に養はれつつある。社會的制度としての資本主義から、不健全にしか育てられなかつた繪畫は、此處に——少くとも一人の——良き指導者を見出すことが出來るであらう。

かゝる「希望」の實現を、理論的に論證する代りに、歷史的に類推するならば——

一、商業都市の繁榮期を彩つたルネサンスの餘光は、空虛で折衷的なアカデミスムに頽化した。その當時のイタリアに生れて、十七世紀繪畫の進むべき方向を指示した者は、「粗野」なリアリズムを標榜するカラワジオであつた。カンパニアの野にのたれ死した此の野人は、聖者達を岩乘な農民の姿に表現したばかりでなく、ローマやナポリの街辻に窺はれる平民の風俗畫まで描いた。

二、ブルボン王朝の宮廷文化が廢頽しきつた一八世紀の後半期に「畫界」を支配してゐたのは、薔薇色の肌の女を描くブーシェであつた。然し、眞にフランス繪畫のために基石を置く使命を與へられてゐたのは、第三階級の社會に沈潜し、第三階級の需用に應じて、第三階級を描いてゐたシャルダンであつた。「お神さん」と「鋼鍋」と「豚のカツレツ」とに、透徹したリアリズムの繪畫的表現を與へたシャルダンこそは、當代のフランスが所有してゐた最も偉大な畫家であつた。

三、「株屋の王」ルイ・フィリップの治下に、所謂「中庸主義」を具體化してゐた歷史畫家の群に對し、新興の反抗的建設を標榜したのは、二月革命後に活躍したリアリズムの中心作家クールベであつた。プルードンの親友であつた彼は、オルナンの路傍に「額に汗してパンを求むる」勞働者を描いてゐる。セーヌの岸邊に、酷使されてゐる日々の疲を休めてゐる職業婦人を描いてゐる。

6

歐洲大戰前後の畫界は何うか？——

フランスの畫家達は、新柄を提供する器用な——スピリットに富んだ——圖案家の群に代り、ドイツの畫家達は、その遺傳的な觀念過剩症に惱まされた。立體派、表現派、超現實派——その「思ひ付」を何處まで延長したところで、建設的使命のあ

る繪畫の生れる筈はない。

若干の、小市民的インテリゲンチャーらしい安價な提案が大衆向きの繪畫」として試みられつつあつた時代に、ブルジ・ワジーを否定する漫畫家としてのゲオルゲ・グロッスや、戰爭を呪咀する版畫家としてのケーテ・コルウィッツが生れた。これ等の畫家達は、——十八世紀の貴族社會に對するグレーズの「叱責」と同樣——支配階級に對する否定として存在する。

7

だが、「工場」から出發するプロレタリア・リアリズムにはもつと建設的な創造の希望がある。彼等の繪畫は——

一、鬪爭の過程に於いては、所謂「政治的價値＝藝術的價値」の豐かな額畫やポスターとして存在する。

二、鬪爭の終つた後に於いては、精巧なる版畫や記念的壁畫として存在するであらう。

三、その形式は、「繪畫」の藝術的特性に相應しい——廣義の——リアリズムであらう。

四、その技法には、——機械的にしても、手藝的にしても——彼等に先立つ時代から受け繼いだ一切のものが攝取されるであらう。

然し、繪畫の場合に於いても、機械は良き協力者となるであらう。何故ならば——若しも機械的技術の利用によつて精巧なる版畫化が可能になる場合には、一枚の原作は大量的に供給され得る。そして、「畫を賣る」と云ふことから生ずる一切の經濟的難問が解決される。かくて一般社會人は、彼等の「時代」を表現する正しい繪畫を、彼等の欲するままに享受することが出來る。

來るべき將來に於いては、社會人の一般教育は、進歩したトーキーによつて完全に普遍化されるであらう。音樂も演劇も、空間を超越して享受されるであらう。規格化された衛生的な住宅は、人々に其の本來の權利を與へるであらう。

——かくて繪畫もまた、現代の「貧困」を否定して、新なる綜合に向ふ時代を剏つことが出來よう。

附記。この稿は、拙著「機械と藝術との交流」中、第一〇〇頁以下の「機械は如何なる希望を培ひつゝあるか」に連關する。「最近發表する豫定である「工場建築」に關する稿と共に考へ合はせて戴ければ幸である。

大政友會論

馬場恒吾

政友會の系圖は自由黨――憲政黨――政友會であつて、黨首は板垣退助、伊藤博文、西園寺公望、原敬、高橋是清、田中義一、現在の犬養毅と云ふ順序になつてゐる。黨首の下の總支配人格を云へば星亨、横田千之助、鈴木喜三郎など、これは其外にも自から總支配人を以て任じたものは幾人もあらう。其政友會に大政友會の時と小政友會のときがある。原が總裁として大隈内閣の大正四年の總選擧で百八十四名から百四名に叩き落されたときは小政友會である。同じ原が總裁兼總理大臣として大正九年の總選擧でそれを二百八十一名にしたときは、大政友會である。大正十三年政友本黨の脱退に依り、續いて清浦内閣が行つた總選擧に依つて、百一名に減じたときは小政友會になつた。昭和三年田中義一内閣が行つた總選擧と、其後の他派から議員を勸誘することに依つてそれが二百四十二名の頭數を揃へたときは大政友會である。今回の總選擧に依つて、それが再び小政友會になるだらうと豫想される。

尤も小政友會必ずしも悲觀するに當らない。何となれば過去の事實に照らして見ても、清浦内閣の時、大政友會が分裂して小政友會になつた時、政友會は貴族院内閣に向つて猛烈果敢な戰を戰つた。其連續として、三派聯立内閣に參加して、普通選擧を法律にした。それは政友會の光輝ある歴史として傲るに足る。それが後に田中内閣の手に依つて、大政友會となつた。其大政友會になる經路、其大政友會が政權を握つてゐた間の事績は、政友會の黨員自身ですら、汗顏の至りに堪へぬと云ふ位だ。だから大政友會必ずしも傲るに足らず、小政友會必ずしも悲しむに足らず、要は政黨としての本質的價値に依つて判斷されねばならぬ。

政黨首領は何日でも一つのデレンマに直面してゐる。それは政黨を大きくするのを目的とするか、或は政策を實行するのを目的とするかである。此れがデレンマであると云ふ事に反對して、政策を實行する爲めには、黨を大きくせねばならぬと云ふ議論が出る。併しそれは議論であつて實際ではない。例へば政治家になるには金持ちになる必要がある、と云つて、金儲けから始める人がある。さうした人は大抵一生金儲け專門で終つて、終に政治家にはならずに了う。政策を行ふ爲めに、政黨を大きくすると云ふけれども、政黨を大きくする方はそれ專門、政策を行ふ方は又それ專門に終るが實際である。原敬、田中義一は政黨を大きくする方の專門、高橋是清、犬養毅は政策を行ふ方の專門と見てよい。

政黨々首は何故政黨を大きくする事に焦るか。それは政權を取り若しくは維持する事の必須條件であるからだ。昨年田中內閣は衆議院に於ける比較的多數を占めて、議會は無事に經過した。そして其後に潰れたのであるが、それが若し多數の與黨を有してゐなかつたならば、あのとき迄も政權を維持し得なかつたであらう。

大正十一年に高橋是清內閣は政友會二百八十名の絕對多數を占めて居りながら、內閣不統一の爲めに潰れた。其次に加藤友三郎、山本權兵衞、淸浦奎吾の三代の超然內閣が推薦された。當時の元老として西園寺公が何故かゝる超然內閣を推舉して、そして反對黨の憲政會に內閣を組織せしめなかつたかと云へば、他にも複雜な事情があつたにしても、其當時の憲政會が政友會の半數にも足らぬ少數であつた事が主もなる理由であつた。政友會內閣は倒れても、政友會はまた分裂せずに尨大な黨派として存在してゐた。之に比較して憲政會は餘りに少數である。それに政權を握らすのは徒らに平地に波瀾を起さす嫌ひがある。寧ろ第三者の內閣に依つて總選擧を行はしめ、其選擧の結果に依つて、政權の趣く所を定めた方がよいと云ふ考へであつた。尤も現在に於ては西園寺公の意見も政黨內閣說に全然なり切つて居るのであるが、其當時は餘りに少數なる憲政會に政權を握らす事を肯んじなかつた。超然內閣時代に於てすら少數黨では政權が握れない。まして政黨內閣時代になつては、政權を取る爲めには多數が絕對必要である。大政友會の存在する意義はここにある。

昨年田中內閣の潰れた直後に床次竹二郎氏の率ゆる新黨俱樂部は政友會に無條件に合同して大政友會を作り上げた。田中內閣が潰れると政權は反對黨の民政黨にすら／＼と移動した。それ迄は第三黨にも政權が來るかの如く思ひ違ひをしてゐた床次

は、最早政權を取る爲めに第三黨を維持する事が全然無意義である事を悟つた。それ故に彼れは無條件に政友會に合流して、政友會總裁を經由して總理大臣の椅子に到着せんと志ざしたのであつた。

田中義一が死んだ後に急に政友會總裁の後任を決める必要があつた。政友會の長老會議が赤坂の高橋是清邸に開かれた。其前に政友會幹部の意嚮は犬養老を總裁に推す事に大體決定してゐたが、鈴木喜三郎、床次竹二郎兩氏が快く同意するであらうか否かゞ疑問とされた。尤も鈴木は最初から犬養贊成を標榜してゐた。犬養を推す事が、軈て自分が總裁になる前提だと思つた。だから此長老會議の席上で床次が最初に犬養を推す事に口を切つたならば、如何に全般の空氣が和やかになるであらうと思はれた。鈴木、久原などは犬養贊成の說を述べた。床次は默つてゐる。最後迄默つてる樣子であつた。空氣が陰鬱になつて來た。それを見兼ねた岡崎邦輔が床次を呼び出して、今は大勢が犬養に決してゐる。こゝで一言贊成の意を表すべきだと云ふ事を耳打ちした。それで床次が最後に犬養推戴に贊成する意味を述べて、犬養說が決定した。

所で、床次に云はせると、床次は犬養總裁の推戴を眞先に主張すべき立場に居ない。床次は大正十三年政友會の過半を率ひて政友會を脫退したのである。それから五年間天下を漂流した。彼れは政界の巨頭であつても、政友會へは歸り新參である。それが政友會の總裁を決定する場所で、出しやばつて彼此れ云ふべき筋合のものでない。寧ろ舊來から政友會に居る人々の決定に追隨すべきものだと。蓋し頭はヌーボー式であるが、人に對する感情では極めて纖細な義理合を酌み分ける彼れとしてはさう考へたのが事實であらう。

かうして犬養が大政友會の總裁になつた。茲に大政友會が小政友會になる一轉機が含まれてゐたのである。犬養は多年政友會に反對して來た。たとへそれが純粹な反對ではなかつたにしても、犬養は多くの場合在野黨であり、政友會は政府與黨であつたが故に、彼れの政治的生涯の大部分は政友會に反對な立場に居つた。其立場から見た結果でもあらうが、彼れは政友會は團體は大きいけれども、一政策はない。だから、此黨を政策で引摺り廻はす事は容易であると見た。それ故に彼れは政友會總裁に推されると、直ちにそれを引き受けた。彼れは田中義一が殘した大政友會に依つて彼れの政策を行はんとするのである。

だが茲に矛盾が存在する。前にも云つた如く政黨を大きくすると、政策を行ふ事は別物である。黨が大きくなる爲には無主義、無節操で、只黨を大きくする事のみを考へるのがよく、な

まじつか、政策を行はんとすれば、黨が小さくなる許りである。だが犬養は黨は小さくなつても、政策を行ふ方を選んだ。今より二十年前、犬養等の屬する憲政本黨が改革派、非改革派の爭を起したとき、犬養は非改革派に屬してゐた。之に對して大石正己の改革派があつた。改革派の主張は憲政本黨が斯の如く多年悲境にあつてはやり切れない。それと云ふが八ヶ間敷い主義主張に囚はれ過ぎるからだ。寧ろ度量を大きくして、門戸を開放するに如かずと云ふ說であつた。其胸中には政權と妥協せんとする意志が動いてゐた。之に反對して犬養は何日迄も孤壘を守らんとする態度に出た。世間は彼れの壯烈なる意氣に同情した。併し彼れの黨派は段々に細つて行く許りであつた。日本の社會狀勢の罪であるかは知らぬが、事實としては黨は無主義で肥り、主義主張に忠實で細つた。犬養は二十年前の經驗を繰り返へさんとするかの如く、今日も亦政友會を政策で統御せんとする。

犬養が此道を選んだのは蓋し彼としては熟慮の結果だらう。それは大政友會を築き上げる道とは反對の方向に走るものだ。だが、大政友會を築き上げる道は、政黨としては正しき行き方ではなかつた。田中義一が絶對多數黨を作つた方法、原敬が二百八十名の代議士を得た方法は各〻當時の世間の非難を買つたのみならず、實際に於て立憲政治を紊かしめたと云つてよい。田中が昭和三年に行つた總選擧では政友會二一八、民政黨二一七、其差が僅かに一名、そして絶對過半數にはまだ十五名の不足があつた。彼れは其不足を補はんが爲めに、民政黨議員の誘拐を試みた。或は中立議員の懐柔、或は中立團體の組織やら、所謂政治を暗くする手段が講ぜられた。其陰險惡辣なる手段は今日漸次明るみに曝らけ出されつゝある。田中は政黨を大きくする爲めに手段方法を擇ぶ暇がなかつた。特別議會で内閣不信任案が通過すれば彼れは辭職する外はなかつた。現に選擧干涉に關する鈴木内相に對する不信任の決議が通過した爲めに、鈴木は辭職したのである。其余勢で内閣不信任案も通過しさうな形勢にあつた。政府は百方術策を弄して、不信任案を審議未了にした。そして其後一年間の命脈を保ち得た。かうした政戰は功名心と政權慾の旺盛な田中に取つては、興味深き戰爭であるかもしれぬが、それが政治を邪道に陷れた事實は見逃がす事が出來ない。

其前に大政友會を築き上げたのは原敬であつた。原敬は田中に比較すれば比較にならぬ程聰明であり、巧妙であつた。併し政黨を大きくする事を政治の第一義とした點では田中と同一系統に屬する。彼れは田中のやうに議員を個人々々に手馴けやう

とはしなかつた。堂々として總選擧で爭つて大政友會を作り上げんとした。初め大隈内閣の時に百四名に減したが、大正六年には寺内内閣に議會を解散させ、準與黨としての政友會は百六十名になつた。原が内閣を取つて後大正八年には政友會議員の選擧に便利な小選擧區制が作られ翌年には原内閣自身の手に依つて總選擧が行はれた。そして政友會は二百八十名の絕對多數になつた。其大政友會を築き上げる行き方は秩序を踏んで堂々たるものであつた。如何にも原らしく用意周到な計畫の下に作戰が運ばれてゐる。併しさうする爲めに多少の無理があつた。總選擧を爭ふ爲めに大なる資本金が必要であつた。原内閣時代に起つた種々なる利權に關する疑獄は何れも選擧費用に關聯してゐた。東京瓦斯問題、滿鐵問題、阿片事件などが其主もなるものであつた。原が東京驛で暗殺されたと云ふ報がもたらされたとき、西園寺公は

『とう／＼原もやられたか』

と云つた。恰も無理を押し通す原の最後を豫期してゐた如き樣子であつた。西園寺の性格は行雲流水、無理な事は嫌い過ぎる程嫌いな人である。だから西園寺の眼から見れば原の遣り方は餘りに無理に見へたのであらう。

原は政友會總裁として總選擧の費用を如何にして作つたか。

大正四年と六年の二度の總選擧の時は黨の幹部の持ち寄りと外部からの寄附で賄つた。尤も其時分は總選擧費用の總額と云つてもさほど大なる額ではなかつた。大正四年の總選擧の時に、原は黨幹部の一人に向つて

『何某には痛い目に遭はされた。六千圓取られたのだ』

と、或候補者の事を云つた。今では六千圓と云へば、普通の選擧費用の十分一にも足らぬ。大正四年にはそれが原敬を驚かしめるほどの大金であつたかと思ふと隔世の感がする。

大正九年の總選擧の時、原敬は總選擧費用を分擔する例の幹部に向つて、

『今度は君たちに心配を掛けずに濟みさうだ。費用は自分の手で始末が出來る』

と云つた。原が總裁であつたときは、候補者に渡す金は悉く原自身が分配した。それ故に誰れが幾許貰つたかは誰れも知るものがなかつた。大正九年の時は原は一人で選擧費用を賄つた。そしてそれが劃時代的に莫大な額に上つたと云はれる時であつた。それでも翌年原が死んだ時、政友會には尚七十萬圓の資金が殘つてゐた。原の手に依つて、如何に政友會の世帶が擴大されたかゞ判る。

原は二百八十名の大政友會を築き上げて、尙餘裕綽々たる樣

子をしてゐた。彼れは闘つても〳〵尚闘ひ足らぬと云ふ顔をした。この闘爭心の旺盛な事が、第三者から見れば憎々しく見へた。前に彼れが西園寺内閣の内務大臣をしてゐたとき、彼れは總選擧に臨んで西園寺に向つてかう云つた。

「今度は尾崎行雄、犬養毅、島田三郎をどうしても落選さす。これに全力を集注する積りだ」

と、西園寺はたしなめて

「そんな事は止めた方がよい。兎も角も彼等は議會の名士だ。落さうとしても中々落ちるものでない。又出て來た所ろで、實際の政治には大した害にはならぬ。畢竟するに口舌の雄ではないか。そんな落ちないものを落す事に骨を折るよりは、其力を外の所へと向けて、陣笠を澤山取る方が勝ちだ。議會は頭數だから、陣笠でも名士でも、一票は一票だ」

今日に於て政友會と云へば、誰れもが大政友會を聯想する。それは原敬が作り上げ、そして田中義一が下手に眞似た所の大政友會の傳統的印象である。此印象に好ましからぬ臭味が付いてゐる。如何なる方法に依つても政黨を大きくし、そして政權を握つて天下の威福を占領すると云ふ味ひである。政友會を大きくしたのも原敬であるが、又それを惡くしたのも原敬であると云へる。

だから今の總裁犬養が原敬の足跡を踏むか否かは大なる疑問である。否寧ろ、彼れは斷然として原敬の歩んだ道を避けるべく決心してゐると見られる。犬養が昨年の暮れに東北を遊説したとき、政友會の幹事長森恪氏は、黨員を喜ばす爲めだから、盛岡の原敬の墓に詣つて呉れと頼んだ。犬養は墓參は無意義だと云つて聞かなかつた。其代りに、政友會の大廣間に政友會歴代總裁の肖像が掲げてある。所ろで自由黨總理板垣の肖像は總裁室にあつて大廣間にない。犬養は板垣こそ政友會の始祖であると云つて、それを大廣間に掲げさした。自分で其位置迄指圖して板垣に對する敬意を表した。自由黨の昔を覺えてゐる政友會員は大に喜んだ。此一事を以てしても、犬養の趣味は原の政友會よりは、板垣の自由黨に傾いてゐる。

犬養も原に劣らぬ程の闘爭性を有つてゐる。だが原のは大刀を振りかざして外部に當ると云ふに比して、犬養のは外科醫のメスで内部の疾患を除くと云ふ風だ。彼れのメスは已に振はれつゝある。今年の休會明けの衆議院に於て、犬養は質問戰の陣頭に立つた。彼れは濱口首相に向つて、小橋文部大臣を推薦した責任を詰問した。そして過去にあつた罪障でも、其疑のあるものを大臣に奏請すべきものでないと云つた。かうした議論は兩刃の刀である。敵を傷けると共に味方をも傷ける。過去の履

歴に少しでも疵が付いてゐるものは、犬養に依つて大臣に推薦しないと宣告されたやうなものである。それは履歴に疵が付いてゐるもの丶みに限らない。苟くも大政友會の傳統的臭味を背負つてゐるものは、頭から冷水三斗を浴せられた感じを起す。

其爲めであるか、否かは知らぬが、政友會の有力な幹部である山本條太郎は今度は立候補さへしなかつた。立候補しなければ當分政治を休業する事になる。例令政友會から脱退するではないにしても、今迄のやうに熱心に働くものとは期待されない。

久原房之助氏は政友會の選擧費用を調達する役目を引き受けた。田中内閣の時は彼れは二百萬圓を調達したと聞く。今度は其何分一か。彼れは田中總裁が大政友會を築き上げる參謀長兼會計方であつた。犬養が大政友會の傳統的臭味に反對するとせば、久原が大臣に推薦さる丶機會も少ない。尤も久原と田中の關係は極度に複雜で深刻であつた。だから久原に田中時代ほどの熱がないと云つても、それは犬養のみの責任ではない。

尤も犬養を總裁にする事には久原は尠なからず功があつた。田中急死の日に、久原は田中の遺骸を守るべき身であるに關らず、卽日京都に向けて出發した。西園寺公を訪ねる爲めであつた。西園寺とどんな話しをしたか知らぬが、それ迄は犬養黨でなかつた彼れが京都から歸る途中から急に犬養總裁説を唱へ出した。世間は之れを見て西園寺が犬養贊成であらうと想像した。政友會内部に急に犬養説が盛んになつた。犬養を總裁にする大勢はかうして決せられたのである。尤も久原は森幹事長の入れ智惠でさうしたのだと云ふが、それはどちらにしても、久原が犬養を總裁にした功は認めなければならぬ。

政友會の内部鬪爭は有名なものである。犬養の鋭利なメスは患部を切斷する事に依つてそれを解決せんとする。切斷してどれ丈け殘るか。それは總選擧の結果如何に關らず、選擧後に擡頭して來る問題である。

過去も然らず、將來もさうではあるまいが、現在の狀勢に於ては、政黨を大きくするのは金、政黨を小さくするのは政策である。犬養は金に縁が薄くして政策を以て進まんとする。其政策とは何んなものであるか。

犬養は二月三日日比谷公會堂で演説したときに、庶民階級の生活を豐にする爲めに、五千萬圓程度の減税をする。其金を産み出す爲めに行政整理をする。軍備の經濟化をも行ふ。行政整理をした結果として、知識階級の失業者が出來ては困るから、それを收容する方法として官業を民業に移すか、或は半官半民の事業にすると云つた。

官業を民業に移すと云ふのは自由主義的政策である。田中義

一時代の政友會が封建的、帝國主義的色彩が强かつたに對して、犬養の自由主義的色彩が目立つ。寧ろ武藤山治氏の主張と似通つて來た事が其特色である。

武藤山治其他交詢社の連中は、同じ慶應義塾出身の先輩政治家犬養毅と尾崎行雄の爲めに選擧資金募集の運動を起した。兩人共に貧乏である。だから選擧資金を寄付したい、犬養と尾崎にいくら宛分配するかと云ふ事は發起人に一委して吳れと云ふのである。尾崎は一本立ちで立候補してゐる。其運動費だつて大びした金は要らない。だから大部分は政友會總裁としての犬養の所に行くであらう。或は武藤山治自身も犬養と一緒になるべき運命にあるのではないか。さうなれば犬養が總理大臣になるときは、武藤も入閣出來るであらう。

武藤の政治的意見は英國のマンチエスター派の自由主義に立脚してゐて、意見其ものとしては尊敬に値するものがある。だがそれは自由主義の長所と短所を有つてゐる。現代の如く國家權力が大きくなり、産業の制度が全國的になりつゝある世の中に於て、自由競爭に立脚する經濟學說は晝間の行燈の如き感じを與へる。日本の社會が西洋のそれに比較して後れてゐる事は事實であつても、日本の資本家は西洋のそれに劣らぬほど庶民階級を壓迫する方法を知つてゐる。自由主義の經濟組織の爲めに、日本にも尨大な無産階級が出來上つた。だから一般民衆は自由主義を視て、あれは敵の經濟學だと相場を決めて了つた。武藤山治の個々の意見に傾聽すべきものがあつても、彼れの實業同志會が振はなかつた原因が其所にあつた。

犬養が久原、山条から武藤の方へ移つて行くのは、大政友會が小政友會に移り行く當然の途である。それが惡るいと云ふのではない。徒らに頭數を集める政友會よりは、何んな政策でも政策を行はんとする政友會の方がよい。だが、此移動が犬養自身が期待するほど世間が喝采すると思つたらそれは間違ひである。庶民階級から見れば久原も武藤も同じく資本家である。一方には銅山の臭味が付いて居り、一方には紡績の綿屑が付いて居ると云ふ丈けの差である。資本家の指揮命令に從ふ政黨はそれが大政友會であらうが、小政友會であらうが、乃至は民政黨であらうが、それは決して庶民階級の友達ではない。否寧ろ彼等は庶民階級を搾取した金で養はれてゐるのだから、彼等の使命も亦庶民階級を搾取する以外の何物でもない。今の庶民階級はハツキリと此事實を認識してゐる。だから大政友會が小政友會になり、小政友會が遂に英國の自由黨の運命を辿ることを、吾々は冷かに、そして微笑しつゝ眺めるのである。

古書賣買のお取次

主として地方在住の愛讀者諸氏の御便宜を計る目的で代理部の中に「古書案內」係を特設してありますから、どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。

古本御購入のお取次はもとより、御賣却希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次を致します。

お問合せだけで御返事致しかねる樣な種類のものならば、一應御送附下されば早速市內一流の專門家に照して正確迅速に評價してお返事を差上ます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。

B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。

C、納品は着金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後着金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知置き下さる樣願ひます。

D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、汚損の程度等詳細にお書添へを願ひます。但古文書、錦繪等の如きは、現品を拜見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。

E、御紹介の宛名は、「中央公論社代理部古書案內係」と明記して下さい

ズボン吊兼用
保健整形帯

サツポーター

(一)ズボンを腰で輕快に釣り支へます。

ズボン吊の如く肩の凝りや、胸脊の壓迫がなく、ゆるやかな氣分で常に居られます。

(二)姿勢を正しく、スタイルを端正に整へます。

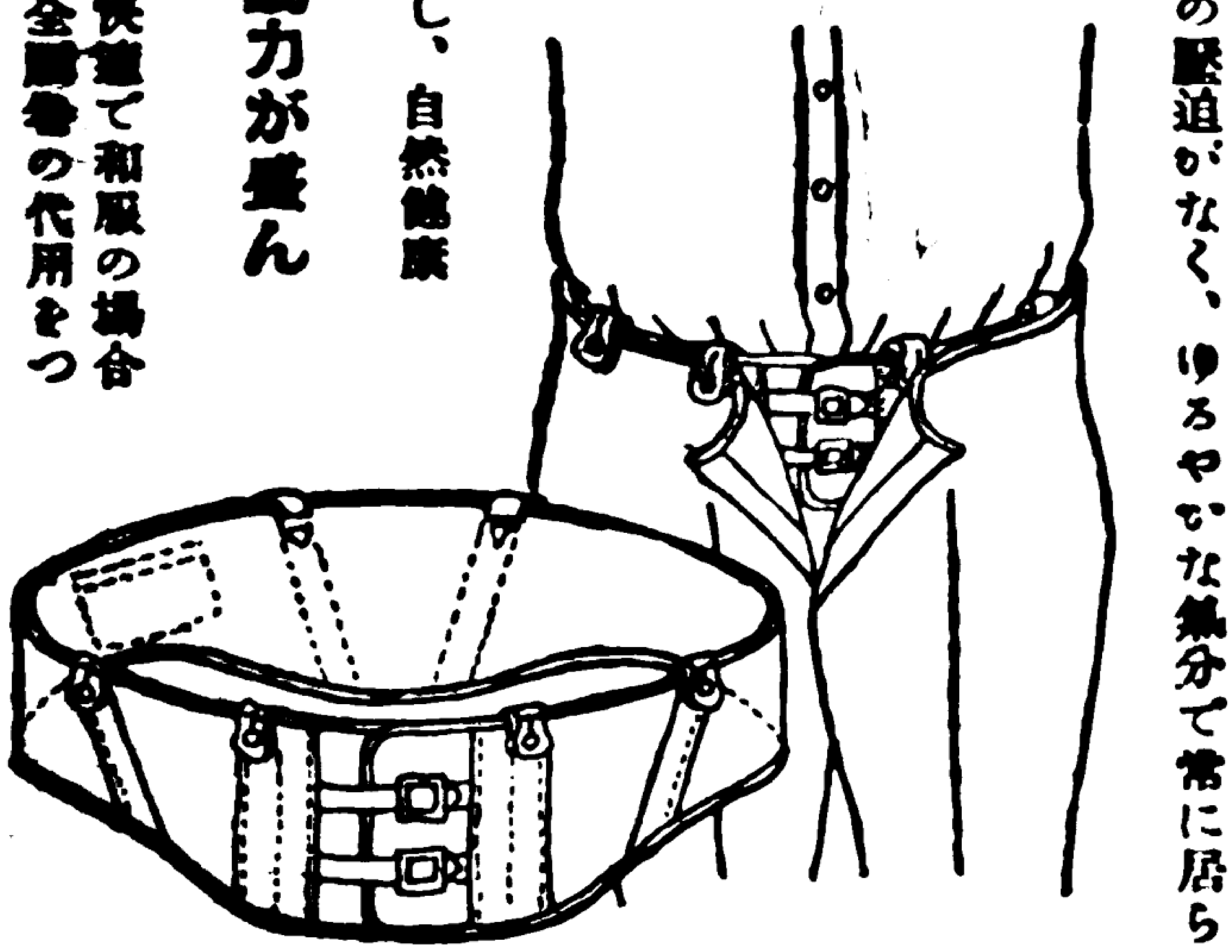
座臥動作は自由で、姿をスラリと見せ、前屈みの人も姿勢の正しい習慣となります。

(三)胃の下垂を防ぎ、腸を保護し、腹力を強めます。

疲勞を和らげ、神經過敏に陥る事を防ぎ諸種の病弱の原因を輕減し、自然健康を増進します。

(四)執務も活歩も愉快に、活動力が盛んになります。

下腹、腰骨、脊柱等のシマリ工合快適で和服の場合にもよく、殊に旅行外泊の際は安全腹巻の代用をつとめます。



(特大)周圍　鯨二尺七寸中心　(大)二尺四寸中心　(中)二尺一寸五分中心　(小)一尺九寸中心

A純毛ネル地三圓八十錢　B混毛ネル地三圓二十錢　C麻地一重二圓五十錢

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

◆御注文には引き締めた腹廻り寸法をお報らせ下さい。

經濟と實用を兼ねた

替ズボン

地方在住の方々のために、最も經濟的實用的な替ズボンを左記の特價で提供致します。

上等黒セル	五圓五十五錢
優等黒絹セル(甲斐絹膝裏附)	六圓七十錢
霜降・黒メルトン	四圓八十錢
上等ウーステッド	五圓六十五錢
黒サージ	四圓八十錢
上等黒キージ(甲斐絹膝裏附)	六圓八十五錢
優等黒サージ(甲斐絹膝裏附)	七圓八十錢

寸法	腹廻	股下
大	鯨 約二・五尺	約一・九尺
中	二・三尺	一・八尺
小	二・二尺	一・七尺

御註文には必ず大中小の御指定を願ます。

送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢



◇從來の極端な流行から脱して、一番紳士的な、而も明るい感じの洋服を左の廉價で調製致します。

◇先づ生地見本を請求して、代理部考案の用紙に寸法を書入れて送れば、思ひ通りの型思ふ通りの寸法の服が、座りながらに得られる譯です。

◇お持合せの服をお送りになれば、その通りの大きさの服も作ります。

◇特に裁縫の入念と、品質の確實な事は、代理部で責任を持つもの丈に、必ず御滿足を得られます。

◇見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添付ノ事。

洋服注文は代理部へ



【春着】

背廣服　F　三十八圓　G　四十五圓　H　五十五圓

オーバ　I　六十圓　J　七十圓

◇洋服の生地見本は、御承知の通り種類が多く全部取揃へる事は、經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品例へば「Aノ背廣」「Bノオーバ」と云ふ風にお指定の上お年齡をお申聞け願ひます。

◇代理部では御指定の種類のお年齡向なものを見立てゝ、明確な圖入りの寸法書をお送りしますから、これに各部分のお寸法を記載してお送り下されば、約二週間で居ながらにしてシックリと體に合つた洋服がお手に入る譯でございます。

中央公論社代理部

振替東京七八四七五番

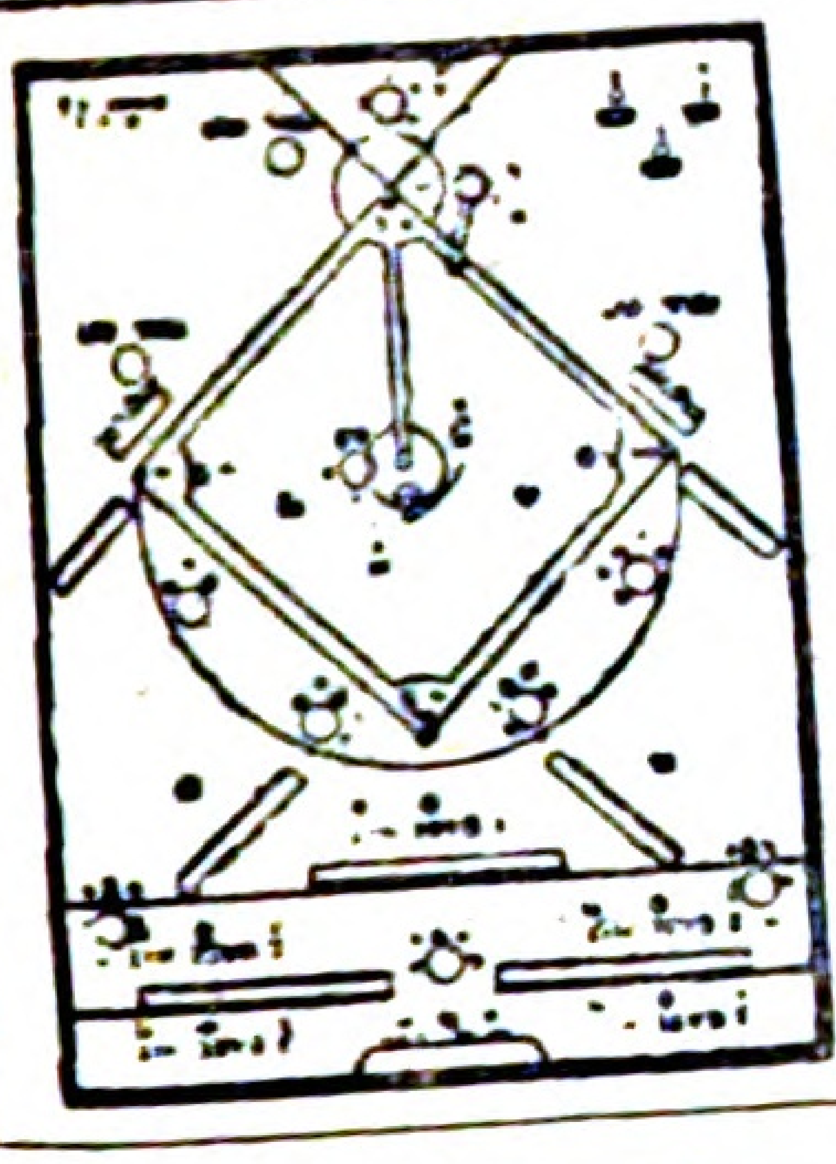
アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝る國産第一の優秀品です。

定價 三圓五十錢 四圓 四圓五十錢
(回轉吸入式) 三圓五十錢
送料 内地 十八錢 領土 四十五錢

誰にも愉快な

野球競技盤



約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのが、この高級式野球競技盤です。

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に出す事が出來、打手も亦選手がボックスに立つた時以上の緊張した氣分で、バットの振り方で美事本壘打を飛ばす事も出來れば油斷をすれば投手に好く計られて、三振「アウト」にされて了ひます。實戰に臨む人はもとより、野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすすめ致します。

定價 小型 一圓三十錢
中型 三圓八十錢
送料 東京市内十二錢、内地小型は十八錢、中型は二十七錢、領土小型は、四十五錢、中型は五十五錢

浩壯

(無臭ニンニク錠)

ニンニクの效力は世人のよく知る所、然しその臭氣は十人が九人まで嫌やがる。效力は認めるが臭むのは嫌や、服み度いが服めないと云ふ人は、此の**ニンニク**錠浩壯をお服用下さい。

ニンニクの原質をそのまゝ用ひながら數種の高貴藥によつて、服後口中に臭氣を殘さない事が本劑の特長です。

肺結核、肋膜炎、氣管枝カタル、喘息胃腸弱、神經衰弱、貧血症及蛔蟲條蟲の驅除等には驚く程の效果を示します。

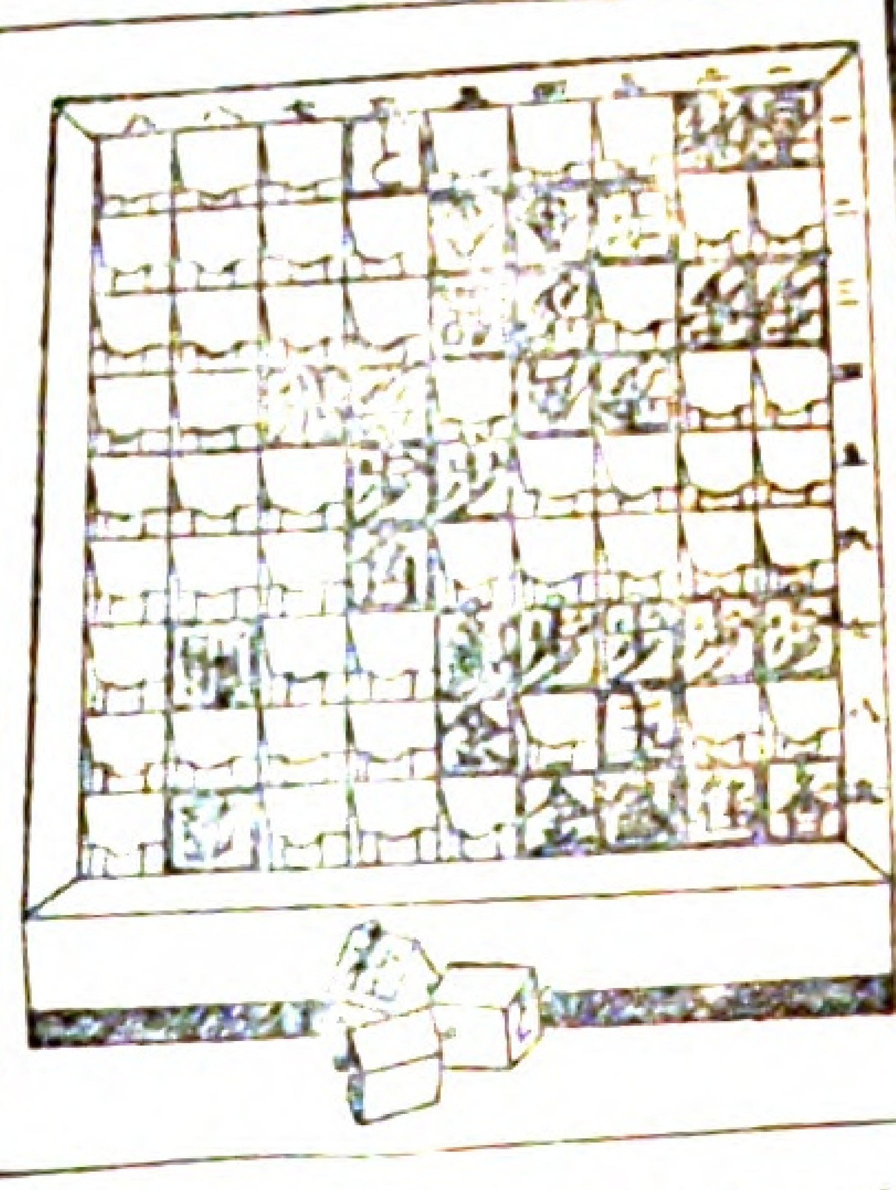
定價 十日分 一圓 三十五日分 五圓
送料 東京市内十二錢 内地 十八錢
領土 四十五錢

最小型將棊盤

縱三寸七分橫三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一個一個磁針が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしい程のものです。

駒は標準文字を用ひ、盤には縱橫に數字が記されてありますから、新聞を見たからの研究には一層便利です。



其の繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價(駒全部附) 一圓八十錢
送料 東京市内十二錢、内地十八錢
領土 四十五錢

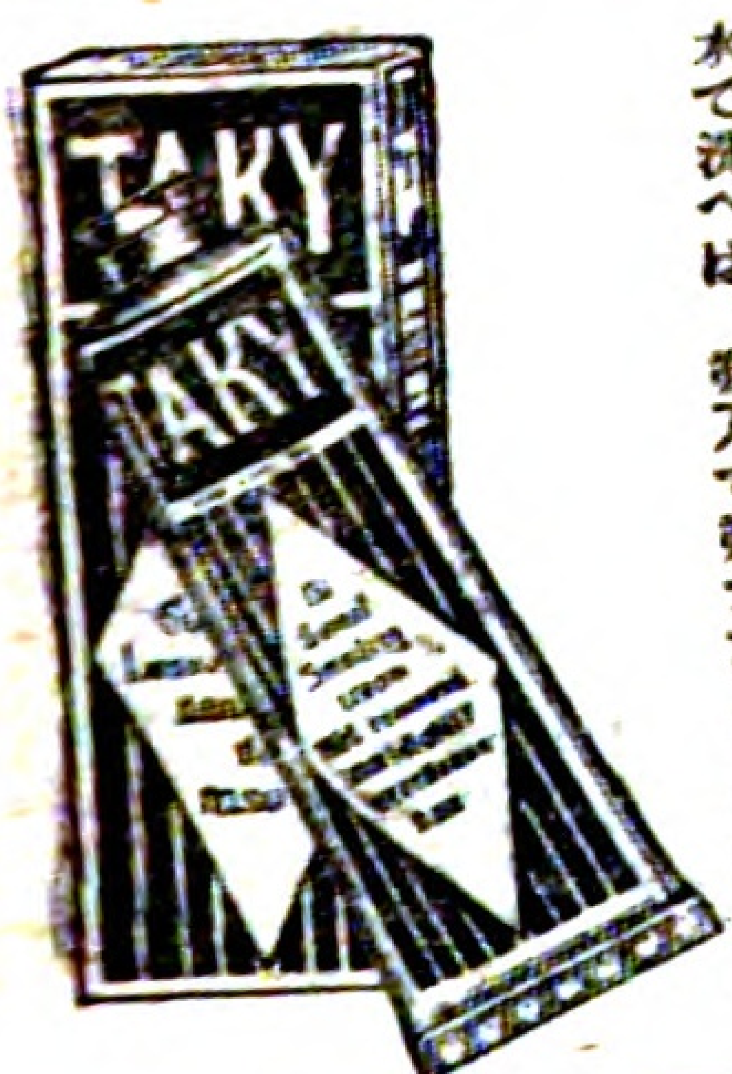
除毛劑タキー

顔に危險な剃刀を用ふる時代は過ぎました。このタキーは、手足、腋の下、襟髭等任意の所に塗つて五分乃至十分後に水で洗へば、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかりと除毛する事が出來ます。

これを何回か繰返へして使用する間に次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂には全く發生しなくなつてしまい、又腋臭を除く效果があります。

皮膚に害はないかと云ふ問合せをよく受けますが、一個毎に添附の說明書に反した使用法をせざる限り、全く無害で效果は一層確實です。

定價(マスクリーム付)二圓二十錢
送料 東京市内十二錢 内地十八錢
領土 四十五錢



新發明の産兒調節器

獨逸製オクルサトルは、海綿狀纖維質の部分と絕對に水液の通過を妨げるゴム障壁と把柄から成つてゐる新發明の産兒調節器です。

このオクルサトルに添附の殺菌用錠劑を挿入して使用すれば、錠劑は内部で溶解してカーボニックホームを形成致します。この泡は隙間なく擴り、細菌はみな殺されて了ふもので、オクルサトルの海綿纖維部分はこの殺菌錠溶液を吸收して約一ケ月間保存いたします。

オクルサトルは、非常に簡單で且巧妙に工夫されてをり、實際使用中でも本人自身氣が附きません。これは永久的使用に堪へるものですから、二回目からの御註文のために、別に錠劑だけが用意されてあります。

一度お產した人までは 〇番
三度お產した人までは 一番
四度以上の人は、二番を使用
定價(錠劑十二錠附) 六圓
錠劑のみ十二錠 二圓
送料東京市内十二錢 内地十八錢
領土 四十五錢。

新著月評

西田幾多郎著
一般者の自覺的體系

三木清

私は先づ著者の健康を祝する。いはゆる中・堅どころが殆ど無活動であるといつてよいわが哲學界に於て、西田博士が壯者をもなほ恥ぢしめるに足る精力をもつて、絶え間なくその思索的及び著述的活動を續けられつつあるといふことは、たしかに一の驚異である。

この書は前著『働くものから見るものへ』以後ほぼ二年間に於ける博士の諸勞作から成つてゐる。その表題の示す如く、博士はこの前者に於てフイヒテ的な主意主義から一種の直觀主義に轉ぜられた。今度の書物はこの到達された直觀主義の立場に立つてゐる。尤も或る種の直觀主義は博士に於て初めてのものでなく、却つてその最初の著作以來絶えず存在してゐた。しかしそのときの直觀はいはゆる主客合一の直觀であり、且つそれは働くもの、從つてまた意志的なものの意味に解されてゐた。しかるに今博士の捉へられる直觀は、有るもの、働くものの凡てを自ら無にして、自己のうちに自己を映すものの影と見るが如き直觀である。

この書にいふ一般者とは如何なるものであらうか。普通に一般者と考へられてゐるものは、もとよりそれについて述語せられるところの主語的有ともなるが、しかしそれはまた他の述語ともなるものである。アリストテレスは主語となつて決して述語とはならぬ個物が判斷的知識の根柢となると考へた。しかるに西田博士によれば、苟も主語的なものが主語として述語可能と見られる限り、それは一般的なものによつて限定されたものと云はざるを得ないから、個物と雖もそれが主語と考へられる限り、なほ且つ一般者によつて限定されたものと見られねばならぬ。このやうな主語となつて決して述語とはならぬ個物をも包みこれを限定する一般者がこの書の根本概念である。このものは普通にいふ一般者から區別されて、博士によつて超越的述語面とも場所とも呼ばれてゐる。博士に於ても判斷は一般者の自己限定であるが、この一般者はなんらの意味に於ても主語的なもの、對象的なものではない。そしてまた博士に從へば、自覺といふのは場所が自己自身の中に自己を限定するといふことにほかならないから、論理の形式とは同一である。自覺的なものは論理的である。このやうな出發點をとつて博士はその「述語的論理主義」ともいはれる體系を極めて執拗なる思索によつて展開されてゐる。

この書を特色づけるもののひとつはギリシア的な論理の思想と近代の自覺の思想との結合であると思はれる。アリストテレスに於てもイデア的有とロゴスとは關係して考へられてゐたが、しかし兩者の眞の結合はなほ存しなかつた。カントに始まる自覺の思想は兩者の結合を可能ならしめるやうであるけれども、その主意主義的、構成主義的傾向は、イデアを單なる形式に墮せしめる恐がある。博

士は單に有と見られたイデアを自覺的にし、自覺の形式を論理の根本的形式と考へることによつてイデアとロゴスとの結合を企てられる。しかし眞に自覺的なものはもはや有ではなく、また有に對する無でもない。それは無にして有を限定するものでなければならぬ。そこには形あるものは形なきものの影ともいふべき趣がある。かくて博士はイデア即ち形相を有としたギリシア的な、そして一般にヨーロッパ的な考へ方から轉じて形なきものの形を見、聲なきものの聲を聞くといふ東洋的な境地を哲學的に展開されるに到つた。まことに清澄な世界がここに現はれる。

この著者に對して不遜な言葉を述べることが許されるならば、私はこの紹介のついでに次のことを云つておかう。先著『自覺に於ける直觀と反省』の問題は價値と存在との結合であつた。このとき存在は主として事實、即ち經驗的な存在を意味した。感覺や經驗の問題がそこでは著者の思索を絶えず迫つてゐたのである。しかるに『一般者の自覺的體系』に於ては、その出發點がアリストテレス的な論理學であり、概念的、判斷的知識であることに相應して、存在は主としてイデア的有として取扱はれてゐる。これはまた著者が先著に於ては主として經驗的自然科學に結びつく新カント學派に、しかるに今度の書物では主として論理的科學に結びつく現象學派に、その研究を關係させられてゐることにも相應するであらう。そこで我々は著者が新たに到達された立場から振り返つて、先著に於て問題にされたが如き、事實や經驗や感覺等の問題について、再びこの新たなる立場からその深邃なる解明を與へられることを希望したい。ともあれ、かくの如き大著を、その量に於てのみならず、却つて更に多くその質に於て、有するに到つたことは、わが學界の喜びであり誇でなければならぬ。著者の愈々健祥ならんことを祈るものは私のみではないであらう。

（菊判、定價三・八〇、岩波書店）

一九三〇年版 日露年鑑

スバルウヰン

日露年鑑は種々の興味や思想を與へるものである。本書はかなりの目方のある厚い本で之で人の頭を毆りつければ、殺す事が出來る位である。印刷紙で出來た數斤の目方を有する此爆彈は冗談ではない。日露兩國の關係と云ふ專門的の問題に就いて斯んなに、大きな本が世に現はれて來ると云ふ事は相當の理由のあることと思ふ、然し夫々關係があるから斯ふ云ふ結果になると云ふ事は斷言する事は出來ない。なぜならば、ソヴエート聯邦では未だ斯ふ云ふ參考になる本を編纂する樣な試をした事がないから。然し日本で斯う云ふ本が出版される事は、もう二回目である事を見ると、斯ふ云ふ本は必要であると思はれる。編纂者はかゝる本を出版する時機を過まらないで出した、なぜならば社會がかゝる本を要求して居る事を認めたから、機を見る事の敏なりし事は編纂者の功としなければならぬ。此本は兩國の關係を問題としているから國際的の意味を有て居るのみならず兩國の關係を良くし且つ強固にすると云ふ判然としたる目的をもつて居る故此本は東洋の平和を維持し

以て全世界の平和を維持する爲に貢獻するところのものである。

此本は斯ふ云ふ重大なる使命を有て居る故、友人としての評價も親善的に誠意ある批評であらねばならぬ。何故ならば、かゝる批評に依て初めて次版を改良する事が出來るやう、本書は二部に分けてある、其の一部は五百餘頁からなつて居る日本語で、(一)日露關係の部、(二)露國の部である、他の一部は露語で書かれてあつて、二百頁位で主に、日露關係に就いて書いてある。斯う云ふ七百頁からある本の二部の分け方を見ると同一問題に就いて書かれてある、けれども同じものとは云へない。夫故兩國語を解するものゝ爲には非常に興味ある事である兩部共オリヂナルに見えるから、然し此本を讀んでゐるロシア人が、此本の全部の内容を知る事は出來ないから遺憾に思つて幸福なる日本人の事を羨ましく思つて居るであらう、然し内容の斯う云ふ不公平な配り方も第一日本人の爲に書はされたものであるから容赦する事が出來る。特にソヴエート聯邦の讀者はソヴエート聯邦に就いて之迄諸國で書かれた作り譚や何かと違つて正直な事が書いてあるから容す事が出來る。ソヴエート聯邦の眞相の宣傳と日露問題に就ての知識を一層廣める爲に其露文の二百頁をやめて其丈の日本文の頁を増して貰つても良いと思つてゐる。然しそれで此の本の中に書いてあるものにソヴエート讀者は總ての點に就て無條件で證明することは出來ない。然しながら此の本の一般の確實な事、客觀的な事、眞實な事に就いての努力を喜んで認める、兩國の間の商業の關係の爲に問題の公平的、文化的な提議化方が一番大事である點、其に依て相互的、共同の出來る方法を發見することが出來る。此の本の内容を各章別々に記する事は紙面がないから出來ない。別々に書く時は目次全體をうつさなければならない。然し常識ある讀者ならば本の表題を見て内容を知る事が出來る。日露の政治上經濟上文化上の問題に就いて知りたき場合には滿足なる答を得る事が出來る、然し若し編纂者が少し古き目次の代りに分類式のアルハヴエツト式索引を作つて長い記事を部分的な見出を入れて短い

新刊紹介

日本童話選集(童話作家協會編)　その第四輯、一九二九年版である。三十七作家の代表作を收め、日本童話界の最もよき展望を具現してゐる。(菊判四二二頁、定價二・〇〇、丸善株式會社)

明治維新史(服部之總著)　曾て「マルクス主義講座」に收められたもの。明治維新を以て王政復古とブルジョア革命との二過程の二重寫してあると云ふ見解にたち、そのマルキシズム的解明が企圖されて居る。附錄「絶對主義論」は本研究の方法論として意義がある。(四六判二三七頁、定價一・二〇、上野書店)

國策經濟を語る(井上準之助著)　藏相とし日銀總裁とし或は民間有力者としての著者が最近十年間の意見を收む。(四六判　三七五頁、定價一・五〇、實業之日本社)

プルウスト隨筆(堀田周一譯)　(四六判三一五頁、定價二・〇〇、彩雲堂)

軍縮會議と日本(本多熊太郎著)　(菊判一一九頁、定價、五〇、外交時報社)

結婚の破産(内山賢次譯)　アメリカ文壇に於ける俊鋭なマルキスト的批評家カルヴアートンのそれを譯せるもの。ネガチーブの意

段に分けたならば此の大きな本の内容の中から入用な問題を早く且つ容易に引く事が出來る。露國十二年史と云ふ記事を年月日の順の代りに別々の問題に依て書き直した方が良いと思ふ。

斯ふ云ふ一年間の出來事のカレンダーは差支ないが、十二年間の出來事のカレンダーは見出し難いから目的を達し難い。ソヴエート聯邦に就いての日本語で出來た出版物の目錄も同じく書き直さないと其目錄はたゞ其出版會社の廣告になつて其の眞の目的を達する事が出來ない。日露協會の會員名簿と云ふものは全く不用なもの丶やうである、此名簿を見て日露藝術協會の會員名簿はどう云ふ譯で載せてないかと云ふ質問が起る。其代りに日露現代名家の略傳の部を作つて貰ひたい、以上の協會會員名簿と色々な役所の役人の姓名を消すと餘程場所が出來る。

此本の露文は訂正すべき點が多くある、殊に日本語から飜譯された露語譯文。其内に勅令の露譯は言葉の使ひ方と云ひ、一般の文章と云ひ幾度讀んでも全く不明な點がある。

ロシア字で日本の言葉のあらはし方はきまつた規則によらない許りでなく、ロシア字の發音を、おかす、附屬の地圖は全く不完全なものであつて、地理學的の、ナンセンスである此地圖によると白ロシアはサイベリアの一部分で、ウクライナは、ウラルの地方にある等滑稽がある、斯う云ふ地圖は全く諒解出來ないものである、そして此の上等な有益な出版物の爲に汚點である。然し斯う云ふ缺點は大した問題にはならない、此本はどうしてもオリヂナルで且つ有益な斗りでなく非常に時代に應じた出版物である。

終りに臨んで、もう一點を示さうと思ふ普通斯う云ふ樣な本はたゞ參考の爲許りであつて讀書の爲のものではないが、然し本書は參考の必要に應ずると同時に讀みたい氣がする。本當を言つたら此本の位置は本棚の上だが度々デスクの上に現はれて來るのは特長であるが缺點である。讀者諸君にきめて貰ひたい。以上。

(四六倍判、七二八頁、定價一〇・〇〇、日露貿易通信社)

味に於て現代の尖端を切つて居る。(四六判二九〇頁、定價一・二〇、春秋社)

菊の小枝(和田きく子著) 歌集(四六判二四四頁、非賣品、鈴木赳武發行)

黑い女(高群逸枝著) 小說(四六判二二四頁、定價一・〇〇、解放社)

フィリップ全集(吉江喬松等譯) その第二卷(四六判四四八頁、定價一・七〇、新潮社)

單一無產政黨論(山川均著) (四六判一二六頁、定價・五〇、文藝戰線出版部)

明治初年の政治的農民一揆(川村榮太郎著) (四六判一四〇頁、定價・五〇、文藝戰線出版部)

受驗小說選集(藤森成吉編) 有益な試み(四六判三一一頁、定價・八五、考へ方研究社)

ストライキ宣言(白須孝輔著) 詩集(四六判七〇頁、定價・五〇、紅玉堂書店)

土に燃ゆる(寺神戶誠一著) 長編小說(四六判二四二頁、定價・八〇、全國農民藝術聯盟出版部)

素人藥用植物學(糸左近著) (四六判三二五頁、定價一・五〇、更新社)

判例を中心としたる普選法(奈良正路著) (菊判五五〇頁、定價四・〇〇、日本評論社)

ディルタイ論文集(栗林茂譯) (菊判一一八頁、定價一・三〇、丸善株式會社)

¥1.20

バレーには
トオキーの様な近代味がある

剃刀でもあり研器ともなる二様の精巧な機構が高速度に働いて感覺に新しい滿足を與へます

× × × ×

"VALET"
AutoStrop
Safety Razor

一枚の刄が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

B型 一三・五〇 以上各種
C型 一・二〇 一・七〇 三・三〇 四・八〇
替及利用ナイフ（刄一枚付）・八〇

販賣所 大百貨店著名洋物雜貨金物店等



取次 中央公論社代理部

Onoto the Pen

オノトの形態美と感覺美

オノトの形態はデリケートな近代人の審美感にピッタリさ來る手頃の大さ輕さである。インキの流出が巧みにペンの走りに伴ふから快よいテンポを以て朗らかに執筆が續けられる。

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆 七圓五拾錢以上
アテナ萬年筆 參圓五拾錢以上
萬年筆用アテナインキ 參拾五錢

送料各十八錢（カタログ進呈）



東京日本橋通

丸善株式會社

大阪 神戸 京都 名古屋
横濱 福岡 仙臺 札幌

東京＝神田・芝・三田・早稻田・丸ビル

早慶明の新陣容

河合君次

木々の若芽がすく〱とのびて彼岸櫻の蕾が柔らかくふくらんで來、ボールの音さへほがらかにさえて家の中にじつとしていられない氣候になつた。グランドの芝生の上には新聞紙を敷いて、終日練習を見てゐる人が日増しにふえて來る。

今年は極東オリンピツクが東京で開催され、六大學リーグの優勝チームが帝國を代表する事となつた。我が健兒の本懐である。

各校はそれ〲母校の榮譽にかけて猛練習を始めた。此の時にあたつて六大學リーグを代表する早慶明の新陣容について卑見をのべてみたい。

先づ近年の戰績から見れば昭和三年秋のリーグ戰には遠征から歸朝した慶應を加へて早明の三チームの爭覇戰があつた。明治は多大の期待を以て迎へられたが早大に決勝に敗れ慶大には連敗して了つた。四年春には明大が海外遠征を思ひ立ち米國から歐洲に旅行して内地では得難い幾多の經驗を得たことだらう、其間早慶は練習本位のシーズンを過して新選手の養成に努めた。明大留守軍は涙ぐましい迄の熱と力をもつて各大學と惡戰苦闘を續けた。遠征軍は歸朝後チームの組織完成を見ない内に中村安田兩投手の勇退手塚捕手の病氣不出場等があつて甚だ期待を裏切つた結果を見た。即ち立法帝の各チームに決勝戰をなし早慶には連敗した。然し最後に中村手塚兩君も出場し新人鬼塚君の活躍により早明戰には非常に面白味をそへたが不幸にして對法政の決勝戰には破れたので遂にAクラスよりBクラスに落ちる事になつた。

然らばB級の實力しかないかと云へば、明大は依然として早慶の一大敵國であると信ぜられる。此のチームは主軸に移動があつてもそれは案ずるに及ばない。かへつて新鮮味を加へて早慶の手に負へぬやうな大試合をなす事がある。このチームの本質は相手の強弱の見境ひなく戰ふ事である。明大はかつて大正十五年春一時に湯淺、梅田、横澤、谷澤、二出川、鶴田君の六選手を失つたに關らず早大を堂々と押し切つて決勝戰に大勝している。慶應には決戰戰に敗れたが試合は充分勝味のあるものであつた。運は勢に於てよく爲し得る場合がある。戰は時の勢であり運である。

昔から戸塚のフアンは良く言つた。『あの男は勢が良いからきつと選手になれる』と・・・

全國各地から蝟集して來た新人は其の技量でなく先づ勢即ち選手たる第一要素によつて詮衡されて數シーズンの後に初めてユニホームを着る事が出來た。而してユニホームを着た人が全部正選手として試合に出場する樣になつたかと云ふに眞の學生の代表には勢だけではなり得ない。やはり知能と人格とを具へなければならぬ。今日の如く中學時代の球歴によつて一躍選手になつたものは勢の詮衡を受けて居ないから調子に支配され易い。調子の良い時には華々しいが一度調子を失ふと恢復の見込が立たない。これを以て一校の代表者となす事が出來るや否やは明白である。

野球試合と云つても野球に對する技術だけ

で充分ではない。或は云ふかも知れぬ、運動は筋肉の運動である。野球の場面に現はれて來るプレーだけで充分ではないか。堂々たる肉塊が勇ましく躍動して世間を意識せざる如く見ゆるのも一つの魅力たるを首肯するが、若し選手が品格を具へなければ野球技に長じた曲藝師に似たものだ。神宮大會をみても學生と青年團の競技では同じ技量を持つたものでも大分趣に相違がある。

元來明治は何處迄もボールドネスなチームで勝つ、勝つ爲には何ものもない。攻めるといふことを以て知らず〳〵の中にチームウオークが出來る。且故このチームを束縛し型に入れ樣とする事は既に無理である。

慶應は自分の力を保つて最も骨を折らないで勝つには如何なる方策をもつてするか、敗けない爲には如何するかと常に考へつゝ進むのである。その爲打つ事よりも守ること、一つの機會を得たら如何にして敵手の弱點を衝くかと云ふ事を考えて來た。それをツレーニイング本位の練習のみ續けては無理が生ずるものと思はれる。野球を咀嚼し論究し此機會を理論化して見ようと野球を無理にしないから試合に執着力がある譯だ。即ち引く手を考へて押すチームなのだ。然し之は往々にして相手を愼に入れ過ぎて消極に陷ることがある。

早稻田の選手は平生から推してもつと動ける筈だのに意外だと思へられる場合が多い。然し之は選手が拙い故ではない。試合に對する熱意が選手を硬くする爲である。即ち早大の長所であり同時に又短所である。之は試合の經驗でだん〳〵補はれて行くものである。慶應は持つている力を充分發揮して打ち一寸した機會によく點を取ると感心させられる。即ち冷靜にゲームをして行くからだ。然し之は又慶大の强味であり同時に弱點である。

明治は非常に出足の早いチームである。然し之は全勝を目標としないからである。之に對して早慶は愼重に、呼吸を計つて之を受けて立つ自重を要する。即ち前者は前頭の氣輕さがあり後者は大關の格式を具へる苦るしさがある。

嘗て明大投手湯淺君は凄味ある速球を持つて居たし正確なコントロールも具へて偉大な投手であつたが其ウオーミイグアツプを見ると非常に荒い所があつた。嘗慶應の小野投手は練習中にアウトコーナーを狙つて九十八パーセントの正確さを示した事があると聞いた。湯淺君はストライクを投ずるに努力を要し、小野君はボールを投げるのに特に留意した。

打者は湯淺君に對してはストライクに注意すればよかつたのに小野君に對してはボールにも警戒を要した。兩君が同じやうな成績を擧げるにも前者は甚だ苦しみ後者は樂に投球した。速球曲球の完成に於ては並び稱せられた大投手であるが、投手としての偉力には斷した基本的相違がある。チームは集つて來た學生の本質によるから無理をしてはならない。以前の樣に中學生の思ひのまゝ學校を選んだ時代の氣分と今日の如く大學チームの刺戟勸誘に依つて入學したのと大いなる相違があらう。選手は野球部の選手の型といふよりも其學校の學生の型を充分に持つて居なければならない。然るに今日の如く野球部の存在が確立して來ると其學校の學生の氣風と云ふよりも其の野球部の氣風といふものがより明確になつて來る。かくては選手は野球部內の氣分に統一されて了つて學生らしい感激性もなくなり其强靭さがなくなる。河野氏をベンチに迎えて早大が大いなる强味を加へたといふ事は同氏が市岡氏とかなり變つた方面に造詣が深いからだ。選手は各自各樣の型を持ち縱から見ても橫から見ても醜くない樣に修養しなければならぬ。それはコーチ獨りの力

では出來る事ではない。選手自身の心掛けに俟たなければならぬ。昔は學生自身がチームの主體であつたから統一は充分でなかつたにしても學生の心持が旺溢して居た。然るに今日の如くコーチが專門化して來るとコーチャーはプレーヤーが自分と總ての點に於て合致する事を望むから選手が單一な型になつて來る、卽ちチームに强靱さがなくなつて來るのである。慶應にも明大にもそうした心持が生じ早大にもあつたのである。

選手は商科の學生のみであつてはならない政治科法科理科等各科の學生を包含して彼等の特徴を綜合して居なければならぬ又合宿生活は野球に必要なものと考へられて居るが決してさうではない。たゞ團體行動に對して時間的に經濟の立場から必要である。選手は野球によつて統一されないで各自各樣の主義主張によつて進み單に野球と云ふ趣味の點に於て一致すれば充分である。彼等の生活の全部を同じ軌道の上に置かうとするから氣持がくづれるのである。そして社會的に變形な運動家の型と云ふものが生じて來るのである。

コーチャーは選手の個性を充分に生かして使はればならぬ。早稻田が飛田氏時代に得た好記錄はすべて選手の個性が各々各樣にはつきりと現れていた事に起因するものである。

嘗て三宅氏は慶應のコーチ時代に今の早稻田は九人が九人獨自の形をした打擊をなし守備を爲すから恐ろしいと云つた。又小野君は飛田氏が不世出の名コーチだから選手がコーチの命令に叛く場合が一度もない故に最初のストライクを早大選手が打たなければ先づその日はウエーティングシステイムで來る、打てばヒツテイングシステイムで來ると考へて先づ間違はなかつたと云つてゐる、共に敬服すべき眞意を穿つた言葉である。

近頃は中學の名選手が入つて來たからポジションを與へようといふ。總て中學生の程度に於ては體格か氣力か練習かの何れかが優れて居れば中學界のスタープレーヤーとなる事が出來る。然れども大學で名選手となるのにはこの何れの點でも缺いてはならないのである。中學のプレーヤーが中學生としては光つて居つてもまだ完全ではない。もし其の缺點が技量であるならば補ふことが出來るが天性たる知力や體力(運動甚)殊に其の精神に至つては最早補ふ事は出來ない。卽ちポジションが空いたから學生の中から勝れた素材を探し出して其のポジションに相應しいプレーヤーを作るべきである。

今日の慶大は昔の慶大に比して試合を論じ試合を見る頭が少いのではないかと思ふ。

早稻田は今少し型でなく眞個の練習を勵み勢を鍛へ氣力を練る事だ。

明治は世事にとらはれず强い學生の意識で進むことだ。『早稻田大學』チームの主力である水上、水原、伊丹の戰士を失つた痛手は全く大きいものだ。然し冬期練習で山田投手の復活を聞く。彼の勝れた彈力ある體質は久し振りに見る偉材と信ずる。宮武君の重厚、水原君の輕快さは反面に投手としての缺點をともなふが山田君のは其缺陷を補ひ小野、竹内君に相通ずる眞に投手として好プレーヤーの素材である。不幸早老の感があつたが此の報を聞いて全く愉快に感じた。二壘の三原君は體格其彈力氣力何れから云つても得難い選手と信ずる。昨秋は外野を守り早慶第一回戰に出場したのみであるが今度二壘手として出場の機會を得た。同君を外野に出して打擊に專心させると面白い、今日の早大の外野中最も將來ある人であらう。然し元々内野で育つた人であるから内野手としても成功するものと思ふ。グランドのプレイ以外に良い素質を持つて居るやうだから水上君の後繼者として決して不足はあるまい。捕手の伊達君も體と云

ひ肩と云ひ伊丹君と比較にならぬ程勝れて居る。打擊にも凄みがある。相當な經驗もあるのだから期待して良いだらう。右翼の矢島君も左翼の佐藤君も今日を以て大成したとは思はれないが其感激性が必ず現在の位置を守るに充分であり精進すれば貫祿も自然具はるであらう。中堅の今井君は最初は其事實に於て大學選手たる事は至難に考へられた。然るに此人の大精神を知ると此人には眞の野球即ちプレー以外の野球を知つて貰ひたかつた。今日同君が現在の選手に通じての缺點を修練して居るからプレーヤーとして使はれると本當に味のあるプレーをするのである。不幸にして素質に惠まれないけれども斯の人は精神において選手の代表であり野球の眞實味を敎ゆる好箇の教材である。大の男の角力は一日見るよりも全場所を通じて星取表を見れば益々彼の偉大を肯定することが出來ると同じ譯である。矢島君の再起と今井君の進出は昨秋迄の左右兩翼の守備の缺陷を補つて來た。早稻田を出る者は一、三、五番とチームの主軸であるばかりである。實戰に於て常に眞の收穫を擧て勝利を完全にした人ばかりであるから大いに憂へる筈なのだが事實は大した影響でもなくなつて來た。伊達、西村、矢島、三原君がポジションの安定したのと相當の經驗があるので氣分がゆつたり來るので今迄の樣に一失策によりポジションを失ふといふ樣な不安が除かれて却つて好結果をもたらすものと考へる。

『慶大』加藤町田君二人の卒業で痛手の最も少いこのチームは山下君の一壘と外野手水原君の三壘と投手兼務は全く精神の不安定である。殊に宮武君を水原君に只投手一人を代へるのみなるに之が爲三谷君以下四ポジション五人の選手に異動ある事は誠に不安な事だ。未だ年齢の若い水原君の精神的動搖は誠に大きい。此際水原君を苦るしめる事は決して慶大の爲に有利ではない。昨秋の水原君は誠に氣の毒であつた。昨春の水原君は全く良く働いたが餘り忙がしい思ひをさせた爲に此人に不似合なヘッドワークに大きな失策が出來たチームとしての能率兩面から云へば水原君を投手とし三壘に起用するのが有利であらうがこれは同君の爲に少々苛酷過ぎる樣に思ふ、人物が決して不足なのではなく三壘に後任者なきにあらず三壘を鍛えるに左程他のチームの追迫もあるまい。三谷君を以つてしても充分である早く適當な三壘を作つて欲しい。而して水原宮武君の本來の特徴と慶大の型とを作り込んで欲しい。遊擊加藤君の卒業は慶應に取つて全く大きい痛手だ。決して華美ではなかつたが之れ程捕球投球に型の備はつた理論的な優れた遊擊手であつた攻擊にも又立派な力を持つて居た。之に代る川瀨君は捕手もよかつたが遊擊手に廻つてもよい。先づ天才の行く處可ならざるはなしの感がある。然し加藤君の如く球を處する眞の備を體得するまでには天才であらうが其れ相當に苦るしい經驗を要するものと思はれる。自我流なプレーをしても相當にこなせるから自分の型といふものが容易に出來ない。卽ち取れない球を取る事もあれば、樂に取り得る球を輕卒に扱つて失する事がある。之は前者の功よりも後者の失策の方が大きい結果を招く場合が多い。

もし此のチームに不利を招くとすれば精神的動搖によるものか或は此方面の失策によるものだと思ふ。もし牧野君が代つて守つても相當な成績を擧げられやうが打擊に於ても又加藤君の滋味には及ばない。慶應の外野は町田君が卒業である。同君は晩年健康を害したせいか淋しい感じのする選手であつたが攻守共に滋味のある好選手であつた。楠見君を中心に梶上井川君を兩翼に配し[illegible]の兩君を後陣に備へるものであらうが梶上井川君は既

に試驗濟だし堀君も守備打擊走壘共に油斷のならない力を持つて居る。川瀨君が遊擊に移つても捕手には岡田伊藤の兩君がある。岡田君は主將としての貫錄と永年の經驗とを有し伊藤君も又捨て難い技量を有する。其上に福島君が病氣全快して出京したとの快報を聞く同君は攻守共に定評ある人であるから出場の曉は慶大の一偉力である。本鄕君の二壘補見君の中堅は定評がある。之に宮武山下井川福島補見の巨砲の陣を敷けば金城鐵壁である。

明治大學は投手中村、錢村、手塚の三君を失つたけれども鬼塚井ノ川櫻井君と經驗をへた立派な後繼者がひかへて居る。井ノ川君に鬼塚君のバツテリーは面白い組合せである。體格に於ても兩君共に立派なものであるし井ノ川君の霸氣と鬼塚投手の着實さは留守軍時代の呼吸でぴつたり合つて如何にも賴もしい感じがする。赤木、戶來、八十川君等の控へ投手もあつて後顧の憂がない。井ノ川、米澤、角田、櫻井君等が骨惜しみをしないで練習をなし眞に鬼武者の役割を務め桝、田部、鷲尾鬼塚君等が堅實なるプレーを見せてくれれば大いに期待する事が出來る。一昨年頃早稻田に四番打者が伊丹、伊達君と二人あつて豪儀なものだつたが今日の明治は矢張り松木鷲尾と二人の三番打者を有する。然し乍ら理由が何處にあらうが三、四、五番の一軍に重要な打者が餘分にある筈はない。二人がそれ程勝れた打者であるなれば兩人の中守備に優れない人を他のポジションに移して强打者を一人增して巨砲の陣を布くのが得策であらう。其れが出來ないとすれば打擊にも缺點があるのか、此場合一壘は守備に勝れた鷲尾君に讓つて松木君を外野に移し守備と打擊に專心せしめたら明大の一强味であると思ふ。鬼塚君の進境は充分認められるし二壘は岩瀨、吉相兩君の競爭であらう、三壘の角田遊擊の田部君も定評ある人だ。昨秋はスランプであつたが春になれば氣分も變る必ず本來の妙技を發揮する事だらう。外野は桝、櫻井、米澤君となららうが攻擊の技量及氣力に於て決して早慶に遜色あるものではない、チームの調子さへ揃へば打擊に於ても一番からラスト迄弱味がない。選手の氣持次第でどんな記錄が得られるか知れない。一壘手を決定し櫻井君の奮發と桝君の當りさへ出れば大いに期待することが出來る。

早慶戰は昨秋の如く早稻田が攻められながら勝つたといふのではなく戰ひは却つて早稻田には見應えのあるゲームとなるだらう。

慶大が窮余の策うつちやりが惡みすぎた早大の星を拾ふことゝなることはあらうが、慶明戰も早慶戰におとらず慶大の樂觀を許さぬ早明戰に至つては明大の調子の狂はぬ限り打擊戰となるだらう。

小川君が正球を揃へて投ずることあらば早軍の苦戰は免がれない。

又鬼塚君が昨秋通り順當な進出をしたものとすれば新らしい選手や誤魔化し打者にはあの運動量を有する球は輕々と打てぬので早慶共に容易に點が奪れまい。

宮武水原君が明大の打者に試みに投げた球は打つ氣で向つて來た明大には相當に打つものと考へられるから事故のない限りこれまた豫測を許すまい。

明大は之に依つて久振りに活氣をおびた同軍の特徵あるゲームをするだらう。

慶應は彌々山下宮武君以下巨人がそれ〴〵三年以上の試合を經て力ではなく慶應式本格の野球に入ることだらう、そうなれば吾人の滿足出來る大試合が見られることだらう。

早稻田も森君以下西村、富永、今井君は古株だし小川三原君も決して凡手にあらず佐藤矢島君の感激性は必ずや表てから見た强さには不足あるまい。本來地力の必要な場合と

卽ち野球の本格の必要な場合とは相手に依つて全く大きい相違がある。今日の慶大も宮武、山下、井川君と力のある選手が揃ふて力を以て戰ふ明大には甚だ有效だ。河野氏を得て强て押して來る早大には可なり苦手となつて來た、今の慶大には望む處は現在と趣を異にしたる卽ち本格である昔の熱の野球が欲しいのである。今日の慶大の選手は力で行かうとして居るのではないかと考へられる。慶應は昔から押手を見せて おいて 引手を使つた。近頃は直接點を奪らうと云ふのであつて如何にして得點の機を摑むやの考へ方が少くなつたのではないかと思はれる。

卽ち今日選手が昔の樣に普通部時代よりの選手に比し慶應式野球に若い爲ではないか。グランドの熱と力とで戰ふことでは傳統的に早大が有利である。

三對二の一點違ひだからと云ふので涙を揮つて戰ふことであると、早大が勝れてゐる、三點開きがあるから力で追ひ付かうといふ熱では全く慶應には不利である。然し敵が調子に乗つて來たので敵手を牽制しておいて冷靜にこなして行くのは慶大である。明大は勝てといつて試合し早大は打てと云つて試合をする。慶大はベースに出て盗塁を爲して勝てと言ふのであらう。其度各自獨特のシステイムがある。

明大は横君を中心に例年の通り鹿屋川グランド、早大は河野市岡氏引率の下に森君以下和歌山中學校庭にと冬期練習を爲した。此練習はチームワークを作るのが目的ではなく各自の基礎的練習が目的であるから本人の心掛け次第で非常に技術の進歩を見るものである。其の試練として一月に早大は關西學院、慶應俱樂部は鬼塚君を投手として關西大學と交戰し關西の代表チームも同樣なく擊破して居る。慶應は宮武投手をのぞき岡田主將以下二十餘名臺灣遠征を試み渡邊大陸投手の率ゐる全臺北軍以下數チームに全勝して居る。

各校共に戰備に怠りなく之に新しく入學する人達を起用して配陣する事になるだらう。

早大はシーズンの中頃より後に充實して來る。比較的春より秋に强い。

慶大にはそうした目立つたものはなく常にシーズンを平均して居る樣だ。

總じて調子で行く明大はシーズン初期より中頃に强く殊に春にはよい成績を得て居る。

早慶戰は秋の連續として依然興味の中心であり明治は如何にして此兩チームの壘に迫るかに興が湧く、昭和二年の春は早大、三年春は慶大、四年春期明大チームと毎春海外遠征をなし此三大チームが今年の如く充分なる準備を以つて爭覇戰を行ふのは實に四年振りである。明大の進出すべきは此の時である。早慶明のビッグスリーが其特徵を發揮して其玉座を相爭ひ鼎立戰を演ずることがあればファンに取つて幸である。

アメリカ通信

ロンドン會議の近景

在ロンドン本誌特派員　清澤洌

一

若槻禮次郎氏を首席とする日本委員の一行が、巨船オリンピック號でサザンプトンに到着した頃、そこにはロンドン會議の多難を思はせる二つの問題が横はつてゐた。

一つは無論日本と米國との比率の問題である。日本の主張は最大海軍國の七割の比率を得んとするにある。若槻全權が米國に入つて、合衆國を代表する何人とも會見する以前に、すでにシカゴにおいてこの日本の切り札を訪問記者を通して發表したことは、前便に報導した通りである。

日本がその具體案を對手に示した以上は、日本全權の次ぎにとるべき方針は、この城寨に立て籠つて、どれだけこのデッド・ラインを死守しうるかにある。若槻全權はワシントンで國務長官スチムソンその他と會見してこの防禦に全力を盡した。

若槻全權は日本が何故に七割を要求するかについて説明した。七割といふ比率は米國に對して攻勢に出ることはできないが、またホーム・ウォーターにおいて他國の脅威を受けない海軍力であることも述べた。日本の輿論があげてこれを後援してゐるともいつた。

日本は過去において米國のために、その方針を指導(ディクテート)されてゐる感すらもあつた。支那問題についても、滿洲問題についても、山東問題についても、更にワシントン會議においても、日本は殆んど全部米國の政策を容れた。その上に移民問題についても、米國はその政策を日本に強制した。日本國民は今回のロンドン會議においても、また米國にディクテイトされるのではないかといふ點に懸念をいだいてゐる。他國に對し脅威(メネース)を與(あた)へずして、自國の安全のために海軍力を持つ、これは一國に當然許さるべきことではないか――さういふことを婉曲に話したと信ずべき理由がある。

これに對してスチムソン氏も同じく米國の輿論を持ち出した、『日本の輿論は諒解するが米國の輿論にも同情していたゞきたい』といつた。最後の會議（ワシントンを出發する日）の終りに、ステートメントと

して『兩國全權は軍縮に關する哲學を話した』と發表したのは、かうした政治的根本論をして、詳細な技術的問題は、ロンドンに持ちこしたと諒解してゐると思ふ。

二

この日米の會談から、われ等は二つの暗示を受ける。一つは日本は實際、七割を死守する覺悟があるかどうかである。

かういへば全權一行は無論として、日本國内の人々まで怒るであらう。なる程、日本が補助艦七割比率を固守してゐる事實は心から眞面目のやうである。軍人の中にはこの比率を得なければ、旗をまいて歸るほどの意氣を示してゐるものが少なくない。

併しながらわれ等が考へなければならないことは、日本は今、各國との交渉の門出にあることである。交渉は必然に相互の妥協を意味する。英國の言葉に社會に三つの必要なるCがある。Conflict, Conference Compromiseがこれであつて、相爭つて、會議をして、妥協をするといふのであるが、利益と立場の衝突する時、この會議を解決する唯一の道は妥協の外はない。

日本が實際七割の比率を得んがためには、その提唱は七割二分五厘なり七割五分なりでなくてはならぬ。これは必ずしも古着屋式の外交ではない。他がその主張を緩和する時に、日本も同じ程度の讓歩を必要とすることは、極めて見易い常識的事實である。いかに駆けひきのない會議でも、始めに云ひ出したことを突張つてゐたのでは、始めから會議の決裂を企圖すると同じである。

故に日本が始めから七割を天下に聲明したといふことは——英國新聞はマクドナルド内閣が今に至るまで何等その具體案を發表しないことについて強く抗議を續けてゐる——正直でありすぎて、外交技術を知らなかつたか、乃至は實際七割を固守する意志がないことを結論する。

海軍關係では日本の國防に七割が絶對必要であることを主張して、上下兩院、實業家等を招いて、これに詳しく説明したさうである。もしこの主張が眞實であつて——私はこの人々の眞摯なことを信ずる——一歩も退くことの出來ないものであれば、會議は始めから悲觀せざるをえない狀態にある。もし然らずして七割の主張が多少の駆け引きを含むものとすれば、そしてこれを會議において讓つたものとすれば、國民は國防上重大な不安に陷いるのである。

そればかりではない。會議といふものは元來相互の話し合ひにより解決の道を發見するものであるが、七割の比率を得ない結果は、それが偏えに英米兩國の壓迫の結果によるものとして、強くこの兩國を恨み、禍根を將來に殘すことになるであらう。

七割を劈頭にいひ出したことの適不適は、前便にも書いたやうに今後の結果についてみねば分らないが、以上の重大な責任を負はねばならぬことだけは特記するを要する。

今一つの問題はこの七割を與へることについて、豫備交渉においては、米國に大分難色があつたといふことである。ある米國の官邊の一部では『米國がワシントン會議において、比律賓、グアム等の防備を放

棄したのは、日本が六割を以て滿足したからである。もし七割を要求するならば、われ等はそれ等について再考慮せねばならぬ』との意見を洩した。

比率の問題は日米の直接交渉に委ねられるであらうが、これがどう纏るにしても、日米の意見は尙一致せず、會議の一の難關を造ることだけは明らかである。

三

米國との交渉の新たな記憶をいだいて、日本全權の一行は英國のサウザンプトンに到着した。同市の市長は一行を歡迎するために船に來たけれども、その外には英國側の歡迎人は殆んどゐなかつた。たゞロンドンから出迎へた日本大使館の一行が、シルク・ハットを連ねて波止場に立つてゐるのが目立つのみであつた。

一行がロンドンに到着した翌日の新聞も、日本全權の記事は殆んど見當らなかつた。そのステートメントを掲載したのはロンドン・タイムスだけであつて、それも一段の半分以下を全記事に費やしたにすぎなかつた。デイリー・テレグラッフの如きは、一行到着の記事を、軍縮會議の記事の中に二行挿入したのみであつた。

これと反對に日本における大新聞の活躍はすばらしいものであつた。船がドックにつくと日本內地に送るべき活動寫眞の機械は、せはしく回轉した。全權一行にまつはる如何なる事件も、電線を傳はつて日本に送られた。米國における一行が、凖國賓を以て待遇されたと傳へられたやうに、英國においても朝野の大歡迎を受けたと傳へられるに相違なかつた(!)。

私はこれを書きながら、近頃、日本から來た新聞が、ダグラス・フエアバンクの記事で一杯なのを想ひ起してゐる。ダグは一體何者なのだ。日本全國があげて狂迎するフエアバンクなる者は何者なのだ。世界のどこの新聞が、一個の映畫俳優にあの歡迎と、あのスペースを與へるだらう。私は英國と日本の新聞に兩極端を見る。

日本全權がロンドンに到着した頃は、英國は丁度クリスマスの休暇であつた。その頃、首相マクドナルド氏はスコットランドの出生地ロシマウスに行つた。また外相ヘンダソン氏はブライトンの別莊に行つた。日本全權は久し振りで閑暇を樂しんだ。

その時に一つの新聞記事が、全權の安眠を遮げた。それはデイリー・テレグラッフの外交記者の書いたもので、日本の全權が英國に到着した最初の記事の中に

『日本全權の重な人々はロンドンにあるが今週中のある日にマクドナルド氏と會談するであらう。この個人的會談の地は首相がいつ官邸に歸るかによつて決定されるであらう。もしかれの歸市が次週に延期されゝば、若槻氏及び重なる僚友はマクドナルド氏によりフオレスに訪問すべく招かれるであらう』

と書き始めてある（十二月卅日同紙）。

この記事を見たマクドナルド氏は直ちに左のやうなステートメントをその別莊地において發表した。

『予は一般公衆に警告する、日本代表者が下院ロシマウスに訪問するといふ新聞の記事は、その報導の背後に如何なる吹き込みがあるかは知らないが、それはわれ等の協定を助くるものであるよりも、寧ろ前途に障害を置くものである』

この言葉が何を意味するものであるかは、今に到るも私には分らない。それは同紙記者が直ぐ附け加へたやうに『その言葉において、その動機において驚くべく陰謀的である。』かりにマック氏を官舎に訪問するといふ新聞の記事に誤りがあるにしても、これを『特にパブリックに警告する』必要がどこにあるか。

これより先き、英國の首相及び當局者が何故日本全權に早速逢はないかゞ問題になつたことはある。多くは休暇のためであると信じてゐたが、中には『日本全權が餘りに米國において内容を打ちあけすぎたので、英國側ではこれを喜ばず、直ちに逢ふことを避けてゐるのだ』などといふものがあつて、そうした新聞電報を日本に打つた者もあつた筈だ。

四

いづれにしても日英兩全權の會見が遅れたことは事實である。テレグラフの記者はそのステートメントに直ちに反駁を加へて、『日本全權がロンドンに到着したのは金曜日である』故にマクドナルド氏が一月十日までロンドンに歸らなければ、この重要な意見の交換が十五日遅れるわけである。ヘンダソン氏も亦居らず、外務省に來るのは來週始めであるから、それでも十日間を失ふのだ』と書いて居る。

私はその後此の記事を書いた記者に逢つた。紳士的な若い[illegible]あるが、その動機について、『マクドナルド作は非常に恐怖だ、だから少し刺戟してやつたにすぎないんだ』と笑つてゐた。

日本の會議に對する政策を書いた記事の中のことから、かうした誤解があつたのに神經を病んだのであらう。若槻氏は日本人記者に對して、『自分達が早くロンドンに來たのは始め會議が一月十二日頃開かれるかに傳へられたからだ、その前にはいゝ船がなかつたからだ。英國人は休暇について正確だから、休暇を邪魔する氣は少しもない』と辯明した。

英人方面に對する辯解は、もつと念がいつてゐる。ロイテル通信によると

『本通信社に通知されたところでは日本全權は首相と會見しないことについて何等か失望したと傳へられるに驚いた。マクドナルド氏を、スコットランド或は他の地に訪問するといふ報導は決して日本人側からインスパイヤーされたものではないことを繰り返した。勿論、日本全權は出來るだけ早く接觸を得たいとは心得てゐる。併し無論かれ等はクリスマス休暇の最中に來て、大臣達が心地よく休みを得てゐることを知つてゐる。これを紊さないことは又日本の禮儀でもあるのだ』

とある。その廻りくどい云ひ方は日本語に飜譯の出來ないほど丁寧を極めてゐる。

この後、マクドナルド氏と日本全權は、何回も會見して、この小さい事實はパッシング・インシデントとなつてしまつたが、こゝでこれを比

較的に詳しく紹介した理由は、このエピソードにマクドナルド氏と若槻氏の性格と行き方が現はれてゐると思ふからだ。

マクドナルド氏が、かうした新聞記事を捉えて、拳骨でガンと一喫を食はせるやうなやり方は、確かにかれが一介の勞働者から、あの位置に這ひ上つた敗けじ魂を示してゐる。鋭い歴史家をしていはしめるならば、ビスマルクが常に最初において對手の鼻柱を折つたことに比較するかも知れぬ。

これに對して若槻氏は飽くまで、よく氣のつく良吏である。かれは直ちにそれが日本側から吹込んだものでないことを辯明し、併しながら早く逢ひたいに相違ないことを繰り返してゐる。もしかれが闊膽なる政治家であるならば、それが單に新聞記事であるのと、英國人の一部にすら重要なる日本の代表者を前にをきながら、休暇をとつて田舍にあることの不可をいふものがあるのだから、これを默殺するか、或は却つて逆に利用したかも知れないのであらう。

五

若槻全權は聰明であつて、その頭腦も明晰である。日本の政界を見渡して、これ以上の全權を發見しうるかは元より疑問である。

併しながらこの若槻氏の特長はまた同氏の缺點ともいへるであらう。たとへば同氏は總べての交渉すべての會合において、悉く自から先頭に立つてゐる。私は今までのところ、未だ曾て財部全權その他が、一回も公式な場處において口を開いた事實を知らない。かれは全く並び大名の席にある。

この事はマクドナルド氏自身、フーヴァ氏自身（フーヴァ氏は余り内容に立入られない）が軍縮問題の先頭に立つて居ることから見て當然といへるが、若槻氏からいへば自身が能吏なるが故に、他人に委して置くことは危なかしくて見て居れないからだと思ふ。その事自身は何等咎むべきことでなく、寧ろその健闘を謝すべきであるが、たゞ將來これが政治的解決の上に多少の支障を生じなければ幸ひである。

この會議は各國専門家の固執の結果、結局政治的解決を必要とする機會が來るであらうことは明かである。その場合に乘り出すのは專門家ではなくて政治家の任務である。始めから事務的交渉の先頭に立つた若槻氏が、かゝる場合に身動きの出來ぬやうな立場に陥いることはないであらうか。

これは單なる危惧だとするも、今一つ同氏の能吏であることが却つてその缺點でありとする私の理由は、同氏に世界政局の前線に立つて人類を指導するほどの抱負とヴイシヨンありや否やの點である。同氏がアメリカからロンドンに來ての言説交渉は、たゞ七割問題に終始してゐる。明けても暮ても、その目標は七割である。日本の閣議が決定し、この任命を帯びて渡來したのであるから、七割比率が重要な任務であることは疑へないが、もし若槻氏の聲明する如く今回の軍縮會議がケロッグ平和條約を前提とし、人類の福利を目的とするものであるならば七割以外に、もつと日本の理想を世界に明らかにするものがあつてもいゝ筈である。

ロンドンにおいて英國新聞記者は『日本は七割の比率が保てれば一

萬噸の巡洋艦が五隻でもいゝか』と聞いた。若槻氏は『そういふ極端な事を考へて居らぬ』といつて、現行勢力維持の意志を言外に現はした。それは危なげのない答へではある。併しそこに世界平和に對する大きな抱負が見られるか。

一月十日、英國政府はその巡洋艦に對する態度を、始めて海軍大臣アレキサンダー氏によつて發表した。それによると英國は一九二〇年以來ジュネーヴ會議まで、七十一隻の巡洋艦の必要を主張して來たが、世界政局の變化——特にケロッグ不和條約の施行により、五十隻を以て滿足するといふのがその骨子である。日本もケロッグ條約の條文精神を信承し、それを會議の發足點とする點については何回も聲明した。然らばこの平和條約を信ずることにより、具體的に變更した政策は何なのか。

若槻氏は大命を受けて千里を使ひして來たについて、相當な決心をいだいてゐると聞いてゐる。以上述べた私の見解は單に序幕前の日本全權の態度を批判したにすぎない。全的結論は無論將來に保留するであらう。

六

私はこの文の始めにおいて、ロンドン會議開會前において、地平線上に二つの暗雲が見えるといつた。そしてその一つとして日米の諒解が、今尙目鼻がついて居らないことをあげた。他の一つはフランスの態度である。

フランスが自國の立場について、大膽なる聲明書を發したのは、日本全權がサウザンプトンに到着する前日であつた。フランスは自國の安全なくして軍備撤廢無しといふ立場をとり『然り、たゞ外部から與へらるべき信頼するに足る援助の比例においてのみ、國家はその軍備を縮少することが出來る』とて、進んで

『ケロッグ協定は現在の狀態において、國家の安全を保障するに充分なりとするわけにはゆかぬ。それは平和の保存に大なる進步ではあるけれども、その適用は尙組織化されて居ない。これに比すれば國際聯盟は不完全ながらも、安全について根底的組織を有し、平和的解決の道もあり、不法に攻撃されたる國家に對する救助の道もある』（要領）

との意を述べてゐる。

佛國は單に、輿論の力に頼ることのみを骨子とするケロッグ平和協定の微力をいふのみにあらず、直ちに米國の矛盾を指摘して『米國もかく思へばこそ、最近の海軍プログラムの速かなる遂行を放棄しないのである』といつてゐる。

私はこの佛國のステートメントを讀んで微笑した。私はニューヨークから本誌に書いた通信に、軍備縮少會議とケロッグ協定とは、その根底において相合ない矛盾の對立だといつた。極めて大きな意味で、いづれも平和の確立を目的とするものだといふ程度のものなら知らず、比率を爭ふことは結局、想定敵國を假想してのことだから、これを呼稱する各國は矛盾から出發してゐると論じた。この論法を佛國のメモランダムの中に發見したのである。

佛國は完膚のないまでに米國に當り散らしてゐる。米國が生みの親

であるケロッグ協定を排するばかりでなく、國際聯盟の方が軍縮事業の根底としていゝといふのである。そして今回の軍縮會議は單に豫備的に大綱を決定するものとし、これが最後的施行方法は國際聯盟に移すべしとの意味を提議してゐる。國際聯盟はウイルソン以來、米國にとつては何よりの禁物で、これを持ち出されることすらも、米國上院に尚勢力を有する孤立派の反對を買ふ恐れが充分ある。

佛國は米國に食つてかゝつてゐる許りでなく、英國にも當つてゐる。軍縮協定は海洋の自由——交戰國の權利、中立國の權利及び攻擊國の艦隊に對する他の艦隊の協調に關する問題等を決定せずして完成するものではないと佛國は主張してゐるが、海洋自由問題は英國の觸るゝを欲せざるもの、さきにフーヴァ、マクドナルドの會見において、今回の會議の議題としないことに決定したものなのである。

佛國の主張はこれに止まらない。こゝで全部を書くことは許されないから、重なる項目だけを並べてみると

一、英米兩國はその軍備縮少を五大國のみに限り、數學的比率の上に根據してゐるが、これはロンドン會議參加國以外にも適應されねばならぬ。

一、軍縮は艦列にせずして總括的噸數となすべきである、但しこの點は佛國は妥協の準備がある。

一、陸上軍備、空軍、海軍は不可分のものである。

佛國はかゝる譯山の條項を並べて、最後に地中海の安全協定の必要を述べ、場合によればスペインを參加國としてこの問題を議すべきを提議してゐるのである。

七

この佛國の態度は、誰にでも分るやうに、ロンドン會議に對する包まれたる爆彈である。それがどれだけ爆發するかは、會議の經過を見るの外はないが、それは會議そのものゝ前提を否定し、その方法をも合せ排斥するものである。かくの如くんば佛國は始めから會議に對する參加を拒絕すべきではなかつたか。

私の見るところでは佛國の目がける重點が一つある。それは懸案の最後にある地中海における平和協定の締結がこれである。佛國はロカルノ協約その他によつて、東方の安全は保障されて居るが、地中海方面の安全を保障する何等の成文がない。英國が軍縮會議の提唱國として、まづ最も自から犧牲を拂ふの立場にあるを利用して、英國をしてその保障者たらしめんとするのが目的であらう。

これに對して英國が如何なる態度に出でるかゞ問題である。マクドナルド氏は議會の答辯において『軍縮會議は海軍勢力を議するのであつて、海軍政策を議するのではない』ことを明言してゐる。併し會議の一員たる佛國の主張が政治的解決を必要とする以上、どうして政策の論議を避けることが出來ようか。政策を論議することになれば、それは佛國外交の第一步の勝利である。

今のところ英國の輿論は、英國の武力を以て他國の安全保障をつとめる義務を負ふことに反對してゐる。併しながら地中海協定は必ずしも武力的制裁の條項を加へるを要しない。たとへばワシントン會議の結果生れた四ヶ國條約は『太平洋における各國の島嶼の權利を尊重し、何

等か問題が起れば、會議を開き、解決のためにこれに問題を附議する』を決定し、また『ある他の國の攻勢的な行動によつて、これ等の權利が脅かされる場合には、いかなる方法をとるかについて諒解に到達するため、充分かつ大膽に協議する』ことを規定してある。この程度の協定なれば英國としても異存のあるわけはない筈である。

佛國は地中海の平和協定を望むのは事實であるが、然しながら佛國が會議の初めに當つて思ひ切つて、かくの如き態度を示した根本的理由は他にある。佛國は必ずしもこの會議の成效を希願して居らないのである。

ニユー・ヨーク・ウオールド紙も論じたやうに、この會議の效力は英米兩國の提携である。この二國の間には幾多の衝突する問題があつて、英米二國が完全に手を握つて、アングロサクソンの優越を世界に強制するといふ觀方に對しては、私は異論を有するが、併し結果から觀て、そして特に佛國から觀る時に、この會議の成效はやがて英米兩國の協調を奨勵することになる事實は卽ち否定できない。

故に極端にいへば佛國はこの會議の失敗を以て、佛國外國の成效だと心得てゐるであらうともいひうる。殊に佛國はその割あてらるべき海軍勢力を以て、決して自國に正當なものだとは考へてゐない。軍縮會議の開會される少し前に、佛國政府は左のやうな數字を發表した。

	佛國	伊太利
面積	一一、四九二、〇〇〇	二、七三一、〇〇〇（キロメートル平方）
人口	一〇一、三一二、〇〇〇	四二、七九〇、〇〇〇
沿岸距離	二二、三五〇	七、五〇八（キロ）
保護すべき航通路	三四、〇〇〇	五、〇〇〇
商船	三、三七九、〇〇〇	三、二八五、〇〇〇（噸）
港灣の船舶移動	一、〇六三、〇〇〇、〇〇〇	五八、〇〇〇、〇〇〇
貿易による商業	一六四、八〇〇、〇〇〇	四四、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇（英磅）

右は伊太利が要求しつゝあるところの佛伊兩國の均等の非を反駁したものであるが、更に米國と比較して、その面積において二百萬平方キロ多く、また保護すべき交通路の長さは米國の二倍あることをあげてゐる。

かうした統計の後に、佛國は左のやうな五國の指數を出してゐる。

英國……………………一〇
合衆國…………………四・二
佛國……………………三
日本……………………一・六
イタリー………………一

卽ち英國が十割の勢力を必要とする時にイタリーは一、日本は一・六を振りあてらるべきものだとの意味である。かゝる統計は瑞府會議の時にも問題となつたと記憶するが、復興途上にある佛國が、現勢を以て比率を決定されることを苦痛とし、ロンドン會議の失敗を希望すらする情の一部にあるは推察するに難くないのである。

八

佛國のメモランダムが出て、會議に對する樂觀的の觀方はガラリと變つた。ニユーヨーク・ウオールドの如きは、その難關がジユネーブ會議と同様であるから、この際寧ろ中止するの可をすら說いて居つたほどで

ある。

この佛國の態度に加へて、英國の内部における保守的分子の勢力は決して侮どるわけには行かぬ。かれ等は第一に均勢を名として米國に屈するの非をならし、更に傳へられる一萬噸巡洋艦の隻數割宛は、均勢にあらはして遙かに米國より劣勢なることを極説し、盛んに輿論に訴へて居る。

マクドナルド氏は勞働黨内において堅固なる地盤を有し、同氏の決定は最後的なる決定として内閣に強ひうる威望あるのは幸ひであるが、併し勞働黨それ自身が議會における比較的多數として、自由にその意思を行ひえない弱味がある。現在の政黨分野は

勞働黨　二九〇　△保守黨　二六〇　△自由黨　五九　△獨立　六

である。日本全權一行が大西洋上にある頃、勞働黨は自己の鑛山法（コール・マインス・ビル）を議會に提出したが、保守黨と自由黨の挾撃に遭ひ、結局修正承諾をほのめかし、僅かに八票の多數で通過したのである。

このことは勞働黨の立場が弱いといふのではない。軍縮に對する英國朝野の熱望は政黨政府を問はない。將に今回の會議の下交渉はボールドウイン内閣の時に始つたのであるから、軍縮そのものは一致した國策といへる。併し勞働黨は他の政黨――少なくとも自由黨を無視してその自由意思を行ふことが出來ないことだけは明らかである。これは特に佛國が協定を欲せず、會議の外に立つ場合に然りである。佛國がその潜航艇と、巡洋艦と、驅逐艦の制限を拒絶する時に當つて、英國は日米兩國と三國海軍協定をなし、かりに條件づきであつても、自から束縛することを欲するであらうか。

この現狀に對してイタリーが如何に出るかによつて會議は益々困難を加へる。イタリーはそのロンドン會議參加を承諾する文書において如何なる大陸國（佛國を意味する）よりも劣勢の勢力を以て甘んずるものにあらざることを斷言してゐる。即ち伊太利の目標とするところは佛國と同等の勢力をえんとするにある。もし佛國が軍縮協定に加はることをしない以上は、伊太利もその地勢上、對抗上、この會議に加はつて協定をなすことは困難である。

問題がかくの如くなる場合に、英國が如何に焦慮するもどうして際期の結果を收めることが出來よう。況んや英帝國は政治的には自治領の完全なる獨立を認めらるゝに拘はらず、國防の上には一單位としか認められず、英國本島、オーストラリヤ、ニユージーランド、カナダ、南阿、インドその他を守備するに、米國の如き經濟的一單位――パナマ運河を除き一つの重要な海外領土なき國と均勢を以て滿足することにつき、保守黨側より猛烈な批判があるにおいてをや。

軍縮會議は決して順風に帆をあげて内海を航する如きものではないのである。

九

日本の全權がロンドンに到着した頃、比較的冷靜であつた英國の輿論は、今や漸く熾烈になつて、いづれの新聞もこれに多大のスペースをとつて居る。

日英兩國當局――詳しくいへばマクドナルド、若槻兩氏の會見は既に三回繰り返されて、七割比率問題について、マクドナルド氏の率直な質

問があつた。米國全權の一行もジョージ・ワシントン號で今明日中に到着する筈である。始め米國全權は日本全權一行の乘つたオリンピック號で渡來する筈であつたが、米國上院は米國船で渡英を强ひ、もし同一行が英國船に乘る如きことあらば、これが乘船費用を支出しないと議決したので、急にその船を變更したのである。この小さいエピソードは、米國上院が如何に外交問題について指導的立場にあり、この意志を無視して、ロンドンの協定も到底その批准を得られないことを物語るものでなくてはならぬ。

ロンドン會議は成効するであらうか。この文の現はれる頃は會議の眞最中であり、今においてこれを豫言するのは危險であるが、たゞ安心していへるであらうことは、ジユネーヴ會議の如く無効果に終ることなく、全部の解決は得なくても、そのうちのあるものは必ず纒まるであらうことである。華府會議において主力艦及び航空母艦問題だけが解決したやうに。

問題はこの會議において如何なる政治的識見が現はれるかである。元來、この會議の主要役者に政治家を連ねたのは、專門家の見解が一部に偏するが故であることは、マクドナルド氏が再々言明した通りである。然るにその政治的解決を要する會議において、『單に海軍縮少が目的でその他にはない』と同じマク氏がいふに至つては、そこに矛盾あるを免かれない。廣範なる政治と外交は、好むと好まざるとに拘はらず、この會議に當面する。

かうなれば日本全權の活躍する範圍は擴大されるであらう。日本が今のところ有する問題は對米比率の問題だけである。日本は東洋において顧みるべき一の海軍國もない。故に會議がデツドロツクに陷いる場合に、最も自由な立場から調訂しうるのは日本のみである。日本は座しながら世界の檜舞臺に出て、その平和に貢献することが出來る。そしてこのことは狀勢の轉換と、若槻氏の識見が如何なるものであるかによつて決定するのである。

日本からの電報は日本は七割比率について擧國一致の後援をして來てゐることを傳へてゐる。對外交問題について、日本が嘗て擧國一致で後援しなかつた例があるであらうか。外國に對する限り日本の政府はかつて間違つて居らぬ。そして日本全權の要求が强ければ强いほど、擧國一致は熱を帶びて來る。今回の擧國一致もこの歷史的現象だと信ずる。

日本の惱みは今、どこにあるのだ。それは對外的から來て居るのか、對內的から來て居るのか。失業難と經濟難と階級鬪爭的意識は七割比率で解決出來るか。日本は現在の國情を以てして世界の一等國と交戰する意志があるか、また水平線上に國を堵して戰はねばならぬやうな何等かの問題があるか。更に近來の國際的傾向は將來――少なくとも一等國にとり戰ふに難く戰はざるに易き方向に行つて居るのではないのか。達見ある政治家は十年二十年の將來を豫見して政策を定めねばならぬ。

いづれは國策の根本問題に觸れる。私は今、限られたるスペースにおいてこれに結論を下して誤解を招くの愚を敢てせぬであらう。國民があげて七割を欲し他を顧みぬ以上は、日本全權の鬪する限り、七割の防禦線に立てこもり、國民に『安心』を與へることは、また實際政治家の任務であらう。（一月十三日ロンドンにおいて）

ウンベルト夫人の財産（其二）

—世界怪奇實話 IV—

牧逸馬

6

暑い九月の午後、米國市伽古市の富豪ロバアト・ヘンリイ・クロウフォード氏は、ベレエルへ行く途中、巴里のグラネイユ停車場からセンテユウル鐵道の一車室へ乗り込んだ。汽車はすいてゐたので、クロウフォウドは一人でコンパアトメントを占領して、扉を閉め切つてゐた。クロウフォウドは老人で、身體も衰弱してゐたから、その殘暑の猛烈な日中にも、むしろかうして密閉した車室内で、ひとりで氣樂に旅行したかつたのだ。が、汽車が田舍へ出ると同時に、遮るもののない日光と、激しい草いきれと、むつとするやうな機關の熱氣とが車室に立ち罩めて老クロウフォウドは、何時の間にか胸苦しさを覺えて來た。眩暈を感じ出した。そして、汽車がモンスウルを過ぎた頃は、かれは車室の床に倒れて、助けを呼ぶつもりで大聲に呻いてゐた。

丁度これは、テレサ・ウンベルトの結婚二年目のことで、テレサも、やはりこの汽車でベレエルへ行かうとして、クロウフオウドの隣りの車室に來り合はせてゐた。そして、クロウフォウドのうめき聲を聞きつけて、隣室との境の壁を叩いて呼んでみたが、何の返事もないので、テレサは、非常な危險を冒して一度自分の車室を出て、列車の外側に附いてゐる踏板づたひに、となりのコンパアトメントを覗いて見た。白髪の老紳士が、意識不明におちいつて、座席からずり落ちてゐる。テレサは、やつとのことで扉をあけて這入りこんで、先づ氣附けの嗅ぎ藥を與へ、洋襟をゆるめ、それから、抱きかゝへて、座席の隅へ立てかけるやうに据わらせて介抱すると、老人は間もなく意識を囘復した。かれは、老人によくある持病の心臓病が突發したの

だつたが、癒るのも早かつた。二人はベレエルへ着くまで話しこんで、すつかり十年の相識のやうになり、クロウフオウドは何度も何度もテレサに感謝して、その名前と住所を訊いて紙片に書き取つて降りて行つた。

降りがけに、クロウフオウドが言つた。

『マダム、またきつとお眼に掛ることもありませう。が、御覧のとほり、私はこんな老人ですし、それに、今のやうな心臓の發作がありますので、若しこれきりお會ひする機會がないやうなことがあつても、今日のあなたの行爲に對する私の謝意だけは、何卒御遠慮なくお納め下さい。實は、いま私はポケットに大金を持つてゐます。あの苦悶の最中に惡者に發見されたとしたら、あゝして無力の狀態にあつた私は、金は勿論、生命さへ失つてゐたかも知れません。さう思ふと、勇敢にして親切なるマダムは、全く私の命の恩人です。私は、必ず死の床において誰よりも第一に先づあなたを記憶することでせう。そして、何らかの形で、この深甚な感謝のこゝろを表すつもりです。』

市伽古の老富豪ロバアト・ヘンリイ・クロウフオウド氏は、テレサに名刺を呈して、固い握手を交したのち、まだ幾分よろめく足を踏みしめて、それでも元氣に降りて行つた。クロウフオウドは、そこで乘換へて、次ぎの停車場のアヴェニウ・ドュ・ヴアンサンスまで行く要事があつた――といふのであつた。

眞しやかな話だが、これだけのことなら、如何にも汽車中などで有りさうな小事件で、うそでもほんとでも、一向差し間へないのだが、この、テレサのいはゆる「市俄古のロバアト・ヘンリイ・クロウフオウド」との邂逅こそは、後に、あのグランダルメ街の女王テレサ・ウンベルト夫人の唯一の「財源」となり、例の神秘的な金庫の存在理由となつたのだから、テレサの嘘言の技能は先天的なものであり、また實際何人をも信ぜしめる一種の催眠術的魅力を備へてゐたものと言はなければならない。

この、巴里・ベレエル間の汽車中の出來事は、すつかりテレサ・ウンベルトの作りごとだつたのだ。ロバアト・ヘンリイ・クロウフオウドなどといふ人間は、市伽古は勿論、はじめから何處にも存在しないのである。

二年經つた。テレサ・ウンベルトは、この「小說的な汽車中の握手」など、何時の間にか綺麗に忘れてゐたといふ。すると或る日、紐育の辯護士から、巴里のテレサの許に一通の分厚な書狀が屆いた。開けてみると、老クロウフオウドの遺言の寫し

で、いつかの約束のとほり、英貨八萬磅の財產をあなたに讓して逝くから受納してくれといふのだつた――と、兎に角、さうテレサは、言ひ觸らさないやうに巧みにいひふらしたのだ。

　八萬磅といふのが、當初の額だつた。が、それが、人の口を通してゴシップに運ばれてゐるうちに、この夢物語のやうな「クロウフオウドの黃金」は、間もなく物凄い高に上つて、はじめは百萬磅、次に四萬磅とまで取り沙汰されるに到つた。

7

　かうして鰻のぼりに噂されたウンベルトの財產は、その後廿年のあひだ全巴里を瞞着して、當時の佛蘭西人はみな、ウンベルト夫人は、法律上の必要な手續きとその條件を滿足させさへすれば、早晩それだけの金額を受け繼ぐものと信じ切つて、この天下の幸運兒である夫人に、ひとしく羨望の眼を向けたのだ。一說には、ウンベルト夫人は、借金に責め立てられた揚句、苦し紛れに、出鱈目に市伽古の富豪ロバアト・ヘンリイ・クロウフオウドといふ假人格を案出して、自分はその莫大な遺產の相續人であると言ひ出したところが、意外にも、債權者のことごとくがそれを眞に受けたゝめに、夫人は後から思ひついて、あの一生涯に亙る組織的詐欺を企てたのだとも言はれてゐるが、これは矢張り、前揭の汽車中の書面をそれとなく認めて置いて、二年後に突如として遺產相續の件を持ち出したのでも解る通りに、最初から注意深く組み立てたウンベルト夫人のプランであつたのだらう。このことは、彼女が、この物語の眞實を證據立てるために、ロバアト・ヘンリイ・クロウフオドの遺書の寫しをはじめ、其他多くの米佛兩國にわたる法律上の文書を作製して用意してゐたことでも首肯される。

　人氣や評判といふものは妙なもので、何時の世にも、それらは大部分批判の外にある。テレサ・ウンベルト夫人は、斯うして一躍巴里第一の女富豪に祭り上げられたのだが、こゝに一つ困つたことは、その遺產相續に條件が附いてゐて、當分現金を引き出すことが出來ない。彼女自身、或る時期が來るまで、指一本觸れることを許されてゐない。まことに不便な話しだが、彼女の相續に異議を申立てた者があるので、止むを得ないといふのである。亞米利加から送つて來た、あの大きな金庫に嚴重な封印が施されて、正當な所有主である筈の自分でさへ、その金庫を開けて在中の財產を取り出すとは、米佛の法律によつてこゝ暫らく禁じられてゐるのは、さういふ譯があるからだ――と、テレサ・ウンベルト夫人が打ち開けたのだつた。

　故ロバアト・ヘンリイ・クロウフオウドには、二人の甥があつ

で、彼らが、伯父の遺産の各三分の一を要求して、ウンベルト夫人を相手取り、夫人の相續額の三分の二を奪還すべく、亞米利加で訴訟を起したために、五月蠅い問題になりかけてゐると いふのが、折角思ひがけないことから大財産を入手したウンベルト夫人に直面した「困難」であつた。好事魔多しといふところである。夫人は、このいきさつを誰にでも話して、最後に楽觀的にかう附け足すのが常だつた。

「でも、辯護士の方に伺つてみますと、クロウフオウドの甥御さん達はそんなことを主張なさる權利は法律上すこしもないんださうで御座います。ですから、裁判になれば、先方が敗訴するに決つてゐるんですけれど、それが確定する迄は、自分の所有でありながら、この財産に手をつけるわけにいきませんの。この通り金庫に入れて嚴封した儘、誰ひとり開けることを許されません。わたくしも、困りますけれど、何うせ勝つと解つてゐる裁判ですから、そのはうは、ちつとも心配してをりません。」

たとへまた夫人の負けとなつて、三分の一づつクロウフオウドの甥子たちに分配しなければならないことになつても、すくなくとも殘余の三分の一だけは、正確に夫人の有に歸するのである。その三分の一と見ても、證券約百三十三萬三千三百三十三磅だ。無慮の、素晴しい額たるを失はない。

これには、後で詳述するとほりに、種々複雜な法律行爲が伴つたのだが、とにかくウンベルト夫人は、この、徹頭徹尾自分の頭腦一つから出た嘘言を、自然のうちに、人々に受け入れさせてしまつた。クロウフオウドの甥といふ、幽靈のやうな存在を代理する、同じく幽靈のやうな亞米利加の辯護士の口供書なるものが、山のやうに呈出された。それに附隨して、あらゆる種類の法律上の證書が持ち出された。戸籍謄本、死亡證明等々である。この空想の裁判が、じつに廿年近くも繼續されたのだつた。そして、これらの物々しい書類によつて、ウンベルト夫人は、佛國一流の金融家達をさへ、まんまと丸め込むことが出來たに相違ない。或る者は、莫大な彼女の裁判費用を引き受け、またある者は、金庫が開く日までの當座の生活を保證し、多くの富豪が、先を爭つて彼女に後援を申し出て、彼女に、あのグランダルメの女王としての豪奢極まる生活を可能ならしめたのだ。勿論、かうして金を貸した人々は、慾得づくだつた。今にも開くであらう金庫を眼當てに、途方もない高利の約束だつたのである。

8

智慧ウンベルト夫人は、近代詐欺師中の女王として、いはゆ

ス國鐵道の神經と賭博の顔との所有者であつたらうとうなづける。この出鱈目を一年間保ちこたへるだけでも、それには、餘程特種な、そして非凡な才能を必要とすることは解り切つてゐるが、夫人は、それを廿年のおひだ押し通して容易に尻尾を出さなかつたのみか、つねに社交界の中心を占めて、衣裳、装身具、グランダルメ街の招宴と、終始最大級の贅澤をもつて一貫したのだ。莫大な金が費やされたことは、言ふまでもない。が、その金は、座つたまゝ、ウンベルト夫人のうへに雨のやうに降り注いだ。後で判明した被害者の一部だけでも、有名なダイヤモンド商ルウリナ氏が十六萬磅、ルウ・ドコ・ラ・ペエの寶石商デユモレ氏は七萬二千磅、リル市のスコッツマン氏が廿八萬磅、エルボフ市の富豪ジラルド氏が廿四萬八千磅、ヴァレンシアンヌのルフェヴル氏は十六萬八千磅、ルウベエ市のキャリオ氏が十六萬磅、銀行家のボウル・ベルナアルは十二萬磅を夫々一枚の借用證書と交換に、喜んでウンベルト夫人に渡してゐる。

この、マンモスのやうに巨怪なからくりを、不思議なほど圓滑に旋回させた中軸は、何處までも、あのたつた一つの金庫であつた。ウンベルト夫人は、一刻も早く金庫を開け度いと焦つて、何度となく逆襲的に、アメリカにゐる二人のクロウフォウドの甥を相手取つて訴訟を提起した。ふたりも、凡ゆる法律的方法をもつて妨害を試みて、この開封裁判の成行きは、その都度、大々的に新聞紙上に報道され、巴里人は、手に汗を握る思ひで、金庫の開かれる日を待つたのだつた。大西洋を隔てゝ、しつきりなしに斷的な裁判が續いてゐる――と、公衆は信じさせられてゐたのだが、それがすべて、マダム・ウンベルトの獨り相撲であつたことは、いふまでもない。夫人は、右の手で金庫を開けやうとし、左の手で其の邪魔をして、巧みに世人の好奇心をつないで往つたのである。

問題のロバアト・ヘンリイ・クロウフォウドは、南佛の海岸ニイスで急死したといふことだつた。この點を證明するために、同市ルウ・ドユ・フランス街に居住してゐた同名の者の死亡證明が呈出された。それには、立派に其筋のスタンプと責任者の署名があつて、一見何人をも首肯せしめるに足るものだつた。はじめ紐育の辯護士からウンベルト夫人に移牒されたクロウフォウドの遺書に關して、その内容を法律的に確定させるために、夫人は直ちに、巴里有數の辯護士をして調査せしめたのだつたが、それと同時に、米國にゐる二人の甥から、夫人の相續に對して異議の申請があつたのだつた。あつたといふのだつた。そのために、裁判が落着する迄、ウンベルト家の金庫は開けることを

禁じられた。これが、一八八一年の三月である。それから夫人は、時には妹のマリイ・ドルニヤックを表面に立て、ロマンとエミルの二人の兄弟の助力を借りて、宣傳に宣傳を重ね、年中行事的に、海の向うのクロウフォウドの甥を相手に、金庫を開けることの請求を裁判に持ち出しながら、いや、正確には、さういふ裁判が進行してゐると稱しながら、この大芝居を打ち續けたのだ。金庫は、今にも開けていゝやうなことになるかと思へば、また突如として、當分開けられないことになつたりして、當に巴里人をやきもきさせてゐた。

著名な法學者ワルデック・ルツソォの名さへ、このウンベルト夫人の相續事件に關聯して見えてゐる位ゐだから、如何に夫人によつて、そこに色いろ具體的な法律上の問題が巧妙に投げられたか、想像される。

その間も、トウルウズの洗濯婦テレサ・ウンベルトの贅澤ぶりは、際限がなかつた。一八九七年の一年間だけに、ドウセの店で三千七百八十磅、ウォルツで千四百磅の衣裳を買つてゐる。ドウセとウォルツが、巴里第一の衣裳屋であることは、人の知る通りだ。同じ年に、ウンベルト夫人は、帽子だけに八百五十磅費つたとある。このウンベルト夫人が、單なる信用一つ――それも、彼女の機智と嘘言による――で生活してゐやうとは、世間は夢にも思はなかつた。

最初に怪しいと感づいたのは、リヨンの銀行家ドユラツトだつた。彼も、ウンベルト夫人に少からざる額を貸してある一人だつたが、一日ヴエレクシオンの別莊に招かれた時、それとなく訊いてみた。

「クロウフォウドさんの甥といふ人達は、一體亞米利加の何處に住んでゐるのです？」

夫人は、ボストンの郊外のサマヴヰルにゐるとだけしか答へなかつたが、ドユラツトは、二三日して、誰にも告げずにアウヴル港から紐育へ渡り、ボストンで私立探偵を雇つて、サマヴヰルは勿論、ボストンを中心に廣く搜査してみた。そして、言ふまでもなく、それに該當する者が居住してゐないことを發見したのだつた。

9

二個月後に、巴里の建築家でアンリ・ヴァンサンドンといふ人が、その時急に破産に直面したゝめ、二年前にウンベルト夫人に貸した五十萬法の返濟を請求して、夫人に拒絶されたので

ボア・ドユ・ブウロウニユで拳銃自殺を遂げた事件が突發した。これが、ウンベルト事件に血を見た最初で、スカッツマン、ボウル・ベルナアル、ジラルドの三人が自殺したのは、後から、全部が詐欺で貸した金は一文も取れないと判明してからだつた。

が、どんなに敏活な詐欺師でも、何時かは、ほんの烏渡した香の滑りから、つひに致命的な自繩自縛を招くものである。マダム・ウンベルトも、その例に洩れなかつた。グランダルメの街の邸の應接間で、夫人が、四五人の客と雜談してゐる時だつた。そのなかに、佛蘭西銀行の重役ジユウル・ビザア氏がゐて、不意に夫人に質問したのだつた。

『無論あなたは、金庫に這入つてゐるクロウフオウドさんの遺産を、御覽になつたことがあるんでせうね。』

夫人は、詰らないことを訊くといふやうに、笑つた。

『わたくしが立會つて、金庫に入れて封印したんですもの。勿論、見ましたわ。』

『紙幣ですか。公債ですか。』

『公債です。』

『何國の公債ですか。』

『フランスの年期公債です。』

言つてしまつてから、夫人ははつとしてビザア氏を見た。ビザア氏も内心、危ふく叫び聲を上げやうとした程、驚いたのだが、表面は、どこまでも氣が付かない風を裝つて、默つてゐた。しかし、この時は既に、その不用意なウンベルト夫人の一言によつて、すべてが詐欺であることを、ビザア氏は看破してしまつてゐた。

佛蘭西の年期公債は、一年ごとに現金に換へなければならないのである。

若し夫人の言ふ通り、金庫の内容が佛蘭西政府の年期公債なら、夫人は、今までに、一年に一度づつ金庫を開けて來た筈だ——ジユウル・ビザア氏は、思ひがけなくこの大詐欺を發見して、その、ウンベルト夫人の面前で、絶大な恐怖に襲はれた。が、かれは、その場は飽くまでも平靜を作らつて、何も言はなかつた。夫人も、其のビザアの樣子に安心したものか、直ぐに話題を轉じただけだつた。

かうして、第一の發見者はジユウル・ビザア氏だつた。

同時に、その頃は、金庫の開く場合を想定して夫人に融通して來た債權者達が、しびれを切らして、裁判所に向つて、夫人に金庫をあけることを命令せよと迫つてゐた。最後の債權者會議が開かれたのは、一九〇一年の初頭だつた。その席上で、夫人は今まで多方面から借用した金を、全部長年にわたる、あの

クロウフオウドの甥との訴訟に費消した筈で、その額は、既に夥しい高に上つてゐるから、いま金庫が開かれても、債權者の悉くが滿足な辨濟を受けるか何うか、不安を感ぜざるを得ないと決議された。これは勿論、表面穩當な理由として立てられた言辭に過ぎなく、かれらの大部分は、ウンベルト夫人の財產に疑念を抱きはじめてゐたのだつた。この、債權者會を代表して法廷に立つたのは、ワルデツク・ルツソオだつた。一方、ルツソオは、マタン紙に寄稿して、ウンベルト夫人の財產が全然虛妄のものであることを摘發したのだつた。エミル・ゾラと、豫審判事ボルサンとが、ルツソオに助力して奔走した結果、裁判所も終に默過出來なくなつて、たうとう一九〇二年の五月九日を期して問題の金庫を開けることになつたのだが、すると、その前夜、テレサ・ウンベルトは、妹のマリイ・ドルニヤツクとロマンとエミルの二人の兄弟と一緒に、巴里から姿を消してしまつた。

翌朝、エミル・ゾラ、ワルデツク・ルツソオ、マタン記者、警察官、債權者の代表等が立會ひの上、封印を切つて金庫を開くと――空ではなかつた。洋袴の控鈕が一つ、大きな棚の中段に、うやうやしく載つてゐて、それはいまだに全巴里の笑ひ草になつてゐる。

はじめ、倫敦へ高飛びしたといふ噂が高く、スカツトランド・ヤアドが大分活躍したのだつたが、十二月になつて、ロマン・ドルニヤツクの署名のあるリヨン銀行の小切手が、西班牙のマラガで引出されたことから足がついて、間もなく一同は、マドリツドの陋巷に亞米利加人と名乘つて潜伏中を巴里から急行したコロン探偵によつて逮捕された。裁判は、セエヌ縣巡回裁判所において、翌一九〇三年の二月六日から八月まで續いた。ウンベルト夫人が、その半生を通じて詐取した金高は、被害者がすべて社會的地位のある人々なので、不明を愧ぢて名乘り出ないために、適確な額はたうとう判らずに終つたが、五百萬磅を下るまいといふ推定であつた。

判決は、テレサ・ウンベルト、五年。ロマン・ドルニヤツク、三年。エミル、二年。マリイ・ドルニヤツクは無罪だつた。

この芝居の大立物だつた例の金庫は、その後長くフランシエ街の古物商の店頭に異彩を放つて、好奇な巴里人の見物が絶えなかつた。

ウンベルト夫人の財產――それは、一個のズボンのボタンであつた。

文藝時評

正宗白鳥

「赤穗浪士」その他

「赤穗浪士といひ、またこの千阪兵部（上杉家の家老）といひ、簡單に自分の命をなげうつてまで護らうとしてゐるこの主家とは一體何だらう?。一人の主人の癇癖の發作によつて幾千人の者が路頭に迷ふ。また一人の强慾な老人の、いつ死んでも惜しくない命を護るために、幾十人かの若者の血が流されようとする。この當然のことして世の中に行はれてゐることに、作人は疑問の目を向けないわけに行かないのだつた。……どちらも馬鹿なことをしてゐるやうに思はれるのだつた」

これは、大佛次郎氏の大著「赤穗浪士」の中篇のうちに、作者の空想から生れたらしい、吉良方の快男子、堀田隼人といふ男の感想として書かれたものである。赤穗事件に關する作者彼自身の批判の態度の一面も、かうであらうと察せられる。この長篇の題目に、有り來りの「赤穗義士」といふ常套的敬語を用ひないで、「赤穗浪士」といふ文字を用ひたところにも、作者の用意が看取されないことはない。

「目にて目を償ひ齒にて齒を償へ」といふ諺は、ユダヤの昔に流布してゐたらしい。キリストはこれを排斥したのみならず、「人なんぢの右の頰をうたばまたほかの頰をも轉じてこれに向けよ」と、極端な無抵抗主義を說いた。しかし、原始時代から人間の心に根を張つてゐる復讐慾が、聖人のお說教ぐらゐで消滅しよう筈はなかつた。却つて、頑强な一つの宗敎の創立は、その信者をして、他の宗敎に對する憎惡の念を燃立たせ、復讐慾をも煽動することになつたのは、歷史が證明

してゐる。遊覽客を惹寄せてゐる歐洲の名所古蹟のうちには、昔の殘虐行爲の跡を留めてゐる牢獄が少くない。ロンドンのロンドン塔や、ローマのサンタアンゼロ城のやうな大規模のものは云ふまでもなく、普通の見聞人には何られない小牢獄を、幾つも見せつけられた私は、絢爛たる歐洲文明の花の蔭にひそんでゐる毒蟲を見せつけられた氣がした。

日本の神道は、思想の深さ淺さは兎に角、「いき／＼として明らかで」(荷田春滿がこの小說中で云つてゐる如く)あつて、後世の神道信奉者をそゝのかして、殘虐行爲を敢てせしむるやうな惡分子を含んでゐないのであつたが、由來日本人には、復讐心も、さう深刻ではなかつたやうに思はれる。それに關はらず、仇討といふものが、日本の名物のやうになつてしまつた。曾我兄弟や赤穗義士は、德川時代の民衆藝術たる歌舞伎芝居に於ける最も重要な登場人物となつた。左團次がロシアへ行つた時の出し物にも、先づ忠臣藏が選ばれたやうであつた。仇討とハラキリとは、最もよく日本の國民性を現はしてゐると、西洋人からいつの間にか極められてゐるらしい。巴里滯在中、私がある日、ループルの美術館を見に行つた時、其處の廣場で遊んでゐた子供達が、私の顏を珍らしさうに見上げて、二三人聲を合せて、「ハラキリ」と云つた。彼等の目に私が切腹をする人間として映じたのかも知れない。日本の軍艦や、それに乘つてゐる軍人も、白人種の目には、獰猛な仇討人種として映じてゐるのではあるまいか。

どういふ經路を取つて、日本に仇討思想が發達したのか、實際にはどれだけ仇討が行はれてゐたのか知らないが、舊幕時代の日本の芝居や小說などに頻繁に現はれて、見物や讀者の興味を惹いてゐた仇討は、大抵は、君のため親のための復讐で、西洋の芝居や小說に多い自己本位の復讐とは違つてゐる。そして、單純で原始的だ。赤穗四十七士の事件の如き、忠臣藏といふ名戲曲によつて藝術化されて以來、累代の日本國民の心に深く喰入つてゐて、その後のいろ／＼な作者が、同じ題材をさま／＼に形を變へ、尾鰭をつけて複雜にしたにかゝはらず、內容に於いて、どれもさしたる變りはえはしなかつた。解釋の取扱ひ方がちがつて來たのは、最近のことである。大佛次郎氏のこの「赤穗浪士」は、新代の新解釋に最も

富んだ、「新代義士もの」の代表作であるのらしい。默阿彌など舊歌舞伎系統の作者の義士外傳の脚本や、何十年來屢々新聞の續き物となつて出てゐた義士の講談や、あるひは浪花節に唄はれてゐた義士ものは、要するに武士道の表現に過ぎなかつたが、傳統の殼を破つて進みつゝある日本は、舊い國粹の見本であつた四十七士にも、現代に生きられる人間らしい新粧を施さないではゐられなくなつた。小山田庄左衞門といふ名は、私は少年の頃から耳目に觸れたことのなかつた名であつたが、十年ほど前に、中村吉藏氏の新作脚本「小山田庄左衞門」を讀んで、はじめて、脫走組の中にこんな男のあつたことを知つた。西洋近代の思想や藝術の感化を受けてゐる新人中村氏は、竹田出雲や默阿彌などの舊套を墨守しないで、その脫走男に同情の目を向けた。卑怯不義の人非人として取扱はないで、むしろ、干涸(ひから)びた主義に捉はれない人間味の豐かな男として、彼れを舞臺に活躍させてゐたやうであつた。先頃「改造」に出てゐた森田草平氏の「四十八人目」にもかう云つた脫退男の心理が描かれてゐたが、無論作者の好意がそこに見られた。大佛氏の新作中にも、小山田は閑却されてゐないで、一座の幹部俳優の役どころを振當てられてゐるが、ここでも、彼れは、見物の侮蔑の的になるやうな、惡人役にも道化役にもなつてゐないで、立派な立役になつてゐる。「おれたちは、あまり自分をなくし過ぎて來たと思ふ。しかし今度のことは、自分を沒却しなければ出來ないことだ」と、彼れは、仇討に熱狂されない口吻を洩らしたり、「その意味の命が生甲斐があるなら、赤穗一藩としての命(いのち)より大きいものがいくつかある。おれは考へる。その意味の命なら、世間の人間の最大多數の幸福のために生きるのが一番いい譯だらう。これはおれには出來ないことだが……その大きい命(いのち)の見地から見れば、今度のことは暴擧だらう」と、元祿期の人間には思ひもつかないらしい感想を、ふと洩らしたりしてゐる。

仇討同盟脫退者に對する好意ある新解釋を、興味をもつて讀んでゐた私は、「さうして見ると、今日いろ〳〵な社會運動仲間の裏切者や脫退者だつて、何十年か何百年か後の文學者によつて、同情ある理解を得て、人間味の豐かなものとされるかも知れない」と思つた。小山田庄左衞門や毛利小平太は云ふまでもなく、「忠臣藏」などでは斟酌のない侮蔑を受けた斧

九太夫や定九郎でさへ、昭和の其の作者からは、人間らしい取扱ひを受けるやうになつたのである。彼等も何百歳の後に知己を得たのである。

輿論はいつも感情に偏してゐる。……この事件が自分たちに取つてどんな意味があるのか、考へるなんてことはない。これはいつの時代になつてもさうらしい。……世間の舞臺廻しをするほどの男は、この俗衆の心持をよくつかんでゐて巧みにこれを利用してゐる譯だ。世間は結局理窟抜きに感情だけで動くのである。理窟が何か役をするやうに見えるのは、感情を修飾する甚しい看板になつてゐる時だけのもので、つまり看板だから人の目に立つといつたものではなからうか？」

作者の空想から捻出された陣十郎といふ變り物が、こんな理窟を云つてゐるが、この言葉は、赤穂事件の一面の批評になつてゐるとともに、大篇「赤穂浪士」の批評らしくなつてゐる。「理窟が看板になつて人の目に立つて」新らしさうに見える趣きがある。私はこの大作の上篇を、歐洲から歸航の船中で讀んで、大衆小説らしい筋立を見て、そこに、多少作者の才氣を認めたのだが、今度中下の二篇を通讀して見ると、縦横自在な筋の變化は見られなくつて、理窟ばかりが目立つて來た。作者は、千坂兵部といふ、人よりも家を重んじる舊思想代表人物を創造したり、柳澤吉保を「古陋な思想から脱した」新味ある政治家として取扱つたり、堀田隼人や蜘蛛の陣十郎のやうな、大衆小説向きの假設人物に、一癖ある人生の意味を帶びさせたりして、登場人物の配合はなか〳〵妙を得てゐるのだが、作者にはまだ描寫力が豐かでないため、筆が次第に説明に堕して、どの人物も浮上つて來ない。上中下と編を追うに從つて、筆が萎けて、場景も人物も生氣を失つてゐる。そこへ行くと、曲亭馬琴なんかは傑物であつた。自分の立案したゞけのものは、充分に貫徹してゐた。八犬傳でも「忠臣藏」でも、上べは、型の如き忠孝仁義を主題としながら、裏には、人情の寫實をしてゐるところが面白いので、「赤穂浪士」にも面白いエピソードを忘れてはゐないのだが、それ等の挿話が全篇を引立てるほどの魅力を有つてゐない。柳

淨家へ奉公に上つて主人に目をつけられた幸といふ娘と庄左衛門との關係は、書出しの、青伜が遠眼鏡で見染めるあたりから、讀者の興味をそゝつて、幸父子の浪宅の場など、講談の一節が今様にうつされてゐる面白さがあつたが、これも、次第に描寫ぬきの說明になつて、飽氣なく終つた。

で、部分々々に些少の興味はあつたが、全體から云つて、私は讀みながら退屈したと云つていゝ。かういふ小說がどうして多數の讀者に喜ばれるのかと疑つた。我々年少の頃、田舎の小屋掛芝居に、いろ／＼な狂言を演じて、見物が來ないと最後の手段として「忠臣藏」を出すのが常例になつてゐたが、昭和の小說讀者も、赤穗事件には傳統的に馴染があるので、大佛氏の大作も、題材の上で得をしてゐる譯だらう。しかし、元祿の赤穗事件が大衆の心を惹くのも、やうやく終りを告げかけてゐるのではないかと思はれた。

「君父のために讐をむくゐる」といふ眼目の熱意が、この小說には、著るく缺けてゐる。聰明な新人である作者は、例の作人をして、「どうせ、馬鹿の集まりさ」と、復讐讃美の世間を嘲らせてゐるやうに、義士の行爲に對して、有振れた感激をも有つてゐないためか、內藏助をはじめ諸義士の大目的遂行の經路が空々しい。かつて私はデユーマの巖窟王を引合ひに出したが、あの燄に燃えてゐるやうな熱烈な復仇心に比べると、「赤穗浪士」のは、甚だしく生ぬるい氣がする。かれは端的に自己の恨みを晴らさんためであり、これは不倶戴天など云はれるある道德の實踐であることが、當事者の心構へに相違を來たさせたのであらうか。少くも現代の作者は、(讀者も同じく)「忠臣藏」好みの復讐には、眞心籠めて行けなくなつたのであらう。脫退組「半端者」の一人である奧野將監は、內藏助を、「つまりは持前の派手好みで大芝居を打たうとした」男だとして、「亡君の御爲と云ふことはない、彼一人が私情のために輕卒に、血氣の若者たちを動かしてゐると云ふだけのことである。誰れが何と云はうが、またその名目を何に取らうが、それだけは爭はれない。遊びに誇張があつて派手なのと何の撰ぶところがあらう。そのために、將來のある者を殺す。そんなことに思慮ある者が一味出來たことか？」と

思つてゐる。

首風でも何でも、「復讐」といふ理想に殉じた一團の人間の行爲を、傍觀的の冷かさをもつていろ／＼に敍述して、批判的抑鬱を頻繁に點出させたことを、少し大袈裟かも知れないが、立入つて研究して見ると、この作者は、「赤穗浪士」を借りて、現代日本の世相の一面を諷刺しようとしたやうにも思はれないことはない。それは大石など歴史上實在の人物の現代化よりも、陣十郎や作人など、作者空想裡所産の人物の言行によつて察せられる。陣十郎曰はく「いつの時代になつても、自分の意見はなくつて、勢ひの強い側の大勢の人間が考へるとほりに考へ、たゞわい／＼騷ぐだけの人間の數は、自分だけの考へを守る者にくらべて、比較にならないほど多いのである。それが自分のためにならうがなるまいが、このわい／＼連に取つては問題ではないのである」と。

作人は作人で「槍を立て挾箱を揃へた大名小名の行列を見る」と、五體の血が煮えるやうに思ひ、「憎しみだらうか。呪ひだらうか」と、自分の心を省み、「いや、たゞ、のろ／＼と、威儀を正して隊伍を守つて行くこの一列に、眞面目た面に、太平無事な徒士の顏に、苛立たしさが込み上げて來るのだつた。叩き毀すより外はないやうな、愚劣で恥知らずの見世物を、面と見せつけられてゐるやうに感じるのだ。その考へだけでも腹が立つた。この整然とした列を、ばら／＼に掻き亂して見たい」といふのが、彼れの心持であつた。「叩き潰せ」と、どこかで荒々しく叫ぶ聲がしたと云つてゐる。

かういふ言葉や行動も現代の諷刺になつてゐるのだが、この作者は、底にしつかりした自己の主觀を有つてゐないで、あまりにいろ／＼な主義思想の言説に動かされ過ぎて、あゝも思ひ、かうも思ひしてゐるために、諷刺がどちらつかずになつて、從つて讀者に迫る力を失ふことになつてゐる。

「太平無事な面を叩き潰せ」と、大名小名の大ブルジョア小ブルジョアに對して、憎しみ呪ひを發するとして、その憎しみや呪ひの力が、現代の日本でどれほどに強いのであらうか。どれほどの強い憎みや呪ひが、今日の文學に現はれてゐるこ

のであらうか。

「日本プロレタリア傑作選集」と題する叢書物を、十二冊も、發行書店から寄贈されたので、私も、新興藝術の代表作を味ふつもりで、暇にまかせてぽつ／＼讀んでゐる。一月號二月號の雜誌にも、「プロレタリア作家」として分類されてゐるらしい、私には馴染のない名前の作家の小説が滿ち／＼て、當代の流行を示してゐたが、それ等の多くを、私は通讀しかねた。昔、自然主義文學の勃興時代に、國木田獨歩の「竹の木戸」を讀んで、「何だつて、炭俵一俵盜んだゞけの面白くもないことを種にして、貧乏たらしい小説を書くんだらう」と云つて、そんな者を有難がる讀者の量見も腑に落ちない顏してゐた舊人があつた。私は、また、今年の一二月號の小説のうちの幾つかを讀みあぐむとゝもに、それ等を眞顏で稱讚してゐる新聞雜誌の批評を讀んで腑に落ちなかつた。「竹の木戸」は、兎に角、獨歩の傑作であつて、簡潔な筆で、貧乏大工夫婦の心理が鋭敏に剔抉され、その貧しい家の周圍も的確に描寫されてあつた。自然主義文學としてあの頃流布してゐたものも、大抵は單調で乾燥無味で、「竹の木戸」ほどの出來榮えのあるものも、そんなに多くなかつたのだが、一二月號の多くの小説は、あの頃の小説に輪をかけたまづさである。藤森氏の「蜂起」は型に入つた作品であるにしろ、とに角しつかりした所があつて、氣の利いた臺詞も少くないが、その他の作家には、區役所の代書も勤まりさうでないものもあつた。痴者が喧嘩をする時、氣の利いた警句一つ云へないで、「馬鹿野郎」「こん畜生」を連呼するよりほか能のないことがあるが、さう云つた小説もあつた。

今度、「傑作選集」で、小林多喜二氏の「不在地主」を讀んだ。これは昨年中の傑作として評判の高かつたものだと、聞かされてゐたので、北海道言葉の讀みづらいのを我慢して讀通したが、私にはちつとも面白くなかつた。「面白い」とか「面白くない」とかいふ評語は、かういふ小説に對して當を失してゐるかも知れないが、讀者たる私は、この小説から何の感激

をも得られなかつた。不在地主が惡鬼なら、その惡鬼の面を紙上にあり〳〵と浮べて見せてこそ、讀者をして鬱を晴らさせるのであらうが、これではたゞのお話だ。いろ〳〵な事が平目に書かれてゐるが、上べの事件だけで、農民の人生苦が底から染み出てゐるところがない。すべて上つ調子である。私は讀みながら、現實の記錄とさへ思はれなかつた。

村山知義氏の小說は、一體にチョコマカしてゐるが、多少の清新な藝術味が感ぜられた。「妥協はない」は、鏡花氏初期の作品である「夜行巡査」などの所謂觀念小說が連想された。「立志傳中の少女」や「悲壯なエピソード」もユーモアがあつて面白かつた。第一、若い者が妥協しないのはいゝ。「必要な際にはいくらでもウソをつく」「不必要な人情を持たぬ」ところの女中に、作者が同感してゐるらしいのも面白い。これは、「成功しない立志傳中の少女」について云はれるだけではなく、作者は一步進めて、「不在地主」にでも、他の資本家についてもさう云つていゝのである。お互ひに妥協しないで、「不必要な人情」を棄て、一は他に對して、熱烈なる憎惡怨恨を燃やすがいゝ。……佛蘭西の歷史を讀んで、私も、妥協のない人生の一場景に感慨を催した。

葉山嘉樹氏の「淫賣婦」は、以上二氏の作品よりも讀應えがした。讀後にも私の心にこびりついたものがあつた。……なほ、この「選集」には、異つた面白いものが收められてゐるかも知れないから。私は、暇ひまに、あれやこれやを覗くことにしよう。

完譯「アラビアンナイト」に關する谷崎氏の感想のうちに、在來の日本文學には幻想が缺けてゐると云つてゐた。奔放自在な幻想の現はれも乏しかつたであらうが、しかし、精巧な寫實文學は、もつと乏しかつたのではないかと、私には思はれる。「源氏物語」など平安朝文學は、却つて寫實の分子に富んでゐるが、近代の文學には、時代や人間の眞相を深く強く描出したものが少かつた。明治になつてからも、「書生氣質」以來、硯友社の小說、天外氏の小說など、寫實につとめては

ゐたが、描くところがまだ皮相を免かれなかつた。寫實といふものは、たやすいやうで六ヶしいものである。「不在地主」その他の最新の文學だつて、作者の見る目が正確であり、作者の筆に狂ひがなかつたとは思はれない。自分自身の日常生活を描いてさへ、眞を極めることは、容易でないのだ。時代や他人の實相がさう無雜作に書けてたまるものか。

世界の藝術史上に最もさんらんたる光彩を放つてゐる、伊太利の文藝復興期に關する幾つかの著述を、私は讀みながら、沈衰した自己の心境にをり／＼潑溂たる生氣の注がれる思ひのすることがある。その時代の大藝術を正面から堂々と鑑賞したものに興味があるばかりでなく、時代と人とを、表裏とも有りのまゝに書いたものに、私は、今まで「ルネッサンス」といふ神聖な文字によつて想像してゐた感想とはまるで違つた眞人生の妙味を感得するのである。數百年前の伊太利の名人巨匠も、今日の日本の紛々たる作家も、同じく、「人間は人間だ」と思はせられるのである。嫉妬反目の凄さ、「おれがく／＼」の自己認識慾、金錢慾など、空疎な昔の東洋畫人傳中の、影の薄い人間とはちがつてゐる。あの堅實な大オチ・アンも、若い門弟のチントレットの拔群の技術に驚くとゝもに、「こいつ、おれよりえらくなるかも知れん」と、直ちに破門して窮地に陷れた。あの莊嚴無比の「最後の審判」を描いたミケランゼロが、いかに、貪る如く金を欲しがつたことか。無類の鑄金家、ベンベント・チエリニの詳細な自傳は、ルネッサンス時代の世相、作家の日常生活を知るのに最もいゝ大著作である。その無遠慮な叙述は、我々をして、その時代に生きてゐる如き思ひを起させる。瞋恚の恨みをも用捨しない伊太利人氣質が露骨に現はれてゐるが、これを見ると、日本の復讐心なんか、まだ弱々しいのである。仇討をもつて、日本人特有野蠻の現れとする白人種の見解は皮相である。チエリニなどのあの頃の藝術家の生活は殺のやうであつた。「おれは恐れを知らん」と、彼れはたび／＼云つてゐる。七十年の生涯は、白刄を振翳して、生死の巷を通つたのであつた。

中央公論二月號所載、相馬御風氏の戲曲の題材になつてゐた良寬の如きは、東洋の藝術家の理想的標本として、我々の尊

敬を價するのであるが、チェリニの如くに生きるのも、生甲斐のある生涯であると、私には思はれる。

この「自傳」を讀耽つてゐるところへ、中村正常君が訪ねて來た。私に取つては、生面の人であるが、新進作家として認められかけてゐる人らしい。

「ナンセンスの文學といふのが流行つてゐるさうだが、どういふ作家のを云ふんです？」

「井伏鱒二君や私のものがさう云はれてゐます。あなたはまだお讀みになりません？」

「若い人のものは讀みづらいので……」

「年を取つた方にも面白いだらうと思ひます」

私は、この新作家の顔を見たゝめに、その作品を讀む氣になつた。それで、中村君が歸つて行つたあとで、一月號の「新潮」を搜出して、同君作の「コスモス女學校」といふ戯曲體の小品を讀み、次手に、井伏鱒二君の「ジョセフと女子大學生」とを讀んだ。何でも讀んでゐる私にも、かういふ作品は物珍らしかつた。無論珍らしいだけで、さして面白くはなかつた。少女雜誌の小品と云つた感じがする。多少のユーモアがあるが、それもあまりに淡々しく、讀者の胸をすかせること平野水にも及ばない。ナンセンス文學も、文字通りに、たゞのナンセンスであつては詰らない。しかし、これ等の變り種も、發育したら面白い花を咲かせるかも知れないから、あまり早くはげしい批評は下されないと思ふ。

私は、左右を見て、日本は永久に群小作家の亂立で終始するのではないかと疑つてゐる。そして、チェリニなどの、ふて〲しい強さに缺乏してゐる。如何ともし難い國民性の相違であるか。

編輯者雜記

×

なんと素晴らしい中央公論の賣行よ。一月も二月も發賣三日にして賣切れ。再版間に合はず、追加の註文に應じきれない。今月は大いに増刷しておいたが、讀者諸彥の御諒恕を乞ふ次第だ。

×

またしても三月號のこの編輯！　我讀者の期待を滿足せしむるあるを信ずる。他雜誌と比較して見られよ。その內容、その頁數を。斷然たるを誇るもの豈たゞに編輯子のみならんやだ。

×

この雜誌の市場に出る頃は總選擧の決戰も終つてゐるであらう。政民いづれが勝つにしても我等の關せざるところだ、無產黨の總進出こそは我等の一大關心事だ、而もそれが內閣を組織するのはいつ頃のことであらうかわれらの「無產黨內閣の出現？」は時にとつての超特大記事でなければならない。

×

向坂氏の「現代インテリゲンチヤ論」は聰明そのものゝ時論だ。資本主義第三期の大學生論だ。三月、卒業期を控えてウヂヨ〳〵と就職に頭を惱ます者への痛烈な裁斷だ。

×

その他新進大村氏は、犯罪觀念の階級性を闡明して、遂にブルジョア法學特に刑法の牙城に迫り、野呂氏は日本の帝國主義的軍縮方針に向つて徹底曝露を企て、東京帝大の新銳土屋助教授は、京都帝大の本庄榮治郞教授の立場に對し粉碎を企てた。更に又武田氏は、現代無產階級的淺草を映畫的に展開して居る。茲に一列のマルクシズムの屈強な陣營を見よ！

×

勝つにせよ。負けるにせよ。（キツト負けるにきまつてゐるが）馬場氏の「大政友會論」は時にとつての皮肉だ。

×

今東光氏の戲曲「皇帝」は百餘枚の力作、文壇の記錄的會心作だ。岩藤氏の「工場勞働者」は氏の生活的大溶鑛爐を通過した熱情作だ。淺原氏の「ある一群の鼻」は崩壞せるインテリゲンチヤのカリカチユアだ。

×

「千夜一夜」はお蔭で、大成功裡に〆切つた。まだ、あとから〳〵と追加の申込みを受けて忙殺されてゐる。機會は二度と來ないから、なるべく特志家の希望に應じたいと思つてゐる。これで、豫約物刊行の意義も貫徹したといふものだ。普く讀者諸君に感謝する。

×

「友愛結婚」は發賣即日二萬を賣盡した。今や再刷を急いでゐる。問題も問題であるだけ

に非常な興味を以て迎へられてゐるらしい。嬉しいことだ。「西部戰線」といひ「友愛結婚」といひ、飜譯物全盛の記錄を作つたのは、我社だ。これも偏へに讀者の庇護だ。

×

「友愛結婚」は本を賣るばかりが目的ではない。此結婚革命が我社會にいかに取容れられるかが問題なのだ。到る處で論議の喧しいのを幸ひ、三月、「友愛結婚批判講演會」を開いて、大に賛否の論を戰はせたいと思つてゐる。

×

なほ、マルキストも企てんとして果たし得ず、學閥的經濟學者も敬遠して居た本誌連載の「資本王國の財産調べ」は、異常の好評裡に本號を以てうち切る。誠に本稿はかかる方面に於ける劃期的な本格的な得がたい文獻であつてあくまでも社會的に必要であるし、又之を翹望する聲も餘りに高い故に、本社出版部では訂正增補の上近々之を單行本として發賣する。

熱き御期待を乞ふ次第である。

出版部だより

バートン本をテキストにした本社の豫約出版千夜一夜は、その果斷と勇氣が讀書子の好尙に投じ斷然豫想外の好成績で締切つた。アラビアンナイトが單なる童話でないといふ事を立證するのはバートン本より他にない。此點に深い意義があるので、檢閲當局の方からも『劃期的の大事業なんだから、細心の注意を拂つて、終刊まで無事に完了出來るやう…』と非公式ながら理解ある配意を頂戴してゐる。森田草平氏が中央公論社版千夜一夜を讀して『自分が數年前に飜譯したレーン本よりも、今度中央公論社で譯されるバートン本の方が凡ての點に於て優れてゐるのは事實で…云々』と言明されてゐるのは新聞紙上で諸君も御存知でせう。ところが最近、某刊行會なるものが、この森田氏譯千一夜物語の豫約募集を始め、バートン本がどうだとか、禁止本云々など、變に思はせ振りな言辭を弄してゐるので、讀者の方から種々御注意を受けましたが、此種商人の商法に就ては識者擧つて非難されてゐるのだから、本社も一切無視して、敢へて問題にしない事にしました。御諒解を。

新刊「友愛結婚」は果然センセイションを起しました。まさに西部戰線に亞ぐ評判です。初刷再刷賣り切れて、目下三十版を印刷中です。

大宅壯一氏の「文學的戰術論」も好評、此書の出版によつて、日本文壇は完全に『廻れ右』をするでせう。

堺利彦氏の「貧富戰と男女戰」は無產青年團の政治讀本として續々大口の注文を受けつゝある。

高橋龜吉氏の「資本王國の財產調べ」は三月末發行の豫定。

プロレタリア大衆的小說の白眉として貴司山治氏の「ゴー・ストップ」を近刊します。



皇帝

——二十六景——

今東光

人物

子楚（後の秦の莊襄王）
邯鄲の舞姫（始皇帝の母太后）
呂不韋（後の文信侯）
秦王政（後の始皇帝）
燕の太子丹
李斯（後の左丞相）
蒙驁（老將軍）
王騎（將軍）

麃公(將軍)

嫪毐(後の長信侯)

昌平君(宰相)

昌文君(若き將軍)

茅焦(遊客)

王翦(將軍)

楊端和(將軍)

鞠武(燕の大臣)

樊於期(秦の亡命將軍)

秦武陽(燕の勇士)

荊軻(刺客)

蒙嘉(始皇帝の寵臣)

夏無且(侍醫)

王綰(宰相)

馮劫(御史大夫)

范紀良(革命的儒生)

孟隆德(咸陽の富豪)

姜女(その娘)

春瑛（その侍女）
趙高（後の中車府令行符璽事）
小坊主
咸陽の老婆
その孫娘
壺作りの爺
趙の國の市人
趙の國の兵卒
その隊長
人質の貴公子
侍醫
秦の國の市人多勢
秦の廷臣多勢
勞働者
農民
儒生
宦官
秦の國の兵卒

その隊長
人夫多勢
工事監督
秦の美妃多勢
博士多勢
青年
その他多勢――

第一景

紀元前二百五十年頃。
趙の國の都、邯鄲の狹斜の巷。秋の午後のことである。小樓のある艶めいた家。その前には柳の木などが植つて、物倦い樂器の音が流れて來る。
所謂、磁州の光澤のある白い磁器を驢馬に積んだ商人などが柳の下に休んでゐる目の前を、のびやかな顏をした邯鄲の遊冶郎などが往き交ふてゐる。
小樓の簾が幽かに卷き上つて、十五歳ほどの目覺めるほど美しい女が、町通りを眺めてゐる。それを逸早く見つけると

市人一『あ。あれだ………』

と叫ぶ。もう一人が伸び上るやうに

市人二『何だ。何だ』

それで多勢の行人が歩みを止めて、小樓の女に見入る。

市人三（知つた風情に）『何を騒いでゐるのだ。あれが有名な邯鄲の舞姫だよ』

市人四（感嘆するやうに）『何といふ美しい舞姫だらう』

市人五『だから、あの美しい女のために趙の國の若い貴公子達が、湯水のやうに金を費つてるんだよ』

市人六『誰が金を費ふと大きなお世話さ。しかしあの女はまだ誰の物でもないのだ』

市人七『あの氣高い美しさを購ふことが出來るなら、鉅萬の富も惜しくはないて』

市人八『ところでお前さんの顔を見ちや、あんまり金を費ふてえ方でもなささうだね』

市人九（突拍子もなく）『お。あれッ。笑つてるぜ』

市人十『殺ろかしちやいけねえ。この人は——しかし何といふ朗らかな笑顔だらう』

市人十一『それにあの眞珠を竝べたやうな皓齒を見ろよ』

市人十二『茘枝のやうな唇とは如何でげす』

市人十三『だが。それがどうしたといふんだ。あの美しい舞姫は、何でも東の國から來た金持ちの能者だといふことだが』

この話で人々は意外な面持ちをしながら一團となる。その中に餘り怜悧らしからぬ一人の若者も交つて、まるで魂の拔けた人のやうに茫然と小樓の舞姫に見惚れてゐる。

市人十四『そ。それは本當のことかね』

市人十五『その事なら僕も薄々は聞いてゐる。その異人は此の邯鄲の都をそつくり買ひ取つて仕舞ふことが出來るほどの大金持ちださうだ。その男が何所の何人であるかを誰も知らないのだ。しかしその男があの美しい邯鄲の女を易々と買ひ

占めて仕舞つたことは本當らしい…………」

市人十六「その金滿家とは誰だらう」

市人十五「趙の王樣の宮廷にも出入りしてゐる呂不韋といふ人だよ」

若い男「…………あの石のやうな舞姫の心は、金でなくては買へないのかしら」

　と呟く途端、若者の背後に忍び寄つた赤い縮毛の男が、ポンと肩を叩きながら

異人「公子よ。必ずしもさうではありません」

若い男「私を公子と呼ぶ貴方は、一體、誰ですか」

異人「秦の國の公子、子楚樣と存じあげてゐる呂不韋と申す者でございます。御見知り置き下さいますやう…………」

子楚「おう。貴方が呂不韋殿ですか。仰せの通り、私は趙の國へ人質となつてゐる秦の子楚です」

呂不韋「公子よ。大分、御意に召したやうですな。へ…………(と卑しく笑ふ)」

子楚「私は今まで、あのやうに美しい女を見たことがありません」

呂不韋「それでは如何でございましよう。あの女の舞でも御覧に入れたいと存じますが」

子楚「けつこうですね」

　子楚は蹌踉と呂不韋に導かれながら

——暗轉——

第二景

邯鄲の舞姫の豪奢な寢室。

桃色のほのかな華燈に照らし出された寢臺に、子楚は輕やかな疲勞を覺えて寢倒れてゐる。蜀紅の錦を身に纏つた舞姬が、精巧な鏡に向つて亂れた髮を直してゐる。窓の外は煙るやうな雨である。

子楚『雨のやうだね』

舞姬『えゝ』

子楚『靜かな秋の夜の雨だ…………それにしても私は、まるで夢を見てゐるやうな氣持がするよ』

舞姬『何故でございませう』

子楚『幸福で一杯の時は、却つてそんな氣持ちがするものなのだ。私は、あの高殿でお前を見た瞬間から、趙の國へ人質となつたことを後悔しなくなつたもの………』

舞姬『あのォ。それでは秦の國へはお歸りにならない御心算なのですか』

子楚『お前の居ない國へかい。私にそんなことが考へられるだらうか』

舞姬『でも。公子樣』

子楚『あ。さうだつたね。明日からは再びお前を、この私の双つの眼で見ることが出來るだらうか。いや。さうぢやない。呂不韋が眼を覺した刹那から、お前はもう私の物ではなくなるのだ』

舞姬『妾も、呂不韋を思ふと恐ろしく、貴方を想ふと悲しくなりますの』

舞姬は子楚を背から抱くやうにすると身を顫はせて泣く。

その瞬間。

遠くから

呂不韋の聲『公子…………秦の公子…………』

と荒々しく叫ぶ聲が、次第に近くに聞えて來る。舞姫はガバと跳ね起ると棒のやうに硬直する。子楚は醜いほど狼狽して隠れ場所を探し求める。

子楚「お――。呂不韋だ！」

舞姫「眼を覺したのです。どうしませう。公子様。こんな所を見つけられましては」

子楚（胸顫ひしながら）「そ。そ。さうだ。此所はお前の寢室だつた」

舞姫（戰きながら）「あれッ！　だん〳〵足音が………」

呂不韋、紅帳をかゝげて飛び込んで來る。顔に怒氣を現し、手に物凄い青龍刀を拔き持つてゐる。

呂不韋「公子よ。こ。こ。これは何の態だッ！」

子楚（わな〳〵としながら）「面目次第もありません」

呂不韋「ふん。面目ない。面目ない筈だ。これが賓客としての主人に對する禮ですか。私を盛り潰して置いて、主人以外の何人も立ち入ることを禁ぜられてゐる閨房に、ぬく〳〵としてゐたのは、どう御說明なさるのですッ。御返答によつては血を見ずには收まりませぬぞッ！」

舞姫、呂不韋に取り縋りながら

舞姫「それは公子様がお悪いのではありません。妾が………妾が無理にお招きしたのです」

この返答に呂不韋は一瞬よろめく。

呂不韋「お。お黙りッ。私はお前に說明を求めてゐるのではないのだ」

舞姫「妾を・・・・・・妾を斬り殺して、御腹立ちを鎭めて下さいませ」

呂不韋「さうか。殺すならお前ばかりを殺さない心算だ」

子楚(觀念したやうに)『呂不韋殿。お詫びの言葉もありませぬ。私は生きて樂しみの少ない身體です。どうぞ御存分になすつて下さい」

呂不韋「アッハ………」

と突然笑つて、青龍刀を鞘に收める。

呂不韋『驚いたでしよう。公子よ。私は大方こんなことだらうと思つて居りましたよ。貴方は、そんなにも此の女が御氣にかなひましたか』

子楚(熱心に)『無論です』

呂不韋「まあ。お掛け下さい。ゆる〳〵と此の勘定を付けましよう」

と不敵に傍の椅子に腰かける。子楚も氣味惡さうに椅子に着く。

呂不韋『公子よ。私は此の女を貴方に差し上げましよう』

子楚(驚喜して腰を浮かしながら)『そ。そ。それは本當ですか』

呂不韋『その代り、私とはどんなお約束が出來ますかな』

子楚(幾分か不安氣に)『何でも仰有つて下さい』

呂不韋『もし此の女が、男の子を生んだら貴方の正しい跡取として下さい。女の子でしたら私が頂きましよう。それをお約束なさいますか』

子楚『おう。譯もないことです。私は屹度お約束を果すでしよう』

呂不韋『貴方がお國にお歸りになり、秦の王位を繼承なさいましたなら、私を宰相とするお約束が出來ますかな』

子楚「しかし私は秦の國へ歸ることが出來るでしようか。私は時とすると、このまゝ趙の國の人質として老ひ朽ちて仕舞ふのではないかと悲觀してゐるのですが――」

呂不韋「私が逃がしておけましようさ」

子楚「おう。貴方が」

呂不韋「貴方は邯鄲の町を歩くやうに容易に逃げられますよ」

子楚思はず舞姫を抱き寄せて

子楚（熱情的に）「あゝ。幸に秦の王となつた時、私は貴方を父として崇めずにはゐられないだらう」

呂不韋は座を立つと恭々しく王に對する拜禮をする。

呂不韋「臣下の禮をお受け下さいまし。有難ふございます。公子。いや。秦の王よ。その御言葉を何時かは必らず御役に立てゝいたゞきますぞ。ハ………」

呂不韋の笑ひ聲で――

――暗　轉――

第三景

星の明らかな夜。

趙の城門の外。そこら一面はうら枯れた秋草が髮の毛のやうに茫々と生へてゐる。遠くに夜を警める衞兵の擊柝の音がする。

闇。

小門から子楚が邯鄲の舞姫を驢馬に乘せ、自ら手綱を取つて靜かに脱出して來る。城門の楼から腸をちぎるやうな笛の音が聞えて來る。

子楚「姫よ。此所まで逃れて來れば、もう大丈夫だ」

舞姫「妾はまだ胸がこんなに動悸して居ります」

子楚「この道が秦の城門までとどいてゐるのだよ。姫」

舞姫（嘆ずるやうに）「あゝ」

子楚「おう。笛の音がする。姫よ。あの人だ」

舞姫「………」

子楚「どうしたのだ。（と覗き込んで）泣いてゐるのか。お前は何が悲しいのだ」

舞姫「あんまり嬉しいので胸が切ないのです」

子楚「私もさうだ。（感慨深く）長い、辛い、苦しい人質の生活から解き放されたのだ。私は大きな聲で怒鳴りたいやうな嬉しさだよ」

舞姫（幽かに笑つて）「まあ。あんなことを仰有つて」

子楚（胸を打つて）「趙の國の歌謠は何といふ寂しい律呂だらう。私はあんな陰氣な節は大嫌ひだ。私は毎日、あの厭な歌聲を聞かされてゐたんだ。しかし。しかし明日からは、朗らかな秦の國の調べが聞かれるぞ。そんな歌は止めて仕舞へ」

舞姫「呂不韋も別れを惜しんでゐるのでしよう」

子楚「笛が止んだやうだ………」

舞姫（急に不安さうに）「何でしよう。あの物音は」

城内の騷然とした物音が潮のやうに聞えて來る。續て一聲、角笛が鳴り渡ると一層どよめきが湧き起る。

子楚「まさか逃亡が露見したのではあるまい。いや。しかし」

舞姬「どうしましよう」

子楚「おッ」

城門、颯と開く。

松明を手にした趙の兵卒の一隊が、口々に何か叫びながら追つて來る。子楚それを見ると逸早く逃げる。

舞姬「あッ。子楚よ。妾を捨てゝ逃げるのですか――」

しかし子楚は見向きもしない。舞姬は驢馬に乘つたなり、兵卒に見出される。

兵卒一「居たぞッ」

その叫び聲に多勢の兵卒に取り圍まれる。

兵卒二「女だけ捕へたぞッ」

兵卒三「おう。凄え美人だ」

兵卒共は舞姬の被衣を剝き取ると、指で頰を突いたりして大騷ぎする。

隊長「馬鹿ッ。何をしとる。大切な人質はどうした」

兵卒四「影も形も見えません」

隊長「間抜けッ。それで報告になると思つてゐるのか。草の根を分けても搜してみろ」

兵卒五「しかし此の女が、人質の行方を知つてゐるかもしれません。隊長」

隊長「行き先ぢやない。在り所の問題だ。しかし儂は此の女を主人の手に引き渡して來よう。その間もしつかりと探せ」

兵卒六『はつ』

舞姫泣きながら隊長に引つ立てられて城内の中に消えて行く。

兵卒等は一通りその邊を槍などで突きまくつてから、さつさと引き返して行つて仕舞ふ。

兵卒七『べら棒め。野郎なんぞ探してられるもんけえ』

兵卒多勢『まつたくだ。アハ………』

兵卒共の立ち去つた草叢の中から、のつそりと子楚が現れる。

子楚『偶然か。それとも計畫か。私にはわからなくなつて來た………』

灯の輝く趙城のあたりを眺め入りながら、やがてとぼとぼと歩き出す。

――暗　轉――

第四景

趙王の奥殿の内庭。

數奇を凝らした庭園は桃の花が匂やかに咲いて、春たけなはの景色である。

趙の國に人質として送られて來た數人の子供達が、美麗な衣服を纒うて、鞦韆に乘つたり、鞠投げをしたり、楊弓などで遊んでゐる。どの子も十歳そこそこに見える上品な可愛い貴公子達である。

子供一『やあ。また政と丹とが喧嘩してるよ』

弓を持つた二人の子供が激しく摑み合ひをしてゐる。

子供二『しつかりやれ。やれ』

子供三「どつちも敗けるな」
子供四「政よ。丹をやつつけちまへ」
子供五「丹よ。政なんか蹴飛してしまへ」
子供六「止したまへ。おい。何故けしかけるんだ。お止しよ」

と割つて這入る。政と丹の二人、息をはづませながら睨み合つてゐる。

子供六「どうしたの」
丹「うん。此奴、狡いんだもの。二十歩で射る約束したのに、僕が一寸脇を向いてる間に」
政「嘘だい。僕は約束通り二十歩で的を射當たんだ。すると丹の奴が口惜しがつて擲つて來たから、やつたんだ」
丹「嘘吐け。父無し子」
政「何だつて、僕にはちやんとお父さんがあるんだぞ」
丹「ぢやァ誰だい。言つてみろ」
政「秦の莊襄王だい」
丹「嘘だい。お前なんか王様の子だもんかい。呂不韋の子だつて言つてたぞ」
政「ぢやァ誰が言つたんだ。言つてみろ」
丹「皆な、さう言つてらい」
政「お前こそ何だい。人質のひねくれ根性。僕が國へ歸つたら、お前の國を攻め滅してやるから、さう思つてろ」
丹「僕だつて！ 燕の國へ歸つたら、乾度お前の國へ攻め込んでやるからな」

政「その言葉を忘れるなよ」

丹「お前こそ」

子供六「やあ。政のお母さんが來たぞ」

丹「逃げろ」

子供多勢「逃げろ。逃げろ………」

と言ひながら一散に奥庭の方へ馳け込んで行く。一人ぽつちになると政はしくしくと泣き出す。

邯鄲の姫「まあ。政よ。また泣いてるの。屹度喧嘩をしたのでしよう。(涙を拭いてやりながら)あれほど喧嘩などしてはいけないと言つてるのに」

政「だつて、丹の奴が憎いことを言ふんだもの」

邯鄲の姫「人の言ふことなど氣にするものぢやありません。でも何と言つて」

政「父無し子だつて」

邯鄲の姫「まあ。それで坊やは何と言ひましたの」

政「坊には秦の荘襄王といふお父さんがあると言つてやつたの」

邯鄲の姫「それで丹は閉口したでしよう」

政「うゝん。さうすると丹は嘘だつて」

邯鄲の姫「えッ」

政「坊は呂不韋の子だつて」

邯鄲の姫「あッ」

と言ふと危ふく卒倒しさうになる。

政「それ、本當。お母さま」

邯鄲の姫「まあ。何といふ子供らしくないことを言ふ丹でしよう。いゝえ。貴方は立派に秦の莊襄王のお子樣ですよ」

政「ぢやアどうしてお父さまは僕を迎へに來て下さらないのかしら。此所は嫌だ」

邯鄲の姫「お母さまだつて此所は厭ですよ。妾達は秦の國へ歸りたいと思つてゐても、もう少し辛棒しなくつちや歸れないのです。坊も早く大きくなつて偉い人になると歸れるのですよ」

政「坊は王樣になるんだ。さうしたら彼の丹の奴を攻め滅ぼしてやるんだ」

邯鄲の姫「おう。お母さまはその一言をどんなに聞きたかつたかしれないのですよ。王におなり。秦の王におなり」

と言ひながら抱き寄せて頰擦りする。

邯鄲の姫「あゝ。この子は妾に似て權力を求めてゐる。さうして妾の望んで得られない權力を摑む子に相違ない。この子が誰の子であらうとも關はない。けれども此の子は王でなければならないのだ……」

――暗轉――

第五景

秦の都の咸陽。

陰鬱な秦王の宮殿内の病室。窓の外には紫陽花が次第に色褪せて、それに絹絲のやうな五月雨が音もなく降り注いでゐる。

莊麗な寢臺に莊襄王が打ち臥してゐる。枕頭には宰相の呂不韋が侍立し、醫師が脈を見てゐる。

呂不韋『どうだ。御容態は』

侍醫『はい。太子の御着きが急がれますで御座います』

呂不韋(顏を曇らせて)『さうか』

侍醫は一禮して悄然と去つて行く。

莊襄王『呂不韋よ』

呂不韋(はッとして)『は。はい』

莊襄王『太子政は未だ見へぬか』

呂不韋『もう。程なく參殿のことと存じまする。傳令によりまするると太子と御妃とは六頭の御車で、趙の國を御出立遊ばされたさうでございます』

莊襄王『さぞ太子は大きくなつたらうな』

呂不韋『御意。太子は本年お十三歲にならせられました筈でございます』

莊襄王『さうだつたな。あれからもう十三年も經つたかな』

呂不韋『私などは殆んど年の經つのを覺へませぬが、御小さい御方を見まするると、如何にも歲月に遑ないことを覺へまする』

莊襄王『さうだな。歲月の流れるのと共に、人の身の上の變化は計り知れないものだ。かうして政務を離れて病臥してゐると、わしは昔のことばかり思ひ出されてならない』

呂不韋『王よ。餘り御物語になると、また御疲れが出ますぞ』

莊襄王『呂不韋よ。わしは好く秦の王になれたと思つてゐる。趙の國の人質から脫走して秦の宮廷に歸つてみると、先王孝文王には二十有餘人の王子がおはした。どうしてわしが秦王になることが出來やうか。思へば皆なお前がして吳れたこ

とだつた」

呂不韋「恐れ多いことでございます」

荘襄王『いや。本當だよ。お前の莫大な財源が華陽太后をすつかり虜にしてくれた。秦宮の權臣高官はお前の鉅萬の富の前に屈服した。わしはお前のお蔭で易々と秦王となることが出來た

呂不韋「左樣でございましたかな。私はすつかり忘れて仕舞ひました」

荘襄王「愛い奴め。お前は忘れても、わしは忘れやしない。その代り、わしもお前に對する約束を果した心算だ わしはお前を宰相に任じた。十萬戸に封じた。文信侯と號せしめた。さうではないか」

呂不韋「王よ。私は王の厚く重い御信任に對して、今までに何をすることが出來ましたらう。私は千萬も頓首して居るのでございます」

荘襄王「もう好い。太子は來たか」

呂不韋(おろおろとして)「もう程なく參殿の御時刻と存じまする」

荘襄王『呂不韋よ。わしは彼の時のことを未だに覺へてゐるよ」

呂不韋(どぎまぎして)『彼の時と申しますると……』

荘襄王『わしは姫を連れて逃れた。あの時、姫は無慘にも趙の虎狼のやうな兵卒共に捕つて仕舞つた。わしはてッきりお前の指圖だと睨んだよ」

呂不韋『滅相な……』

荘襄王『そりや解つたさ。後になつて。だが彼の時は、お前は靑龍刀を振り廻してわしを脅迫したほどだつたからな。だから姫に執心してるお前の計畫だと、わしは邪推なんかしたもんだつた」

呂不韋（額の汗を拭きながら）「王よ」

莊襄王「好いさ。わしは彼の時くらひ悲しいことはなかつた。わしは趙兵と斬り死しても姫を奪はなかつたことを後悔した。しかしわしは王にならうといふ野心のために敗けたのだ。」

呂不韋「さうして確かに秦の王とならせられました」

莊襄王「さうだ。お前が彼の量り知れない寶物を持つて後を追つて來たのを見て、わしはお前が本當にわしを王にするのだと思つた。同時にお前が姫に對する野心のないこともわかつたのだ。わしはお前に對して恥しいとさへ思つたよ」

呂不韋「爾來、私は王に對する忠良な臣下でございました」

莊襄王「わしは何時もそれを感謝してゐたよ。わしの姫を奪つた趙を生前に攻め滅すことが出來ないのは、わしの最も遺憾とするところだ。呂不韋よ。お前は太子政を助けて屹度、趙に對する復讐を忘れてはならない」

呂不韋「王よ。私は必らずそれを成就するでありましよう」

莊襄王「わしは今度こそは助からないと思ふ」

呂不韋「王よ。そのやうな御氣の弱いことで、どうなりまするか」

莊襄王「わしは一目、太子と妃に逢ひたい。しかしながら秦の王も人命には力が及ばないと見へるな」

呂不韋（はらはらしながら）「王よ。太子はもう直き參殿の御時刻かと存じまする」

莊襄王（苦しみながら）「呂不韋よ。太子は」

呂不韋「王よ」

莊襄王「呂不韋よ。妃は」

呂不韋「王よ。王よ」

と叫んでゐるところへ、舍人の李斯を先登に遽しく十三歲の太子政、邯鄲の美姬、白髮の老將軍蒙驁、勇將王齮、公などの重臣等がどかどかと這入つて來る。

呂不韋（王の耳許に口を添えて）「王よ。太子の參殿でございますぞ。さあ。太子――」

と太子政を王の枕邊に押しやる。

太子政「父上ッ。父上ッ。父上ッ」

幼い太子は三度呼んで、返事をしない王に抱きついて泣く。

妃「あ――」

と泣いて倒れる。呂不韋が抱き止める。一同、粛然として頭を垂れる。

――暗　轉――

第六景

朗らかな初夏の夕である。

咸陽宮の露臺に通ずる廊下。所々に篝火が燃えて、大廣間からは新王の即位を祝ふ華やかな音樂が聞えて來る。

露臺の下から

聲「新王萬歲……………」

と叫ぶ秦の民衆の歡聲が轟き渡る。

間。

廷臣達が鞠躬如として走り廻る。廊を守る衛兵が直立不動の姿勢をする。

十三歳の幼い秦王は、きらびやかな大典の禮服を着て出て來る。その後から薫香の立ちのぼる香爐を捧持した一人の廷臣が從つてゐる。

その間にも秦の民衆の「萬歳」を叫ぶ聲が斷續する。

香爐を持つ廷臣は長裾に蹴つまづいて廊下に香爐を取り落す。人々は一勢に顏色を變へる。廷臣は廊下に跪いて、罪に當る覺悟を決めてゐる。

呂不韋『無禮者ッ。愼んで罪を待つが好い』

廷臣は悄然として退出しようとする。

秦王『待て』

廷臣『……………』

秦王『道を歩く者は、つまづくのが當り前だ。何でもないことではないか』

呂不韋『と申しましても』

秦王『文信侯よ。秦の國法は誤ちをしたものをも罰するのか』

呂不韋『はつ。恐れ入り奉ります。（廷臣に向つて）お前の罪は許されたぞ』

廷臣『はつ。厚く御禮申し上げます』

呂不韋『まことに御幼少にも似合はず御發明でゐらせられる。御父君莊襄王がおはしましたならば、どんなにかお喜びあらせられることでしよう。秦は此の明君を戴いて、いよいよ萬代不易で御座います。お偉いことだ。御賢しいことだ……

……』

と秦王の頭を撫でる。

秦王「お前こそ無禮ではないか。呂不韋よ。お前は私の家來だ。王の頭を撫でる身分ではない」

と秦王は手を拂ひ退けて叱る。呂不韋は跪いて

呂不韋「お許し下さいまし。遂ひ昔恩に狎れたので御座います」

秦王「文信侯よ。よく覺へてゐるが好い。お前は私の父上ではないのだ」

その一言に呂不韋は愕然とする。さうして凝つと下から幼い王を見上げる。

秦王は一同を引き連れて立ちさつて行く。外の歡聲はいよいよ熾んである。呂不韋は、ほつと溜息しながら立ち上つて、額の汗を拭く。

呂不韋「恐ろしい小童だぞ！」

と呟く途端、

柱の影から邯鄲の美姫がそッと現れる。

太后「文信侯よ」

文信侯「おう。これは〳〵。太后には」

太后「止して下さい。それより貴方は何時も妾から逃げやう、逃げやうとなさいますが、それは何故なのですか」

文信侯（あたりを見廻しながら）「太后よ。御冗談はお止め下さい」

太后「冗談ですつて。いゝえ。妾は本氣で言つてゐるのです。貴方は」

文信侯「太后よ。貴女は何にも御存知ない。それだからそんなことを言はれるのだ。あの小さな王様は吾々のことを知つて居りますぞ」

太后「えッ」

文信侯『そ。それだから御注意して下さいと言つてゐるのです。私はたつた今、叱られた。呂不韋よ。お前は家來だ。父上だと思ふなよと一本、鋭い釘を打たれましたぞ』

太后『おう。矢張り……』

文信侯『何か御心當りがありますか』

太后『あの子は、趙の宮殿にゐた時にもう、その疑ひに心を苦しめてゐたのです。悧い子ですから』

文信侯『そ。そ。さうか。こいつは油斷がなりませんぞ。うつかりすると身の破滅だ。相手は小さくとも、恐ろしい敵だ』

太后『まあ。敵だなんて……』

文信侯『そ。そ。そんなことより貴女は早く後房にお引き取りなさい』

太后『いゝえ。妾は一言、あなたに』

文信侯『えツ。聞き分けのない』

と太后を突き退けて聲高らかに

文信侯『嫪毐……嫪毐……』

と呼ぶ。

嫪毐『はつ』

と答へて出て來る。耀くやうな美男子である。

太后、うつとりと嫪毐に見惚れる。

文信侯(それを早くも氣取つて)『太后よ。これは宦官嫪毐と申します。嫪毐よ。太后様を後房まで御見送り申せ』

太后『嫪毐よ。妾を後房まで送つて下さい』

嫪毐「はい。畏りました。さあ。どうぞ」

太后は嫪毐の肩に凭れかかるやうにして立ち去つて行く。その後姿を北叟笑みながら

文信侯「これで一つ厄拂ひしたやうなものだ」

と獨語する――

――暗轉――

第七景

夏。

咸陽宮の一部。御簾の外は暑苦しさうな陽が照つて蟬が頻りに啼いてゐる。何所かで風鈴の音が幽かにする。

若い武將昌文君、白い袍を着てうなだれて御殿の長い廊を退つて來る。參殿して來た昌平君と擦れ違ふ。

昌平君「どうしました。昌文君。お顏の色が大分惡いやうだ」

昌文君「有難ふ御座います。きつと御簾の色の照り返しのためで御座いましよう」

昌平君「それはさうと例の長信侯が太原の領地に歸任せられるといふのは本當ですか」

昌文君「どうやら本當らしう御座います」

昌平君「何か確とした證據がありますか」

昌文君（陰氣に頭を振つて）「さあ………」

昌平君「まだ漸く一昨年、御元服遊ばされた御若い王樣は何にも御存じないから、御無理もありませんが、あの佞人の長信侯を山陽の地におつかはしになるのは虎を野に放つやうなものですよ。私は押して諫言しようと思ひます」

昌文君『そのための御參殿ですか』

昌平君『先づそんな所ですよ』

昌文君『お止しなすつた方が好いと存じます。もうそれは太后の御心で定つたことですから』

昌平君『こんなことを申しちや失禮だが、貴方の可愛がつて居られた咸陽の美人を無理に太原に連れて行くといふ噂は本當ですか』

昌文君（怒りをまぎらすやうに笑つて）『お恥しい事ですが本當です』

昌平君『言語同斷な奴ですな。これは道聽塗說で取るに足らないが、太后は亦長信侯の種を宿して居られると咸陽では噂してゐるさうです。彼奴は秦の宮廷の面汚しだ。何故貴方は彼奴を斬つて仕舞はないのです』

昌文君『王の御信任さへなかつたら』

昌平君『私なら我慢出來ない』

その時

聲『長信侯のお退りィ………』

と聲がかかる。

昌文君『噂をすれば影とやらです。私は長信侯に顏を見られたくありませんから、これで御免蒙ります』

と昌文君は急ぎ足に退出して行く。その後姿を見送つてから、相國昌平君は威儀を正して靜かに歩みを運ぶ。

長信侯嫪毒が美麗な白袍を身に纒ふて退出して來る。昌平君とばつたりと逢ふ。昌平君は挨拶もしないで行き過ぎる。

長信侯はたと立ち止ると

長信侯『お待ちなさい。相國』

昌平君「何御用ですかな」

長信侯「貴方は私に非禮をなさらなかつた。私は少くとも河國の太守だ。禮に缺けやしませんかな」

昌平君「ほほう。これは異なことを承るものだ。私は秦の相國だ。貴方とは地位に於て優るとも劣るものではない。況んや場所は秦宮の内だ。してみると官に於て相國に優るものは王を措いて他にない筈だ。無禮呼はりは筋違ひでしよう」

長信侯「相國。もう一度言つてみられい」

昌平君「何度でも言ひましよう。長信侯よ。貴方は太后の御前では相國の私にも頭を下げさせることが出來るかもしれない。しかし此所ではさうはなりませんぞ。よく覺へてゐらつしやるが好い」

長信侯「何ッ。この楚の國の逃亡者。生命知らず。屹度臍を嚙む時があるぞッ」

昌平君「私が楚の國の卑しい人間なら、貴方も昔は賤しい宦官ではなかつたか」

長信侯「おのれッ」

長信侯は蹶然として佩刀の柄に手をかける途端、文信侯呂不韋が退出して來る。

聲「文信侯のお退りイ……………」

二人はそれで睨み合つたまま別れて行く。長信侯はぶるぶる身體を顫はせながら昌平君が見へなくなるまで立つてゐる。

文信侯「おう。嫪毐よ。どうしたのだ」

長信侯は文信侯の前に三拜してから

長信侯「相國が………相國が無禮千萬なことを申しましたので」

文信侯「氣の小さい男だ。大望のある身が、之れしきのことに腹を立ててゐて、どうなるのだ」

長信侯「そ。そ。さうで御座いました」

文信侯「嫪毐よ。無事に太后からお暇が出たかな。ハ…………」

長信侯「はい。いや。どうも散々に泣かれたり、恨まれたり、駄々をこねられたり、ひどい目に合ひましたが、漸く秋にならぬうちに戻つて來るといふ條件で收まりましてございます」

文信侯「羨ましい女難ぢやな」

長信侯「いや。ほと／＼お役御免を願ひたいと存じまする」

文信侯「それで、今度の計畫はまさか太后も御存知あるまいな」

長信侯「決して！」

文信侯「それから例の物は」

長信侯「これに御座います」

と懐から王及び太后の玉璽を盗み出して來たのを見せる。

文信侯「兵數は」

長信侯「約二萬も御座りましようか」

文信侯「ちと手薄だな。二十歳の若年とはいへ數度の戰爭の手練を見ると、王はなかなかの戰上手だ」

長信侯「それゆゑ夜討をする計略でございます」

文信侯「それより他に手段もあるまいな」

長信侯「そのやうに偉い王に貴方が拵へて仕舞つたのですよ」

文信侯（寂しく笑つて）「さうなのだ。儂は先王を儂の氣に入る人形に拵へた。今度は小さい時分から手鹽にかけたので、

どんなに調法な人形が出來るかと思つてゐたら、儂の首が危くなつて來た。餘り賢明な王といふものは扱ひにくいものだ」
長信侯「それゆゑ私が御恩報じに上手に料理して御覧にいれましよう」
文信侯「何分ぬかりのないやうにしてやつて吳れ。さうすればお前と太后の間に生れた長安君を秦の王としてあげるよ」
長信侯「それでは今夜にも――」
文信侯「急いで行くがよい」
　長信侯は急いで退出して行く。文信侯はその後から威容を正して靜々と退出して行く。
――暗　轉――

第八景

　秦王の夜の御居間。
　野心に燃える秦王は寢もやらず一葉の地圖を眺めてゐる。匂ひ高い香がゆるやかに立ちのぼつて、明け放した窓からは夜風が吹き込んで來る。秦王の傍に侍立して大きな團扇を動してゐる美少年はともするとコクリと居眠りをする。
　秦王はそれを見るけれども叱りもしないで、灯の下に眼を晒してゐる。
　遽しく廷臣の一人が飛び込んで來る。
廷臣「王よ」
秦王「何だ」
廷臣「相國呂不韋君の參殿でございます」
秦王「どうしたのだ。この夜更けに」

そこに昌平君が断りもなく、堅甲に身を固めた昌文君と共に這入つて來る。

昌平君『王よ。この良夜を御さまたげ致しますのをお許し下さい。直ちに御人拂ひの儀お願ひ致します』

それで侍童と廷臣去つて行く。

秦王『何事が起きたのだ』

昌平君『王よ。長信侯嫪毐の謀反でございます』

秦王『何を。馬鹿なッ』

昌平君『王よ。嫪毐は宦官では御座いません』

秦王『どうしてさう言へるのだ』

昌平君『昌文君の愛妾の操を汚したことで實證せられます』

秦王『何ッ。宦官ではなかつたのか』

昌平君『そればかりではありませぬ。王弟長安君も亦、母太后と嫪毐の不義の子に相違ございませぬ』

秦王『或はさういふことがあらうも知れぬ』

昌平君『嫪毐を太后に進めた者は文信侯呂不韋でございます。この謀反の背後に文信侯が居ないとは申されませぬ』

秦王『謀反とは』

昌平君『王及び太后の玉璽を盗み出し、官騎、衛卒を叫合して、今夜にも夜討と承りました』

秦王『それは本當か』

昌平君『昌文君の愛妾が自殺したことによつて分明いたしました』

秦王『よしッ。分つた。憎い奴は嫪毐だ。直ちに兵を集めよ』

呂文君「既に兵を集めて置きました」

秦王「素早いな。その隣室に入つたぞ。誰かッ。鎗を持つて來い。甲だ………」

秦王が叫ぶ間もあらせず、遙かに金鼓、角笛の音がして、物凄い喚聲が湧き上る。

秦王「果して來たな」

呂文君（一禮して）「御免ッ」

と駈け出して行く。

秦王は窓のところに添つて見下す。火の手があがつて空は赤い。

宮殿は騷然と人の罵る聲と入り亂れる足音がする。

侍臣一「王よ。嫪毐の謀反でございます。大手の門には」

秦王「解つてゐる。そんな報告より何故、謀反人の首を持つて來ないか。馬鹿め」

呂文君「王よ。火矢を射込むと見えますな。御避難の御支度をなさいませ」

王の部屋に續々と人々が入り込んで來る。武裝した親衛兵が入口を守る。

侍臣二「王よ。それがよろしうございます」

秦王「默れッ。弱蟲ども」

と一喝して置いて窓から首を出してゐる。

侍臣三「王よ。お姿を現すことは危險でございます」

秦王「默れといふに。憶病者」

と言つてから

秦王「相國よ。城門の高樓から敵へ言つてやれ。嫪毐を生擒する者には錢百萬を與へる。之を殺す者には錢五十萬を與へると布告しろ」

昌平君「畏りました」

秦王「それで暴徒は鎭まるよ。アハ………」

　布告文を持つた侍臣の一人が驅け出して行く。

昌平君「恐れ入つた御名策でございます」

秦王「それ見ろ。合戰が直ぐおかしくなつて來た。味方を疑ふ心が生じたのだらう。夜の明けぬうちに嫪毐の細首を見ることが出來るであらう」

　侍臣の一人が傳令に來る。

侍臣「王よ。謀反軍は潰亂して、嫪毐は逃亡したさうでございます」

秦王「そんなことだらうと思つた。昌文君に激しく追擊を命じろ」

侍臣「はつ」

　と言つて走つて行く。

秦王「それから相國に口述するから手紙を書いてくれ。直ちに呂不韋を流罪に處して仕舞はなければならない」

昌平君「王よ。しかし文信侯の場合は、一應御吟味あつて然るべきかと存じますが」

秦王「相國よ。あのやうに權力のある重臣を處罰するには、このやうな機會を措いて二度と無いものだ」

昌平君「はつ」

　と言ふと紙を手にする。

秦王「好いか。それではいふよ」

と言ひながら、部屋の中を行つたり來たりしながら歩き廻る。

秦王「呂不韋よ。汝。秦の國に何の功あつてか河南に封じ、十萬戸を食ましむるや。秦の王に何の親あつてか號して仲父と稱せるゝや。汝それ家族と共に徙りて蜀に居れ――」

昌平君（不意に顏を擧げて）「蜀へ」

一同もぎよッとして若い王を凝視する。

一同「おう。蜀の國へ――」

そこへ一人の廷臣が轉ぶやうに飛び込んで來る。

廷臣「王よ。文信侯は唯今、鴆毒を仰いで崩ぜられましたッ」

一同「あつ！」

と驚く。一人、秦王ばかりは平然として

秦王「さうか。いや。お聞きの通りだ。相國よ。その手紙を破つてくれ」

昌平君は手紙を破る。

秦王「かうして一つ一つ片付いてゆくな。それからもう一つ」

昌平君「もう一つ……………」

秦王「相國よ。使に立つてくれ」

昌平君「はつ」

秦王「太后のところへお伺ひして、王は太后に雍の萯陽宮へ御遷り願ひたいと申してゐると傳へてくれ」

昌平君『咸陽宮へ』

秦王『さうだ』

昌平君『しかし王よ。今、俄に——』

秦王『王の命令だ』

昌平君『はつ』

秦王『つひでに長安君に此の劍をやつて來てほしい』

昌平君『えゝ。あの。それでは』

秦王(顏色一つ變へないで)『死ねと言つてくれ』

秦王は自分の佩刀を昌平君に渡すと、ぶる〳〵と戰いてゐる廷臣一同を尻目にかけながら

秦王『もう。おつつけ夜が明けるぞ。一寢入りするとしよう』

と呟きながら、大きな欠伸をする。

——暗轉——

第九景

質素な秦王の對面所。

秦王は椅子に腰かけてゐる。その周圍には屈強な親衛兵が槍を立てゝ守つてゐる。秦王は何か文書を披見してゐる。

一人の廷臣が禮をして言ふ。

廷臣『王よ。唯今、齊の國の茅焦と名乘る男が、謁見を許されたいと强つて願ひ出て居ります』

王「どんな奴だ」
廷臣「不敵な面魂をして居ります」
王「連れて來てみろ」
廷臣「茅蕉よ。お通りなさい」
と叫ぶ。その聲に遊客が這入つて來る。
茅蕉「秦王よ。麗しき龍顔を拜するを得ましたことは、私の光榮でございます」
王「餘計なことは言はんで好い。お前は何が言ひたくつて、わしの所へ來たのだ」
茅蕉「王よ。王は四方を攻略せられて居りますが、天下を一統するの御志でございますか」
王「さうだ」
茅蕉「王は私が死を畏れずに物を言ふ男であるのを御存知ですか」
王「お前は、すると咸陽の四つ辻に張り出した布告文を見て來たのか。命知らずめが。太后のことに就いては一言も言はせないぞ。舌を動かしたら、死だ。好いか」
茅蕉「それゆゑ私は死を畏れないと申し上げて居るのでございます。王は、國に取つての重臣を殺し、かりそめの父を殺し、縁のある弟を殺し、諫める者を殺し、母を流刑に處し、悉く狂悖の行ひを行つて居られます。桀紂も亦及びませぬ」
王(劍を拔いて)「默れッ。もう一度吐かしてみ。立ち所に首を打ち落すぞ」
茅蕉「それだから秦は八方に敵を受けるのですぞ。王よ。王は既に權力を握られた。その權力を維持するものは何か。唯今のやうな御所業では、私は王のために危ふく思ふ者であります」
王「もつと續けろ……」

茅蕉「王よ。天下を掌握せんとには、先づ王の權力を豐かに掌握しなければなりません。母太后を萯陽宮よりお迎へなさることによつて、逆の效果が擧がると思召しにはなりませぬか。王よ。私は、これ以上申し上げなければなりませぬか――」

秦王「アッハ………貴樣はなか〳〵帝王學に通じてゐるな。さうだつた。わしの遣り方は下手だつたよ」

茅蕉「王よ。私は今こそ王の劍を此の首に受ける時でございます」

王「いや。もう好い。わしはお前をこれから先生と呼ばふ。さうして先生はわしの坐右にゐて、變幻自在な帝王術を傳授してくれ」

茅蕉(肩をすくめて)「おう。流石は秦の王にまします。英名四方にあまねき王は――」

王「もう。わかつたよ。それは人民に向つて言ふ言葉だ。わしはこれから行列を盛んにして、母太后をお迎へして來やう」

と立つ。一同頭を下げる。

――暗轉――

第十景

邯鄲城外。

遙かに趙城を望む。そのあたりは雲霞のやうな秦の遠征軍の大野營地になつてゐる。

宿營は靜まり返つてゐる。

秦王、それに王翦將軍、楊端和將軍、その他の幕僚が付き從つてゐる。

王「懐しい趙の城が月の下に見へる。わしはあそこに十年餘りの歳月を暮したのだ」

王翦「さうして殆んど十年に近い歳月をかかつて、いよいよ趙を根こそぎやつつける時が來ました」

王「先王の御遺言を完ふすることが出來る譯だな。わしは今夜は嬉しくつて眠られさうもないよ」

楊端和「趙の王も案外の愚物ですな。あの戰さ神のやうな大將軍李牧を用ひないために、遂に今日に到つたのですから」

王「滅ぶる時はさうしたものだ」

王翦「仰せの如く、趙も先王の時は強い國でしたな。大將軍李牧はじめ司馬尙などの將々が揃つてゐた時は、殘念ながら我軍も歯が立たない有樣でした」

王「わしはそれだけに辱しめられたのだ。邯鄲の町の人々にまで、媚を賣る舞姫の子供として辱しめられたのだ。わしはどんなに無念であつたかしれない。しかしその恨みを晴らすことが出來る日がきたのだ。陣中へ母太后をおともたひしなかつたのを遺憾だと思ふのは、この合戰ばかりだ」

その時、一人の武將が遽しく王の前に走つて來る。

武將「王よ。趙の王より降參の使者が見へましてございます。如何取りはからひましよう」

王「追ひ返して仕舞へッ」

武將「降參のしるしとして趙王は」

王「追ひ返して仕舞へと命じてゐるのだ」

王翦「王よ。それはどういふ御考へでございますか。若し一兵をも損ずることなく敵を」

王「將軍よ。明朝は總攻擊あるのみ」

王翦「さうして――」

王「邯鄲を焼き拂つて仕舞ふのだ」

楊端和『王よ。それは妙計ではございません。邯鄲を燒いては戰爭の賠償金が取れません。のみならず』
王『將軍よ。それも解つてゐる。しかし。しかし邯鄲ばかりは燒かずにはゐられない。わしは賴り少い母と子を辱しめた都を、この世の中から無くして仕舞ふのだ。その使の者を斬つて捨てろッ』
武將『はつ』
と答へて去つて行く。
次第に夜が明けて行く。
鷄の聲。
王『おう。夜が明ける………楊端和よ』
楊端和『はい』
王『總攻擊を開始しろ。太陽が中天に來ないうちに、わしは邯鄲の都が此の世界から消えて失くなるところを見たいのだ。早く總軍に命令を傳へろ』
楊端和『はッ』
と去つて行く。
王『王翦よ』
王翦『はい』
王『將軍は直ちに一軍を率ゐて出發してほしい』
王翦(怪しみながら)『さうして私の攻擊を加へます敵は』
王『將軍は、中山に陣して燕の國を攻擊しろ』

王翦「はつ。直ちに………」

と去つて行く。

秦王は黎明に輝く趙城を望見しながら

——暗轉——

第十一景

燕の薊城内の一室。

燕の太子丹、大臣の鞠武、秦の國から逃亡した樊於期將軍、燕の勇士秦武陽など、大きな卓をかこんで密議にふけつてゐる。

深夜である。

燈火ほの暗く、人々も亦、憂愁の面持ちをしてゐる。

太子(ほつと溜息を吐いて)「駄目だ。どうしても駄目だ。もう策略はない」

鞠武「私も策略は無いと存じます。あの秦の猛將王翦に中山を取られ、じりじりと攻撃されたのでは、殘念ながら燕の國は首を絞められながら、次第に死に瀕するのと等しい有樣でございます」

太子「それだから好い策はないかと問ふてゐるのだ」

鞠武「それより樊於期將軍の引き渡しを請求して來て居りますが、何と返事をしてやりましよう」

太子「そ。そんなことは聞きたうない」

樊於期「太子よ。御返事をする必要もありませぬ。私は面縛して秦の陣中へ參りましよう。さうしますれば王翦も陣拂ひ

することだと存じます」

鞠武「そ。そ。そ。さうしていたゞけると我が國は助かりますのぢや」

樊於期「私一身のことから、御迷惑を御かけしたことをすまなく思つて居ります」

鞠武「何も彼も、燕の國のためと諦めて下さい」

太子「樊於期よ。行つてはならない」

樊於期「と申しましても」

太子「お前が秦の國へ歸つても犬死だよ。彼奴は、どうあつても此の國を攻め滅すつもりなのだ。無駄だから止した方が好い」

鞠武「しかし太子よ……」

太子「鞠武よ。お前は知らないのだ。それだから樊於期を引き渡しさへすれば、王翦は兵を撤退すると思つてゐるのだ。しかしそれは間違ひだ」

鞠武「と申しますと――」

太子「わしが趙の國へ人質となつてやられてゐた時に、政も居た。わしと政とは仲が悪かつた。性が合はないと言ふのだらう。事毎に喧嘩ばかりしてゐた。さうして二人は、王になつたら攻め滅してやると口癖のやうにしてゐたものだつた。政が秦の王となつた時、わしは秦と燕とが必らず戰ふべき日のあることを知つてゐた。さうして今日、事實となつて現れて來た。わしの兵力がもつと強いなら、わしは秦の國へ攻め込んでゐたであらう。樊於期の問題は單に天下に示す必要からの名目に過ぎない」

鞠武「おう。それは恐ろしい因縁でございますな。恐ろしい……」

太子「さうだ。わしは敗が怖い。どうかして彼奴の首が見たいものだ。しかし戰爭では勝てる見込みがない。わしはどうすれば好いのだ。

秦武陽「刺客を放つより他に手段がありませぬ」

太子(卓を打つて)「妙案だッ。しかし誰が刺客になるのか」

秦武陽「私に一人の友人がございます。衞の國の產で、劍を取つては向ふ所敵がありませぬ。搗てて加へて人品高雅、辯舌の爽やかなること比を見ない人物でございます。この男を御用ひなされませ」

太子「何といふ男だ」

秦武陽「荊軻と申します」

太子「何所に居るのだ」

秦武陽「このやうなこともあらうかと、實は次に待たせて御座います」

太子「おう。それはよく取りはからつて吳れた。直ぐ會はふ」

秦武陽、次の間より荊軻を伴つて來る。格服の好い、威嚴のある人物である。太子は席を下ると、荊軻の手を押し戴いて

太子「荊軻よ。足下の高名に久しくわしは憧れてゐた。わしのために力を添えて貰えるだらうか」

荊軻「私の命は太子の物です」

太子「おう。そんな喜ばしい返答を聞かれるとは思ひがけないことだつた。足下ならば、あの虎のやうな秦王の首をひつさげて來る事が出來るだらう。しかし荊軻よ。それには何か巧い工夫があるだらうか」

荊軻「太子よ。私のお願ひすることに絕對に反對しないとお約束下さい」

太子『わしは足下の願ふことなら何でも聞入れるだらう』
荊軻『私の考へますのに、秦の王が喜んで私を引見するのでなければなりません。それでなくては秦の王に近付くことが出來ないからであります。何故なら秦の王は嫪毐の亂以來、非常に身邊を警戒してるるさうでございますから』
太子『それはさうだ』
荊軻『何が。では秦の王を喜ばせるに足ると思召しますか。燕の國の督亢の地を割讓することです。秦の王は督亢を取ることが出來たら、既に燕の國を併呑し得たとして大喜びをするでありましよう』
太子『何ッ。督亢を割讓するのか』
と太子は呻めいて頭を抱へる。
荊軻『私は督亢の地圖を持參して秦の王に接近しましよう。しかしながら尙萬全を期し得られません』
太子『その他に何があるのだ。燕の國にはもう何も無いではないか』
荊軻『樊於期將軍の首です』
太子（よろめいて）『えッ』
荊軻『秦王は王翦をつかはして樊於期將軍の首を求めて居ります。この首を秦王の引見に供へるのが、秦王の身邊に近付く唯一の殘された手段であります』
太子（手で顏を蔽ひながら）『あゝ。そればかりは………』
荊軻『樊於期將軍よ。御聞き及びの通りです。秦の王は將軍の父母宗族を悉く殺戮せられました。將軍が秦に報復する手段は、たゞ一死あるのみです』
樊於期『よく解りました。してその方法は』

それで太子、鞠武、荊軻、秦武陽など密談をする。その隙を見て樊於期將軍は

樊於期「御免ッ」

と叫ぶと、佩刀を拔いて自ら首を刎ねる。

一同「あ――！」

太子（縋びつきながら）「樊於期よ………樊於期よ………」

荊軻（崩然と）「將軍よ。將軍を決して犬死はおさせ申しませぬぞ」

――暗轉――

第十二景

易水のほとり。

満目蕭條とした冬枯の景色である。一艘の渡し舟が渡船場に繋いである。

夕まぐれ時。

燕の太子、荊軻、秦武陽、鞠武、それに三人ばかりの從者が白衣冠を着て微行の態で渡し場まで來る。

太子（荊軻の手を握りながら）「荊軻よ。私は再び易水のほとりに足下と見へることを期待する」

荊軻「默つて………」

秦武陽「荊軻よ。私も君と行を共にしたい」

荊軻「いや。しかし君は」

太子「さうだ。秦武陽と行くが好い。足下の成功と否とを逸早く、わしに知らせてくれる者は秦武陽であらう」

秦武陽「有難ふございます」

荊軻「それでは」

太子「御機嫌やう。荊軻」

荊軻と秦武陽と舟に乗る。

年老ひた船頭が默々と舟を漕ぎ出す。

夕陽が空を焦がしてゐる。

頻りに風の音。

舟、易水の中央にさしかかる。

荊軻（歌ふ）「風蕭々として易水寒し、壯士一たび去つて亦還らず…………」

太子、默々として傾聽しながら、ひそかに涙を拭く。

——暗　轉——

第十三景

咸陽宮の正殿。

新興の秦の國を想ひ見るべき壯麗な對面の間。王の座席の左右には公、侯、伯、子、男、孤、上卿、大夫、士等の九賓が居並び、王座の前の卓に荊軻が立つてゐる。王の寵臣蒙嘉が出て來る。

蒙嘉「出御ッ」

一同、頭を垂れる。

秦王つかつかと足早やに現れて、王の設けの席につく。

蒙嘉「燕の國の使者、荊軻を召し連れましてございます」

荊軻「大王の玉顔を拝し奉り、荊軻の光榮これに過ぎたるは御座いません」

王「荊軻とやら。近う寄れ。聞けば樊於期の首を持参したさうぢや。わしは滿足に思ふ。從つて燕の國も無事泰平といふものぢや」

荊軻「王よ。そればかりではございません。燕の王は大王に歸服する證として、督亢の地を献ぜられます」

王「何ッ。督亢を割くと申すのか」

荊軻「左樣でございます。燕の國はひたすら大王に歸順するものでございます。督亢は燕にあるよりも、寧ろ大王の治下にあつて重要な働きをする土地でございます」

王「さうか。わしは燕王の御厚志を嬉しく思ふものだ。まして太子とわしは幼馴染の仲だ。わしはどんなに懐しく思つてゐるかしれない」

荊軻（卓上に地圖をおもむろに開きながら）

「こ。これが督亢の地圖でございます」

王は席を立ち、卓に寄つて覗き込む。荊軻は次第に地圖を繰りひろげる。地圖の中から一口の匕首が出る。それを荊軻は逆手に握ると秦王に飛びかかる。

荊軻「秦王よ。御覺悟召されいッ」

王「狼藉者ッ」

と叫ぶと逃げる。逃げる拍子に王の袖が破れ、荊軻よろよろとする。

王、群臣の中に逃げ込む。

荊軻『おのれッ。逃がしてなるものかッ』

廷臣一『無禮者ッ』

廷臣二『謀反人ッ』

廷臣三『逆賊ッ』

などロ々に罵り騒ぐ。荊軻は王を追つて柱をめぐり、群臣の中を泳ぐやうに走る。身に寸鐵を帶びない廷臣等は王を守るために、次第に荊軻のために傷つけられる。

聲『わあァ！』

次第に王と荊軻の距離が接近する。

王あせつて腰に帶びる劍を拔かふとするけれども急に拔けない。

王の侍醫夏無且(かぶしよ)が前に立ちふさがつて

夏無且『王よ。劍を背ひたまへッ』

と叫びながら、藥袋を荊軻に投げつける。

王、劍を背に負ふて拔く。

王『推參(すゐさん)なッ』

と叫んで荊軻の左の腿を拔き打ちに斬る。

荊軻『むうッ。無念ッ』

と呻いて倒れながら、匕首を王に向つて投げる。

王、槍をかはして置いて更に一撃を加へる。

匕首、銅の柱に刺さる。

荊軻、身に八劍を蒙る。

荊軻（よろめいて柱に凭れながら叫ぶ）「あゝ。秦王を刺すことが出來なかつたのは殘念だツ」

さうして斃れる。

秦王は血刀をひつさげて茫然として立つ………

——暗　轉——

第十四景

咸陽の宮殿内の一室。

長い卓に十七人の博士が居並んでゐる。それ等は大方は白髪の老人か、腰の曲つた役にも立たないやうな人々で、その中に茅焦が交つてゐる。

大分に疲れた風が見へる。

茅焦「——それで大體の御意見が纏つたものと見て、よろしう御座いますか」

博士「はい。私一人は。しかし皆さんが何と仰有いますか」

博士二「私も同感です」

茅焦「何しろ李斯樣はなかなか難しい御方ですから、もうこれで大丈夫といふ文案でないと、どんな御叱りが出るかもわかりませんからな」

博士達互に顔を見合せて、ぶつぶつ呟く。

茅焦(聞きつけて)『御意見のある人は御遠慮なく述べて下さい』

博士三『いゝえ。私ではありません』

茅焦『王を褒め讃える美辭麗句は、一字に百金、一句に千金の賞與が出て居りますぞ』

博士四『それはお有難いことです』

茅焦『それでは一遍讀み上げて見ますから、御氣付の點は後から仰有つていたゞきましょう』

博士五『どうぞ』

茅焦(讀む)『――異日、韓王、地を納れ、璽を致し藩臣たらんと請ふ。すでにして約に背き、趙魏と合從して秦に背く。故に兵を興して之を誅し、その王を虜にせり。寡人もつて善となし、こひねがはくば兵革を止めんと。趙王その將李牧をして來り約盟せしむ。故にその質子を歸す、すでにして盟に背き、我に太原に反く。故に兵を興して之を誅し、その王を得たり。趙の公子嘉、すなはち自立して代の王となる。故に兵を擧げて撃ちて之を亡せり。魏王はじめ約して秦に服入す。すでにして韓趙と共に秦を襲ふことを謀る。秦の兵吏誅して遂に之を破れり。荊の王、青陽以西の地を獻ず。すでに約に反き我が南郡を打つ。故に兵を發して誅し、その王を得て遂に荊の地を定めたり。燕王は昏亂なり。その太子丹、すなはちひそかに荊軻をして賊をなさしむ。兵吏、燕の國を誅滅せり』

その時分から博士達コクリ〳〵と居眠りをはじめる。

茅焦(續けて)『齊の王、後勝の計を用ひ、秦の使を絶ち亂をなさんと欲す。兵吏誅してその王を虜にし齊の地を平げたり』

茅焦、皆の居眠つてゐるのに氣が付く。

茅焦(卓をドンと一つ打つ)『寡人』

音、飛び上るほど響く。

茅焦「寡人、眇々の身を以て、兵を興して暴亂を誅す。宗廟の靈により、六王ことごとくその罪に服し、天下、大いに定まりたり」

博士達はよろよろと立ち上り、氣の拔けたやうな聲で

博士達「秦王。萬歲……………」

—暗轉—

第十五景

咸陽宮の卽位大典の式場。

六國を統一した新興秦國の威容を示すに足る、あらゆる雄大と壯麗と豪奢を極めた裝飾をする。

正面の玉座には寶冠を戴いた秦王が座してゐる。九卿、群臣は綺羅星の如くに竝んでゐる。

一神嚴な奏樂。

匂ひ高い香料。

三千の美妃も居竝んでゐる。

丞相王綰、御史大夫馮劫、廷尉李斯など王の傍に侍立する。

茅焦が進み出て、李斯に卷物を渡す。

李斯、王の面前に歩み出て恭々しく奏す。

李斯「昔、五帝は地方千里にして、其の外に侯服、夷服あり。諸侯あるひは朝し、或は然らざるも、天子制することを能は

ざりき。今、陛下。義兵を興し、殘賊を誅し、天下を平定し、海内は郡縣となり、法令は一統による。上古より以來、未だかつてあらず。五帝も及ばざる所なり。臣等、謹みて博士と議して曰く、古、天皇あり。地皇あり。秦皇あり。秦皇もつとも貴し。臣等、昧死して尊號を上り、王を秦皇となし、命を制となし、令を詔となし、天子自ら稱して朕と言はん」

秦王「よいかな李斯よ。泰を去り、皇を着け、上古の帝位の號を取り、皇帝と言はふぞ」

群臣一同「皇帝陛下萬歲！」

——暗轉——

第十六景

咸陽の町の或る陋巷。

春の午後の日差しがうららかに差してゐる。一軒の格子戸越しに壺作りの老爺が仕事をしてゐるのが見へる。

范紀良が通りかかる。

爺「やあ。書生さん。今日は」

紀良「やあ。好いお天氣ですね。壺の乾きが早くて好いでしよう」

爺「左樣さ。壺のためには好い天氣だが、わしに取つちや餘り好いお天氣ぢやありませんよ」

紀良「どうしてですか」

爺「拵へた壺の錢は、右の手で受け取ると左の手から取られるんでね。拵へても拵へても追ひつきませんやね」

紀良「近頃ぢや貧乏も足が早くて稼ぐに追ひつくつて譯ですかね」

爺「流石は書生さんだよ。甘いことを言ふ。時に(と顎をしやくつて)お隣の御友人のところへ御見舞ひですか」

書生「さうです」

爺「あの若い人もお氣の毒なことだ、勉强盛りを病氣してるんだからね」

書生「それに秀才ですからね」

二人が立ち話をしてる所へ隣家の老婆が乾物をしに出て來る。

婆「おや。范紀良さん」

紀良「お婆さん。今日は。張さんの御加減は如何ですか」

婆「毎日御親切に有難ふございます。先刻、孫が藥を呑ませてあげたので、いくらか落着いたやうですよ」

紀良「そりや好い鹽梅でしたね。では一寸お見舞しましよう」

と家の中に這入つて行く。

婆「御精が出るね。お隣の爺さん」

爺「稼がなくつちや租税が拂へねえよ。今も書生さんにぼやいたところさ」

婆「それでもお前さん家は税が拂へるから豪儀なもんさ。わし所はどうしようかと思つてるんだよ」

爺「明日が最後の取り立てだらう」

婆（溜息を吐きながら）「あー。わし所は孫娘でも賣るより他に仕樣がねえんだよ。あの通り稼ぎ手が寢てるんでネ」

爺「本當だな。若え奴等、皆んな戰さに取られるからな。俺とこの李二も匈奴征伐に徴發されたきり、今もつて便りがねえ」

婆「何所も彼所も不景氣だらけさ」

老婆とぼ〳〵と乾物を終へると戻つて行く。

間。

俄かに騷々しい人聲がする。

入り亂れる足音。

爺「何だ。どうしたんだ」

影の聲「税を取りに來たぞッ!」

爺「そんな馬鹿々々しいことがあるもんか。明日の日暮れと定つてるぢやねえか」

影の聲「わあッ………」

一人の隊長に引率されて一隊の兵卒がばらばらと走つて來る。或る者は錢袋を持ち、或る者は衣類を手に持つて走り去るのもある。さうして他の兵卒は隊長の命によつて各戸に飛び込み、家財道具を引擕いで出て來る。

爺「無いものは無えッ」

兵卒「何だとッ」

爺「期限前などに俺のところに錢は無えッ」

兵卒「よしッ。斯ふしてやる」

と叫ぶと朱房の付いた槍で、そこらあたりの壺を悉く打ち壞して去つて行く。老爺、茫然として立ちつくす。

もう一人の兵卒が夜具を持つて出て來る。それに老婆が取り縋つて出て來る。

婆「ど。ど。どうぞ。それぱかりはお許し下さい。病人のものです。孫娘を賣つても税金は收めますでございます。どうぞ、それぱかりは御見逃し下さいまし」

兵卒「うるせえッ。俺は慈悲や情でやつてるんぢやねえ。役目でやつてるんだ」
婆「どうぞ明日までお待ち下さい。可愛い孫娘を賣つて——」
兵卒「そりや手前えの勝手といふもんだ。賣れたら此の次の税にしときな」
婆(泣きながら)「これほど申し上げても駄目ですか」
兵卒「文句があるなら阿房宮へ行ッ。阿房宮の御普請で御上ぢや錢が入るのだ」
　と老婆を蹴倒す。
影の聲「待てッ。待てッ。范紀良」
紀良の聲「止めるなッ。こらッ」
　と叫びながら范紀良、血相變へて飛び出して來ると、兵卒を擲り倒して夜具を奪ひ取る。
紀良「酷いことをするなッ」
兵卒「やつたな。青書生」
　と組み付いて行く。紀良また投げる。隊長走つて來て紀良を峯打ちにする。
紀良「わあッ。痛う………」
　と倒れる。
隊長「抵抗するかッ。青二才」
紀良(じたばたして)「何ッ。これが大秦帝國の善政だと言ふのかッ」
隊長「こらッ。御政治向を誹謗するのか。斬り殺すぞ」
老婆、飛び付いて隊長をなだめる。

兵卒等夜具を取り戻して引き上げて行く。紀良、壺作りの老爺や、孫娘に抱き止められて叫ぶ。

紀良「畜生ッ。口惜しい」

爺「書生さん。仕方がねえ。向ふにや權力てえものがあるんだ」

紀良「そ。そ。さうぢやないッ。それは暴政だ。彈壓だ。强奪だ——」

爺「それも阿房宮の普請が始つてからだ。今に咸陽の町は空つぽになつて仕舞ふだらうよ」

紀良「おう。阿房宮こそ禍ひの源だッ」

と叫んで、よろめいて立ち上る。その聲に四周の人民が皆な集つて來る。

紀良「おい。皆なッ。俺達は斯ふして凡てを奪はれてゆくのだ。奴等は、文句があるなら阿房宮へ行けと言つたぞ。阿房宮へ押しかけろッ。阿房宮へ…………」

一同「阿房宮へッ！」

と叫んで驅け出す。

——暗　轉——

第十七景

咸陽の町はづれにある廢寺。范紀良の下宿の一室。

頭に白布を卷き、左の手を白布で縛つた范紀良が寢てゐる。小坊主が藥湯を枕許に置くと靜かに出て行く。

晩春初夏の陽が窓越しに差してゐる。小坊主が遽しく走つて來て起こす。

小坊主「范先生………范先生」

紀良「おーーうーー何だい」

小坊主「お客樣ですよ」

紀良「俺を訪ねて來るやうな客は無い筈だ。役人だらう」

小坊主「いゝえ」

紀良「男か。(言ひ淀つて)それとも女か」

小坊主「御婦人です」

紀良(ガバと起きる)「あッ。い。た。た。た………痛い。身體中が痛い」

小坊主「お通しするんですか」

紀良「さうだ」

小坊主去つて行く。

間。

孟隆德の邸の侍女春環が這入つて來る。

若い愛嬌のある娘。

春環「范先生」

紀良「おう。春環か。誰かと思つたよ。御婦人だといふので」

春環「お孃樣でなくて御相憎くさまでしたネ」

紀良「ば。ば。馬鹿なことを言ふな。何しに來たのだ」

春環「お見舞です。先生が町で御怪我をなさいましたさうで」

紀良『どうして判つたんだ。誰から聞いたんだ』

春瓊『お孃様は、そりや御心配して居りますよ』

紀良『あゝ。萋女も――』

春瓊『えい。そりや大變ですよ。何所を御怪我なすつたかしら。この溫氣で膿でもお持ちになると大變だ。あんな御氣性だから、本當に氣短かで困る。なんかと仰有つて、そりやまるで旦那様のやうな御心配ですよ』

紀良『困るなあ。そんなに大したことぢやないんだから』

春瓊『それだつて、さうやつてお休みになつてゐらつしやるぢやありませんか』

紀良『萋女はそんなに私のことを心配してくれるのかい』

春瓊『存じません…………』

紀良『拗ねるなよ春瓊。癒つたら綺麗な絹の靴をやるよ』

春瓊『ホ…………御門遊ひでしよう』

紀良『生意氣言つてらあ。私はもう起きやう。起きて』

と起きる風をする。

春瓊(周章して)『先生。どう遊ばすんです。まあ。未だ起きられやしませんよ』

紀良『起きるんだ。起きて萋女の所へ行くんだ。そんなに心配しちや痩せて仕舞ふ。私の無事なところを見せるんだ……
……』

と其の時、そつと孟降德の娘萋女が部屋の片隅に立つてゐる。眩しいほど淸澄な娘である。

萋女『お休みになつてゐらつしやい。紀良』

紀良「おう。姜女。あなたも」

姜女「貴方の御こころざしはもう妾にわかつて居りますわ。御無理をなすつちやいけませんわ」

紀良「ぢやア寢てますよ」

春瑛「お孃様の仰有ることだと、直き言ふことをお聞きなさいますね」

姜女「春瑛。何を言ふの。彼方へ行つてゐらつしやい」

春瑛「はい……」

と去る。

姜女、紀良に抱き付いて劬はる。

姜女「紀良。どうして御怪我などして妾に心配をさせるんです。まあ。こんなに！」

紀良「申譯ありません。姜女」

姜女「また亂暴をなさいましたの。相手は何といふ憎い奴でしよう」

紀良「どうしても腹を立てずにはゐられなかつたんだよ。姜女。友人の張秀才のところに見舞に行つてると、租税の取り立てが來たんだ。それも納税の前日、然も軍隊を派遣して來て、病人の着てる物でもひッぺがして行くんだ」

姜女（美しい眉を顰めて）「まあ」

紀良「私はその横暴さに全身の血が逆流したんだ。誰だつて、あれを見ちや憤慨せずにはゐられないだらう。私は當然の抗議をしたんだ」

姜女「えい」

紀良「さうして捕られたんだ。そんな法つてあるものか。私は決して亂暴したんぢやないのだよ。姜女」

姜女『そりやわかつてますわ。でも職人と爭つたりしちや御怪我をするばかりぢやありませんか』

紀良『ぢやア私は何と爭ふんだい。一應、抗議した。再應熟考した。それから鬪つた』

姜女『妾は貴女と議論したかありませんわ。紀良。でも妾のことを少しは考へて頂戴ネ』

紀良『少しどころか。私は貴女で胸がいつぱいなんだ』

姜女（取りすがる）『妾もよ』

紀良『よく來てくれましたね』

姜女『何でもないことだわ』

春瓊が出て來る。

春瓊『お孃樣ッ』

二人は離れる。姜女は恥しさうにしてゐる。紀良は間が惡さうにしてゐる。

春瓊『お孃樣』

姜女『なあに。春瓊』

春瓊『もうお家へお歸りになつてゐらつしやらないといけませんよ』

姜女（不服さうに）『もう。そんな時刻——』

春瓊『えい。阿房宮の御普請場の人足の歌が聞こえますもの』

遠くで大勢の合唱する悲しい聲が幽かにする。

姜女『それぢやアまた。御大事に』

紀良「（手を差し伸べて）「姿女。あの歌を聞いてくれ。あの歌を——」

——暗　轉——

第十八景

阿房宮の建築場。

壯大な御殿の柱などが立ち、未完成のものなども並んでゐる。多くの工人が汗を流して働いてゐる。或る者は石を運び、或る者は材木を運搬し、或る者は悲しい節の歌を歌つてゐる。

積み上げた材木の上に工事監督が立つてゐる。

大きな材木を多勢の人夫が擔いで來る。力の拔けた懸け聲がわびしい。それを督勵する現場監督が長い鞭で人夫達の背や腕をピシリ〳〵と打ちながら、蟻の這ふやうに歩いてゐる。

懸け聲「ホウ………ホウ………ホウ………」

監督「怠けるなッ」

懸け聲「ホウ………ホウ………」

監督「もつと急げッ」

懸け聲「ホウ………ホウ………」

監督「こらアー」

と叫ぶと一人の人夫を鞭打つ。その人夫は倒れ伏して打たふれる。

監督「なまけると斬ふだぞッ」

積み上げた材木に立つてゐる工事監督が銅鑼を鳴らす。

それで一齊に人夫達は休憩する。

人夫一（倒れるやうに座つて）『苦しい………苦しい………』

人夫二『水が欲しい』

人夫三『死んだ方が增しだ』

人夫四『この普請は一體、何時までかゝるんだ』

人夫五『さうだ。始つてからもう十年近くなる』

人夫六『それで百分の一もまだ出來上らねえんだ』

人夫七『俺達の孫子の代までかゝるだらうよ』

人夫八『そんなことかもしれねえな』

人夫九『おい。ありや何だ』

人夫十『靜かにしろ。何か言つてるぜ』

積み上げた材木の上に范紀良が飛び上る。その周圍には多勢の人夫が立ちはだかつてゐる。休んでゐる人夫も注意を集めはじめる。

紀良『………諸君よ。吾々は長い間の内亂に苦しんだ。今や天下は始皇帝の比（たぐ）ひ稀なる善政の下に抱擁されてゐるといふ。果してさうであらうか』

人夫一同『否。否。斷じて否』

紀良『吾々は長い間の内亂時代を忍んで來た。そのために吾々は幾何の無意味な血を流して來たことか。然も始皇帝は國

威を塞外に延べるといふ理由のもとに、大將軍蒙恬をして三十萬の大衆を出兵せしめてゐるのだ。吾々の兄弟は徒らに屍を草白き原頭に曝してゐるのだ」

人夫一同「さうだ！」

紀良「然も皇帝は、その帝王の威嚴を示す必要よりして、盛に大土木を起しはじめた」

人夫一同「さうだ！」

紀良「聞き給へ。章台、上林、諸廟を咸陽の北坂に作り、南は渭に臨み、雍門の東、渭及び涇に至るまで、殿舍宮閣がつらなつてゐる。しかも皇帝は之を以つてしてもまだ足らないとして、關中に三百、關外に四百の離宮を拵へたではないか」

人夫一同「さうだ！」

紀良「然も尚ほ皇帝の虚榮心を滿すことは出來なかつたのだ。諸君。この壯大なる建築を見よ。阿房宮即ちこれだ」

人夫一同「さうだ！　さうだ！」

紀良「東西五百歩、南北に於て五十丈。上には萬人を座せしむべく、下は五丈の旗を建てることが出來るのが阿房宮だ。虹の如き廻廊は南山にいたり、渭をわたり、咸陽につゞき、果ては天にまで到達したいといふ途方もない空想が阿房宮だ」

人夫一同「さうだ！　さうだ！」

紀良「俺達はこのやうな馬鹿々々しい一個人の空想のために、十年の長い歳月を費し、七十萬人の勞力を費す必要が果してあるだらうかッ」

人夫一同（次第に昂奮して叫ぶ）「斷じて無いぞッ！」

紀良「諸君よ。諸君は何のために鞭打たれつゝ働いてゐるのだ。皇帝は大秦帝國のための義務と名付けてゐる。しかしながら此の義務のみあつて權利の無い奉仕は、當然、吾々は拒否する權利があるではないかッ」

人夫一同（全く昂奮して）「さうだッ」

紀良「諸君よ。立てッ。諸君の持ち場を悉く放棄しろ。咸陽五百の學生は、諸君が一齊に東門の廣場に集合することを期待してゐるのだ」

人夫一同（叫ぶ）「學生萬歳！」

紀良「諸君よ。今や塞外に於ける兵士。長城營繕の勞働者。國内の農民は悉く立つたッ。かゝる全面的鬪爭の舞臺に、諸君も亦、華々しく立てッ」

人夫一同（叫ぶ）「東門へ行け！」

范紀良を先發に人夫一同、雪崩の如くに走り出す。

銅鑼鳴る。

工事監督等多勢出て來る。

一同茫然として人の影さへ見へぬ工事場を見廻す——

——暗　轉——

第十九景

始皇帝の常の御殿。

皇帝は腹立し氣に眉を顰めてゐる。

李斯が報告してゐる。

李斯「…………陛下。唯今御報告の如く、若し之を打ち捨て置きますと將來、由々しい禍根を殘すことに相成ります

ゐかと存じまする」

皇帝「うむ」

李斯「とりわけ脇目もふらずに勉學すべき儒生共が、この騷擾を指導して居るやに見受けられまする」

皇帝「不埒な學生共ぢや」

李斯「仰せの如くで御座います。各地の報導を照らし合せますると、戰鬪的なる勞働者、農民、及び徒刑囚なども此の學生と緊密なる連絡を取りつゝ、あるやに承知仕ります」

皇帝「そんなにも彼奴等は朕に反抗の氣勢を示してゐるのか」

と不快さうに爪を噛む。

李斯「陛下の御稜威をも憚らざる致方かと存じまする。如何取りはからひましようや」

皇帝「其方の好いやうにしろ」

李斯、最敬禮して退出する。

皇帝「誰かッ」

と呼ぶ。靜かに親衞隊長が出て來る。

皇帝「屈強な武士を四人ほど連れて來い」

隊長「はつ」

と退出する。

皇帝、その間、部屋をぐるりと腹立し氣に歩き廻る――

――暗　轉――

第二十景

咸陽宮東門前の廣場。

夕陽に輝く城門が燦然として見へる。

廣場には咸陽の町の市民、勞働者、儒生、老若男女、それに近鄕の農民が蓆旗を押し立てて集つてゐる。

金人の肩の上に一人の勞働者が馳け上つて叫ぶ。

勞働者「諸君ッ。緊急動議だ！」

市人「何だ。何だ」

農民「早く言へ」

勞働者「民衆大會に變更したいッ」

民衆「異議なし！」

勞働者「咸陽民衆大會萬歲ッ」

民衆「萬歲！」

民衆の中に、何時の間にか四人の武士に守られた始皇帝が、すつかり變裝してまぎれ込んでゐる。

范紀良が勞働者に代つて金人の上に立つ。盛な拍手が起る。

紀良（壯重に）「諸君よ。吾等の祖先はかつては最も平和な、最も公平な富の分配の社會を持つてゐた。卽ち堯舜の時代であると」

群「さうかもしれねえッ」

紀良「然り。さうかもしれない。亦さうでないかもしれないのだ。吾等は見ぬ世界に就いては信ずることが出來ないではないか」

聲「さうだッ！」

紀良「しかしながら吾々は、さうしたところの社會が、如何にしたならば將來することが出來るかといふことを、かつて一度も考へなかつたであらうか」

聲「否ッ。否ッ！」

紀良「諸君よ。今や吾々、大秦帝國の大衆は最も大なる危險に當面してゐるのだ」

聲「それは何だッ」

紀良「卽ち、周室の搖ぎなき國體は、王者の出現によつて、脆くも社會的動搖を經驗した。租税は苛しく、國家は破産に瀕し、住民は集團的に貧窮化し、各地に謀反を起し、斯くて周室は歷史の中に埋歿した。王者とは何ぞや。封建的搾取の美しい假面を被つたところの吸血鬼に過ぎない」

聲「さうだッ！」

紀良「彼等は縱漫に、然も目まぐろしく爭鬪した。彼等の侵略と搾取とは互に相殺した。始皇帝は自ら英明を以て任じ、眇々の身を以つて暴亂を誅し、宗廟の威靈によつて天下を定めたと號する。しかしながら六國を亡したものは實に秦に非ずして却つて六國であつたのだ」

聲「その通りだッ！」

紀良「諸君よ。秦王政は突如として皇帝として吾等の面前に、その假面をかなぐり捨てた。吾等が大秦帝國の大衆が大なる危險に直面するといふ所以である。請ふ。暫らく俺言の葉を聞いてくれ」

聲「[illegible]…………[illegible]…………」

紀良「秦王政、はじめて天下を平定するや、自らおもへらく、徳に三皇を兼ね、功は五帝に過ぎたりとなし、乃ち皇帝を號した。しかしながら吾等の鬪爭題目は、かふした名號の問題ではない。吾等は寧ろ、皇帝が代表するところの無限の政治的權力でなければならないのだ。卽ち、自由であるべき秦の民衆は、正に恐怖すべき政權の前に屈從を強ひられることであり、この誇るべき中華に帝國主義といふ怪物が誕生したといふ呪はしい事實に就いてゞなければならない」

聲「さうだッ！…………さうだッ！…………」

紀良「吾々、被抑壓階級は、皇帝たることによつて倍加されたところの——」

その時、突如、始皇帝は右手を高く擧げる。

と秦兵が、その大群衆に向つて狼のやうに飛びかゝる。

名狀することの出來ない混亂。

怒號。

叫喚。

亂鬪。

——暗　轉——

第二十一景

深夜。

孟隆德の邸の裏門。

蟲の音が湧くやうに起る。

覆面をした范紀良か忍びやかに現れる。

さうして戸をほと〳〵と叩く。

間。

土塀の内側から春珉が顔を出す。

春珉「范先生ですか」

紀良「さうだ。姜女は」

入れ變つて姜女が顔を出す。

姜女「紀良ッ」

紀良「姜女」

二人は上と下と顔を見合せる。

姜女「紀良。貴方はどうしてそんなに大膽なのです。町は大混亂だつて聞きましたわ」

紀良「それは本當だ。皇帝はいよ〳〵虎狼の正體を暴露した。咸陽の町の人間は罪のない者まで檢擧されてゐる」

姜女「さうして殺されたつて本當ですの」

紀良「噓ぢやない。私達の同門の儒生だけでも四百六十人餘りは死刑になつて仕舞つた。その他にどれほどの人間の血が流されたかわからない」

姜女「まあ。四百六十人も……」

紀良「さうだ。張秀才も寢床から引つ立てられて刑場の露と消えたんだ」

姜女「さうして貴方は」
紀良「無論探されてゐる。だからお別れに來たんだ。當分逢へないかもしれない。否。或はこれが一生のお別れかもしれない」

姜女泣く。

紀良「泣いてはいけない。姜女」
姜女「貴方は御氣が強いから、そんなことが仰有れるんですわ。妾は――」
紀良「そんな女々しい事を言つてる場合ではないよ。姜女。皇帝の暴政は益々募るだらう。私達は益々その横暴さに反抗して、何時かは勝利を獲得する日を持ち來らす心算だ。若し私達が二度と逢へなかつたら、それは皇帝の暴政の故だと思ふが好い。しかし私は再び會へる日のあることを信じたいのだ」
姜女「屹度よ。紀良」
紀良「それでは左樣なら。身體をくれぐれも大事にしてくれたまへ」
姜女「貴方も御大事に…………」

紀良走り去る。

姜女「范紀良…………范紀良…………」

と泣く。

――暗轉――

第二十二景

眞夏の夜。

咸陽のとある町。

明々と灯のついた二階屋から陽氣な音樂が流れてゐる。軒下に十人ばかりの人間が集つてゐる。ひそ〳〵と相談すると、ぱッと散る。

間。

五人の男が町へ現れる。

背の高い男「もう町も靜かなもんだな」

伴人一「矢張り御稜威の然らしむるところでございます。陛下」

背の高い男「叱ッ。陛下ぢやないと言ふのに」

伴人二「恐れ入りました」

背の高い男「どうだ。見ろ。咸陽の夜の景色は。萬民鼓腹して太平を樂しんでゐるではないか」

五人立ち止つて音樂に聞き惚れる。

突如。

無言で十人の刺客が五人を襲ふ。

四人は拔劍して戰ふ。

その隙に「背の高い男」が脫兎のやうに逃げる。

鋭い劍戟の音――

第二十三景

孟隆德の庭園。

奇巧を極めた庭の夜景はまるで物語のやうな風景である。奇岩、怪石をあしらつた庭は、こんもりとした濃緑の立木に限取られて、月に輝いた池を抱いてゐる。

その池に妾女が裸體で月を浴びながら水浴をしてゐる。

陸に春環が妾女の衣服を持つてゐる。

間。

土塀を飛び越えて、刺客の手を逃れて來た「背の高い男」（始皇帝）が、忍び足で庭に現れる。

茫然とそれを眺めながら…………

――暗　轉――

第二十四景

孟隆德の客間。

善美を凝らした裝飾をしてゐる。

孟隆德は逞しい資本家面をした老人である。彼は美服をつけて直立してゐる。隆德の後に妾女が矢張り第一粧をして從つてゐる。

――暗　轉――

皇帝の使者、宦官趙高が護衛兵に守られてつか〳〵と這入つて來る。

趙高「上意ッ」

隆德と妾女、跪座する。

趙高「孟隆德よ。汝を咸陽に移轉せしめたのは陛下の御仁慈の然らしむるところである。それゆゑ汝は斯くも富を積むことが出來たのだ。陛下は汝の忠節を嘉するものから、汝の娘妾女を立てゝ御妃とせられるといふ有難い思召しだ」

隆德(欣然として)「は。はい」

趙高「恭んで御受けするが好い」

隆德「お有難い思召しで御座います。隆德に何の否やが御座いましよう。まして家門の譽でございます。恭々しく御受け仕りまするでございます」

趙高「おう。早速の承引かたじけない。陛下には如何ばかり御滿足遊ばされることであらう。また使者としての私の面目も立つといふものだ」

隆德「さうして何時、娘を御殿に差し上げましたならばよろしうございましよう」

趙高「陛下の御諚では速刻、唯今——」

隆德「おう。それは〳〵」

とほく〳〵と喜ぶ。

隆德「これと申すも貴方の御口添えの御影でございましよう。私は貴方の御好意は無にはしない心算です。隆德も多少は咸陽に知られた家で御座いますでな。へゝゝゝゝゝゝ」

趙高「いや。そんな御心配は却つて。ハゝゝゝゝゝ」

二人椅子に着く。

　姜女は默然と次の間に立つて行く。

隆德『それに娘が、もしも幸に陛下の御寵幸を受けますやうなれば、さうして王子なり、王女なりを御生みする曉には、私は貴方の御好意に對して十倍のな。へゝゝゝゝ』

趙高『貴方のやうに御運の好い御方は、先づ此の咸陽十二萬戶の物持ちの中でも隨一ですな。ハゝゝゝゝ』

隆德『いや。さうありたいもんですわい。私もこれで苦勞に報はれるといふもんですからな』

　春環遽しく飛び込んで來る。

春環『旦那樣ッ……旦那樣ッ……大變でございますッ』

　二人ぎよッとして飛び上る。

隆德（叱る）『何ぢや。騷々しいッ。無禮者めが』

春環（わく〳〵して）『お孃樣が………お孃樣が………』

隆德『ど。ど。どうしたのぢやッ』

春環『鴆毒を仰いで………鴆毒を仰いで御自害でございますッ』

隆德『えッ』

　と、言ふとへた〳〵と座る。

趙高（威丈高に）『何ッ。自害ぢやと。皇帝の御諚を背いたのだな』

隆德（呟く）『お。お。親不孝者めッ』

趙高『えッ。これで何も彼もお仕舞ひだ。それッ。（と護衛兵に指圖して）孟隆德を捕縛しろッ』

兵卒一勢に降徳に飛びかゝる。

降徳「えいッ。私は。私は縛られる理由がないわいッ」

と喚きながら縛られて引き立てられる。

趙高「フン。咸陽第一の此の富豪の家財も、これで沒收だ」

と嘲るやうにして、降徳を引つ立てながら去る。

——暗　轉——

第二十五景

遼東附近——

臨洮より起つて遼遠として連續する萬里の長城の一部。

崩れた石垣の附近に困憊した囚人が石を運んだり、積み重ねたりしてゐる。

朔北の風の音。

時折り雪さへ降つて來る。

聲「新入りだッ——」

その聲に皆々一勢に手を休めて一方を凝視する。

病弱らしい青年が突き飛ばされて來る。

人夫一「まだ小伜ちやねえか」

人夫二「可愛相に………」

人夫三「お前えは何所から送られたんだ」

青年「都から」

人夫四「咸陽からかい」

青年「さうです」

人夫五(狂喜して)「おい。話を聞かせろ。都の話を聞かせろ」

人夫六「珍らしい話を聞かせろ」

青年「別に變つたこともありません」

人夫七「お前えには變つたことでなくても、俺達にや都の話は皆な樂しみなんだ」

青年「樂しみでしようか」

人夫八「何故」

青年「私はお話しするさへ苦痛です」

人夫九「そ。それもさうだ。なまじ都の噂を聞くてえと、身體の毒みてえなもんだ」

人夫十「皇帝は」

青年「依然として神聖な帝王權は微動もして居りません」

人夫十「そ。さうか。まだかッ」

青年「さう。さう。こんな噂がありました。皇帝が陽武地方を御巡狩の折、博浪沙で刺客に襲はれたと、大變な騒ぎを聞きましよ」

人夫十「何ッ。博浪沙で刺客に」

青年「然も刺客は巧みに逃亡して、未だに逮捕されないさうです」
人夫十「それは一體、誰だ。學生か。勞働者か。農民か」
青年「韓の亡國の遺臣で張良とかいふ男ださうですよ」
人夫十「フン。それぢや駄目だ」
青年「何と仰有る……」
人夫十「そんなことで皇帝を倒せるものか。始皇帝を倒したところで、二世皇帝が立つだらうさ。何にもなるものぢやない」
青年「しかし。しかし」
人夫十「俺を見ろ！」
と人夫十が面を傍へ持つて行く。
人夫十「俺達は何のために流刑されたんだ。俺も矢張そんな間違つた英雄主義のために失敗つたのだ。俺は咸陽の儒生で范紀良といふ者だ」
青年「あの儒生騷擾事件の」
紀良「さうだ。俺達は皇帝一人を倒しさへすれば、帝國主義は譯もなく引つくり返せると思つたんだ。それで同志十人と畫つたんだ」
青年「おう」
紀良「俺は間もなく他の事件で縛られた。さうして長城へ送られて來たんだ。九人の同志は斬り殺されて仕舞つた。俺だけが生き殘つた。俺はもう、あんな輕薄な英雄主義には欺されなくなつた」

青年『貴方の仰有りたいのは――』

紀良『秦の民衆は自然發生的に、屢々、皇帝に對する鬪爭を挑んだ。しかしながら是等の烏合の大衆は何時でも敗北した。敗北が民衆を次第に恐怖させたことも事實だが、さうした自然の蜂起に對して、皇帝は次第に強くなつて來た。俺達はしかし遮二無二、反抗し、鬪爭した。さうして堪らなくなつて×××に皇帝を襲撃したりした。しかしながらこれは全然、間違ひであるし、失敗だつたのだ』

青年『何故でしよう』

紀良『俺達はしつかりと根を生やした××を持つてゐないことだ。俺達は大秦帝國の農民の完き××なしには、強力な帝王に對する政治的な戰ひは不可能だといふことだ。何故なら秦の民衆の九割は農民だからだ』

青年『あツ。さうです。まつたくさうです』

紀良『つまり俺達は、皇帝といふ政治的××の主體が、より高度の段階に達してゐるといふことに對して、全く誤算してゐたのだ。俺達の敗北の原因は、そこに胚胎してゐたのだ』

青年（感激して）『さうでした。私も亦さうした誤ちを犯して流刑囚となつたのです』

紀良『しかし未だ遲くはない！』

青年『さうでしようか』

紀良『俺は未だ望みを失つてやしないさ。現にだ。此の長城の營繕にさへ無慮七十萬人の×××が組織されるのを待つてゐるのだ』

青年『おう。七十萬人！』

紀良『さうして大秦帝國の四億の大衆だ』

第二十六景

秋七月。

沙丘宮の平臺の一室。

華麗な寢臺に始皇帝が寢てゐる。

その傍には左丞相李斯、中車府令行符璽事趙高、始皇帝の末子胡亥、廷臣、侍女等が立ち並んでゐる。

一人の廷臣が遽しく馳け込んで來る。

廷臣「丞相よ」

李斯「何だ。遽しい………」

廷臣「只今、遼東より早馬が參りました」

李斯「何事だ」

廷臣「大將軍蒙恬よりの信書でございます」

李斯「さうか」

李斯、一通の文書を披見する。

李斯「何ッ。遼東に一揆が蜂起したとッ。直ちに鎭壓しろと命じろ」

廷臣「はい」

と退場して行く。

皇帝「丞相よ。何事かあつたのか」

李斯「いゝえ。陛下。國内は至極泰平無事でございます」

皇帝「さうか……………」

間。

李斯「陛下は昏々と御休みのやうだ。皆退出してよろしい」

一同「はつ」

李斯「公子よ。趙高よ。貴方々御二人はお殘り下さい」

一同退出する。

胡亥と趙高とが殘る。

皇帝「丞相よ。扶蘇はどうした」

李斯「扶蘇公子は蒙恬と共に塞外におられました筈で御座いますが——」

皇帝「さうだつたな。扶蘇は賢明な子だつた。朕があれを追つ拂つたのは朕の間違ひであつた。朕はもう長いことはない。朕は扶蘇を皇太子にしたいのだ」

李斯「陛下は御譫言を仰せられて居られますな。胡亥公子」

胡亥(どぎまぎして)「さうかもしれない」

皇帝「丞相よ。朕の意識は明確だ。朕は扶蘇を皇太子にするのだ」

李斯「陛下は夢を御覽になつてゐられますな。趙高」

趙高「確かに左樣に存じます」

皇帝「丞相よ。其方は何を言ふのだ。扶蘇を呼んでくれ。朕は扶蘇に逢ひたい」

李斯「陛下よ。扶蘇公子は八百里の彼方に御出で遊ばします。

皇帝(切なさうに)「さうだつたな。朕は扶蘇に與へる書を認めて置いた」

李斯(ぎよッとして)「陛下よ。臣は陛下の御書を扶蘇公子に、確かに御手渡しいたしませう」

皇帝、枕頭を指す。

趙高、一通の御書を取り出して李斯に渡す。

皇帝「そ、そ、それだ……」

李斯「陛下。念のため御質ね申します。この中には」

皇帝「扶蘇を皇太子にする」

李斯「それから」

皇帝「朕を驪山の麓に葬れ」

李斯「それから」

と言ひながら李斯、その御書をべりべりと破いて仕舞ふ。

胡亥及び趙高、色を失ふ。

皇帝「姦賊ッ！ 何をするかッ」

皇帝は怒り立つて起き上らうともがきながら、棒を倒すやうに死ぬ。

李斯「お二人こちらお聞きなさい。陛下は胡亥公子をもつて二世皇帝となさる思召しだつたのだ」

二人「はい」

李斯『しかしながら今、俄かに陛下の喪を發することは、天下に變亂を招くも同然と存じます。陛下を未だ御病氣の體にして、直ちに都に還幸しようと思ふ』

趙高『それがよろしう御座います』

李斯『それでは——』

趙高、つかつかと次の間に向つて叫ぶ。

趙高『還御！』

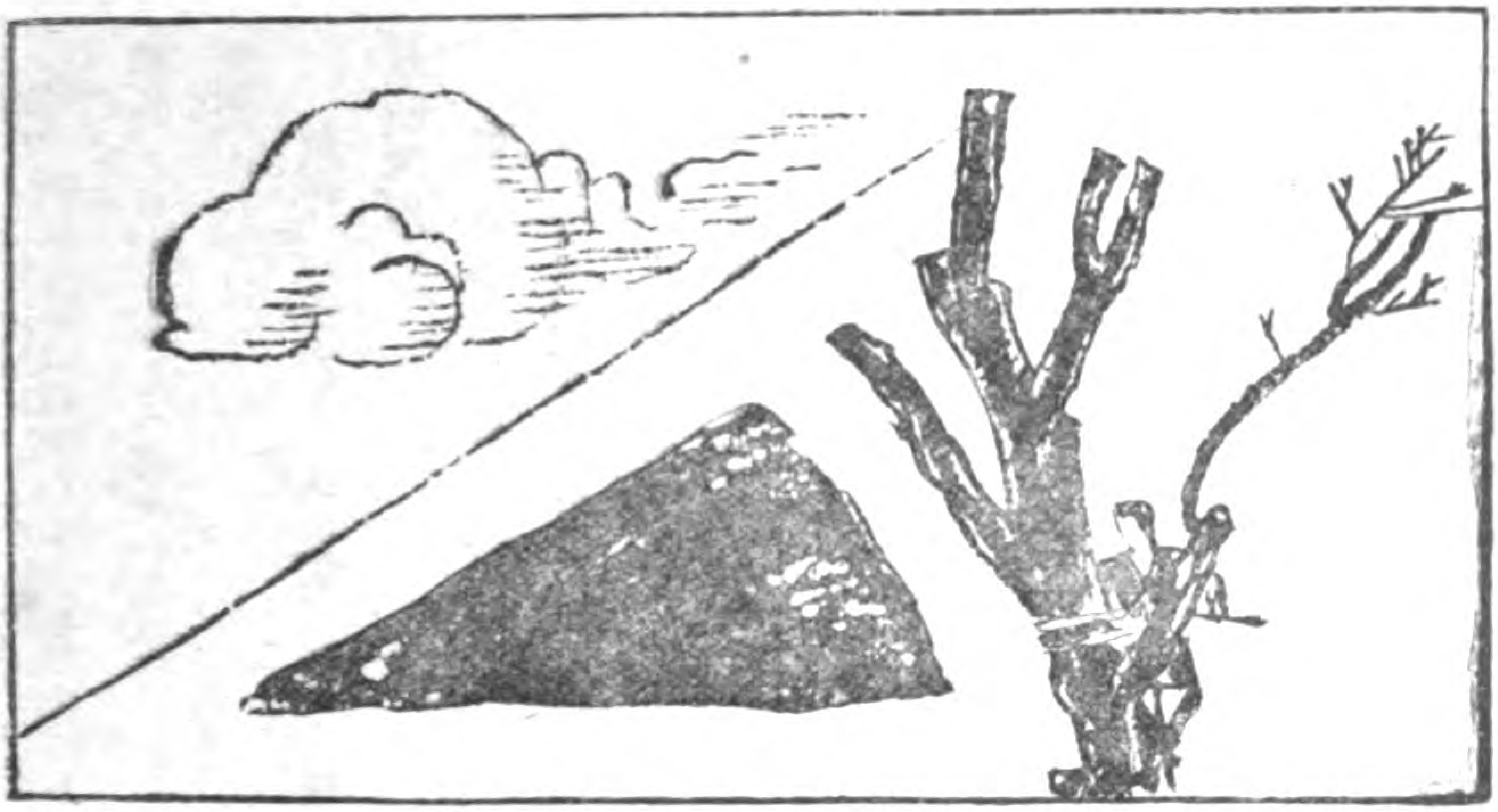
俄に騷然とした足音が起る。

やがて羽飾のある見事な轀涼車が運び込まれる。

胡亥、李斯・趙高、それに寵幸を受けた五人の宦官が始皇帝の身體を轀涼車に移す。

百官が最敬禮をしてゐる中を靜かに、靜かに生けるもの丶如く皇帝の轀涼車が軋みはじめる——

幕



ある一群の象

淺原六朗

麻雀の牌がざらざらとくづれる。

歡聲。電話の呼鈴が鳴つてゐる。女が動物園の鳥のやうに、鋭い聲をあけてゐる。

ボヘミアン・ネクタイの男が、亮のゐる室の扉をあけて、駱駝のやうな顏をだした。

「おや、ひとりぼつちで?」

亮はぼんやりとした感じでにやりつと笑つた。

「仲間に入りませんか。今日は僕の大當りなんですよ」

亮は無言のなかで首をふつた。と、その男は、亮と同調子に、にやりつと唇をゆがめて顏をひつこめた。

窓ぎわにきて亮は莨に火をつけた。

高架線の電車が、華麗な光りをゆすつて走つてゐる。ビルヂィングの線と線との間の瞬間に消滅してゆく高速度の電車ではあるが、空中を行く光りの車のやうな華やかさが、亮の視覺にはのこされた。

——夜る、夜る、夜るのなかに俺は生きればいいのだ。女たちと金と。」

亮は口笛を吹かうとしてやめた。

女がかわいた聲で、何か喋舌りつづけてゐる。牌がかちかちかち、澄むだ音をたててゐる。

また女が乾燥した聲をあげてゐる。

亮は耳をたてた。耳をたてて首をかたむけた。乾燥した女の聲に、何かとほい記憶がありさうに想へたからである。

暫くして、亮は體の緊張をといてゐた。

乾燥した女の聲は、亮の母親が死ぬ頃に呼びかけた聲に、何パアセントかの共通性があつたのだと言ふことが解つたからである。

「亮ちやん、勉强をよくするんですよ、そして立派な人になるんですよ。」

母親は死ぬころに、亮を前にすると、きつとこの言葉を言つてゐた。亮の廿歳の頃のことであるのに、母親は亮を子であるがために、まだほんの十五六の子供のやうにしか考へてゐなかつたのである。亮も、母親の氣持にそうため、母親の前に行くと、幼い感情になる習慣をもつてゐた。

「亮ちやん、勉强するんですよ。そして立派な人になるんですよ。」

母親は十回目に、この言葉をくりかへす時も、今はじめて亮にこの言葉を贈るかのやうに、眼をうるませて、うるませた眼を、ぢつと亮に注いで言ふのである。

亮は素直に母親の前でうなづいてゐた。母親の言ふ通り、勉強して、立派な人となれるならなつてもいいと、お
ゐた。

母親が死んでから、學校を卒業する頃まで、時たま母の言葉が、亮の頭にうかんできてゐた。ことに、派出婦の冷めたい枕に眼をさました頃に、よく母親の言葉が蘇生するのである。

亮は苦笑して、母親の言葉を検討するやうになつてゐた。

——要するにこれが貧乏だつたからだ。入院すれば、癒つたかも知らない母親も、その入院が不可能であつたがために死んで行つてしまつた。母親は家の現實を知つてゐた。父のとる七十圓の收入が、六人の一家族に對して、どれほど、弱いかのものであるか。母親が若し入院するとすれば、一家が餓死するほど食はなくつたつて、母親の入院料を支持することは出來ない一家だつた。

母親は一家の現實を、病氣の現實を計算して、結局、死を選んでゐたのである。

「入院すれば癒るにしても、入院できないなら仕方がない。」

母親は運命として素直に、この現實に服從してしまつてゐたのだ。

しかし、運命として、この貧乏な現實に服從して、死の方を選ぶ母親ではあつたが、この現實に對して、燃えのこる感情は母親にもあつた。母親はその感情に、思想と批判をあたへることが出來なかつただけのことなのである。

母親はこの燃えのこる感情を、亮にむかつて吹きかけたのである。

「勉強して、立派な人になつて下さい。」

と言ふ古風な表現形式を借りてきて、亮に吹きかけたのである。

それは少くとも、文字通りの意味だけではないと云ふことが、後年の亮には解つてきてゐた。

端的に言へば、母親は亮に「お金持になつてくれい。」と希望したのである。

「入院しなければ死ぬやうな場合に、入院できないやうな貧しさにゐないでくれ。堂々二等にでも、一等にでも入院できるほどの金持になつてくれ。お父さんと同じやうな淺間しい貧棒にはゐてくれるな。」

この意味を、母親は意識すると、意識しないとにかかわらず、腹のなかにもつて、亮をはげまし、亮に切願したのだ。だから、亮は學校を卒業した頃、少くとも成功してやらう、金持になつてやらうと考へたのである。

然し、日本のきびしい資本網のなかにあつて、金持になりうる場所が、どこにもあるべき筈はなかつた。亮はわづかに四十圓の俸給を、H會社で受けとる身分になり得ただけだつた。三年たつて、亮は六十圓の收入になつた。

六十圓の收入。靴下と、ネクタイと、カラアと、靴と、電車賃と、その日その日の食事と…。それで何がのこる？

亮は母親の言つた言葉を、思ひだした。そして

「糞ッ。」

と思つた。誰にむかつて叫ぶ「糞ッ」であるか解らない。しかし、兎も角、憤懣の情のなかで、

「糞ッ。」と思はないわけには行かなかつた。そして、それ以後、母親の言葉は思ひださないことにしてしまつた。母親は幼い時、亮によく、お伽話をしてきかせてくれた。空想のなかで、凡てが、可能なお伽話を。そして、その死ぬる日には、現實のなかにお伽話の世界を見出すやうに亮に賴んで死んで行つたのだ。

「糞ッ。どこにそんなお伽話がある。」

母親に對して叫んだのでなく、社會に對して叫んだ。叫びながら、毎日を六十圓の俸給のなかで浪費した。

主任が亮を呼ぶ。猫のやうに柔順な態度を見せる。そしてうしろに廻つて舌をだす。

「しかし、お伽話が、若しこの世にのこつてゐるなら、つかむでやらう。正直にやつたつて仕樣がないぢやないか。山か

んで行け。出かんで行け。」

で、今夜になつたのである。そして乾燥した女の聲のなかに、母親をふいに思ひだしたのである。

隱岐が扉をあけてゐた。

「失敬、少し遲れたか？」

「もう、三十分ぼんやりしてゐたぜ。」

「いや、話が、一寸こんぐらかつたんだ。隣りで麻雀でもしてゐればよかつたんだ。」

「金のない時にや、麻雀どころぢやないよ、僕が、さつきから考へてゐたんだ。よくこんな處で、呑氣に毎晩麻雀ばかりしてゐる奴があるもんだと。」

「だが、もう少しだ。麻雀にでも、女にでも金をつかへる日がくるよ。もう、お互ひにその方向に出合してゐるんぢやないか。一年後に、お互ひは小ブルジョアになつてゐる。五年後には大ブルヂョア。自家用の自動車をぶつとばさないやうで、何んの人生の意義だい。」

隱岐は短い首をカラアのなかでゆする。

亮はかるく憂鬱なものを顔にながした。

「君は少し空想で行きすぎると思ふがなア。今度だけは本式に、どこまでも科學的に行かなくつちや。」

「大丈夫だ、口ぢやふざけてゐても、腹のなかぢや少しもふざけてゐない、もう、幸運は我々の少しの努力だけで捉へられる處にきてゐる。サア、出かけようぜ。」

隱岐は固いポオト・フォリオを抱いて立ちあがつた。

俱樂部の給仕女が入つてきた。

「隱岐さん、もうお歸り？」

「これから、ある奥さまからの招待へさ。またくるよ。」

隱岐は女の頰を指さきで突いてゐた。

「いやよ、隱岐さんはいつも人の顏にばかりさわつて。」

「おほほほほ、今に札束でなでてやるよ。」

隱岐の哄笑は螺旋形の階段を降りきるまでつづいてゐた。

肉の厚い、脚の短い女がソファから顏をわづかに浮かしてゐた。ひろげられた時からの感じであらうか、肌をはだけてゐるやうな無作法な印象が顏のどこかにある女である。

隱岐は、若い兵卒のやうな挨拶をこの女の前に進みでてするのである。

「突發的な用事が出來まして、ほんの五分、全く五分遲れてしまひました。」

麻雀俱樂部での隱岐とは打つて變つて、技巧的にこの女の前でどぎまぎして見へてゐるのである。

亮はこの女が、隱岐の所謂貴夫人であることを知つて、失望と輕蔑をかるく味つてゐた。

「その突發事件と云ふのが、やはりこんどの事業計畫に關係したことなのでして、Kと言ふ北海道の多額納稅者、多分御存じだと思ひますが、今度の事業に非常な贊成ぶりなのです。あなたと共同ならば、いくらでも出資すると言つたやうな意氣込みでした。」

「それでどうですの？　起業目論見書や、その他の印刷物が出來まして？」

「今日、丁度刷りあがつたところなのです。これが愛國製藥株式會社の定款になります。」

隠岐のわたした印刷物を、女は一寸見て、すぐテエブルの上に置いた。

「次にこれが創立趣意書、これが起業目論見書になつてゐます。數字の基礎を正確にするために、かなりな苦心を、私も拂つたわけなのです。」

女は、隠岐が苦心したと言ふそれらの印刷物を、新聞紙のやうにひろげて、眼を通すほどもなくテエブルの上に置いてゐた。

「なにか、石油、さう、石油のやうな匂ひが致しやしません？」

女は寶石だらけの指を、鼻の尖端にあげてゐた。

「あゝそれは、今日刷りあがつたばかりでして、活字のインキが乾いて居らないのでした。」

隠岐は粗相をした召使のやうにそれらの印刷物を、彼の手許にひきよせてゐた。

「では、一寸、失禮ですが、私がお讀みして見ませう。間違ひはありませんつもりですが、兎も角、奥さんに主要な點なお聽きして置いても頂きたいのですから。」

隠岐は、インキ壺のやうな喉で咳をした。二つ咳をした時、あらたまつた形で、印刷物の一つを朗讀しはじめてゐた。

「晩近、化學――進歩ト共ニ製藥事業ノ急激ニ發展シタル結果、ソノ製藥工場ハ激増シ、競ツテ完全ナル新製藥ノ發明ニ沒頭シツヽアリ。抑々、醫藥ノ進歩發達ハ人類幸福ノ増進ニシテ優秀製藥製造ノ業務タルヤ、マタ社會ニ功顯スルノ大ナルハ何人モ是認スルトコロナリ。從テ完全ナル製藥會社出現ヲ社會ハ要望シツヽアリ……。」

隠岐は、朗讀に抑揚をつけ、情熱をこめてゐた。

「まあ、それでよろしいわ。」

女は隠岐の朗讀の中途で手をふつてゐた。

「議論よりも、もつと利益のあがるやうに書いた處がある筈ね。例へば、どんなやうな方面で、どんな方法によると利益は確實に年三割から四割には行くといふやうな……。」

「もちろんあるのですが、收支豫算書はあとで數字的に細かく拜見して頂くとして、この邊をお讀み致しませう。」

「……巧妙ナル宣傳術ト製藥ノ效能ハ本社ノ生命トスルトコロニシテ、從來各病院、各療養所、全國各醫師等ニ一度ソノ製品ノ提供又ハ藥品試驗等ヲ依託セバ、ソノ優秀ナル品質ト、價格ノ低廉ナルコトハ承認セラレ、必ズ以後ニ於テ繼續使用スルヤ必セリ。尙處方ヲ記入シテ一般需要者ニ服用セシムレバ最上ノ宣傳トナリ多大ノ注文ヲ受クル確信アリ……。」

女は細い眼で斜めに亮を見た。指は彫刻された帶留の白珊瑚をなでてゐる。腰部は十センチほど左方によぢらせ、兩脚は無造作に組み合してゐる。

亮には、この肥滿夫人が、隱岐の熱烈な朗讀に注意してゐるか、どうかが疑はれた。

「……マタ製藥賣物宣傳並ニ醫學雜誌、新聞紙等ニ廣告ヲナスニ於テハ豫期以上ノ注文ヲ受クルベク、當製藥會社ノ製藥效能顯著ナルニヨリ、他ノ賣藥品ホドノ廣告費ヲ要セズシテ、全國的ニ需要ノ喚起サルルコトモ期待シウルナリ。コレ等ノ累進的注文增加ニヨツテ初年度二割、創業三年ニシテ、五割迄ノ配當ハ易々タルコトヲ確信スルモノナリ。

左ノ豫算ハ總テ創業年度現在ヲ基準トシテ內輪ニ見積リタリ。」

隱岐は一息ついた。

女は隱岐が次の朗讀にとりかゝる前に手をふつてゐた。

「解りました。名文ですこと。隱岐さんお書きになりました？」

「いや、なに。」

隱岐はてれがましくカラアの間に指を突つこんで「兎に角、要を得なければならないために、趣意書とか、目論見書と

か言ふものは書きにくいのでして……。」

「でせう？　けれどよく出來てゐてよ。」

女は帯の間から金色のコムパクトをとりだしてゐた。コムパクトの盖は、女の指さきから巧みに廻轉して開き、掌のなかの鏡が、女の大型な顔を映したやうである。

「前にもお話した通り、株式の方は是非三分の一ほどもつて頂きたいのですが。あとは北海道の多額納税者と、私の手許の方で、資本金十萬圓の全部がまとまることになつてゐるのですが……。」

「そうねえ。」

女は、鼻筋から頬にかけてハケをつかひだしてゐた。

「奥さまに三分の一もつて頂くと、會社創立の基礎にまづ社會的信用を受けることが出來るのでして……。」

「十割も配當があるやうになれば結構ね。」

「それは、この前もお話した通り三年も經てば確實にあげられる利益でして、本會社が買收することになつてゐます沼田製藥所でさへも、あの小規模な事業活動で五割の利益をあげてゐることが精細に調査されてゐます。ですから、ましてこの十萬圓の會社が成立しました場合、販賣網の擴張と、製藥自體の優秀さによつて……。」

「あの澤田と言ふ役者は死にましたね。」

「はあ。」

隠岐は瞳孔の開いた眼を女に注いだ。

「中耳炎でしたね、たしか。あの中耳炎の藥も出來ます？」

「中耳炎の？　もちろん技師長と相談して、あらゆる方面の製藥を開始することになつてゐます。」

ハケは女の顔のほとんど全面を數十回にわたつて往復してゐる。もはや、亮の觀察によると、そのハケを用ゐる箇所は發見されなかつた。しかもそのハケは、幅のひろい鼻端の兩側を注意ぶかく往復してゐるのである。

女は突然に笑ひだしてゐた。

「隱岐さん、失禮。わたしお洒落ではないのよ。けれどこのハケの尖端が、とても氣持のいい柔らかさなの。」

「はあ。」

「だから、つひ癖がついてしまひましてね。時間があると、ぢきにハケをだして、顔をなでたくなるのよ。」

「ははあ。」

「ともかく、三日ほど、私に考へさして下さらない？　それだけのお金になると、私ひとりの自由と云ふわけにも行かないことなのね。贊成なのはもちろん大贊成なのよ。女だつて事業をして惡いと云ふことはないのでせう？」

「もちろんです。だから、奧さんに對して、私は熱心にお話したやうなわけです。」

東京會館から歩道に數歩でたとき、隱岐は突然高い聲で笑ひだしてゐた。腹を抑へ、チョッキをゆすつて、泥醉者のやうな歩き方で笑つてゐるのである。

「中耳炎だとよ。澤田の耳につける中耳炎の藥が欲しいんだとよ。」

亮もこらえてゐた笑ひを爆發させてゐた。

「だが、しかしあの妙な貴夫人がだすと思ふか？」

「だす。きつと出す。俺がきつとださせるよ。二三萬の金ぐらゐなんだい。」

「だが、しかし君はあの女の前で、奴隷的態度にでてすぎたやうだ。」

「そこだよ、君、君にのぞむ點は。」
隱岐は太い首をふりながら歩きだした。
「君はまだ小さな潔癖をもちすぎてゐる。そんな小さな潔癖が、いつたい何を君にあたへてゐる？ 報酬として受けとるのは、貧乏だけぢやないか。あの女は、醫學博士の夫人だ。そして金があるぢやないか。そして我々の事業に金をださうとしてゐるぢやないか。したら、その女に貴夫人としておがめるやうな態度をとつたつて一向さしつかへないぢやないか。小さな潔癖を言ひだしたら、僕たちは益々小さくなるだけだ。益々痩せて、益々資本家に虐待されるだけだ。現代では、資本家になるか、プロレタリアの一員としてマルキストになるかどつちかだ。で、現在我々は愛國製藥株式會社の重役にならうとする道程にあるのぢやないか。暫くの間、お互ひに潔癖は捨てなくつちや。先づ第一に資本家になつてから、第二にも資本家になつてからさ。それからのちに潔癖になつたつて、傲慢になつたつて遲くはないよ。」
銀色に彫られた巨大な魚、それはドイツからシベリアを橫斷してとんできた飛行船である。ビルデヰングの端をかすめい空の斜面を一直線に急走してゐる。しかし、それは靜止してゐる銀色の魚でもあつた。
亮は街とビルデヰングから湧きあがる昂奮の聲をきいた。そして飛行船の下のアスフアルト街路を歩いてゐた。
街が、ビルデヰングが、飛行船の出現に昂奮してゐる。亮は飛行船よりも、新らしく出來あがる愛國製藥株式會社について昂奮してゐた。
一團の聲が
「わおつ。」と空中にむかつてほとばしる。亮は、內部からの昂奮と、この外部からとの結合點に立つて、
「わおつ。」と聲をあげてゐた。

「よし、よし。あの飛行船のやうに、俺の人生はよくなるぞ。」

亮は思ひきり、快活に空にむかつて両手をあげてゐた。

「ツエッペリン飛行船萬歳。」

が、しかし頭のなかでは「愛國製藥株式會社萬歳。」を唱へてゐた。

――資本金拾萬圓、純利益金五萬圓、隠岐は専務だ、俺は支配人。金、金、金、重役賞與金が入るのだ……愛國製藥株式會社萬歳……環状形の連鎖空想が、亮の頭を占領した。

「資本金拾萬圓……だが、この拾萬圓はやがて二拾萬圓に、五拾萬圓に、百萬圓から五百萬圓、すくなくとも十年の將來に於ては、壹千萬圓の大會社に進展させることも不可能ではない。純利益金は、資本の増大につれて、加速度を加へる。支那から、南洋、インドの方面、それにブラヂル方面。販賣區域は日本だけにとどまる必要はない。」

空想的デッサンは、燐光で描かれた文字のやうに亮の感情にしみこんで燃えた。

「……活動、活動、日夜の活動が開始される。しかも疲勞を味はない活動だ。我々はこの會社の權力的中心、したがつて會社の機密費がある。重役賞與金株主配當金がある。自動車も走らせるさ。料理屋にも、待合にも、もちろん行くのだ。」

亮は彼がつとめてゐる會社の支配人の慣用語を思ひだした。

「あゝそうか。ぢや、至急。親切に、丁寧にやるんだぜ、凡ては速度の時代だ。君。」

苦笑のなかで、亮はこの言葉を口にした。

「よし、よし、あの言葉は、すぐに俺が使用するのだ。」

ビルヂキングの窓からは、それが装飾でもあるかのやうに、多くの顔がつきでてゐる。空を見あげてゐる。

「あゝあの平凡な顔たちは、すべて俺の支配のもとに參加する顔だ。」

「村上君。」

亮は顔をあげた。

「事務室に、支配人が君に逢ひたいと云つてゐる。」

主任の顔を、しばらく亮はながめてゐた。

「事務室にですか？」

「あゝ、君を待つてゐる筈だ。」

亮は機械人形のやうに立ちあがつた。不吉だと思ふ前に、顔の表情はすでに歪められてゐた。

事務室で、支配人は窓からくる光りを背にして腰かけてゐた。

支配人は微笑して亮をむかへた。亮は無言で、その前に立つた。

「まあ、腰かけ給へ。」

亮は腰を落した。

「さて、そこで村上君……。」

支配人は金庫でも開けるやうに、重く口をひらいた。

給仕が扉をノックして入つてきた。

「あの村上さん、お電話ですが……。」

「なに電話？」

支配人は顔をしかめた。

「今重大問題の話中だ、あとにしてもらつたらいいだらう。」

「何んですか、先方では至急だと云つてゐましたが……。」

「ぢや、こゝにつなぎ給へ。こゝの電話に。」

支配人は話の途中を割られたためであらう不機嫌な顔をして、葉卷に火をつけた。亮は受話機をとつた。

隱岐の聲が、耳朶の全面に響いてきた。

「君、村上君？　ぢやすぐにきてもらひたいんだが、どうだい？」

亮は、支配人からの距離をとほくするために、椅子からそりかへつた。

「ははあ、そうですか、何か至急な御用事で？」

「至急も、至急、大至急だ。買收することになつてゐた沼田製藥所だね、あの製藥所を、例の貴夫人が下檢分したいと云ふんだ。處が僕は手がはなせない。で、君をお供させるやうに、電話でつたへて置いたんだ。」

「ははあ、そうですか。」

「たのむぜ。午後一時半、君は貴夫人の宅を訪問してくれ。自動車で一緒に沼田製藥所に行つてもらふんだ。その前に僕の處にきて、少し打ち合せをしてもらひたいことがある。」

「解りました。」

「ぢや、大丈夫だね。」

「あの、一寸……。」

支配人が煙のなかから亮を見てゐる。この場合、隱岐にむかつて何をこたへることが出來よう。頭が混亂した。舌がもつれた。

「それで、ただ、困った事情が、一寸、[illegible]ですか……。」

「困った事情？ そんなこと以上だよ。今が最後の機会にきてゐるんだ。君がいやなら、ほかの者にたのんでもいいが、それぢや、君の立場はこの会社に対して、だんだん損になるよ。僕としちや、君を引っ張りこみたいんだ。君が、否然、権利を放棄すると言ふのなら別だが。」

亮はこの言葉のなかで決心した。すべてを犠牲にして、やれる處までやってみろ。

「そうですか、どうもありがたう。では、承知いたしました。」

亮はこの言葉と同時に受話機をかけてしまった。

「どこからだね？」

「いゝえ、親類が私用で電話をかけてきて、こまった奴です。」

「ところで、先刻の話だが……これは秘密にして貰はんければ困るが、販賣部の中岡君、あの男を、君はどう思ふかね？」

「中岡君ですか？ いい人間でせうよ。こまかくは知りませんけれど。」

「あの男をだね。あの男の私行を君に調らべてもらひたいんだ。家は君の近くだと言ふから、丁度都合がいい。」

「それはどう言ふ意味ですか？」

「いや、大して改まったことぢやないが、あの男が、この会社で出世するか、やめさせられるか二つの路の中心に立ってゐるんだ。あの男の敏腕は誰れでも認めてゐる。しかしあの男が、販賣部の位置を利用して、ある商店と結託してゐると中傷する者があるのでね。少し私行の方を調べてもらひたいんだ。」

亮は苦い顔をしてゐた。腹立しくなってゐた。

「困りますね。僕にや、出来ません。そんなことは。」

「いや、むづかしく探偵してくれと言ふのぢやないんだ。」
「ですが、僕では不適任です。ほかの者にして頂きたいのですが。」
「よろしい。ぢや、君にはたのまないことにしよう。」
支配人は立ちあがつてゐた。
「だが、しかしこの話は秘密にしてくれんと君のためにもよくないぜ。」
支配人は亮をのこして出て行つた。
「糞ッ。」
亮は廊下にでて帽子をかぶつた。口笛をふいてエレヴエターにのつた。しかし、亮の血液は不安定な荒れ方をしてゐた。

亮を見ると、隠岐は愉快さうに手を握つてゐた。
「よく出てきたぢやないか。電話口の君ぢやこないだらうと思つてゐた。」
「今の電話ぢや汗をかいた。だが、しかし今痛快に支配人を突つぱねてきた處だ。」
「何を突つぱねてきたんだ。」
「大したことぢやないが、僕をスパイにしようとしやがつたんだ。」
隠岐は例によつて、太い指の詰つたカラアに指を突つこみながら説明しだした。
沼田製薬所に貴夫人を連れて行つて、適度な掛をとりさへすれば、あの女はむろん承諾する。あの女が承諾すれば、この株式會社はその刹那に成立したと言つてもさしつかへはない。あの女は氣まぐれな女だ。その氣まぐれを巧みに利用すれば、もう僕たちは奴隷生活から解放されるのだ」

亮には解つてゐた。

「よし、出來るだけ巧くやらう。」

「たのむ、この際はお互ひに少しは犧牲を拂ふのさ。その代り近い將來に於て、お互ひは天下はれて小なりと言へども、資本家の位置に列せられるんだ。」

隱岐はこの言葉の次に、彼女の良人は老齡の醫學博士であること。博士はほとんど七十に近く、この三十代の豐饒な夫人の肉體を全く御しきれない位置にあること、だから、夫人はあふれてくる精力をもちあつかひかねて、ほとんど家にゐたことがないこと。好色と事業慾が旺盛であること、印象が卑しげなのは、前身が老博士の病院にゐた看護婦であるがためだ、等。

「あの夫人は君に一つの興味を注いできてゐることを、僕は最後に知つたのだ。だから、今日の案内役は、君を最適任と考へたのさ。」

亮は隱岐一流の解釋のなかで苦笑した。

「ところでと、君には少し無愛想なところがある。あの貴夫人の前では、出來るだけその態度を訂正してくれることだね。階級的儀禮が必要なんだよ。あゝ言ふ連中には……。」

亮は博士夫人の應接室で、三十分を待たされた。ポケットにのこされた莨の五六本を吸ひつくしてゐた。

テエブルの上には、たくましく卷かれた葉卷の箱が開らかれてある。健康な兵士のやうに葉卷は整列してゐる。

亮は一本の葉卷を、鼻孔につけてみた、高い香氣が、亮をむせかへらせた。

「一本失禮、靈感の葉卷だ。」

亮はそのまゝ口にくわへて火をつけた。

夫人が入つてきた。葉卷に亮が火をつけたのを合圖とでも想つたかのやうに。

亮は葉卷を口からはなして、立ちあがつた。

「いゝえ、さあ、どうぞ、丁度ほかにお客がありましたので。」

斷片的に會話が交換された。夫人は先夜と同じく作法以上の形を、その姿態にとつてゐた。ソファーに背をゆつくりもたせ、スリッパの足が、材木のやうに投げだされてゐる。夫人は細い金口を別なケースからとりだした。

「あの自動車の御用意ができましてございます。」

夫人は眼でいかめしく小間使ひにうなづき、瞬間表情をかへて亮に對した。

「さあ、御一緒に參りませう。」

自動車のクッションは、博士夫人の體の重量によつて斜めになつた。亮は浮標のやうに高く、自動車の速力でゆれてゐた。

博士夫人は、應接室にある時以上に體を曲げ、クッションにその臀部を埋め、順序のない質問を亮に投げちらした。

例へば、

「あなたは、隱岐さんと古くからのお友達でしたの？」

とか、

「隱岐さんは活動家らしいけれど、詩がないのね。詩情は生活に必要ですわ。」

とか、

「あなたは音樂の愛好者だと、隱岐さんが言つてゐました。どんな音樂がお好きですか？」

「チアズをどうお思ひになりますの？」

「女だてらに、職業婦人なんて可笑しいでせう。けれど、愉快なのよ、私働くのが。ブルヂョアの家庭の女なんて、毎日つまらない生活をしてゐるものなのね。」

「マルキシズムをどうお思ひになつて、私面白いと思ふのよ。あゝ云ふ思想が。むかしは宗教が天國をあたへてくれましたでせう。それが今では新らしくあゝ言ふ形式になつたのね。人間はいつでも天國を憧れるものね。天國つて、理想を指したものでせうけれど。」

これらの質問や感想に對して、亮は博士夫人の香料と、おれながる體温になやまされながら、適度に應えなければならなかつた。亮は隠岐の言つた階級的僟嫌を忘れてゐた。輕い感情で、この女性の饒舌に附隨した。

自動車は上野をぬけて、淺草に近づいてゐた。

「もう、ぢき、向島の工場なのでせう？」

博士夫人は眉をしかめた。

「勞働者が多いでせう、あの邊は。私何故か勞働者を見るのが嫌ひなんですのよ。あの薄汚い皮膚や、陰慘な眼を見ると、體がざわざわするのですもの。」

「村上さん、どう？　工場に行くことをやめにしては。」

「さあ、お厭なら仕方がありませんが……。」

「ぢや、およしにならない？　折角ですけれど。」

「工場の方では、奥さんがお出になると言ふので、準備をして待つてゐるのですが……。」

「ですけれど、それは電話でお斷りすれば何んでもないことですわ。それよりも淺草をあなたに案内して頂きたいんですのよ。私淺草を、もう十年も見物したことがないんですもの。」

「御案内しても宜いのですが……。」

「ね、おや、そう致しませう。」

博士夫人は女學生のやうな聲をだし、その太い指は不意に亮の手首にまつわつてきてゐた。

「淺草にはいろいろなものがありませう。平民的でいいと思ふわ。案内して頂きたいわ。」

亮は手首をにぎられたまゝぢつとしてゐた。次に夫人の指は、一つ一つ亮の指の間にはさまつた。

「ですけれど、隠岐が今度の會社について、大變心配してゐたやうでしたから……。」

夫人は調子のつかないはげしさで笑ひだしてゐた。

「私が向島の工場を拜見しないつて、工場の代りにあなたを信用すれば大丈夫なわけでせう。だから隠岐さんにそう仰言つて下さらない？　工場は拜見しませんけれども、御安心下さいつて。」

「解りました。」

亮はこれでいいと想つた。もう、資本家になれる日がくる。

「お解りになつた？　あなた素直な方ね。」

博士夫人の腕が、腿のやうな太さで、亮の傍腹から背中にかかつてゐた。この煽情の腕を、亮は重い石のやうにうけとつて、夫人の嗜好にしたがひ、その素直さを持續させてゐた。この奇妙な姿態の連續のなかで、亮の頭は火のやうな廻轉をつゞけた。それはまた明滅して素ばやく廻る廣告塔にも似てゐた。

「サテ、この奧さんはこれからどうするつもりだらう。だが、やがてすばらしい會社ができるぞ。そして重役だ。凡ては救はれるのだ。妻も子も。」

最後の妻と子との連想が、この場合むしろ可笑しい客觀性で、亮に明るい微笑をあたへた。

「奥さん。もう向島に近づいて居りますが、いつそ工場を御覧になつたら、如何です？」

「そう。でも、もつと自動車に速力をださせませう。この方が面白いことよ。」

二週間の時日、この時日の間、隠岐と亮は、將來への野心と空想で膨脹しきつてゐた。現在既に、資本家である自分を感じてゐた。この膨脹も頂點でのある日、亮は電車のなかで、風のやうな間隙を感じた。この間隙は氷刃の冷めたさをもつてゐた。

「若し、駄目になつたら……。」

現在の亮にとつて、この假定を考へることは死を意味してゐた。今や空想ではない。現實に建築されようとしつゝあるこの事業が、中途で破壊されたら……それはもう再び踏みにじられた家畜のやうな生活が、死ぬ日までつゞくだけだ。

「この事業が成立しない筈はない。」

亮は、隠岐の計畫と、その言葉及びかの肥滿夫人の態度との、再吟味にとりかかつた。破壊さるべき材料はどこにもない。」

「よろしい。あまりに成功がはやすぎるために起る不安なのだ。

しかし亮は肥滿夫人から、隠岐あてに確實な返事のこないのが氣になつた。

かの日、自動車の夫人は、その濃情と、體氣のはげしい發散で、亮を小兒のごとくに壓倒してゐた。この壓倒のなかでは、亮も田舍者のやうに萎縮する自分を感じてゐた。

夫人はその腕を、亮の肩から背にまわし、厚い肉の面積と、その肉の接觸面積から溢れる熱度で亮はむせかへつてゐた。

この夫人の異常積極性に對して、亮はその六十パアセントにしかすぎなかつた。だから夫人にとつては非常に齒痒いことのであつたにちがひない。夫人は何回か、運轉手に速力をたかめることを命じてゐた。バツク・シラアにうつる運轉手の髭

はしがめられた。しかし夫人にとつて運轉手のしがめ顏ぐらゐなんであらう。

自動車は彈丸のやうな速力をもちはじめてゐた。家と、電車と、街衢の照明が後方に投げられた。この危險な冒險のなかで、夫人はその寶石の腕に力を入れてゐた。

亮は前方をながめてゐた。頭には、女との情事の數々がひらめいた。

「この場合には、男から積極的に、夫人の脣を盜むやうな態度にでなければいけない。」

頭は冷靜に、この種の技巧命令を亮に發してゐた、だが、亮の四肢は、人形のやうに夫人の腕のなかで靜止してゐた。

「何故、ほかの多くの女たちへのやうに、この女にむかつて大膽に進めないんだ？」

亮は自己にむかつて質問した。そして不可解のうちにいらいらしつゝ、夫人の情熱にテムポをあわせることが出來なかつた。

夫人の體内からは、脂が燃えてくる。この燃えあがる香のなかで、亮の神經と感情は鋭く冴へてゐた。難解な數學をも直ちに解決できるほどに冴えてゐた。

自動車が疲勞したとき、夫人も疲勞してゐた。

夫人の腕は、亮の背からとけてゐた。

「村上さん。あなたは素直な人ね。」

「……。」

亮は返答ができなかつた。一時間前にも、夫人は亮に素直と言ふ言葉をつかつてゐた。そしてまた同じく素直と云ふ言葉である。しかし、言葉の響きが、非常な距離をもつて變質してゐた。

「あ、それから先刻の會社のお話ね、あれは私から直接隱岐さんの方に手紙をさしあげます。」

そして、夫人は途上に石でも落すやうに亮を降して自動車を疾走さしてしまつた。

この回想！　だが、そのために愛國製藥の株式組織に故障がはさまれるとは考へなかつた。

「ただ……。」

亮は回想によつて新らしく夫人への肉情昂衝をもつた。

「何故、あの時、俺はあゝ馬鹿だつたのだ。」

丸ビルの廊下で、亮は隱岐の固い顔と並らんで立つてゐた。

「駄目つて、本當に駄目なのか？」

「うむ、駄目だ。」

二人は言葉をなくした。亮は前を通るサラリイマンの幾人かを意識なく見てゐた。

隱岐は案外に平氣な顔をしてゐる。亮は隱岐の言葉をそのまゝには信じられなかつた。

「だましちや、いかんぜ。本當だね？」

「だまして、俺が一文でも得になるのかい？」

「ぢや、どんなことで駄目になつたのだ？」

「要はあの女が、逃げたのさ。」

「あの女が？」

「あの女の手紙が面白いんだ。君に見せよう。」

隱岐はポケットから封筒をとりだし、四つ折りの書簡箋をひろげた。

「冠省、

お忙がしきこと、存じあげます。

いつぞやお話の會社についての件、突然當方にやみがたき事情出來のため、私の分についてはおとりやめ置き下さるやうお願ひ致します。

尙拜見しました趣意書に於きまして、二つほどの誤字が眼ざわりとなりました。小さなことのやうではありますが、會社創立のやうな重大的の場合には、御注意肝要と存じあげます。その一つは「輓近」と書くべき處が「晩近」となつて居りました。その二は、社會に貢獻すると云ふ文字の處で、貢獻が功勛となつて居りました。これでは一寸解りかねる文字の使ひ方と存じあげます。老婆心までに申上げます。

それから村上さんと云ふ方、あの方に、敏腕を期待するのは、御損かと……一寸、御注意までに……」

亮の頭は濁つた煙でいつぱいになつた。

「どうだ、馬鹿々々しくつて、腹も立ないだらう。」

「糞ッ。」

亮は習慣的に吐きだした。一直線にエレヴエターで降りるやうなものが、亮の體内をかけた。

「で、あの女が金をださないと云ふと、駄目なんだな。」

「駄目だ。あの女が金をだすと云ふから始まつた事業なんだから。」

「そうか……。」

亮はげつそりと壁に背をかけた。

「そんなにしよげるな、これが駄目だつて、またほかに何かあるよ。その時に機會をのがさずに、その機會を捉へればいいんだ。ワナメーカアでも、カネギイでもさ、日本ぢや大倉喜八郎だつて、みんなこんな處は二三度づゝ通つてきてゐるんだ。」

「仕方がない。また今迄どほり神妙につとめてゐるのさ。月給で飯だけは喰へるんだから。そして時たま、麻雀でもやつて氣をはらすのさ。」

「まあ、そうだ。それよか仕方がない。」

「ぢや失敬。」

「ぢや。」

亮はエレヴエターをやめて、螺旋の階段を降りだした。コンクリートの厚い壁に、二三度頭を打つけたい衝動を感じた。

その度に「畜ツ」と體をひきしめた。頭の代りに、靴を二三度コンクリートに打つゝけてゐた。



工場勞働者

岩藤雪夫

1

太陽は傾いた。

要塞岬はうづくやうな線だ。

平戸海峡の荒浪にのる三月の南風が吹いて十數艘の驅逐艦を浮べた軍港は油目鏡程の小波に耀やいてゐる。

草いきれの漂ふ防波岸壁の上に赤煉瓦建ての兵器工場が幾棟も竝んで、暗い窓からは癇高い鐵の打擊音が工場の心臟のやうに響いてゐた。モータアと起重機の唸りがそれに混つた。職工はその音と廻る機械に追ひまくられて働いた。

金モール錨の帽章の守衛達が各工場を圍む櫻並木に沿つて硝子窓を覗きながら

銀筋肩章の肩を怒らかして廻つた。

窓を窺ふ守衛の顔から休憩時間の來たことを覺つた職工等は最後の力瘤をしぼり上げて鎚の尻を押しまくつた。削られた鐵粉は、搾り取られる彼等の血のやうに萬力臺(バイス)からバラ〳〵とこぼれた。その餘韻の消えと、二時二十分のサイレンが汽罐室の屋根から綿毛みたいな蒸氣を噴き上げて佐世保中に鳴り渡つた。その餘韻の消え殘りが港にふらつく頃、工場の出入口のチエンドアが轟音を軋しませて開くとマシン油と鐵粉で顏中を染めた見習工達が鬨の聲を揃えて各工場から東側岸壁めがけて溢れた。

そして岸壁にぶち當ると始めて燦やかしい春の陽に手をかざし慣れない目をしよぼ〳〵縮め胸を膨らませて草いきれと潮の香を一杯に吸ひ込む。新芽の萌えた草むらに大の字に倒れ、しこりの凝つた體の筋肉を存分に伸ばすと春風が毛穴から沁み入るやうに感ぜられた。對岸壁の港務部では休憩時間を與へられてゐない水兵が悲儀さうに働いてゐる。

流行唄や勞働歌が流れた。

「おーい、勞働歌は工場の御法度だよ。」

「口笛なら守衛にお解らないよ、……」

港の小波を被つて港務部の煙突の長い汽艇(ランチ)が輪形の煙を吐いてかよつた。岸壁に繫留されたアメリカ仕込みの二十五艘の重油タンク船は横つ腹を打つ突け合ふ度にゴトン〳〵つぶやいた。波間には保護色をいゝことにした岩蛸の子が破れ傘のやうに泳いでゐた。

群がりに職場を走り出た濱田養雄が二三人の角がりや前長髮の見習仲間にかこまれておどけてゐる。

「一艘、何を釣らうてんだい、ガシャ蟹かい、水母かいえゝ、濱田？」

「何が釣れるか、見れあ解ると……」

彼は手製の釣針に蠟燭の折れを浮標（ウキ）にした釣竿を一振りして岸壁に馳つた。後には又流行唄が歌はれ、腕角力が闘はれた。

三尺厚みの岸壁に腰を据ゑた彼は慣れた腕附きで竿をびゆんと波に打ち降ろした。

蠟燭の浮標（ウキ）は重油船の腹の傍で虱のやうに搖れた。

「蛸釣りだよ、今時分の蛸が一番うまいんだ。」

「氣の利かない親孝行をしやがるない、畜生奴！」

友情の代りに惡口を叩きつけながら見習仲間が落田の周圍に集まつた。

——やあーい！　守衛に見つかると減給されるぞ——

と離れた所で聲がした。

「てやがらあ！　蛸を捕る可からずつて工場法は世界中にねえや………」

一人が大聲で、後の半分を小さく力んだ。

握りこぶし大の岩蛸共は細長い足で海水を斜に蹴つて悠々と泳いでゐた。

落田は釣竿の先をぐる／＼引き旋してチユツ／＼舌うちを續けた。

暫らくすると絲がぐんと張つて竿に引成りの重みがかゝつた。

「うまい、かゝつた、かゝつた。大きいぞ、引け／＼！」

見習達は喧ましく騷ぎ立てた。

落田は釣竿をため／＼針を外さないやうに蛸の逃げる方へ竿を動かした。そして機をはかつて釣り揚げた。青褐色の一寸大きい奴が、水を飛ばして躍れた。絲が風に搖れると蛸は八本足の白い吸盤で岸壁のコンクリイに吸ひ着いたり、絲に

からみついたりして揚げられ、草むらに抛り出された。

岩蛸は青草の色を透明な頭に映して八本足を四本づゝに擴け蟹の横這ひのやうにして逃がれかけては草の根にからまれて轉ろげ歩いた。

見習達は手を打ち、臍をおさえて喜び合つた。

『晩に煮て食ふんだ。』義雄は岩蛸の足の附け根を握りしめて言つた。『いや、それとも明日もう二三匹捕つてからにしやうかな……』

彼は兄と自分でやつとこさと支えてゐる貧乏な四人暮しの足し前に、又野になつて働けない爲に欲しいものを食べたいとも言はずにゐる父への土産にしようと思つたのだ。

一瞬間考へこみかけた彼の視野のはずれに守衛の黒服姿がひらめいた。

ナッパの下に蛸をかくすと彼は一さんにうす暗い工場の中にかけ込んだ。

港の中央の一果島附近の見張りを兼ねた守衛のボックスが南側岸壁にあつた。その常直守衛が見習達の喚めき聲をしらべに來たのだ。守衛といふ者は常に、職工達のどうでもいゝやうな缺點を穿じくり出しては立身の道具にしようといふ野心で鵜の目鷹の目だつた。それはまるで罪人を作るためにのみ存在する法律によく似てゐた。

『休み時間にまで廻つてやがる……』

守衛の姿が見えたので少し白けかけた見習達の間から小さい呟やきが湧いた。態とらしい欠伸をするものがゐた。調子外れの歌を唸り出すものもゐた。

一直線の肩に陽燒けでてら／＼した顔をのつけた老守衛は、幾回實張りしたか知れない部厚い靴底をいコッ／＼鳴らせて岸壁の上を渡つて來た。

「何を餓鬼のやうな馬鹿さはぎをしとる。」と見習達の寐そべつた草むらに立つて彼はほき出した。「少しは向ふ岸壁に働いてゐる水兵を見習へ！　營々として國家への御奉公振りを眞似れ、うん、何を騒いたんぢや！」

「女郎買ひの話です。」と一人がとりなした。「振られたんです、私が。」

「筆おろしも濟まん連中が何ぢや、振られました？　はんか臭い……」

彼は苦が笑ひを捨てゝ立去つた。

工場の中に逃げた義雄は仕上臺の萬力（バイス）の前に伸びをして惡たれのやうに守衛を見送つた。

始業サイレンの前に塵捨場から錆びた石油罐を拾つて來て海水を掬んで蛸を放し萬力（バイス）臺の下に隠した。タガネで眞鍮（ブラス）鑄物を削つたり、十八吋平鑢の尻押しをする合間々々に彼は伍長の目を盗んでは石油罐に泳いでゐる岩蛸にからかつてにやにやした。

終業前に組長の命令で第二岸壁に繋留中の驅逐艦××まで使ひに行つて戻ると蛸が紛失してゐた。

「蛸、蛸、岩蛸が居よらん……」と彼は組中に訊ねた。「てんごせずとくれよ、親爺の土産にするんだ……」

誰も答へないで嗤つてゐた。

――人のものを盗んで澄ましてやがる、チエッ！　折角俺が骨を折つて親爺の晩飯のお菜に捕つたものを盗みやがつて、見習だと思つて甘く見てやがる、畜生、どうせ一人前の職工がやつたに違ひないや――義雄はぶりぶりして仕事にかゝつた。――覺えてやがれ、もうぢき仕事試驗に及第して一人前の職工になつたら仕事の上でうんと仇討ちをしてやらあ――

彼の押す鑢の目がザラつくやうに彼の心も少し荒れかけた。仕事を終る少し前に仲間の熊野が來て

「おい、君の蛸を盗んだのは伍長の中河だよ、いゝ晩酌の肴だつて辨當箱の中に入れてたよ……」

と教へて呉れた。

彼は一時かつと怒つた。然し直ぐその後から「仕方がない、相手は伍長だ、それに自分の組の伍長なら仕方がない、酒飲みの中河さんだ……」と考へなほした。續いて或る一つの考へに彼は打ち當つた。そして憂鬱になりかゝつた。

もう近く四月になれば見習工から一人前の職工になる仕事試驗が行はれる。見習工の製作品は組の伍長、組長、技手等の審査には依るが給料決定は多く組の伍長と組長との意見に依るのだ。だから若し彼が伍長中河の好物である岩蛸を毎日釣つてやれば一人前の職工として日給決定の際の幾分かの利益にならないとも限らない。普通の者より五錢多くつても月に一圓五十錢、十錢なら三圓だ。親爺にうまいものを食はせるのはそれからでもいゝ。毎日釣つては石油罐の中に入れて置いて見よう。だが、自分だけが、一緒に苦しんで來た他の見習仲間の目をかすめてさういふ事をして少しでも餘分の給料を貰はふとすることが、何か仲間を裏切る惡い事のやうにも感ぜられた。

歸りに工場から街へ出る工廠列車の中でも考へて見たが矢張り決心がきまらなかつた。兄に相談するには後めたいものがあつた。

次の日から砲熕工場の見習工仲間に岩蛸釣りがはやりはじめた。

晝休みにも午後の休憩時間にも東側岸壁は十人近くの見習が蝋燭浮標(ウキ)を睨んではしやいでゐた。河豚を釣つてふざけてゐるのもゐた。

仲間の肩の中に釣り糸を垂れて義雄だけはふさいでゐた。今日は昨日と違つた得態の知れない感情が彼に孕んでゐた。そして仲間の喚めき聲の方を白目で見い〳〵した。

彼は二時の休みまでに三匹釣つて又萬力臺(バイス)下の石油罐に入れて置いた。

伍長はそれを知ると袋みたいにたるんだ下目ぶたを引つつらせて話しかけた。

『なう濱田、その岩蛸は三匹みな俺にやれ！酒の肴にすんぢや、年寄りにやれ！　俺も伍長ぢやけんなう……』

義雄はその次に出る言葉を明つきり聞きたかつた。

『でも是あ、家の親爺に持つて行くんぢや……』

『まあえゝに、やれ〳〵！』

中河伍長は長年の勞働で山椒魚のやうに無格恰になつた兩手を石油鑵に差し込んで三匹の岩蛸を捕えた。彼は慍と嫌な顏色を見せながら只輕く伍長の右腕を抑える眞似をした。

『えゝなう、やつとけ。』

さう言つて中河は蛸を自分の辨當箱に押し詰めた。

『なう、毎日釣つて俺にやれよ！　伍長には御奉公しとけやう。』

『えゝ……』

彼は他の職工等に聞かれるのを恐れて小聲に返答した。

彼は1/3吋の鐵板を萬力に狹み鏨を當てて斫り出した。右手の片手ハンマアが鏨の頭を打つ毎にガツシヤン〳〵餠仕のない響きが起つて工場工に擴つた。彼はその音を自分自身のやうに癪にさはりつゝハンマアを振り續けた。

仕事試驗は間がない。もう成業だ。一人前の職工になれるのだ。「こらツ、濱田、萬力の磨きが惡いぞ、」と朝から叱鳴られることも、廻轉中のシヤフトに油を差して歩く危險仕事もしなくても濟む、冬の朝の焚火にもゆつくり暖まつてゐられる。組長、伍長、職工等を相手に鍛冶場の向ふ槌であふりつけられる心配もない。

それにしても今年の成業日給はどの程度かしら、去年は最高一圓四十錢、最低九十五錢だつた。

今年の仕事試驗は大型コンパスの仕上らしい。去年は打拔型だつた。……

夕刻、成業技術試驗は明後日と發表された。

2

角鑢、八、十二、十四吋、三本、
三角鑢、四、八、十、十二吋、四本、
平鑢、六、八、十吋、三本、
圓鑢、四、八吋、三本、
菱形鑢、　四本、
半圓鑢、六、八、十、十二吋、四本、

朝、一人宛、二十本づつの鑢をストツキ番爺さんが十五人の見習に配つた。

成業技術試驗　午前九時四十分より 於砲熕組立部仕上室

と貼り出された。

今年濱田達と成業試驗を受ける砲熕工場の仕上見習工は十五人ゐた。三年前に這入つた人數は二十三人だつたが何時の間にか減つて終つたのだ。見習を三年間勤め上げて試驗の上、平の職工になつても一生涯それで終るのが普通だ。東京の夜學の工業學校でも卒業した者以外は餘程の頭の優ぐれたものでなければ組長や工手にはなれない。工場町育ちの少しでも

榮譽心に富んだ少年は皆東京や大阪へ行つて終つて、殘つてゐる者は、漁師、貧乏職工、近在の田舍から洋服を着て仕事が能(で)きるといふ誇だけで村を飛び出して來た小作人の子達であつた。

仕上職工としての生涯の給料の基礎が決定する日なので皆緊張してゐた。

前日は、朝から各職場の知り合ひを走り廻つて、切れのいゝ鑢、定規(スクエア)、小型定盤(プレート)を調達した。

『綺麗な仕事をしろよ！　落附いて……』

『肩を、鑢の肩を狂はすな、前の晩にあ、よく眠れよ！』

と職工達は、後から來る若い者の爲に注意した。

義雄はその日は朝から幾度も小便に行つた。幾度してもちびるやうな氣がした。九時二十分に工手が笛を吹いた。十五人の見習工は配られた二十本の鑢や、定規(スクエア)や定盤(プレート)を持つて、仕上室へぞろ／＼と勢揃ひした。十五臺の萬力(バイス)の前に一人々々の姓名が誌してあつた。皆その前に立つた。

若い原技手が、仕事臺に飛び上つた。續いて伍長が笛を吹いた。

『エエと、今日のこの技術試驗によつて……』と原技手は話した。『諸君の給料が、最高一圓四十錢から最低九十五錢に決定するのである。諸君としても出來るだけ餘分の給料が欲しいであらうが、給料ばかり目當てにしてはいけない。如何にして精銳な帝國軍艦の武器を作らうかも念頭に置いて行ふ可きである。よろしいか、三年間に磨いた腕でしつかりやり給へ！』

技手は仕事臺から飛び降りて伍長に監督上の注意をしてから事務所へ歸つた。

『十分間休憩、四十分から開始……製作品、コンパス、』

と小學校長のやうに組長は後へ腕をくんで組立仕上室を出て行つた。

「オンコツ頭……チツ！」

「二枚祭のカサツカキ奴！」

彼の姿が遠ざかると反抗の方法を知らない見習達の毒舌が吐き散らされた。

或者は萬力のゆるみを緊め、兩腕の齒の喰ひ違ひ等をなほし油を差した。義雄は鏨をなめて見てはブラッシをかけて砥れ味を試めした。

仕事臺の掃除や道具の整列が濟むと或るものは内緒に脣を尖らして口だけで莨の煙を吹いてゐた。又窓硝子の暗い所で分けた頭髮を撫でて映してゐるのもゐた。

窓外は海を壓した重苦しい暖かさだつた。試驗前のしやつちよこ張つた體にジク〳〵脂汗が湧いてメリヤスのシャツが濕れた。東側岸壁では成年に達しない見習工達が義雄のはやらした蛸釣りに喧ましく聲をからしてゐる。

「やつてやがる、」と一人が濱田を顧みた。

彼は答へなかつた。

「濱田の義公、君お蛸のお陰でうんと昇給するぞ、……」

「唯の蛸で賭けやがつた、うまくやつてよる……」と又一人が彌次つた。

彼は足もとを睨む眼頭が熱くなるのを覺えた。

九時四十分のサイレンが、十五人をぼい立てるやうに鳴つた。

ストツキ番爺さんが$\frac{2}{3}$吋角長さ一呎二吋の鐵材を一同に配つた。

技術試驗は開始された。

一呎二吋の角棒を眞半分に鏨で立斫ると十五人が我先にと構板工場の鍛冶場へ押しかけた。

赤熱(アカ)めては片手ハムマアで火造りした。左手の火箸で材料を抑へて、ハンマアで叩く度に赤い焼皮が花火のやうにピラピラと暗い鍛冶場の中に散つた。三十箇餘りある溶爐(ホノ)から上昇る三角の火焰は、彼等を追ひ立て、まくし立てる大きい悪魔の牙のやうだ。鼻先から散る汗が赤熱(アカ)めた材料の上に落ちて涙のやうに玉とはねて消えた。火造りが終ると黒皮の生えた奴を萬力(バイス)にかけて鑪を當てる。油目鑪を通して二本の脚を組み合はせ、穿孔機(ボーリング)で頭に軸穴を穿けて鋲附(カシ)める。

仕上の寸法、飾り着け部分を明記した青寫眞のデザインを伍長は配つて歩いた。

『皺のコンパスを造るなよ！』

伍長は冷やかし半分で嘲つた。

誰も彼も、熱病にとつ憑かれたやうに目が据つて、元氣がなかつた。汗だけが拭いても〳〵額から頬へ、鼻の兩端へ流れた。

手の甲でこすると荒い鑪り粉が顔に縞を引いた。

鑪の音だけが一同の耳にうつつの夢のやうに聞えた。

各組の伍長が時々、仕事の進み具合を見に來て、

『後れてるぞ、急け、急け！』等とからかひ半分に囁いた。

『普段、油ばかり賣つてた奴あ、きつと成績が悪い。お前なんかさうだらう、九十五錢の方だぞ。』

皆それ所ではなかつた。一生の問題だつた。

油目を通すと定盤(プレート)へ磨り合せに行く。定盤(プレート)は數が足りないので使ふのに競爭だつた。

『やい、このプレートは俺が借り出して來たんだ、俺が先だ……』

「吐かしやがる。文句を言ふな、早いもん勝だい……」

先のものは定盤(プレート)の上の測微尺(マイクロメーター)を轉がして水平や角度を檢べて中々立たない。

『ぐず／＼するない、後がつかへてらあ……』と後の者が呶鳴る。『手前一人の試驗ぢあねえんだぞ……』

『うるせえ、默つて待つとれ！』

生涯の生活を決定する給料問題に關係してゐるので、日頃仲のいゝ連中も交尾期の雄犬のやうにいがみ合つて叫んだ。

そして正午までには幾らも渉らなかつた。

晝休みに東側岸壁に出て見ると相變らず蛸釣りが繁昌してゐた。

義雄は青草の中にぶつ倒れて深い呼吸をした。體中の筋肉が硬ばつて痛んだ。

成年見習工等は、試驗仕事中のいがみ合ひを忘れて成績の安否を話し合つた。

『試驗だけで給料が定まるもんぢあないらしいよ。』と頭髪を分けたのが言つた。『普段の成績にもよるし、俺みたいに頭へポマードを塗つてるのは駄目ださうだ、糞眞面目のが一番さ……』

『さうさ實際、散髪の仕方が給料に關係するなんて馬鹿らしいよ。』と角刈りのが雲脂をかり／＼と掻いた。『肩の振り具合から、歩き方、挨拶の仕方まで難癖つけられるんだからなあ。』

日頃からの感情だけで給料の高低を定められるのを誰もが憤慨した。

正午から、定時間五時までかゝつても一人も仕上らなかつた。終業五分前に義雄は隣から隣へと仲間の仕事振りを見て歩いた。

荒仕上げ以上に進んでゐるものは殆どゐなかつた。彼は自分の仕事の拙づさよりも他人ののろまさにほつと安心した。

皆、荒仕上げコンパスにマシン油を塗り襤褸(ウエス)でくるんで仕事室に置いた。監督の伍長がそれを全部集めて自分の萬力臺(バイス)の抽出に入れ、嚴重に鍵をかけて明日まで保管することになつた。十五人はそれを見屆けてから蒼い顏で仕上室を出た。

家で夕食の時、兄の吉次が訊ねた。

『未だお前達あ成業の話はないかな?』

『今日からやつてるんだよ。』

『ほう、何んだい。仕事は?』

『コンパス仕上さ。』

『うちの工場はベンチ仕上をやつてる。コンパスの方がやさしいなう……』と兄は母に鼻を向けた。『義雄に卵をやれや、後れてやりそこなやあ、とり返しがつかんからなあ、身體がしんどいやろ、夢中になりよるけん。』

母は立上つて神棚から生卵を二個下ろした。

それを一つづつ割つて母は兄と弟に飲ませやうとした。兄は「義雄は成業試驗だから」と二個とも弟にやつた。

父は蠹みたいにかゞみこんで

『ようやれ、ようやれ……』

と言ひ續けてゐた。

『お前が成業すれあ、ずつと給料も上るから家も大分樂になるなう……』

と弟が生卵を飲むのを見ながら兄は聞いた。

『幾らくらゐ昇給するかなう、一圓五十錢かな。』

『三十錢になれあ申し分なしさ。』

と弟は答へた。が彼は腕の自信は餘りなかつた。

「義雄はおとなし過ぎるけんなう……」

と母は不安らしく答へた。

「いや、」と兄は首を振つた。「あんまり生意氣な奴より却つて組長等の受けはえゝもんだ……」

三十に二年前の兄は未だ獨身で弟の八十錢の日給の補けをかりて働いてゐた。

「お前の給料さへ上れば吉次も嫁をとれるけんな……」

と父は兄の顔を眺めた。

「ちちもないこといふまい、」と吉次は頬を赤めた。「儂らそんなこと考へてやせん。」

「そやけん早う、義雄の給料上つて、母どむも樂にしてくれあ。」

と母は口添えした。

義雄は、就寢してからも、仕事試驗が氣になつて眠られなかつた。肩胛骨が痛んだ。鋲（カシメ）附方の足りなかつたコンパスが目の前に浮んだ。仲間の中心（センタア）のよく出た格恰のよいのが羨ましかつた。それだけでも二十錢は違ふ。

試驗合格——昇給——兄の嫁取り——彼はそれを考へながら寢た。

3

中河は工場の出口で釘附けにされた。

「失敗つた……」

門の側で、守衛の身體檢査が初まつてゐた。めつたにない事だつた。

一人々々が體操するやうに守衛の前で手を動かしてゐるのが見える。職工の列は辨當箱をガチャつかせて順番を待つてゐた。中河の後にも馳けつける職工がどしどし列を作つた。列は少しづつ進んだ。彼は辨當箱に蛸をつめて持つてゐた。列を外れてもう一度職場に戻らうかとも思つた、然しそれは餘計に怪しまれる事になる。

『えゝまゝよ。どん詰れば何うにかなる。』

彼の要領だけで生きて來た生活經驗がさうさせた。

『何、見つかつた所で蛸だ、官品ぢやなし。しかも自分は貰つたんだから言譯はたんとある。』

彼は自分にから元氣を加えては幾度も作業服に包み込んだ辨當箱を左右に持ち換へた。蛸は三四人つてゐる、今日で四度目の持歸りだ。自分の順番が來るまでに數回、列を拔け出さうか冒險してぶつかつて見やうかといふ考へが彼の足元をぐらつかせた。

守衛は目の前に立つて兩腕を水平に伸ばした職工に先づ熟練した一瞥を胸から腹の邊にかけて注ぐ。次に左官屋のやうな具合に撫で下げる。中河は右に作業服を握つたまゝ腕を伸ばしてゐた。

『なんだ、その中は？』

『作業服だけです。』

『だけとは何んだ。』

守衛は「だけ」と云ふ言葉に目を輝かした。

『ええ、後は辨當箱だけです。』

『うむ、だけですか。』

巡査上りの守衛は、金モール縁の帽子を一寸上に持ち上げて中河を睨み直した。

「え、、別に何にも入つてません！」

守衛は中河の作業服をぐいともろ掴みにむしり取つた。辨當箱はくされ金具の音を立てゝコンクリートの上に落ちた。

守衛の目と腕が同時に辨當箱に走つた。

「何だ。何が這入つとるか……」

舌先を奥歯で噛んで中河は默つた。ドキン〱強くなつた動悸が舌の先で打つた。

「だけではないな、何が這入つとる？」

中河の顏が夕明りの中で蒼くなつたのは誰も知らなかつた。

「守衛長！　守衛長！」と老守衛は背伸びをして事務所に叫んだ。「此處です、少し取調べものがあるんですが……」

中河の後に居る職工達が不平を言つてゐた。

――チエッ、のんべ中河奴！　餘計な事をしやがつて歸りが後れらあ――

――ざまを見ろ、見習いぢめの天罰だ――

老守衛長が職工の列の後から現れた。

「取調べもの、これ、この中です……」

守衛長は眉一つ動かさないで辨當箱を受取ると

「おい、こつちへ來い。」

と中河に言つた。

中河は守衛長の後に從つて門の見張り所へ歩いて行つた。

門の外で工廠列車の車掌のどなる聲がした。

『何してやがるんだ、皆、早くしろ、列車を出しちまふぞ！』

『いやすぐだ、すぐ、』と守衛は身體檢査を續けながら言つた。『おい早く步け、手を上げて……なあに、官品持出しさ、』

澤山の跫音がして間もなく、汽關車の汽笛が鳴つた。工廠列車は動き出した。中河はもう街の入口まで二十町も步いて歸らなければならなかつた。

『一體、何の持出しだ。』と守衛長は暫らく中河の顏を見つめてから口を切つた。『うん、まさか設計圖の寫しではあるまいな、うん何だ內職に勝手道具でも作つたか、よくある事だ……』

守衛長は、辨當箱の蓋をもろ摑みに開けた。

『ほうゝ是あ、素敵なもんだ。』

そして岩蛸の乾柿のやうに伸びた頭をつまんで電燈の下にかゝげた。

職工を追ひ出した他の守衛等が暢氣さうに現れた。

『何處で手に入れた。』

守衛長は辨當箱と蛸を一人の守衛に渡して手帳を開いた。

『休み時間に東側岸壁で釣つたんでせう。』と一人の守衛が云つた。

『さうか？』

『えゝ』と中河は答へた。

『休憩時間にさういふ事をしていゝのか、公務規則に規定されて絕對に能きない事になつてゐるぞ！』

『知りませんでした。』

「知る知らないは別だ、ほんとは休み時間に工場から出てあの草つ原で遊ぶ事さへも許されてゐないがそれでは、職工が可愛さうだから大目に見てゐるんだ。それに海の蛸を釣つて家に持ち歸るとはなんたら不料見ぢや‥‥」

中河は終りまで默つて、自分の酒のみとしての意地きたなさを考へてゐた。

「君は伍長ぢやないか、何年職工をしとるか。」と守衛長は一應手帳に何か書き誌してから云つた。

「十八年です。」

「日給は？」

「二圓十錢です。」

「うん、そんな料見だから十八年經つても漸く二圓十錢で組長にもなれないんだ！‥‥」

「工場、姓名、徽章番號を云へ。」

「造兵部砲熕工場の仕上工、十二番、中河七藏です。」

守衛長はそれを書き込んだ。

「中河！　辨當箱と蛸は當分あづかつて置く、明日又よび出すからそのつもりで居ろ！　よし歸れ！」

中河は幾度も頭を下げて作業服をぐる〱卷きに抱えた。

門に立つてゐた一人の守衛が、

「おい、素敵なものを持ち出すんだなあ、御愛嬌だね。」と嘲つた。「去年の新造砲設計圖とは譯が違ふからなあ、大した事あないや、減給で濟むさ‥‥‥」

「どうぞ、宜敷お願ひします‥‥」

軍港を抱いた岬の空に夕陽の殘りが赤銅色に映つてゐた。

最初蛸を持ち歸つた晩は妻も喜んで「夫に甲斐性がある」といつてほめた。子供も毎晩父が持歸る蛸の數を數へて喜んでゐた。今夜の土産は「減給」だつた。現在の一ヶ月の稼ぎ高は、三度の日曜と共濟會費や强制貯金を差引かれると五十五圓位にしかならなかつた。その中で十五圓の家賃を拂ふと四十圓、妻子四人で一人が十圓の生活費だ、自分の酒代も要る。官品持ち出しの減給罰法は十圓以上である事を彼は知つてゐた。十圓減給されゝば妻子四人が三十圓で生活しなければならない。

中河は、工廠列車の單線線路に添つて、蛸の所有者が誰であるかを考へながら疲れた身體を運んだ。

見習工成年技術試驗は三日目の午前中にほとんど終つた。仕上つたコンパスは監督の伍長の手に提出された。濱田義雄は二日目の午後、三番目に提出した。

成績の可否は絕對に發表されない。只十日程經つてから決定した日給だけが發表されるのである。何故なら職工の多くは技術の優れた人間を尊敬したがる。工場の監督者側では、技術の優劣よりもよく上官の命令に從ふ者を優れた職工の見本にしたい。だから技術の發表をせずに日給額だけを發表して、職工の目をくらましそれに依つて優秀職工（奴隷）を養成せねばならなかつた。

成業技術試驗の終へた翌日からはもうどの見習工も、一人前の職工になつたやうに肩を振つて步いた。

並職工達も、餘りがみくへこき使はなかつた。時々、首が集ると、昇給の話ばかりしてゐた。

一人が義雄に「中河の蛸持出し」の話しをした。義雄は試驗で夢中になつてゐて、知らなかつたのだ。

彼は自分の運命にいゝやうにと企んだ事がとんでもない結果になつたのに驚きの目を見張つた。

「だからなう、」と仲間は云つた。「もう蛸釣りは止めろ！　お前も氣をつけろ！」

「俺が否だといふのを無理に持つてつたからそんな罰が當るんだ。俺には關係のない事さ。」

皆で鍛冶場の送風器（ブロワア）の蔭で話してゐた時、

――濱田、濱田――

と一人の職工が呼びに來た。

「なんだい、お前ら未だ見習の癖に油をうりあがつて、濱田、組長が呼んでるぞ‥‥蛸釣、蛸釣、蛸釣天罰だぞ！」

濱田は走つて組長の監督室へ行つた。

組長は小さい紙片を取り出して、縫工場の宮尾工手の所へ行つて品物を受け取つて來いと命じた。そして

「これあ、原技手の使ひだから、急いで行つて來いよ。」

と附け加へて笑つた。

義雄は途中でその紙片を開いて讀んでみた。

先日お約束した例の絹布八尺のもの二本、使ひの見習ひにお渡し下さい。急いで繪にして、春の工場長招待に間に合せやうと思ひます。貴君の御依賴の品は目下、職工を督促して造らせてゐますが何分、内密にやつてゐますから多少手間取ります。二三日中には出來上ります。

原　技手

宮尾　工手殿

それに原の印があつた。

此處にも官品を個人が内密に持出してゐる有樣が見えた。然し、高等工業學校を卒業して將來技師になる人々に對して

は守衛や、組長も、その知らぬ體であつた。それが又守衛や組長階級としては上手な且つ必要な世渡り術であるに相違なかつた。彼は中河伍長を初め、自分達はどちらを向いても最後まで損に出來てゐるのを痛感した。

宮尾工手は黄色いザラ紙に包んだ絹布を落田に渡した。原技手にそれを屆けると、原技手は、

『うむ、御苦勞』

と云つた切り、机に藏ひ込んだ。

4

中河伍長は辨當箱の蛸を發見されて以來、何回となく守衛本部へ呼び出された。

工場にゐると、小使が呼びに來た。沖の艦へ出張に行つてゐる時は落田がゆかされた。

中河と落田は、蛸に就いて、お互に何も語らなかつた。

守衛本部では守衛長から四回、工場の係長から二度、訊問と叱責を受けた。それでも解雇すると云はれなかつただけに中河はひどく安心して終つた。

町工場に働いてゐる息子の仕事の手順をよくしてやらうと型途鐵一本を持出して守衛に擧げられ、官品窃盗廠外持出しの犯罪者として解雇された老職工もあつた。電氣代を儉約しようとして毎日蠟燭を持ち出してゐた獨身職工も解雇された。子澤山の一人の熟練工は新鋭要塞移動砲の設計圖を某外國人にだまされて持出し軍法會議で處刑された。

蛸が官品でないだけに中河は強味があつた。これはことによると何らの罰を受けずに說諭だけで濟むかも知れないと思つた。

蛸が發見されて五日目の午後、事務所の記錄工が左手に廠報を握つて、事務所の前の掲示場の黒板に、チョークで何度

も消したり書いたりして、やつと告示をした。

告示

公務規則、第××條、第×項ニヨリ左記ノ者、官品窃取廠外へ持チ出シタルモノト認メ處罰ス。

伍長、(日給、二圓十錢)

砲煩部　中河七藏

右伍長ノ階級ヲ取リ上ゲ、並職工トナシ、日給三十錢ヲ減給ス、

佐世保海軍工廠長

海軍少將　飯村延太

中河伍長は、艦の修理に行つてゐなかつた。

職工が掲示場の前に集つて喚いてゐた。

「鮪が官品かなあ、おい、海にゐる鮪が？」

「さうさ、日本の海に居るものは、陸にあるものだつて、皆、お上のものさ……………」

「酒の肴がたゝりあがつた。みんなおい酒の肴位ケチ〳〵せずに魚屋で買へよ。」

「何が俺達のものなんだ一體………」

「俺達のものなんかありおしねえよ。」

濱田義雄は自分等の所有物が一つもないどころか、職工そのものが官品同樣?になりかけてゐるのではないかと考へた。彼の蛸釣による昇給策戰も中河が伍長でなくなれば望みなしであつた。

と、小使が事務所から走り出て掲示場で呶鳴つた。

『みんな仕事にかゝれ、掛長が來るぞ!』

『うるせえやい、萬年小使奴! 手前なんざあ、掛長の官品持出しの助手だらう……』

職工達は掛長といふ聲にどか〳〵工場へ逃げ込んだ。

夕方、艦から歸ると中河は掛長に呼び出された。そして蒼い顏をして戻つて濱田に云つた。

『おい濱田、掛長がすぐ來いつて言つてるぜ、なあに何んでもないさ!』

『何でもない? 何んだい問題は。』

『なあに、』と中河は濱田の顏を見ないやうにして答へた。『お前だよ、何んでもないよ。』

義雄は、ガタピシャ仕事道具を吊して、襤褸(ウエス)で油だらけの手の掌をぬぐひながらでかけた。

事務所の入口で輕く頭を下げると若い女事務員達がくす〳〵嗤つた。

彼は勝手を知つた奧の掛長室へ這入つた。

『あゝ、どうぞ。』と掛長は硝子を敷いた大卓子の向側で言つた。『見習の濱田義雄つて君ですか。』

『はいつ。』

彼は、海軍工廠の規則通り軍隊と同じ態度を取つて直立不動の姿勢に立止つた。

『砲熕部伍長の減給犯罪の原因は君になつてゐるが、一體君は蛸釣りをどんな考へで始めたのかね。』

『ハッ――休みの時間が退屈でしたから始めました。最初は面白半分に、然し捕つた蛸は家の親爺に喰べさせようと思ひま

した。』

『うむ。』と掛長は少し感じ入つたやうに續けた。『休時間が退屈だ、朝十分、正午三十分、午後十分、の休みだぞ、たつたそれだけの休時間が退屈なのか、それでは君は時間中に仕事に勢を出してゐないな、ぶら〳〵してゐるんだらう……』

髯跡の蒼い掛長は兩肘を卓子について靴を鳴らしてゐた。

義雄はうなだれた。職工といふものは、上の者に對しては色々の反抗心は持つてゐるが、何故かその前へ出ると、口が利けなくなるものだ。

『中河が持ちださうとした鮹は君が釣つたさうではないか、君がそれをやりさへしなければ中河もあんな考へを起すまいに、中河はさう言つてゐたぞ。』

『いゝえ。』と彼は瀨をすゝつて首を振つた。『私の釣つたのを中河さんが酒の肴にするんだから是非呉れろつてとつちまつたんです、私はやるとは云ひませんでした。』

彼は心の中で中河伍長を怒つた。然し怒れないものが記憶の隅に固まつてゐた。

『うん、兎に角、この犯罪の動機は君の鮹を釣つた事だ。守衛長の調書が廻つて來てゐる。休時間が退屈だとは怪しからん、見習の癖に、退屈だつたら休にも仕事をしろ。』

勞働者の退屈と、掛長逵の退屈とは解釋の仕方が違つてゐるらしかつた。工場内の煤煙と塵芥と、鐵粉のとんでゐる暗い中で機械と同じになつて動くものにとつては少時間の草むらに於ける遊びが何れ程大切なものであるかゞ掛長には解らなかつたらしい。然し義雄には、何故職工が「退屈」するかといふ正しい意味を云ひ現すことができなかつた。

掛長は二三度リノリユームに靴を高く鳴らした。

『休憩時間といへども、職工は工場外に出る可からずと公務規則に規定してある。工場外で休むと作業始めに手間取つて

いかん、能率があがらん、まして蛸釣りなどをすれば尙更だ。だから中河の官品窃取と認められたのも、蛸が官品ぢやなくて、公務時間を遊んだといふ事になつたのだ。解つたか。』

掛長は遂に、萬人が自然に與へられ、もつとも自由である可き筈の時間までを官品としてこじつけて了つた。

『歸り給へ、退屈したら働けばいゝ。人間は働きさへすれば救はれる、と外國の或る學者も云つとる……………』

義雄は掛長の前を去つて家のない人のやうに職場へ戻つた。工場内の人間つき合は、押しと愛嬌と體裁が普通人の世渡法よりも必要な方法だつた。若しこれが原因で、給料が餘り上らなければ、並職工や一人前になつた昔の仲間には馬鹿にされるし、後から來た見習連中からは輕蔑される、苦しい立場が出來上つて終ふのだ。そして終りに工場に居られなくなつて家にも居づらくなり、放浪すればヤクザ者になる。

彼は自分の將來の運命を想つて暗い考へに陷りかけた。

工場に歸ると中河は、ハンマアで萬力(バイス)を叩きながら喚いてゐた。

『官品、官品、蛸が官品！人間も官品と、蛸の煮つけで十八年がおしやか樣！』

彼が言葉をかけるすきを與へないやうにと喋り散らしてゐる中河の苦しい態度が義雄にはよく解つた。彼は目を据ゑたまゝ自分の萬力(バイス)臺の前に立つて、鑄物鑢のひらをなめた。澁い鑢の味が熱い涙をさそつた。

5

翌日から草むらで遊ぶことを禁じられた。

岸壁には守衛がいかめしく見張つてゐた。

見習達は休憩時間になつても岸壁へも草むらへも出られないで、出入口にかたまつて陽向ぼつこをしてゐた。機械やモ

ータアの廻轉が止まつた後の塵の渦卷いた中から、草いきれの漂ふ草むらや、小魚の鱗のやうに光る港の海面を眺めては騒いだ。移動起重機(ポータブル・クレエン)の備へつけてある高い天井に若い聲がきん／＼と跳ね上つた。

岸壁の下では春の波がしつきりなく小聲で囁いた。

港の中央の一里島も溶けさうな緑に包まれ、小まかい葉並は風の來る度に光を反射させてそよぐのが見えた。

突然、岬の方で太い軍艦のサイレンが響いた。

『入港、今度は第二艦隊かな……』

『あつ、見える、來た／＼。あれは金剛だぜ、』と一人が沖を指した。『いや霧島かな。』

一里島の蔭から縱隊陣の一艦隊が速力を落とし白泡をトツプにはじきながら進んで來た。作業服の水兵が二十日鼠のやうに甲板を走るのが見える。

向ふ岸壁の港務部のヴェランダで一水兵が信號を初めた。先頭の指揮艦のメンマストには信號旗が掲げられ、砲塔でも應答信號が行はれ初めた。

艦隊の入港は毎日の型にはまつた分業で退屈してゐる職工たちの一つの慰安であつた。然し艦の仕事は成年職工の誰もが嫌やがつた。危險作業が多かつたからだ。

見習工達は腕を掲げて――萬歳――を唱へた。岸壁の守衛は自分が讃められでもしたかのやうにほく／＼とした。

『明日から艦ゆきだ、又辛い目に合はにやならん……』

『今度はいゝよ、南支那を廻つて來たつて話だから土産があるぜ……』

成年職工達の話だつた。

『密輸入の支那莨か……又官品持出しだ。』

「いや、ドロップさ、海軍の土産はドロップか鑵詰にきまつてる……」
戰艦は沖にかゝり、驅逐艦と潜水艇は防波岸壁のすぐ近くに止まり浮標繋留の用意を初めた。
海の表面にはどす黒い重油が流れ出した。
港の空は縦横に棚引く煤煙のためにうす暗く曇つた。
各艦から釣り降ろされた汽艇(ランチ)のエンヂンの響が陸の色々の音とこんぐらかつた。
指揮官の鯖さびた怒號、水兵の甲板を蹴る靴音、錨を滑らすチエン、港はたちまち鐵の唸りと人間の叫びに滿たされた。
夕刻、停時少し前に七人の組長が事務所からの命令書を高く揚げて工場を走り廻つた。
「名前を呼ばれたものは明日から艦行きだ。みんな間に合ふやうに道具を揃へて置け、一番船だ……」
成年工たちは艦行きを嫌つてゐたが、義雄は一度は行つて見度かつた。軍艦の話を聞き寫眞を見たりしたことはあるが實際に乘り込んだことはない。
戰闘具の操縦も主砲の構造裝塡裝置等も、今後の職業上覺えておき度いと思つてゐた。危険作業があると言つたつて、工場にゐれば安全な所は一つも有りはしないのだ。
組長に賴んで見ようかしら──注意さへすれば大丈夫だ。
思案最中に、
「オイ！」と中河がうしろから肩を叩いた。「濱田、お前も明日から艦行きだ。一人前の職工になつたんだ。よろこべよ。」
あの日から初めての會話だつた。
「さ、道具はこれだけ揃へろ、道具札は四枚ありやいゝ、二枚は俺が出す、あとは村井とお前が出せ、いゝ道具を揃へていゝ仕事をして見せてやるんだ。明日の一番船だぞ、」中河は獨りで喋りちらした。「一番船、お前もいゝ仕事をして、給

料が上るやうせえ、俺あ、あれから氣が立つて困る……」

あれから、とは三十錢減給の日からのことだ。

義雄は萬力臺(バイス)の箱を抽き出して道具を揃へにかゝつた。

鑢、ハンマア、鏨(タガネ)、罫引針(クロスカン)、定規(スクエア)、ニユウマチツクドリル、錐二本、空氣ホース一本、それだけを新らしい事務所から下げられたばかりの革袋に入れた。

革袋を持つと誇りたいやうな、笑ひが彼の頬にのぼつた。

成業技術試驗前まではどれ位この革袋に憧れたか知れない。一人前の職工として道具袋を下げて工場通ひをしたい希望はながいものだつた。

革袋を吊すとすぐその足でストツクへ走つた。傳票を切つて道具を貰ふにも競爭だ。

明日は全工廠の七ツの工場から、入港した各戰鬪艦、巡洋艦、驅逐艦、潜水艇へ主砲、副砲の修理、揚彈機、高角砲照準器の修理に職工が押しかけるのだ。精密仕上だから道具の善惡が仕事の善惡の大半を決定する。仕事の善惡は上半期の昇給に影響する。

ストツク番の窓口は四五人の職工の頭と催促聲とで詰つてゐた。手傳ひに來た見習ひ達は汗みどろになつて職工の受取つた油塗りの新らしい道具を擔いで走つた。

道具を揃へて終ふのに三十分以上かゝつた。道具箱に鍵をかけて終ふ頃は終業サイレンの十分も後だつた。

家に歸ると兄の吉次が待ちきれなくなつたやうに昇給のことを訊ねた。彼がまだ發表がないと答へると、「官業」はこずるくていかん、と怒つた。

次の日から中河と村井と濱田は戰鬪艦「霧島」の左舷四番副砲十二サンチ砲の揚彈機の修理にかゝつた。

揚弾機といふのは艦底倉庫から砲弾を揚げる機械だつた。義雄が中甲板で中河の合圖に從つてハンドルを廻すと、自轉車のチエンのやうな仕掛の幅廣いコンベントリチエンが廻轉する。艦底では村井が、中河の監督の下に揚弾機砲弾ケースの間に首を突込んで、たよりない蠟燭の光をたよりにハンマアを振つてゐた。それは危險な仕事であつた。若し渚田が少し不注意をして、ハンドルを廻しすぎたり、ハンドルの取手のスヰッチに手でも觸れやうものなら村井は忽ちに砲弾ケースに挾まれてお陀佛になつて終ふのだ。

歸る前に艦底に降りて、火藥の匂ひと空氣の動かない、死んだばかりの人間のやうななま暖かさのこもつてゐる暗い室で働いてゐる二人を見た時、義雄は神經のなくなるやうな無氣味さを首筋に感じた。一本の蠟燭の灯かげにうごめいてゐる中河や、村井はまるで不幸を掘り探してる人のやうに見えた。

二圓内外になつた一人前の職人の仕事がこんないやな危險な作業だとは彼も思つてゐなかつた。工場の草つぱらのやうに明るい氣持のいゝ所で鑪を押したり、ボール盤を廻したりするやうな作業場は出來ないものかしらと途方もない事を彼はその時考へて見た。

艦の仕事にかゝつてから四日目の夕方、成業者の日給が發表された。

艦から戻ると彼は大急ぎで掲示場へはせつけて告示を見た。職工が大勢たかつてゐた。

皆がじろ〳〵と笑ひを含んだ目で義雄をながめた。彼の面は蒼く、そして次に赫くなつた。彼は逃げるやうに工場へ引き返した。

彼の日給は九十五錢ときまつてゐた。他に一圓四十錢一人、一圓二十五錢一人、一圓二十錢二人、一圓十錢三人、一圓七人、九十五錢は彼一人であつた。見習の時と比較して十五錢だけの昇給だ。三年間の辛苦が十五錢だつた。

誰も彼に口をきかなかつた。彼も話したくはなかつた。

歸りぎはに原技手が彼を事務所へ呼んで惡く思はれまいとする一應の正義心を發表したのち意見を加へた。

『誠に氣の毒ではある。腕も二番だし普段の勤務振りも充分であることも認める、然し中河の一件の連累者となつてゐるから九十五錢となつてゐるのだ。これは一般職工に對するみせしめの犧牲だ。これから眞面目に勤めればまあ何時かは昇給の時が來るだらう……。』

彼は自分に癪にさはつた。又凡ゆる工場といふ工場の萬力（バイス）の前に立つてハンマアを振りまくつてゐる職工がまるで案山子のやうにろくでなしに考へられた。

彼は人に顏を見られるのが恥しくてわざと工廠列車に乘らないで歩いて歸つた。工廠の空に立ち並ぶ數十の煙突は彼の怒りをそゝるやうにこぶ〳〵と眞黑な煙を吹いてゐた。

家の門口まで歸ると、母の聲が聞えた。

『吉次も義雄もきのふよりも遲いなう。』

父が何かぼそ〳〵と答へてゐた。

兄の歸つてゐないのを聞いただけで彼は救はれたやうに思つた。そして兄の歸らない内に頭が痛いとか何んとか言譯をして早寢をしようと企らんだ。

母は息子の顏を見て

『えらい、色がよくないなう。』

と、のぞいた。

『うん、力仕事し過ぎたで、疲れた。』

『さうかな、早う寢えよ。』

母は心配氣に言つた。
彼には母のその親切さへも癪だつた。夕飯を濟ますと獨りで先へ寢た。
兄は、ボイラアの火元番に當つたと言つて一時間ばかりして歸宅した。
弟の寢てゐるのを見るとオバーオールも脫がずに尋ねた。
『おい義雄、義雄、日給は今日きまつたつて云ふ話じやないか……』
彼は狸寢入りをきめ込まうとしたがたうとう起されてしまつた。
兄と弟は食膳の兩側に置物のやうに坐つた。
『いくらになつた、三十錢か。』
兄は嬉しさうに言つた。
『途中で工廠の人に逢つて聞いたが、昇給はしたと言つたが、いくらだか知らんと言つた。』
弟はすねた女のやうに默つてゐた。
『こいつ、言はんのか、三十錢位が普通じや、三十錢か、二十錢か！』
『九十五錢ッ！』
義雄は兄に挑戰するかのやうにぶつきら棒に言ひ切つた。そして作り笑ひをした。
『九十五錢？』と兄が問ひ返した。
『九十五錢!?』と母も尋ねた。
次に兄はその原因を尋ねた。弟は言はなかつた。
『おとなしさうに見えるがお前は工場でずるけてばつかりゐるんぢやらう……』

「お前はまあそれで一人前の仕事をするのかな、九十五錢ばかで、」母はずけずけと怒鳴つて膳を叩いた。「それで飯が食へると思つてるのか、人一倍仰くらふ癖して。九十五錢じや仰が食へませんて掛り長さんに申上げてきい……」

「俺が惡いんぢやない……」

「お前が惡くなくつて誰が惡からう、」母は膳の傍にうづくまつてゐる父の方に胸を向けて罵つた。「お前はおとゝに似とるんじや、おとなしいんでなうて意氣地なしなのぢや、吉次は又今年も嫁をとれんぞ……」

「義雄！」と兄は大きく目を開いた。「お前一人で暮して見ろ、食へるか食へんか……」

義雄は、母の腹も兄の苦しみもよく解つた。そして九十五錢の昇給が自分だけの罪でないこともわかつてゐた。然し誰だか解らないが「貌を官品だ」と規めたもの、罪である。

一人で食へ！　と言はれると急に胸が熱くなつてきて唇をきつく嚙んだ。

「出るとも、一人で食つて行くよ。」

「何を！」と母は中腰になつた。「人並でない癖に怒ることば知りよる……」

「生意氣な！」

と兄は立ち上つて弟の襟首を摑んだ。

義雄は兄の手を振りちぎりながらしやくり上げた。

「そ、そんなに嫁ほしいのか、出て行くとも出て行くとも……」

「何を、この恩知らず奴！」

兄のかたい拳骨が頭や胸に打ち降ろされた。骨組のがつしりした兄の膝に組みしかれた義雄は兄の血走つた目を睨めつけながら、狂人のやうに反抗した。

手や首にみゝづ膨れが赤く走つた。

『これやよ、吉次、義雄これ、』母はあはてゝ兄弟の體の間に身を投げた。それでも二人はいがみ合つた。母は肉のこけた脊骨を圓くそらせて上の兄を跳ねのけた。

『どれあ義雄奴！　親不孝者！』

と母は涙の光つた目をむいてくやしさうに下唇を尖らした。

『知つとる、兄さん俺あ知つとるぞ……』

と義雄は泣いた。

『何を知つとるのぢや、何をぢや。』と兄も泣いた。

母も咽び泣いた。

聾の父だけが膳の前で蟇のやうに物もいへずにうづくまつてゐた。

6

タラップをへだてて艦の食料倉庫があつた。倉庫の扉は開け放してあつた。

義雄は靴をぬいでそつと忍び寄つた。

倉庫の天井には燭の弱い電燈がともつて其處らに散らばつてゐる石油罐をぼんやりと照らしてゐた。

彼はドロップを盗みに來たのだ。胸の動悸が鐵に圍まれた艦底に響くやうに聞えた。いくら探してもドロップの罐は見あたらなかつた。最後にぶつかつたのは氷砂糖の樽だつた。彼は作業服の八ツのポケットに氷砂糖を一杯つめこんで又こつそりと靴をはいて、村井と中河の所へ戻つた。

「ドロップはあつたかい？」

「なかつた、その代りに氷砂糖だ。」

義雄は仕事箱の氷砂糖をこぼした。

「しめしめ、甘いもんなら何んでも結構……」

村井が眞先に頰張つた。そして直ぐ、ペッペッとはき出した。

「チエッ、酸つぱい氷砂糖つてあるもんか、何んだこれあ……」

「なあんだ、これあ、酒石酸だよ。」と中河は一塊を取り上げてなめて見た。

「間抜けだな、周章もの……」

「はんまな盗賊だなあ……」

三人は大聲で笑つた。

然し、義雄は今朝からはしやいでゐた元氣さを滅茶苦茶にされてしまつた。

昨夜、兄の吉次と喧嘩したことが今朝工場に出勤した彼を反射的に剽輕にさせた。だからドロップ盗みも卒先してやつたのだ。

作業にかゝつてからも彼は默りこくつて働いた。役はいつもの中甲板の揚彈機のハンドル廻しだつた。艦底では相變らず村井が載彈板に上半身を突込んでハンマアを振つてゐた。

今日が「霧島」の副砲の仕上日だつた。

中河が送話管で下から叫んだ。

「今日は電力試驗だから聲をかけたらスヰッチを入れろよ！　人力試驗は濟んだんだから今日は電力試驗だ……」

『よ――し。』

と彼は誰もゐない中甲板の隅つこから大聲で答へた。

その聲は自分を嘲つてゐるやうに響いた。答へながら、彼は、昨夜の兄との喧嘩を想つてゐた。兄は嫁を欲しがつてゐる。自分がゐては兄も樂にはなれない。家を出て外へ下宿した方がいゝかも知れない…………

『スヰツチを入れろ!』

『お――い。』

彼は慌て、スヰツチの把手を押した。

『切れ!』

彼は戻した。

スヰツチを入れると、戰車(タンク)の足のやうな揚彈機チエンがゴトン〳〵と廻轉し、載彈機に挾まれた彈丸が副砲の裝塡部に順々に置かれて行つた。

二度、三度、スヰツチを入れたり切つたりした。

そしてその間中彼は家出のことを考へてゐた。家出のことを考へると放浪の想ひがそれに續いた。それから空想が續いた。――スヰツチを入れる度に空想が切れたり續いたりした。

と、右側の廊下を白い煙管服の水兵が靴鋲の音はげしく走つて行つた。

彼は一ぺんに現實へ引き戻された。

その靴音の中から、かすかに村井の「入れろ!」と力む聲が聞えた。

スヰツチを入れた。

が揚彈機のコンヴントリチエンはギーツと軋んで止つた。そして艦底から時計の刻みに似た音がしてチエンが太く慄えた。

ハンドルにも、強いひゞきが傳つた。

おやつと思つた時に、送話管から村井の怒號が飛び出した。

「落田！　スヰツチ、スヰツチを切れ！」

スヰツチはその前に切られてゐた。

すると、中河の四日前の注意が電流のやうに頭に來た。

彼は周章てゝタラツプをかけ降りた。出合頭に村井の皺だらけの鼻とぶつかつた。

「大變だ、やい！　中河が載彈機に挾まれた。お前が、お前が急にスヰツチを！」村井は言葉よりも早く肩の方を動かした。「醫務室……醫者を呼んで來い！」

義雄と村井はおたがひにタラツプの所で逆戻りした。

義雄は驚きと狼狽で脊骨が無くなつたかと思ふほど自分を忘れた。

醫務室へ報告すると、白衣の手術着の士官と二人の看護卒が應急手當藥品をトランクにつめて走つて來た。彼も一緒に走つた。

中甲板まで來るともう中河らしい唸りが低く太く聞えた。

一人の看護卒は分隊長のケビンへ走つた。

四人が飛ぶやうにタラツプを降ると艦底の蠟燭はかすかな風にゆら〱と人の影を大きく鐵壁にうつした。

村井はうづくまつて中河の名を叫んでゐた。

村井の顔の下で、中河がうめいてゐた。
赤く染まつたハンマアが落ちてゐた。
生ま暖かい空氣は音もなく中河のうめき聲に搖すれた。血の匂ひがつんとした。
艦のサイドに鳴る波の音が傷ついた中河の唸りともつれ合つた。
『肋骨をやられたな！暗くてしやうがない、』と士官は中河に目を近づけて言つた。『肋骨擧筋もやられとる……………醫務室へ運べ、擔架！』
二人の看護卒が靴音をさせてタラップを上つた。入れ違ひに分隊長の少佐が來た。
腰に手を置いて少佐は質問した。
『責任者はたれか？』
『この中河さんが責任者です！』と村井が怯え聲で少佐を仰いだ。
『うむ、では皆さんに現場の様子は解つてるな……』
『ハッ……』
村井は中河におぢぎするやうに頭を下げた。
擔架が來た。二人の看護卒が無言のまゝ荒々しく中河の體を擔架へにない込んだ。
鋼鐵、載彈板に挾まれた胸のあたりは摑まれると作業服の糸目からじくじく血が溢れた。
――痛いやう、痛いやう、いやだよう――と中河は泣いた。
看護卒の袖に血が黒く滲んだ。
『鎖骨下靜脈も切れてゐるやうです。』

と一人の看護卒は報告した。

「急げ！」

と士官は言つた

天井は中河の唸りをわん／＼はじき返した。

六人の動く姿はもの丶怪のやうに壁の上をうつり動いた。

擔架、少佐、士官、村井、義雄、と中甲板を急いだ。天井の低いチーク材の廊下に擔架から垂れる中河の血が、ポトリポトリと細い音をたて丶落ちた。村井は右手の蠟燭の灯で一滴々々それをすかして見た。

義雄は前をゆく少佐の影から見える丸太のやうな中河の足を見つめながら慄えた。

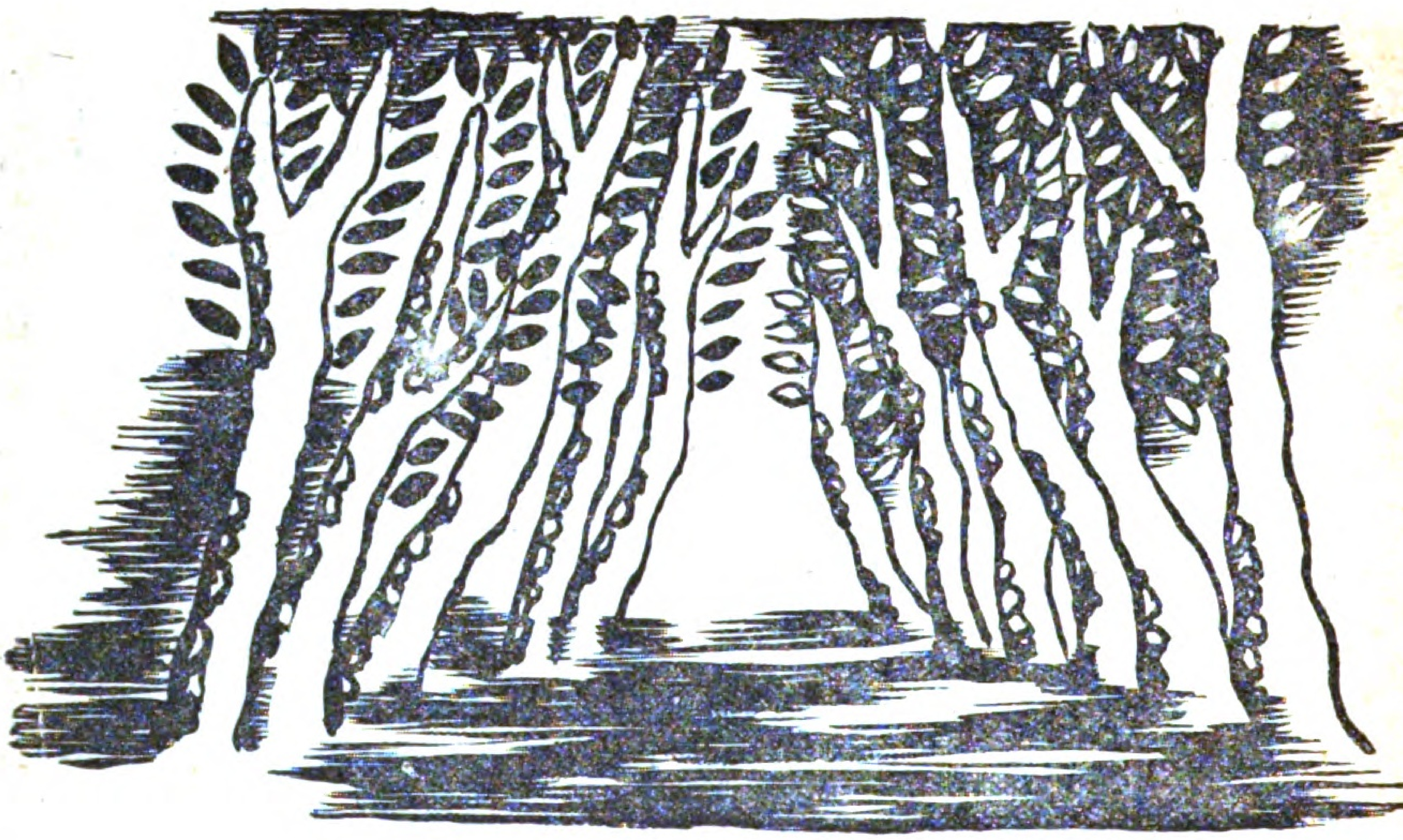
×　×　×　×　×

工廠總務部長、掛長、守衛長、が來て調査が行はれ、滋田義雄は過失傷害罪として軍法會議監房に收容された。

翌日午前八時に中河は海軍病院で死んだ。

義雄は、厚いコンクートの監房の中で平戸海峽の海鳴りと一緒にそれを聞いた。

（1930・2・）



大陸

3

谷譲次

大劇場の内外は赤旗の森林だ。壁は貼紙で隠れて、まるで標語と宣傳びらの展覧會なのだ。十七個國の代表者たちが代るがはる起つて銘々の國語でインタナショナルを歌つた。言語は違つても意味と節はおんなじなのだ。退屈な反覆だ。しまひにはみんな飽きて場内がざわ〳〵した。赤い英雄達は舞臺に聽衆のはうを向いて並んでた。ボックスにもゐた。樂手席の穴にかたまつてるのは記者團だ。各國の共産黨代表と傍聽者が座席の全部をうづめてた。第三インタナショナルの大會だ。これは莫斯科の年中行事だ。年一回の赤い世界祭なのだ。ありとあらゆる人種が集まつて會場は體臭で

くさいのだ。彼らは各國から船員や商人や遊覽客に化けて空氣のやうに夫ぞれの國境を破つて潛入して來たのだ。支那、印度、日本、墨西哥の顏が眼についた。國を出るまでは潛行だが露西亞へはいると國賓なのだ。一歩でこんなに違ふのだ。もとの皇帝の特別席に司會者プロタドルフ君の泥靴があつた。この男は公爵といふ名で呼ばれてた。公爵のやうに持つて廻つた言ひまはしをする癖があるからだ。赤衞軍の軍服を着たチチエリンが照れたやうに笑つて居た。それは舞臺裝飾の一つのやうに見えた。背景の左側にはマルクスの肖像がかゝつてゐた。右側にはレニンの肖像がかゝつてゐた。背景は眞赤な幕なのだ。舞臺の上部に一枚の白布が横に張りわたしてあつた。標語が大書してある。「俺達はサヴエイトとともに行動する。」赤旗はいたるところに立つてだらりと下がつてゐた。

演壇にはジノヴイエフが立つてゐた。ジノヴイエフはレニングラアドの獨裁者だ。お伽話のやうな聲を出すのだ。

「われ〱の時代の第一の目的は、資本主義國家に寄生してゐる社會黨及び社會主義團體をやつつけることだ。あいつらこそはいつまでもブルジョアの最大の武器として活潑に働いてる。」

拍手がジノヴイエフを送つて、次ぎの拍手がクララ・ツエトキンを迎へた。この灰色の頭髮をした肥つた老婆は、獨逸聯邦議會の闘將なのだ。皺の寄つた顏をにこ〱させて誰にでも母親のやうに親切なのだ。そして鋭い舌で會衆を搔きまはすのだ。毎年この例會へやつて來て明日にも獨逸に共産主義革命が起つて政府を乘つとりさうなことを言ふのだ。みんなこのにこやかな老婦人のいふことを信じてる。セン・カタヤマは日本生れだ。東洋の救世主といふことになつてる。彼は生一本な老人だ。第三インタナショナルの世界政綱中祕密となつてることをこんな言葉で演説した。これは公開の集合だから、そこには資本家新聞の特派員もゐる。市伽古評論のフロイド・ロイドもそのひとりだ。

「露西亞革命はすでに强固だ。これからは外部である。赤衞軍は××軍にならなければならない。どこへでも出かけて行つて闘爭してそこに××××××を創造するのだ。」

外國の通信員たちにこの文句を打電させないために、外務省の新聞課長(ナルコーミンデル)グレゴリ・ワインスタインが汗をかいた。それからカメネフが發言して、歐羅巴の反動的傾向を指摘した。ムツソリニとポアンカレを例に引いて、自分たちの道は遠い、勞働者はしつかり銃を取り直さなければならない、とちよつと悲觀的な口調だ。するとチエッコ・スロヴアキヤのシユメル代表が壇へ駈け上つて反駁した。シユメルは麥酒と豚汁から出來上つてる野蠻人だ。爪垢のたまつてる手を振つて呶鳴つた。

「僕はさうは考へない。そんなものを意識に入れるだけで資本主義の國の政治屋のやうで面白くないのだ。反動は一時の現象だ。そして反動は投影だ。反動が強いといふことは、その影を投げる本體が強いことを意味するのだ。歐羅巴の反動的傾向が強ければ強いほど僕らの目的は意外に近づいてるに相違ない。」

獨逸代表ヘケルトだ。いま自席の椅子の脊に立たうとして、椅子の脊は幅が狭いのでふらふら游いでるのがそれだ。近くの人が二三人手を藉して支へてやつてる。駈引きや氣取りをすつかり脱ぎ捨てた典型的な獨逸人だ。苦痛そのもののやうな嗄れ聲で本國の社會民主黨を罵倒し出した。まるで野外演説のやうに騷々しいのだ。社會民主黨はユダの寄り合ひだ。機會があり次第みんな殺してしまふつもりだといふのがヘケルトの論旨だ。司會者のブロクドルフが手近のひとりに合圖した。兩頰と頤にだけ長い髯を殘して綺麗に顔を剃つた赫ら顔の男が出て來た。昔の航海業者のやうだ。粘土製のパイプを下向きにくわへてる。亞米利加の大立物ラデツクだ。

『じつをいへば亞米利加にはほんとの共產黨といふものは存在しない。何故なら共產黨は議論や宣言によつて作り上げられるものではないからだ。現實の市民生活の苦惱に揉み抜かれて自然に形をそなへてくるのでなければ駄目だ。ところが亞米利加にはその苦惱がないのだ。無いとはいはないがすくないのだ。そこで亞米利加の同志はいふ。資本主義國家とサヴエイト制度とのあひだに、行程として先づ勞働黨内閣があつてもいゝ。必要なのだと。何といふ莫迦らしい言ひ草だ。これは全然わかつてゐない者のいふことだ。が、それはさうだらう。世界進化の行程から觀ても、險からサヴエイトの人

民委員になるまでには勞働黨の政府ぐらゐ通過しなくちやなるまい。」

この皮肉は自國へ呼びかけたものだ。同國人のフロイド・ロイドは樂手席から顏をあげてラデックの顔の裏を見上げてゐた。すると隅のはうから不思議な叫び聲が聞こえて來るのだ。みんながそつちを見た。それは伊太利の同志ボルデガだつた。大きな赤旗を全身に捲きつけたボルデガが、同志の肩のうへに繁ち登つて詩の諳誦をはじめたのだ。彼は誰にもわからない伊太利語にジエスチユアと感情をぶちこんでばら撒いた。それが大劇場にぎつしり詰まつてる群集の一人ひとりにすつかり理解された。みんなひつそりしてボルデガの聲に聞き惚れた。おはると總起ちだ。手が痛くなるほど喝采した。

フロイド・ロイドはそのどよめいてる會衆のなかにアメリカン・ニグロらしい一團を發見して、市伽古の本社から黑奴の代表者がコミンテルン總會に列席するためにサヴエイトへ潛入したらしいといふ風聞があるから確かめてインタヴイユウをとるやうにといつて來た電報のことを思ひ出した。電報は二週間前に着いてゐたのに、會議の前夜になつて配達された。ロイドは怒つて責任者に會つて遲延の理由を詰問すると言つて郵便局へ呶鳴り込んだ。が、その責任者といふのが入れかはり立ち代り十何人も出て來てたうとうロイドは面倒くさくなつて負けてしまつた。亞米利加からニグロの代表が來てるさうだが名は何といふのか、何とかして會はしてくれないかと正面から言つて行つたのでは知らないと突つ放されるにきまつてるのだ。それでも二週間もあれば探し當てゝ奇襲することも出來たかも知れないが會議の前夜では何うすることも出來なかつた。ロイドはせめて顏だけでも覺えておかうと思つてその黑人の一團のはうへ脊伸びした。

本會議が終ると祕密會議だ。莫斯科には每年この第三インタナショナルの大會が開かれて世界中のブルジョア社會組織をぶちこわして赤い慾望の通りに組み直す方法が研究されてる。それは公開の大會と祕密會議とに別かれてるのだ。祕密會議では具體的な浸蝕法の討議と金の分配が行はれる。けふ閣僚として會合した人達が明日は共產黨の幹部として集まる。次ぎの日は第三インタナショナルの指揮者として顏を合はせる。みんな同じ連中だ。三つの着物を色いろに着更へるのだ。

レニンがいつた。つぎの革命は波蘭か獨逸か支那かサヴエイトに近い個處を必要とする。一ばん有望なのは××だ。最近どこかにもう一つ共産黨政府が出來るのでなければサヴエイト・ラシアはこれだけでは失敗だといふのだ。勿論だ。が、レニンが死んでからトロツキイが追放されてサヴエイトは國際化からすこし國家化に進んでゐるのだ。第三インタナショナルからちつとばかり離れたわけだが全世界の共産黨の活躍が網の元のやうに莫斯科に統一されて動いてることは事實だ。誰でも知つてることだ。しかし、フロイド・ロイドがこのことを原稿にして送つたら途中で紛失して屆かなかつた。

僕は莫斯科にゐるあひだ度々第三インタナショナルの本部の前を通つて、あの黒くよごれた四角い建物を思ひ出すことが出來るのだ。それはヴォズドウイツエンカ街のはうから行つてカモフニキ廣場へ出やうとする左側のとつつきの家だ。右側は乗馬學校の帝室風の建物で、その一階がサヴエイト政府の自動車車庫になつてゐた。十月革命の時にはこの建物を占領するためにこゝで猛烈な市街戰が行はれた。その記念のために傍のモカワヤ街とヴォズドウイツエンカ街の角の壁に戰死者の像が彫りつけてあつて下に文句が出てる。「兄弟、古い世界の鎖を斷ち切らうぢやないか。」近くに政府が街上敎化の目的で出した揭示板も建つてゐた。それにはシセロの言葉が書かれてあるのを見た。ソクラテスに何處から來たかと訊いたら全世界が故鄕だから何處から來たとも言へないと答へたといふのだ。乗馬學校の學生たちが窓に腰かけて僕らの通るのを見下ろしてた。日光が敷石をあたゝめてゐた。メイ・デイの準備に第三インタナショナルの建物は上から下まで幾本もの長い赤布で飾られてた。

この年會の公開のはうの會場にきめられてる大劇場で僕らは歌劇「三つの蜜柑への戀」を見た。大劇場はスウエルドロフ廣場に面してる。廣場は草花の名所だ。一段高い花床に春から夏にかけて花を配置して植ゑて革命の頭株の肖像を作り出すのだ。祕密會議の會場はクレムリンかコミンテルン本部の一室だ。そこで世界革命の大きな問題をきめるのだ。共産黨は單獨で戰ふべきであるかそれともブルジョア要素の濃厚な勞働爭議や罷業へも割りこんであらゆる機會を利用したはう

がいゝか。長年獨行主義でやつて來たのが此頃は何んなに小さな蒼白い不安をも見逃さずにそれを赤くすべく試みることにしてるといふのだ。それはいゝが、ジョン・リイド、ボリス・ラインスタイン、大(ビッグ)ビルヘイウッドの三人は毎年この秘密會議で亞米利加における共産黨革命の夢を高い値段でサヴエイト幹部たちに賣りつけて來たとロイドはいふのだ。しかしそれはこの三人だけとは限らない。どの代表者も自分の國に今にもコミユニズムの革命が勃發しさうなことを言ふのだ。さう言ひさへすれば金はいくらでも出る。それがやつらの職業なのだとロイドが言つた。ロイドは秘密會議に出席した亞米利加の代表から會議の内容の一部を買收することが出來た。

「××の革命もいゝが一二年なら待てる。」

と誰かゞ言つたといふのだ。それから極東に可能性を認めて殊に支那に眼をつけた。莫斯科タシユケント間の無線が急に忙しくなつた。西比利鐵道が人と金を東へ運ぶことにきまつた。印度と支那のプロレタリアが動けばもうこつちのものだといふのでそつちへ力を集めることにした。が、歐羅巴のはうもうつちやつておくわけではない。手順まで出來てるのだ。獨逸に一ばん望みをかけてる。獨逸共産黨が暴れ出すのを待つて、赤衞軍は波蘭を通つて獨逸へ合流する。手土産にはシレシア地方を持つて行かう。そして獨逸の共産軍といつしよにラインにそつて赤い土手を築かう。さうすれば歐羅巴はまたゝく間に眞赤になるにきまつてる。すると亞米利加は穀物の貨物船を寄こさないだらう。それに代つて早速革命國のプロレタリアへ食物を供給するために、サヴエイトには何時でもその準備が出來てる。一たい亞米利加は歐羅巴の生血と黄金によつて彩色されてるのだ。亞米利加のブルジョアは大戰の焚火で手をあつためたのだ。かういつて極東と歐羅巴方面の赤化運動の細目を打ち合はせた。各代表に命令と資金が渡された。一人ひとりにつき莫斯科への往復の旅費を計算して拂ひ戻した。が、勿論これはすべて第三インタナショナルが勝手にすることだといふのだ。サヴエイト政府はちつとも知らないことになつてる。全く第三インタナショナルと來たらこんなことばかりしてゝ困るのだが、何ら關係のない獨

立の團體なので、政府は取締まるわけに往かないといふのだ。だから墨西哥や印度や××やブルガリアに共産黨の騷ぎが起つても、成程第三インタナショナルが絲を引いてるのかも知れないが、サヴェイトとしては何うすることも出來ないといふのだ。そして第三インタナショナルにそんな外國に迷惑をかけるやうなことはよせといふのはまるで亞米利加の酒類密賣業者に水だけを賣つてくれと賴むやうなもので何にもならないことを知つてゐるとサヴェイト政府はつけ足すのだ。サヴェイトは外部に向つて第三インタナショナルを持てあまして見せることにはじめからプログラムがきまつてるのだ。フロイド・ロイドがケエ・ドユ・パッシィの珈琲店で僕にさう話した。

ロイドは自分に尾行がついてることを知つてた。彼はこれだけのことを詳しく原稿に書いた。原稿は二つ書いた。一つを公然と送り出した。尾行が見てゐたのだ。見てゐなくても外國行きの郵便物は一應調べるのだ。原稿はすぐ押へられて檢閲官サミユエル・カガンから叮重な呼出しが來た。會つて了解を得たいことがあるといふのだ。ロイドはそれを待つてゐたのだ。郵便局(ポチタント)に近いミリユテンスキイ街のカガンの事務所へ行くと、カガンがロイドの原稿を持つて笑つて出て來た。ロイドも笑つた。カガンは直ぐ眞面目な顏をした。

『これは困ります。露西亞はまだ若いのです。內政を洗ひざらひ知られることを好みません。この通り正直に言ひますから處分して下さい。』

ロイドはカガンのいつた內政といふ言葉を可笑しく感じたが、見てる前で原稿を破いた。破いてもいゝのだ。これははじめからかうして破くために書いたのだ。その時はもう一つのコピイが他人の鞄に潛んで國境外へ急いでゐた。自動車製作に雇はれて來てゐた亞米利加人の技師が前夜莫斯科を出發して歸國したのに賴んでそつと持つて行つて貰つてあるのだ。カガンにとめられた方は幾つに破いても構はないのだ。粉々に破いた。それから彼はカガンから賴信紙を貰ひ受けて本社へ

電報を打つた。重要な通信があるが許可されないから殘念だが仕方がないといふ意味だ。それを見せてロイドが言つた。

『これだけはいゝでせう。』

『構ひません。』

「では、お願ひします。」

「承知しました。」

その電報が市伽古の本社へはかう變つて入つた。赤衛軍の兵士の食糧は一人宛一日麵麭一封度半。肉半封度、スウプ二皿、それに茶は飲み放題だといふのだ。あとで聞いてロイドはあのコウカサスの百姓のやうなサミユエル・カガンの何處にそんなユウマアが隠れてゐるのだらうと怪んだ。

莫斯科にゐる各國の新聞特派員は、銘々大會に出席してゐる氏名不詳の自國の共産黨員を狙つた。ロイドも亞米利加の代表を突きとめてインタヴユウしやうと尾行をまいて走り廻つた。が、間もなくその無駄なことを知つた。全部秘密結社の黨員でしかも密入國者なのだ。歸つてからのことを思つてサヴエイトがひた隠しにしてゐる。勿論エストニアのリガとテリオキにゐる亞米利加の密偵には名前も顔もわかつてゐるのだ。それをサヴエイトは亞米利加の共産黨代表などそんなものは存在しないと明言した。ロイドは苦しまぎれに出たらめの電報を打つた。六人の亞米利加共産黨員が一流のホテルを與へられて國賓待遇を受けてゐる。看視が嚴重で近寄れない。ホテルの使用人らも口を緘して語らない。たまたま廊下などで本人を掴まへても英語を解しない風を裝つてゐるといふのだ。實際その通りでもあつた。この電報は見事に行衛不明になつた。うそなら打たしても構はないわけだ。事實が事實に近いので押さへる必要があつたのだ。ロイドは勇躍して本國に知れてゐない滯在者の姓名を片つぱしから電報した。雜誌「解放者」の編輯者マツクス・イイストマン、黑人の詩人クロウド・マツケイ、エリノア・ボインツ夫人、市伽古のウイリアム・リンゼイ、紐育のトラツチエンバアグ教授、ことに黑人のマフ

ケイは大會でジノヴィエフの隣りにすわつてゐる。が、これらはすべて傍聽者で代表でないことは確かだとロイドはつけ足した。みんな知れてゐる赤い連中なのだ。本社で彼らに旅券が下附されてゐるかゐないかを調べれば何の目的で入露したのか直ぐ判る筈だ。やつらの多くは僞名で來てるのだ。そのためにカガンはこの廻りくどい計略に氣がつかないでこの電報は檢閲を通過した。

自動車技師に托して國境外へ持ち出したロイドの原稿が歐羅巴中に擴まつた。サヴエイトではコミンテルンの内部に裏切者がゐるといふので問題になつた。檢閲官サミユエル・カガンは反射的にロイドを白眼んだ。が、ロイドは彼の眼の前で原稿を破いてゐるのだ。ほかに證據のないことだ。それに自分の責任にもなるからカガンは默つてた。他に會議の内容を國外へ洩らした者があるのかも知れないと思つた。その說が有力だつた。トロツキイ一味の仕業に相違ないといふことになつた。それほど完備した秘密通信法で連絡してるのはトロツキイよりほかないといふのだ。何でも面白くないことはトロツキイへ持つて行くのだ。外務省新聞課長グレゴリ・ワインスタインがフロイド・ロイドに非公式に面會を申し込んで來た。會つてみると、會議の秘密を歐羅巴中へ撒き散らした今度の「トロツキイの原稿」に對するサヴエイトの反駁文を見せてもいゝといふのだ。見せてもいゝといふのはこゝに持つて來てゐるから特種通信として送つて呉れと言ふのだ。至急に屆くやうに便利を計つてもいゝと附け加へた。

ロイドが訊いた。

『一體トロツキイは生きてゐるんですか。何處にゐるのです。』

グレゴリ・ワインスタインは素早くとぼけた。

『こんなことをするところを見ると、何處かに生きてゐると見えます。』

ロイドは自分の原稿のためにトロツキイがまた故國から惡く言はれるのが嫌だつたし、第一ふだん虐められてる意趣返

しに其サヴエイトの反駁を自分の通信として送ることを拒絶した。グレゴリ・ワインスタインは首を振つて歸つて行つた。

三日後に市俄古評論社からモスクワのロイドの許へ受取りと感謝の電報が舞ひこんだ。トロツキイに對するサヴエイトの反駁を通信して呉れて有難いといふのだ。ロイドはグレゴリ・ワインスタインの不愛相な顔を思ひ出した。

プロムナアド・デザングレの下に黒い夜の地中海があつた。ニイスの街は遠くからは電燈の集まつてる谷に見えるのだ。どの風がジャルダン・パブリイクの椰子の葉を動かして、そこに面してゐるホテル・ネグレスコの前は自動車で一ぱいだ。どの窓も灯で明るくて、ちよつとでも窓や扉を開けると直ぐ音樂が逃げるのだ。露西亞人の亡命者を救濟する目的の慈善舞踏會が開かれてるのだ。主催者は希臘のニコラス内親王だ。ちよび髭を生やした燕尾服が器用にライタアを捻つて貴婦人達の紙巻煙草へ火をつけて廻つてる。ルウマニアの前皇太子キャロルだ。これは一つの祭宴(ガラ)なのだ。かうして巴里あたりに食ひつめてる白い露西亞人のために慈善舞踏會をやることが歐羅巴のグラン・ブルジョアの流行になつてた。

トロツキイは、水を掛けられた火みたいな存在だ。まだ何處かでぶすぶす燻ぶつてるに相違ないのだ。時どき發作のやうな煙りを立てた。それが大陸中にうつすら漂つて、ジャアナリストの鼻をひくひくさせた。

倫敦のオックスフォウド同期生倶樂部だ。聖ジエイムス・プレイスの中程に國際寢臺の支店がある。向側は傘で有名なブリグスの老舗だ。そこの横丁をはいつたヴイクトリア中期風の醜惡な建物が倶樂部だ。からだより大きな制服を着た少年が玄關番に立つてるからすぐわかるのだ。地下室は酒場だ。オウステン・ソルスベリイ卿と、若いパアリングトン・クウパアとが帽子をあみだにかぶつて、酒臺に肘を張つてた。男はみんな酒場へ這入ると帽子をあみだにかぶつて酒臺に肘を張るのだ。酒場の禮なのだ。眞鍮の横棒に足をかけて、オウステン・ソルスベリイ卿が言つた。

「サウエイト・ラシアはいまトロツキイのことをミスタア・トロツキイと呼んでる。ブルジョアの罪人になつたトロツキイ

は、もう同志トロツキイではないといふのだ。サウエイト政府の半機關新聞プラウダ紙が、さう言つて、同志トロツキイの代りにトロツキイ氏とやり出したのだ。このトロツキイ氏は、一九二九年の二月から、われわれブルジョアの邪と砂で、その階級意識を計り賣りに賣り出したといふのだ。危くなつてる資本主義制度はトロツキイ氏によつて又一人の有力な支持者を發見したわけだ。だからわれわれはトロツキイ氏に賞讃の暴風雨を浴びせかけてる。トロツキイ氏はもう直きトロツキイ卿になつてもいゝ。反動といふものは、何ういふ場合にも、有難い役目をするものなのだ。君はさうは思はないか。君にだつて、この新しいトロツキイ氏の肖像を巨大な金の額縁のなかに想描することは容易な筈だ。」

バアリングトン・クウバアは土焼きの大酒杯（マグ）の底から笑つた。それは、洗面器の水に昇汞水を一滴落したほど何時の間にか薄桃色になりかけてるソルスベリイ卿を嗤ふ意味だつた。

『英吉利と亞米利加の新聞が、トロツキイを、一般外國人なみにM・トロツキイと書いた。このMがムッシュウの略であることは最下級の日常的常識だ。ところがその最下級の日常的常識さへ持ちあはせてゐないサウエイトのやつらは、このMの字をMRと間違へたのだ。サウエイト中が急にトロツキイ氏と呼び出したのは、プラウダ紙がこの間違ひを利用して逆宣傳した結果に過ぎない。君のやうに、同志トロツキイが死んで、ブルジョア著作業者トロツキイ氏が生れたなどといふのは、この間違ひが後からやつらに與へた思ひつきなのだ。勿論ムッシュウ・トロツキイもミスタア・トロツキイも同じ意味には相違ないが、僕らのジャアナリズムがトロツキイをミスタア・トロツキイと書いたとプラウダが言つてるのは、Mをミスタアと讀みちがへた先方の誤りだ。理窟はあとでくつつけたのだ。理窟は何時だつてあとでくつつくのだ。』

『問題はそんなことぢやない。』オウステン・ソルスベリ卿が笑ひ返した。『英吉利の新聞は、トロツキイ氏を得た嬉しまぎれに、他人の脚を毆り廻つて悅んでるといふのだ。トロツキイの追放手記、不遇の革命家の劇的曝露、正面の敵スタアリンへの挑戰、君はかういふ題目で僕らの新聞に現れたやつの寄稿を覺えてるだらう。それがサウエイトを怒らせたのだ。われわれの新聞はトロツキイ氏を餌に當分客を呼んで幸福にやつてくだらうとサウエイトはいつてる。トロツキイ氏のセ

ンセイションで僕らは醉っぱらってるらしいといふのだ。さう言はれても仕方がない。僕も君も、コミユニスト・インタナショナルを怖がってる。サウエイトは、だんだん四方へ燃え擴がってる火事みたいなものだ。倫敦の共産黨だけにだってわれく〵は可成りお世辭を使つとく必要を感じて、現にそれをやつてる。やつらが野外演説をやるとなると、警視廳は救世軍に賴んで傍へ行ってタンバリンを叩いて貰ふぢやないか。單純な市民達が考へてるやうに邪魔するためではない。さうして景氣を添へてやるのだと僕は思ふのだ。とにかくトロツキイ氏の自慰的言論を、大金を出して買ふなんて愚の骨頂だ。それはサウエイトの大笑を大金を出して買ふだけのことにしかならない。」

バアリングトン・クウパアは、主としてソルスベリイ卿への反感から、すぐ別の立場に立つて言つた。サウエイト・ラシアを一歩出れば文明國だよ。」

「サウエイト・ラシアへ行つたこともないソルスベリイ卿が、サウエイト・ラシアから調査と觀察をぶら提げて歸つたばかりの自分よりも、より大膽にプロ・サウエイトであり得るといふことが、反感の理由の大部分なのだ。ブルジョアの意見といふものは多くかうして出來上るのだ。

「君はサウエイトの内情を知らないから、そんなことが言へるのです。トロツキイだつて、サウエイトの外部の文明地帶では、自分を辯護することも、敵を攻擊することも自由に許されていゝ筈です。僕は知つてる。君のいふプラウダ紙は、おもに倫敦のデエリイ・エキスプレスに食つて掛つてるのだ。何故か。きまつてるぢやないか。デエリイ・エキスプレスは保守黨の機關紙だからさ。チヤンバレンと君の共同の口ぢやないか。何もなくても、プラウダはデエリイ・エキスプレスへ手袋をぶつける使命があるのだ。トロツキイ問題なんて單にきつかけに使はれただけだ。現にデエリイ・エキスプレスをはじめ英吉利の新聞は、トロツキイの寄稿をちつとも歡迎してはゐないのだ。トロツキイのものが載つてるあひだ、每日各地の讀者からの非難の投書が新聞社に山積するといふことだ。いつまで經つても公衆の大多數は案外反動的ならのだよ。あんな性格と過去を持つてる人物の書いたものを載せるなんて怪しからんといふのだ。まるで共產主義宣傳の助力をしてる

やうなものだといふのだ。保守黨員が大擧してデエリイ・エキスプレス社へ押しかけて何時から看板を掛けかへたと吹聴りこんだといふ話しもある位だ。君もあの時出した社の聲明書は見たらう。この瞬間の歴史を綴つてくレコウダアとして、報導價値があると認めることは何でも載せてくつもりだといつた。あれでデエリイ・エキスプレスはぐつと、部數が減つたさうだ。われ〳〵はトロツキイの言ふことに醉はされてもゐなければ、その原稿を大金を出して買ひ取つてもゐない。却つてトロツキイは、サウエイトと仲間割れしたやうに兩方から見せかけて、その實、國外にあつてフリイランス・ライタアとして、あゝして赤化の筆陣を張るためにサウエイトから派遣されてゐるのではないかといふ説までであつて、この頃では、みんな要心し出したくらゐだ。」

何方から言つても同じことだ。英吉利はトロツキイの筆にボイコツトの必要を知つた。無用の危險は國家が若い時にだけすることだ。事無かれ主義こそは完成された資本主義の美德なのだ。二人の青年貴族は、それでは同じことを言ひあつてゐるに過ぎなくて初めから議論にならないといつて、大聲に笑ひを合はせた。

その週のウヰイク・エンドだ。ウエストミンスタアのラカアウオオウス會社へ三人の伊太利人が現れた。ラカアウオオウス會社は寶石仲介業だ。伊太利人達の眞ん中の一人は伊太利宮廷の使者だ。左右のふたりは護衛だ。使者の護衛ではない。使者は人間だ。人間はいくらでも代りがある。護衛して來たのは、使者がふところに持つてゐる、二つと代りのない品物のためだ。使者は、ラカアウオオウスの支配人のまへで洋袴の扣鈕を外して革帶を引き出して、革帶のポケツトから二つの石を出して見せた。それは舊露帝が所有してた有名な寶石だ。一つは心臟形をした十五カラツトのピンク色のダイヤモンドだ。他は圓形の胸飾だ。縁に花びらの形をしたダイヤモンドがついて、中央は十七カラツトのエメラルドだ。キヤザリン皇后が持つてたものだ。革命の時はニコラス大公に傳はつてた。大公の夫人アナスタシアは伊太利皇后の妹なのだ。その緣故で革命と同時にニコラスの一家は伊太利へ逃げた。勿論二つの寶石だけは持つてた。大公が死んだので、アナスタシアが

伊太利の皇室へ頼んで倫敦へ持つて行つて貰つて賣りに出したのだ。ザアが生きてた頃は十五萬磅の値をつけた買手を相手にしなかつたダイヤモンドだ。それが今度はラカアウオウス會社を通して二つ五萬磅で賣りに出た。バアリングトン・クウパアが買つた。サウエイト・ラシアへの企業に下ろす筈だつた資本でだ。同じく露西亞で金儲けをするなら、このはうが手つ取り早くていゝと思つたからだ。それきり彼は黑筋子を食べる時のほか露西亞のことは思ひ出さなくなつた。

スタアリンの聲は咽喉で一度轉がつてから出る嗄れた聲なのだ。黑い顏を始終猶太麵麭の樣に固くしてる。眼だけが笑つてた。饒舌る時はよく支那の獅子の樣に肩を上げて兩手の人指指を立てる。さうかと思ふと急に調子を落して、上着のポケツトへ手を突つこむのだ。其時はいつも皮肉な言葉が出てくるのだ。人の惡口は必ず口の左の隅からいふことにしてる。

クレムリン宮殿の元の王座室は、薄い塵埃と書類を載せた卓子で一ぱいだつた。椅子と腰掛けがそれを取り卷いてゐた。素晴しく大きな窓のむかうに、赤色廣場の石疊が霞んで見えてゐた。壁は黃金の紋織だ。彩色された天井は格納庫のやうに高いのだ。中央執行委員會が開かれやうとして、毛皮の外套に毛皮の帽子をかぶつた人たちが、あちこちに集團を作つて、汗のにほひと低聲の雜談を放散してゐた。ドアのところがどよめいて、兩側に立つてる二人の兵士が硬直した。黑い外套を着た、病氣上りのやうに痩せた男が、黑い帽子を手にして戶口にあらはれた。青ぐろい皮膚はいつも綠の樹陰に立つてゐるやうに見えるのだ。スタアリンだ。サウエイトの獨裁者といふよりも、まるで勞働組合の書記を兼ねてゐる青物市場の帳付けだ。みんなの話しを邪魔しないやうに爪立ちであるいて、席へついてゐる。近くの人々と握手してゐる。外套を脫いで椅子のうしろへ掛けてゐる。腰かけてみたが、外套の袖が背中を押して不愉快なので、もう一度立つてかけ直した。そのあひだも、左右の顏に眼で挨拶してるのだ。安つぽい灰色の半軍服のやうなものを着てる。軍人でない人が、軍隊製の劃一の服へあわてゝ飛び込んで來たので、ぶくぶくでちつとも身體に合つてゐないのだ。黑つぽい灰色だ。地に屑綿が多く使つてあることがわかる。洋袴の折目が貧乏臭く擦り切れてる。襟は二重に外側へ折れて、頸の周圍にフラン

ネルの襯衣が覗いてる、濃い靑いネクタイをだらしなく結んでる。眼はどんより曇つてるやうで、そのくせ微妙に動くのだ。睫毛がこんで長いためにさう見えるのだ。それと、切株のやうに底がひらいて先の尖つてる鼻とが、彼の顏を三分の一まで東洋的に作つてる。

スタアリンは、圓天井形の室内をゆつくり見廻してゐる。寺院のやうな、幽玄な自然の照明だ。浮々した日光が部屋の下部だけを占領してる。上は帝政時代からの半暗の積層だ。彼の背後の壁には神の眼と題した大理石モザイクの裝飾がある。窓と赤色廣場とのあひだは、クレムリンの城壁だ。内側の根にところどころよごれた雪が殘つてる。鐵製の小旗を立てた塔が迫つてる。風向の標識だ。人家と人家の間はモスクヷ河の瞥見だ。茶色に濁つて、泥を引きずるやうな緩漫な水だ。時どき白い板が流れてく。氷のかけらだ。草色に近いカアキの兵列が百足のやうに橋を渡つてる。肩章の扣紐が時どき光る。彼らはみんな白い顏をしてる。不調和な鳶いろのヘルメットをかぶつてる。庇の上から赤い星が往來を見下ろしてる。スタアリンは自席から細眼をあけて、それらの上に移つて往く陽脚を見てゐた。人々の着てゐる波斯産の小羊の毛皮のために、肉屋の貯藏庫のやうに生臭い室内よりも、春の動いてる戸外がちよつと彼を誘惑した。

スタアリンが、會議の進行に任せて默つてるので、國内宣傳の寫眞班が寫眞をとると、一時休憩になつた。そこには、特別に許されて、四五人の外國特派員たちがかたまつてた。スタアリンは細い肩を釣り上げて、笑つてそつちへ歩いて行つた。この思ひがけない出來事に驚いて、特派員たちは好機を逃がさないために、大いそぎに質問を探して用意した。すつかり用意が出來ないうちに、スタアリンは彼らの眞ん中へ割り込んで來てしまつた。

『露西語をお話しですか。』

にこにこしてそこらを見廻した。記者團のなかの伯林漫畫家がすぐスケッチをはじめた。スタアリンはその便宜を計つてちよつと動かずにゐた。ボウズが濟むと、英語でフロイド・ロイドに話しかけた。

『亞米利加の方ですね。顏で大概わかる。いま僕はベテグルウの財閥民主政治を讀んでます。仲なか面白い。上院議員のボ

ラアのすることもいふことも面白いぢやないですか。日米戰爭は何時にきまりましたか。』

『日米戰爭なんてありつこありませんよ。理由がありませんもの。』

ロイドは餘計なことを打ち切つて早く一問一答を始めたいと思つて焦々した。スタアリンは片つぽの眼でロイドを叱つてその隙を與へないのだ。

『さうですかね。』と彼は上手に不思議さうな顔を作つた。『戰爭しないわけはなんだがな。資本家の國が喧嘩をしないなんてとても信じられない。莫斯科は何うです。倫敦や紐育とは較べものになりますまい。不便ですね。何しろ政黨が一つしかないもんですから、身體がやり切れない。みんな過勞におち入つてゐます。』

冗談と眞面目の境界がぼやけてしまふのだ。

『この間巴里に鳥渡とした勞働爭議があつて、こんな報告が來ました。鐵か何かの工場がストライキして、社會主義の團體が力瘤を入れたんださうです。すると罷業の代表が後援者のソシアリスト達に會つて、かう言つたといふんです。われ〳〵の要求は簡單だ。世界革命と工場の便所を改良することだけだ。』

スタアリンは左の手を頭へ上げて頭髮を押へるやうな手つきをした。そのほか彼は話しながら盛んに左の手を自分の眼のまへで動かすのだ。單なるジエスチユアのやうでさうではないのだ。さうして、見ないやうにしてしきりに腕時計を盗み見てるのだ。ロイドはそれに氣がついて、相手が今にも椅子へ歸りさうなのを知つた。あわてゝ、第一に頭へ來た問ひを出たらめにぶつけた。

『一たい何時になつたら、サウエイト・ラシアは自由選擧と、口とペンと旅行の自由を保證するんですか。』

『サウエイトの選擧は完全に自由ですよ。一サウエイト内の勞働者はすべてそのサウエイトの選擧に參與します。インテレクチユアルは、地力のサウエイト政府、生産工場などに雇はれてゐる者が地方サウエイトの代表と役員の選擧に加はります。サウエイトに迷惑をかけない限り、口もペンも自由ですよ。だが根本的に意見の違ふ人の言動を看視する必要のあ

るのは何處の國の政府も同じことでせう。旅行の自由？　それは旅劵の記載面と手續きによることで、事務の問題だ。電報や原稿の檢閲問題も、國外に絶えず反サウエイトの陰謀がある限り仕方がありませんよ。』

『もう一つ伺ひます。どんな點でサウエイト政府は元の政府よりも現實にプロレタリアの利益に近づいてゐますか。』

『地方サウエイトは勞働者と農民の直接の代表者です。それが中央人民委員會の政策を忠實に履行していく。それだけのことです。不滿があればどし〳〵述べてくる。勞働組合も露西亞全體の政治に發言權をもつてゐてそれを行使する。地方サウエイトのことは地方サウエイトで處理して中央の私達は何ら關知しない。軍事行政の部内にも、多勢の勞働者と農民が高い地位についてゐます。』

『ちよつと待つて下さい。實行濟みの××主義理論を一口で言つて下さい。』

『土地の××を全廢しました。工業にも××といふことは事實において存在しません。全サウエイトによつて經營されてゐるか、さもなければ、外國關係とは特に長期の契約になつてゐて實際は國營も同じことです。』

『外國人の私有財産は何うです』

『一つの經濟組織が他の全く變つた經濟組織に置き更へられる場合、外國人にだつて緣故はありませんよ。』

『祕密裁判で何千人何萬人殺しましたか。』

『祕密裁判など、そんなものはサウエイト・ラシアには存在しない。革命當時の犧牲は公表した通りです。』

『もしサウエイト政府が他の×へも手を伸ばしたとしたら、やはり同じやうにやるつもりですか。』

『勿論、全然同じにやります。必然的な國情の相異以外には。』スタアリンは酸つぱさうにしつかり口を閉ぢて笑ひながら、うしろ向きに去りかけてゐた。『だが、サウエイト政府はほかの國へ食ひこんで往かうなんて考へたこともありません。』

スタアリンの言ふとほりだ。サウエイト政府は他の國へ食ひこんで往かうなんて考へたこともないのだ。そのサウエイ政府の首腦は露西亞共産黨の幹部であり、同時に第三インタナシヨナルの指揮者なのだ。そしてそこではほかの國へ食ひ

こんでくことばかり考へてるのだ。莫大な費用は何處から出るのか。世界赤化事業への覆面の出資者は誰だ。
翌日フロイド・ロイドは壁に立つかはりに叮重な儀禮のもとにサウエイトの外へ送り出された。
國境を出ると波蘭土の綠野だ。

ワルシヤワでピルスドスキイ元帥が机に向つて論文を起草してた。獨裁者ピルスドスキイ元帥は快活な老人だ。論文は「豫算議會のあとで病氣になつた或る人間の囘想」と題するものだ。その議會といふのは先頃豫算額が超過してるといつてツエチヨウイッツ藏相を彈劾した議會のことだ。元帥はいま非常な劍幕でペンを握つてる。兵營における兵卒の喧嘩のやうな言葉で罵倒を叩きつけてる。波蘭には主權議會といふ第一の議會があつたのだ。この議會の議員どもは大戰中飛んでもない反逆を企てて金を貰つて波蘭軍隊の機密を間諜したのだ。軍隊はその時戰線で死にかけてた。おれは何もかも知つてて知らん顏して、やつらに、うまくやつてるといふ安心を樂しませて置いた。つぎの議會の議員は何うだ。半數が前議會の謀叛人なのだ。やつらはすつかり墮落に慣れちまつて投票の値段なんかも五十ツロテスに下落してしまつた。五十ツロテスは五弗だ。安過ぎはしないか。ツエチヨウイッツ君はやつらを動物園の邪心ある猿に比較した。やつらは結束して抗議を申し込んだ。動物園の猿といつたのが不服だといふのだ。さうだ。あいつらは動物園の猿ではない。山野の猿だ。動物園の猿は幾らか人間に見える樣に努力してる。どつちにしろ、誰も猿からはあまり高尙な印象は受けないのが普通だ。
サウエイト・ラシアの赤い波がもう波蘭の議會へはいりこんでピルスドスキイ元帥を怒らせてるのだ。

『さうだ。トロツキイは鬚を剃り落しちまつた。君は口鬚もなくて、すべすべしてるトロツキイを想像することが出來るか。スタアリンとやつの取卷きは、トロツキイの共產黨員としての鬪志も、プロレタリアの良心も、あの鬚と一緒に地面に落ちたのだと言ふが、僕はさうは思はない。鬚と一しよに消えたのは奴の獨裁精神だけだ。それは却つていいとなのだ。』

ニ・ドユ・パッシィの珈琲店でフロイド・ロイドが僕に答へた。

ピルスドスキィの怒り方は昔の怒り方だ。まるで中世紀だ。僕は歐羅巴へ來て封建時代へ來た氣がする。

僕が言つた。ロイドはアペレティフの上で微笑した。

『みんな猶太人の仕業だ』君は氣がつくまい。世界は猶太人のプログラム通りに動いてるのだ。大戰のあることさへ四五年から解つてた。大戰の結果形を變へた國を見給へ。直接には獨逸、間接には露西亞だらう。いま獨逸と露西亞に巾を利かしてる顏ぶれを見たまへ。すつかりわかるぢやないか。共產主義なんて猶太人の手段の一つなんだ。やつらはまた性道德を襲擊して家庭を破壞するために世界中に賣春婦と酒場と踊り場を撒き散らしてる。かういふところの經營者は大概猶太人だ。ことにやつらの狙つてるのは地球上に完全な帝國としてたつた一つ殘つてる××だ。』

印度に共產黨事件が起つた。

アウル・ウインタトレが英吉利の下院で演說した。去年から今年にかけて印度で勞働爭議のために損失した就業時間の四分の三はボンベイ製粉工場のジエネラル・ストライキのものだ。この工場には共產黨細胞がだいぶ這入りこんでるに相違ない。

サクラトヴアラが答へた。將來いたるところで、あらゆる機會に、現在の秩序に對する抗爭をつゞけてくることが共產黨員の使命であるとは知らないか。

事件の起つたのはボンベイから八百哩離れたパンジヤブ地方のミイラツトだ。

（未　完）

	一冊	六冊	十二冊
定價	八十錢	四圓八十錢	九圓六十錢
送料	參錢	送料共	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年二月十八日印刷
昭和五年三月一日發行
（禁轉載）

發行編輯人　島中雄作
印刷人　東京市牛込區榎町七番地　竹内喜太郎
印刷所　日清印刷株式會社
東京市丸ノ内ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ内(〇〇〇)五三五・五三六・五三七番
振替東京三四番
同長野三二〇五番


内面艶消
新マツダ

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.